

鳥居松遺跡 5 次

伊場大溝編

2009 年 12 月

(財) 浜松市文化振興財団



8 世紀の東アジア



伊場大溝出土祭祀遺物



伊場大溝完掘状況（東から）



1 IVb層 SX01 遺物出土状態（北東から）



2 IVb層 SX03 遺物出土状態（北西から）



例 言


- 1 本書は浜松市中区森田町 133 他において実施した鳥居松遺跡（5 次調査）の発掘調査にかかわる報告である。当発掘調査の報告書は、弥生時代編（第 1 分冊）、伊場大溝編（第 2 分冊）、円頭大刀編（第 3 分冊）の 3 部で構成される。本書は第 2 分冊に相当する伊場大溝編であり、古墳時代から平安時代の自然河川である伊場大溝と、南側に広がる古墳時代以降の集落の調査成果を扱う。なお、調査にいたる経緯および調査経過については、第 1 分冊である弥生時代編に一括して掲載している。
- 2 当発掘調査は集合住宅建設および宅地造成に先立つ事前調査として実施した。調査は、株式会社マルハンおよびセキスイハイム東海株式会社の委託により、浜松市教育委員会の指導（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当が補助執行）のもと、財団法人浜松市文化振興財団が行った。
なお、当初、集合住宅の建設が計画されていた対象地北側については、発掘調査終了後に開発計画が変更されたため、別途に発掘調査を実施した部分がある（財団法人浜松市文化振興財団 2009『鳥居松遺跡 6 次』）。
- 3 当発掘調査にかかわる契約期間は平成 19 年 11 月 9 日から平成 21 年 12 月 25 日までである。このうち現地発掘調査は、平成 20 年 1 月 4 日から 6 月 16 日の間に実施した。調査面積は 1200m² である。
- 4 発掘調査は、安藤 憲、小粥良和、鈴木一有（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当）が担当し、原田和子、鈴井けい子、藤森紀子（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当非常勤職員）が補助した。
- 5 本書の編集、事実記載などの執筆は鈴木一有が行った。第 3 章 1～5 にかかわる執筆者は以下の通りである。第 3 章 1：パリノサーヴェイ株式会社、第 3 章 2：松原彰子（慶應義塾大学）、第 3 章 3：金原正明（奈良教育大学）、古環境研究所、菊地大樹（京都大学）、古山真波（奈良教育大学）、第 3 章 4：渡辺晃宏（奈良文化財研究所）、第 3 章 5：山本 崇（奈良文化財研究所）。
- 6 本書に掲載した写真は調査担当者が撮影したが、巻頭図版 4、図版 44～46 については奈良文化財研究所が撮影した。
- 7 調査の記録、出土遺物は浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当が保管している。

凡 例


- 1 本書で用いる座標値は、世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 2 遺構の略記号は以下の通りである。

SD：溝 SP：小穴 SK：土坑 SE：井戸 SB：竪穴建物 SX：遺物集積

- 3 遺物番号は、遺物の種別にかかわらず、調査層位ごとに連番を付した。
- 4 本書で報告する土器の断面と種別の関係は以下の通りとする。

 弥生土器・土師器

 須恵器

 灰釉陶器・山茶碗

- 5 本文中の引用文献等の表記については、以下のように略す。

浜松市博物館→浜市博

（財）浜松市文化協会→浜文協

（財）浜松市文化振興財団→浜文振

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所→静岡研

教育委員会→教委

- 6 本書で扱う須恵器を中心とした出土土器の編年的位置づけについては、主に遠江編年を用いるが、部分的に陶邑編年および飛鳥編年を併用している箇所がある。これらの編年については、以下の文献を参考にした。

遠江編年

山村宏・向坂鋼二・平野和男 1966「出土須恵器の編年」『大沢・川尻古窯調査報告書』湖西文化研究会

川江秀孝 1979「静岡県下の須恵器について」『須恵器—古代陶質土器—の編年』静岡県考古学会

鈴木敏則 2004「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』浜松市教育委員会

鈴木敏則 2005「出土須恵器について」『東若林遺跡』（財）浜松市文化振興財団

陶邑編年

田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

飛鳥編年

西 弘海 1978「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所

西 弘海 1982「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』

古代の土器研究会 1997『古代の土器 5-1』7世紀の土器

鳥居松遺跡 5 次 伊場大溝編

目 次

巻頭図版

例言・凡例

第 1 章 序 論	1
-----------------	---

- | | |
|-----------------------|---|
| 1 伊場大溝の概要 | 1 |
| 2 伊場大溝の層位と調査の方法 | 3 |

第 2 章 調査成果	9
------------------	---

- | | |
|------------------------|-----|
| 1 VIII層の調査 | 9 |
| 2 VII b 層の調査 | 11 |
| 3 VII a 層の調査 | 51 |
| 4 V 層の調査 | 79 |
| 5 IV b 層の調査 | 97 |
| 6 IV a 層・III層の調査 | 117 |
| 7 B 区の調査 | 123 |
| 8 D 区の調査 | 130 |

第 3 章 後 論	131
-----------------	-----

- | | |
|----------------------------|-----|
| 1 鳥居松遺跡における堆積層の年代 | 131 |
| 2 鳥居松遺跡の立地環境 | 136 |
| 3 鳥居松遺跡における環境考古学的検討 | 141 |
| 4 鳥居松遺跡出土木簡の概要 | 165 |
| 5 鳥居松遺跡出土墨書土器の概要 | 169 |
| 6 鳥居松遺跡における伊場大溝調査の意義 | 173 |

第 4 章 総 括	193
-----------------	-----

出土遺物観察表	197
---------------	-----

図 版

図 版 目 次

巻頭図版

- 1 伊場大溝出土祭祀遺物
- 2 伊場大溝完掘状況（東から）
- 3 1 IV b 層 SX01 遺物出土状態（北東から）
2 IV b 層 SX03 遺物出土状態（北西から）
- 4 木 簡

図 版

- 1 VIII 層 完掘状況（西から）
- 2 VII b 層 SX05 遺物出土状態（北東から）
- 3 VII b 層 SX05 遺物出土状態（北西から）
- 4 1 VII b 層 SX05 遺物出土状態（東から）
2 VII b 層 遺物出土状態（C2 区、南西から）
- 5 1 VII b 層 円頭大刀出土状態（南東から）
2 VII b 層 円頭大刀出土状態（東から）
- 6 VII a 層 完掘状況（東から）
- 7 V 層 貝塚 SS01・02（北東から）
- 8 1 V 層 馬頭骨（B11）出土状態（南西から）
2 V 層 馬骨（B8・B9）出土状態（北から）
3 V 層 3 号木簡出土状態（北東から）
- 9 1 V 層 貝塚 SS04（南から）
2 V 層 貝塚 SS02（東から）
3 V 層 貝塚 SS02 断面（西から）
- 10 IV b 層 SX01 遺物出土状態（南東から）
- 11 1 IV b 層 SE 01（南から）
2 IV b 層 B 区 SE102（西から）
- 12 1 IV b 層 SX03 遺物出土状態（北西から）
2 IV b 層 SX03 遺物出土状態（南東から）
3 IV b 層 SX03 遺物出土状態（南東から）
4 IV b 層 斎串（201）出土状態（南西から）
- 13 III 層 完掘状況（西から）
- 14 B 区最上層遺構（東から）
- 15 VII b 層出土主要遺物
- 16 VII b 層 SX05 出土遺物

- 17 VII b 層 出土遺物 (1)
- 18 VII b 層 出土遺物 (2)
- 19 VII b 層 出土遺物 (3)
- 20 VII b 層 出土遺物 (4)
- 21 VII b 層 出土遺物 (5)
- 22 VII b 層 出土遺物 (6)
- 23 VII b 層 出土遺物 (7)
- 24 VII a 層出土主要遺物
- 25 VII a 層 出土遺物 (1)
- 26 VII a 層 出土遺物 (2)
- 27 VII a 層 出土遺物 (3)
- 28 VII a 層 出土遺物 (4)
- 29 VII a 層 出土遺物 (5)
- 30 V 層出土主要遺物
- 31 1 V 層 SS02 出土製塩土器
- 2 V 層出土祭祀遺物
- 32 V 層 出土遺物 (1)
- 33 V 層 出土遺物 (2)
- 34 V 層 出土遺物 (3)
- 35 IV b 層出土主要遺物
- 36 1 IV b 層 SX01 出土遺物
- 2 IV b 層 SX02 出土遺物
- 37 IV b 層出土「稻万呂」墨書土器
- 38 IV b 層 SX03 出土遺物
- 39 1 IV b 層 SX04 出土遺物
- 2 IV b 層出土転用硯
- 40 IV b 層 出土遺物 (1)
- 41 IV b 層 出土遺物 (2)
- 42 IV b 層 出土遺物 (3)
- 43 IV a 層・Ⅲ層出土遺物
- 44 木 簡 (赤外線照射写真、斜光写真)
- 45 墨書土器 (1) (赤外線照射写真)
- 46 墨書土器 (2) (赤外線照射写真)

挿 図 目 次

Fig.1	鳥居松遺跡の位置	1	Fig.35	Ⅶ b 層出土遺物 (13)	41
Fig.2	伊場大溝の流路	2	Fig.36	Ⅶ b 層出土遺物 (14)	42
Fig.3	伊場大溝土層断面図	5	Fig.37	Ⅶ b 層出土遺物 (15)	43
Fig.4	伊場大溝の埋没過程	6	Fig.38	Ⅶ b 層出土遺物 (16)	44
Fig.5	伊場大溝断面土層の調査	7	Fig.39	Ⅶ b 層出土遺物 (17)	45
Fig.6	土器集積の調査	7	Fig.40	Ⅶ b 層出土遺物 (18)	46
Fig.7	グリッド配置図	8	Fig.41	Ⅶ b 層出土遺物 (19)	47
Fig.8	伊場大溝Ⅶ層	9	Fig.42	Ⅶ b 層出土遺物 (20)	48
Fig.9	Ⅶ層出土遺物	10	Fig.43	Ⅶ b 層出土遺物 (21)	49
Fig.10	伊場大溝Ⅶ b 層	11	Fig.44	Ⅶ b 層出土遺物 (22)	50
Fig.11	Ⅶ b 層における遺物出土位置	12	Fig.45	伊場大溝Ⅶ a 層	51
Fig.12	銅鏃	14	Fig.46	Ⅶ a 層における遺物出土位置	52
Fig.13	伊場大溝形成以前の遺物 (1)	15	Fig.47	Ⅶ a 層出土遺物 (1)	56
Fig.14	伊場大溝形成以前の遺物 (2)	16	Fig.48	Ⅶ a 層出土遺物 (2)	57
Fig.15	SX05 の位置	17	Fig.49	Ⅶ a 層出土遺物 (3)	58
Fig.16	SX05 遺物出土状態	18	Fig.50	Ⅶ a 層出土遺物 (4)	59
Fig.17	SX05 出土遺物対照図	19	Fig.51	Ⅶ a 層出土遺物 (5)	60
Fig.18	円頭大刀実測図	20	Fig.52	Ⅶ a 層出土遺物 (6)	61
Fig.19	SX05 出土遺物 (1)	21	Fig.53	Ⅶ a 層出土遺物 (7)	62
Fig.20	SX05 出土遺物 (2)	22	Fig.54	Ⅶ a 層出土遺物 (8)	63
Fig.21	SX05 出土遺物 (3)	23	Fig.55	Ⅶ a 層出土遺物 (9)	64
Fig.22	SX05 出土遺物 (4)	24	Fig.56	Ⅶ a 層出土遺物 (10)	65
Fig.23	Ⅶ b 層出土遺物 (1)	29	Fig.57	Ⅶ a 層出土遺物 (11)	66
Fig.24	Ⅶ b 層出土遺物 (2)	30	Fig.58	Ⅶ a 層出土遺物 (12)	67
Fig.25	Ⅶ b 層出土遺物 (3)	31	Fig.59	Ⅶ a 層出土遺物 (13)	68
Fig.26	Ⅶ b 層出土遺物 (4)	32	Fig.60	Ⅶ a 層出土遺物 (14)	69
Fig.27	Ⅶ b 層出土遺物 (5)	33	Fig.61	Ⅶ a 層出土遺物 (15)	70
Fig.28	Ⅶ b 層出土遺物 (6)	34	Fig.62	Ⅶ a 層出土遺物 (16)	71
Fig.29	Ⅶ b 層出土遺物 (7)	35	Fig.63	Ⅶ a 層出土遺物 (17)	72
Fig.30	Ⅶ b 層出土遺物 (8)	36	Fig.64	Ⅶ a 層出土遺物 (18)	73
Fig.31	Ⅶ b 層出土遺物 (9)	37	Fig.65	Ⅶ a 層出土遺物 (19)	74
Fig.32	Ⅶ b 層出土遺物 (10)	38	Fig.66	Ⅶ a 層出土遺物 (20)	75
Fig.33	Ⅶ b 層出土遺物 (11)	39	Fig.67	Ⅶ a 層出土遺物 (21)	76
Fig.34	Ⅶ b 層出土遺物 (12)	40	Fig.68	Ⅶ a 層出土遺物 (22)	77

Fig.69	Ⅶ a 層出土遺物 (23)	78	Fig.105	Ⅲ層出土遺物	122
Fig.70	伊場大溝Ⅴ層	79	Fig.106	調査区と遺構の位置関係	123
Fig.71	Ⅴ層における遺物出土位置	80	Fig.107	B区検出遺構	124
Fig.72	馬骨・馬歯出土状況	81	Fig.108	SX111・112 出土遺物	125
Fig.73	SS01・02 実測図	82	Fig.109	SE102 実測図	126
Fig.74	SS01・02 出土遺物	83	Fig.110	SE102 出土遺物 (1)	127
Fig.75	SS04 出土遺物 (1)	84	Fig.111	SE102 出土遺物 (2)	128
Fig.76	SS04 出土遺物 (2)	85	Fig.112	SE101 実測図	129
Fig.77	Ⅴ層出土遺物 (1)	89	Fig.113	SE101 出土遺物	129
Fig.78	Ⅴ層出土遺物 (2)	90	Fig.114	D区検出遺構	130
Fig.79	Ⅴ層出土遺物 (3)	91	Fig.115	D区出土遺物	130
Fig.80	Ⅴ層出土遺物 (4)	92	Fig.116	試料採集位置	131
Fig.81	Ⅴ層出土遺物 (5)	93	Fig.117	試料⑦中の火山ガラスの屈折率	133
Fig.82	Ⅴ層出土遺物 (6)	94	Fig.118	火山灰写真	134
Fig.83	Ⅴ層出土遺物 (7)	95	Fig.119	浜松低地の地形と遺跡分布地質	136
Fig.84	Ⅴ層出土遺物 (8)	96	Fig.120	地質層序確認部分位置図	138
Fig.85	伊場大溝Ⅳ b 層	97	Fig.121	地質層序の観察 (1)	139
Fig.86	Ⅳ b 層における遺物出土位置	98	Fig.122	地質層序の観察 (2)	139
Fig.87	SE01 実測図	99	Fig.123	貝類の計測点	141
Fig.88	SE01 出土遺物	100	Fig.124	鳥居松遺跡の貝類 (1)	146
Fig.89	SX01・02 遺物出土状態	103	Fig.125	鳥居松遺跡の貝類 (2)	147
Fig.90	SX01・02 出土遺物	104	Fig.126	貝塚における貝類の組成	148
Fig.91	SX03 遺物出土状態	105	Fig.127	貝塚出土貝類の形態分布	149
Fig.92	SX03 出土遺物 (1)	106	Fig.128	鳥居松遺跡の動物遺存体	151
Fig.93	SX03 出土遺物 (2)	107	Fig.129	鳥居松遺跡の貝塚における 花粉ダイアグラム	153
Fig.94	SX03 出土遺物 (3)	108	Fig.130	鳥居松遺跡の断面における 花粉ダイアグラム (1)	154
Fig.95	SX04 出土遺物 (1)	109	Fig.131	鳥居松遺跡の断面における 花粉ダイアグラム (2)	155
Fig.96	SX04 出土遺物 (2)	110	Fig.132	鳥居松遺跡の花粉・胞子・寄生虫卵	156
Fig.97	Ⅳ b 層出土遺物 (1)	112	Fig.133	鳥居松遺跡の貝塚における 主要珪藻ダイアグラム	158
Fig.98	Ⅳ b 層出土遺物 (2)	113	Fig.134	鳥居松遺跡の断面における 主要珪藻ダイアグラム (1)	160
Fig.99	Ⅳ b 層出土遺物 (3)	114			
Fig.100	Ⅳ b 層出土遺物 (4)	115			
Fig.101	Ⅳ b 層出土遺物 (5)	116			
Fig.102	伊場大溝Ⅲ層	117			
Fig.103	Ⅳ a 層における遺物出土位置	118			
Fig.104	Ⅳ a 層出土遺物	121			

Fig.135 鳥居松遺跡の断面における 主要珪藻ダイアグラム (2)	161	Fig.147 鳥居松遺跡出土祭祀具の変遷	180
Fig.136 鳥居松遺跡の珪藻	162	Fig.148 伊場遺跡群出土人形	181
Fig.137 鳥居松遺跡 5 次調査出土木簡	167	Fig.149 伊場遺跡群出土馬形	182
Fig.138 「稲万呂」墨書土器の分類	171	Fig.150 伊場遺跡群出土舟形	183
Fig.139 伊場大溝堆積状況模式図	173	Fig.151 伊場遺跡群出土人面墨書人形	184
Fig.140 伊場大溝の土層断面比較	174	Fig.152 伊場遺跡群出土人面墨書土器	185
Fig.141 伊場大溝堆積状況の変遷	175	Fig.153 伊場遺跡群出土紀年銘木簡	186
Fig.142 伊場大溝Ⅶ層出土生産用具	176	Fig.154 鳥居松遺跡における 古代文字資料出土位置	187
Fig.143 伊場大溝出土耳環	177	Fig.155 伊場遺跡群における 「稲万呂」墨書土器の分布	188
Fig.144 銅製有孔円盤と円形飾金具	177	Fig.156 敷智郡家の機能想定図	189
Fig.145 製塩土器出土量の比較	178	Fig.157 敷智郡家の立地環境	190
Fig.146 鳥居松遺跡における 祭祀具の出土位置	179		

挿 表 目 次

Tab.1 伊場大溝の層位比較	4	Tab.6 鳥居松遺跡出土動物骨分析一覧	150
Tab.2 放射性炭素年代測定結果	133	Tab.7 鳥居松遺跡 5 次調査出土墨書土器	169
Tab.3 暦年較正結果	134	Tab.8 「稲万呂」墨書土器一覧	171
Tab.4 貝類同定結果 (1)	144	Tab.9 製塩土器口縁点数	178
Tab.5 貝類同定結果 (2)	145	Tab.10 伊場遺跡群出土紀年銘木簡	185

第1章 序 論

1 伊場大溝の概要

伊場大溝の流路 伊場大溝は、静岡県浜松市中区にある伊場遺跡の発掘調査で確認された自然河川である。1969年にその存在が確認されてから、2008年の鳥居松遺跡5次調査に至るまで広域に発掘調査が実施され、総延長1.5kmほどの流路が確認されている。古代敷智郡家と推定される伊場遺跡群を貫いていることから、木簡をはじめとした文字資料が豊富に出土する。

伊場遺跡の調査 伊場遺跡における伊場大溝の発掘調査は、1969年の第3次調査から1978年の第12次調査までの10年間に及び、飛鳥時代から平安時代にいたる紀年銘木簡13点を含む合計108点の木簡が出土した。伊場遺跡から木簡のほかにも、400点を超える墨書土器が出土し、古代出土文字資料の宝庫と評された。古代敷智郡家の様相を具体的に伝えるこれら古代文字資料の大部分が伊場大溝からの出土品であることから、その重要性は充分理解できるだろう。

伊場遺跡で確認された大溝は、幅約20m、深さ2.5mの規模をもつ。底部の標高は-2.0mほどになり、底部まで掘削すると湧水が激しい。木製品の保存環境としては最適であるが、排水機器が用意されていない1970年代においては、完全な調査が実施できない部分が残った。



Fig.1 鳥居松遺跡の位置

梶子遺跡 9 次調査 1992 年に行われた梶子遺跡 9 次調査によって、伊場大溝の上流部分が調査された。調査地点は伊場遺跡から北東 250m ほどに位置し、延長部分約 30m 分を確認した。梶子遺跡 9 次調査における伊場大溝の規模は、幅約 20m、深さ 2.5m ほどで、伊場遺跡で確認できた規模とほぼ同様である。梶子遺跡 9 次調査では排水装置が整い、15 点の木簡をはじめとする古代文字資料が出土し、伊場大溝の重要性を再認識させた。なお、梶子遺跡 9 次調査では、伊場大溝が 4 世紀代に人工的に掘削された可能性が指摘されたが、その当否はなお不明瞭と言わざるをえない。

城山遺跡 6 次調査 1995 年の城山遺跡 6 次調査によって、部分的ながら伊場遺跡の上流部分が検出された。城山遺跡 6 次調査地点が、現在までのところ、伊場大溝が確認できた最も上流部分である。この調査では枝溝と呼ばれる支流も確認できた。

九反田遺跡の調査 1996 年に実施した九反田遺跡の調査では、伊場遺跡調査地点よりも 400m ほどの下流部分を確認している。とくに試掘調査によって、伊場大溝の両岸が明確になり、軒丸瓦や平瓦などの古代瓦が数多く出土した。古代瓦の出土量としては伊場遺跡群の中でも突出しており、近辺に瓦葺建物の存在が想定できる。

鳥居松遺跡 2・4 次調査 伊場大溝の下流部分の調査は 2000 年以降、鳥居松遺跡で相次いでいる。2000 年に実施した鳥居松遺跡 2 次調査では、伊場大溝の最下流部を検出し、貝塚を確認するとともに、墨書土器が出土した。現在までのところ、この調査地点が、伊場大溝が確認できた最も下流部分である。この調査によって、鳥居松遺跡に郡家の一部が及んでいることが明らかになったが、九反田遺跡と若干の距離があることもあり、伊場大溝の正確な流路は未確定であった。

2003 年に実施した鳥居松遺跡 4 次調査によって、伊場大溝の両岸が確認され、伊場大溝は鳥居松遺跡内において流れの方向を、東から南西へ大きく変えていることが判明した。鳥居松遺跡 4 次調査地点からは、伊場遺跡から複数例の出土が知られていた「稲万呂」と記した墨書土器が出土し、鳥居松遺跡と伊場遺跡は一連の遺跡空間にあることを印象づけた。

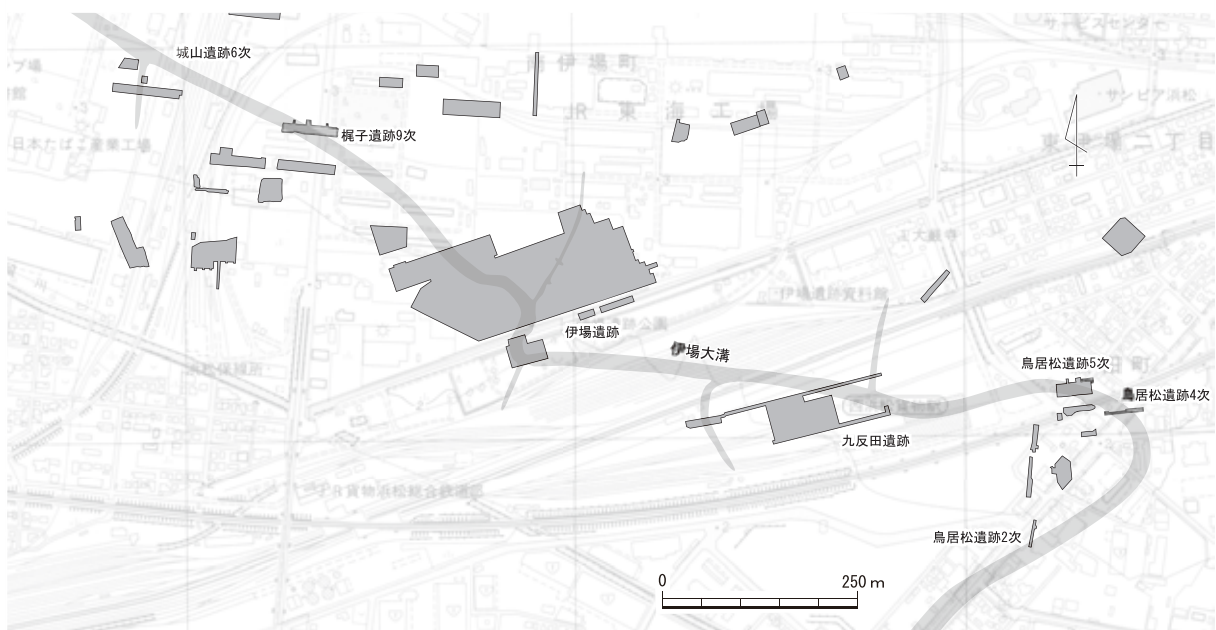


Fig.2 伊場大溝の流路

2 伊場大溝の層位と調査の方法

(1) 伊場大溝の層位

層位名称の概要 伊場大溝内の層位の名称は、伊場遺跡の調査時に用いられたものがその後の調査においても継続的に使用されている。今回の調査においても、伊場遺跡の調査時に用いられた層位名称に従ったが、細部にかんしては必ずしも一致しない部分がある。とくに、ローマ数字の後にアルファベットで示した層位の細分（Ⅶ a 層、Ⅶ b 層、Ⅳ a 層、Ⅳ b 層）は本調査独自の理解であり、伊場遺跡や梶子遺跡 9 次調査時で用いられた層位名と一致するものではない。

今回の調査では、伊場大溝の層位をⅧ層、Ⅶ a 層、Ⅶ b 層、Ⅴ層、Ⅳ a 層、Ⅳ b 層、Ⅲ層の 7 層に識別した。今回の調査では、Ⅵ層は確認できていない。伊場遺跡の調査においては、Ⅵ層はⅦ層とⅤ層の間に挟まれる薄い砂層とされ、Ⅴ層とⅦ層を分離する鍵層として認識されている。ただし、梶子遺跡 9 次調査でもⅥ層は確認できておらず、伊場遺跡内において部分的に堆積した層位と理解できる。梶子遺跡 9 次調査の所見どおり、Ⅵ層はⅦ層の最上部に相当すると捉えておきたい。

Ⅷ層については、梶子遺跡 9 次調査のⅧ層と伊場遺跡におけるⅧ層は異なる層位と理解されている。ただし、両者はともに青灰色微砂層を基本とし、5 世紀後半の遺物を主体的に包含する。大局的には、今回の調査で確認したⅧ層を含め、同一層位として捉えることができると判断する。

なお、Ⅸ層（伊場遺跡のⅨ層と梶子遺跡 9 次調査でのⅨ層は異なる）に相当する層位は今回の調査では認められなかった。

Ⅷ層 Ⅷ層は、調査区の南西側において確認できた古墳時代中期後葉（5 世紀後葉）を中心とする堆積層である。灰色や緑灰色を呈するシルト層を主体に、炭化物や未分解の有機物を多く含む地層が交互に堆積している。地層は厚く、底面から上位までの比高は 2.2m ほどである。Ⅷ層に含まれる遺物は上位の地層と比べると少ないが、古墳時代中期後葉の遺物が出土する。

Ⅷ層の堆積がいつ始まったかは不明瞭である。Ⅷ層はⅦ層によって切り込まれており、流路を若干変えた 6 世紀の伊場大溝によってⅧ層の大部分が破壊されている。Ⅶ b 層には、本来Ⅷ層に含まれていたとみられる 5 世紀以前の遺物も出土する。この中には僅かであるが 4 世紀代の遺物も含まれる。これら 4 世紀代の遺物の評価は難しいが、いずれも小破片であることをふまえると、周辺の遺構や包含層から流れ込んだものとみることが妥当であろう。伊場大溝内から安定的に出土するのは、古墳時代中期後葉からであり、この時期をもって伊場大溝の形成が始まると捉えておきたい。

Ⅶ b 層 Ⅶ b 層は、青灰色砂と灰色粘土の互層で、古墳時代後期後半（6 世紀後半）を中心とする堆積層である。Ⅷ層の堆積が進み、部分的に厚さ 2m 以上の地層が形成された後、伊場大溝は新たな流路を形成する。新しい流路の底部に堆積した層位がⅦ b 層である。Ⅶ b 層の底面には川底溝があり、所どころに澱みのような深い部分が認められる。川底溝やその上面からは弥生時代後期から 6 世紀後半にいたるまでの土器が混在して出土した。とくに川底溝が埋没した段階で含まれる土器の量は極めて多く、人為的な営為が活発化していることがうかがえる。Ⅶ b 層中からは円頭大刀が出土したほか、円頭大刀出土地点に隣接して、大規模な土器集積 SX05 も形成されている。

Tab.1 伊場大溝の層位比較

層位	伊場遺跡	層位			鳥居松5次		
		層位名	層位名	年代	層位名	層位名	年代
I層	表土層	I層	表土	—	I層	黒灰色粘土層	—
II層	水田床土	II層	床土	—	II層	青灰色粘土層	—
III層	黒色有機粘土層	III層	茶～灰色泥炭層	10～13世紀	III層	茶褐色有機物層	11～13世紀
IV層	暗灰色粘土層	IV層	灰茶色粘土層	9～10世紀	IVa層	褐色粘土	10世紀
V層	暗灰色～褐色粘土層	V層	灰茶色有機質粘土層	8世紀	IVb層	灰～茶褐色粘土	8世紀後葉～9世紀前葉
VI層	灰色砂層（厚さ2～5cm）	VI層	（未検出）	—	V層	灰～褐色粘土、砂	8世紀前葉～8世紀中葉
VII層	灰～暗灰色砂、粘土層	VII層	砂と粘土の互層	7世紀	VI層	（未検出）	—
VIII層	青灰～暗灰色微砂、粘土層	VII'層	砂層	6世紀後半	VIIa層	灰色粘土、砂	7世紀前葉～7世紀後葉
IX層	灰黒色粘土層	VIII層	青～灰色微砂層	5～6世紀前半	VIIb層	青灰～灰色砂、粘土	6世紀後半～7世紀初頭
		IX層	灰色粗砂層	（4世紀）	VIII層	灰～緑灰シルト	5世紀後葉～6世紀前半
					—	（未検出）	—

VII a 層 VII a 層は、灰色粘土層と砂層が交互に堆積した地層で、飛鳥時代（7世紀）の土器を包含する。VII b 層の堆積後、再度、伊場大溝の流路が更新され、VII a 層の堆積が始まっている。ただし、VII b 層からVII a 層への流路変更は僅かで、VIII層にみられるような大規模な不整合はみられない。VII a 層中には砂の堆積が顕著にみられるが、面をなして広がっている状況は確認できない。なお、伊場遺跡で確認されたVI層（灰色砂層）とは、VII a 層中に多くみられる砂層の一部を指したものとみられる。VII a 層中の砂層の堆積は複雑であり、明確な基準層位として把握することは困難であることから、VI層の認定は控えざるを得ない。VII a 層の最深部は、北側に偏っているため、斜面の角度は北側が急で、南側は比較的緩やかである。この傾斜の違いは、伊場大溝の流路の方向と関係があるともてよいだろう。

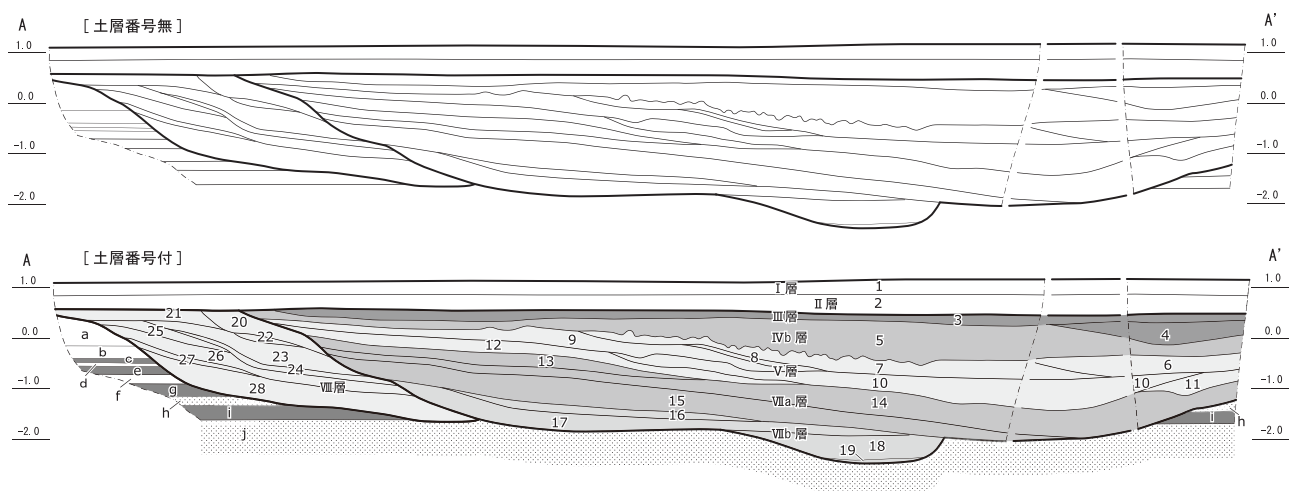
V層 V層は、灰色ないしは褐色の粘土層を基本に所どころに砂層が混ざる層位で、奈良時代（8世紀前葉から中葉）を中心とした時期の堆積層である。V層より上位の層は、伊場大溝が埋まっていく過程で堆積した層位である。V層中においては貝塚（SS01～04）が形成されている。出土遺物には木簡が含まれるほか、木製祭祀具も多くみられる。

IV b 層 IV b 層は、暗茶灰色を呈する層位で、砂層は全く混ざらない。奈良時代後葉～平安時代前葉（8世紀後葉～9世紀前葉）を中心とした時期の堆積層である。砂層が混入しないことからうかがえるように、IV b 層が堆積した時期には伊場大溝の水量は減少し、常時は湿地帯のような環境にあったと推定できる。

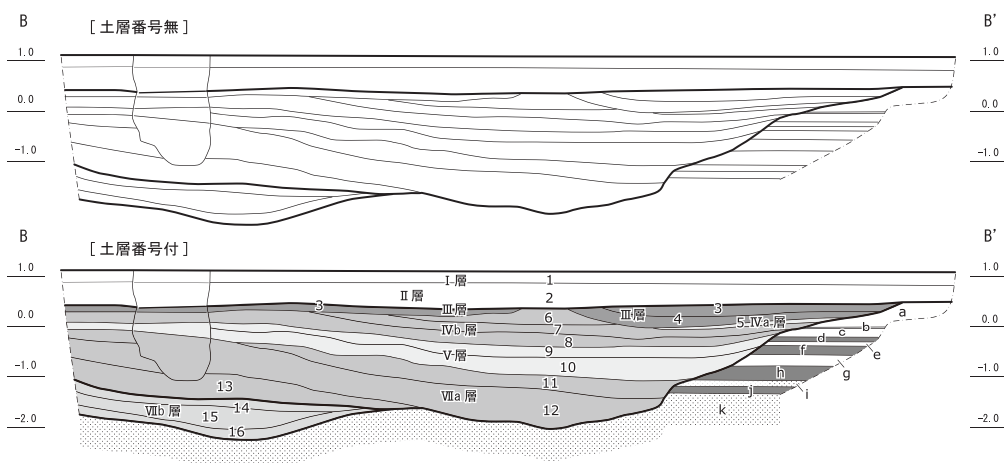
IV a 層 IV a 層は、褐色粘土で形成される非常に薄い層で、大溝の北岸にわずかに堆積している。調査区の北東側において部分的に確認できたのみである。IV a 層の堆積年代は、平安時代中葉（10世紀）である。伊場大溝全体にわたる基準層位とはいいいくいが、灰釉陶器が出土する地層はこの部分だけであることから、IV a 層として分離して捉えた。

III層 III層は茶褐色有機物層であり、未分解の植物片を大量に含んでいる。出土遺物はないが、伊場遺跡や梶子遺跡の調査成果から、平安時代中葉から鎌倉時代前半（11～13世紀）頃の堆積と推定できる。なお、III層の堆積途上において、伊場大溝の南岸の高まりを畦畔として利用し、水田として用いていた可能性が考えられる。

II・I層 II層は、青灰色粘土層、I層は黒灰色粘土層とともに現代の盛土施工前まで使用されていた水田耕作にかかわる地層である。



大溝上位層	伊場大溝埋土	伊場大溝埋土	伊場大溝埋土	伊場大溝基盤層
I 層	IVb層	VIIa層	VIII層	a (基本層位6層) 暗灰色粘土
1 黒灰色粘土 (水田耕作土)	5 茶灰色粘土	13 灰色シルト	20 緑灰色シルト	b (基本層位7層) 青灰色粘土
II 層	V 層	14 緑灰色砂と灰色粘土の互層	21 灰色粘土	c (基本層位8層) 黒色粘土
2 青灰色粘土 (水田床土)	6 黄褐色砂	15 青灰色砂と黒色粘土の互層	22 青灰色シルト	d (基本層位9層) 白灰色粘土
伊場大溝埋土	7 灰色粘土	VIIb層	23 灰茶色粘土	e (基本層位10層) 黒色泥炭質粘土
III層	8 緑灰色砂 (有機物を多く含む)	16 青灰色砂 (黒色粘土を多く含む)	24 灰色粘土 (炭化物を含む)	f (基本層位11層) 白灰色粘土
3 黒色砂土	9 茶褐色粘土 (有機物を多く含む)	17 灰色粘土	25 灰茶色粘土	g (基本層位12層) 黒色泥炭質粘土
4 茶褐色有機物層	10 暗灰色粘土	(6世紀の土器を非常に多く含む)	26 灰色粘土	h (基本層位13層) 緑灰色砂
(未分解の植物片を多量に含む)	11 貝層 (貝塚SS04)	18 黄色褐色砂 (鉄分沈着顕著)	27 黒灰色粘土	i (基本層位14層) 黒色泥炭質粘土
	12 茶褐色粘土	19 灰色粘土	28 暗茶褐色粘土	j (基本層位15層) 緑灰色砂 (基盤層)
			(有機物を多く含む)	



大溝上位層	伊場大溝埋土	伊場大溝基盤層
I 層	V 層	a 暗灰色粘土
1 黒灰色粘土 (水田耕作土)	9 暗褐色粘土 (緑灰色砂を多く含む)	(弥生時代水田埋土)
II 層	10 暗灰褐色粘土 (有機物を多く含む)	b 炭化物層
2 青灰色粘土 (水田床土)	VIIa層	(弥生時代水田耕作土)
伊場大溝埋土	11 暗灰色粘土	c (基本層位7層) 青灰色粘土
III層	12 暗茶褐色粘土 (青灰色砂を多く含む)	d (基本層位8層) 黒色粘土
3 黒色砂土	13 灰色粘土	e (基本層位9層) 白灰色粘土
4 茶褐色有機物層	VIIb層	f (基本層位10層) 黒色泥炭質粘土
(未分解の植物片を多量に含む)	14 青灰色砂	(kg:3100~3200年前を含む)
IVa層	15 青灰色砂と灰色粘土の互層	g (基本層位11層) 白灰色粘土
5 褐色粘土 (部分的に堆積)	16 灰色粘土	h (基本層位12層) 黒色泥炭質粘土
IVb層	(6世紀の土器を非常に多く含む)	i (基本層位13層) 緑灰色砂
6 灰色粘土 (平安~鎌倉時代水田畦畔)		j (基本層位14層) 黒色泥炭質粘土
7 暗茶褐色粘土 (有機物を多く含む)		k (基本層位15層) 緑灰色砂
8 暗茶灰色粘土		(基盤層)

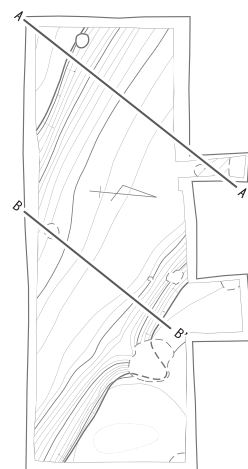
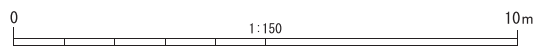


Fig.3 伊場大溝土層断面図

2 伊場大溝の層位と調査の方法

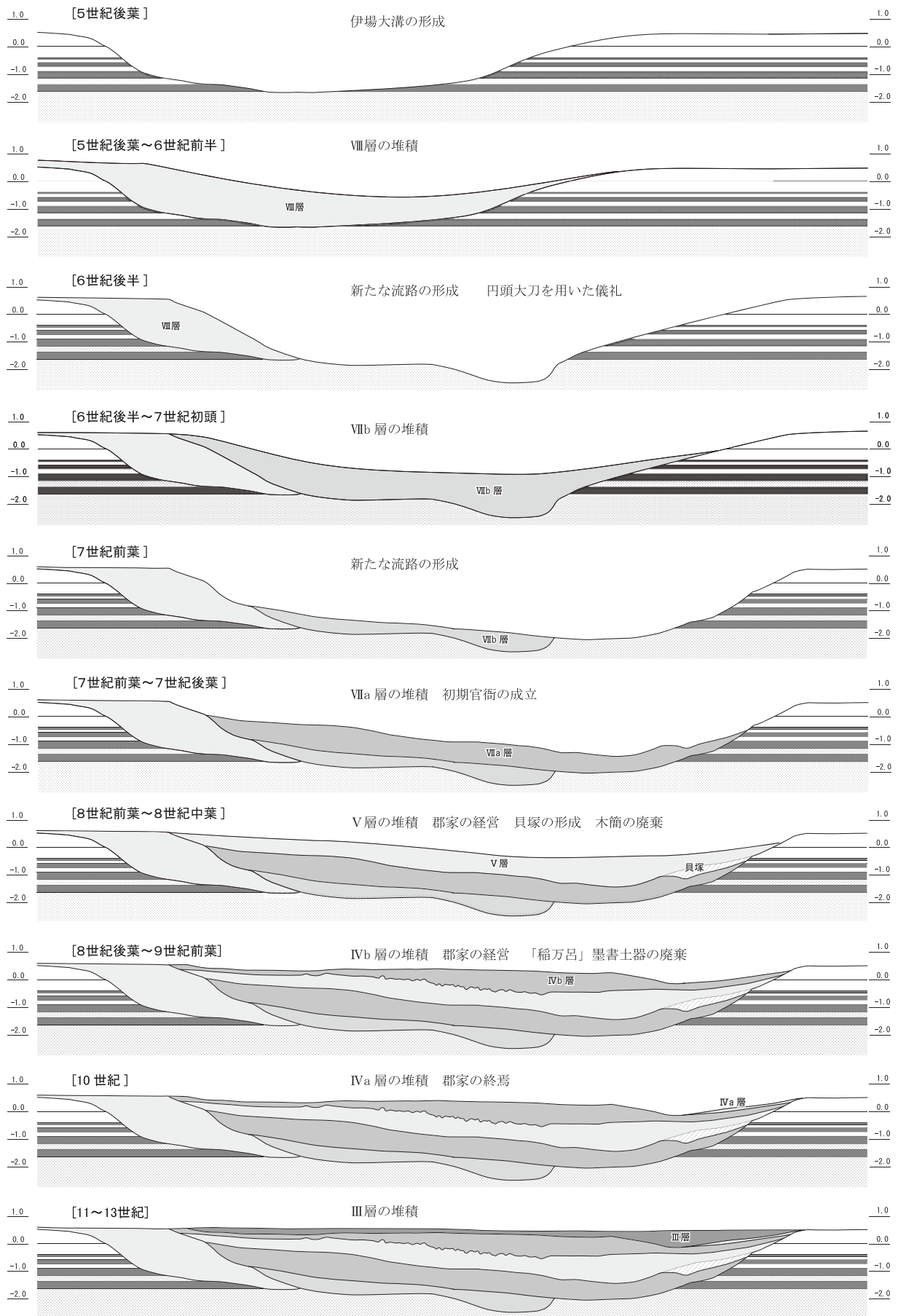


Fig.4 伊場大溝の埋没過程

(2) 伊場大溝の調査方法と経過

調査区とグリッドの設定 発掘調査に用いたグリッドは、弥生時代の調査のものと同一である。調査区の方眼は、調査対象地に国家座標軸（世界測地系）に合わせ、10m 間隔に設定した（Fig.7）。各グリッドの名称は、北西の基準点に従って命名している。

表土掘削と排水工事 伊場大溝の表土掘削は、現代の盛土施工前の水田関連層であるⅠ層およびⅡ層を対象に、バックホーを用いて行った。Ⅲ層以下は人力による精査を実施したが、一部、既設建物の解体工事に伴う基礎の撤去のために調査区内に大穴が空けられており、この部分にかんしてはバックホーによる埋土除去を行った。

今回の調査は伊場大溝の底面まで精査する予定であったことから、排水施設（ウェルポイント）を設置し湧水に備えた。排水装置の先端は伊場大溝の底面と想定された-2mの位置に設定したが、最終的には最深で-2.4m以下まで掘削した。-2.2mを超えると湧水がみられるようになり、最深部は浸水状態で調査せざるをえなかった。

層位の認識 伊場大溝の層位は、伊場遺跡および梶子遺跡9次調査での層位名、認識にあわせるように努めた。伊場大溝埋土の精査をはじめめる前に発掘区の西側（A セクション）と中央部（B セクション）に土層観察用アゼを設定し、トレンチを掘削した。双方の土層観察によって、おおむね伊場大溝の基本層位が把握でき、層位の特徴と高さを確認しながら、埋土を撤去した。ただし、層位の境界は漸移的であることも多く、各層位に含まれる遺物を判然と分離できなかったわけではない。

遺物取り上げの方法 大溝内から出土する遺物は、比較的まばらであったことから、とくに遺物が集中する部分を除いては出土状態についての情報は取得していない。遺物は、10m グリッドを4分割した範囲でまとめて取り上げたが、木器や金属器などの特殊な遺物および遺存部分が大きい土器については、トータルステーションによって出土位置を記録した。

遺物帰属層位の認定 室内における整理作業によって、層位ごとにとりあげた遺物相互の検討を行った。土器については、上下の層位を跨いで接合するものは極めて少ないことから、上下層相互の擾乱はほとんどなかったものと捉えられる。しかし、各層位の境界付近においては、確実に層位の境界が把握できない場合があったため、土器の年代観から帰属層位を改めたものがある。



Fig.5 伊場大溝断面土層の調査



Fig.6 土器集積の調査

2 伊場大溝の層位と調査の方法

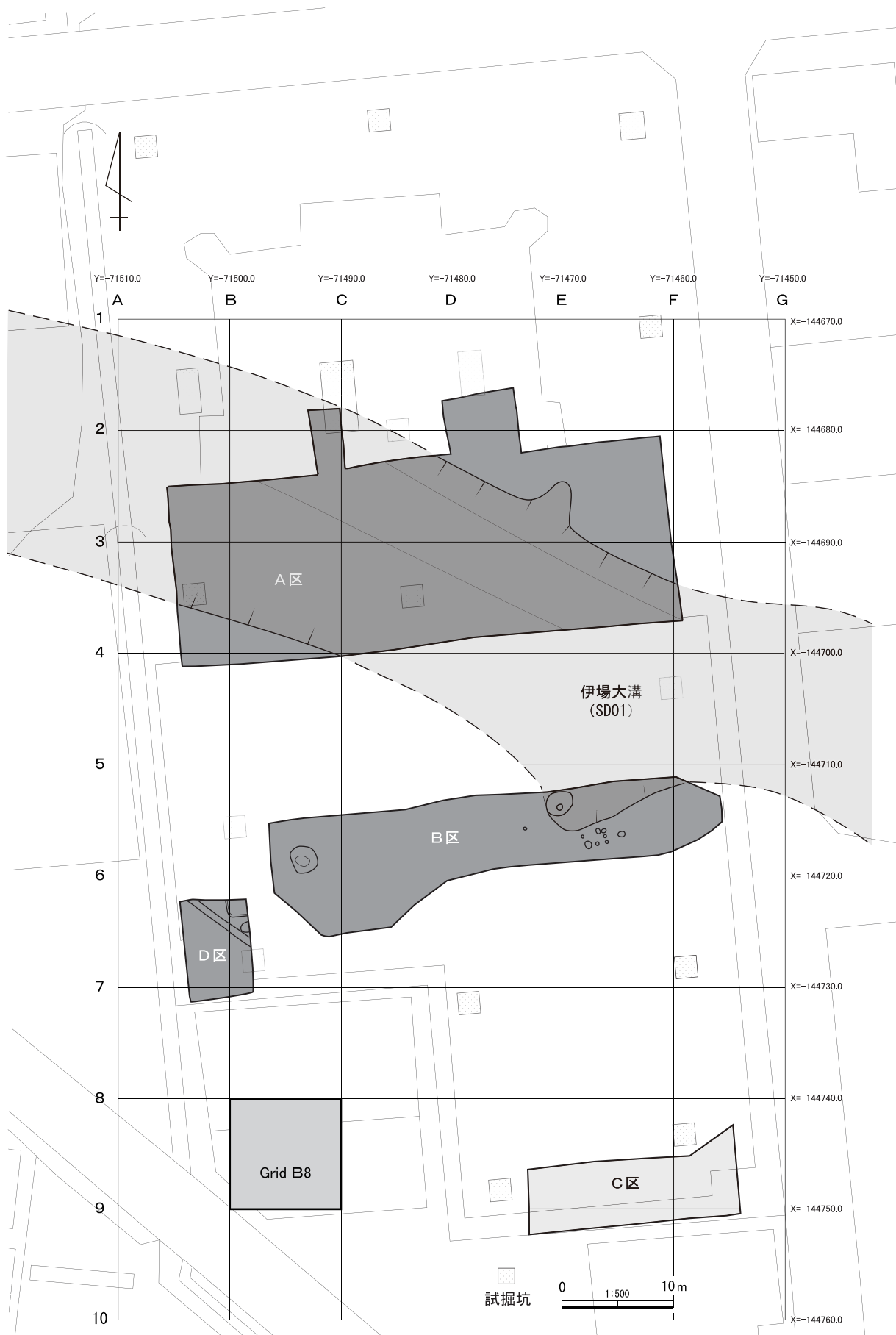


Fig.7 グリッド配置図

第2章 調査成果

1 VIII層の調査

(1) VIII層の概要

VIII層は、伊場大溝の最下層の層位で、灰色や緑灰色を呈するシルト層を主体に、炭化物や未分解の有機物を多く含む地層が交互に堆積している。VIII層は、伊場大溝の南側に部分的に遺存しているが、調査区の設定位置の関係から、僅かな面積を調査したにすぎない。調査面積が限られることから、VIII層から得られた遺物は少なかった。また、本来はVIII層中に含まれていた土器が、新しい流路の形成によって掘り出され、VII b層中に混入したの多いと想定できる。その多くは次節で解説するが、弥生時代後期から終末期の遺物で、古墳時代前期の土器も僅かにみられる。

(2) 伊場大溝の形状と遺物の出土状態

形 状 VIII層は伊場大溝の南側の岸、幅5m程度しか遺存していない。北側斜面は後世の流路（VII b層以上の堆積層）によって破壊されているため、形状をうかがうことができないが、VII b層以上

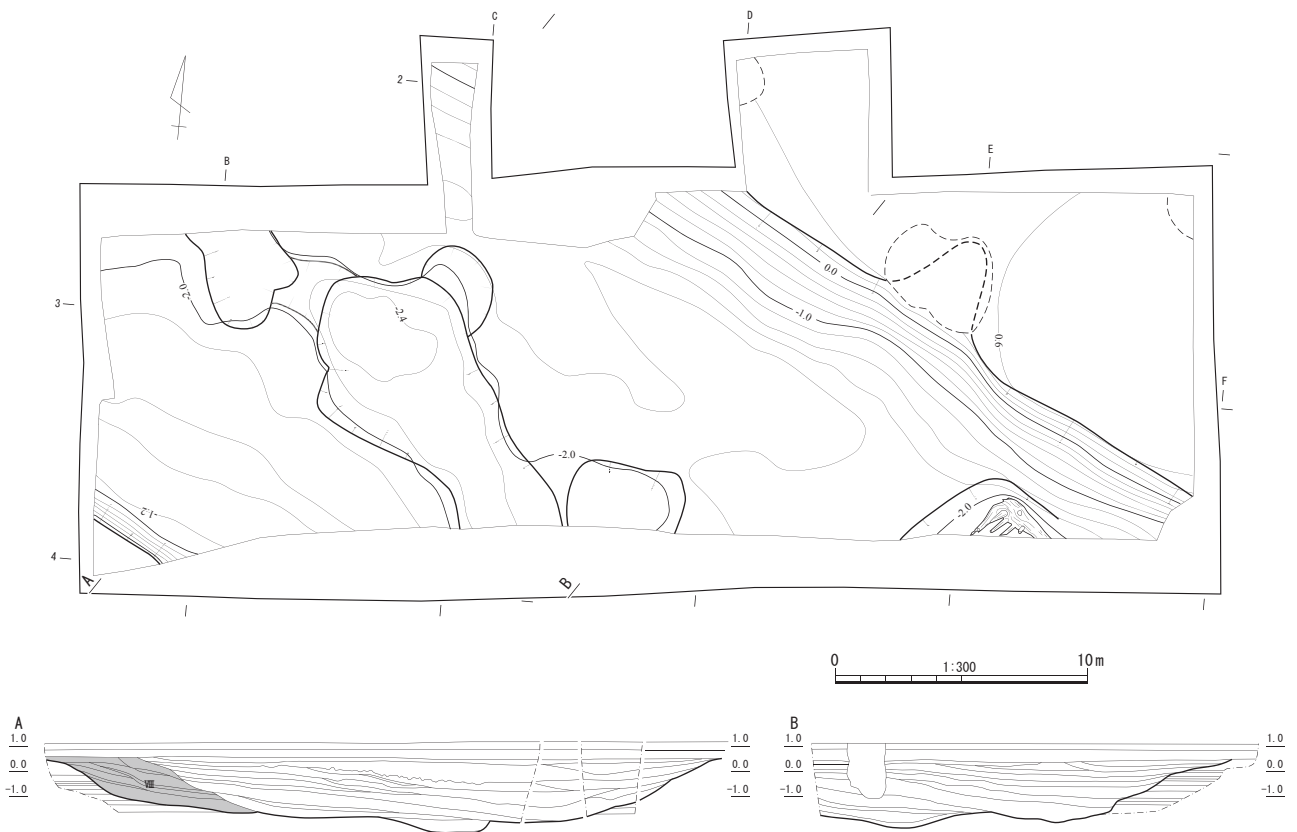


Fig.8 伊場大溝VIII層

1 VIII層の調査

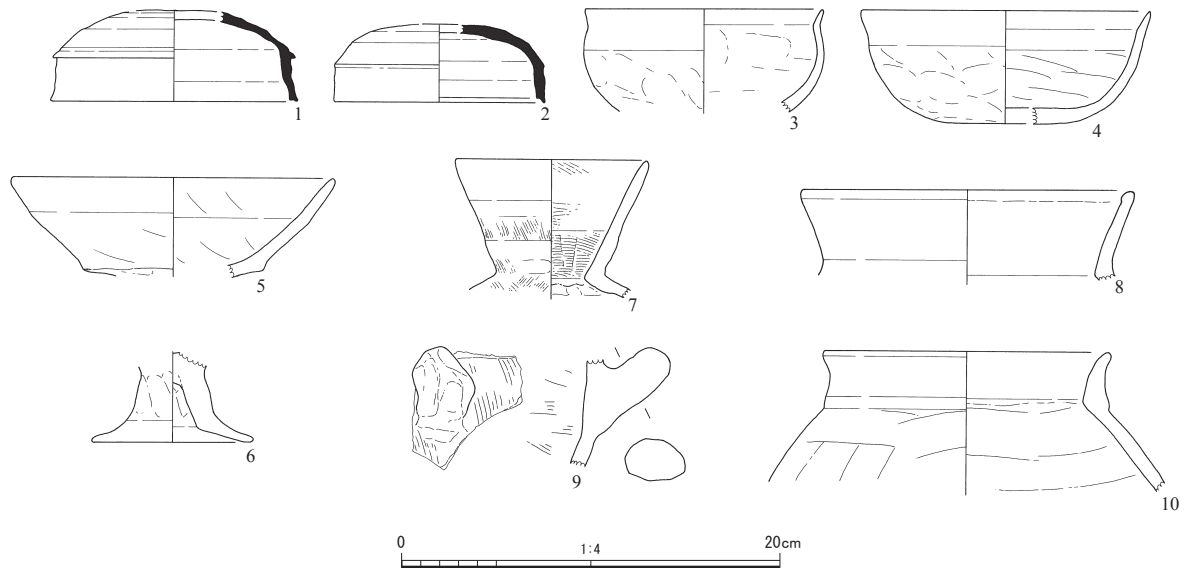


Fig.9 VIII層出土遺物

の各層と比べると斜面の傾斜が急であることが留意される。Ⅷ層の南側斜面は攻撃面であったとみられる。Ⅷ層が堆積する流路の方向は、Ⅶb層以上の層位が堆積する流路のそれと異なっていたと捉えられよう。遺存部分におけるⅧ層の最深部は-1.6m程度である。

遺物出土状態 Ⅷ層中における遺物の出土状況は、極めてまばらであった。Ⅷ層に本来伴っていた土器は、Ⅷ層の底面付近に集中していたとみられるが、大部分は後世の流路によって掘り出され、Ⅶb層中に再堆積したと考えられる。

(3) 出土遺物

須恵器 (Fig.9) 1・2は須恵器の坏蓋である。1は稜の突出が顕著で中期後葉の中でも古相の特徴を残す。TK208型式期に比定できるだろう。2は1と比べると新相の形態である。

土師器 (Fig.9) 3～10は土師器である。3・4は鉢、5・6は高坏、7は直口壺、8・10は甕、9は甕などの把手である。8の甕は胎土に白色の粒子を多く含むことから、駿河地域からの搬入品であるとみられる。

年代 Ⅷ層から出土する遺物は少ないながら、いずれも5世紀後半代に位置づけられる。Ⅷ層の堆積年代を明確に示すものと捉えられよう。

(4) 小 結

調査区の関係で、Ⅷ層は部分的な調査にとどまった。出土遺物も少ないが、伊場大溝Ⅷ層は、5世紀後葉に堆積したことを裏付ける資料が得られている。土層の堆積状況や含まれる土器の年代観などは伊場遺跡や梶子遺跡9次の調査成果とほぼ同じであるといえる。伊場大溝は、弥生時代や古墳時代前期の遺構を破壊しているため、古い時期に属する遺物が下層に含まれる。本来は最下層のⅧ層中に多くの混入品が含まれていたとみられるが、底面が後世の流路で破壊されたことによって、後述するⅦb層に再堆積したとみられよう。

2 VII b層の調査

(1) VII b層の概要

VII b層は、青灰色砂と灰色粘土の互層で、古墳時代後期後半（6世紀後半）を中心とする堆積層である。南側斜面から底面にかけては、VII b層堆積直前の形状を示しているが、北側斜面については、VII a層によって大きく切り込まれており、本来の形状をうかがうことができない。最下層には川底溝があり、最深の標高は-2.4mを超える。川底溝は一定の形状をなしておらず、所どころに流れの水がよどんで深くなった淵状の穴が認められる。川底溝が堆積した後に大規模な土器集積（SX05）が形成されている。また、SX05に隣接して円頭大刀が出土した。円頭大刀については、別冊の『円頭大刀編』において詳述する。VII b層から出土する遺物量は極めて多い。とくにSX05が形成される川底溝の埋没直後に形成された砂層からは、6世紀後半を中心とした須恵器・土師器が折り重なるように堆積していた。出土状態を図示したのはSX05の範囲のみであるが、その周りにおいても相当量の土器が出土している。

出土遺物は、大量の土器のほかに、円頭大刀が特筆される。また、玉類や轡羽口、鉄滓などの特殊な遺物も含まれる。出土遺物は、弥生時代後期から古墳時代後期までの年代幅があるが古墳時代後期前半以前の土器は、下層にあたるVIII層もしくは周囲の遺跡からの混入品と捉えられる。

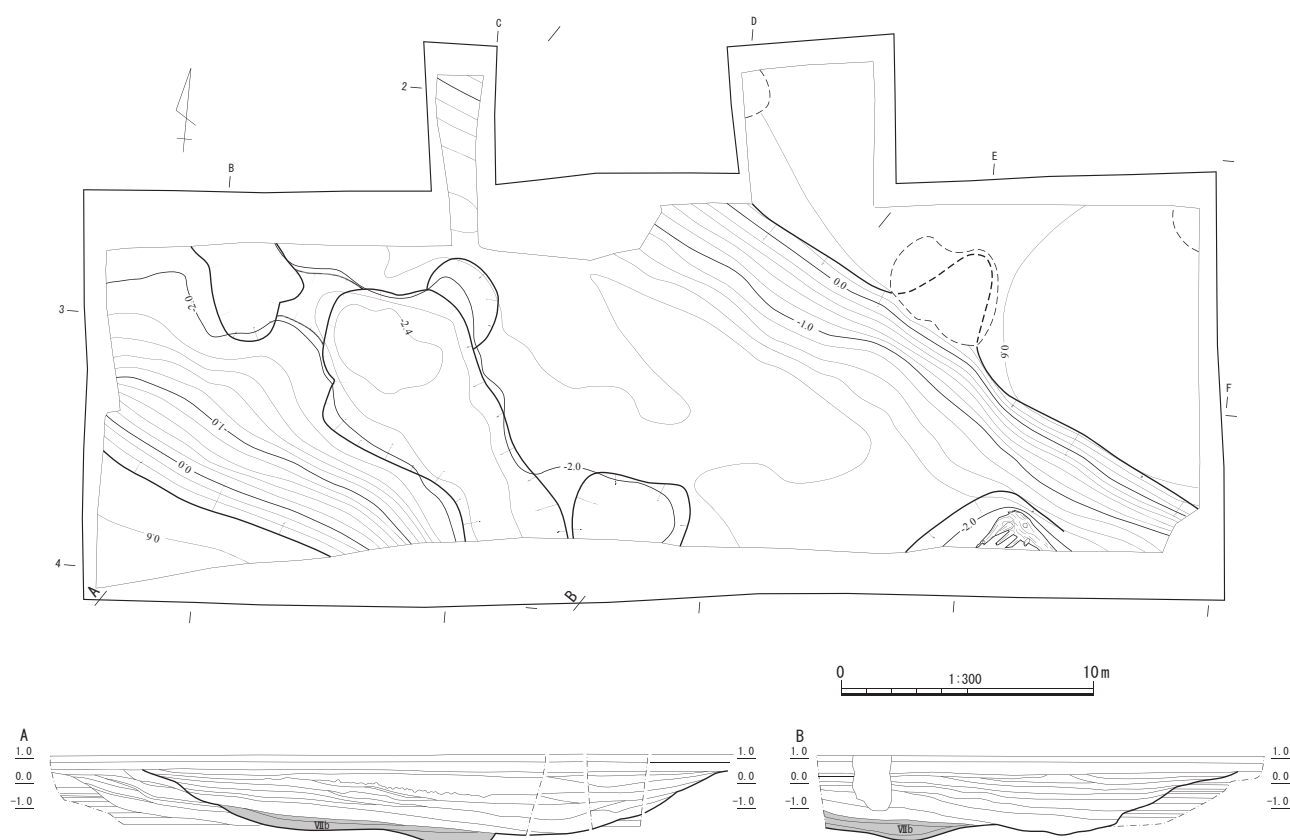
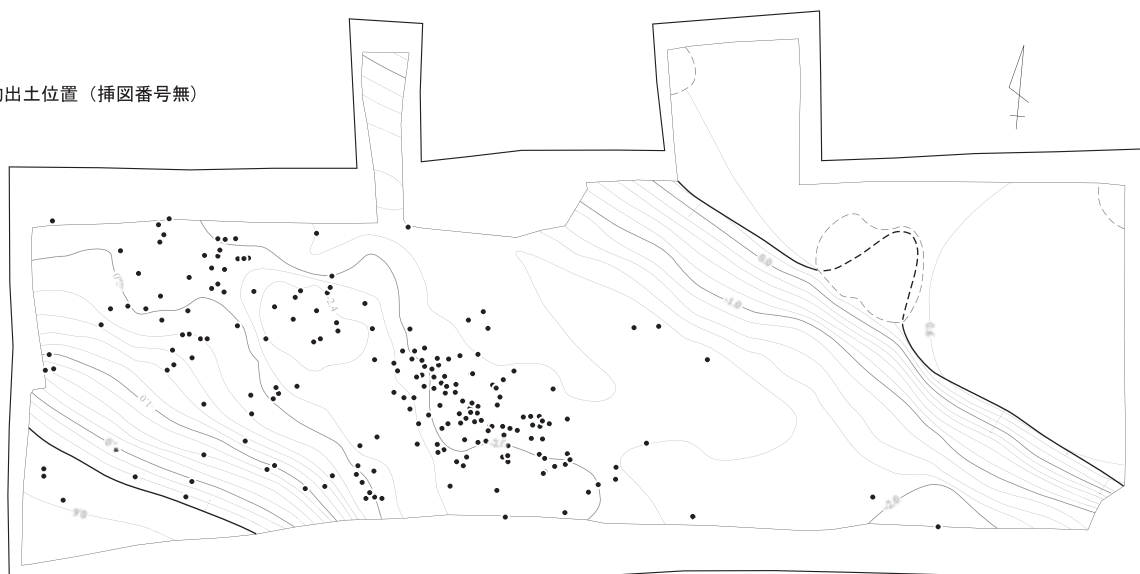


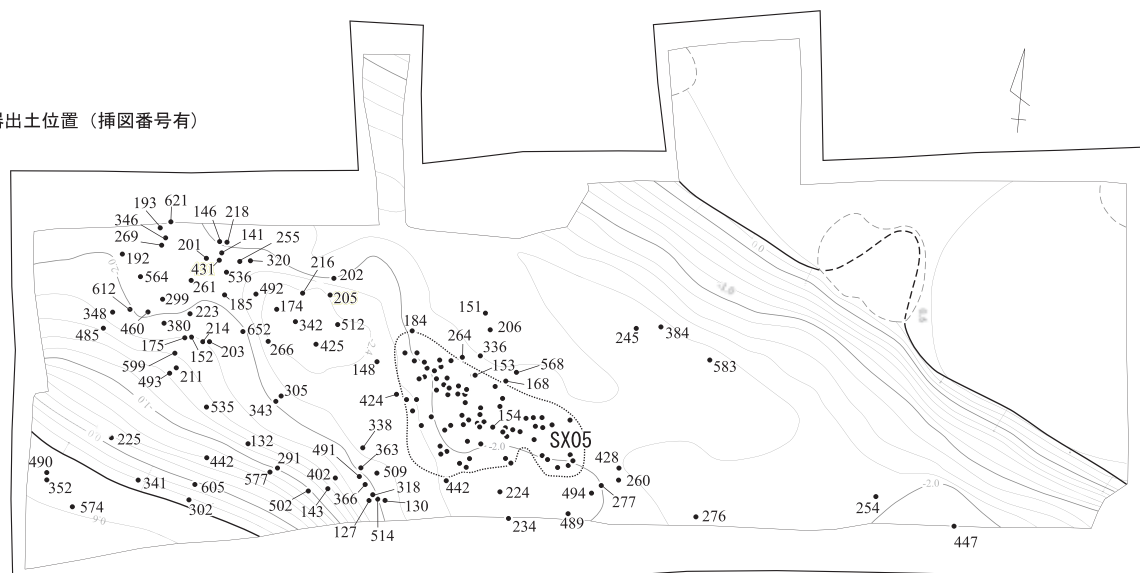
Fig.10 伊場大溝VIIb層

2 VIIb層の調査

遺物出土位置（挿図番号無）



土器出土位置（挿図番号有）



石製品・木器等出土位置（挿図番号有）

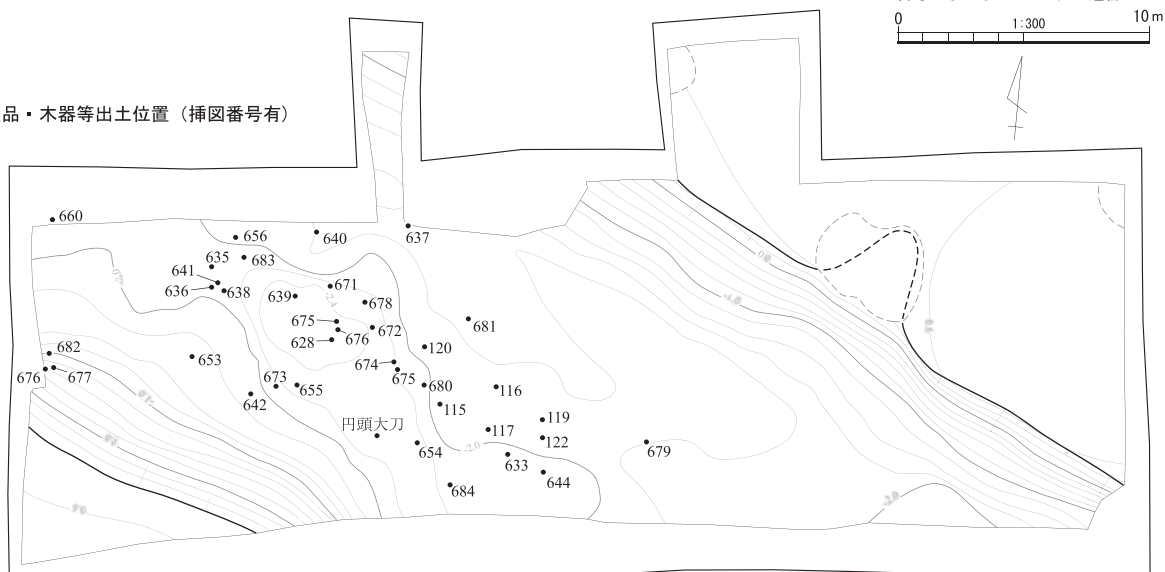


Fig.11 VIIb層における遺物出土位置

（2）伊場大溝の形状

Ⅶ b 層が堆積した伊場大溝の本来の形状がうかがえる部分は、南側斜面の -1.0m 以下の部分と、川底を挟んで北側斜面の標高 -1.8m 以下の部分である。これより上の部分は上層の堆積層（Ⅶ a 層以上）によって切られている。伊場大溝の底面には、-2.0m 以下の川底溝があり、最深部分の標高は -2.4m を超えている。川底溝の最深部は形状が定まらず、所どころに流れの水がよどんで深くなった淵状の穴が認められる。川底溝が形成されることは、水の流れが比較的激しかったことをうかがわせる。川底溝の中に堆積した土層は基盤層と同様の砂を主体とするため、識別が比較的困難であるが、砂の堆積中に部分的に粘土層が挟まっている状況が認められたことから、再堆積した砂層であると判明した。

川底溝の堆積は比較的短期間に進んだとみられる。川底溝の最深部からも 6 世紀後半の遺物が出土することから、Ⅶ b 層の堆積は 6 世紀後半に始まったことが知られる。ただし、川底溝から出土する遺物の量は比較的少なく、SX05 に典型的にあらわれているように面をなして出土することもなかった。

川底溝が埋没した後、標高 -1.9 m ～ -2.0 m 程度で伊場大溝の底面形状が平坦になる段階が認められる。激しい水流が一段落し、比較的穏やかな流れに変わったことをうかがわせる。川底溝が埋没した段階において、伊場大溝の底面に極めて大量の遺物が堆積している。円頭大刀が出土したのもこの段階の層位であり、円頭大刀の埋没とほぼ同時期に SX05 といった土器集積も形成されている。

（3）遺物の出土状態

出土位置の傾向 Ⅶ b 層の出土遺物は、底面に集中する傾向が強い。SX05 の出土状態に典型的に示されるように、伊場大溝の底部に張り付く状態で多くの土器が出土したことが分かる。Fig.11 には、発掘調査中にⅦ b 層から出土したと認識した遺物のうち、出土位置を記録したものの平面分布を示した。この図において、底面から離れた位置から出土している遺物は、下層（Ⅷ層）もしくは上層（Ⅶ a 層）に含まれていたものであった可能性を考慮してもよいだろう。南側に偏って出土した遺物（225、302、341、352、490、574 など）はⅧ層、北側に偏って出土した遺物（245、254、384、447、583 など）はⅦ a 層から出土したものとして捉える方が妥当かもしれない。

土 器 Fig.11 に示されているように、Ⅶ b 層中の遺物の多くは伊場大溝の底面に集中して出土した。最下部の川底溝から出土する遺物量は比較的少ないが、出土位置を明確に記録した資料がある。

Fig.11 に示した出土位置を記録した土器のうち、川底溝から出土したものは、148（-2.2m）、174（-2.2m）、205（-2.2m）、424（-2.1m）、493（-2.4m）、509（-2.2m）である（パーレン内の数値は出土地点の標高）。148、174、205 といった 6 世紀後半の須恵器がみられることから、川底溝の埋没時期は 6 世紀後半代であることが確実である。

川底溝が埋没した後、伊場大溝の底面が平坦になり、大量の土器が堆積する。その時期は古墳

時代後期後半（6世紀後半）であるが、この中には弥生時代後期から古墳時代前期の土器が混入している（Fig.13・14）。これら伊場大溝形成以前の土器は、周囲の集落から流れ込んだものと捉えられよう。また、VII b層の形成によってVIII層が大きく破壊されており、VIII層中に含まれる遺物も数多く混入している。VII b層中に含まれる古墳時代中期後葉（5世紀後葉）から後期前半（6世紀前半）の土器は、VIII層中に含まれる土器が混入したものと捉えられよう。

伊場大溝底面から出土する土器には、完形もしくは完形に近い状態のものが多くみられる。人為的に伊場大溝内に土器を沈めたものも含まれているとみられるが、土器を並べたような出土状況は認められない。比較的土器がまとまって出土したSX05においても、土製支脚が混在する状況が認められ、特別な祭祀行為を土器の出土状態から復原することは難しい。

その他の遺物 VII b層から出土する土器以外の出土遺物には、別冊で詳述する円頭大刀のほか、玉類や土製品、韃羽口、鉄滓、砥石、木製品などがある。これらの遺物は、大量に出土する土器の中に混ざって出土しており、特定の種類のものが集中しているような傾向は認められない。なお、玉類については、目視できるものについて採集したのち、周辺の埋土を取り上げ、篩いがけをした。しかし、篩いがけによって得られた玉類はごく僅かである。玉類の分布は散漫であるが、伊場大溝底面から満遍なく出土していることを指摘できるにすぎない。

（4）伊場大溝形成以前の遺物

概要 Fig.13・14にVII b層に含まれる、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物を示す。多くは、弥生時代後期（山中様式期）から終末期（欠山様式期）にかけての遺物で、伊場大溝によって破壊された弥生時代の集落に伴うものである。また僅かながら、古墳時代前期に降る土器（S字甕）も知られる。

出土遺物 1～13は壺である。在来の特徴をもつもののほかに、菊川式土器（9・10）、および、南関東系土器（11）が知られる。11は壺の肩部に相当する。円形浮文に比較的大きな工具によって刺突文が施されている。



Fig.12 銅鏡

15～22は高坏である。山中式系統のもの（15・16）と欠山式系統のもの（17）の双方が認められる。14は大型の鉢、23・24は小型の壺、25・27は小型直口鉢である。26は壺の蓋で、摘みと比べて円形部が小さい。

28～48は甕である。口縁形態には多様性があり、く字甕（28）、受口甕（31～34）、S字甕（35～48）が認められる。S字甕には製作時期の差があり、A類（35）、B類（36～38）、C類（39～47）の各種が知られる。S字甕C類は古墳時代前期に降るものであり、この時期の遺物が出土する意義については後述したい。

49は扁平片刃石斧である。いわゆる赤チャートを用いたもので、ほぼ完形である。石材の特徴から駿河地域から

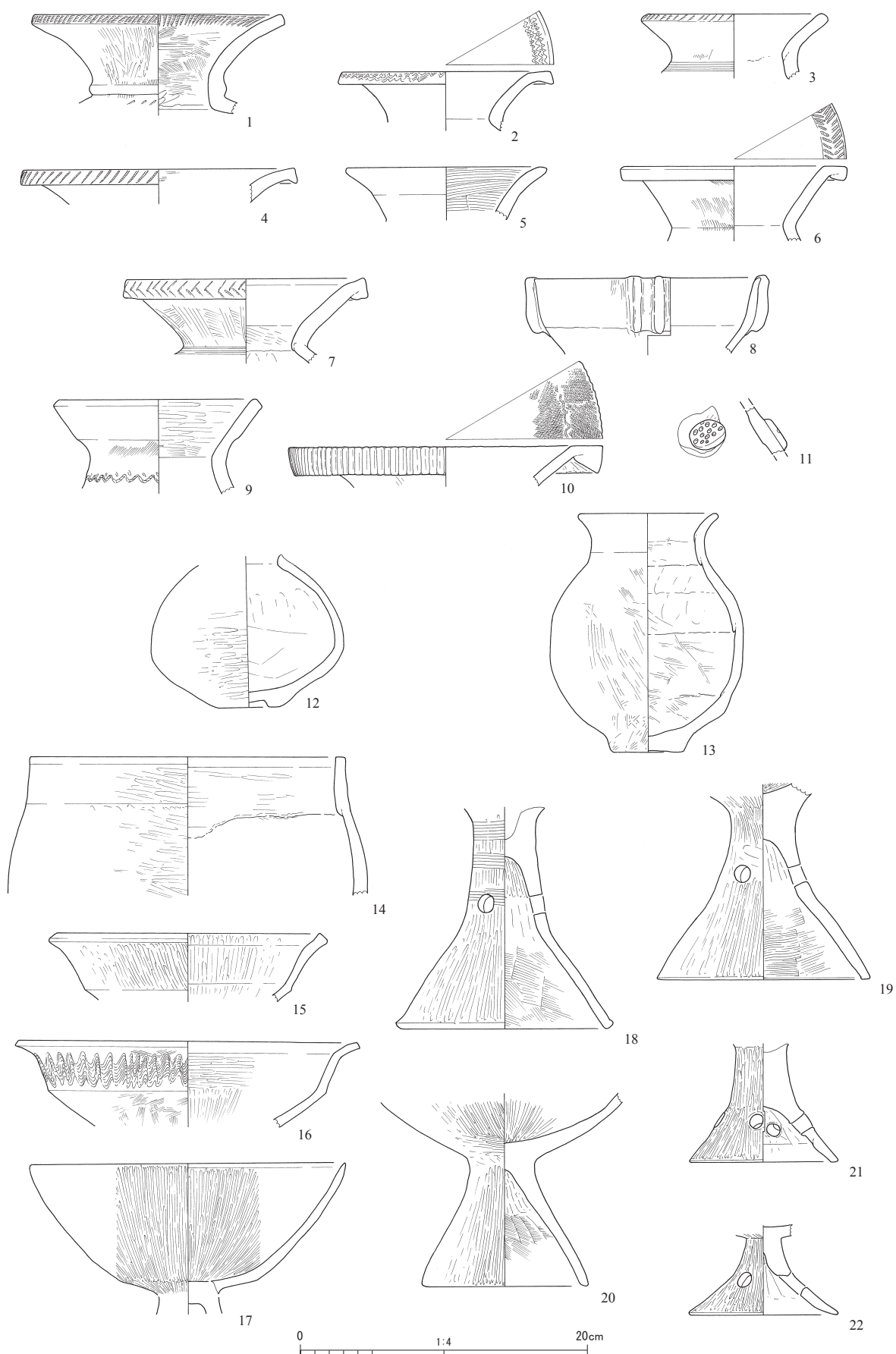


Fig.13 伊場大溝形成以前の遺物 (1)

2 VIIb層の調査

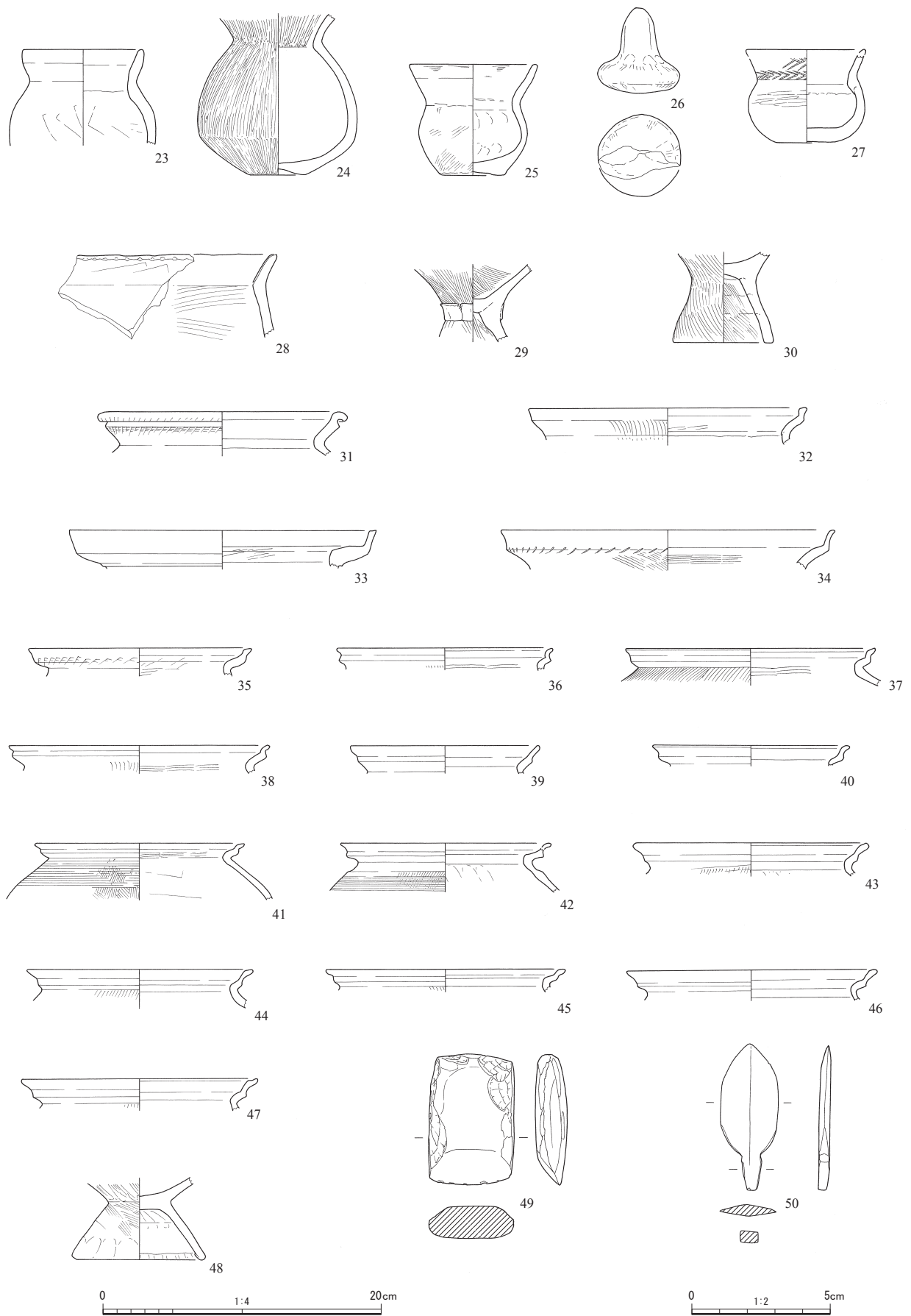


Fig.14 伊場大溝形成以前の遺物 (2)

の搬入品とみられる。50は銅鏃である。鏃身部は柳葉形を呈しており、主軸方向に鑄がみられる。茎は短く、断面は長方形を呈している。茎の表面は鍛造されたような変形の痕跡が認められる。

小 結 古墳時代前期の遺物が伊場大溝から出土することに対しては、伊場大溝の形成時期を示す遺物として捉える見方と、伊場大溝によって破壊された遺構や包含層に伴う土器として捉える見方がある。今回の調査の状況では、古墳時代前期に属する遺物は全体量から比べてごく僅かであること、出土状態にまとまった状況がみとめられないことから、伊場大溝によって破壊された遺構や包含層に伴っていた遺物と解釈することが妥当だといえる。別冊で紹介した弥生時代の集落の状況でも、集落の衰退後に、僅かながら古墳時代前期に降る遺物が出土している。

(5) 土器集積 SX05

遺物出土状態 (Fig.16) SX05は伊場大溝Ⅶb層の底面に形成された土器集積である。土器がまとまって出土しているのは-1.7m~-1.9mの高さであり、その広がり東西6m、南北4mほどである。土器の集積度は非常に高く、隙間無く遺物が広がっている状況である。土器の出土状態は破片も多いが、須恵器の坏蓋・坏身を中心に完形のものも目立つ。また、出土量は僅かであるが、轆羽口や鉄滓が出土している。小破片の土器や轆羽口、鉄滓などは混入品である可能性があるため、すべての出土遺物をSX05本来の帰属物として捉えないほうがよい。また、時期が異なる遺物も若干ながら出土している。完形の土器が多いこと、出土品の主体的な帰属時期がほぼ限定できることなどを積極的に評価すれば、土器集積SX05出土遺物は、なんらかの儀礼に伴い川底に沈めた土器群と捉えることもできる。



Fig.15 SX05 の位置



Fig.16 SX05 遺物出土状態

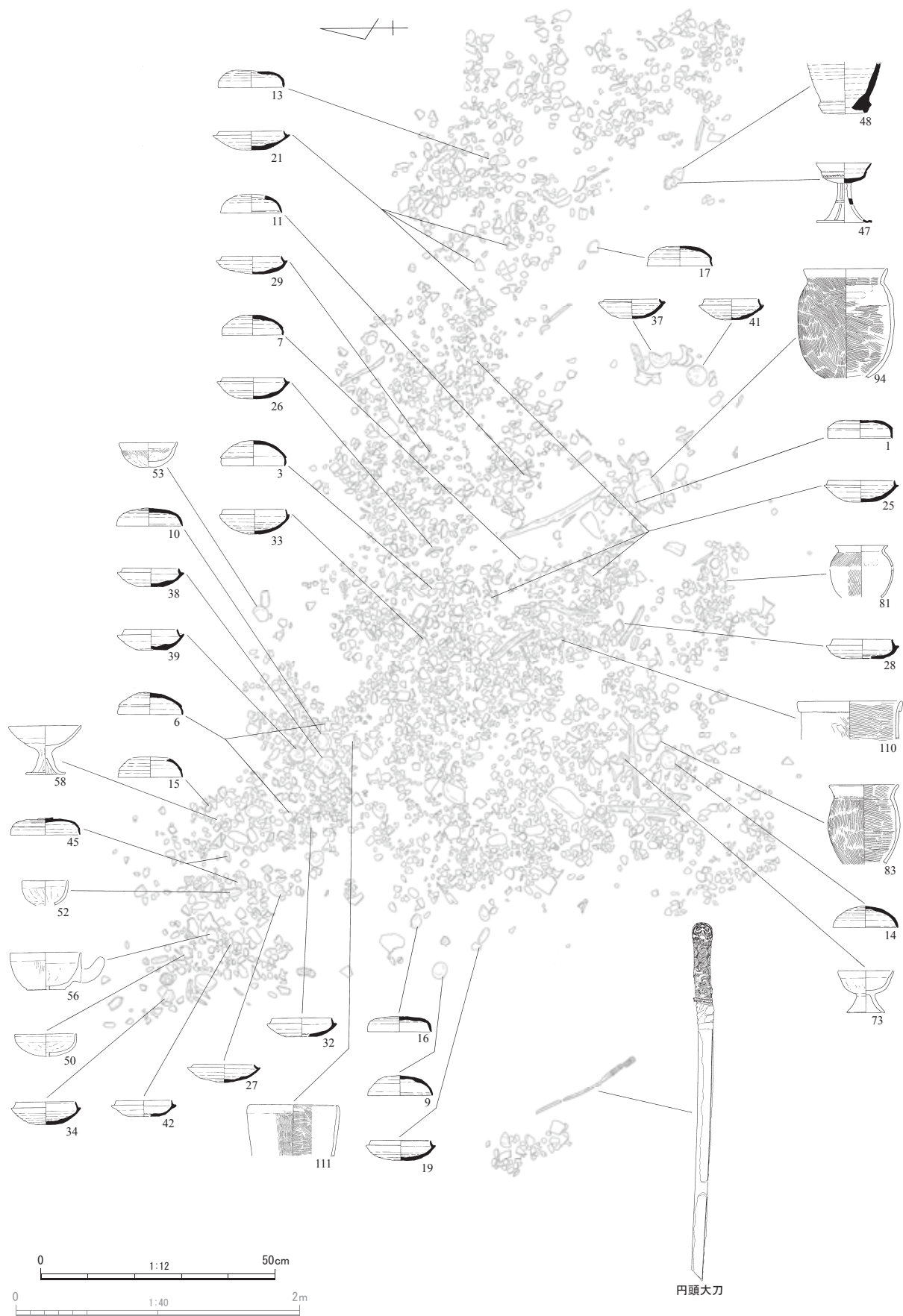


Fig.17 SX05 出土遺物対照図

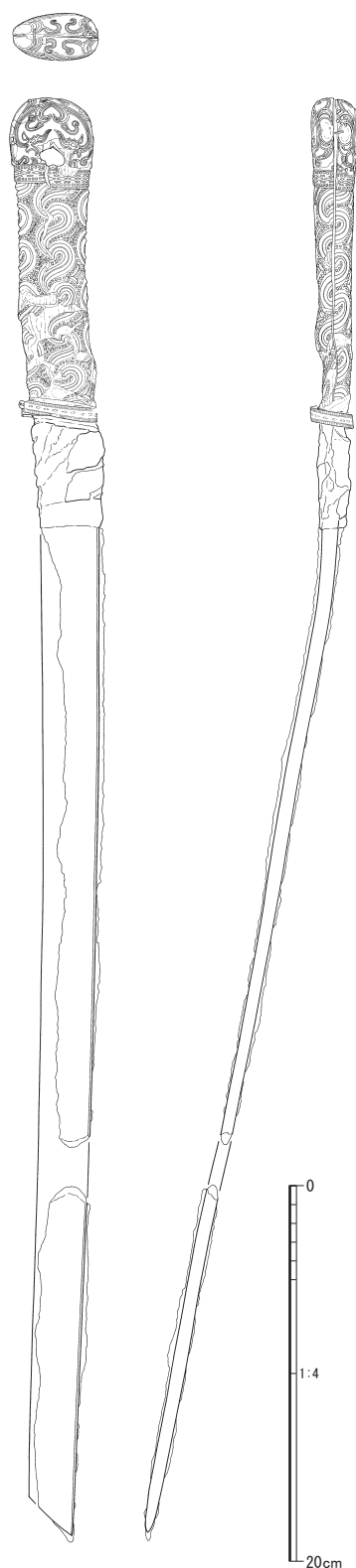


Fig.18 円頭大刀実測図

円頭大刀 (Fig.18) 詳細は別冊『円頭大刀編』において紹介する。SX05の西側約1mの地点で出土した。完形の大刀を鞘から抜いた状態で川底に沈めたものである。SX05との共伴関係は厳密でないが、出土位置や層位から考えると、遺物を廃棄した同時代性は認めてよいだろう。

金銀装円頭大刀は、全長76.5cmで、刀身の鉄部分の破損が著しい。柄頭と柄間は木芯金銀張りで、柄頭には龍文、柄間には連続波頭文が彫りだされている。柄頭には金板、柄間には銀板が遺存しているが、柄頭には補修の痕跡が認められる。

SX05 出土遺物 (Fig.19～22) 1～49は須恵器である。SX05出土遺物の図示した須恵器のうち、およそ9割が坏蓋・坏身であり、その組成が特異なものであることが理解できる。45は高坏の蓋、46・47は無蓋高坏、48は鉢、49は甕である。坏蓋・坏身の1や18など、古墳時代中期に遡るようなものが若干、認められるが、大部分は時期的なまとまりがあるといえよう。古い時期の須恵器はⅧ層からの混入品として捉えることも可能である。SX05から出土した須恵器の中心的な時期は陶邑編年のTK43型式期、実年代でいうなら6世紀後半とみられる。

50～114は土師器である。土師器も51や81など、若干古い時期に遡るものがあるが、主体的な時期はTK43型式期としてみて矛盾はない。

115・116は韃羽口、117～119は鉄滓である。いずれも小破片であり、SX05に本来伴うものかは不明である。120・121は凝灰岩製の砥石、122は先端を加工した棒状品である。

小 結 SX05はⅦb層のある時期の底面に形成された土器集積である。完形の土器が多いことから何らかの儀礼に伴って川底に沈められたとみることもできるが、土器集積中に混入したとみられる遺物も多い。出土遺物の時期は比較的まとまっている。その時期は、陶邑編年におけるTK43型式期とみられる。実年代では6世紀後半に相当するだろう。この土器集積の1mほど西からは円頭大刀が出土している。円頭大刀と土器集積は一連のものと捉える保障は無いが、出土位置が近いことから同時代性は認めてよいだろう。SX05の年代観によって、円頭大刀の廃棄年代をTK43型式期とすることができる。また、SX05を儀礼に伴う土器集積と解釈するなら、円頭大刀を川底に沈めた行為との関連を認めることもできる。

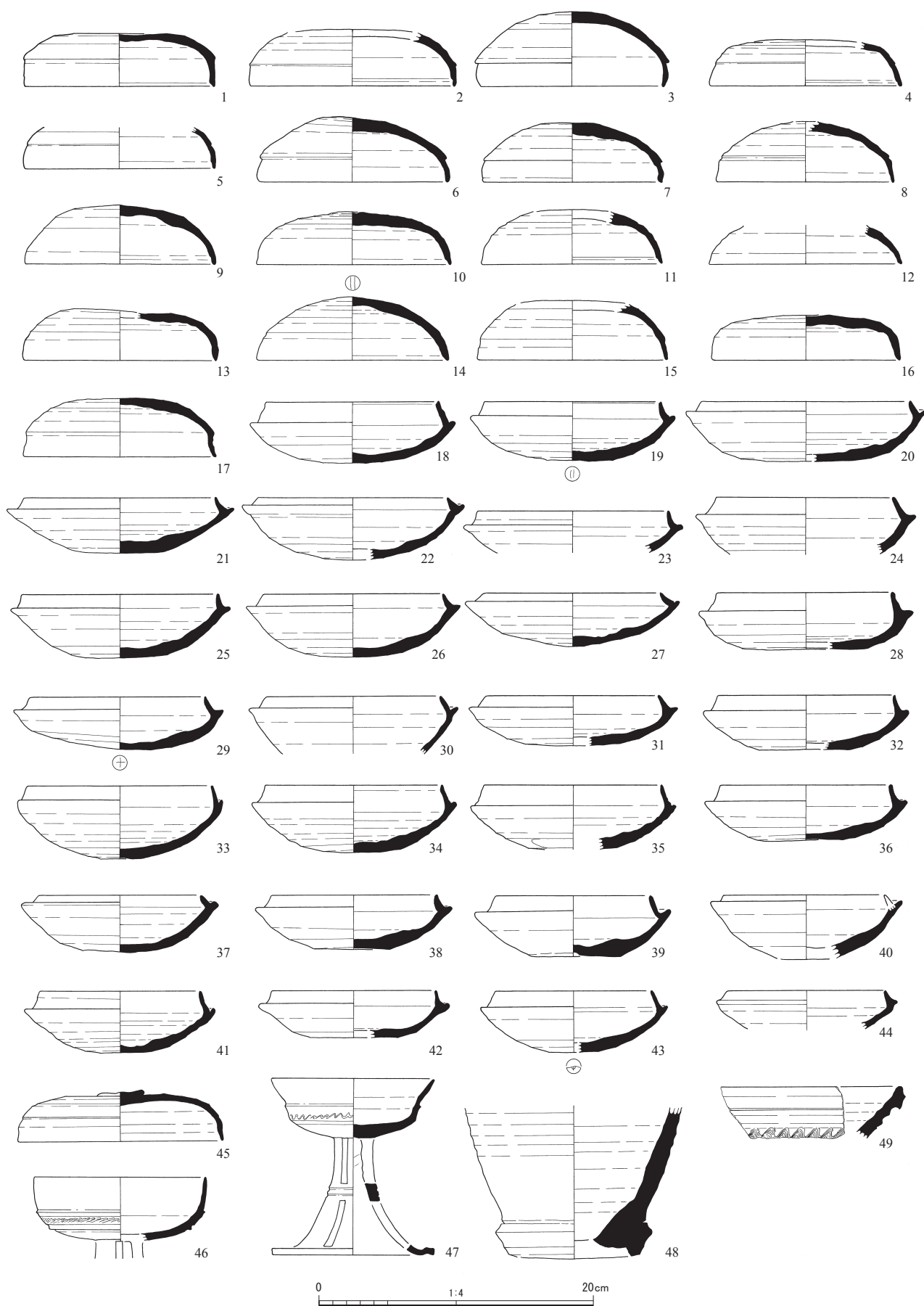


Fig.19 SX05 出土遺物 (1)

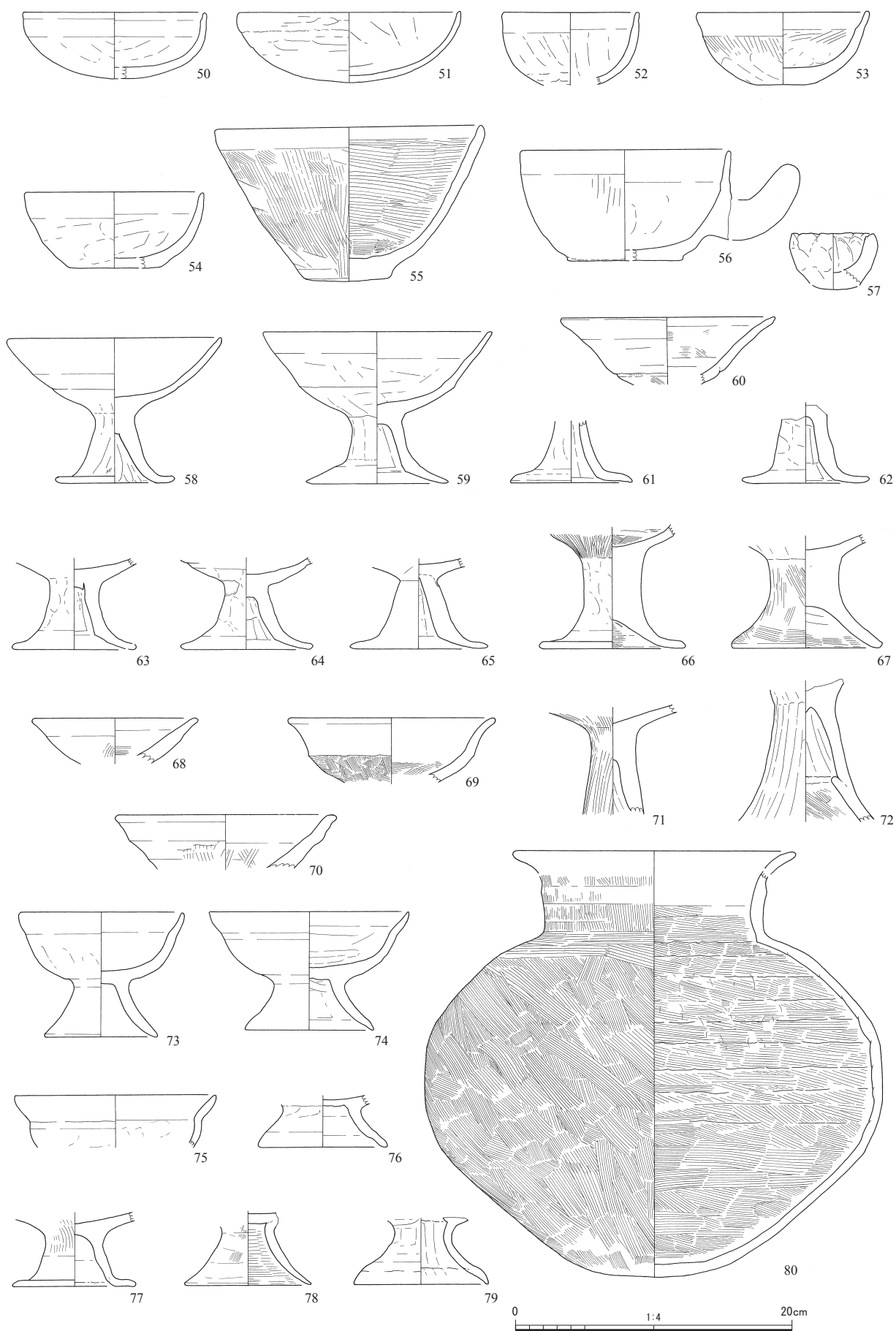


Fig.20 SX05 出土遺物 (2)

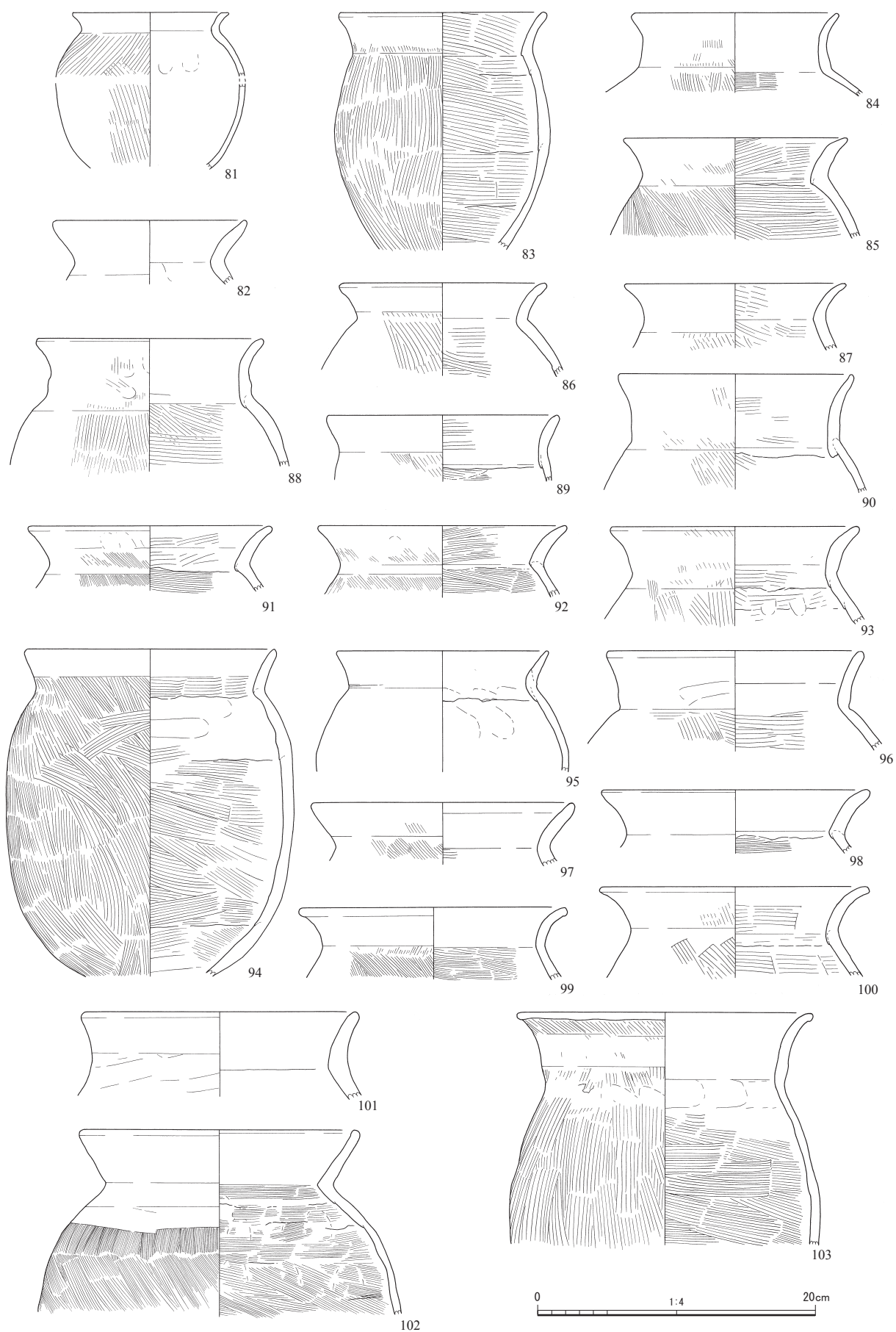


Fig.21 SX05 出土遺物 (3)

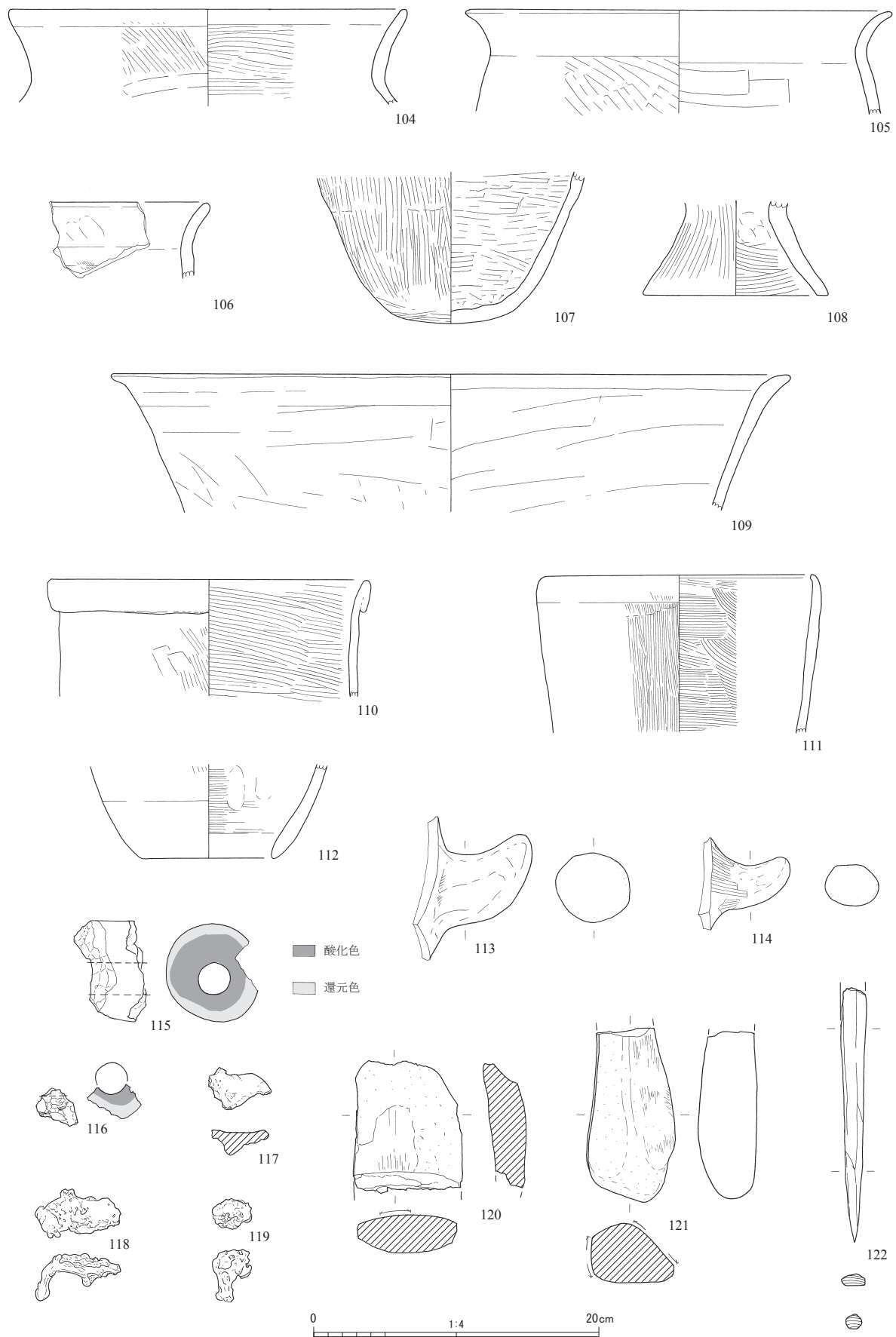


Fig.22 SX05 出土遺物 (4)

(6) VII b 層出土遺物

概要 Fig.23～44にVII b層から出土した遺物を示す。VII b層から出土した遺物のうち、図示したものは563点(SX05出土遺物を含むと685点、弥生時代の混入品まで含めると735点)である。以下、須恵器(123～293)、土師器(294～627)、土製支脚(628～632)、玉類(633～642)、土製品(643～651)、漆が付着する土器(652)、鞆羽口・鉄滓(653～657)、砥石・叩石(658～670)、木製品(671～685)の項目に分けて紹介する。

須恵器 (Fig.23～27) 123～293はVII b層から出土した須恵器である。坏蓋・坏身(123～222)の比率が多いが、高坏(223～246)、広口壺(247～254)、長頸壺(255～263)、短頸壺(264～268)、甗(269～274)、提瓶(275・276)、横瓶(277)、甕(281～293)などの器種が認められる。帰属時期が明瞭な坏蓋・坏身(123～222)に注目すると、123～138、175～189といった古墳時代中期後葉～後期前半に遡る形態が一定量含まれることが分かる。これらの遺物は、下層にあるVIII層からの混入品であると評価できる。VII b層から出土する坏蓋・坏身の中心的年代は、陶邑編年におけるTK43型式期(遠江Ⅲ期中葉)にあると評価できる。坏蓋・坏身以外の土器においても、この年代観から大きく矛盾するものはない。以下、特徴的な事柄について触れておきたい。

古墳時代中期に遡る坏蓋・坏身の時期については、123や175はTK208型式期に、124～127や176～179はTK23～47型式期にそれぞれ位置づけることができる。後述する無蓋高坏225もTK208型式期に位置づけられ、伊場大溝出土須恵器の時期はTK208型式期を大きく遡らないことが明確になった。これら古墳時代中期の遺物は本来、最下層のVIII層に含まれることから判断すると、伊場大溝の形成期は、TK208型式期、実年代では5世紀後葉頃と捉えられる可能性が指摘できる。

古墳時代中期に遡る須恵器はほとんどが大阪府陶邑産とみられるが、製作時期が若干降ると東海地方産の須恵器がみられるようになる。尾張系といえる坏蓋・坏身には、132、138、186などが知られる。また、遠江産の須恵器で生産地が比較的明瞭なものとして、132(湖西市峠場窯産)、180(袋井市衛門坂窯産)などがあげられる。

高坏(223～246)は、無蓋高坏(225・226)や有蓋高坏(224)などVIII層からの混入とみられる製品が多い。また、半球形状の坏部をもつ個体(243、244)には、若干新しい傾向を認めることができるだろう。なお、246は、同時期の土師器高坏に似た形態をなしているやや特殊な形態である。

広口壺(247～254)にも、VIII層からの混入品を多く認めてよい。254は短い口縁部に球形の胴部をもつ特異な形態である。器壁は総じて厚いが、全体の厚みは不揃いである。外面はタタキによって調整されているが、内面はナデの痕跡が明瞭である。現地調査の地点ではVII b層に帰属する遺物と判断したが、出土位置からは、VII a層(飛鳥時代)に伴っていた可能性もある。

278は、小型の壺の蓋と考えられ、上面に細かな刺突がみられる。279は把手付の碗とみられるが、把手の大部分と口縁、底部を欠損しており、全体的な形状が不明確である。280は器台状の脚部であるが、上端部が外側に彎曲している。脚付の壺の脚部である可能性もあるだろう。

土師器 (Fig.28～41) 294～627はVII b層から出土した土師器である。内彎坏(294～315)、台形鉢(316～320)、模倣坏(321～340)、有稜坏部高坏(341～405、409～416)、長脚高坏(406

～408、417～432)、鉢形坏部高坏(433～466)、二重口縁壺(467～474)、折返口縁壺(475～482)、長頸壺(485～491)、鉢(494～512)、甗(513～532)、甕(533～627)などの器種が認められる。土師器についてもⅧ層から流れ込んだ古墳時代中期後葉から後期前半の遺物が混入しているが、概ね古墳時代後期前半頃に時期的な中心があるとみてよい。以下、特徴的な事項について記す。

306の内彎坏には外面に丁寧なミガキ調整がなされている。駿河からの搬入品の可能性がある。模倣坏は蓋模倣(321～329)と身模倣(330～340)の双方が認められる。321の模倣坏は精良な胎土を用い焼成も良好である。遠方地域からの搬入品の可能性がある。

有稜坏部高坏には341・342など中期に遡る形態のものが含まれるが、大多数が後期的形態といえる。脚部内面を中空にするもの(363～402)と、中実にするもの(409～416)があり、後者には長脚化の傾向が認められる。長脚高坏は完形のものが知られないが、外反する坏部をもつ406～408が相当するだろう。鉢形坏部高坏には、口縁端部がく字形に明確に屈曲するもの(433～443)と屈曲が不明瞭なもの(444～449)が知られる。後者の坏部には、446など模倣坏状の形態をなす個体がみられる。

二重口縁壺(467～474)や折返口縁壺(475～482)、長頸壺(485～491)などは古墳時代中期から後期前半の形態であり、Ⅷ層からの混入品と捉えることができる。485の長頸壺や、鉢(494～512)の中に底部に籠目を残すもの(496・502・504)がある。籠目を残す製作技法も古墳時代中期的な特徴である。

甗(513～532)は胴部が短く、底部の開口部はすべて単純である。また、口縁端部を折り返すものが多い。形態的特長からは、Ⅷb層の埋没時期である後期前半に中心があることを示している。

甕(533～627)の中には宇田型甕(533・534)が認められ、後期前半以前の個体が少なからず混入していることを示している。

535は完形の台付甕であるが、厚い造りの脚台部をもち、イタナデもしくはナデ調整されている点で特異である。関東地域などからの搬入品の可能性があるが、その故地は明確にできない。Ⅷb層からは608～625に示すように、台付甕の脚台部が一定量出土している。一般的に後期には台付甕が消滅するとみられているが、在来形態の台付甕がある時期まで残存している可能性が考えられる。

626や627は、高い温度を受けて変形した甕の口縁である。土器の器壁は発泡し、表面がひび割れている。

土製支脚 (Fig.41) 628～632は土製支脚である。土製支脚には、横断面が正方形のもの(628～630)と、円形のもの(631・632)の2種が認められる。628は遺存状態が良好で、表面には稲粃の圧痕が大量にみられる。土製支脚の製作時に、稲粃を混ぜ合わせたものと考えられよう。

玉類 (Fig.42) 633～642は玉類である。633～635、639はガラス製、636・638は滑石製、637は蛇紋岩製の小玉である。ガラス玉の色調は、635が水色、633、639が紺色、634が緑色である。640は蛇紋岩製、641・642は碧玉製の管玉である。640は両面穿孔、641・642は片面穿孔である。玉類には滑石製品が含まれることから、Ⅷ層中からの混入品が含まれる可能性が高い。伊場大溝の埋土の量が膨大であることに対して玉類の出土状態が散漫であるため、玉類の検出作業は粗くならざ

るをえなかった。本来はさらに多くの玉類が伊場大溝中に含まれているとみられよう。

土製品 (Fig.42) 643～651は土製品である。土製品には、紡錘車(643・644)、土錘(645～651)がある。土製紡錘車のうち、643は直径3.5cm、644は直径4.3cmと若干の大きさの違いがある。

645は水滴形を呈した土製品で、頂点に偏った部分に穿孔がみられる。孔は紐ずれによる摩滅が顕著で、頂点の側面にも紐ずれの痕跡が残る。これらの使用痕跡から、孔に紐を通して使用していたことが判明する。想定できる使用方法から、645は土錘であった可能性が高いだろう。

646～651は円筒形の土錘である。646は直径1.4cm程度の小型の土錘で、647～651は直径3～4cm程度の中型の土錘である。651の表面には稲籾の圧痕が顕著である。

漆付着土器 (Fig.42) 652は漆が付着した須恵器の坏である。須恵器の坏を漆塗りの容器として使用したもので、数層にわたり漆が付着している。破片の断面にも漆が付着しており、土器が破損してから使用していたことが分かる。今回の調査では、上層のⅦa層においても、漆付着の須恵器(Fig.65・569・570)が出土している。

鞆羽口・鉄滓 (Fig.42) 653は鞆羽口が付着する鉄滓、654～656は鞆羽口、657は鉄滓である。653は鞆羽口が僅かに遺存しており、その延長上に鉄滓が付着している。鞆羽口はいずれも暗灰色を呈する還元域と赤褐色を呈する酸化域が明確に観察できる。鞆羽口・鉄滓は同じⅦb層のSX05からも出土しており、伊場大溝中ではこの層が最も出土量が多い。

砥石・叩石 (Fig.42) 658～669は砥石である。いずれも凝灰岩を使用したもので、側面形態が面的に整えられたもの(658・659・664)と自然石の状態を残すもの(660～663、665～669)の2者が認められる。658は一箇所の穿孔がみられるもので、提砥として使用されたものである。

670は輝緑岩製の叩石である。片側に使用痕が認められる。

木製品 (Fig.43・44) 671～685は木製品である。Ⅶb層から出土した木製品には、鋏(671～674)、木錘(675～677)、櫓(678)、アカ取り(推定、679)、底板(682)、槽(684)、横櫓(685)などがあり、このほかにも不明品を3点(680、681、683)図示する。

671・672・674は、曲柄平鋏である。前二者はコナラ属アカガシ亜属を用いており、鉄製鋏先を装着していた痕跡が認められる。673は曲柄又鋏の一種とみられる。木材は曲柄平鋏と同様、コナラ属アカガシ亜属を用いている。実測図の復原線に示すように、本来は先端が3方向に分かれていたとみられるが、現状では中央の一本しか遺存していない。先端は角が切断されていて多角形状を呈している。

675～677は木錘である。675・677はアスナロ属、676はモミ属を用いている。いずれも柱状の素材に抉りを彫り込んで成形しているが、形態や大きさは多様である。676の端面の一端は切断したままの状態の小口面が明確である。

678は櫓である。遺存長54.3cmであり、柄は欠損している。木材は、コナラ属アカガシ亜属を用いている。679はアカ取りの可能性が高いが、遺存状態が悪く形態の詳細は不明である。アカ取りと捉えた場合、把手から底面の先端まで遺存しているが、側面の殆どが欠損しているとみられる。

680は先端が加工された棒状品である。681は両端に三角形の切り欠きがみられる板状の製品で、両端は欠損している。682は円形の底板である。側板をあてるための溝や段がなく、曲物の底板と

は断定できない。むしろ刳物桶などの底板である可能性も考慮してよいだろう。底板側面が直接側面の部材に接合される構造である。底板側面には釘が打ち込まれた痕跡が7箇所みられる。また、底板表面には刃物があてられた痕跡が無数に残っている。683は先端に突起がみられる棒状品である。片側が欠損しており、種別の特定はできない。684は把手付の槽である。木材はアスナロ属を用いている。両側の短辺に把手が取り付けるとみられるが、片方の把手は欠損している。

685は横櫛である。歯の大部分と本体の3分の2ほどを欠損している。木材は、ツゲ属ツゲを用いている。いわゆる刻歯式横櫛に分類できる形態である。本体部と歯部には僅かな段が彫りだされている。

年 代 以上、VII b層から出土した遺物を紹介してきた。弥生時代後期から古墳時代前期の遺物(Fig.13・14)は明らかに周囲の集落からの混入品と認定できるが、VIII層から混入したとみられる古墳時代中期後葉から後期前半の土器にかんしては、それ以後の時期との連続性が高く、VII b層本来に含まれる遺物との分離は難しい。VII b層から出土する遺物の主体的な時期は古墳時代後期後半(6世紀後半)といえることができるが、若干の時期幅をもって捉えておく方が妥当である。

よって、土器以外の土製品や石製品、木製品についても古墳時代中期後葉まで遡る可能性は否定できない。いっぽうで、VII b層出土遺物には飛鳥時代に降るものがみられないので、年代の下限は古墳時代後期後半と捉えてよいだろう。

(7) 小 結

鳥居松遺跡5次調査で確認できた伊場大溝各層出土遺物のなかでも、VII b層から出土した遺物が最も数が多く、種類も豊富である。弥生時代の遺物や下層のVIII層に伴う遺物が混入していることもあるが、VII b層の埋没時期を示す古墳時代後期後半(6世紀後半)に属する遺物が極めて多いことにはかわりない。さらに、VII b層出土遺物の時期を絞り込むと、後期後半の中でも比較的古い時期、TK43型式期にその中心があるとみられる。

VII b層の最下層に刻まれた川底溝から出土する遺物は少ないが、148、174、205といった6世紀後半の須恵器がみられることから、川底溝の埋没時期は6世紀後半代であることが確実である。川底溝の埋没年代にかんしては、梶子遺跡9次調査時の所見と同様であり、1kmほど離れた上流部と下流部において、ほぼ変わらない状況を示す調査結果が得られたといえる。

伊場大溝は、古墳時代後期後半(6世紀後半)の比較的古い時期に、膨大な水量が流れ込み新たな流路が形成されたとみられる。川底溝の存在は、その水流の激しさを物語るものといえよう。その後、川底溝は急速に埋没し、水流が安定した段階で大量の土器が川底に埋まった。円頭大刀や土器集積SX05をはじめ、VII b層出土遺物の大多数がこの段階で埋没したものである。

短期間のうちに極めて大量の土器が埋没した理由は何か。伊場大溝の新たな流路が同時期の集落を破壊し、遺物が伊場大溝内に堆積したことも考慮できるが、円頭大刀の出土にみるように、伊場大溝に対してなんらかの儀礼行為がなされたことは確実である。VII b層から出土する土器についても儀礼に伴って川底に沈められたものが含まれる可能性を指摘しておきたい。とくにSX05の主体的な遺物はその可能性が高いものとして評価できるだろう。

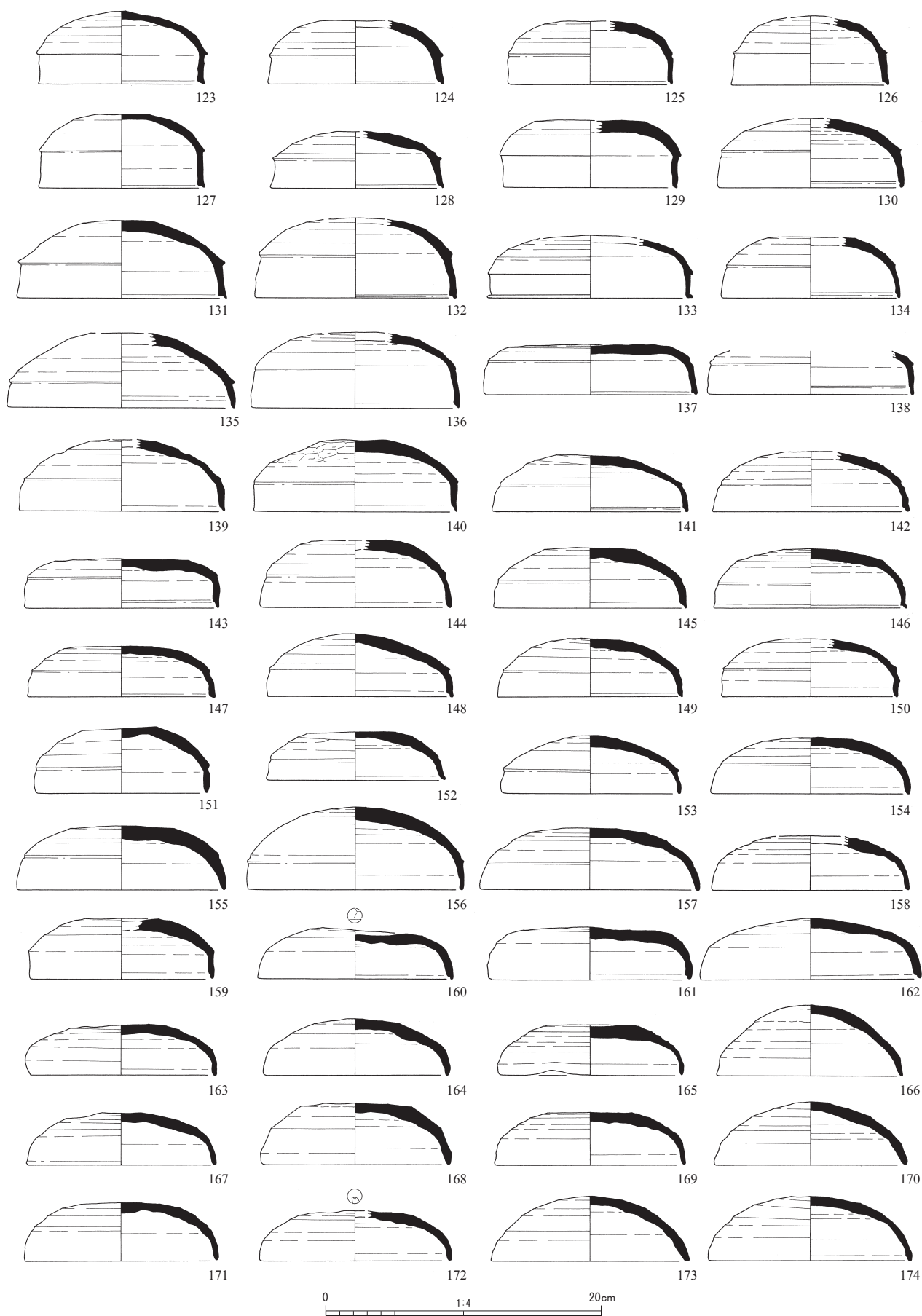


Fig.23 VII b 層出土遺物 (1)

2 VIIb層の調査

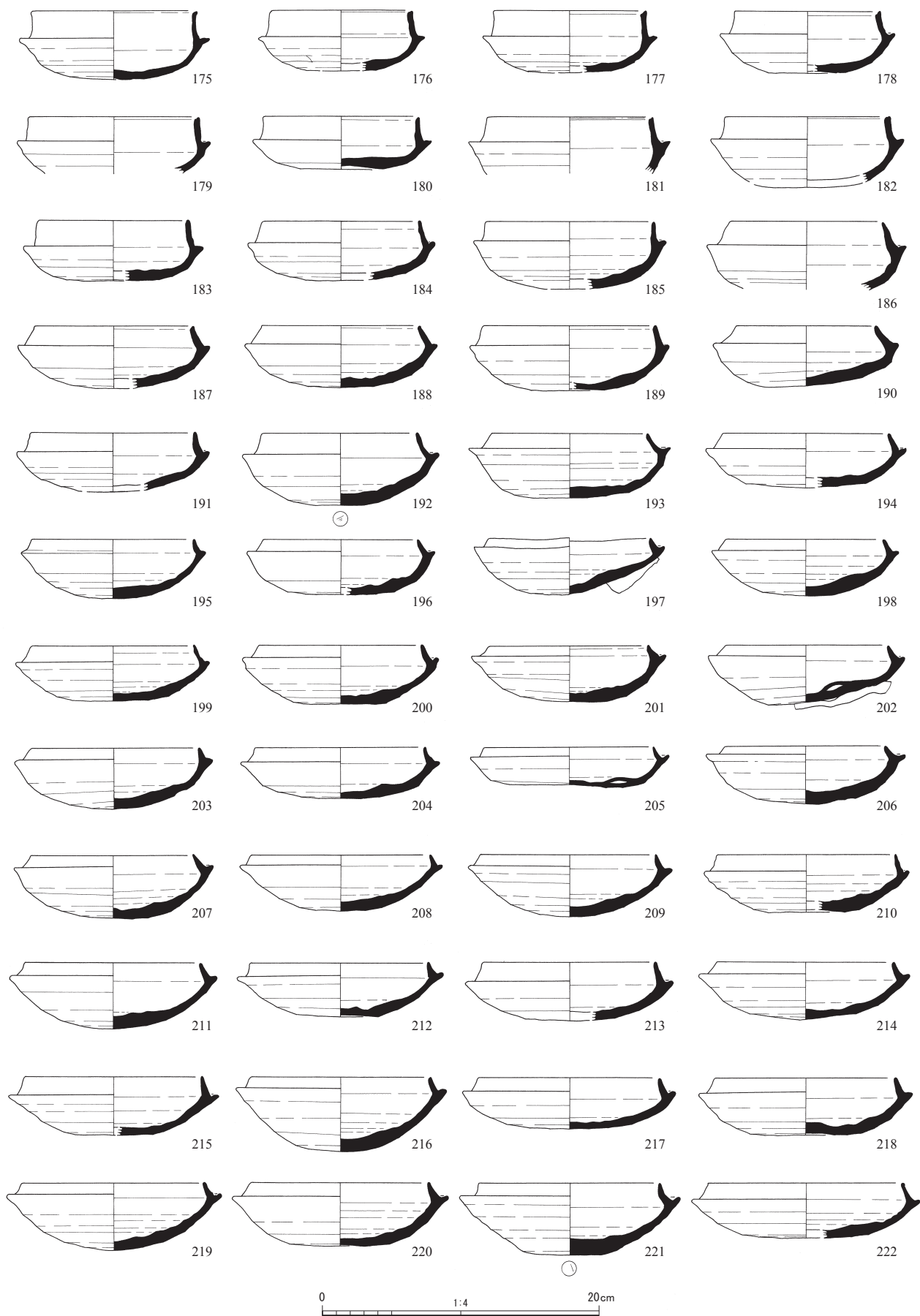


Fig.24 VII b 層出土遺物 (2)

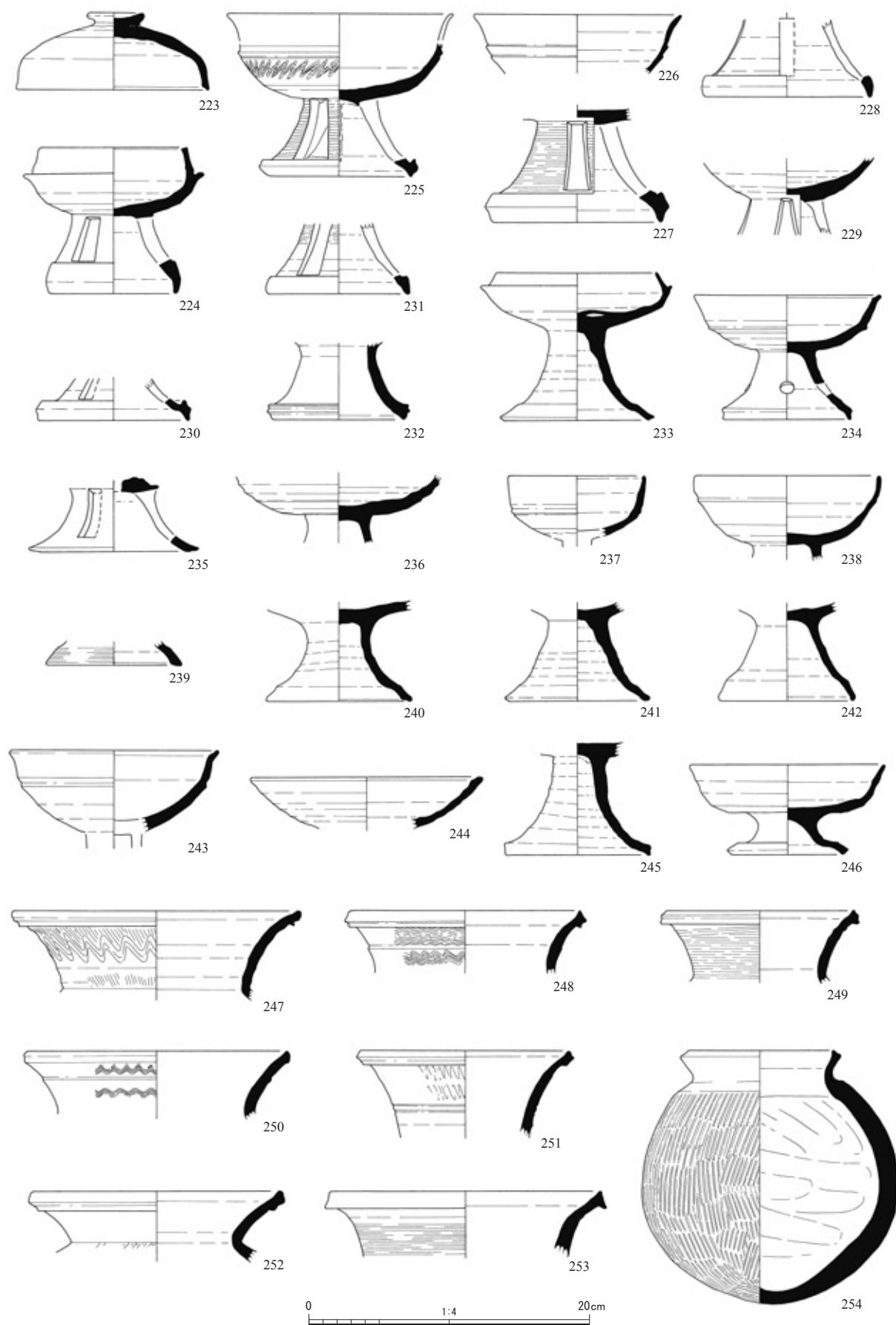


Fig.25 VII b 層出土遺物 (3)

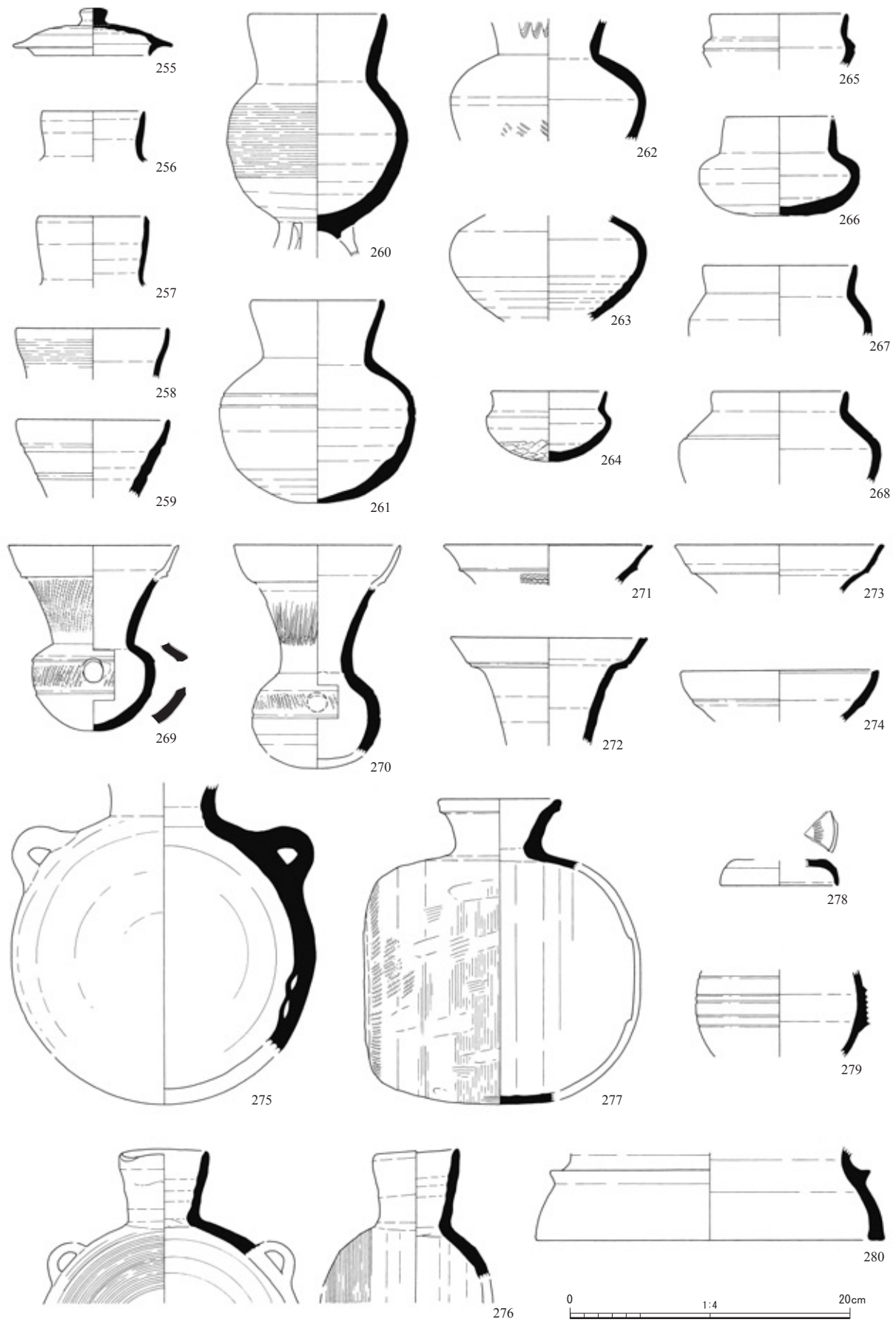


Fig.26 VII b 層出土遺物 (4)

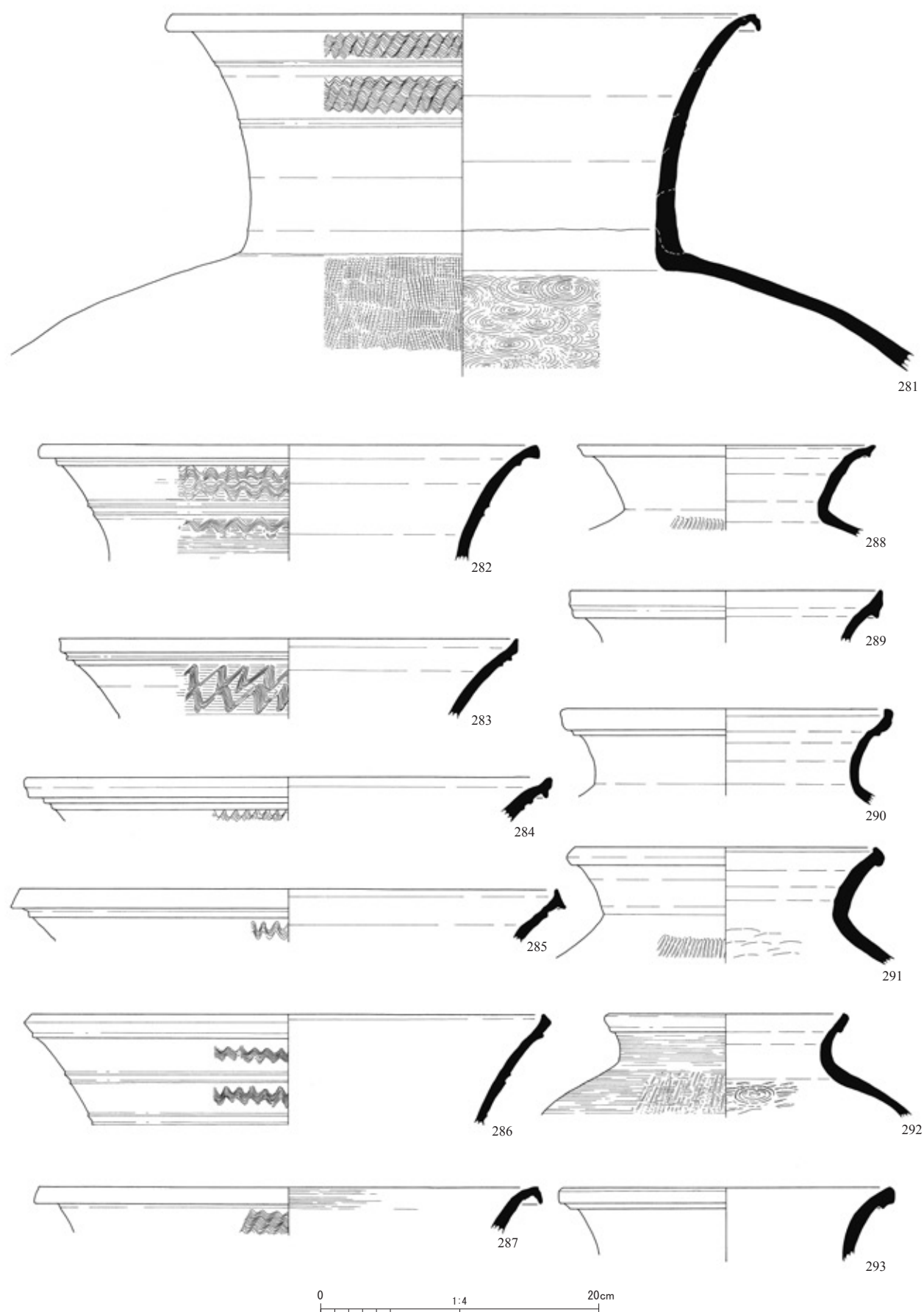


Fig.27 VII b 層出土遺物 (5)

2 VIIb層の調査

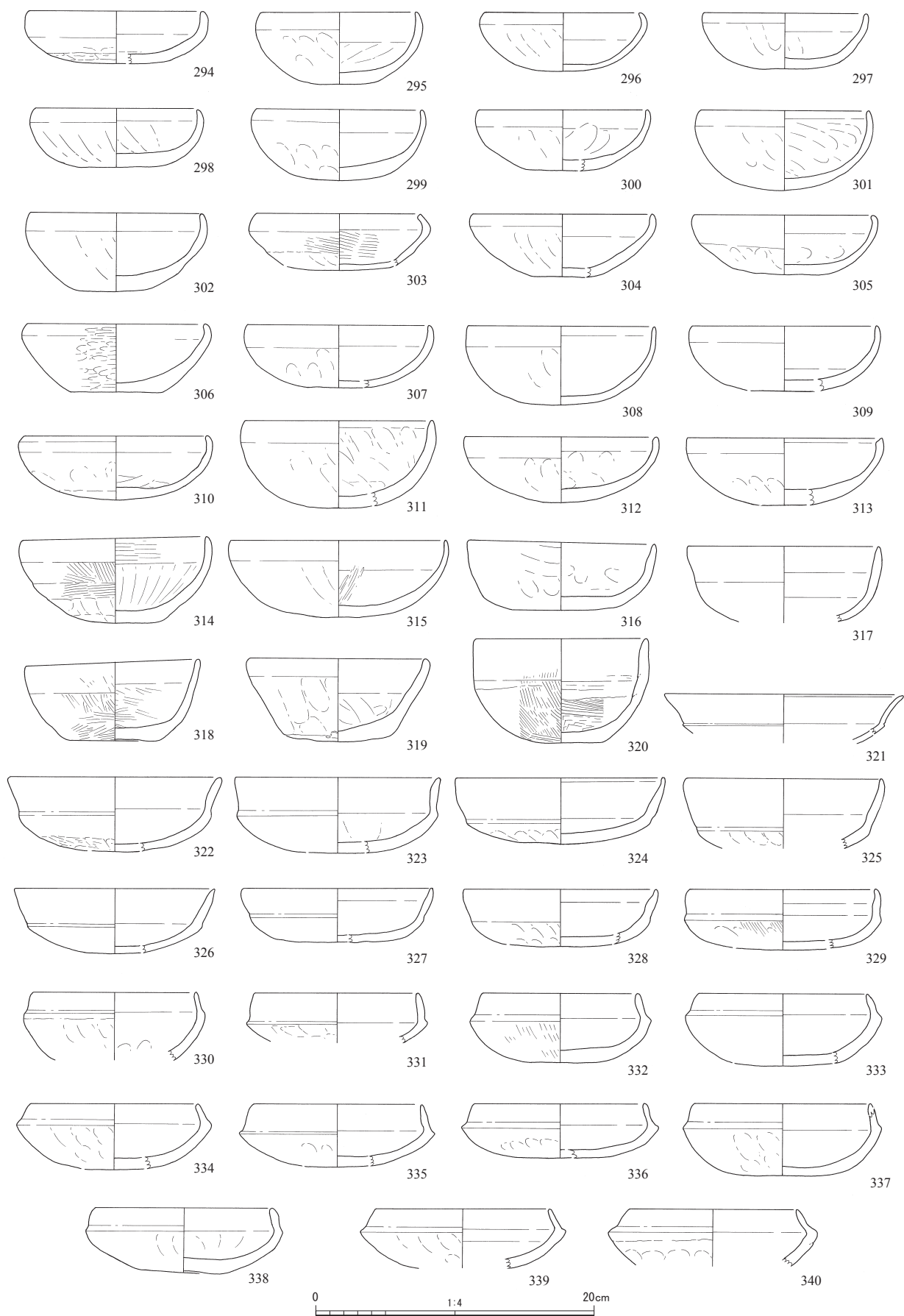


Fig.28 VII b 層出土遺物 (6)

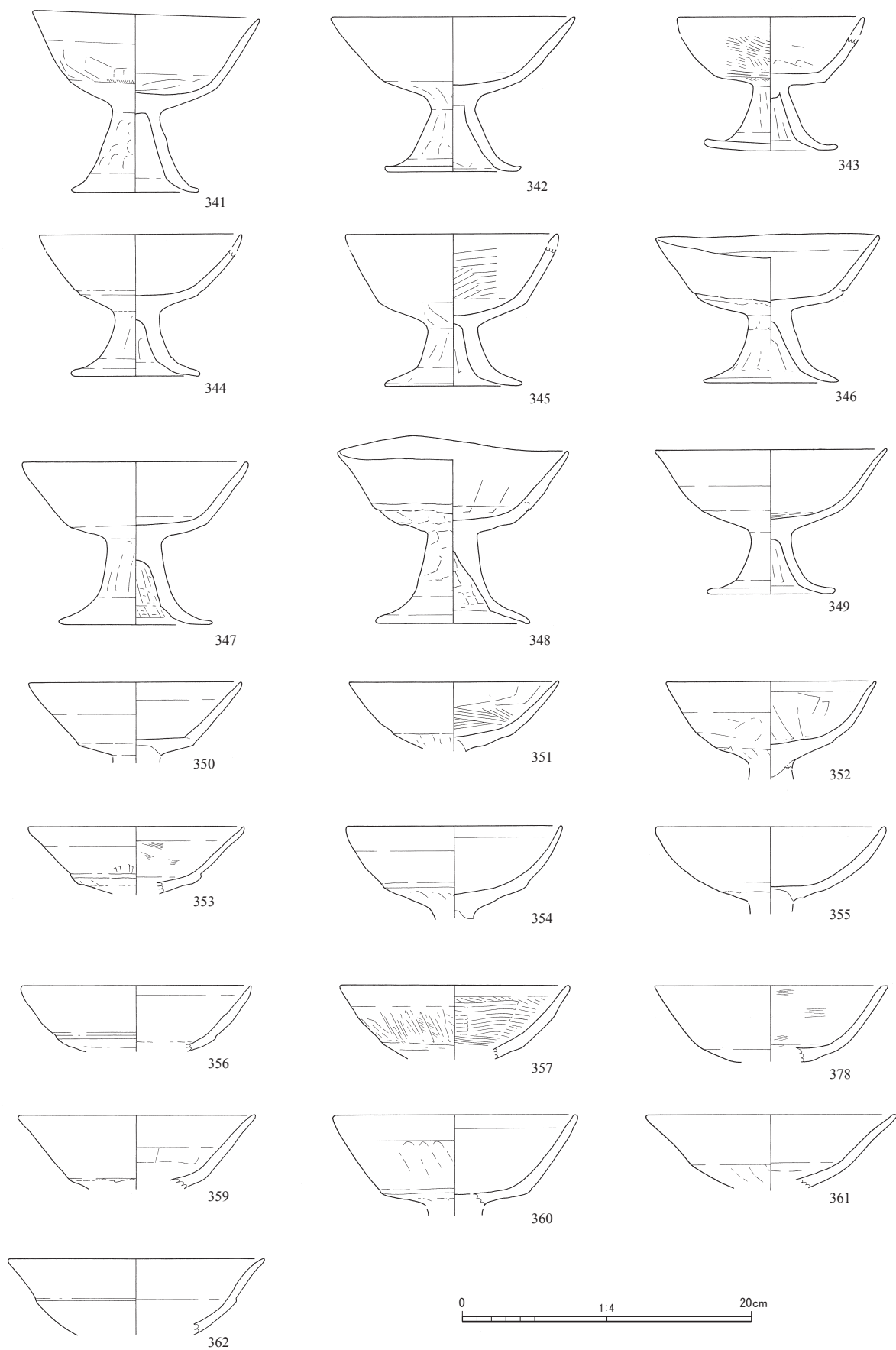


Fig.29 VII b 層出土遺物 (7)

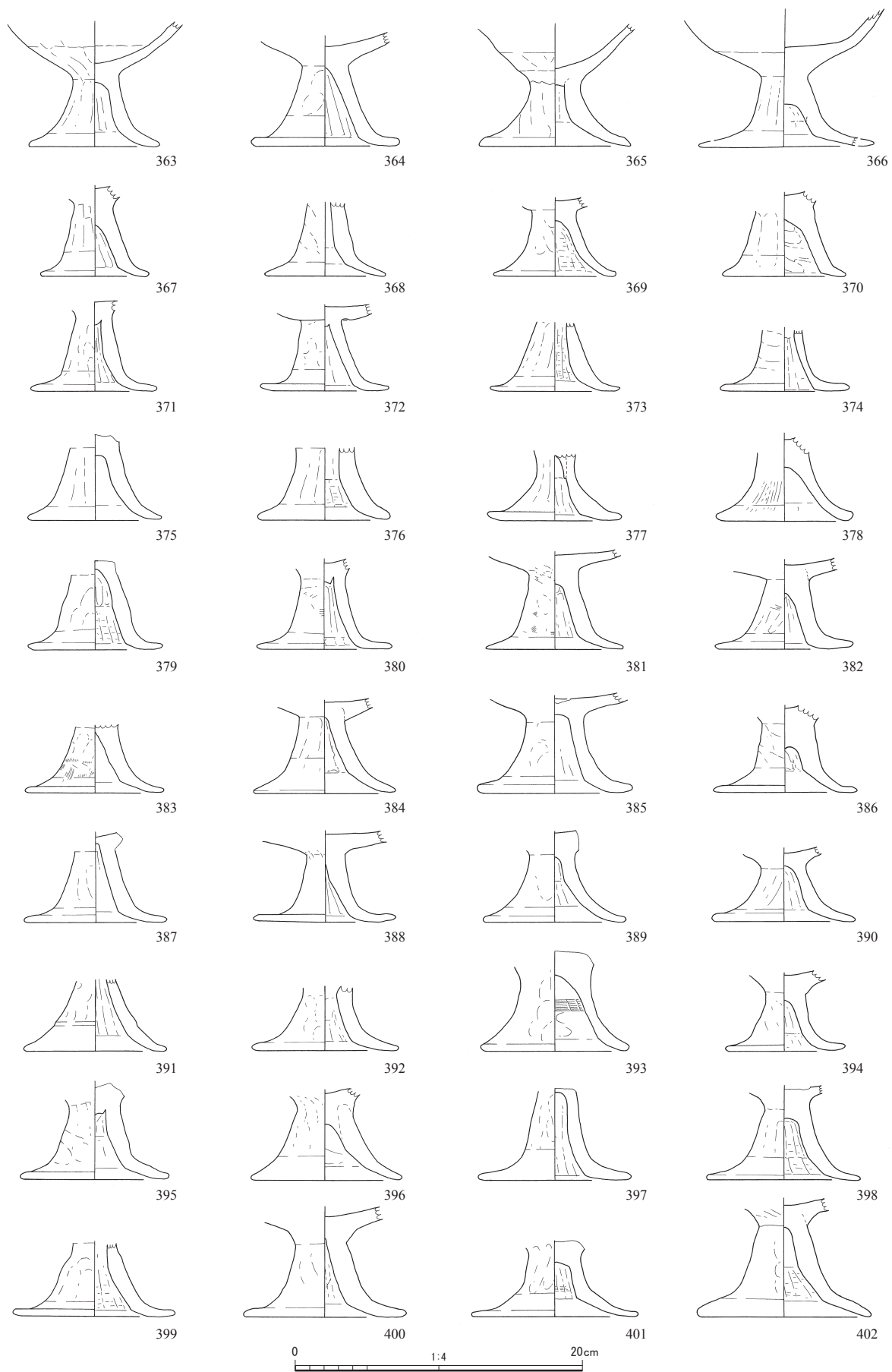


Fig.30 VII b層出土遺物 (8)

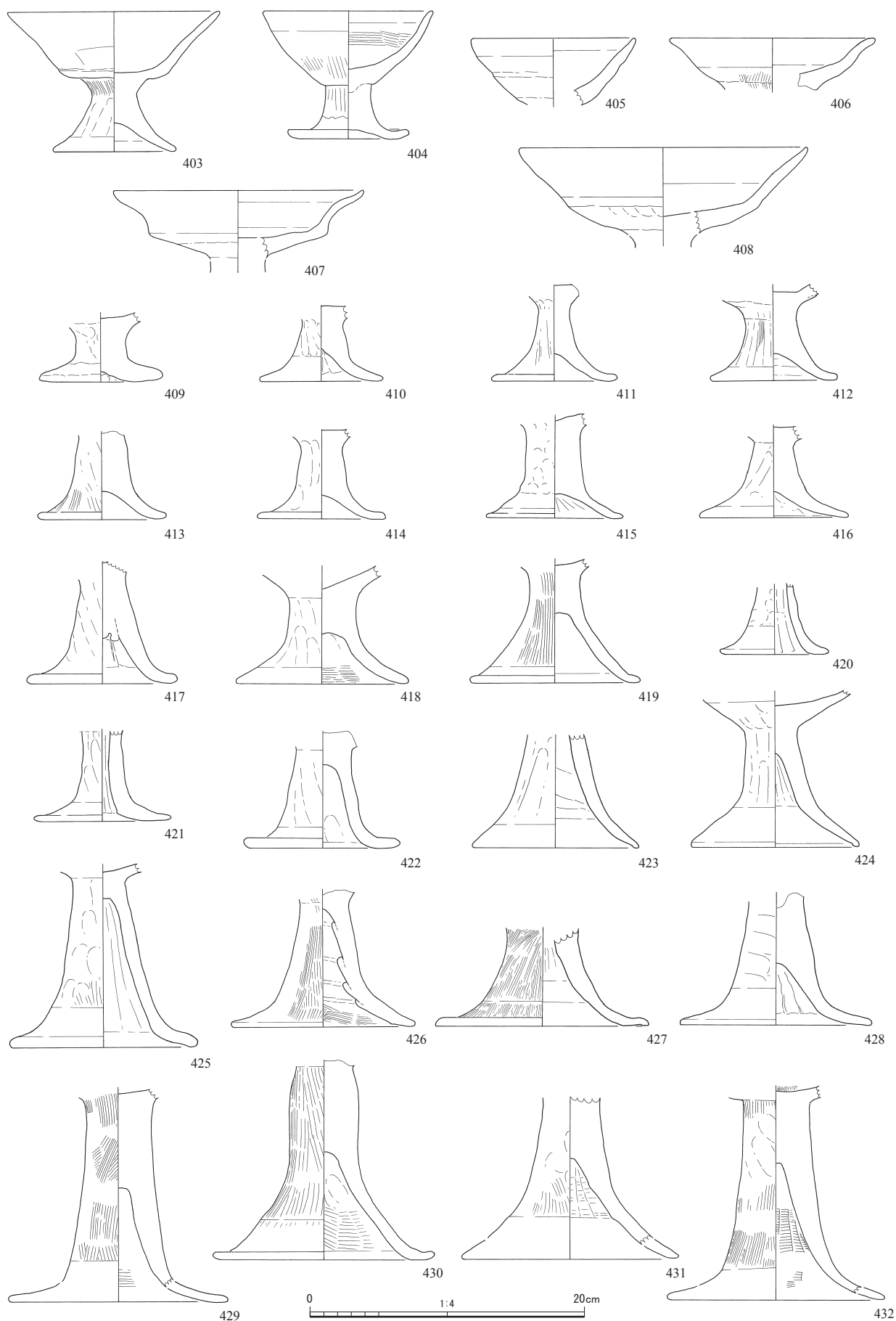


Fig.31 VII b層出土遺物 (9)

2 VIIb層の調査

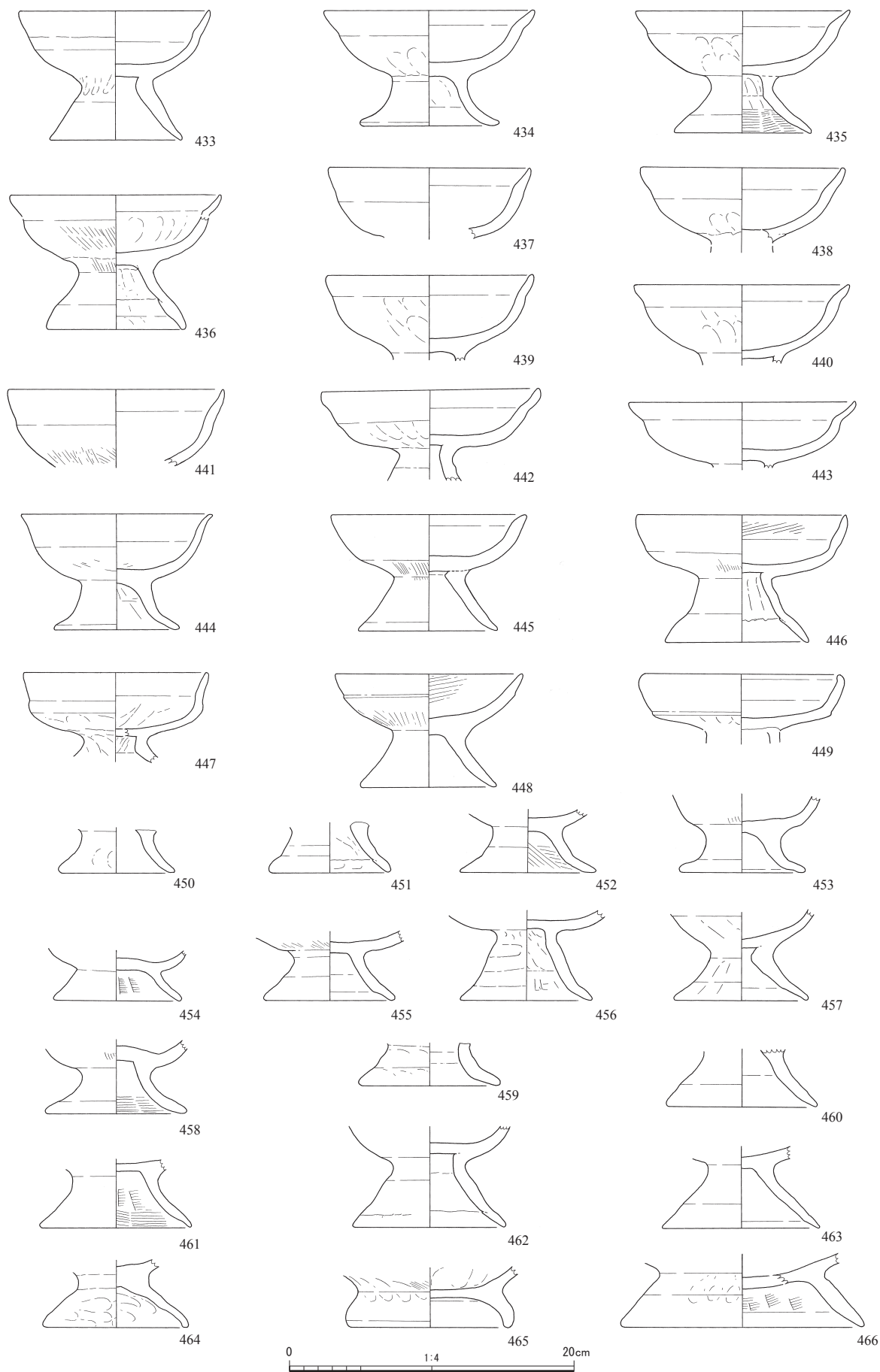


Fig.32 VII b層出土遺物 (10)

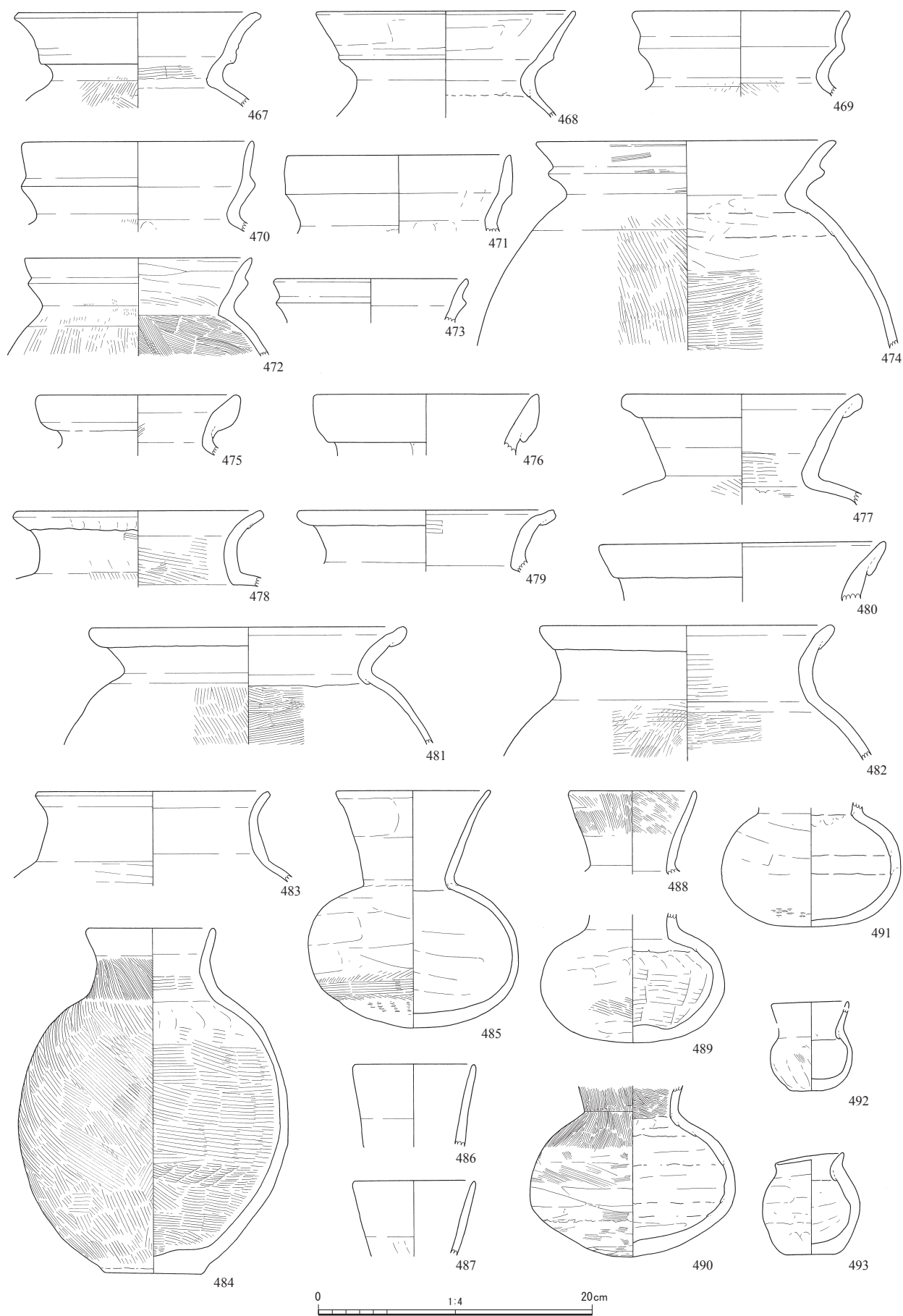


Fig.33 VII b層出土遺物 (11)

2 VIIb層の調査

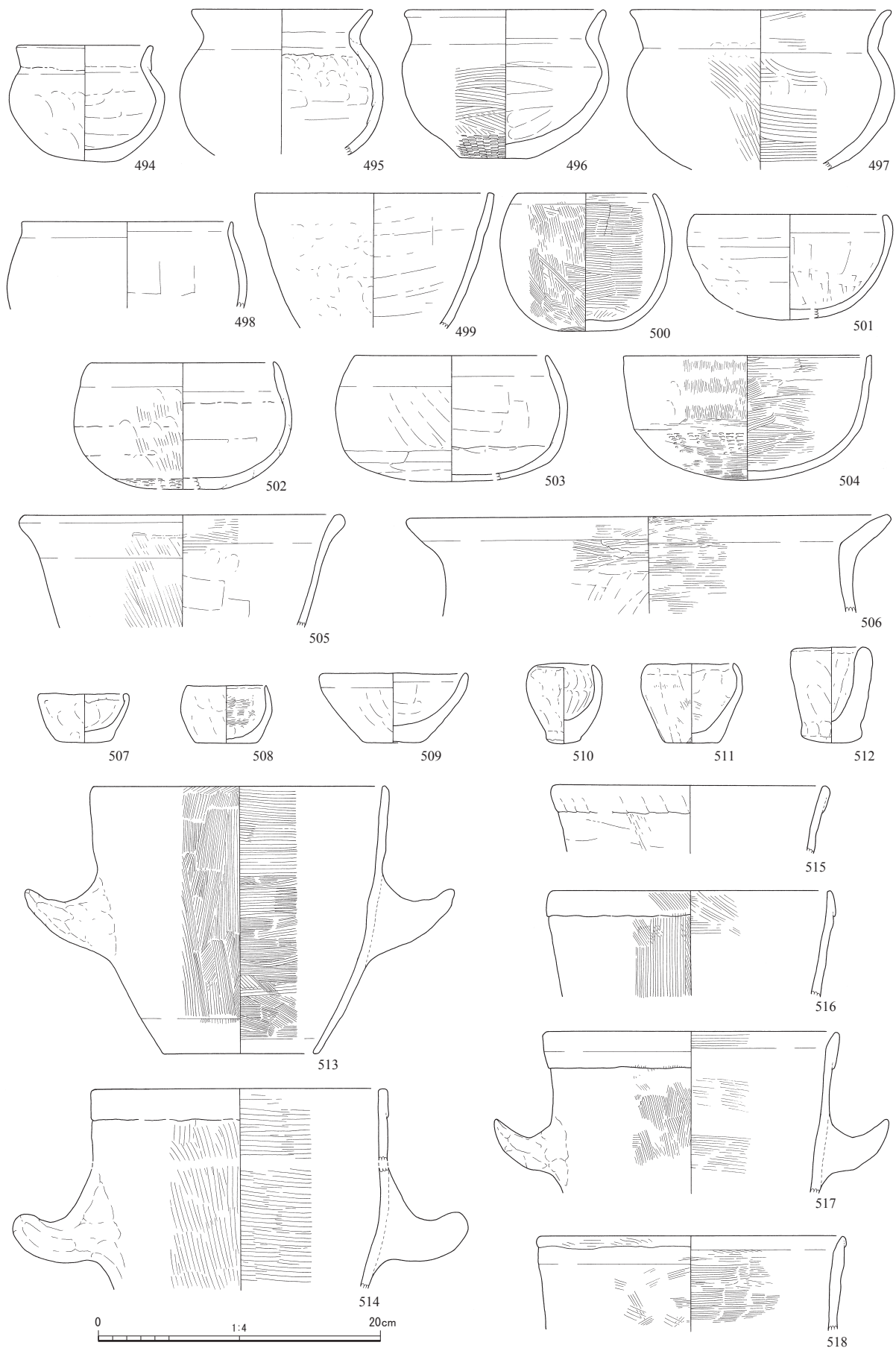


Fig.34 VII b層出土遺物 (12)

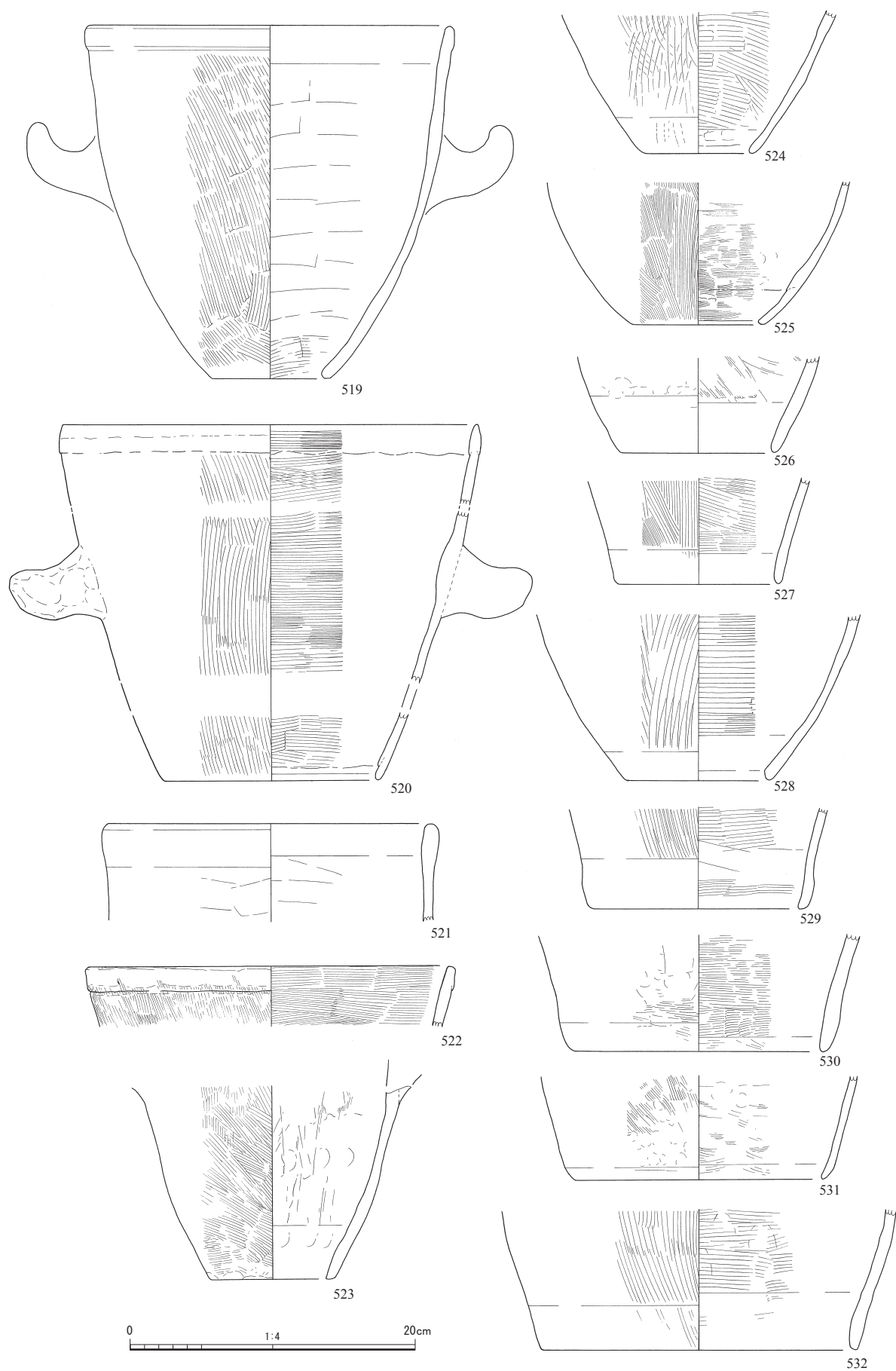
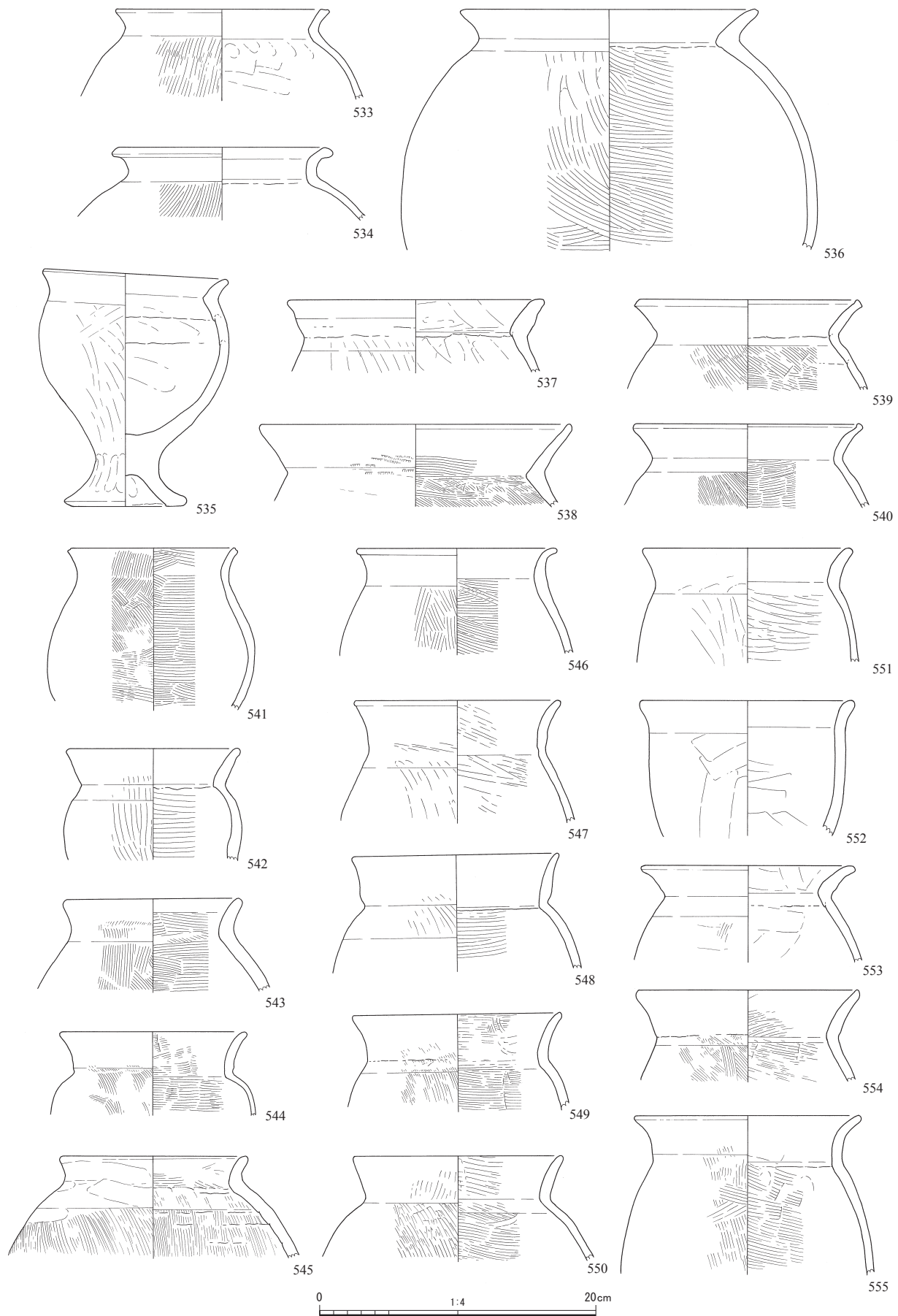


Fig.35 VII b層出土遺物 (13)



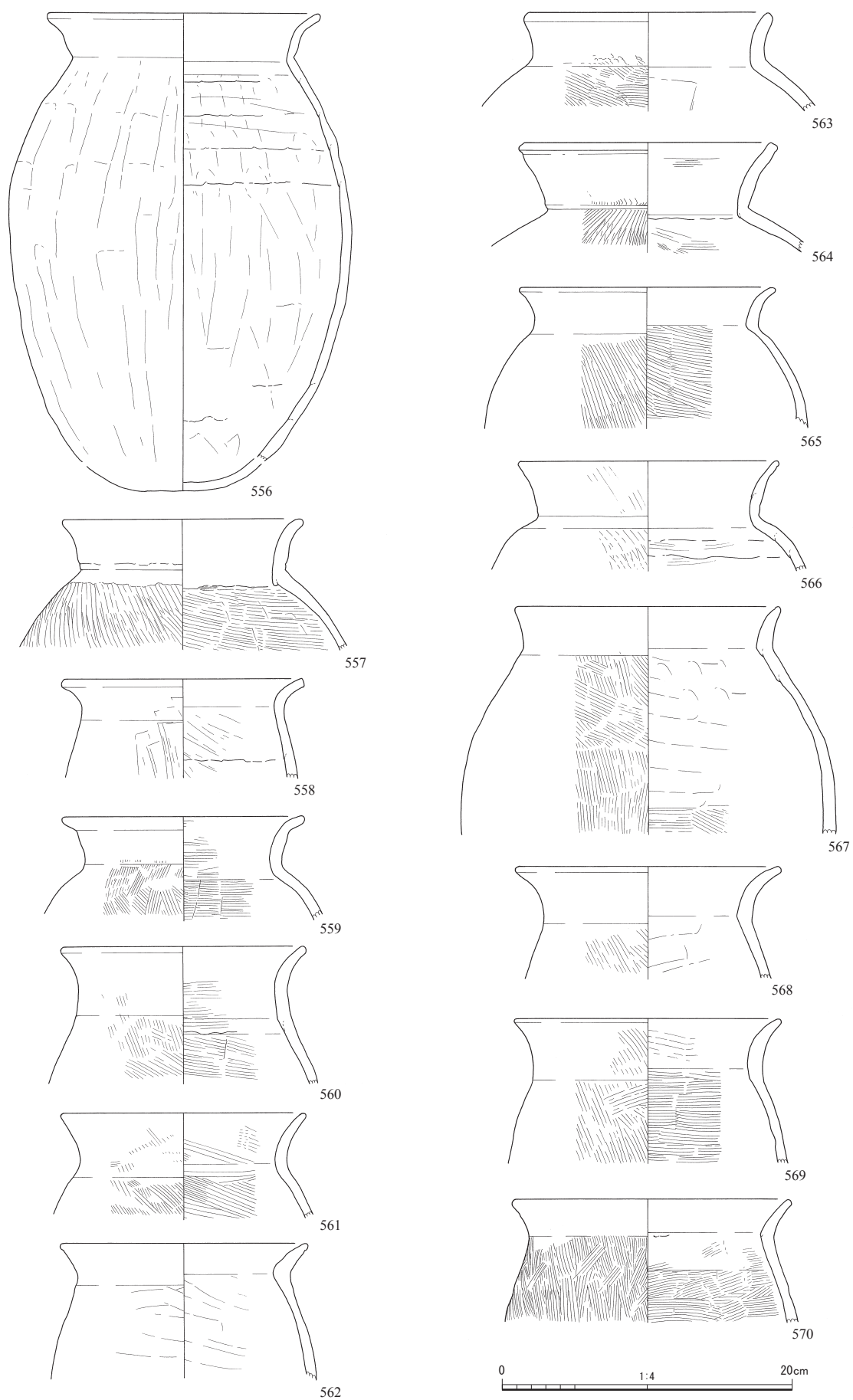


Fig.37 VII b層出土遺物 (15)

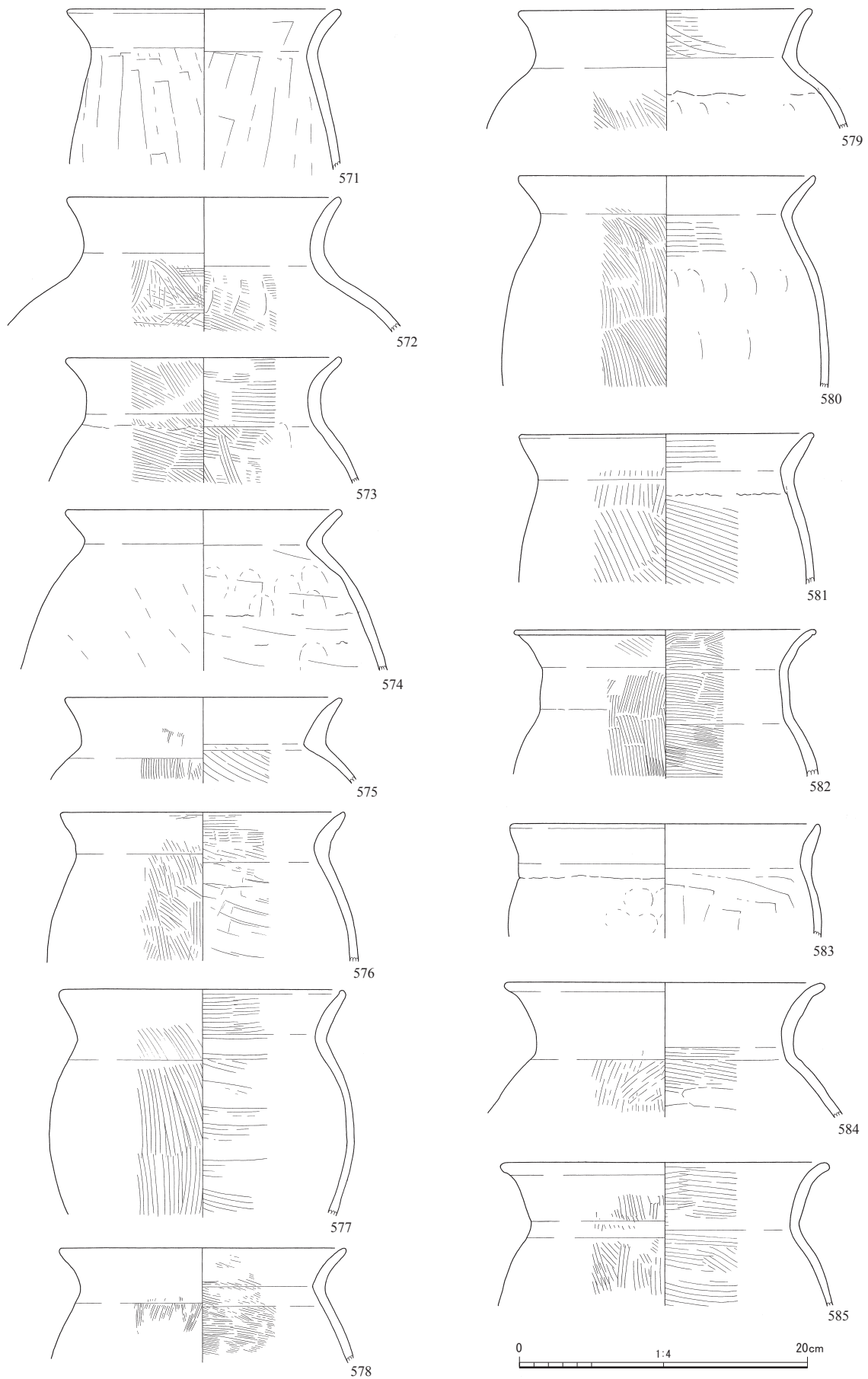


Fig.38 VII b層出土遺物 (16)

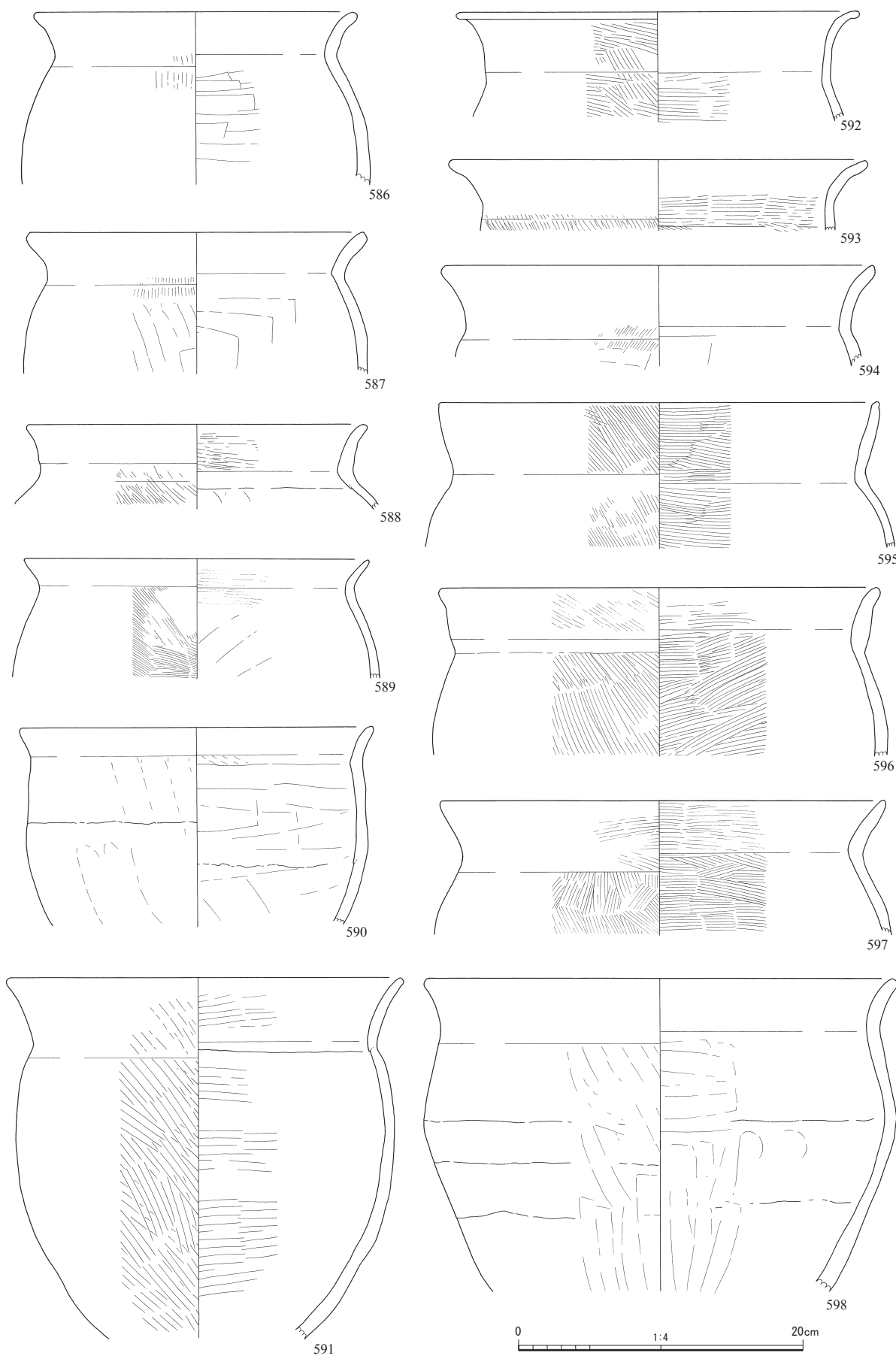


Fig.39 VII b層出土遺物 (17)

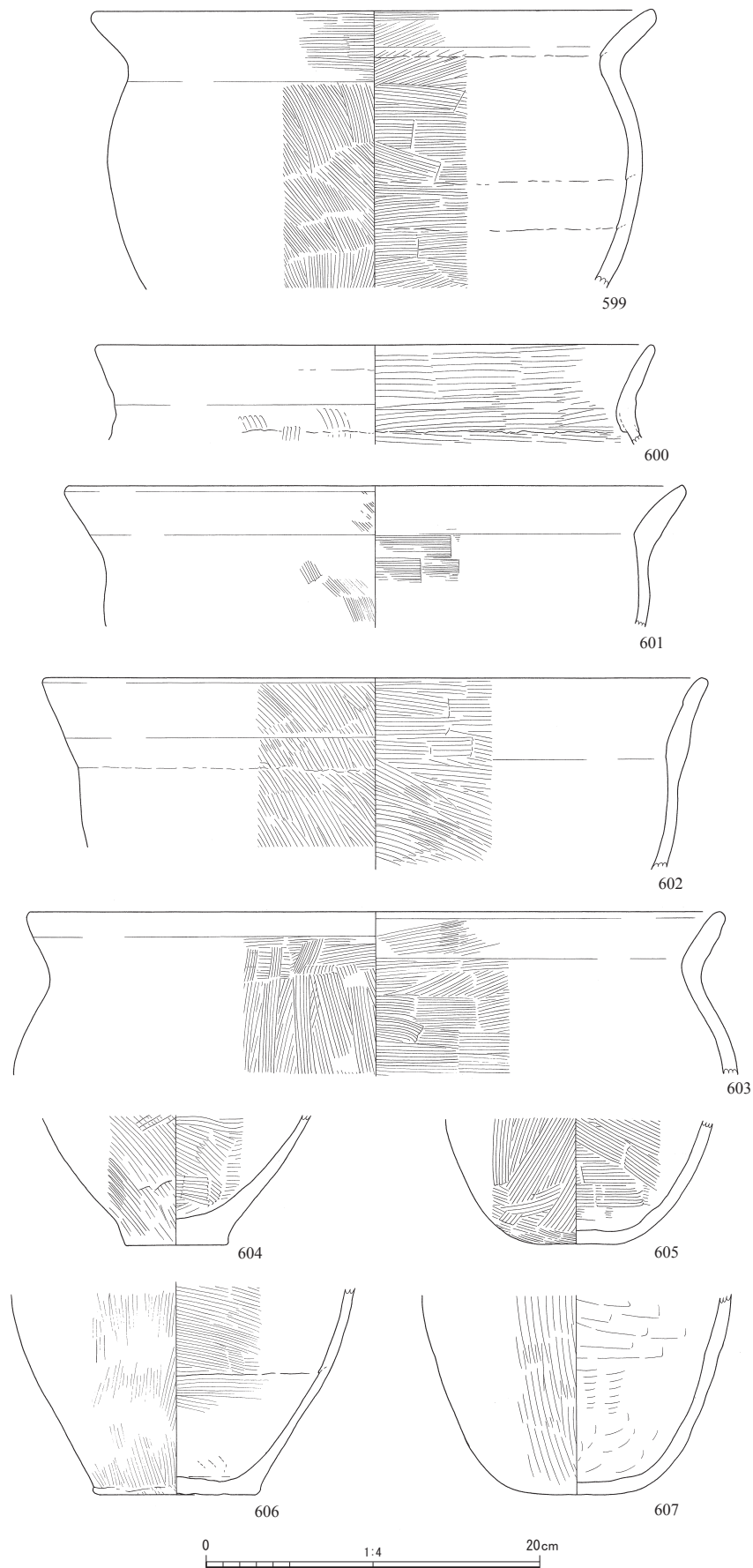


Fig.40 VII b層出土遺物 (18)

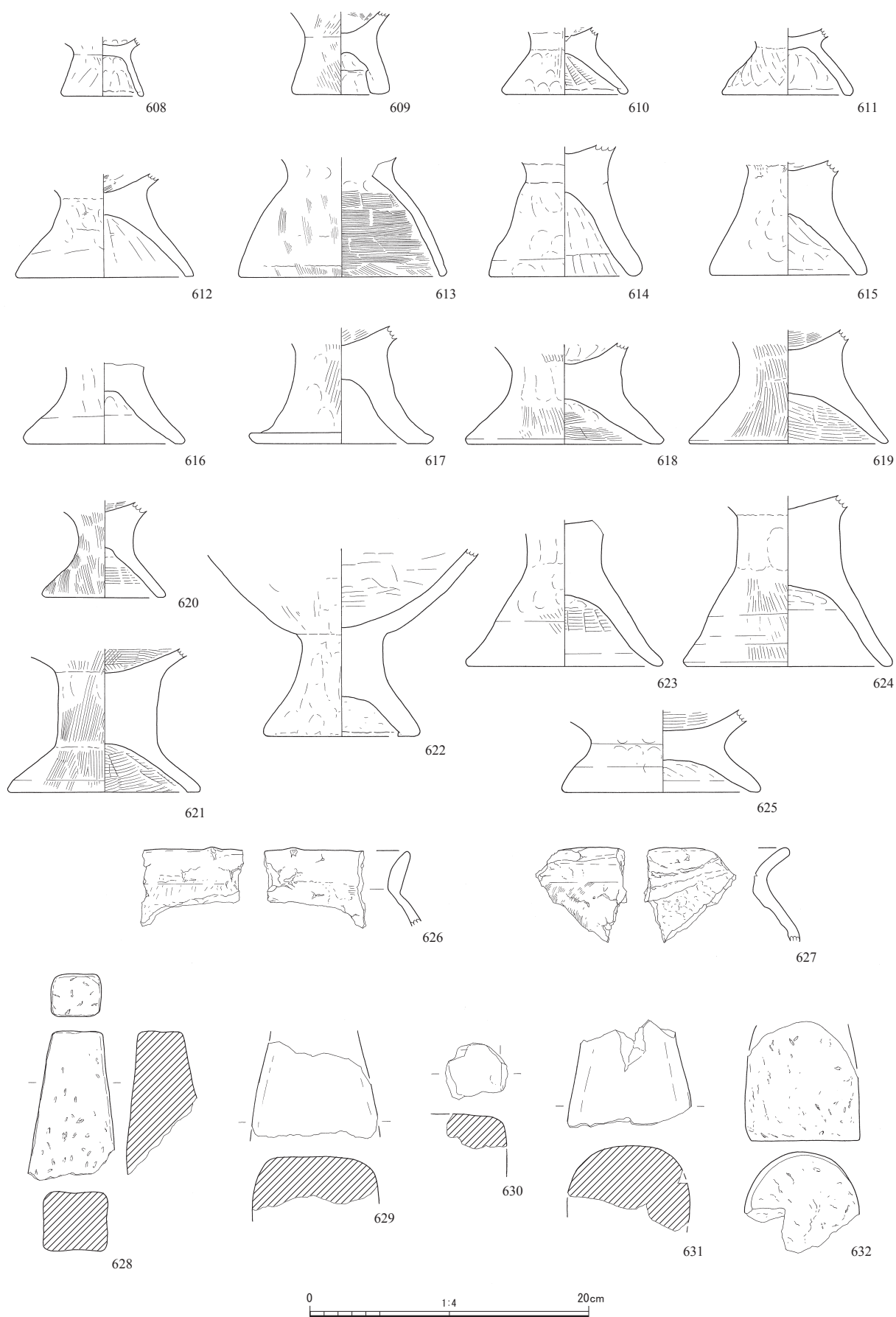


Fig.41 VII b層出土遺物 (19)

2 VIIb層の調査

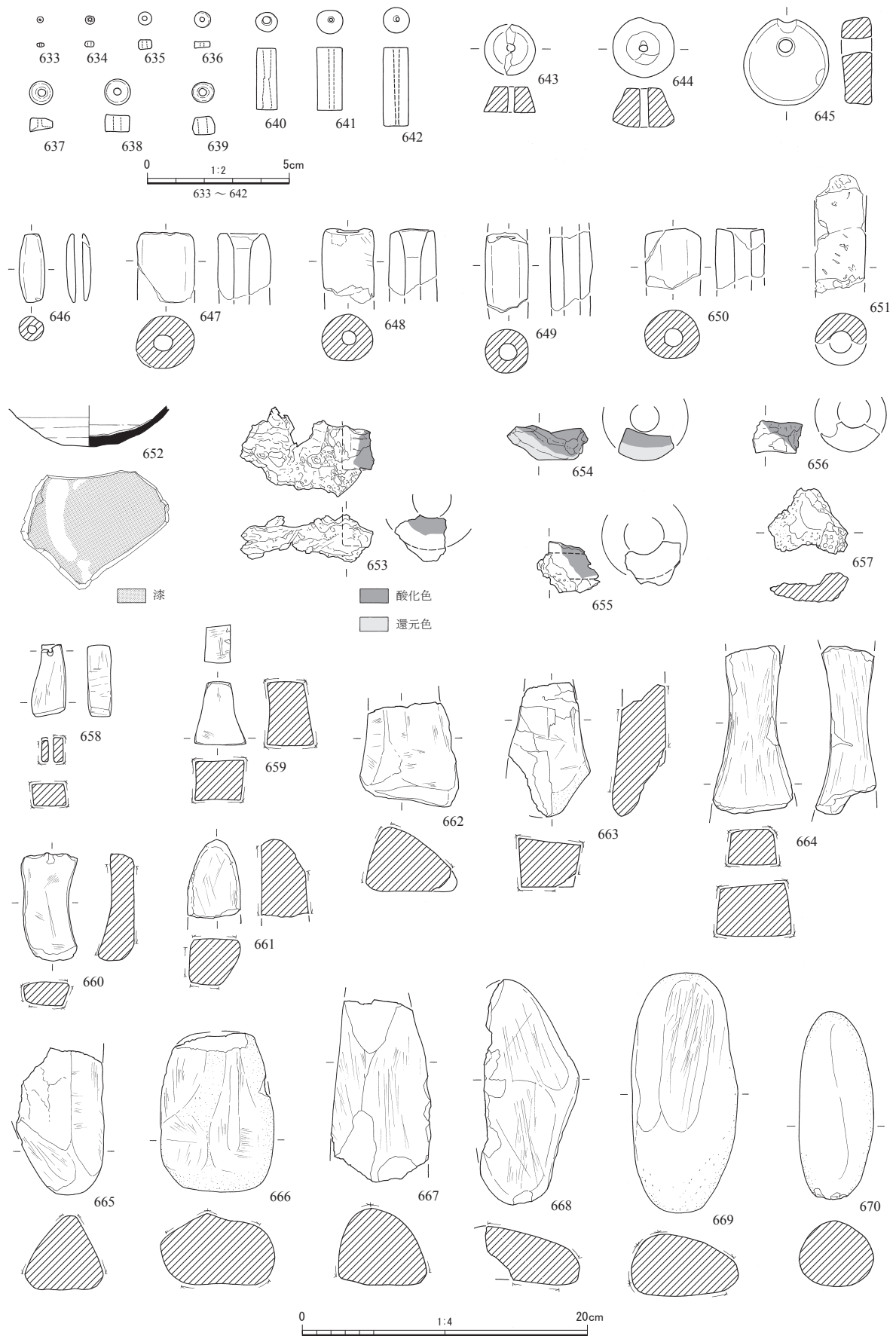


Fig.42 VII b層出土遺物 (20)

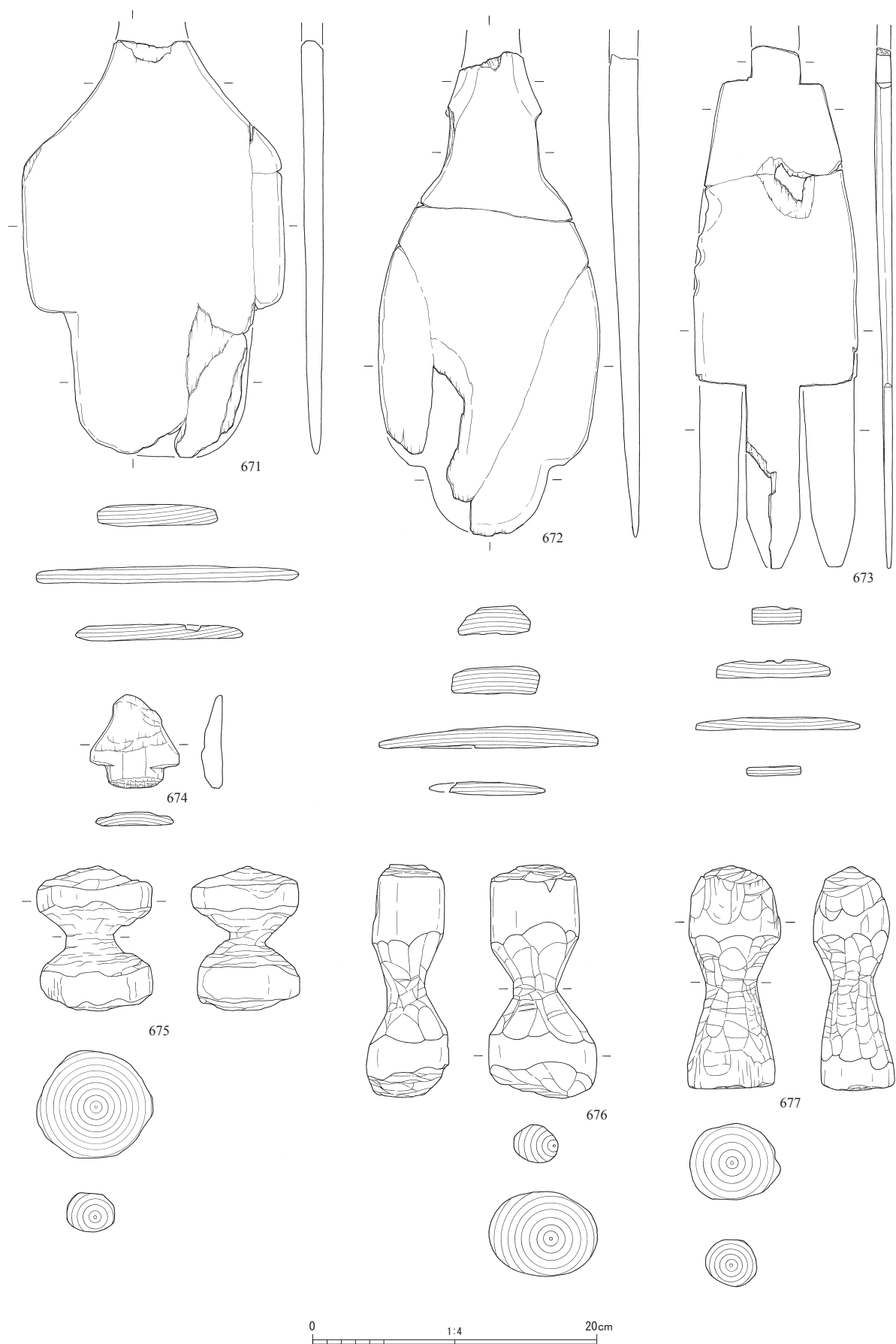


Fig.43 VII b層出土遺物 (21)

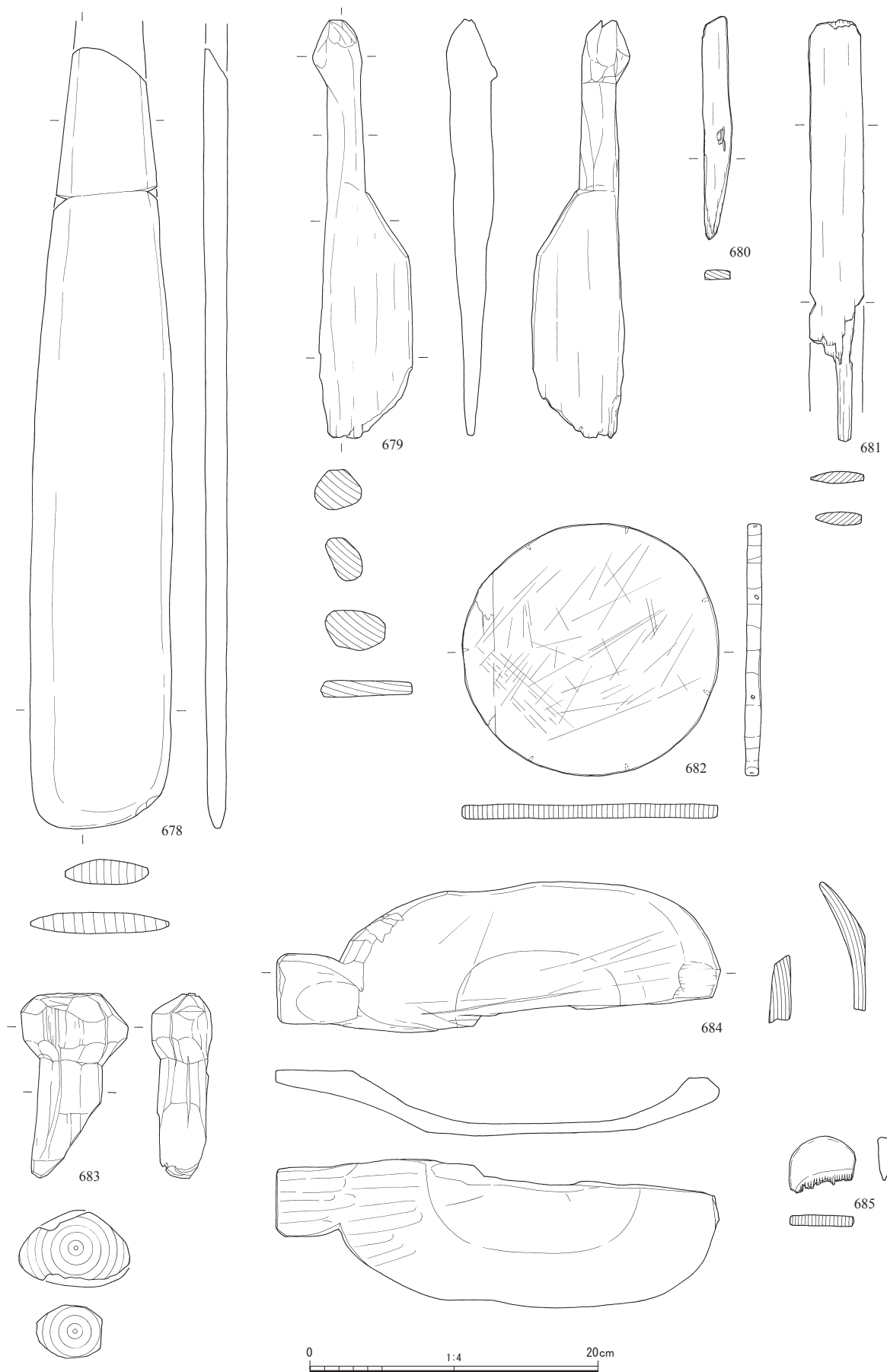


Fig.44 VII b層出土遺物 (22)

3 VII a 層の調査

(1) VII a 層の概要

VII a 層は、灰色粘土層と砂層が交互に堆積した地層で、飛鳥時代（7世紀）に堆積した。VII b 層の堆積後、再度、伊場大溝の流路が更新され、VII a 層の堆積が始まっている。調査区では北側に流路を移しており、伊場大溝の北側斜面から底面にかけての形状は、飛鳥時代になって新たに掘り込まれたものである。この段階の流路変更は大規模なものではなく、僅かな移動である。

出土遺物は、大量の土器のほかに、耳環や円形銅板などの金属製品や、木製品が含まれる。木製品には斎串や馬形などの祭祀具が含まれ、伊場遺跡群における初期官衙の形成を物語っている。

(2) 伊場大溝の形状

VII a 層が堆積した伊場大溝の本来の形状がうかがえる部分は、北側斜面の -1.0m 以下の部分から川底を挟んで南側斜面の 0.0m 以下の部分である。底面の標高は -1.8m ~ -2.0m で若干の起伏がある。VII a 層中の砂層は水平堆積ではなく、南側斜面に貼り付くように北に向かって下がる傾斜をもって堆積している。伊場大溝の最深部は北側斜面に偏っており、斜面の傾斜も北側が急で南側は比較的緩やかである。北側が攻撃斜面にあたり流れが激しく、これに対して南側の流れは比較的穏やかであったとみられよう。

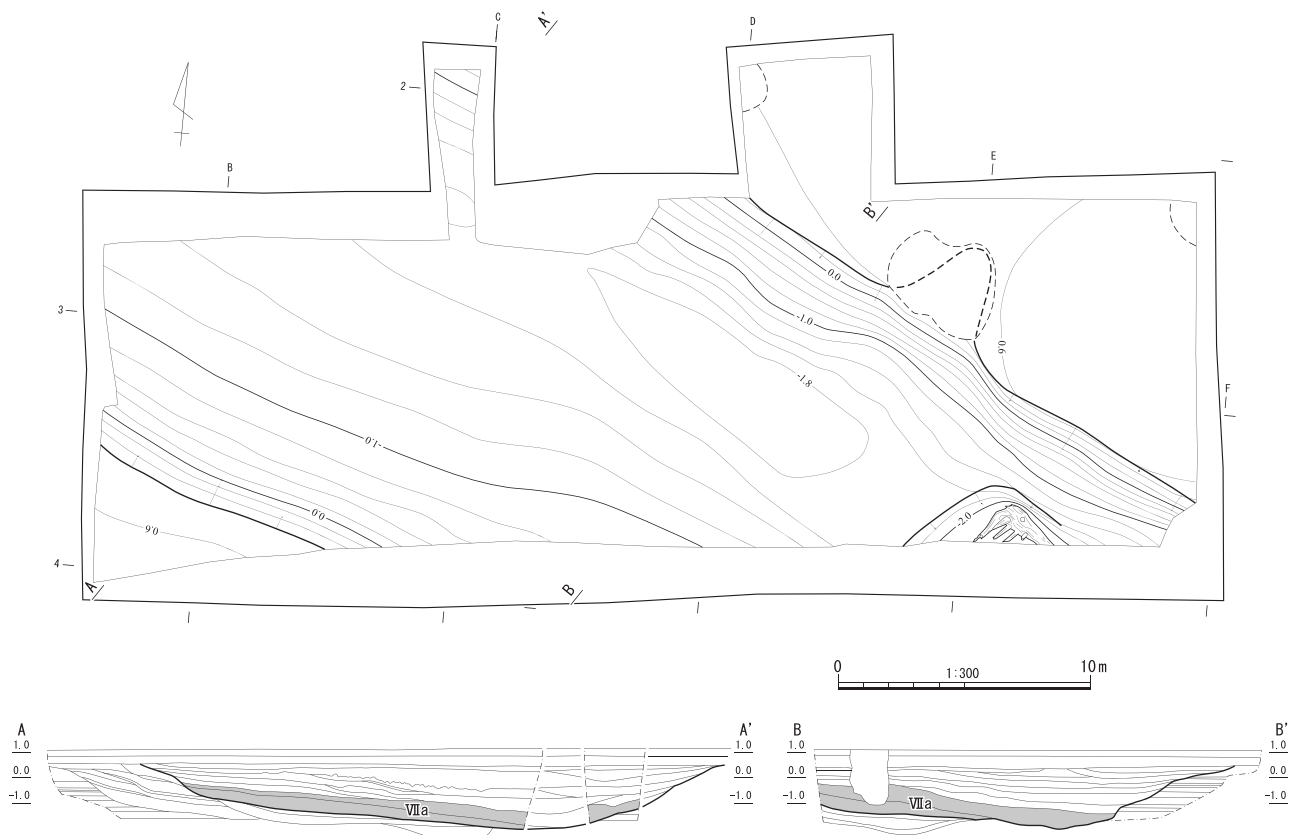
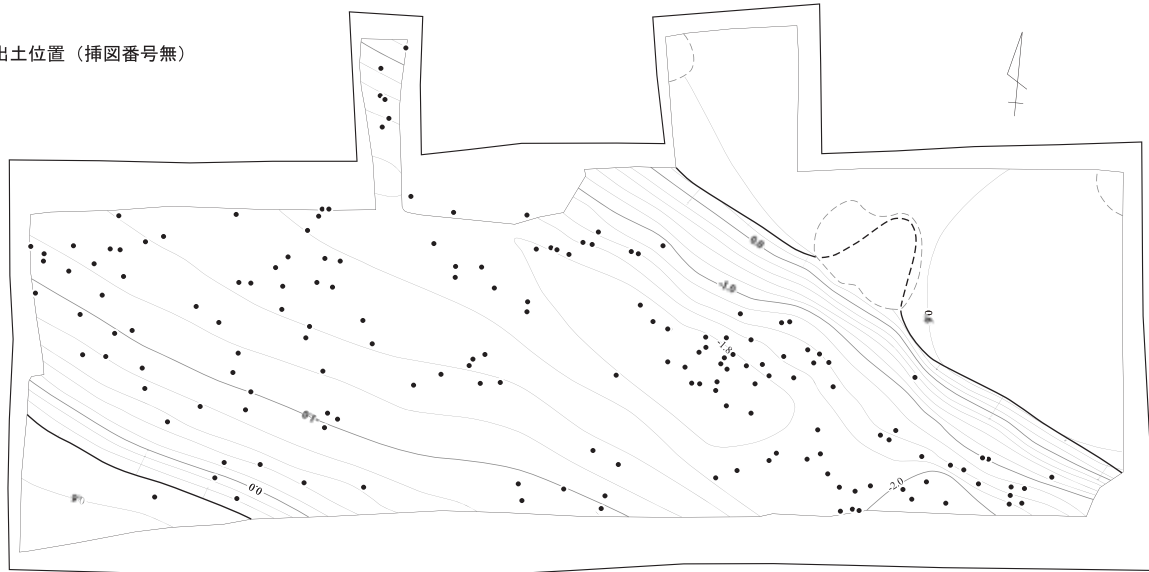


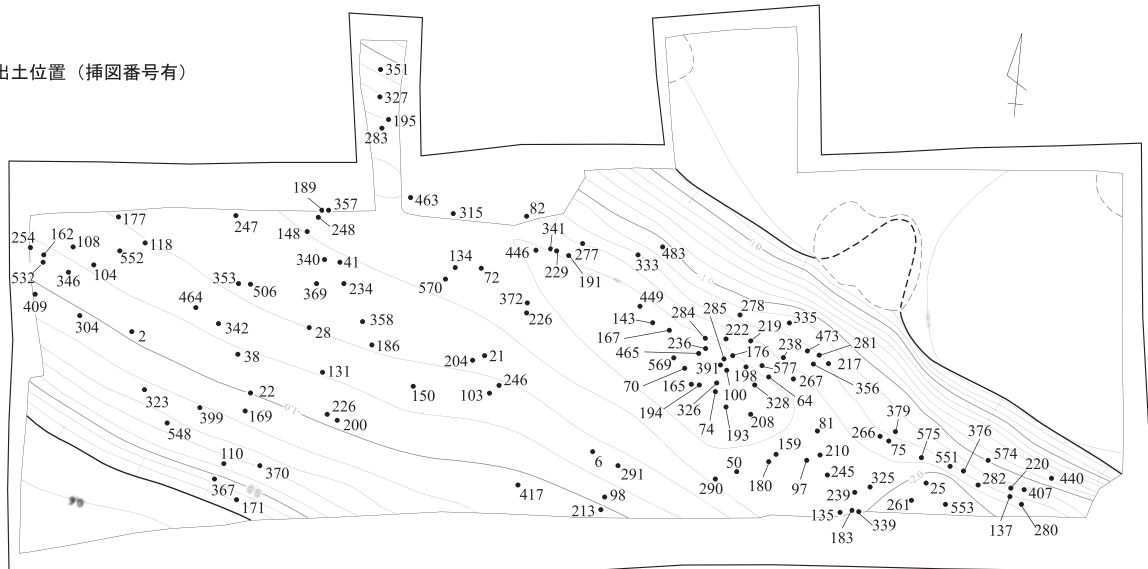
Fig.45 伊場大溝 VII a 層

3 VIIa層の調査

遺物出土位置（挿図番号無）



土器出土位置（挿図番号有）



石製品・木器等出土位置（挿図番号有）

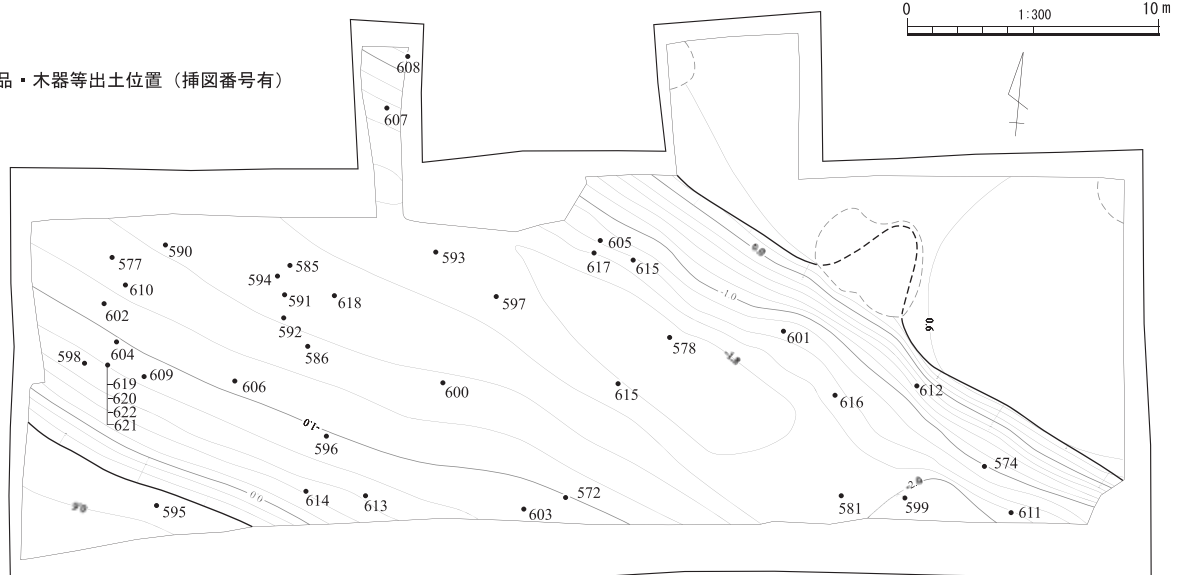


Fig.46 VII a 層における遺物出土位置

調査区の南東端において、枝を残す大きな流木が底面に埋没している。流木の周りの水流が激しかったのか、この部分だけは非常に深くなっており、底面は標高－2.2m以下までに至っている。流木の出土位置が深く、かつ流木そのものが大きかったため撤去できず、正確な底面の標高は確認できていない。なお、この周りでは遺物は全く出土しなかった。

Ⅶa層の堆積は南北の両岸に跨るので、伊場大溝の規模が想定できる。Ⅶaの堆積が認められる部分の幅は16m、復元的に両岸を結んだ幅は20～22mであったとみられる。地表から底面までの深さは2.5mである。

(3) 遺物の出土状態

出土位置の傾向 Ⅶa層から出土する遺物は、比較的分布が散漫である。下層のⅦb層のように、折り重なるように一箇所に集中して遺物が出土することもなく、出土遺物のまとまりを認識することができなかった。調査区の北東側で土器が底面に集中する傾向が若干みられるが、調査区の西側においては底面から南の岸に近い位置まで満遍なく遺物が出土している。

土 器 上述のとおり、Ⅶa層から出土する土器の分布状況は比較的散漫で、斜面部分や底面部分から分散して出土している。北東側底面において若干多く出土する傾向がみられるが、とくに目立って集中するような状態にはない。土器の多くは岸の上から投棄されたものとみられるが、伊場大溝の南側、北側に偏った傾向も認められない。

その他の遺物 Ⅶa層から出土する土器以外の出土遺物には、耳環や銅製有孔円盤などの金属製品、土製品、韃羽口、砥石、木製品などがある。これら土器以外の出土遺物についても、土器と同様、伊場大溝内から分散して出土している。

(4) Ⅶa層出土遺物

概 要 Fig.47～69にⅦa層から出土した遺物を示す。Ⅶa層から出土した遺物のうち、図示したものは622点である。出土遺物量ではⅦb層の状況と近い。以下、須恵器（1～394）、土師器（395～568）、漆附着土器（569・570）、金属器（571～573）、土製品（574～576）、韃羽口（577～578）、砥石（579～591）、木製品（592～622）の項目に分けて紹介する。

須恵器（Fig.47～57） 1～394はⅦa層から出土した須恵器である。坏蓋・坏身（1～287）の比率が多いが、高盤（288～290）、高坏（291～319）、広口壺（320～327）、壺蓋（328）、長頸壺（329～338）、鉢（339～353、360～376）、短頸壺（354～359）、甗（377～379）、フラスコ形瓶（380・381）、横瓶（382）、甕（383・384、387～394）などの器種が認められる。

帰属時期が明瞭な坏蓋・坏身（1～394）に注目すると、古墳時代的ないわゆる「坏H」（1～209）が主体を占め、返り蓋を伴う「坏G」もしくはその系統に連なる台形の無台坏身（210～229）、碗形の無台坏身（無台碗、230～275）、返りをもたない摘蓋と有台坏身（276～287）の各種がみられる。坏Hは、Ⅶb層出土品で主体を占めた遠江Ⅲ期後葉（TK43型式併行）の製品を含みながら、遠江Ⅳ期後葉に位置づけられる口径が9cm台のものまでみられる。時期的に途切れることなく連綿と続いていることが坏の多様性からうかがえる。返り蓋を伴う「坏G」としたものの中

には、壺の蓋を含んでいる可能性がある。ただし、いずれも直径が10～11cm台で、大型化したものは知られない。遠江Ⅳ期後葉に中心があるとみられる。碗形の無台坏身としたものには、遠江Ⅳ期後葉の坏Hの蓋が含まれる可能性がある。また、直径が11cmを超える250～275については、遠江Ⅳ期末葉に降るとみられよう。とくに、270～275は蓋を伴わない無台碗として奈良時代に連続する系統とみられる。摘蓋と有台坏身の組み合わせは、遠江Ⅳ期末葉に出現する形態で、その初源的形態をなしている。

以上、坏蓋・坏身の様相からうかがえるⅦa層の堆積年代は、遠江Ⅲ期後葉（TK209型式期）を境界にして、遠江Ⅲ期末葉から遠江Ⅳ期末葉の飛鳥時代（7世紀）全般にわたることが明らかである。遠江Ⅲ期中葉（TK43型式期）以前の製品は、Ⅶb層からの混入品と解釈できるだろう。

土師器（Fig.58～65） 395～568はⅦa層から出土した土師器である。Fig.58に示した坏（395～405）や高坏（406～424）、壺（425・426）などは古墳時代後期以前の形態的特長を示しており、多くはⅦb層からの混入品と捉えられる。Ⅶa層が堆積した飛鳥時代の土師器坏類は、Fig.60に示すものである。大型の外反口縁壺（429～436）や箱形や碗形を呈する鉢（437～458）、く字鉢（459～462）などが遠江Ⅲ期末葉から遠江Ⅳ期後葉の代表的な土師器の組成といえるだろう。土製品の形態の壺形（463・464）や、甗形（465・466）、および革袋形土製品（467）なども遠江Ⅳ期の中で出現していることが分かる。

Fig.60には暗文を施す坏（468～482）や高盤（483～485）をあげた。468・469は畿内産土師器で、飛鳥Ⅳ期（680年～690年代）に相当する。473～485は在来産の土師器で、いずれも精緻な胎土を用い、赤彩が施されているものが多い。これら暗文土師器の時期は遠江Ⅳ期末葉に中心がある。

486～557は、甗である。487・488の口縁端部は摘みあげた独特の形態をもつ。伊勢から尾張に特徴的な技法で、搬入品の可能性がある。489は胎土に白色粒子を多く含み、駿河産の特徴を示している。545～550といった大型の口縁は台付甗になるとみられる。脚台部には肉厚のもの（552・553）と薄いもの（554～557）が認められる。

558～565は甗である。いずれも口縁端部の折返しの痕跡は残さず、Ⅶb層出土品と比べて新しい様相をみせている。566～568は把手である。567には穿孔がみられる。

漆付着土器（Fig.65） 569・570は漆が付着した須恵器である。569は高坏の坏部の破片、570は坏身が用いられている。漆が付着した須恵器はⅦb層にも認められるので、古墳時代後期後半から鳥居松遺跡で漆を使った製品が生産されていた可能性がある。その下限の時期は、570が示す遠江Ⅳ期後葉頃とみられる。

金属器（Fig.65） 571・572は耳環である。ともに幅3.2cmほどの大きさである。571は表面の金属板が剥がれ銅芯のみが遺存する。572には金銅板が残っている。

573は銅製の有孔円盤である。変形が著しいが、本来は直径6cmほどの円形をなし、中央にやや膨らみがある形態とみられる。4方向に2個一組の穿孔があり、中央に方形の孔がある。銅板の厚さは1mm以下である。詳しい用途は不明であるが、法隆寺や東大寺正倉院に伝わる円形飾金具が形態的に似ている。これらの円形飾金具は金銅製で、布幡に糸で取り付けたものである。本例には金銅の痕跡はみられないが、幡をはじめとした布に装着した飾金具である可能性が高いだろう。

土製品 (Fig.65) 574 は土製紡錘車、575・576 は土錘である。いずれもⅦb層から出土したものの中に類例が認められる。

韃羽口 (Fig.65) 577・578 は韃羽口である。いずれも小破片であることから、韃羽口がまとまって出土したⅦb層から混入した可能性が考えられる。

砥石 (Fig.66) 579～591 は砥石である。凝灰岩もしくは砂岩を用いている。583 はよく使い込まれているが、Ⅶb層出土品のように形態が整ったものはない。

木製品 (Fig.67～69) 592～622 は木製品である。Ⅶa層から出土した木製品には、木錘(592・593)、堅杵(594)、有孔棒(595～598) 斎串(606～608)、馬形(610・611)、横櫛(612)、琴柱(613)、曲物(615～622) などがあり、このほかにも不明品がある(599～605、614)。

592・593 は木錘である。いずれもⅦb層出土品と似た形態で、592 はヒノキ属、593 はトウヒ属を用いている。594 は小型の堅杵とみられるが両端を欠損している。木材はアカガシ亜属を用いている。595～598 は用途不明の有孔棒(595 は木柄の可能性はある)、599～605 も不明品である。

606～608 は斎串である。606 は上下とも遺存しており、ヒノキ属を用いている。607 は下端を欠損するもので、アスナロ属を用いる。610・611 は馬形である。610 は独立した頭部を表現したもので、蛇にも似る。611 はやや単純な形態であるが、頭部と尾の造り分けがみられる。木材はともにアスナロ属を用いている。

612 は横櫛である。炭化が顕著で樹種の同定はできなかった。613 は琴柱である。上端に糸をはめ込む沈線が入れている。木材はアスナロ属を用いている。614 はN字形をした用途不明品である。木材はマツ属を用い、表面は丁寧に加工されている。

615～622 は曲物である。曲物底板(615～618) はいずれも端面に段を掘り込んで側板をあてる構造である。616 と 617 はヒノキ属を用いている。619～622 は曲物側板であり、すべて同じ地点から出土した。

年代 須恵器の坏蓋・坏身の特徴から明確なように、Ⅶa層は遠江Ⅲ期末葉から遠江Ⅳ期末葉までの飛鳥時代(7世紀)全般にかけて堆積したものと捉えられる。Ⅶa層が堆積する最終段階(7世紀末)には、鳥居松遺跡にも評にかかわる施設が広がり、律令時代的な土器様式が出現している。

(5) 小 結

Ⅶa層の堆積は、遠江Ⅲ期後葉を境界として、遠江Ⅲ期末葉から遠江Ⅳ期末葉まで続いている。その堆積年代は、およそ飛鳥時代(7世紀)の100年間が相当するが、伊場大溝内の堆積状況や遺物の出土状況からは、飛鳥時代の中を分離することができなかった。ただし、出土遺物の傾向からは飛鳥時代における遺跡の変化を明確にあとづけることができる。7世紀の前半に属するとみられる遺物の様相は、一般的な土器の様相に加え、漆付着土器、耳環、土製紡錘車、土錘の存在など、Ⅶb層との共通性が高い。いっぽうで、飛鳥時代の末期にあたる段階(遠江Ⅳ期末葉頃)の出土遺物には、畿内産土師器や銅製有孔円盤、斎串、馬形など、次第に官衙的性格を強めていく様相が認められる。鳥居松遺跡においても7世紀代から官衙の一部が広がっていたと判明した意義は大きいといえるだろう。

3 VIIa層の調査

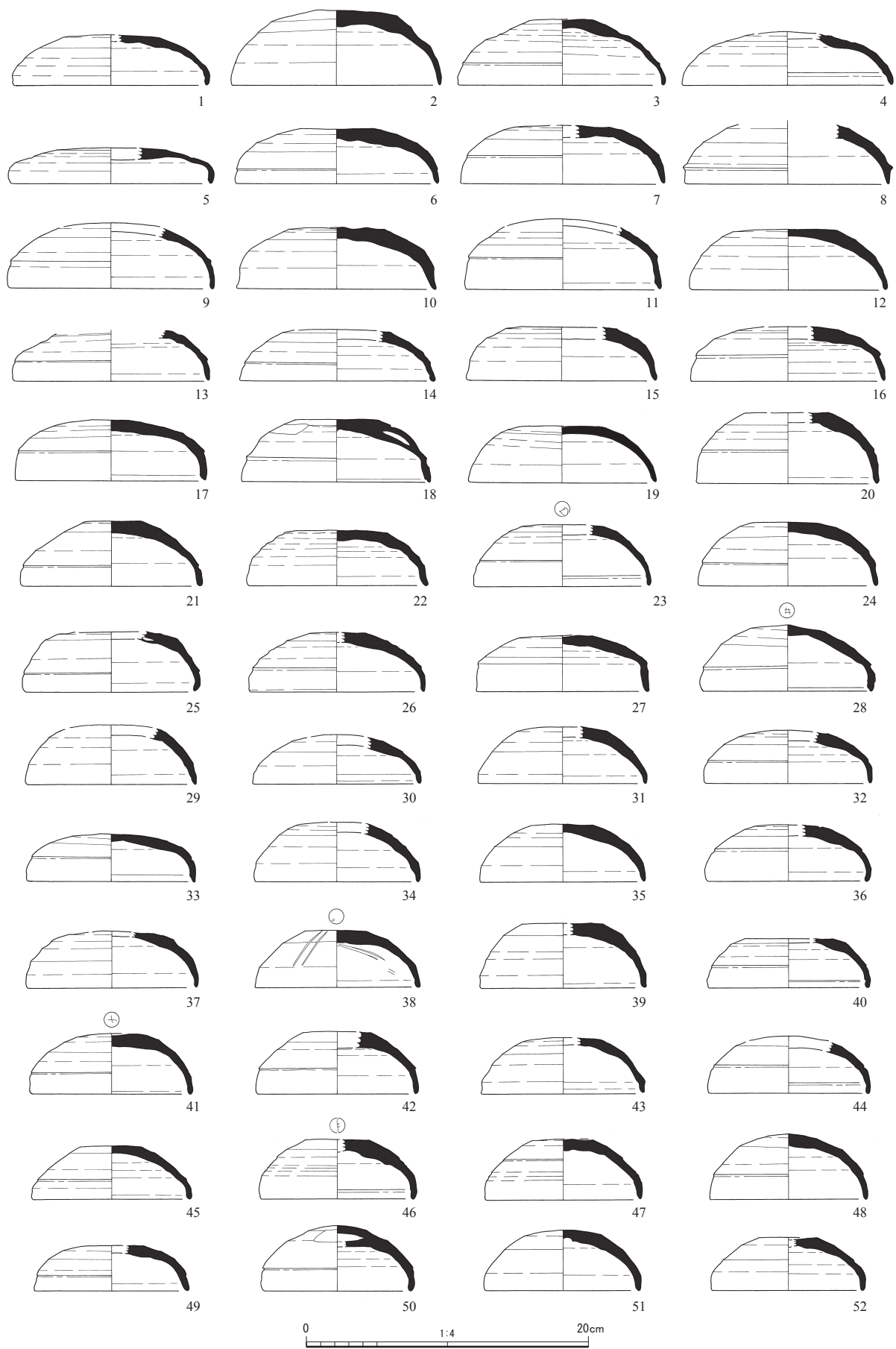


Fig.47 VII a層出土遺物 (1)

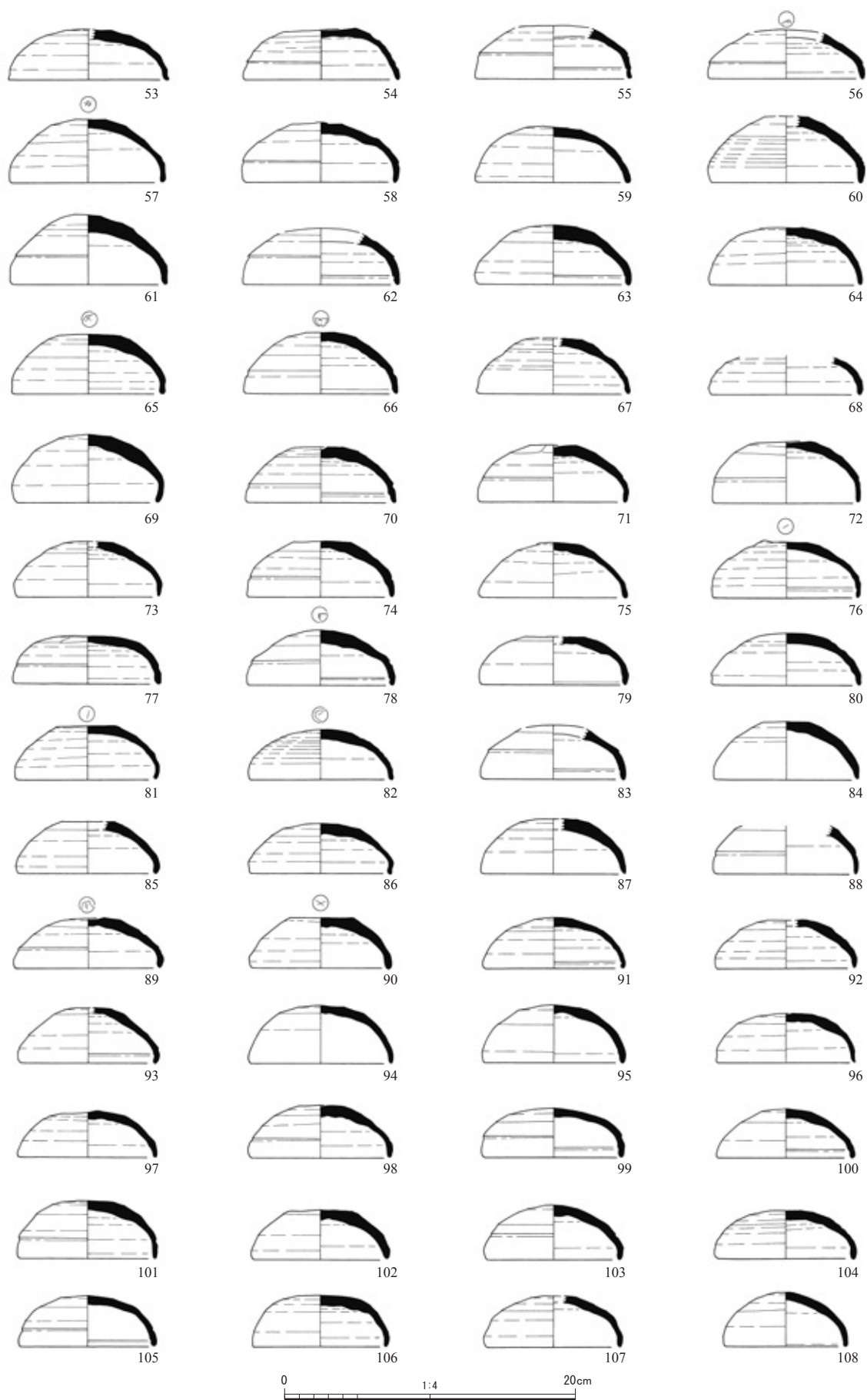


Fig.48 VII a層出土遺物 (2)

3 VIIa層の調査

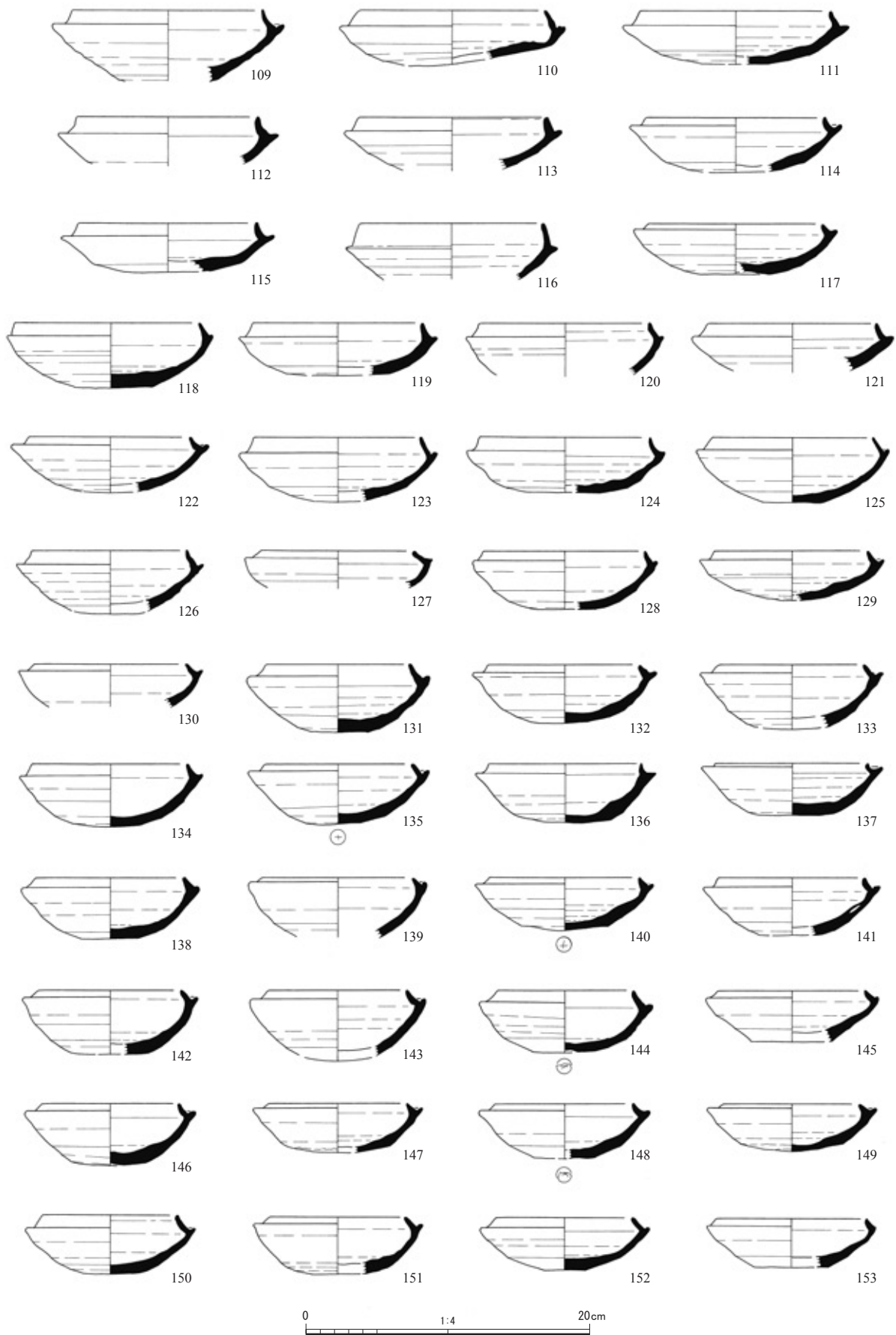


Fig.49 VII a 層出土遺物 (3)

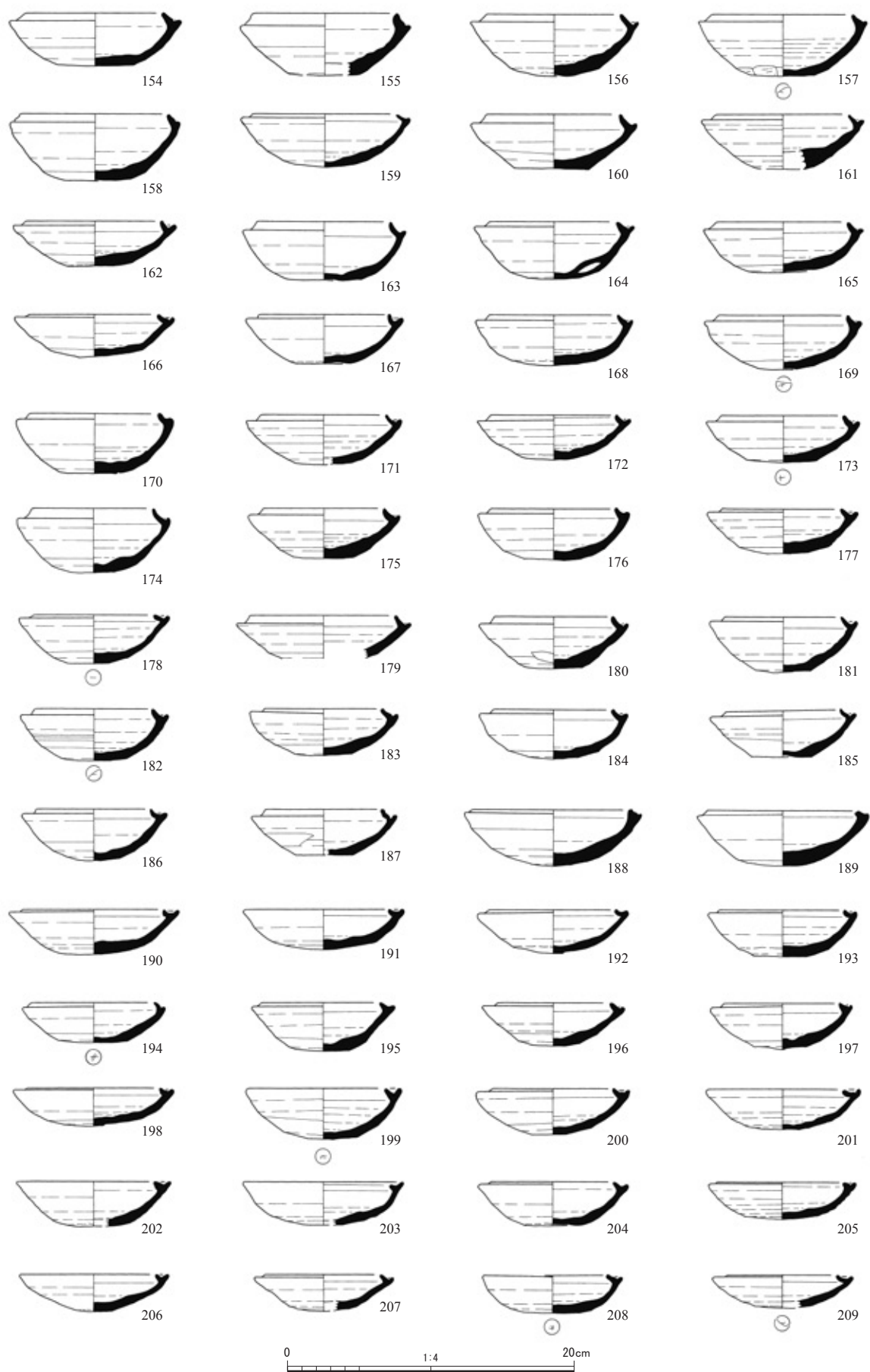


Fig.50 VII a 層出土遺物 (4)

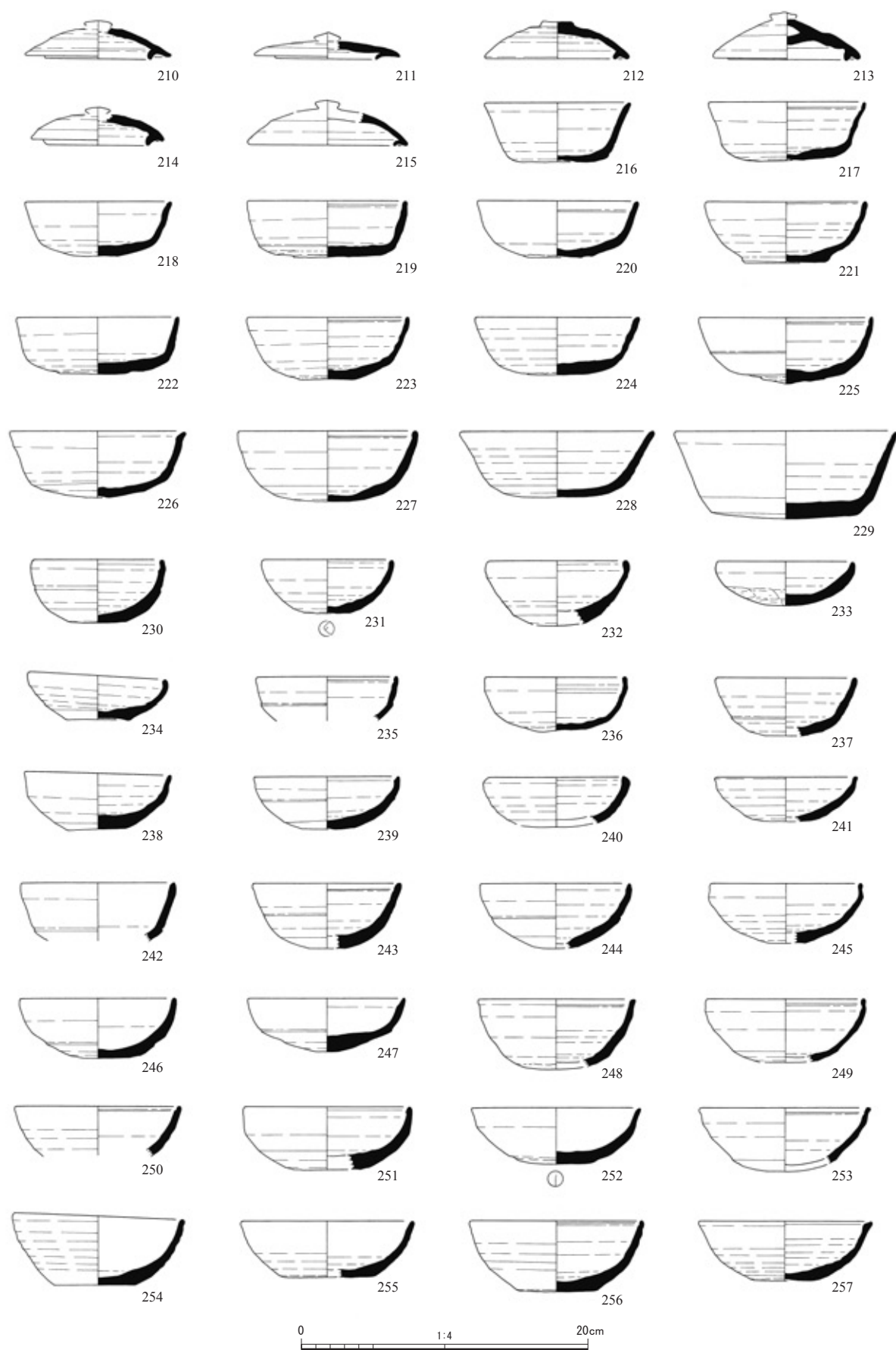


Fig.51 VII a 層出土遺物 (5)

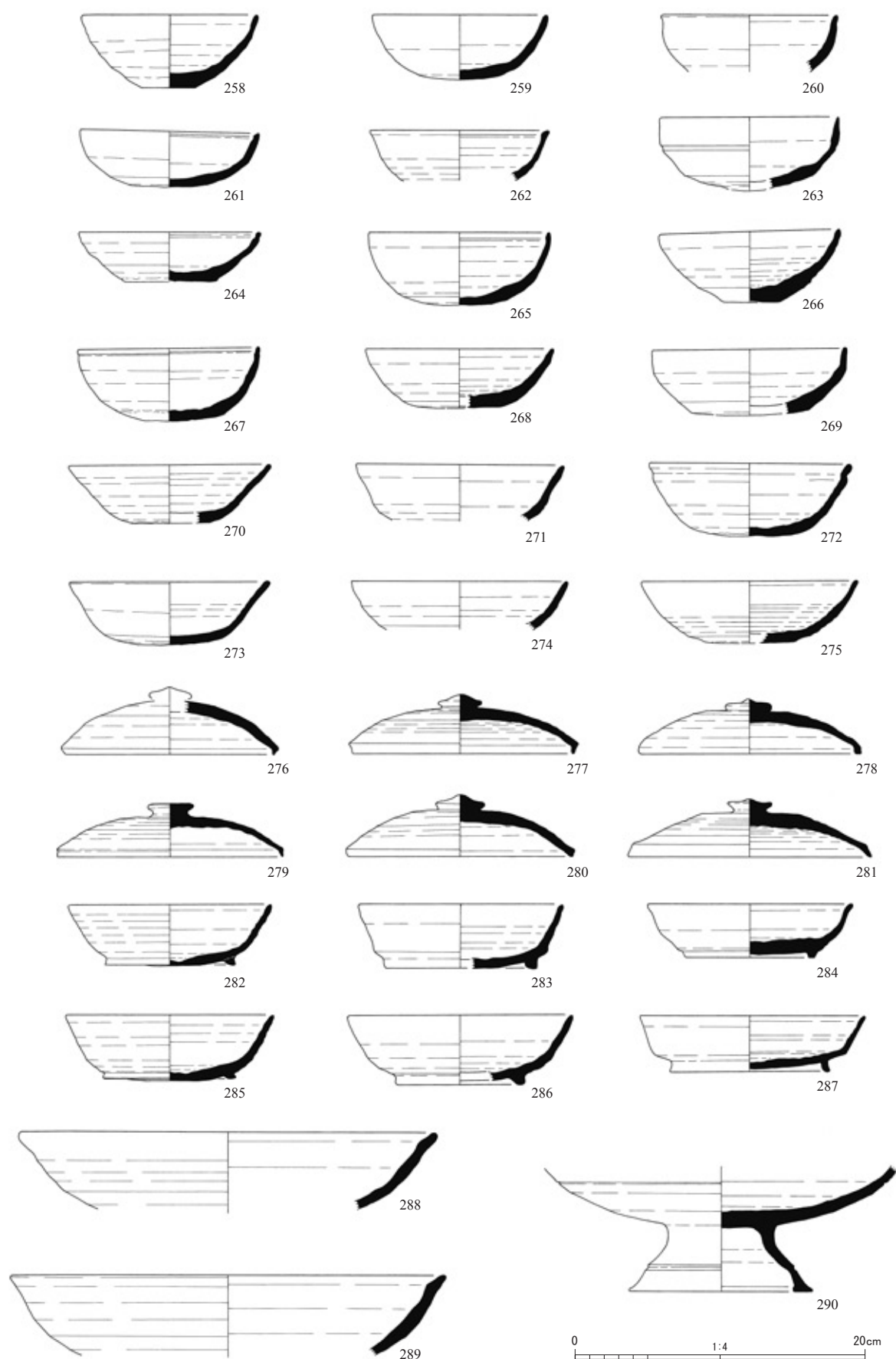


Fig.52 VII a 層出土遺物 (6)

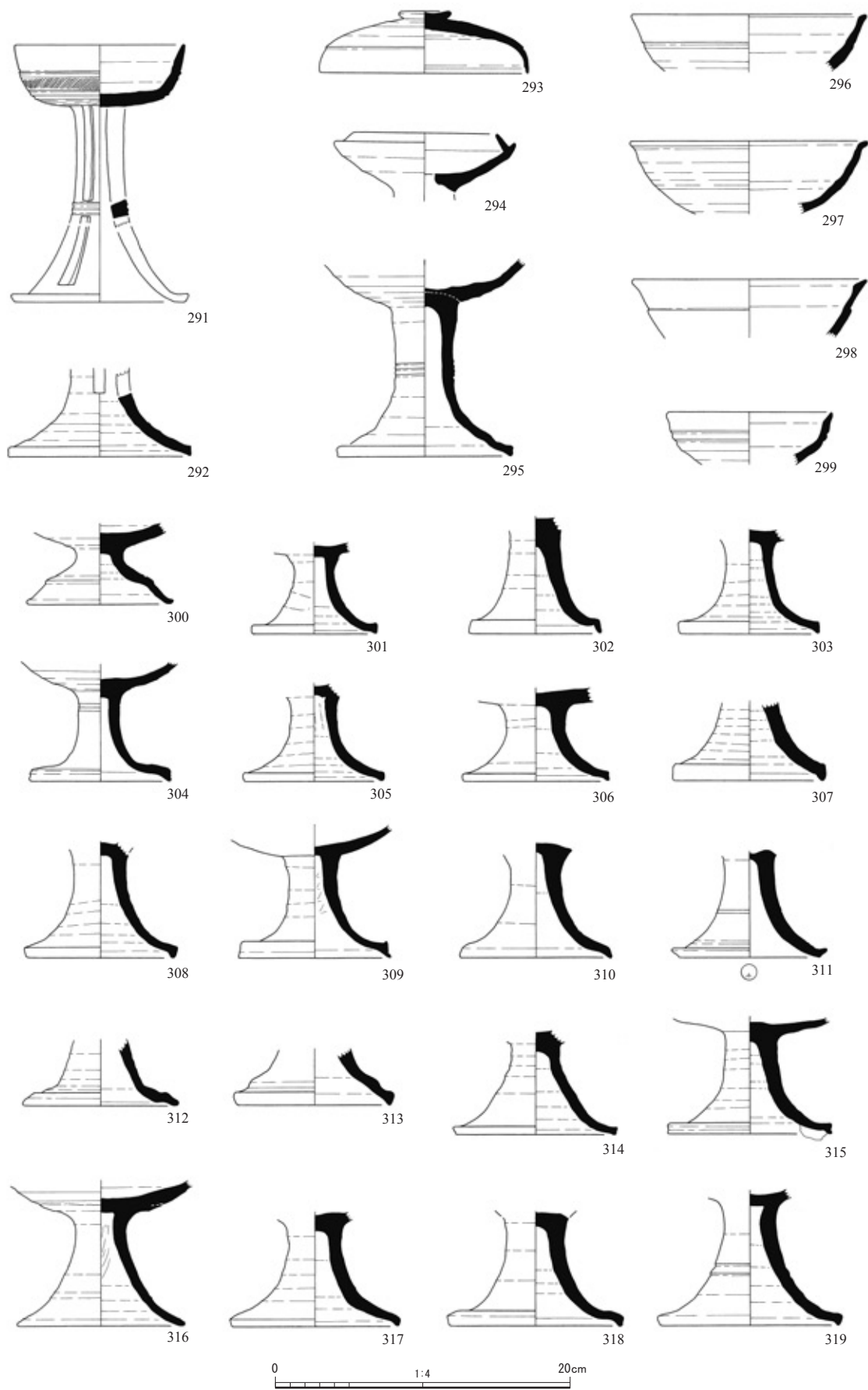


Fig.53 VII a 層出土遺物 (7)

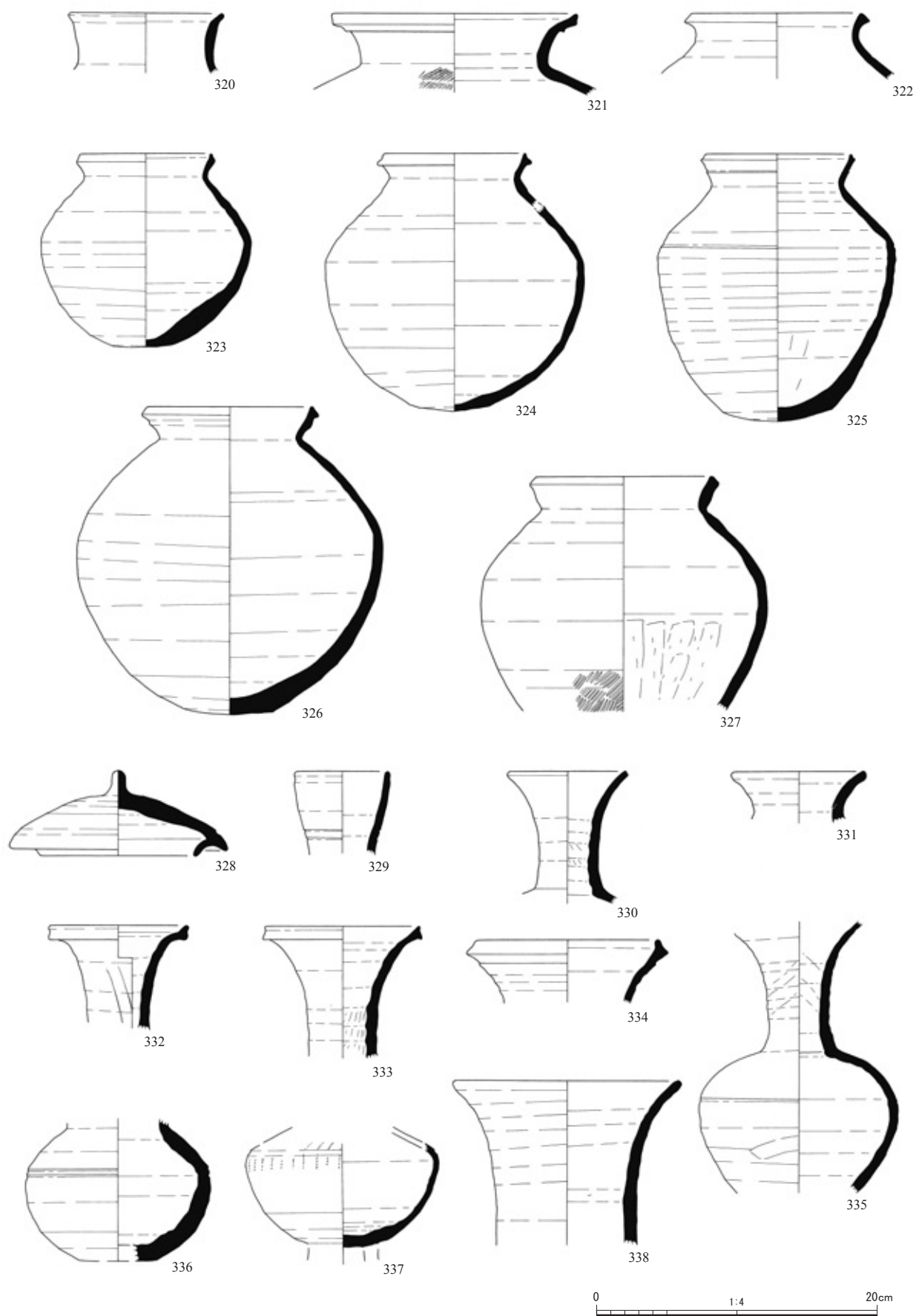


Fig.54 VII a 層出土遺物 (8)

3 VIIa層の調査

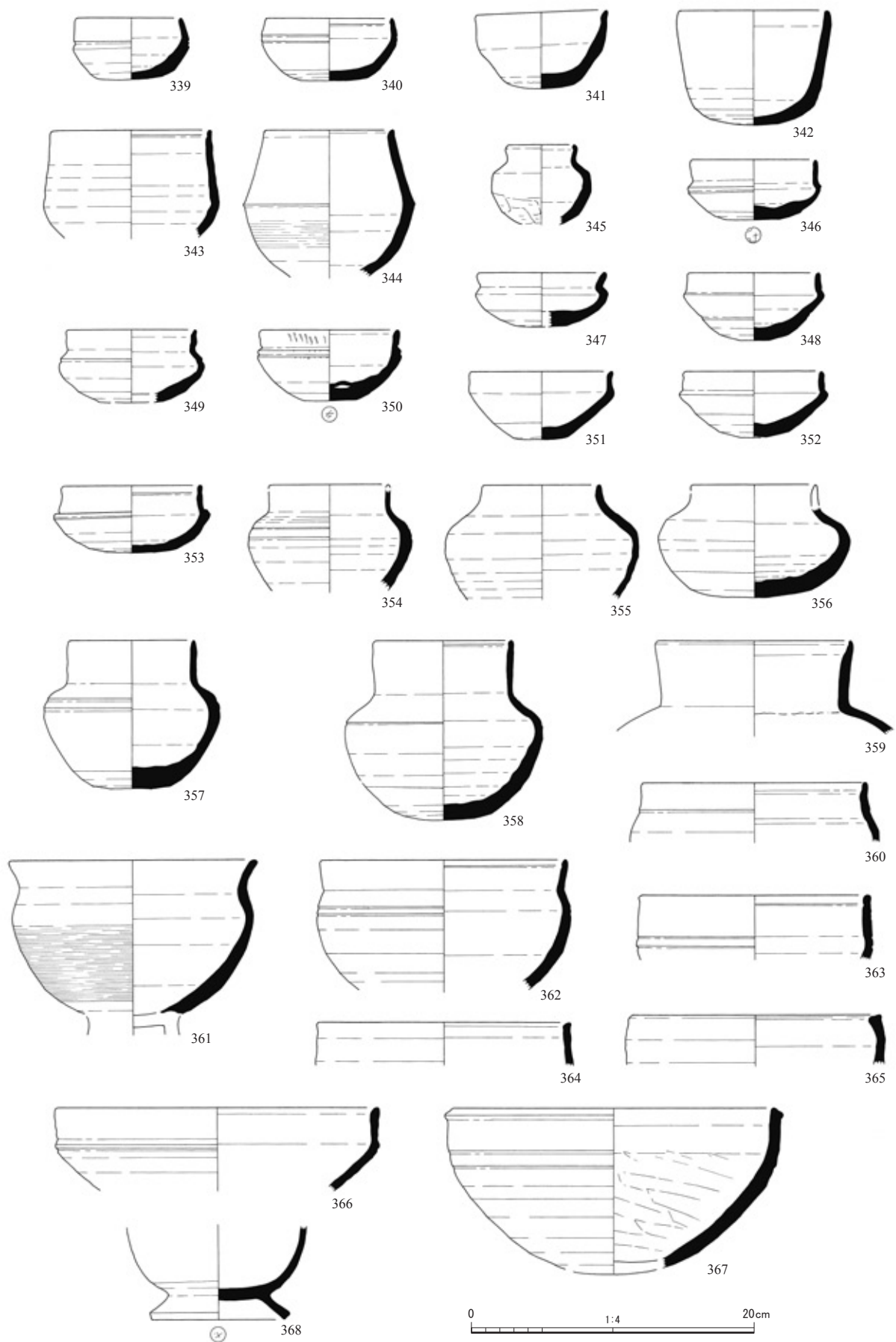


Fig.55 VII a 層出土遺物 (9)

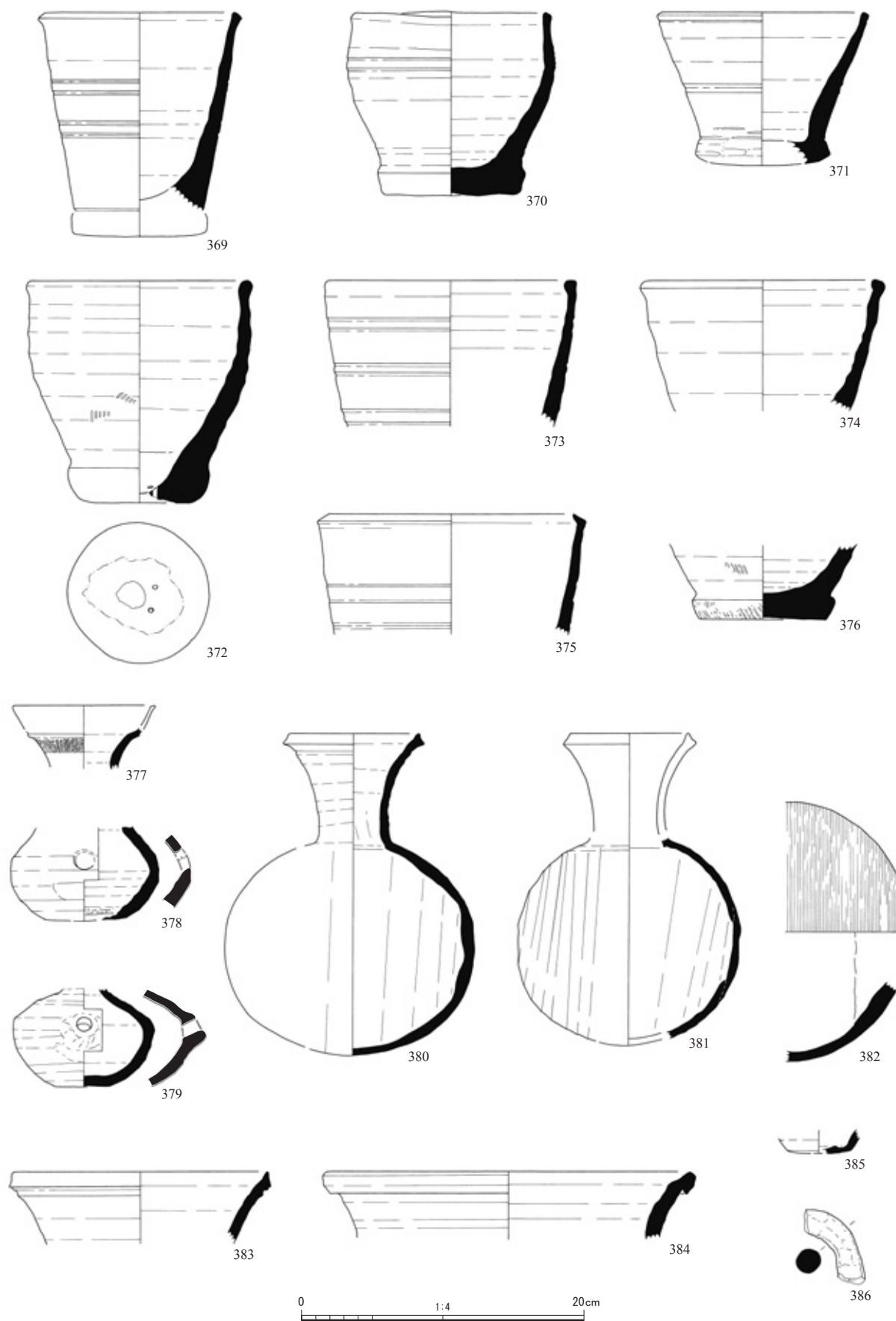


Fig.56 VII a層出土遺物 (10)

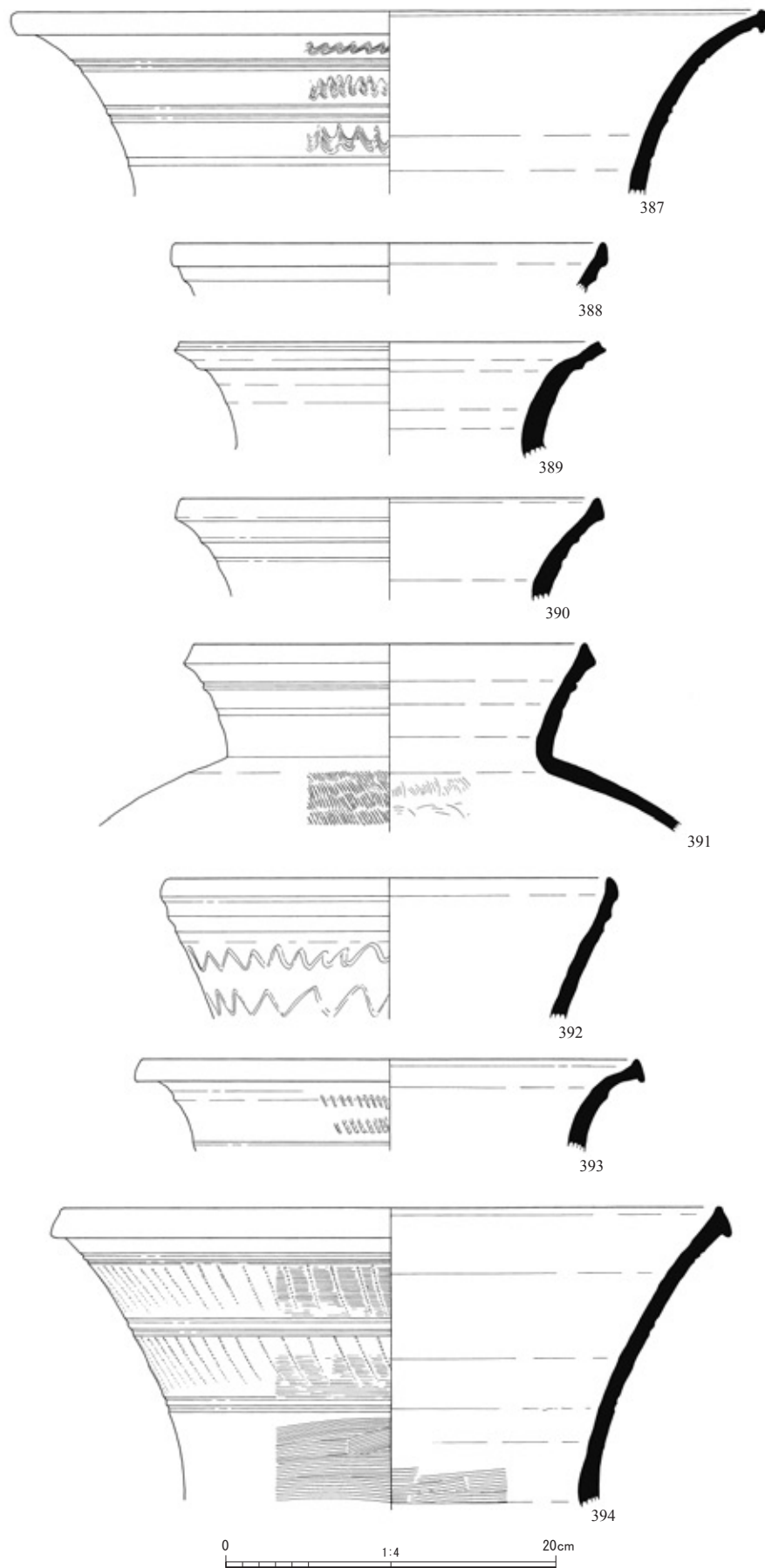


Fig.57 VII a層出土遺物 (11)

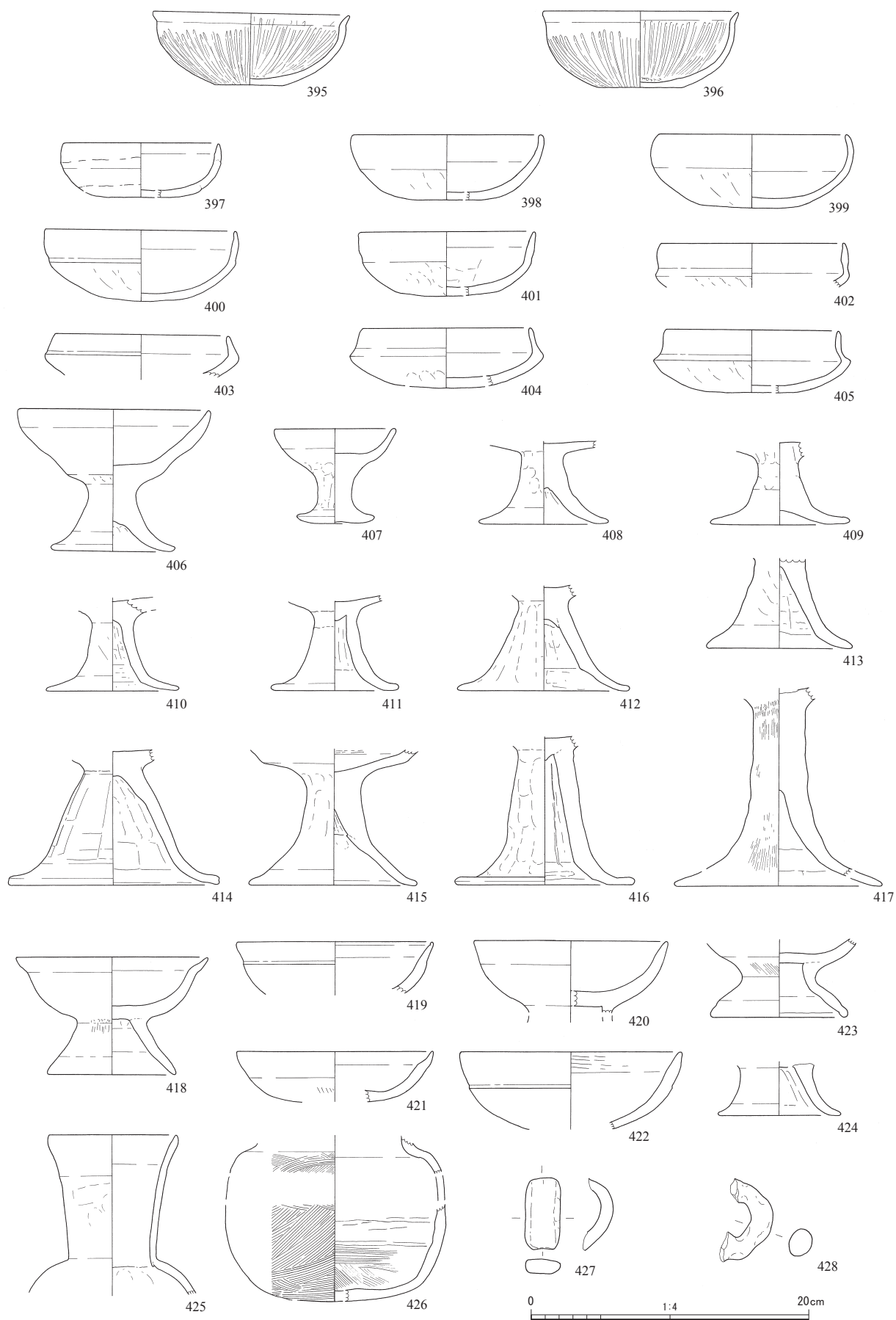


Fig.58 VII a層出土遺物 (12)

3 VIIa層の調査

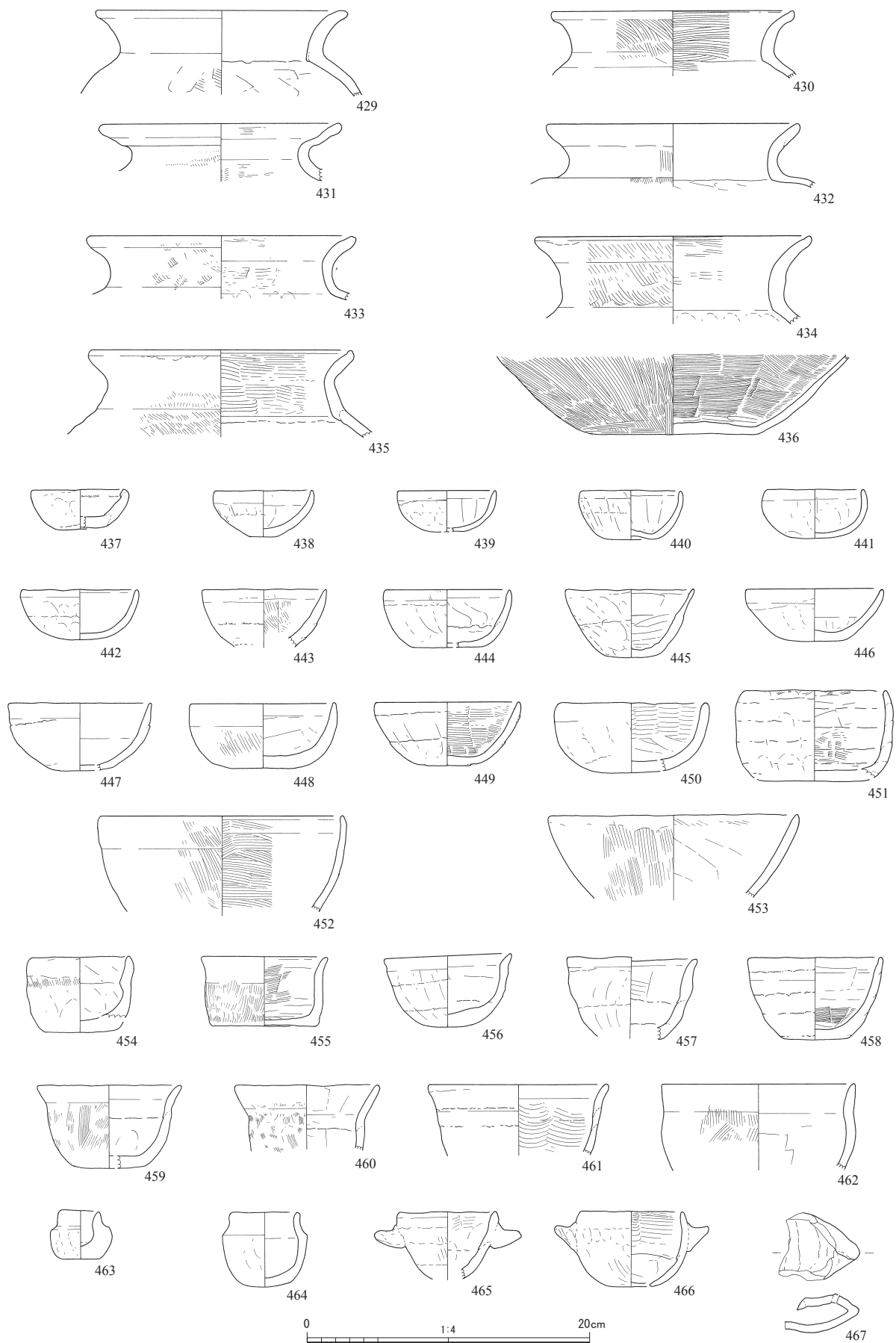


Fig.59 VII a層出土遺物 (13)

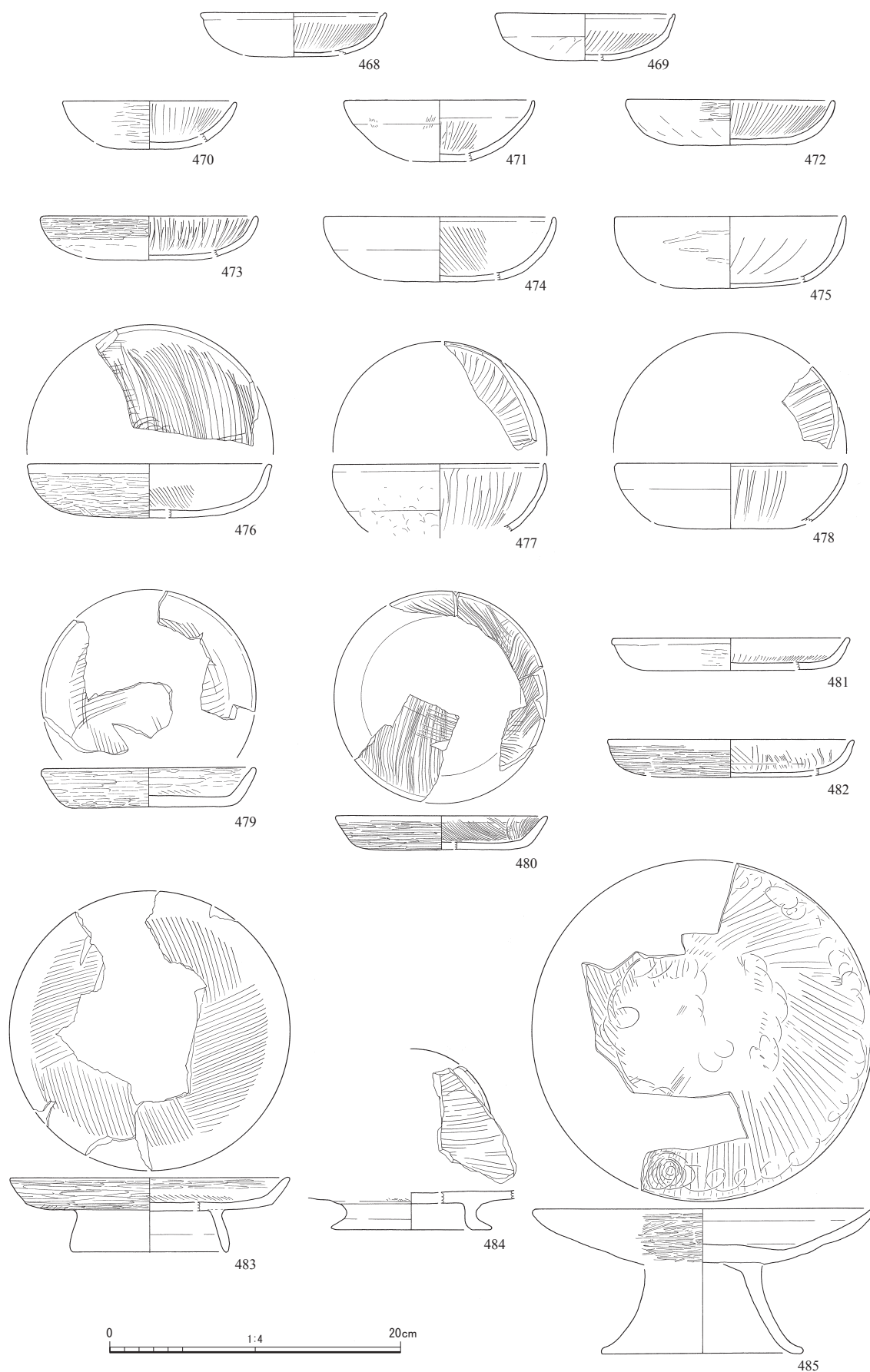


Fig.60 VII a層出土遺物 (14)



Fig.61 VII a層出土遺物 (15)

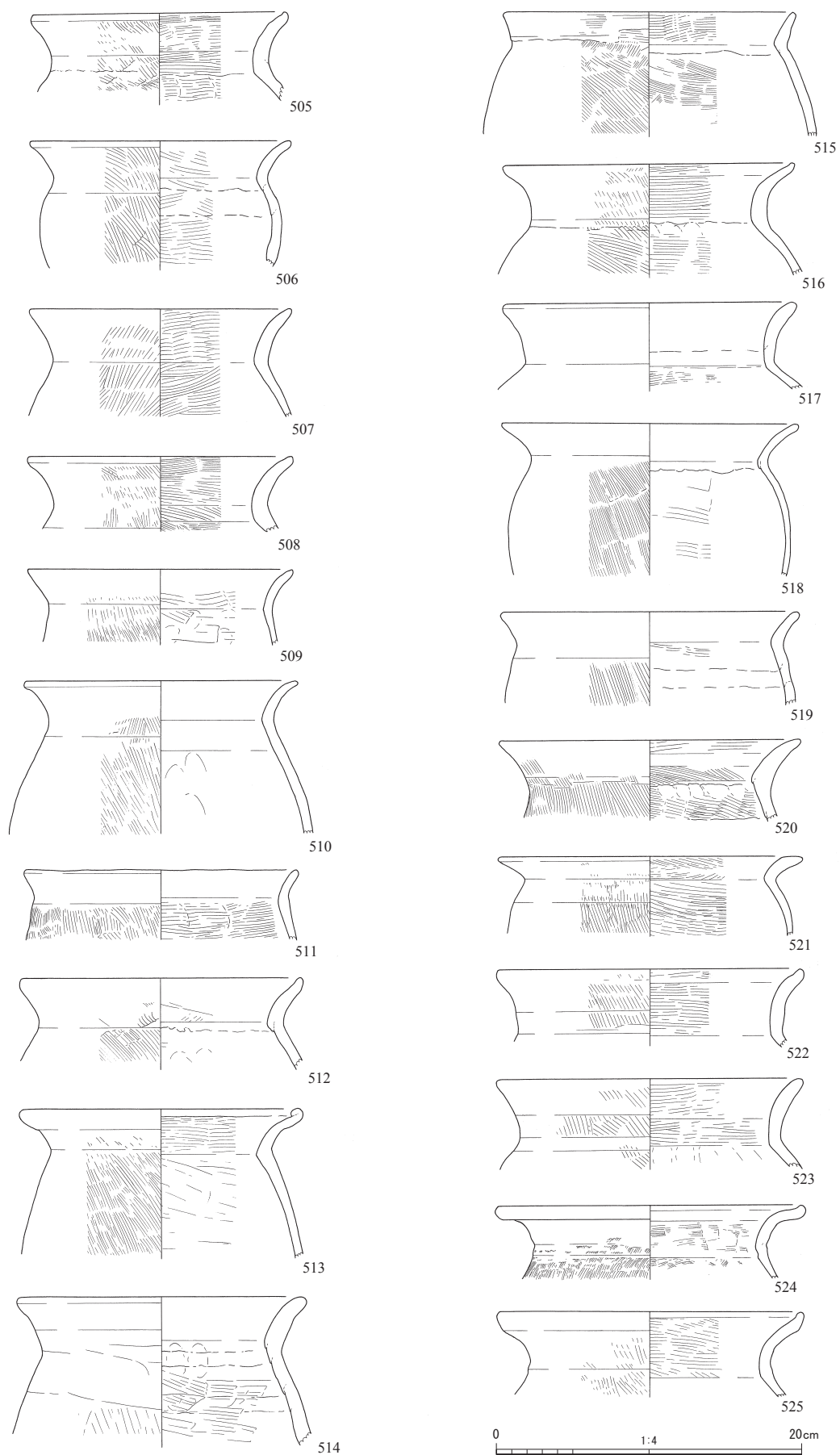


Fig.6.2 VII a層出土遺物 (16)

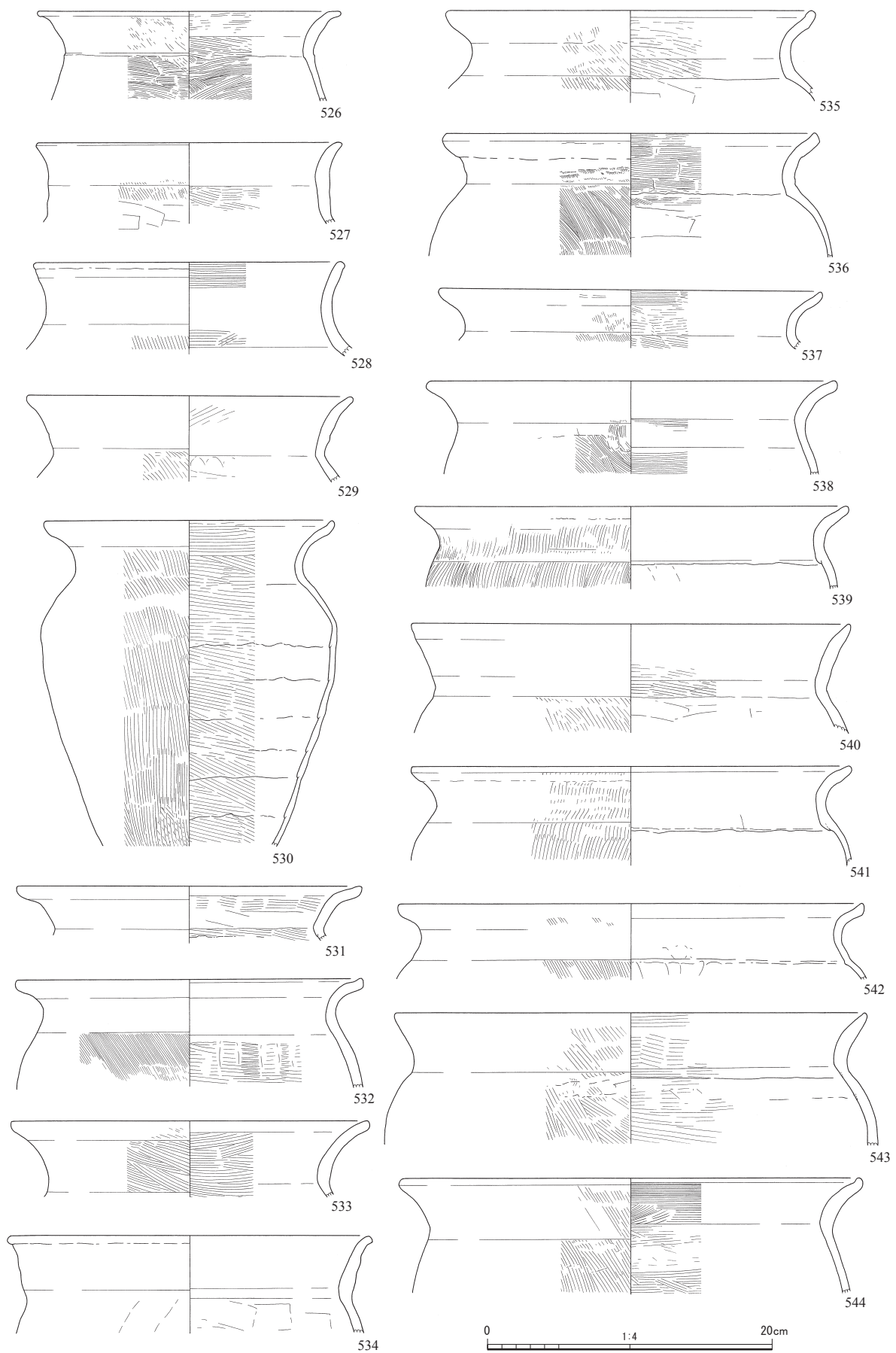


Fig.63 VII a 層出土遺物 (17)

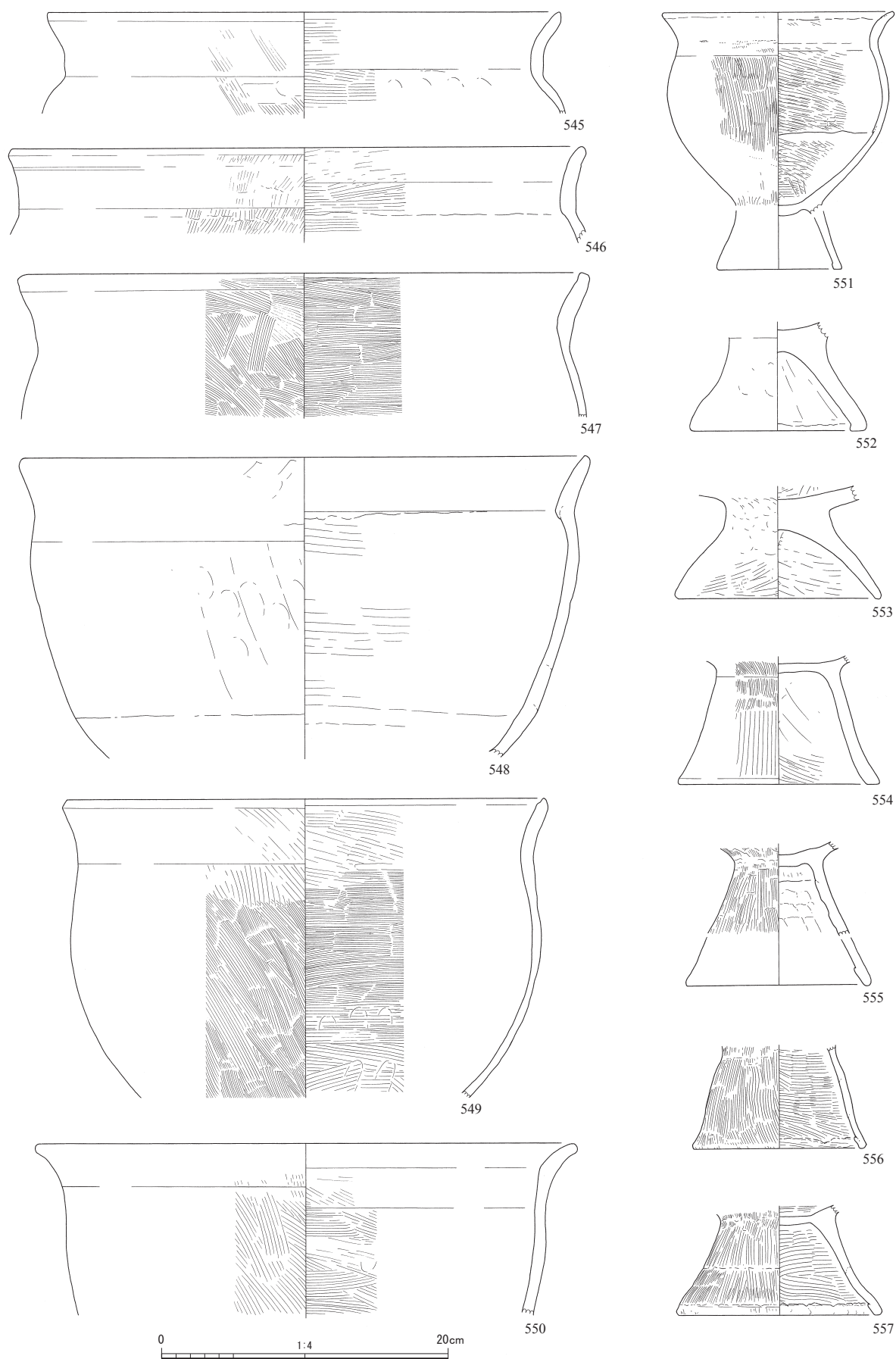


Fig.64 VII a層出土遺物 (18)

3 VIIa層の調査

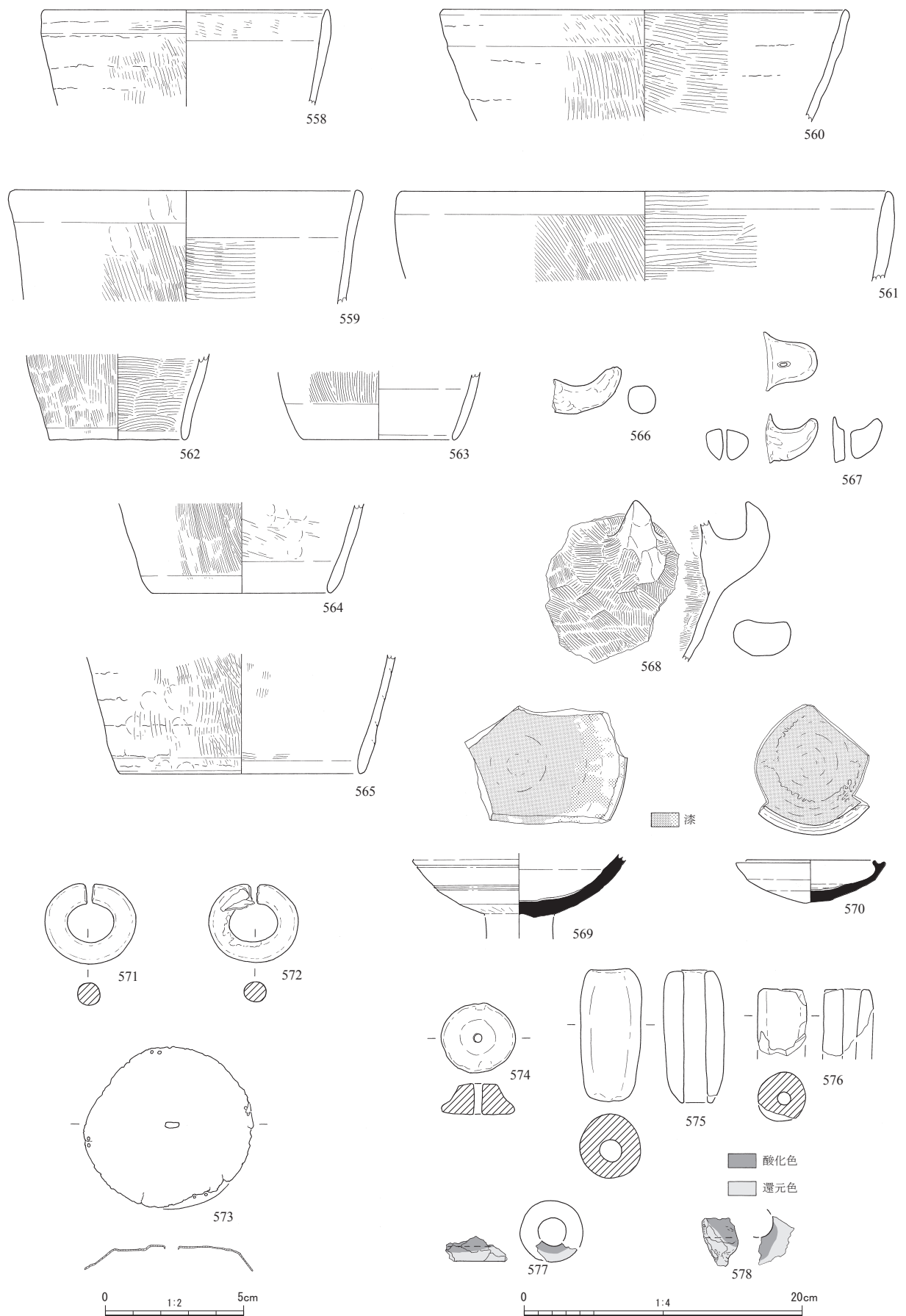


Fig.65 VII a層出土遺物 (19)

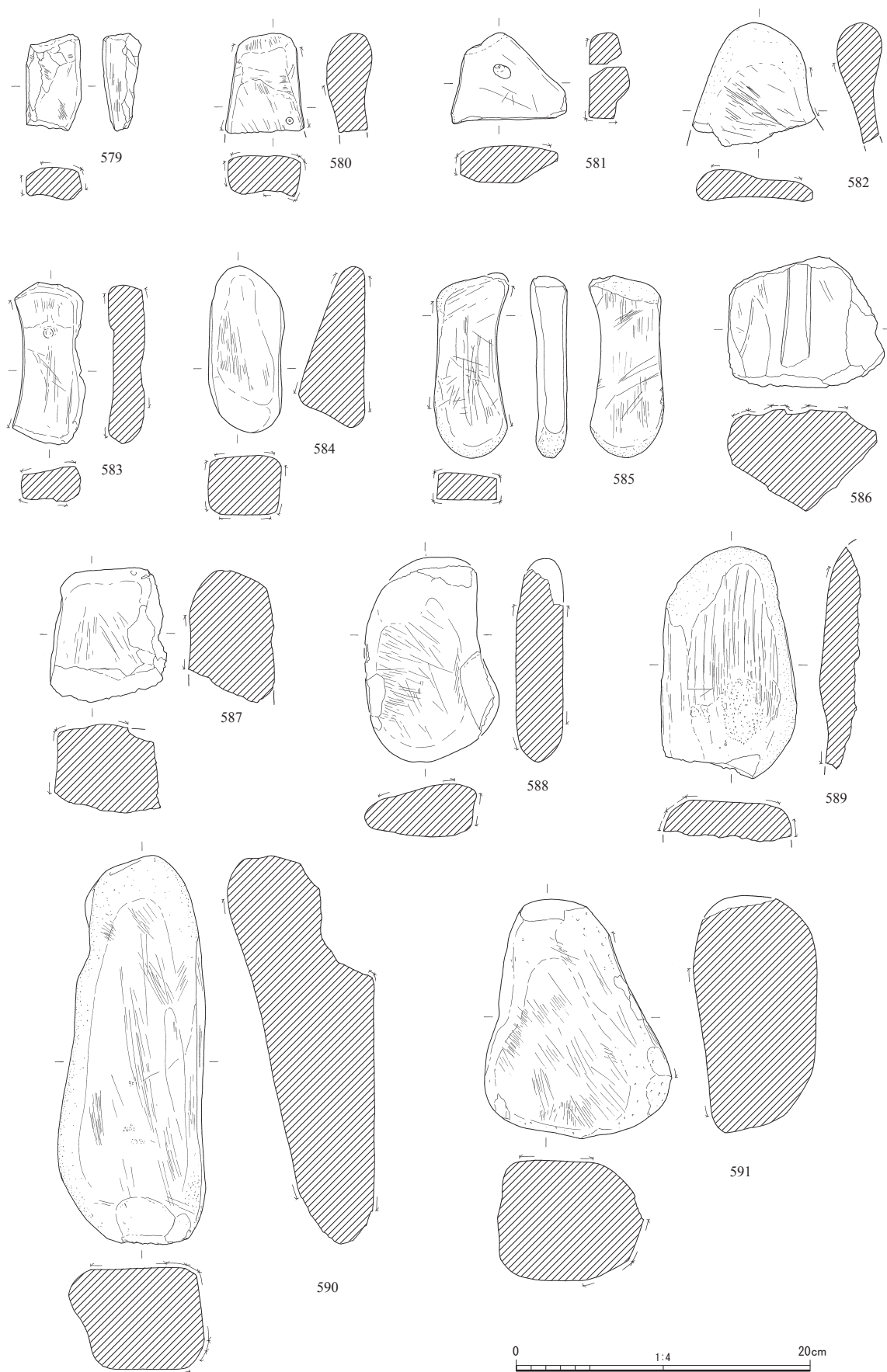


Fig.66 VII a層出土遺物 (20)

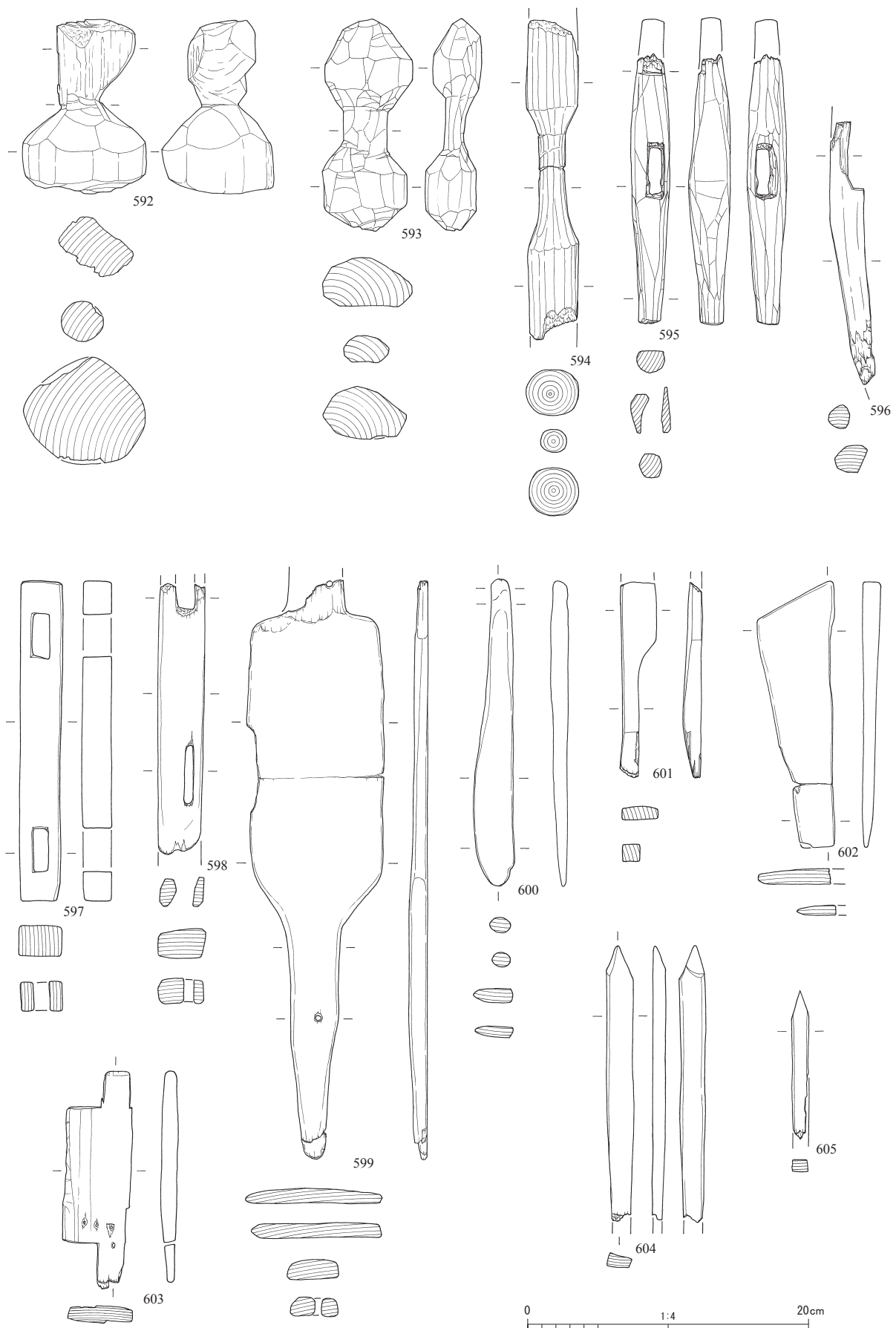


Fig.67 VII a層出土遺物 (21)

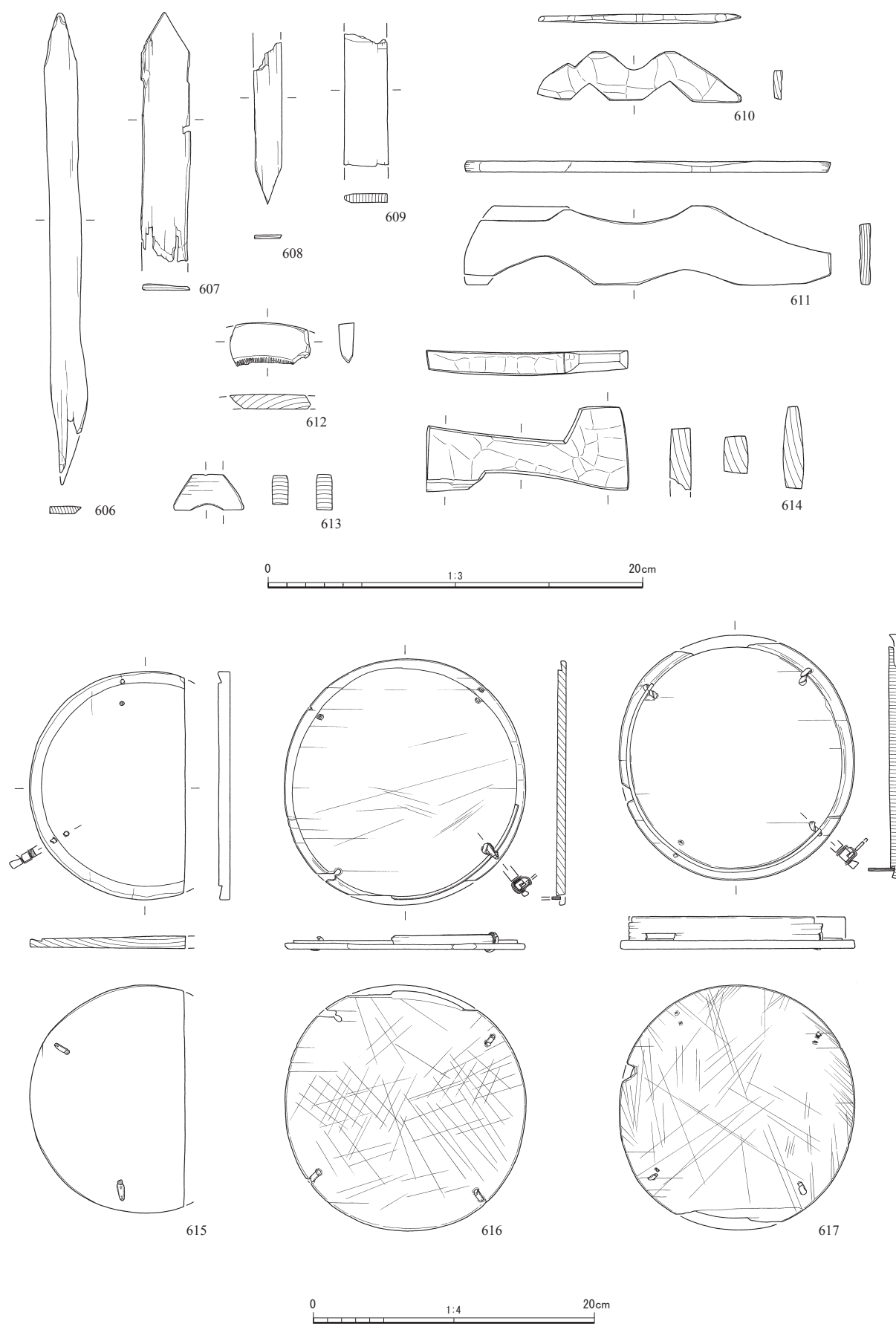


Fig.68 VII a層出土遺物 (22)

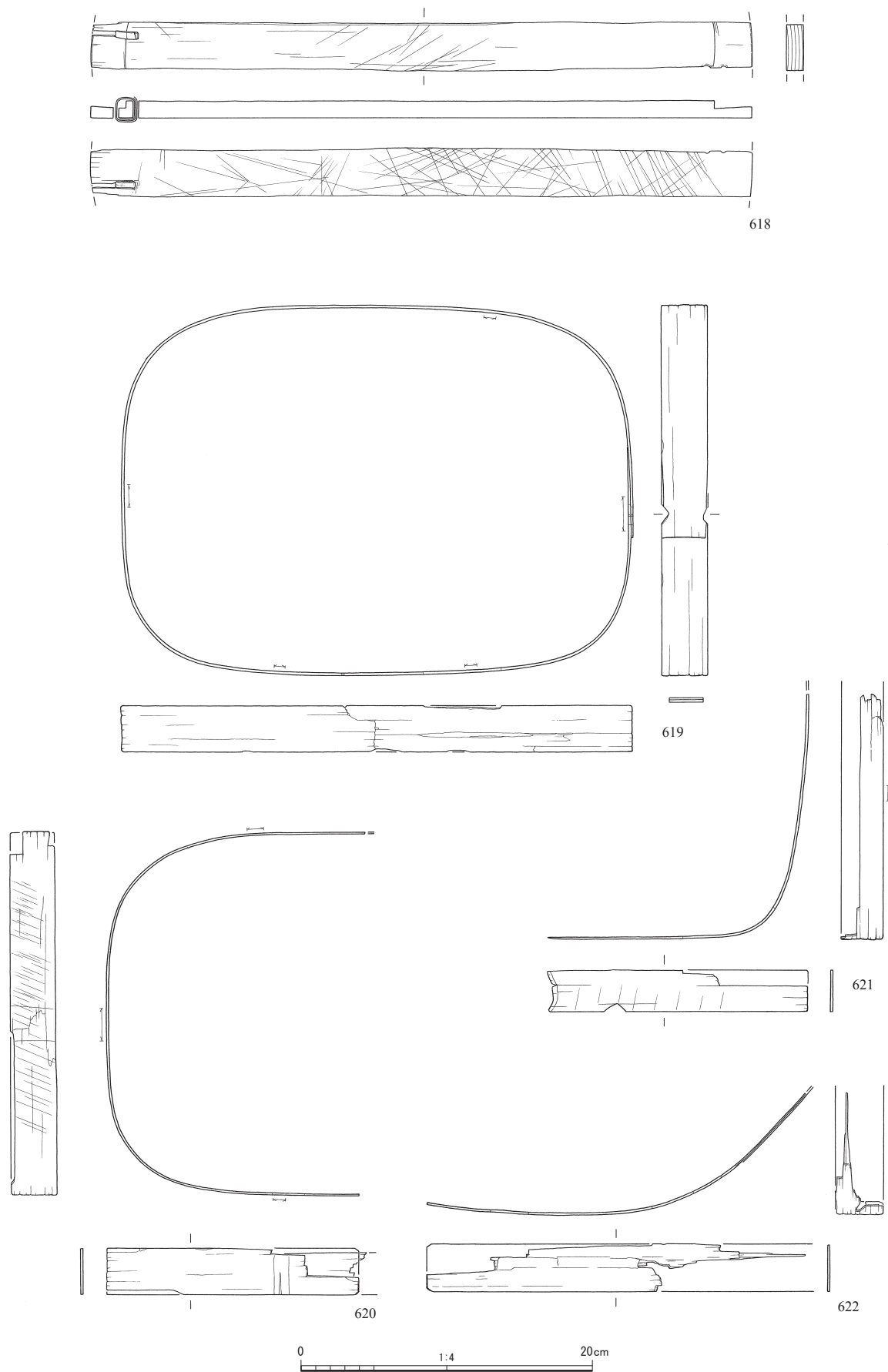


Fig.69 VII a層出土遺物 (23)

4 V層の調査

(1) V層の概要

V層は、灰色ないしは褐色の粘土層を基本にして部分的に砂層が混ざる層位で、奈良時代（8世紀前葉から中葉）に堆積した。底面の標高は -0.8m ほどであり、伊場大溝内の水量は少なくなっていたとみられる。北岸においては貝塚（SS01～04）が形成され、その近辺には杭を伴う階段状の護岸施設がつくられている。貝塚SS02・SS04からは製塩土器がまとまって出土している。

V層から出土する土器の量はⅦ層と比べると少ないが、敷智郡家関連の遺物が目立つ。その筆頭が6点の木簡であり、己酉年（709）や神亀元年（724）の年号が記されたものが含まれる。このほかにも、斎串、人形、馬形、舟形といった木製祭祀具がまとまって出土している。

(2) 伊場大溝の形状

V層が堆積した伊場大溝の本来の形状がうかがえる部分は、北側斜面の 0.0m 以下の部分から川底を挟んで南側斜面の 0.5m 以下の部分である。底面の標高は -0.8m ほどで、目立った凹凸はない。V層中の堆積も、Ⅶa層と同じく南側斜面に貼り付くような傾斜をもつ。V層中には砂の堆積がみられるが、その量は少ない。V層の堆積時は、Ⅶ層の堆積時と比べて、伊場大溝の水量が少なく

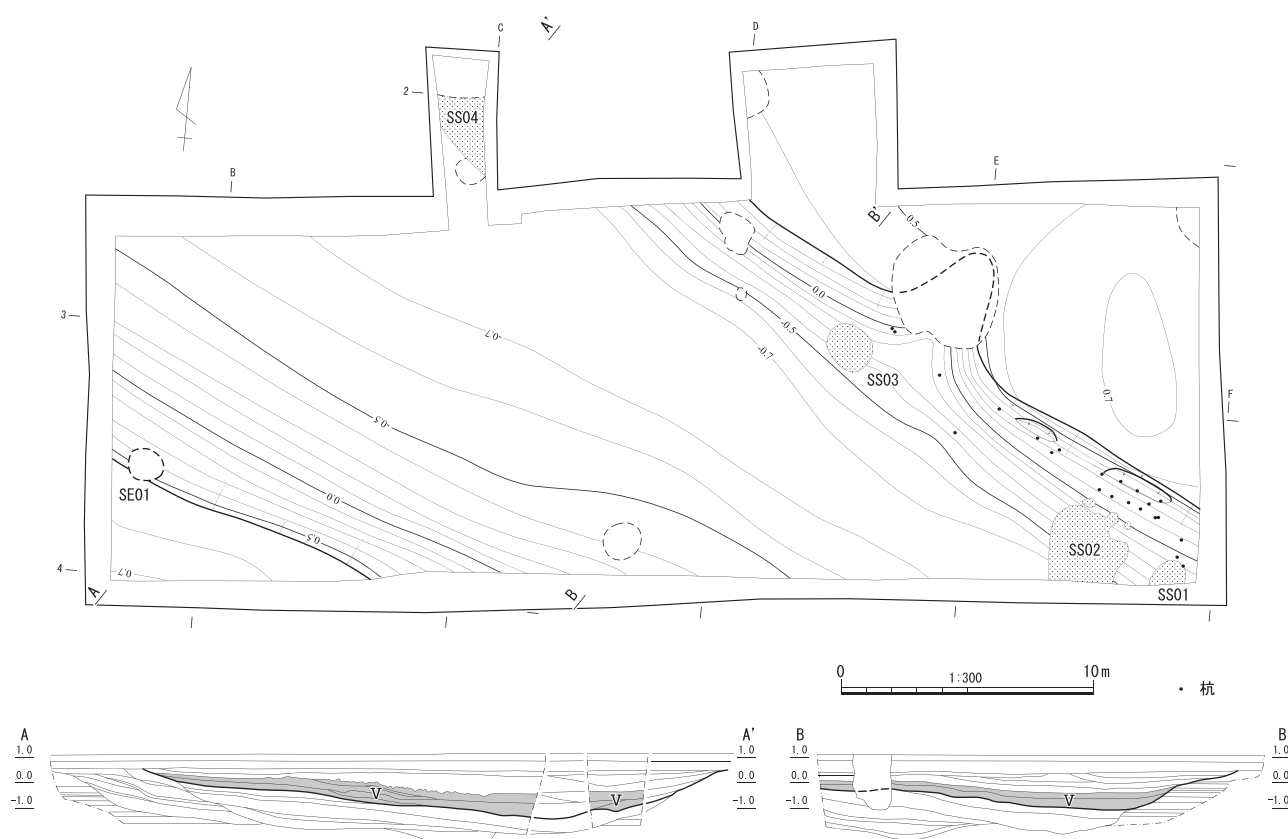
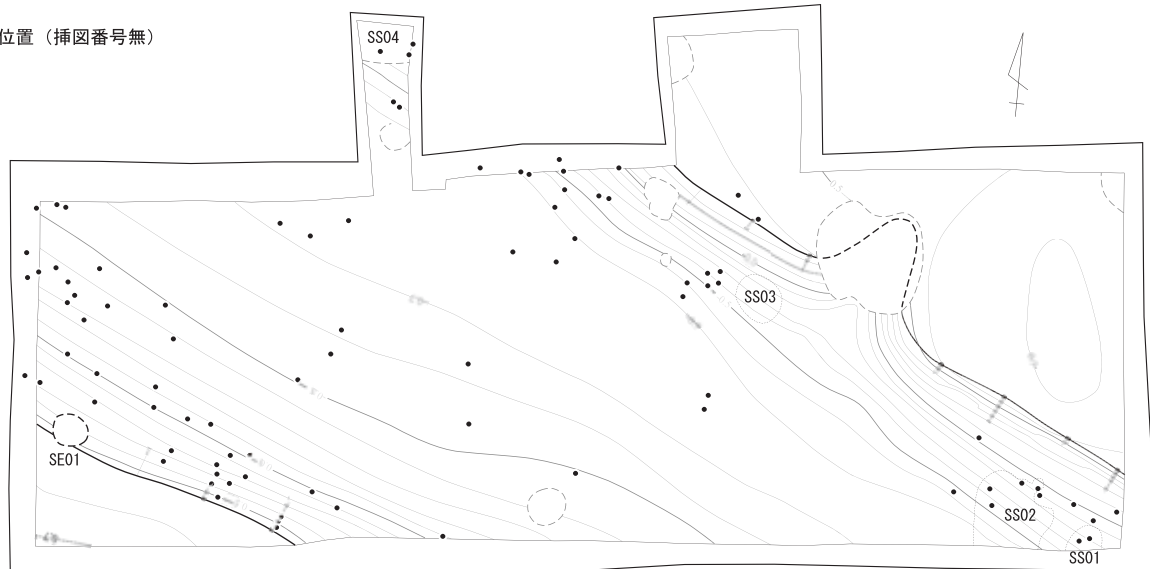


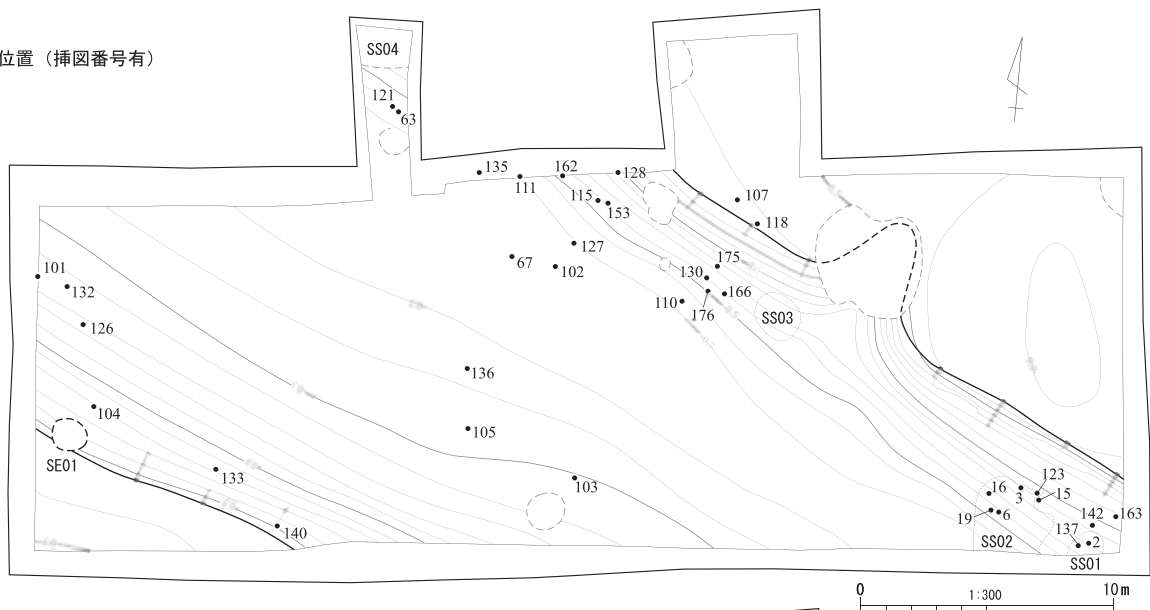
Fig.70 伊場大溝V層

4 V層の調査

遺物出土位置（挿図番号無）



土器出土位置（挿図番号有）



石製品・木器等出土位置（挿図番号有）

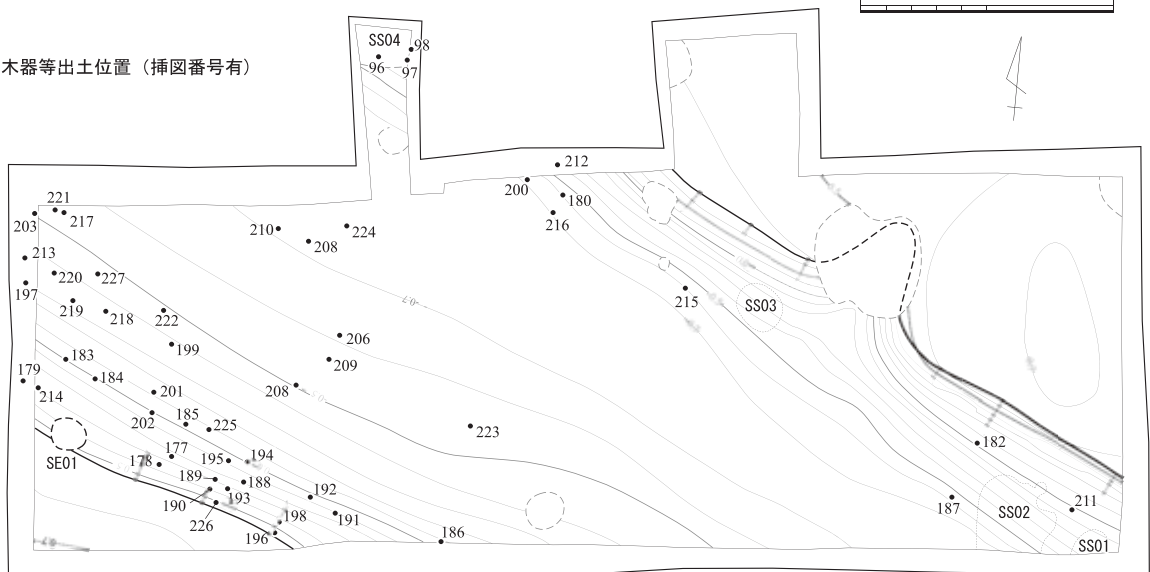


Fig.71 V層における遺物出土位置

ななったとみられるだろう。V層の堆積が認められる部分の幅は20m、復元的に兩岸を結んだ幅は22m程度である。また、地表から底面までの深さは約1.5mである。

(3) 遺物の出土状態

出土位置の傾向 V層に含まれる遺物の出土位置は、伊場大溝の兩岸に偏る傾向がみられる。大溝の底面から遺物が出土することが少なく、VII b層やVII a層の遺物の出土状態と大きく異なる。VII b層やVII a層は伊場大溝内の水流が急激であったため、岸から川底に遺物が集まるが多かったとみられるが、V層の堆積時には伊場大溝内の水量が減り、兩岸から投棄される遺物は大きく移動することなく埋没したと捉えられよう。

土 器 上述の出土位置の傾向どおり、V層から出土する土器は南北の兩岸に集中する。北岸には貝塚が形成されるが、貝塚(SS02・SS04)からは製塩土器がまとまって出土している。このほか、特殊な土器として、中空把手付円面硯(140)が南岸から出土している。

木 簡 木簡は南岸から4点(鳥居松2～5号木簡、183～186)北岸から2点(鳥居松1号木簡・182、6号木簡・187)出土している。己酉年(709)銘をもつ5号木簡(186)は単独で出土し、相伴すると判断できるような遺物には恵まれなかった。いっぽう、神亀元年(724)銘をもつ3号木簡(184)と近い位置から出土した土器として、108、126、132、165をあげることができる。いずれも、同時代の資料として矛盾はない。なお、3号木簡は、中央で半分に折り曲げられ破却した状態で出土している。

その他の遺物 斎串や馬形などの木製祭祀具は、伊場大溝の南北兩岸からほぼ均等にみられる。2点の土馬(177・178)、卜骨(179)はいずれも南岸から出土している。とくに、2点の土馬は互いに似た造りで、出土位置も近接する。二個一組で用いられていた可能性が指摘できるだろう。

馬骨・馬歯 (Fig.72) V層とIV b層を中心に、伊場大溝内から馬骨・馬歯が出土している。馬骨・馬歯は出土時において脆弱であることが多く、取り上げられないものがあつた。こうした中でV層の南岸に近い位置において、馬の頭骨がほぼ完全な状態で出土した(PL.8-1)。首から下の骨格は検出できなかったので、馬の頭のみを切り取って伊場大溝内に沈めたものと考えられる。

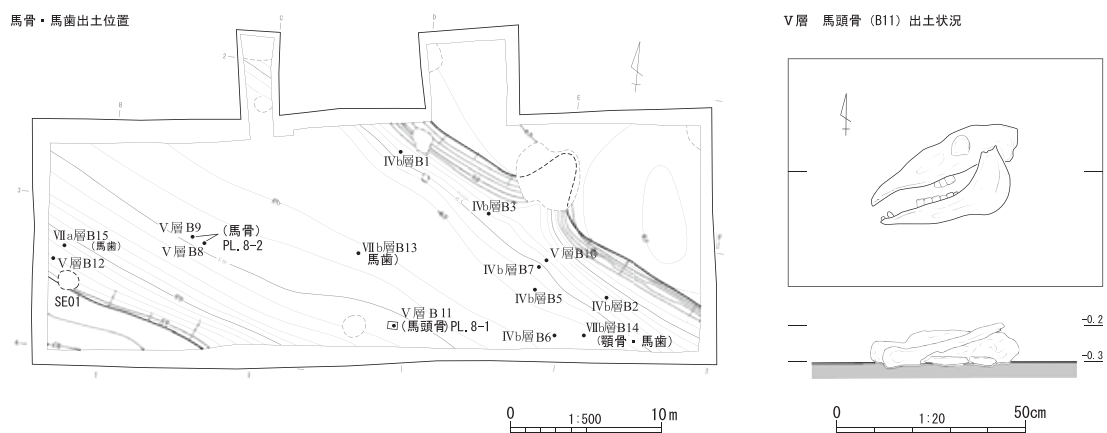


Fig.72 馬骨・馬歯出土状況

(4) 貝 塚

概 要 伊場大溝の北岸において貝塚を4箇所(SS01～04)検出した。このうち、SS03は貝層が非常に薄く、共伴する土器を明確に抽出することができなかった。SS01・02・04については貝塚内の動植物遺体のサンプルを採取し、分析を試みた(第3章3)。SS01・02・04ともダンバイキサゴとヤマトシジミが半数以上を占め、よく似た組成を示している。SS02やSS04から出土した土器は比較的豊富で、三河湾沿岸地域から搬入されたとみられる製塩土器が含まれる点でも注目できる。

また、SS02の北側や北西側において、伊場大溝の岸を階段状に成形した痕跡がみられた。階段状施設の周りには岸に沿って打ち込まれた杭列も確認できている。杭列は伊場大溝の岸に設けられた護岸施設に使われていたものと捉えられよう。

SS01 (Fig.73) 調査区の南東隅において検出した貝塚である。-0.2m～-0.4mほどの緩やかな斜面に、貝層が東西1.3m、南北1.5mほどにわたり広がっている。発掘区外の南側にも貝塚が連続するので、その正確な規模は不明であるが、全体の半分ほどは調査したとみられる。貝層の厚さは最も厚い部分で20cmほどあり、貝塚の西側はSS02に接する。

SS01 出土遺物 (Fig.74) 1～4はSS01から出土した遺物である。すべて須恵器の坏蓋もしくは無台碗である。遠江V期に位置づけられ、8世紀前半の資料群としてよいだろう。

SS02 (Fig.73) SS01の西側において検出した貝塚である。-0.2m～-0.5mほどの緩やかな斜面に築かれており、東西3.5m、南北4.0mほどにわたり貝層がみられる。発掘区外の南側に貝塚が広がっているが、ほぼ全容をうかがうことができるだろう。貝層の厚さは最も厚い部分で30cmほどある。大量の貝に混じって土器(5～62)が出土している。墨書土器(6)や大量の製塩土器(29～62)を含むことが注目できる。

SS02 出土遺物 (Fig.74) 5～62はSS02から出土した遺物である。5～18が須恵器、19～28が土師器、29～62が製塩土器である。須恵器坏身(6)には、墨書「逆」が確認できる。土師器の碗もしくは皿の破片(21)にも墨痕がみられるが、文字であるか不明確である。11は須恵器坏身を転用した硯である。SS02から出土した須恵器は概ね遠江V期に相当しよう。

第3章3 貝類分析サンプル位置図

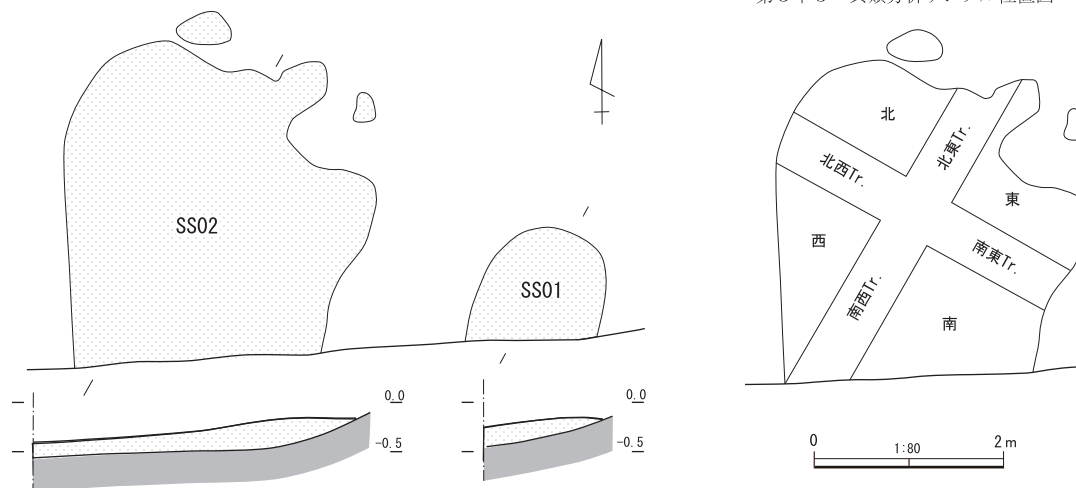


Fig.73 SS01・02 実測図

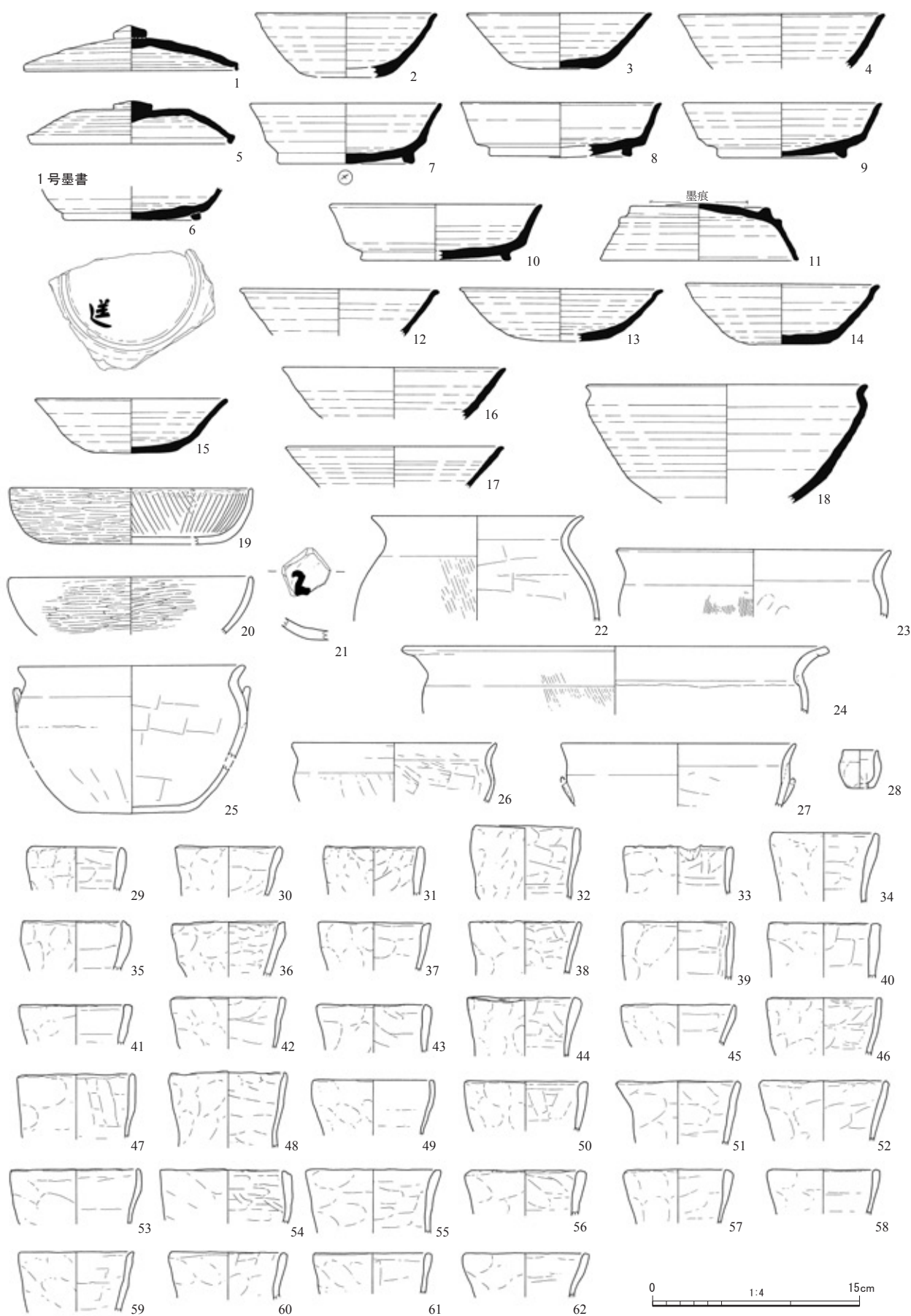


Fig.74 SS01・02 出土遺物

1～4：SS01 5～62：SS02

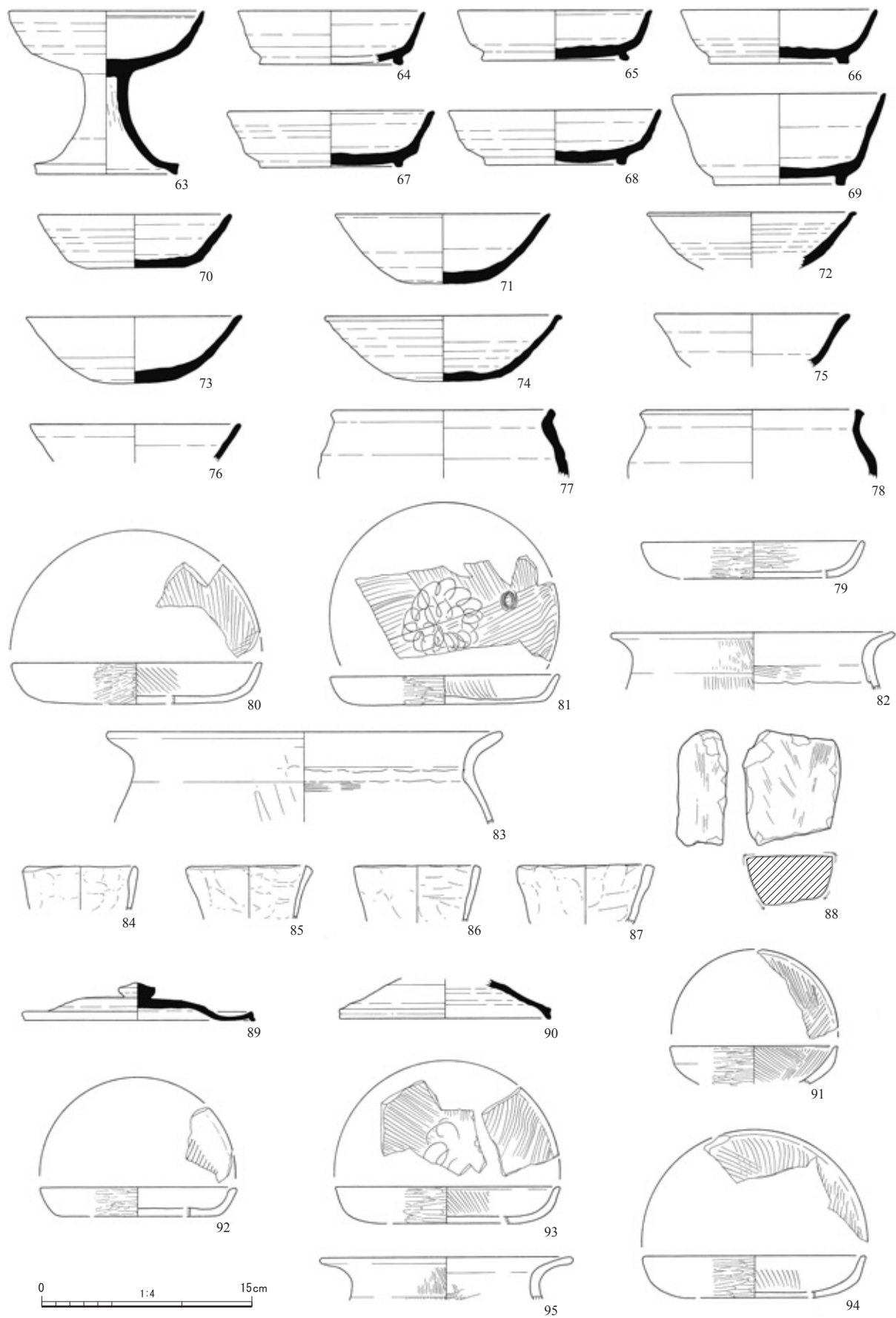


Fig.75 SS04 出土遺物 (1)

63 ~ 88 : SS04 89 ~ 95 : SS04 上層

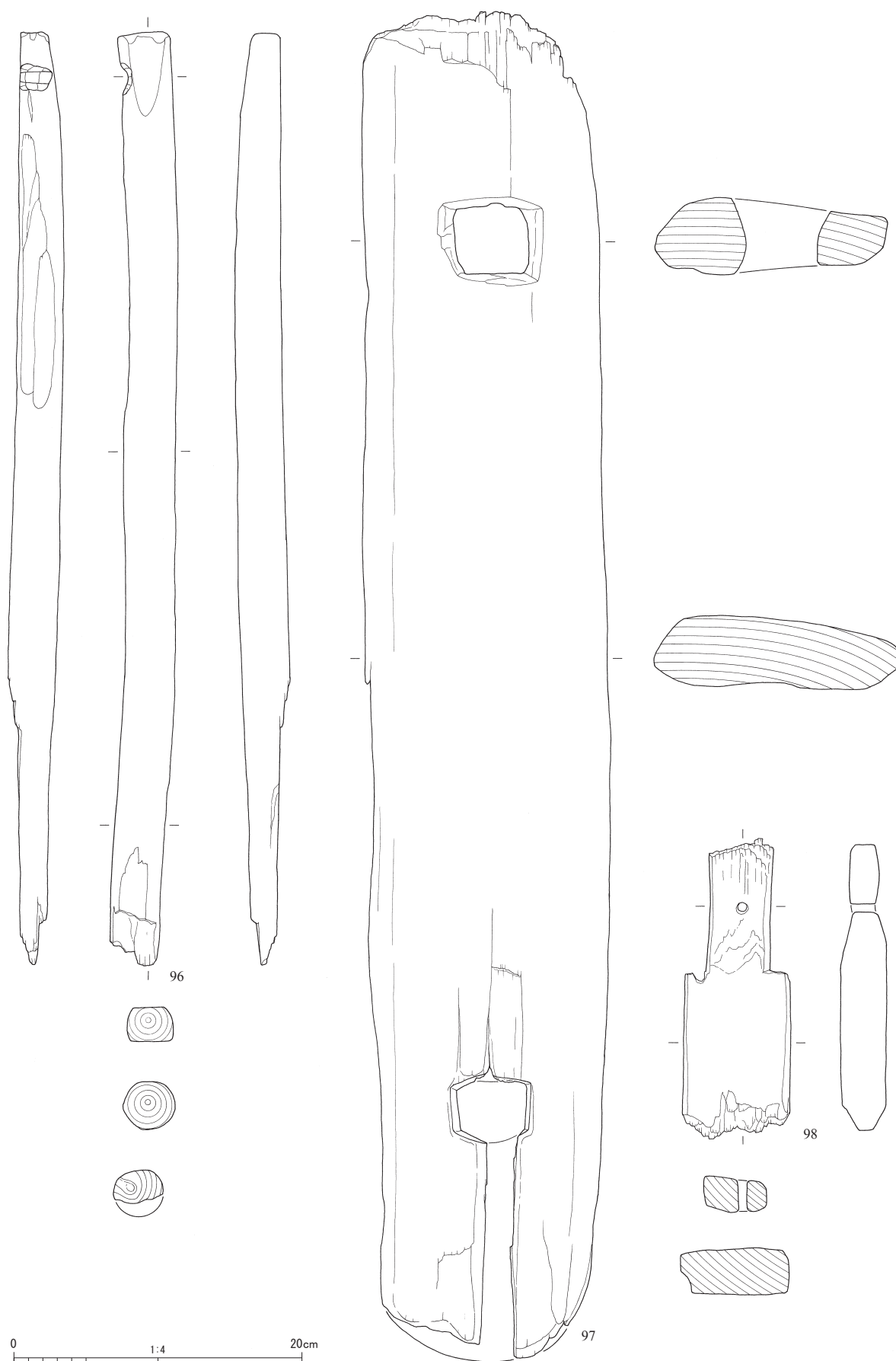


Fig.76 SS04 出土遺物 (2)

29～62は製塩土器である。34点分図化した、図示しなかった小破片も多い。口縁部の破片数では114点を数える。焼成や胎土から、精良な胎土で焼成が良いもの（A群、29～56）と、砂粒が目立つ粗い胎土で焼成が比較的あまいもの（B群、57～62）の2者に分けることができる。前者には、須恵器のように硬質に焼きあがるもの（30）もみられる。いずれも口縁部のみが遺存し、底部・脚部は破片を含め全くみられない。口縁端部は尖るもの（45・59など）が若干あるが、多くは厚くなるもの（29・30など）が多く、端部に幅が広い面をもつもの（33・40など）も含まれる。ただし、口縁部の造りは粗雑で同一個でも形状の違いが大きく、厳密に形態差を分離することは難しい。

SS03 SS02の北西約10mの地点にみられた小規模な貝塚である。ヤマトシジミがまばらに分布するのみで、貝層の厚さはほとんど確認できない。貝塚に共伴するような土器もみられなかった。

SS04 (Fig.70) 発掘区の北西側に突出した拡張調査区の中において、トレンチ状に調査した貝塚である。伊場大溝の土層図(Fig.3- 上図 11層)にその断面を示す。貝塚の規模は不明であるが、貝層の厚さが30cmを超えており、今回調査した中でも最も規模が大きいものであった可能性が高い。SS04からは63～88、96～98の遺物が出土した。なお、89～95はSS04の直上出土遺物である。

SS04 出土遺物 (Fig.75・76) 63～88、96～98はSS04中から出土した遺物である。63～78は須恵器である。概ね遠江V期に位置づけられる遺物群とみてよい。やや深めの有台坏身(69)は遠江V-3期を代表する器種である。SS04の形成時期は8世紀中葉頃といえよう。84～87は製塩土器である。焼成、胎土は比較的良好で、SS02出土遺物において分類したA群に相当する。SS04から出土した製塩土器においても、遺存しているのは口縁部のみで、底部・脚部は全く確認できない。96の木製品は用途不明で、先端に抉りがみられる。97の木製品は建築部材と考えられ、貝塚中に構築された階段状施設に使用されていた可能性がある。98も不明品である。

89～95はSS04の直上から出土した遺物である。89の坏蓋は平坦化の傾向がうかがえ、新しい様相をもつものと認識できる。

(5) V層出土遺物

概要 Fig.77～84にV層から出土した遺物を示す。V層から出土した遺物のうち、図示したものは129点（貝塚出土遺物を含むと227点）である。土器の量は比較的少ないものの、木製品の出土量が多い点が注目できる。以下、須恵器（99～140）、土師器（141～176）、土馬（177・178）、ト骨（179）、砥石（180・181）、木簡（182～187）、木製品（188～227）の項目に分けて紹介する。

須恵器 (Fig.77) 99～140はV層から出土した須恵器である。坏蓋・坏身（99～121）の比率が多く、他の器種は希少である。帰属時期が明確な坏蓋・坏身に注目しておこう。遠江IV期に位置づけられる「坏H」や「坏G」の系統に連なるものが少数ながらみられる（99～106）。これらの遺物は下層のⅦa層からの混入品とみることもできようが、V層の堆積開始期が遠江IV期末葉に一部かかることを示している可能性も否定できないだろう。古相を示す有台坏身（113）の存在も示唆的である。ただし、V層出土須恵器の主体は、摘蓋（107～112）、有台坏身（114～121）、無台碗（122～131）が組み合う遠江V期であることには変わらない。

137～139は須恵器の坏蓋・坏身を転用した硯、140は中空把手付円面硯である。今回の調査で出土した専用硯は、140の1点のみで残りは転用硯であった。

土師器 (Fig.78) 141～176はV層から出土した土師器である。坏(141～148)、甕(149～155)、碗(156～170)などの器種がみられる。坏には暗文が施されるものがある(142・148)が、無文のものも多い。甕は良好に遺存するものが少ない。149といった混入品とみられる個体や150・152のような壺とみられる個体を除くと、その量は極めて少ないといえよう。甕が少ない傾向は、上層のIV b層においても同様であり、VII b層・VII a層との組成比の違いが明瞭である。

171～174は、甑もしくは把手付鉢の雛形である。いずれも粘土を添付した把手の表現がみられる。175・176は高盤形の雛形である。

土馬 (Fig.78) 177・178は土馬(土製馬形)である。双方ともに弓形の体部に琴柱形の脚部が前後に接合されて形づくられている。製作技法が似るだけでなく、出土位置も近接していることから、両者は二個一組で用いられた可能性が高い。177の頭部には、小さい粘土の添付がみられ、目もしくは耳を表現したのと考えられる。178の頭部とみられる部分には粘土が剥離した痕跡がみられる。

卜骨 (Fig.78) 179は卜骨である。片方を欠損するが、全体形はほぼうかがうことができる。鹿骨を薄くしたものをうい、表面には入れ違いに長方形の窪み(鑽)が入れられている。いずれの窪みにも先端が十字形をした焼火箸をあてた痕跡が確認できる。

砥石 (Fig.78) 180・181は砥石である。180は凝灰岩製、181は軽石製である。180には垂下用の穿孔がみられ、提砥であったことが分かる。

木簡 (Fig.79) V層から、総数6点の木簡(182～187)が出土し、発見順に鳥居松1号～6号木簡と名付けた。詳細は別項(第3章4)で触れるので、概略のみ記したい。3号木簡は、糸を貸与した証文の木簡であり、郡家が繊維製品の生産管理に関与していたことを示す。4号木簡はイネの出挙に関わるとみられる「サト名+人名」の木簡、5号木簡は何らかの賃借関係の発生に際して発行された木簡とみられる。紀年銘木簡が2点(3号、5号)含まれている。

木製品 (Fig.80～84) 188～227はV層から出土した木製品である。V層から出土した木製品には、人形(188)、斎串(189～199)、馬形(200～202)、舟形(203)、曲物(204～208)、背負子(209～211)、鋏(212・213)、堅杵(214)、田下駄(215)、木錘(216)、不明品(217～227)がある。

188は人形である。頭部は5角形に成形され、両手の表現がみられる。木材はアスナロ属を用いている。189～199は斎串である。上下ともに完存するもの(196・197)、上部が遺存するもの(189～194)、下端部が遺存するもの(195・199)がある。なお、切り込みがみられないもの(192・198)は、斎串でない可能性も考えられる。木材は、大多数がヒノキ属もしくはアスナロ属で、199の1点のみコウヤマキを用いている。

200～202は馬形である。いずれもM字形をしているが、200は頭部に比べ尾が長い形態である。3個体とも、腹部に切り込みがみられ、201には支柱が残存している。木材は200・202がヒノキ属で、201がアスナロ属を用いている。203は舟形である。大振りなつくりであるが、上面には一条の沈

線が入れられている。木材はアスナロ属を用いている。

曲物は円形のもの（204～206）と楕円形のもの（207・208）の2種がみられる。204の曲物底板と205の曲物側板は組み合せて出土している。206は別の製品に転用されており、側辺に穿孔列がみられる。207は両端に突起がある大型の楕円形曲物底板である。木材は、アスナロ属を用いている。

209～211はY字形をした木製品で、伊場遺跡の報告書の分類に合わせ「背負子」とした。伊場遺跡群では類例が数多く知られているもので、背負子としての復原案が示せないことから、「Y字形木製品」と呼称した上で、機織具の一部や、舟の櫂受けもしくは帆立柱の部材といった可能性も示されている。Y字形の又の部分と、その反対側に顕著な擦痕が認められ、又の部分と直交する基部には2箇所のかぎりが入れられている。木材はいずれもマツ属（二葉松類）を用いている。

212・213は曲柄平鋏である。213の先端には鉄製鋏先が装着されていた痕跡が残る。木材はともにコナラ属アカガシ亜属を用いている。214は竖杵である。搗き部と握り部への移行部分が遺存している。搗き部端は使用痕が著しい。木材はクヌギを使用している。215は田下駄（大足）である。杵型田下駄の縦杵で、両端が完存する。両端には手綱を緊縛した痕跡がみられる。紐擦れが顕著な側を下として使用されたとみられよう。11箇所あけられた方形の孔には、横棧の一部や楔の木材が残存している箇所がある。木材は、アスナロ属を用いている。216は木錘である。三角柱形の本体の側辺中央にかぎりが入れられている。木材はアスナロ属を用いている。

217～227は不明品である。221は先端に突起が形成され、本体中ほどの側辺に弧状のかぎりが入れられている。223は板状の側辺に2箇所に刻みがみられる。編台の可能性があるだろう。224は棒状の先端を扁平に加工している製品である。棒状部も底面が扁平に加工されており、板状を呈する端部には穿孔が3箇所みられる。穿孔された孔には別部材の木釘が遺存している。木材はヒノキ属を用いている。225～227は先端が鋭利に加工された棒状品である。

年 代 V層から出土した木簡の紀年が己酉年（709）と神亀元年（724）であることが注目できる。須恵器も遠江V期に主体があり、概ね8世紀前半に中心をおいてよい。Ⅶa層からの若干の混入は認められるが、V層出土品は、時期的にまとまりがある遺物群と捉えられる。

（6）小 結

V層の堆積年代は、遠江V期にほぼ併行する。2点の紀年銘木簡が示す実年代は709年と724年であり、8世紀前葉と捉えられている土器の年代観とも整合する。出土遺物の組成は、Ⅶ層と比べると変化が著しい。V層中から出土する土器の量が比較的少ない点は、遺跡の性格が転換したことを示唆しているだろう。とくに、日常の煮沸具である土師器甕の出土量が、Ⅶ層と比べて極めて少ない点は象徴的である。土器の様相の変化と呼応するように、V層出土遺物には官衙的性格をもつ出土品が数多くみられる。6点を数える木簡をはじめ、木製祭祀具といった遺物の存在は、鳥居松遺跡が敷智郡家の一角にあることを明確に示している。

伊場大溝内における貝塚のあり方は、伊場遺跡や梶子遺跡と共通する。貝塚SS02・04から出土した製塩土器は、いずれも渥美半島を中心とした三河湾沿岸地域から搬入されたものとみられる。とくにSS02における製塩土器の出土量が伊場遺跡群の他の出土地の中でも突出している点は注目

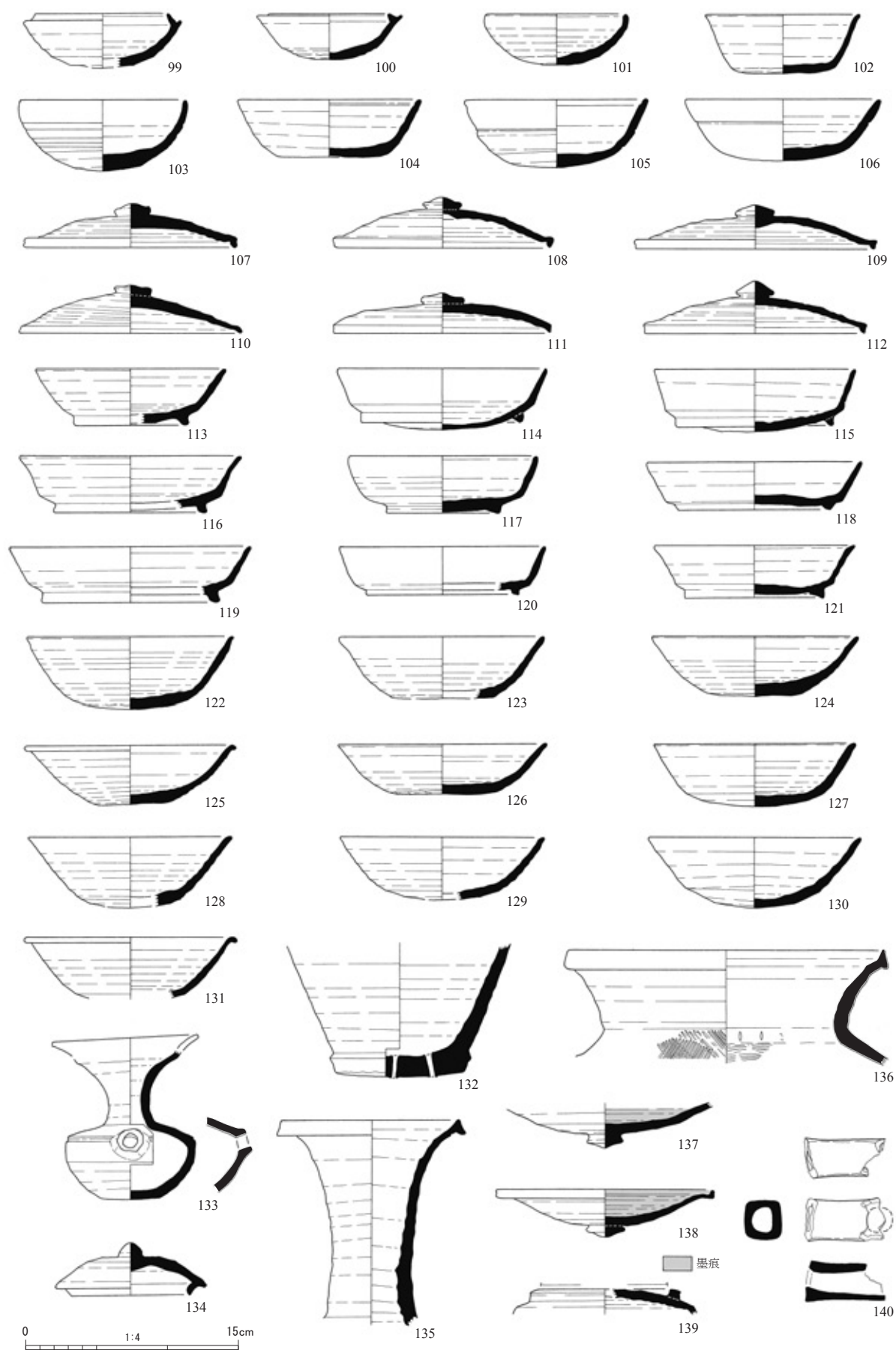


Fig.77 V層出土遺物 (1)

4 V層の調査

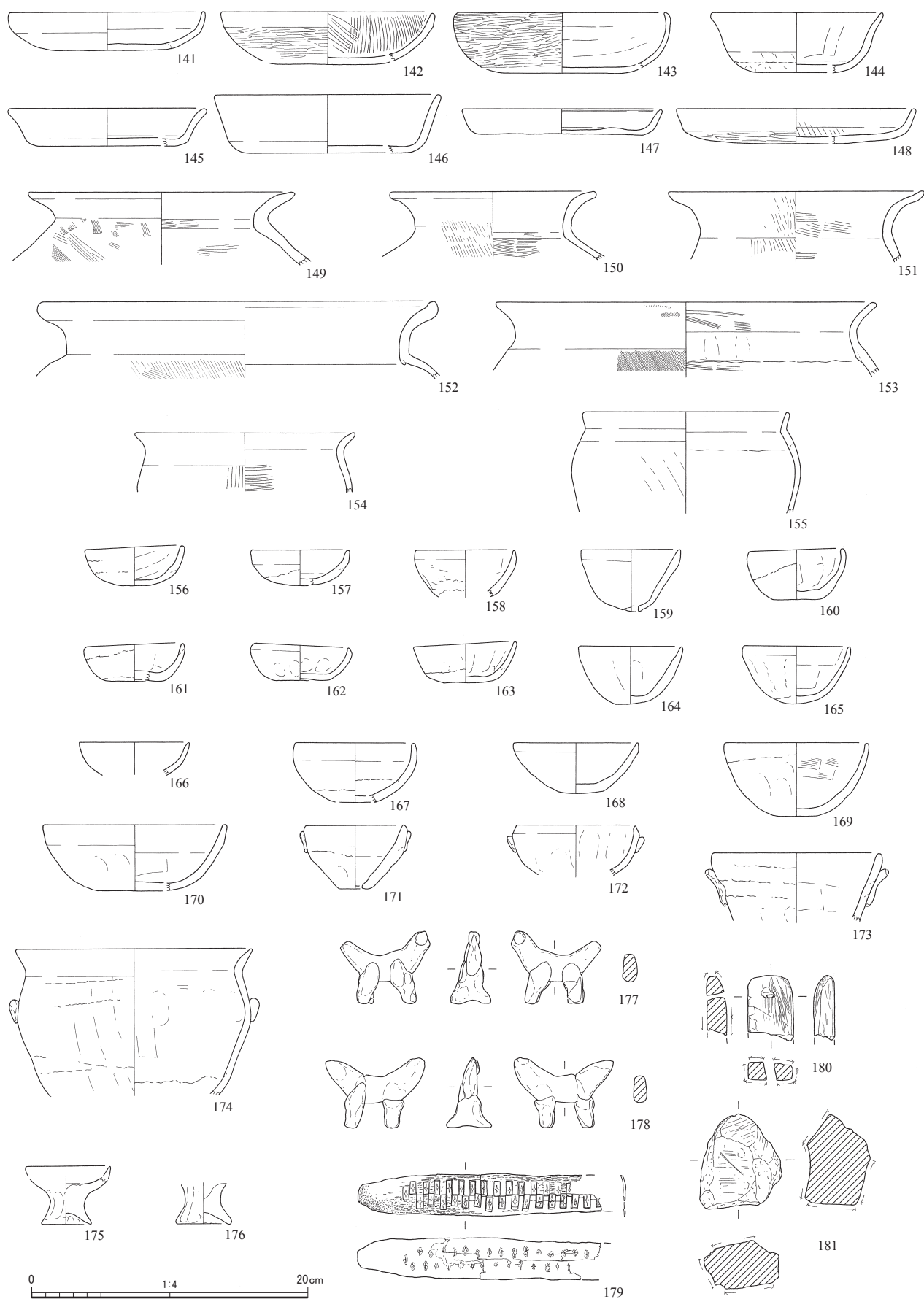


Fig.78 V層出土遺物 (2)

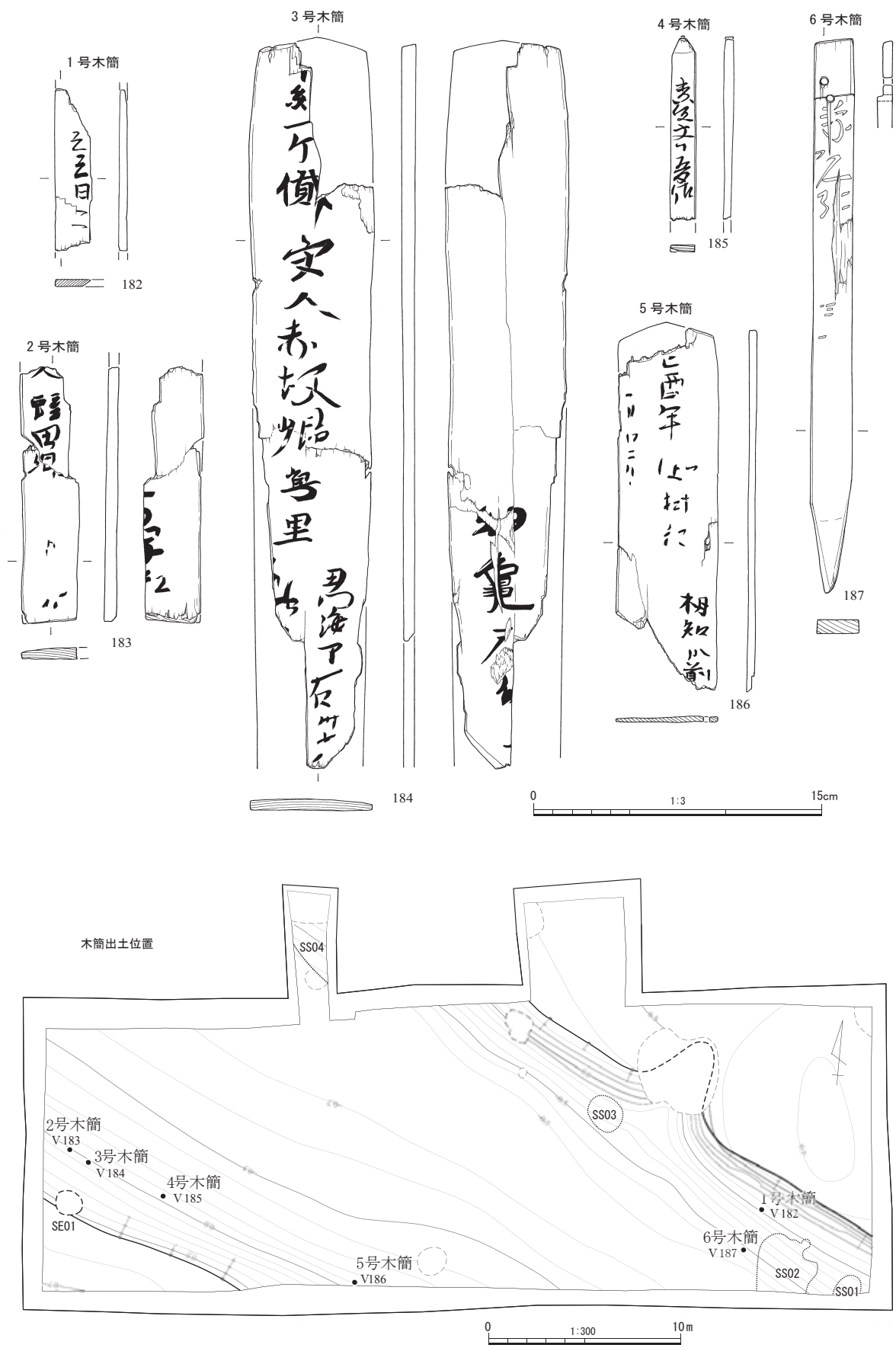


Fig.79 V層出土遺物 (3)

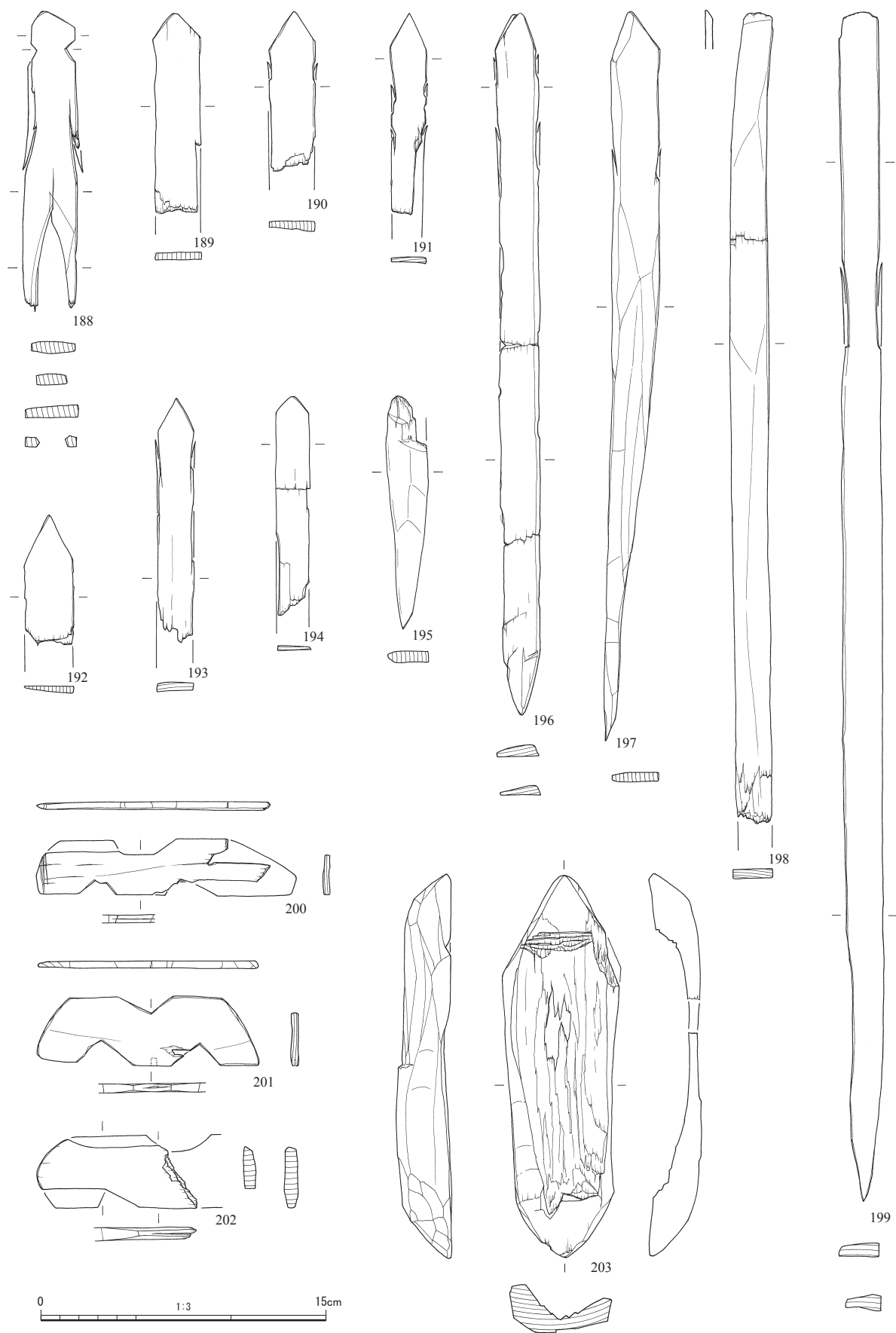


Fig.80 V層出土遺物 (4)

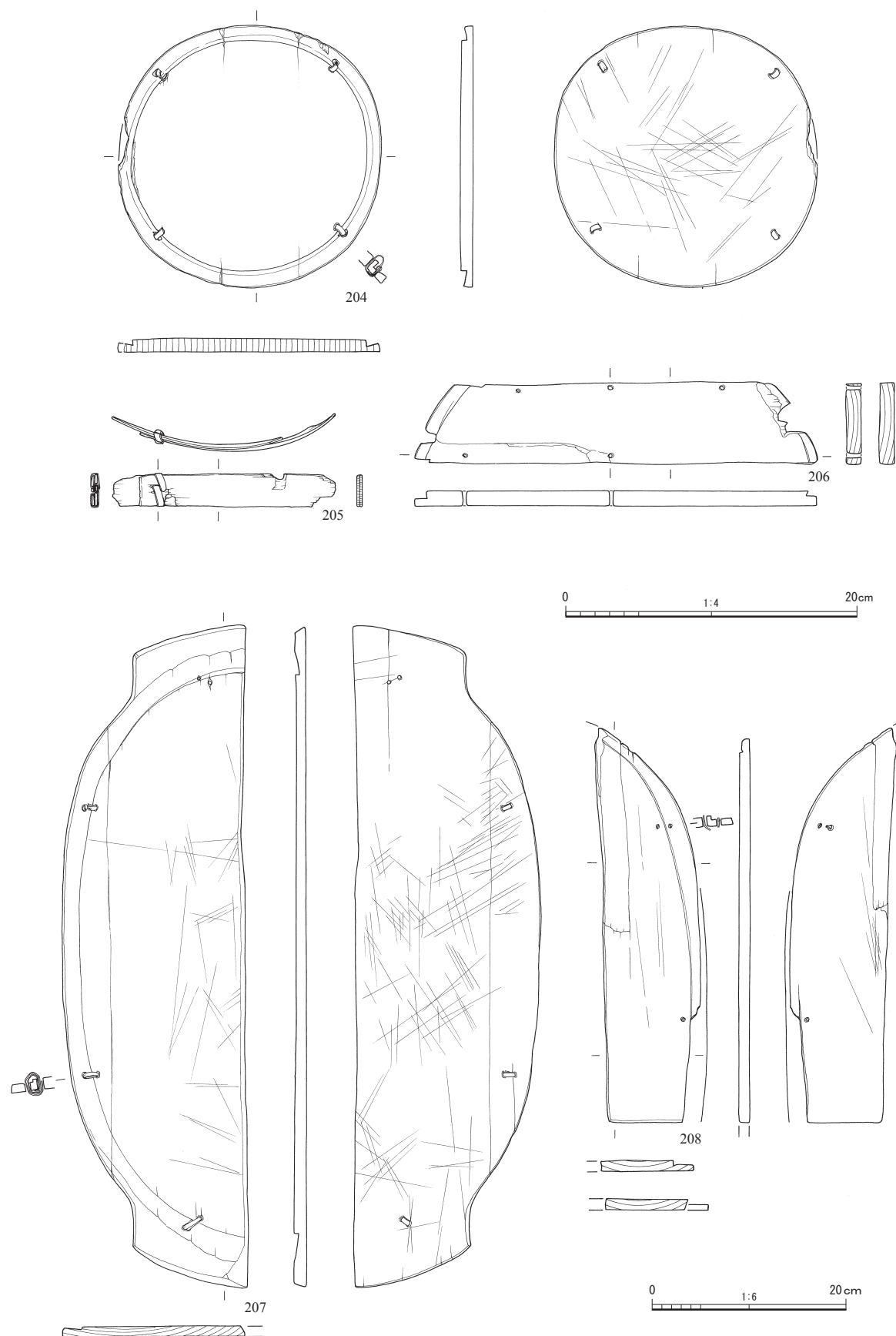


Fig.81 V層出土遺物 (5)

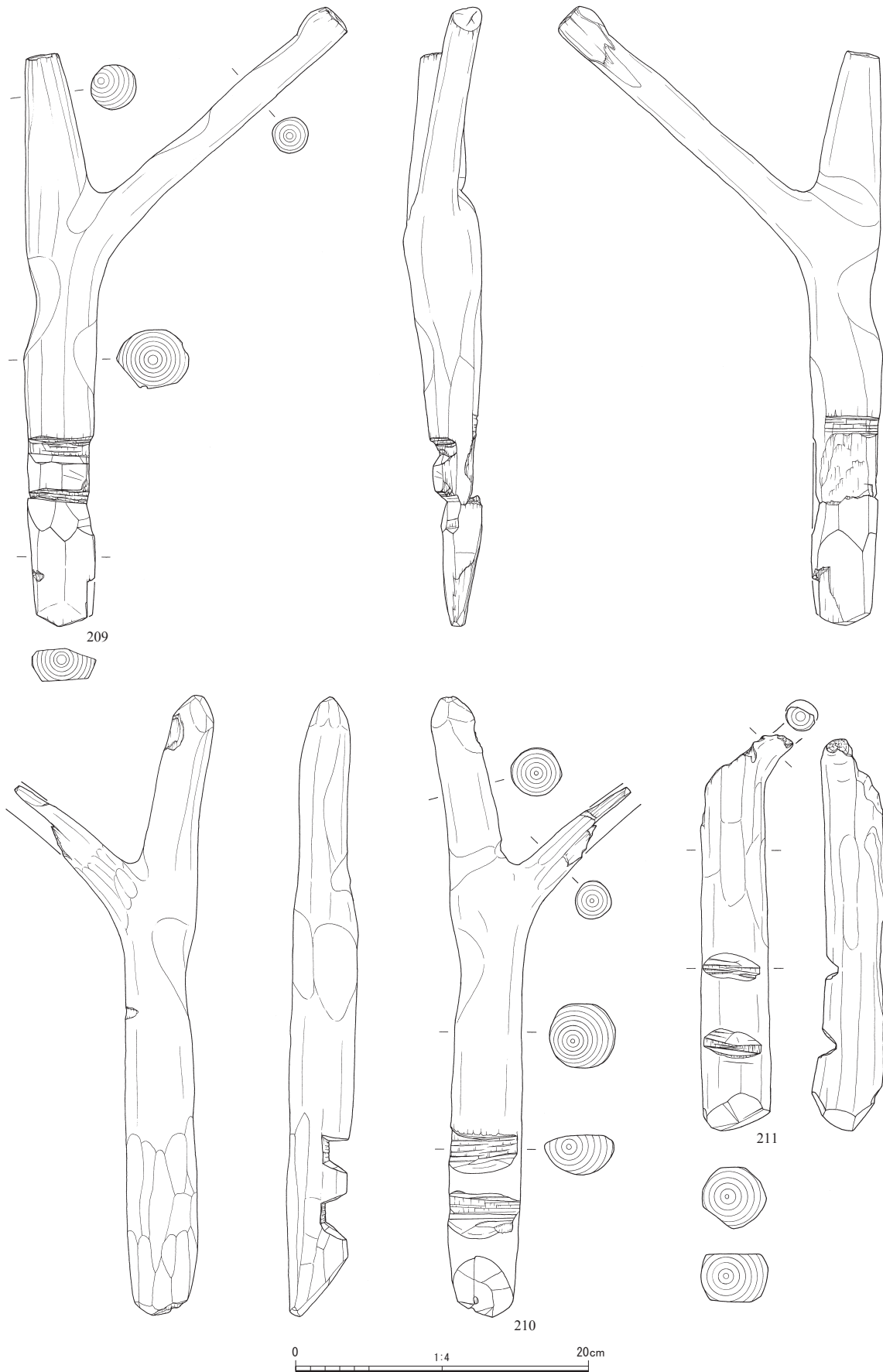


Fig.82 V層出土遺物 (6)

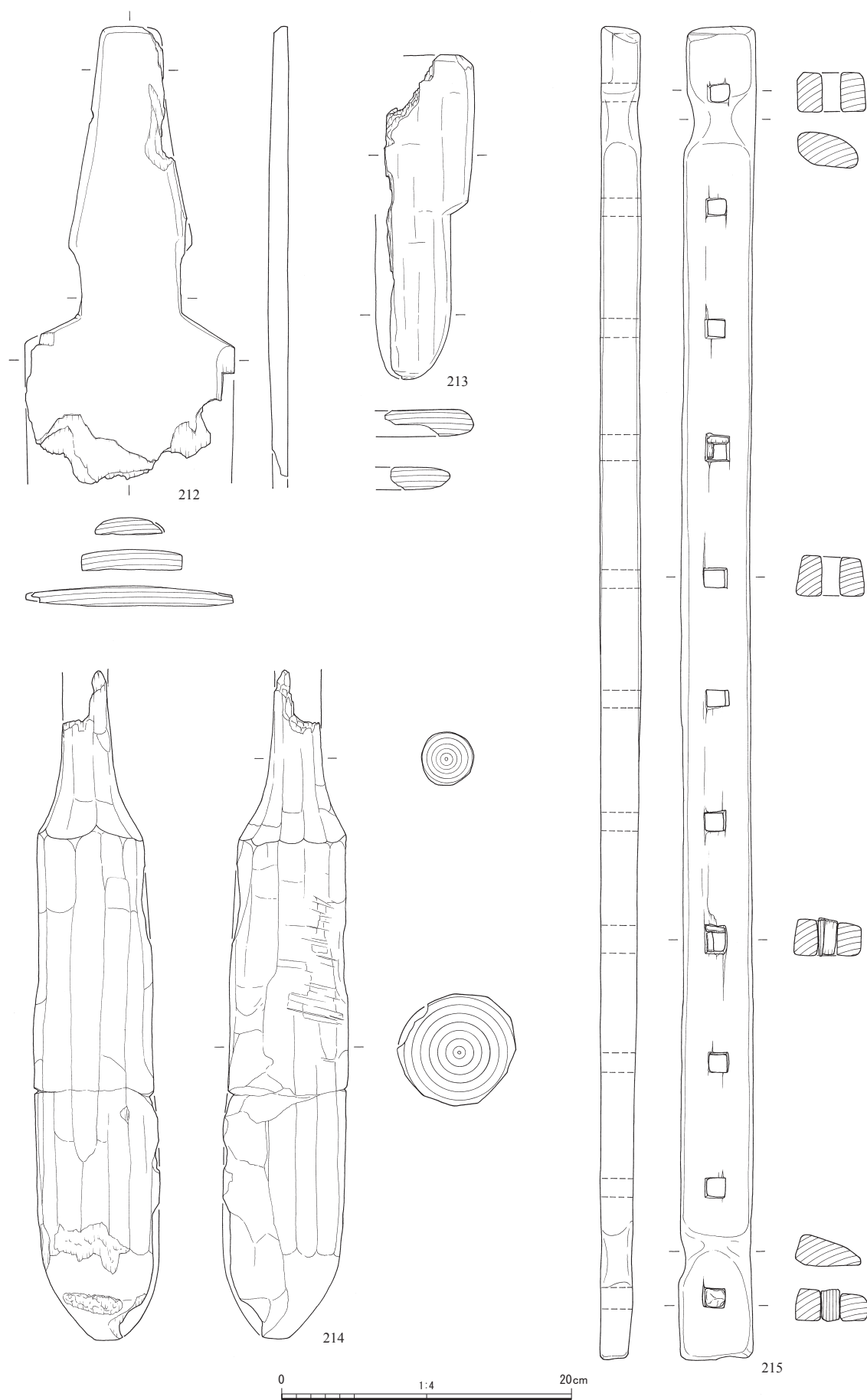


Fig.83 V層出土遺物 (7)

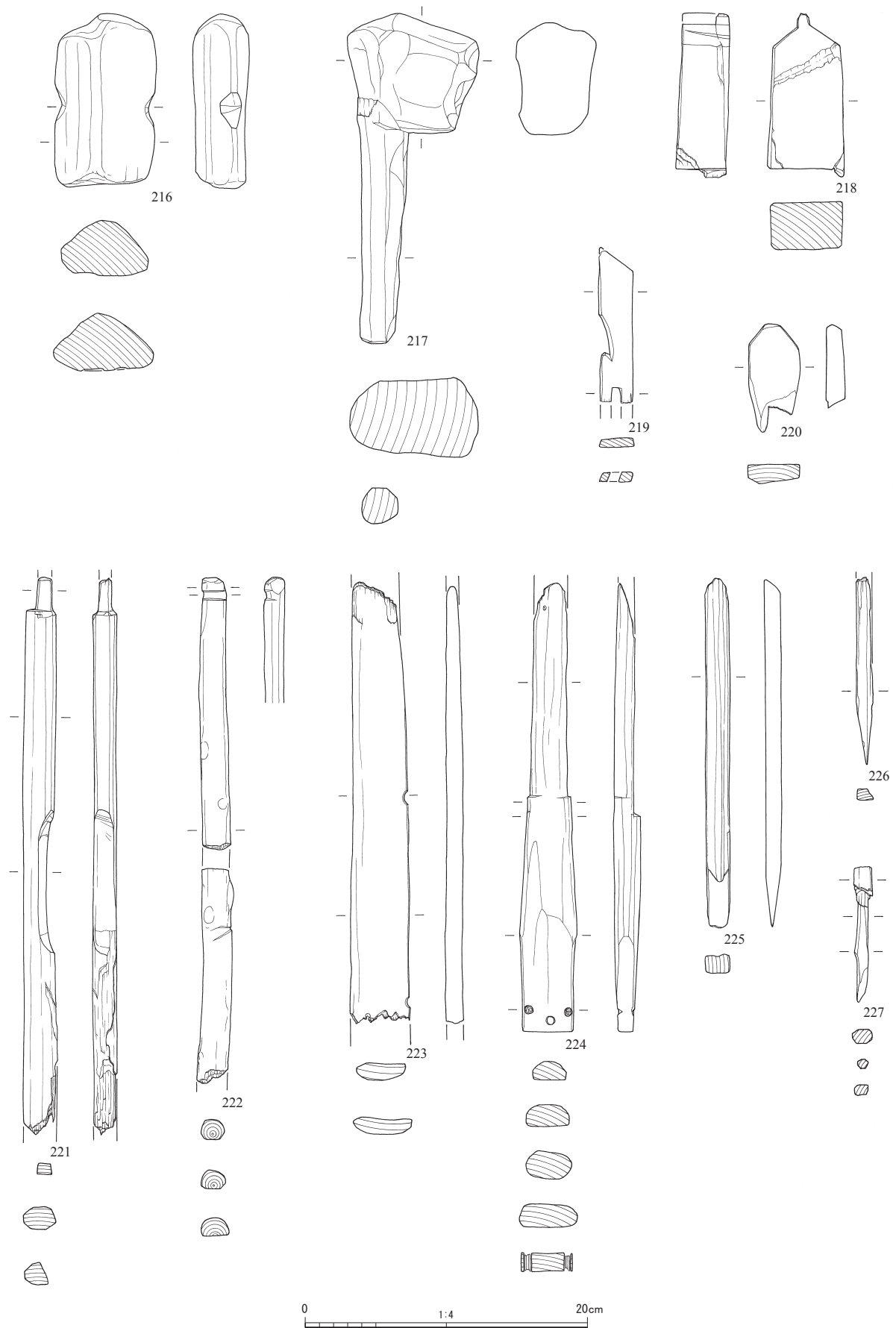


Fig.84 V層出土遺物 (8)

5 IV b層の調査

(1) IV b層の概要

IV b層は、暗茶灰色を呈する層位で、砂層は全く混ざらない。奈良時代後葉～平安時代前葉（8世紀後葉～9世紀前葉）を中心とした時期の堆積層である。砂層が混入しないことからうかがえるように、IV b層が堆積した時期には伊場大溝の水量は減少し、常時は湿地帯のような環境にあったと推定できる。IV b層の南岸には井戸状施設（SE01）が築かれている。また、北岸の貝塚上層には、土器や木製祭祀具の集積がみられた。これらの遺物の集積はSX01～04とし、その他のIV b層出土遺物とは個別に取り扱う。

IV b層から出土した遺物の中では、11点の「稲万呂」墨書土器、人面墨書の人形・土器などが注目できる。V層で出土した木簡とともに、敷智郡家に関連する遺物といえるだろう。

(2) 伊場大溝の形状

IV b層が堆積した伊場大溝の本来の形状は、Fig.85 に示すものである。底面の標高は-0.4mほどで、V層と同様に目立った凹凸はない。北側の斜面の傾斜が南側の斜面の傾斜と比べ急角度である。IV b層堆積時の伊場大溝の水量は相当少なかったとみられるが、水が流れる部分は北側斜面に偏っ

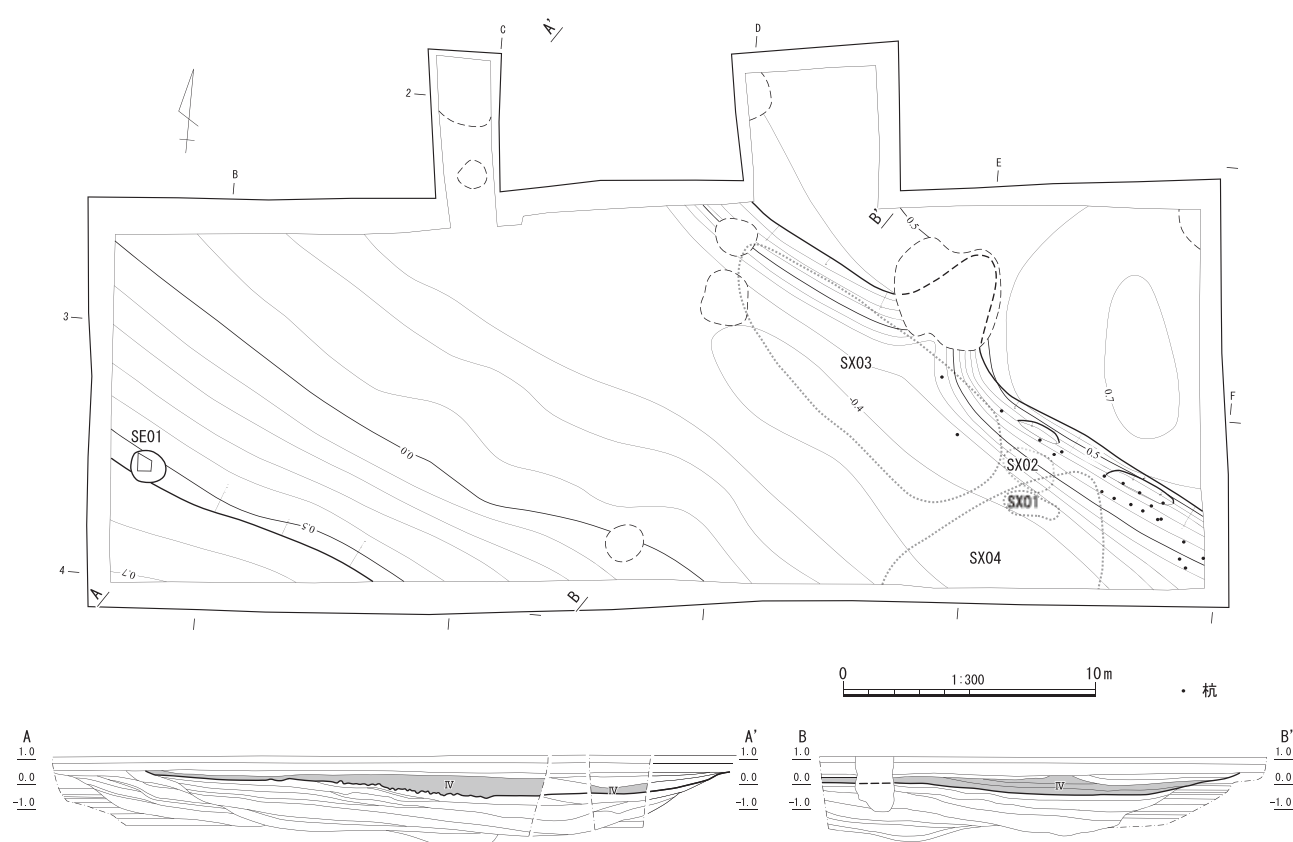
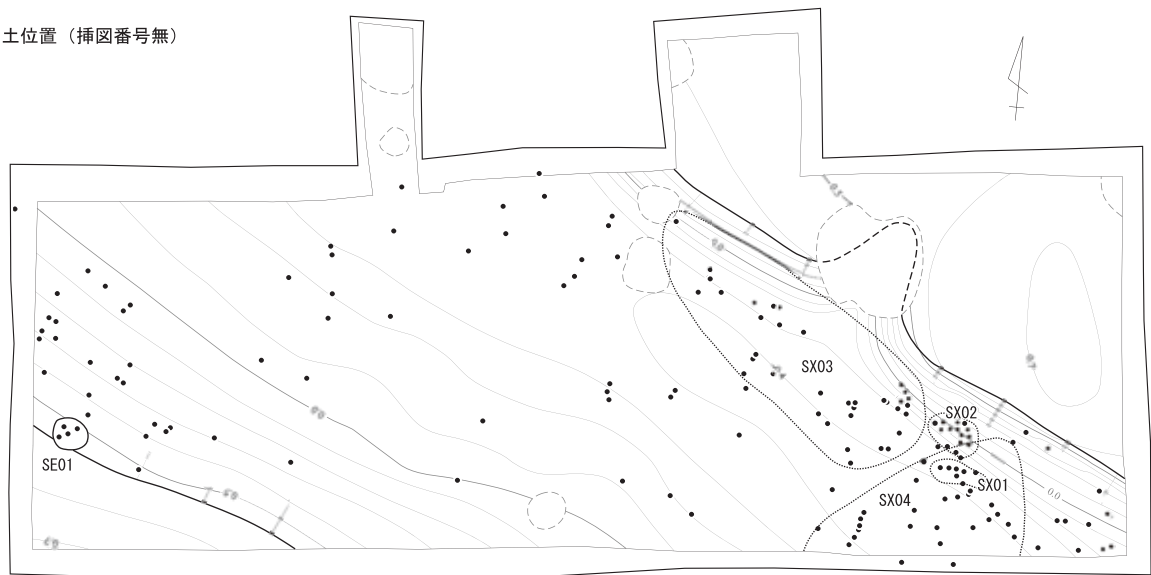


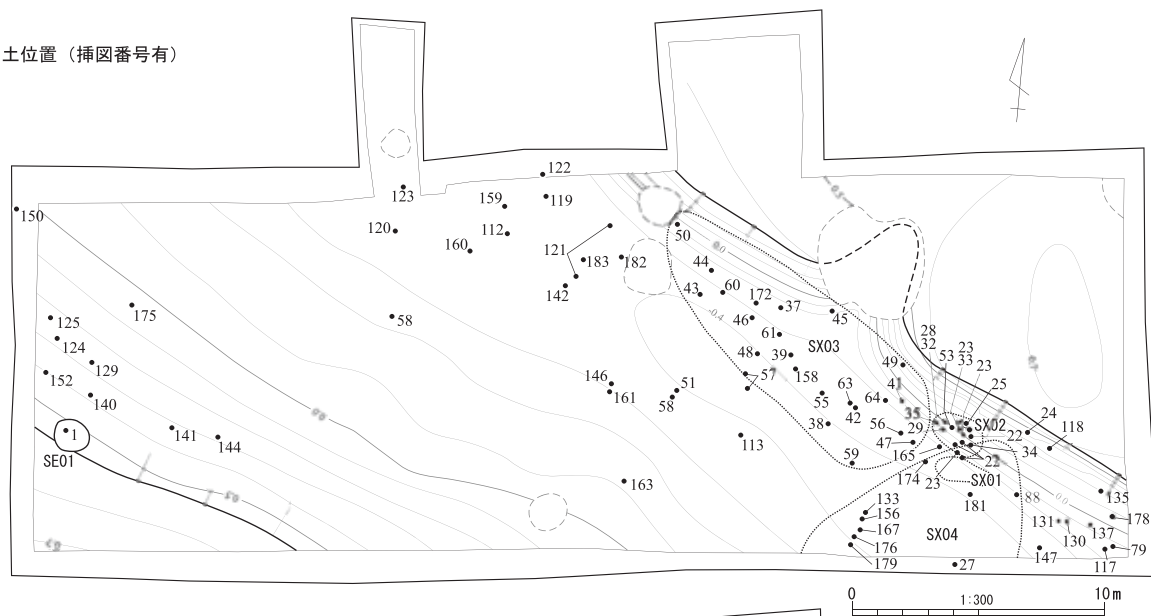
Fig.85 伊場大溝IV b層

5 IVb層の調査

遺物出土位置（挿図番号無）



土器出土位置（挿図番号有）



石製品・木器等出土位置（挿図番号有）

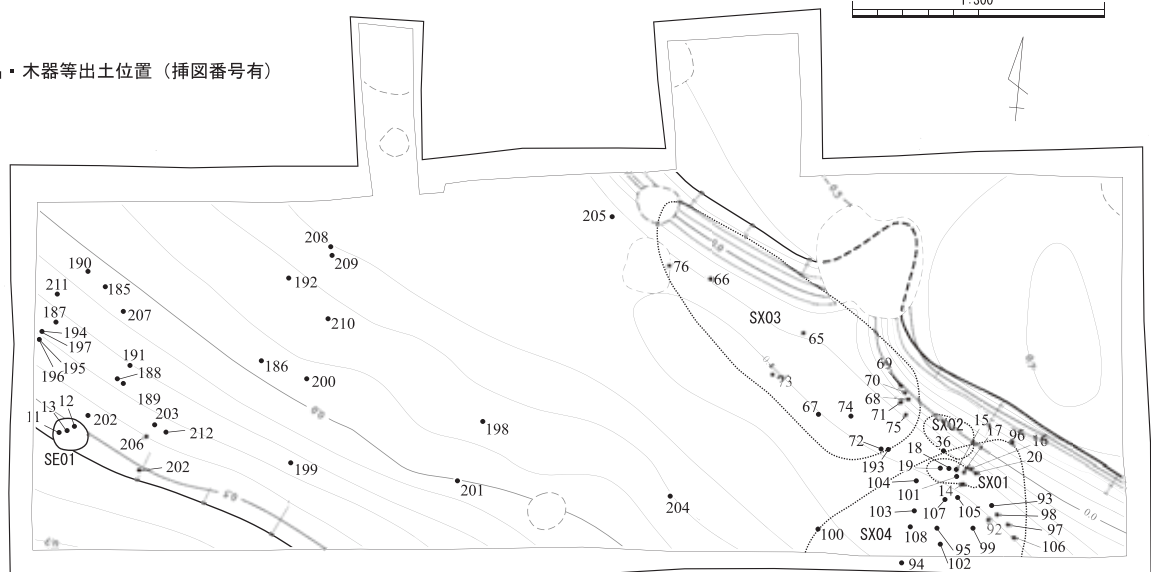


Fig.86 IVb層における遺物出土位置

ていたと考えられる。IV b 層の堆積が認められる部分の幅は 22m 程度であり、伊場大溝の幅に相当する。また、地表から底面までの深さは約 1.1m である。

伊場大溝の北岸にはV層にみられた階段状施設や杭列が存続しているとみられる。水際に近寄りやすい階段状施設や護岸施設の存在は、遺物集積 SX01 ～ 04 の形成ともかかわると捉えられよう。

(3) 遺物の出土状態

出土位置の傾向 IV b 層に含まれる遺物の出土位置は、V 層同様に伊場大溝の両岸に偏る傾向がみられる。南北両岸から伊場大溝中にもたらされた遺物は比較的明瞭に分離することができる。遺物が比較的集中するのが、発掘区の東側 SX04 とした範囲と、発掘区の西側 SE01 の近辺である。

土 器 上述の出土位置の傾向どおり、V 層から出土する土器は南北の両岸に集中する。とくに北岸は SX02 といった土器集積を典型にして、遺物の集中度が高い。SX01 ～ 04 とした遺物の集積がみられ、この中には墨書土器が高い密度で含まれる。11 点におよぶ「稲万呂」墨書土器は、土器集積 SX03 を中心に東西 20m ほどの間のほぼ同一層位から出土している。この中には、「土殿」、「福刀自」、「廣」と書かれた墨書土器も含まれる。

南岸の井戸 SE01 近辺から出土した土器群（124・129・132・134・140・148・152 など）についても、ある程度のまとまりを認めてよい。また、須恵器の広口壺 141・144 はともに完形に近く、出土位置も近接している。二個一組で扱われ、伊場大溝内にもたらされた可能性が指摘できるだろう。

土師器甕を用いた人面墨書土器（64）は、北岸の遺物集積 SX03 から、土師器碗を用いた人面墨書土器（182・183）は SX03 に近接する北岸から 2 個体がまとまって出土している。

その他の遺物 斎串や人形、舟形などの木製祭祀具は、伊場大溝の南北両岸から出土しているが北岸の出土量が多い。北岸にある SX01 では人面の墨書がある人形と斎串が集中していた。使用状況を示す出土状態といえる。また斎串は、SX03・04 とした北岸の遺物集積中からもまとまって出土している。

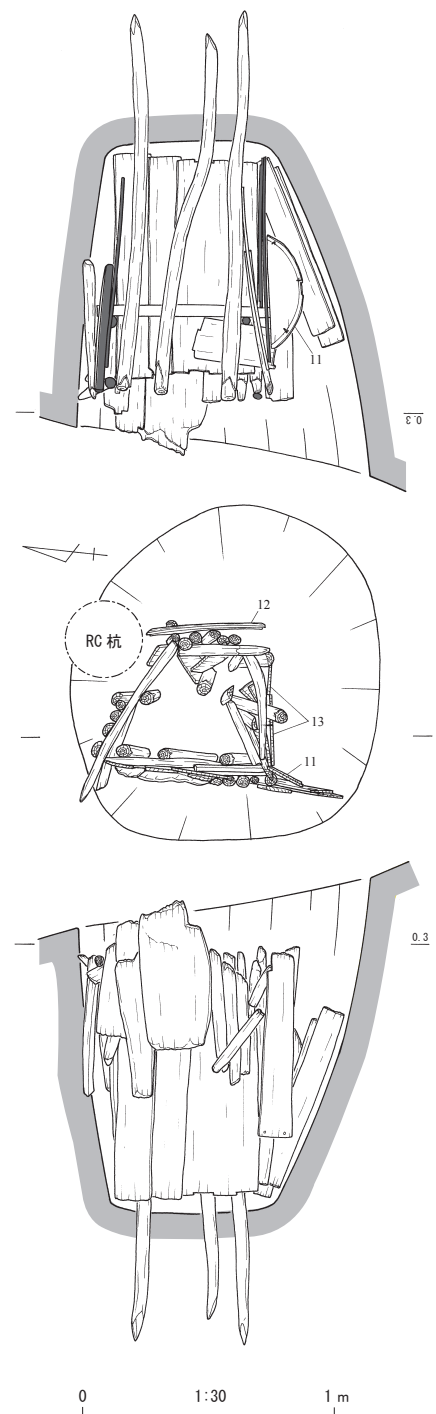


Fig.87 SE01 実測図

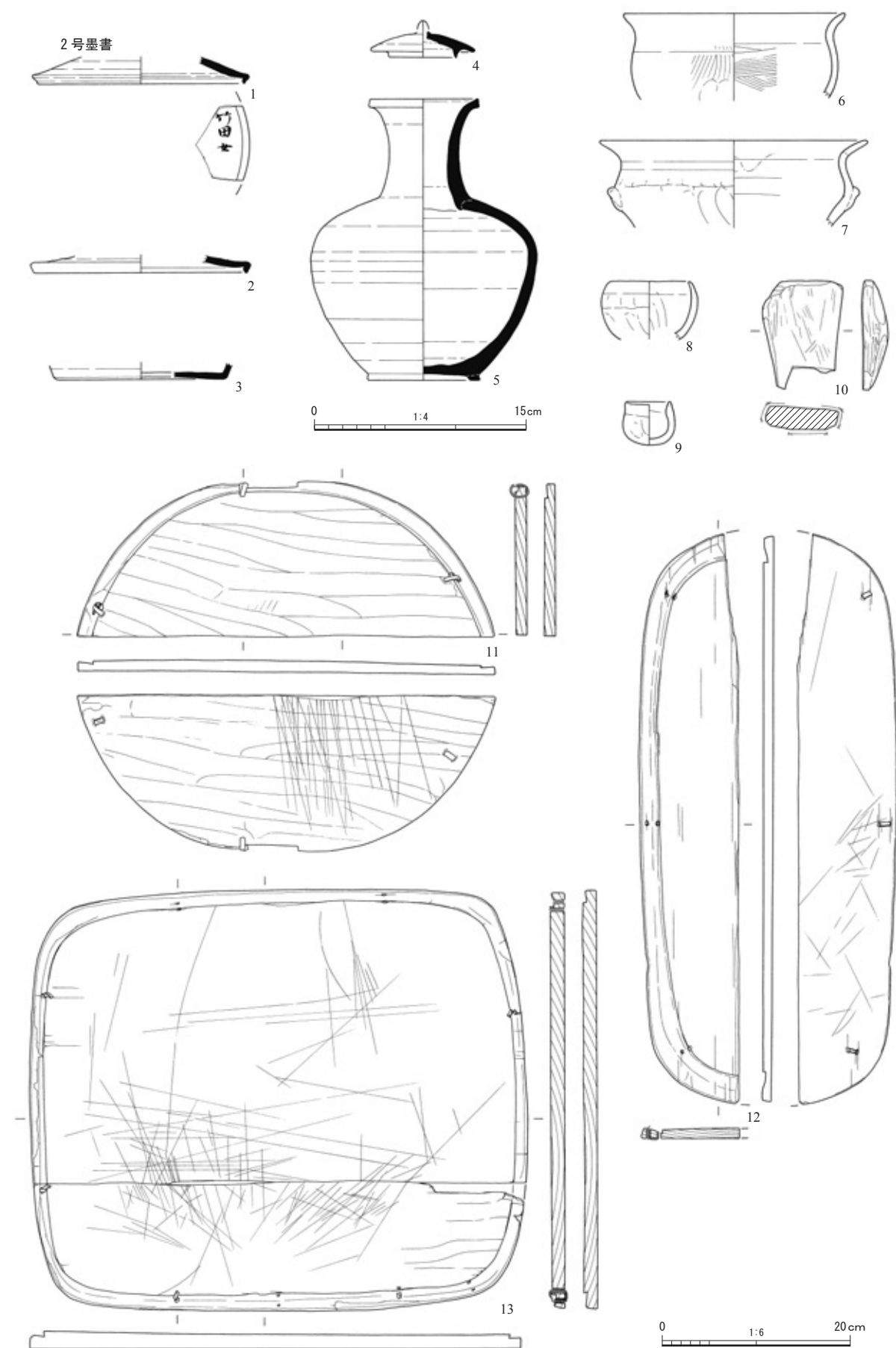


Fig.88 SE01 出土遺物

(4) 井戸

SE01 (Fig.87) 伊場大溝の南岸の斜面において井戸状の施設を検出した。現代のコンクリートの建物基礎杭によって変形しているが、ほぼ全体形をうかがうことができる。方形に枳板を並べ、内側に杭を打ち込んで枳板を固定していた。井戸枳としては粗雑な造りで、水溜め程度の施設であったとみられる。用途は明確ではないが、ここでは、便宜的に「井戸」という表現を用いる。枳板の規模にあわせ、長径 1.3m ほどの平面円形の土坑が掘削されている。土坑の深さは、検出面からおよそ 1.2m ほどである。枳板は比較的丁寧に加工された材を用いていたが、中には曲物底板 (12・13) を転用している部分があった。また、枳木の外側にも曲物底板 (11) が落ち込んでいた。出土遺物は多くないが、1～10 の遺物が主に枳板の外側において確認できた。

SE01 出土遺物 (Fig.88) 1～13 は SE01 から出土した遺物である。1 は須恵器坏蓋で、内面に「竹田女」の墨書がみられる。7 は土師器の把手付鉢の雛形、8 は土師器小碗、9 は鉢形である。10 は粘板岩製の砥石であり、4 側面に使用面がみられる。11～13 は曲物底板である。11 は円形、12・13 は隅丸方形を呈する。12 は 2 片に分かれて転用されていたが、接合してほぼ完形になった。木材はアスナロ属を用いている。箱坏 (3) を含むことから、SE01 出土遺物は遠江Ⅴ期から遠江Ⅵ期の移行期頃に中心が求められよう。

(5) 遺物集積

概要 伊場大溝の北岸には、木製祭祀具や土器が集中して出土する区域が認められた。これら遺物集積を SX01～04 とし、一部、遺物の出土状態図を作成した。このうち、SX01・02 は遺物どうしの近接度が高く、廃棄時の一括性が高い出土状態が確認できた。いっぽう、SX03・04 は遺物相互の間隔が比較的離れており、集積が形成されるまでにある程度の時間幅を認めてよいような出土状態であった。

SX01 (Fig.89) 伊場大溝北岸の -0.1m ほどの緩やかな斜面上で検出できた木製祭祀具の集積遺構である。検出した位置は、Ⅳb 層の最上層にあたるため、Ⅳb 層の中でも比較的新しい時期（平安時代前葉）に形成されたものとみられる。人面墨書がある人形 2 点 (14・15) と、斎串 5 点 (16～20) で構成されている。これら木製祭祀具の出土位置は互いに近接しており、祭儀を実施した状態を保ったまま埋没したものと推定できる。

人形は全長 22cm ほどのもの (14) と、11cm ほどのもの (15) があり、ともに近接した位置で頭部を上に向けて出土した。とくに 15 は、頭部が立った状態で埋没しており、人形が立てられていた可能性が指摘できる。斎串も 17 の出土状態に表れているように、斜面に差し込まれて立てられていたとみてよいだろう。

SX01 出土遺物 (Fig.90) 14～20 は SX01 から出土した遺物である。14・15 は人面の墨書がある人形である。ともに手を表現した切り込みはみられない。両者ともに頭部は冠が表現されているとみることもできる。14・15 とともに、首から体にかけて外形に沿った 2 条の線が書き込まれている。衣服とは異なる表現とも解釈できるが、何を表したのか明確でない。

16～20は斎串である。16・17は上下とも完存する。側辺の上下2方向に切り込みがみられる形態で共通性が高い。木材は14、16～18、20がアスナノ属、15がヒノキ属を用いている。

SX02 (Fig.89) SX02は、伊場大溝の北岸斜面、SX01の北側に近接して検出できた土器集積である。伊場大溝V層やIVb層中では、土器がまとまって出土することが稀であり、SX02がほとんど唯一の土器集中箇所といえる。須恵器の坏と長頸壺に加え、土師器の小碗がまとまって出土しており、何らかの儀礼を行った痕跡とも解釈できる。なお、SX02を確認した位置は、IVb層の中では比較的深いこと、出土遺物が示す時期も古いことから、SX02はV層に帰属させるほうが妥当かもしれないことを付記しておく。

SX02 出土遺物 (Fig.90) 21～36はSX02から出土した遺物である。須恵器には摘蓋(21)、無台碗(22)、長頸壺(23・24)がみられる。なお、23は形態や色調の特徴から、猿投産の可能性がある。27～35は土師器の小碗である。口縁部が整うものと、比較的粗雑で波打つものが認められる。SX02出土遺物は、遠江V期から遠江VI期への移行期頃に中心が求められよう。

SX03 (Fig.91) SX02より西側の斜面から「稲万呂」と墨書した土器が集中的に出土した。「稲万呂」墨書土器が出土する範囲をSX03とし、遺物の出土状態を図化した。今回出土が確認できた「稲万呂」墨書土器のすべてが、SX03の範囲から出土している。

SX03からは37～78の遺物が出土した。14点の墨書土器(37～50)が集中している点が最も注目できるだろう。このほか、人面墨書土器(64)や斎串の集中(67～72)も同時代に執行された儀礼の痕跡を示すものといえよう。

SX03 出土遺物 (Fig.92～94) 37～78はSX03から出土した遺物である。「稲万呂」墨書土器(推定分を含む)は総数11点が出土した。稲粳を象ったような独特の記号の中に人物名「稲万呂」が墨書されている。「稲万呂」と墨書されているのは摘蓋の内側である場合(37～42)が多いが、坏身の底(43・44)、皿の底部(47)、高盤の上面(48)、土師器の皿もしくは坏(50)の底部などにもみられる。独特の記号を伴う「稲万呂」の墨書は特徴的である。37～40は筆跡も酷似し、同一人物の手による墨書の可能性が高く44・47なども比較的似た筆致といえるだろう。これに対し42は「万呂」の部分省略して記し、明らかに筆跡が異なる。遺存状態が悪いが43も同様の表記がなされている可能性がある。省略して記された墨書をもつ土器は型式的にも新しく(遠江VII-2期、9世紀前葉)、「稲万呂」墨書土器がある程度の存続期間を有していることが知られる。

このほか、SX03からは「上」・「上殿」と記された箱坏(45)、「福刀自」と記された双耳箱坏(46)、「廣」と記された短頸壺蓋(49)なども知られる。これら墨書土器は遠江VI期に中心があるが、平頂蓋(42)や箱坏(43～46)、高盤(48)などは遠江VII-1期まで降るとみることができる。「稲万呂」墨書土器の存続年代は、遠江VI-2期頃からVII-1期にかけてといえよう。実年代では西暦800年を境に前後数十年頃にあたるとみられる。

墨書土器以外の出土遺物としては、須恵器(51～60)、土師器(61～64)、鹿角(65)、鏃形木製品(66)、斎串(67～72)、曲物(73～78)がある。須恵器には51・52・57などの古相を示す遺物が含まれるが、概ね遠江V期後半の遺物群とみてよいだろう。箱坏を転用した硯(56)には朱墨痕が残る。人面墨書土器(64)は土師器の小型甕に人面を墨書したものである。

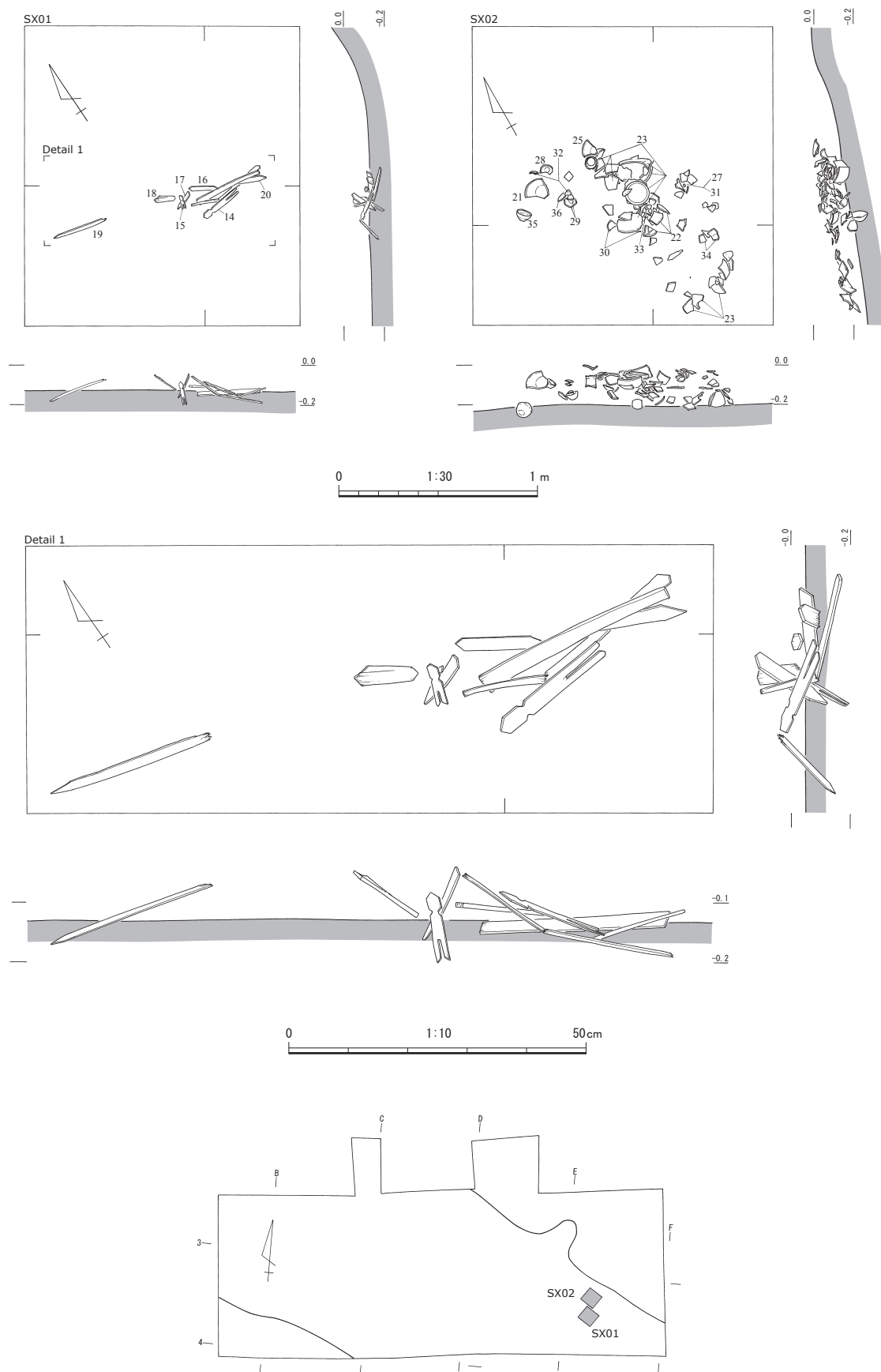


Fig.89 SX01・02 遺物出土状態

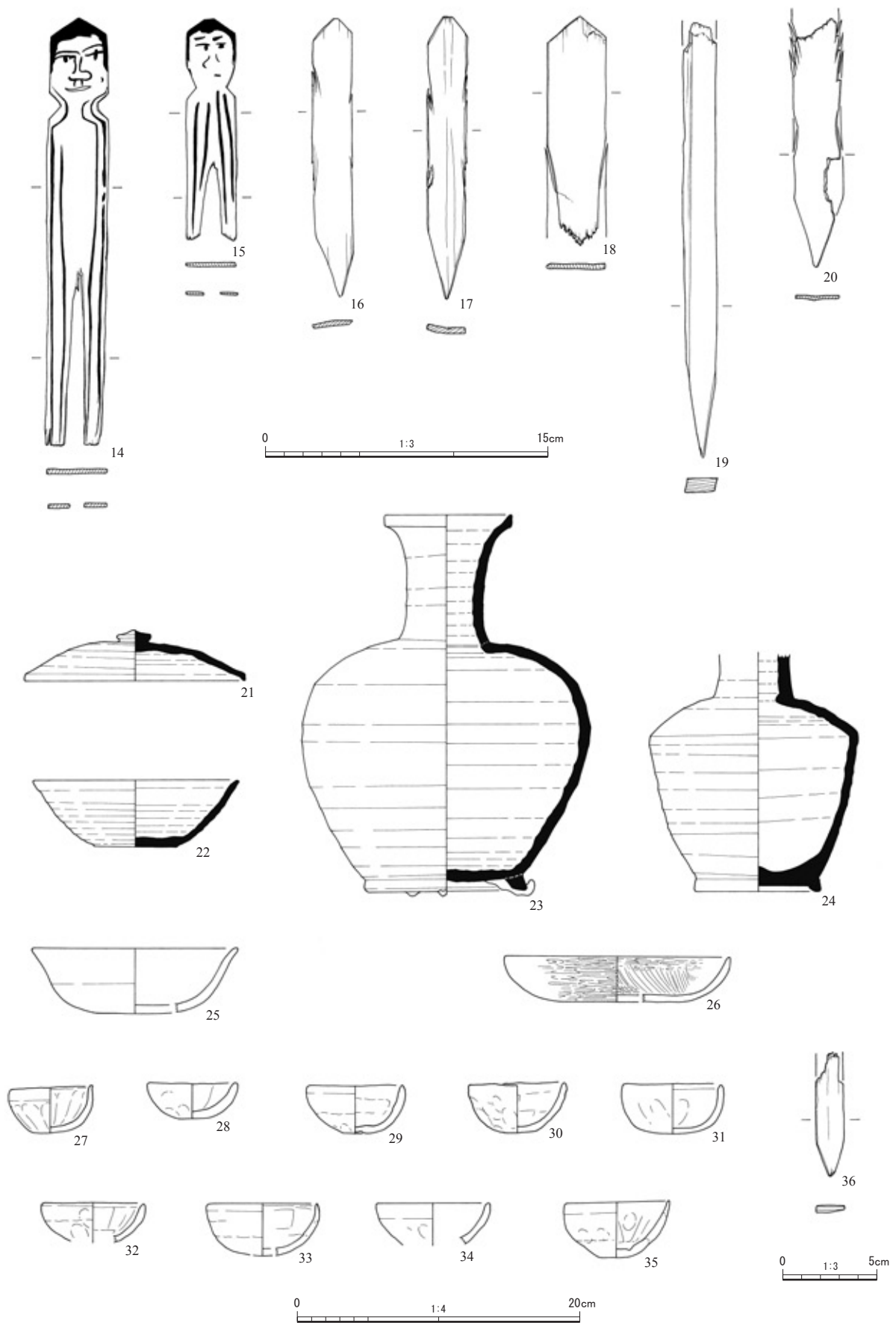


Fig.90 SX01・02 出土遺物
14～20：SX01 21～36：SX02

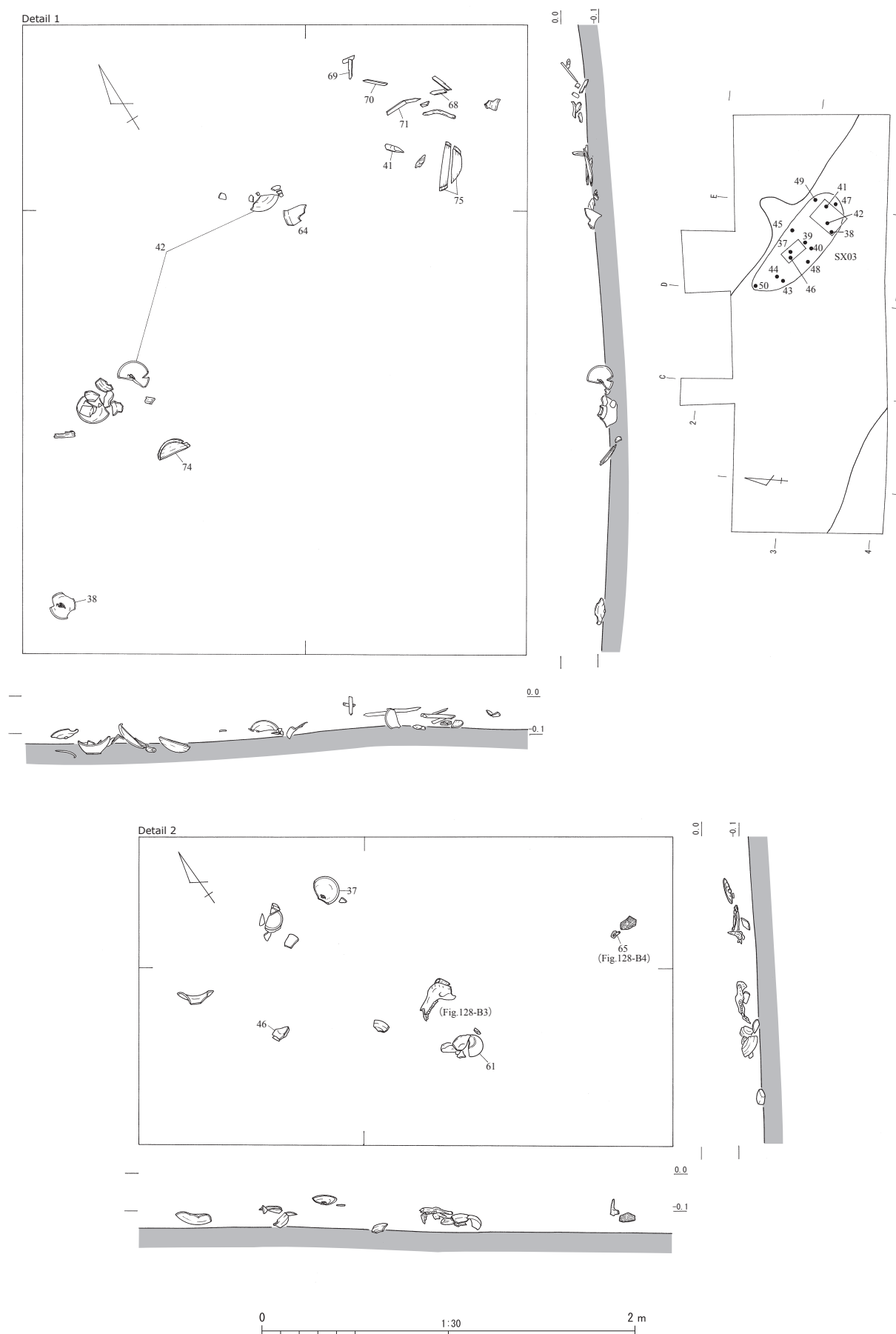


Fig.91 SX03 遺物出土状態

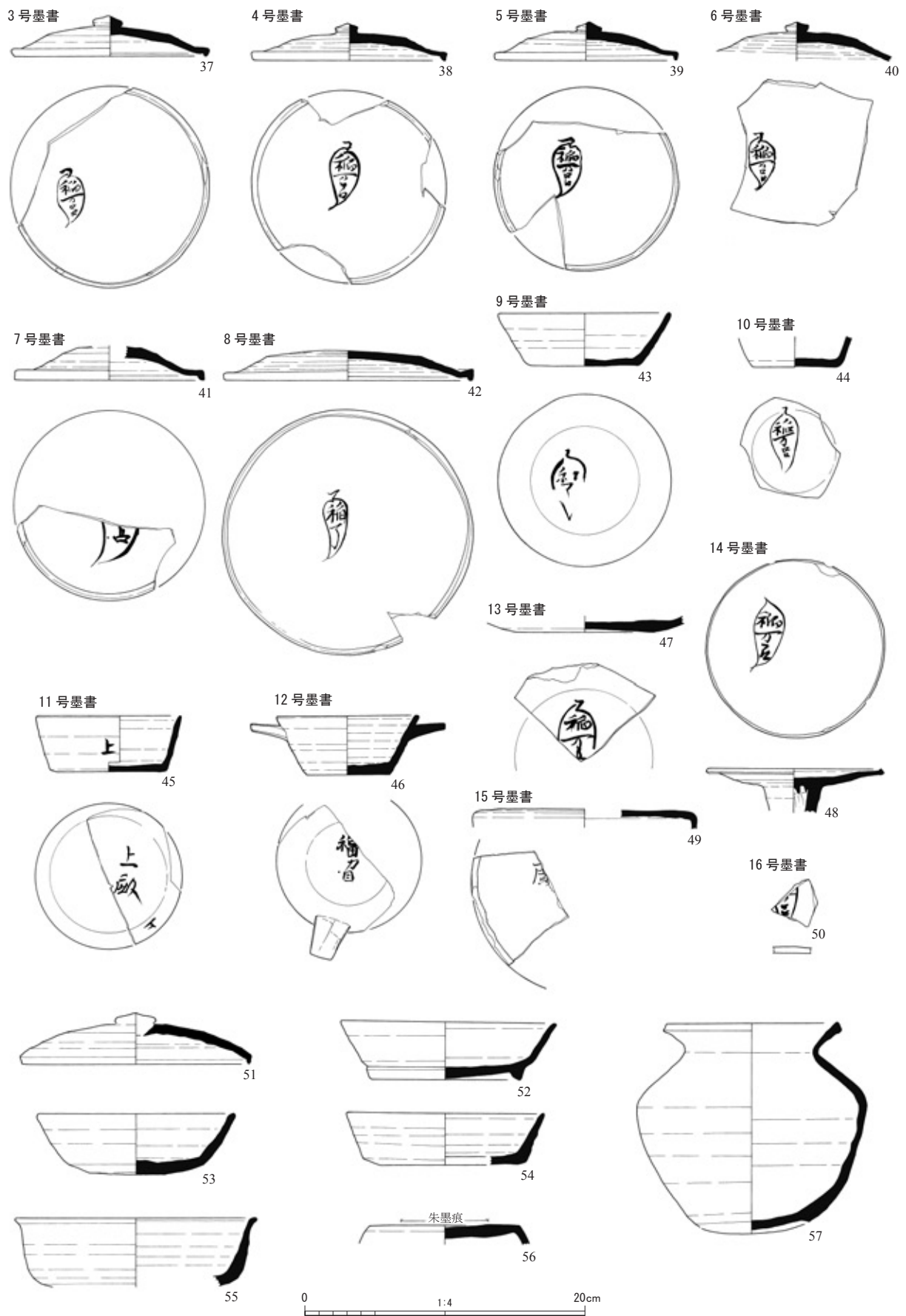


Fig.92 SX03 出土遺物 (1)

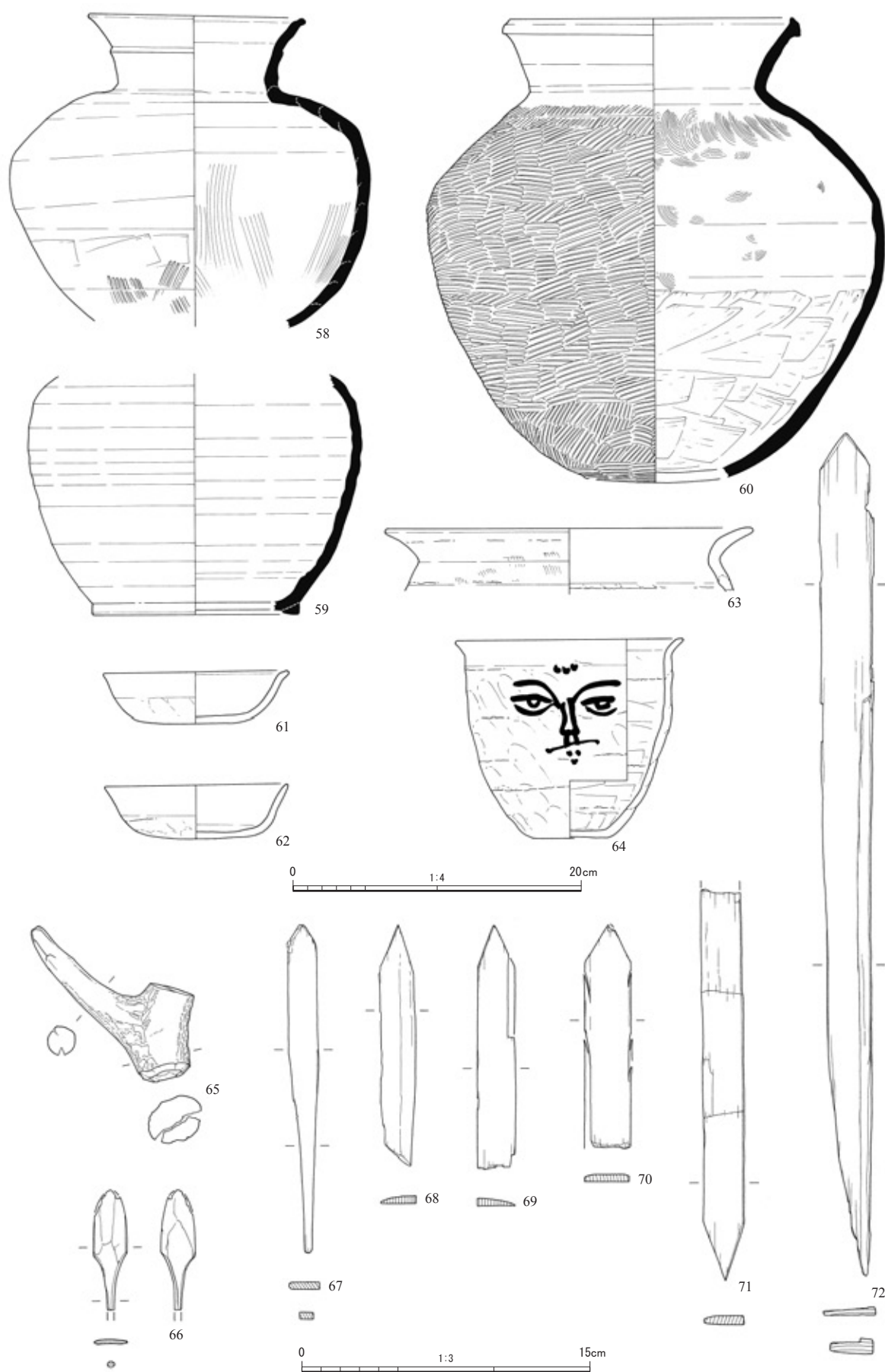


Fig.93 SX03 出土遺物 (2)

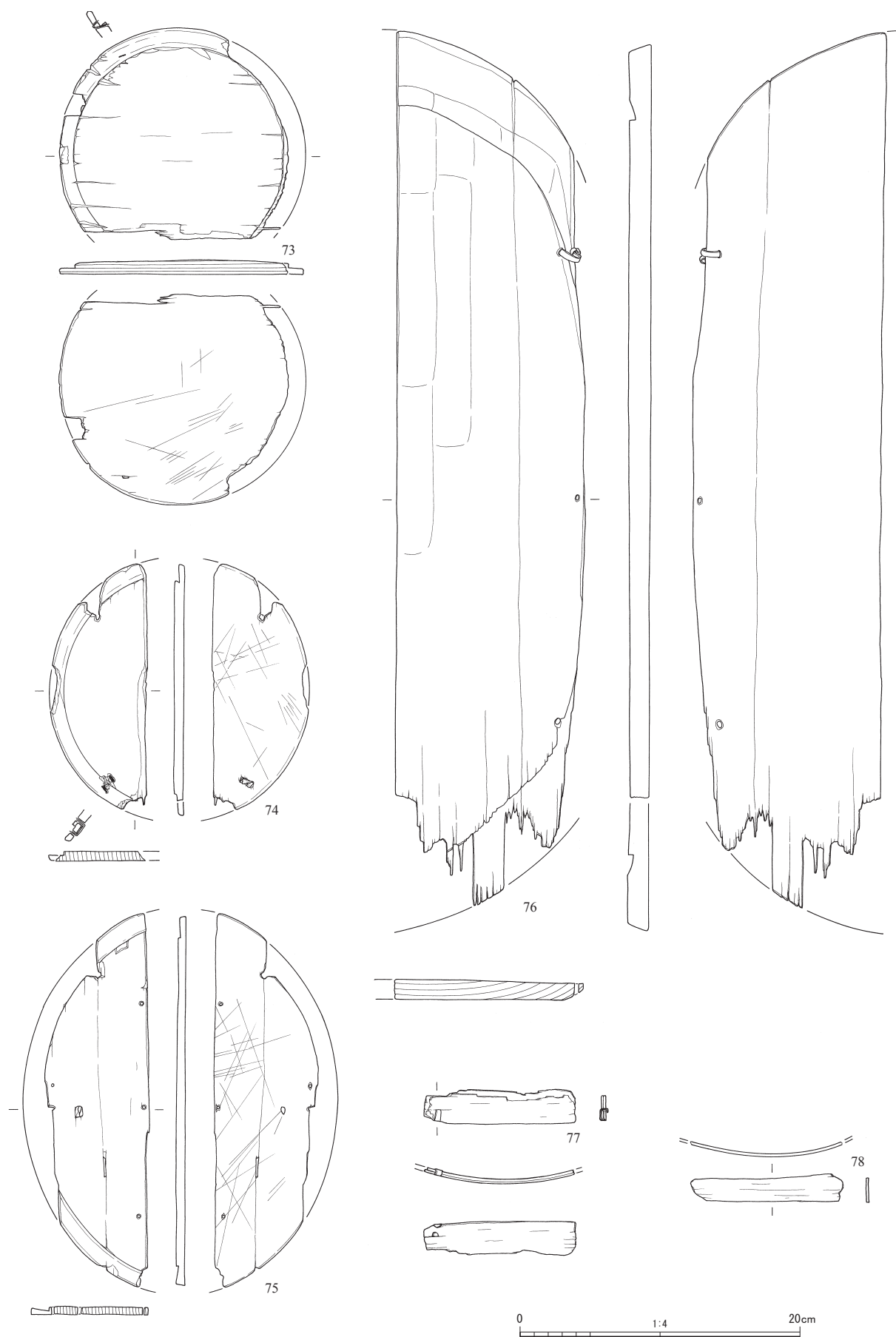


Fig.94 SX03 出土遺物 (3)

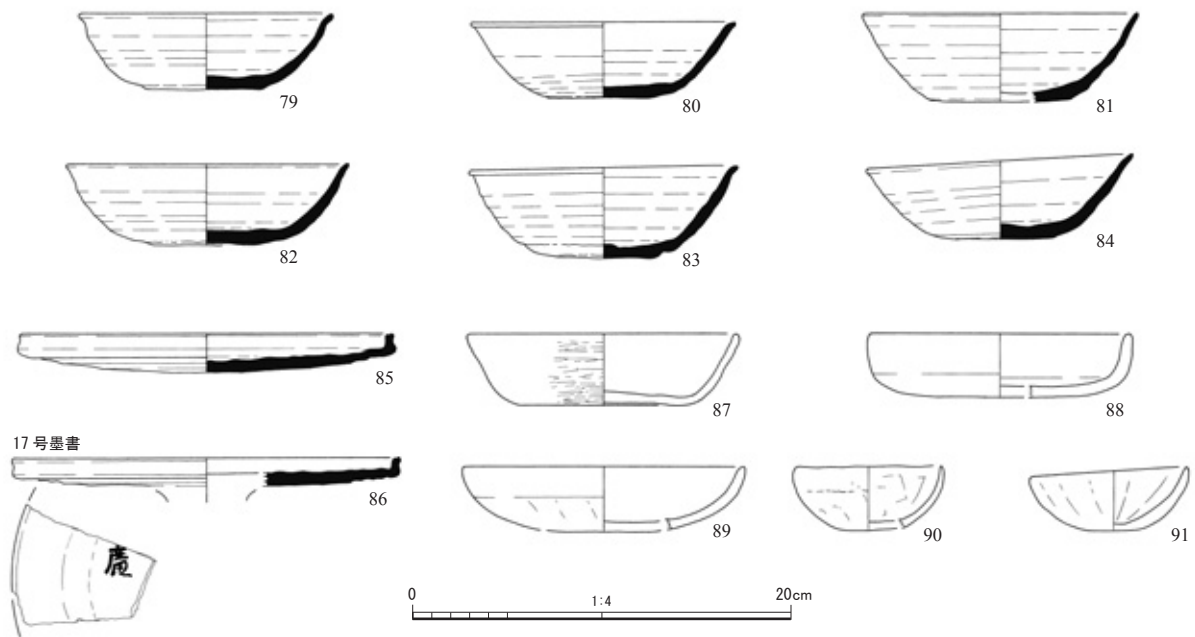


Fig.95 SX04 出土遺物 (1)

鹿角 (65) は両端が切断され、短い枝角部分が残されている。何らかの未成品ともみられるが、素材を切り出した残滓の可能性もある。鏃形木製品 (66) は柳葉形を象ったもので、アスナロ属を用いている。67～72 は斎串である。67 は小型品で下部は棒状に加工されている。72 は比較的大型の製品であるが、下部は欠損しており全長は不明である。木材は、アスナロ属もしくはヒノキ属を用いている。73～78 は曲物である。底板は円形のもの (73～75) と楕円形のもの (76) が知られる。

SX04 (Fig.86) SX03 と同一層位において出土した遺物のうち、SX02 よりも東に位置するものを SX04 とする。遺物の出土位置はまばらであるが、木製祭祀具が集中している点が注目できる。

SX04 出土遺物 (Fig.95・96) 79～108 は SX04 から出土した遺物である。79～86 が須恵器、87～91 が土師器、92～108 が木製品である。

須恵器には、無台碗 (79～84)、盤 (85)、高盤 (86) がある。85 や 86 といった器種を含むことから、SX04 出土遺物は遠江Ⅵ期に位置づけられる。なお、86 の高盤の上部下面には「廣」の墨書がみられる。87～91 は土師器である。坏身 (87～89) と小碗 (90・91) がみられ、須恵器の年代観とも矛盾しない。

木製品には、人形 (92)、斎串 (93～101)、舟形 (102)、横棧状木製品 (103)、摺り簾状木製品 (104)、曲物 (105・106)、不明品 (107・108) がみられる。92 の人形は、手の切り込み部分が欠損している。木材は、アスナロ属を用いている。斎串 (93～101) は側辺の切り込みがみられないものが多い。木材は、アスナロ属もしくはヒノキ属を用いている。102 の舟形は、内側を刳り貫いただけの比較的簡易な作りである。木材は、ヒノキ属を用いている。103 は両側に柄が作り出された横棧状の木製品で、田下駄の部材であった可能性がある。104 は摺り簾状の木製品である。先端は欠損しており、全体形は不明である。側辺には漆の塗布が認められる。木材はヒノキ属を用いている。105・106 は曲物底板、107 は楔形を呈する不明品、108 は両端が鋭利に加工された不明品である。

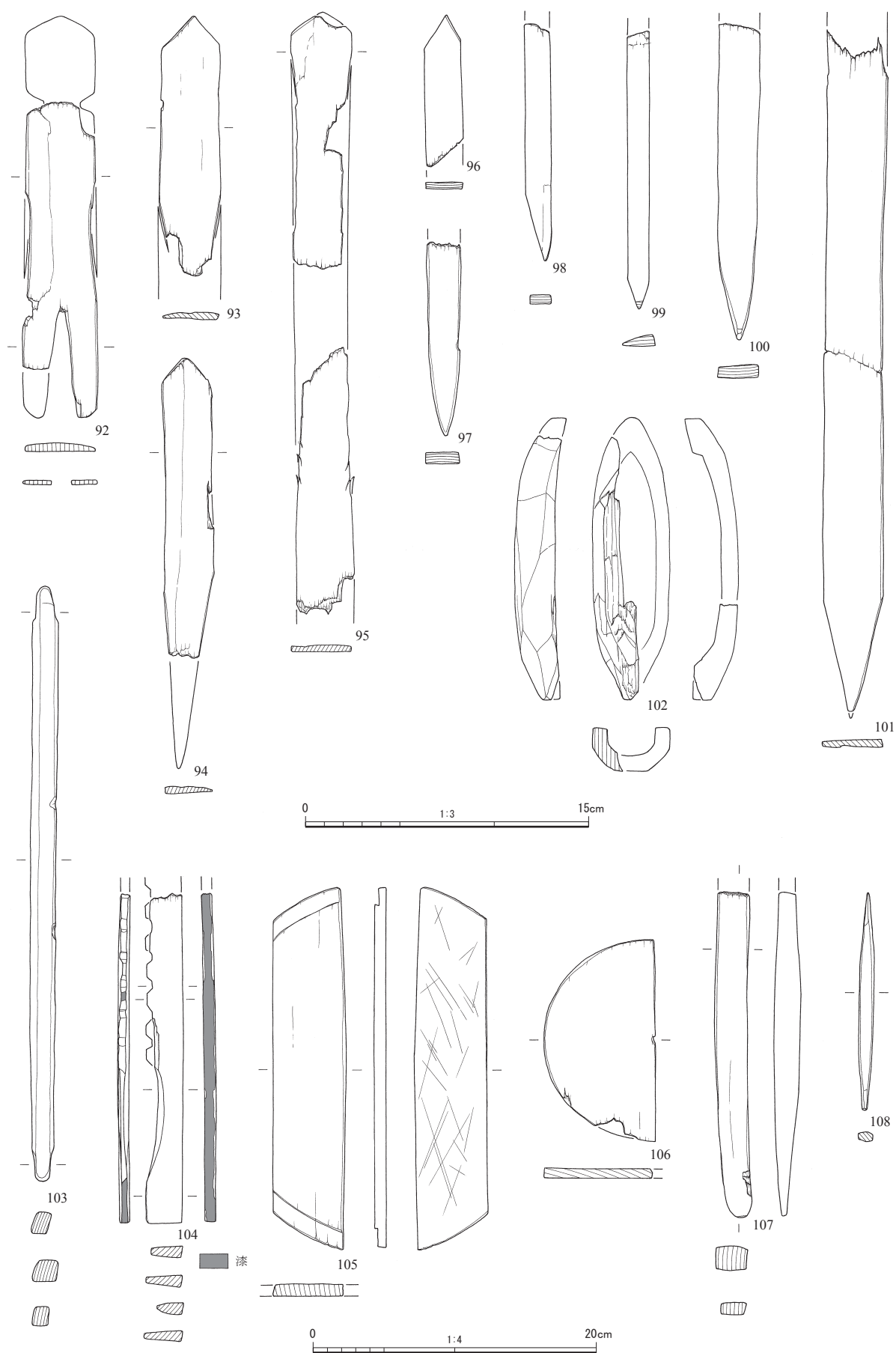


Fig.96 SX04 出土遺物 (2)

(6) IV b 層出土遺物

概要 Fig.97～101 にIV b 層から出土した遺物を示す。IV b 層から出土した遺物のうち、図示したものは105点（遺構出土遺物を含むと213点）である。以下、須恵器（109～152）、土師器（153～184）、木製品（185～213）の項目に分けて紹介する。

須恵器（Fig.97・98） 109～152 はIV b 層から出土した須恵器である。坏蓋・坏身（109～129、136～139）のほかに、無台碗（130～135）、盤（140）、広口壺（141～145）、鉢（146）、壺蓋（147）、長頸壺（148・149）、横瓶（150）、甕（151・152）などの器種が認められる。

帰属時期が明瞭な坏蓋・坏身（109～129）に注目すると、109のような古相を示す摘蓋や、有台坏身（115～123）を含むものの、直径が縮小した摘蓋（114）や一定量の箱坏（124～129）がみられる。ここに紹介するIV b 層出土遺物は、遠江V期を含む可能性を示すが、その主体的な時期は遠江VI期に位置づけてよいだろう。IV b 層出土遺物の中には、転用硯が4点（136～139）含まれる。このうち、139は直径27cmを超える大型品である。このほか、IV b 層出土須恵器には、広口壺（141～145）が比較的目的立つ。広口壺は、遠江VI期になると数が少なくなることをふまえると、先述のように、IV b 層の堆積時期が遠江V期を含んでいる可能性が高いとみられよう。

土師器（Fig.99） 153～184 はIV b 層から出土した土師器である。無台の坏身（153～158）のほかに、有台坏身（159・160）、皿（161～163）、高盤（164・165）、鉢（166～169、173）、甕（170～172、174・175）、把手付鉢形や甑形・壺形の雛形（176・177・180・181）、小碗（178・179）、碗（182～184）などの器種が認められる。碗には人面墨書土器（182・183）が含まれる。2点の人面墨書土器（182・183）は、器形が若干異なるが、左に傾いた人面の表現が互いによく似ている。なお、184の碗にも墨痕がみられ、人面が墨書されている可能性が考えられる。

木製品（Fig.100・101） 185～213 はIV b 層から出土した木製品である。木製品には、鎌柄（185）、曲物（186～190）、高台付盤（191）、不明品（192～198）、人形（199・200）、斎串（201～206）、摺り簞状木製品（207）、不明加工板（208・209）、馬形（210）、舟形（211・212）、加工棒頭（213）がある。

鎌柄（185）は、鉄刃を装着した柄穴部分が遺存している。木材は、アカガシ亜属を用いている。186～190は曲物底板である。190は楕円形とみられるが、そのほかは円形である。186・190は有段、187～189は無段である。191は大型の高台付盤である。遺存状態が極めて悪いが、わずかに高台と側辺の一部が遺存している。192はヘラ状を呈する不明品、193は先端が加工された棒状品である。194～197は先端が山形に加工された角材で、4点がまとまって出土した。198は曲物底板を再加工したような形態をもつが、用途は不明である。

人形（199・200）や斎串（201～206）はV層出土品と共通性が高い。208・209は不明加工板である。両者は厳密には接合関係にないが、同一個体と考えられる。複雑な外形を描くが、何を象ったものか明確でない。表面には墨による縁取りや朱彩が認められる。210は馬形である。幅が2cm近い厚い板を加工している。直線的な下面には棒状の足を挿入したとみられる4箇所の孔と、中央に支柱を挿入したとみられるやや大きめの孔があげられている。211・212は舟形である。ともに、中

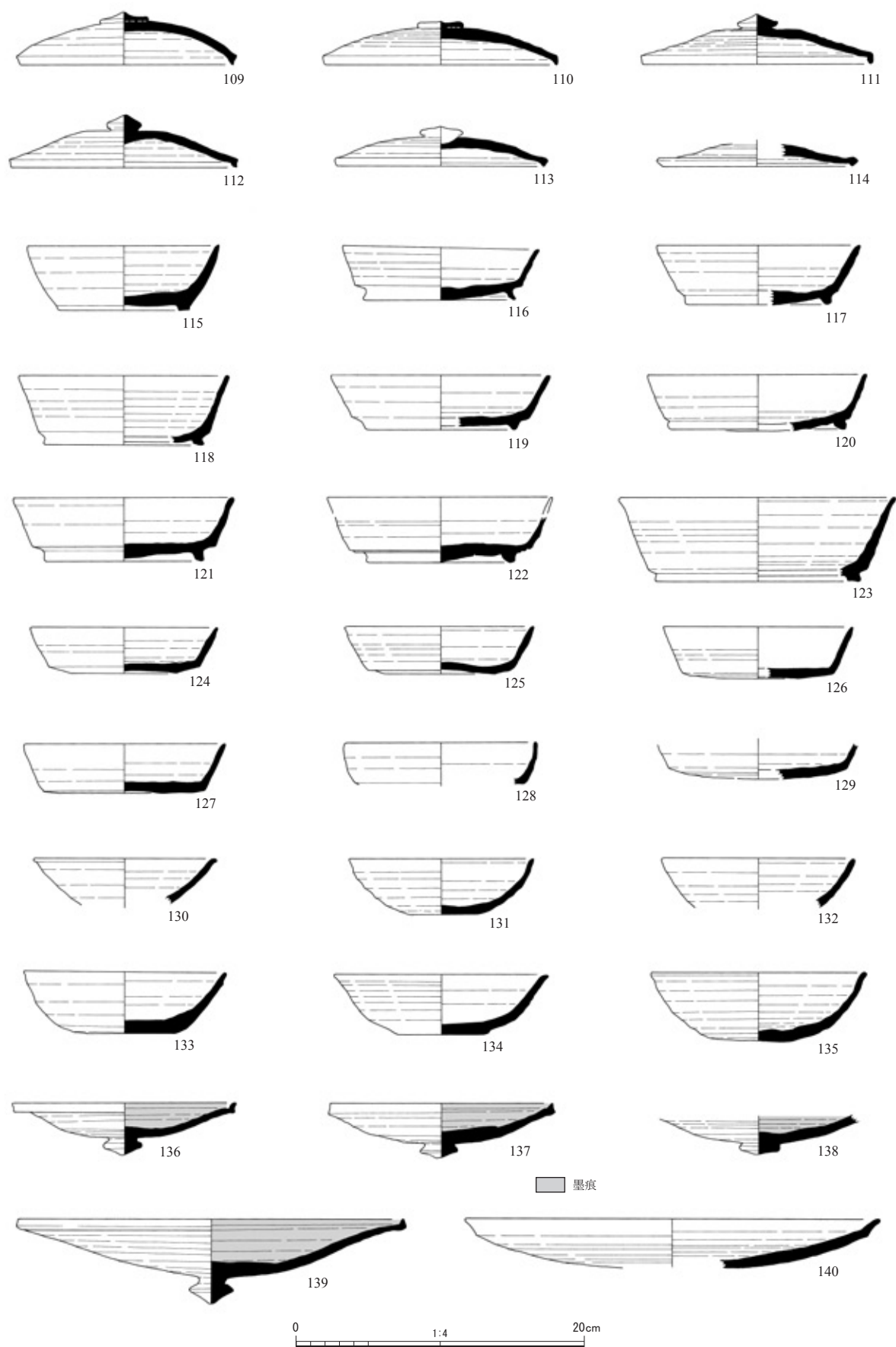


Fig.97 IV b 層出土遺物 (1)

央の挟りは少ない。213は翼状の突起を作り出したもので、一端には棒状の部位が連続している。Fig.101の木製品のうち、樹種同定をしたものはすべてヒノキ属もしくはアスナロ属を用いている。

年 代 IV b層から出土した遺物の年代は、遠江V期を一部含むとみられるものの、遠江VI期を中心とするとみられる。実年代では8世紀後半から9世紀初頭頃に相当する。また、SX03出土遺物は、遠江VII-1期（9世紀前葉）まで降るとみられる。

（7）小 結

IV b層の堆積時期は、8世紀後半から9世紀前葉におよぶとみられる。豊富な墨書土器や木製祭祀具、人面墨書土器の存在が示すように、この時期にも敷智郡家関連の施設が鳥居松遺跡にも展開していたとみられる。「稲万呂」墨書土器は、従来、伊場遺跡群からの出土が知られていたが、その数を凌駕する量が集中して出土した。敷智郡家に強い影響力をもっていたとみられる稲万呂の本拠地が、鳥居松遺跡にあった可能性を示唆するものといえるだろう。

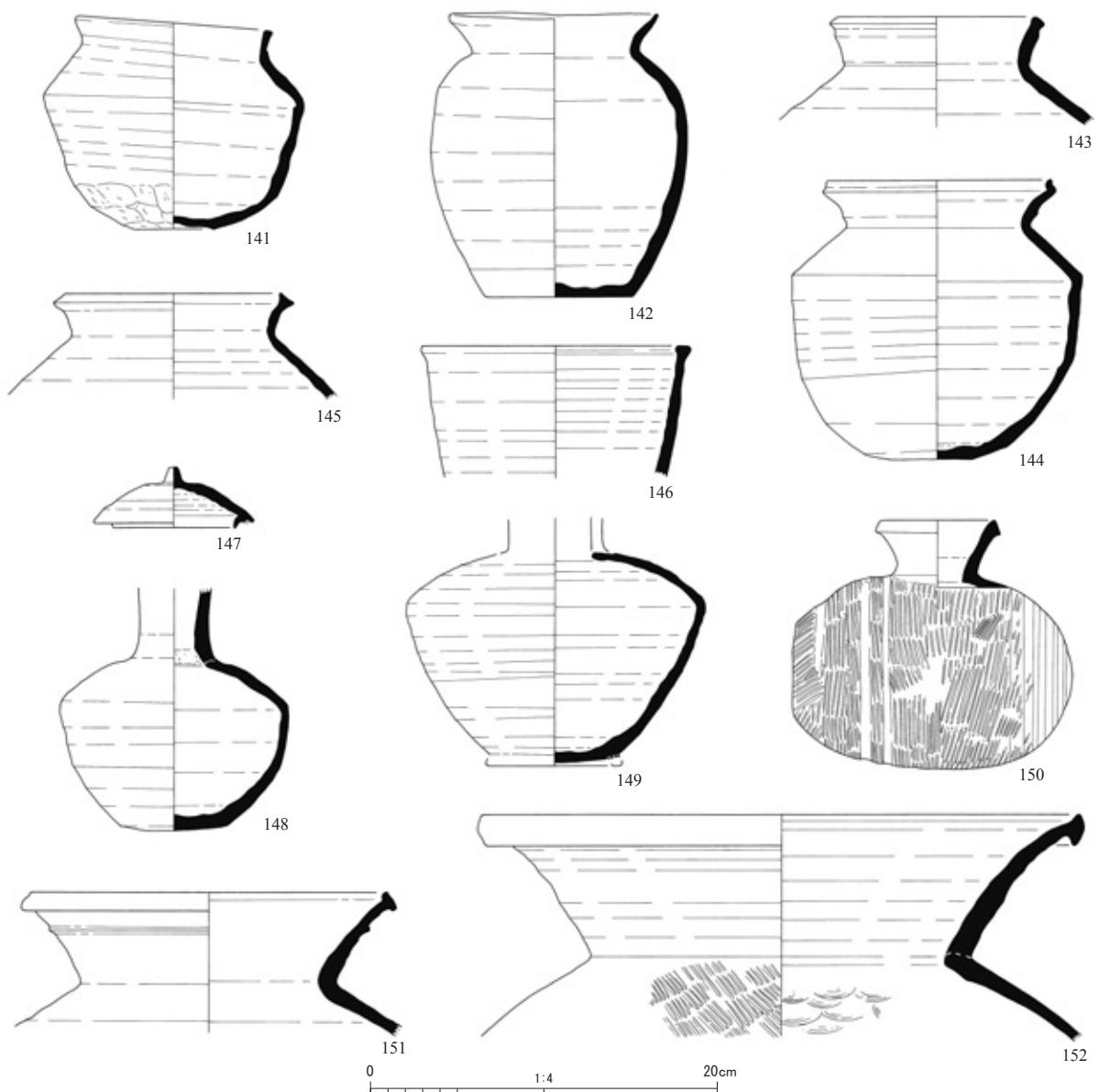


Fig.98 IV b層出土遺物（2）

5 IVb層の調査

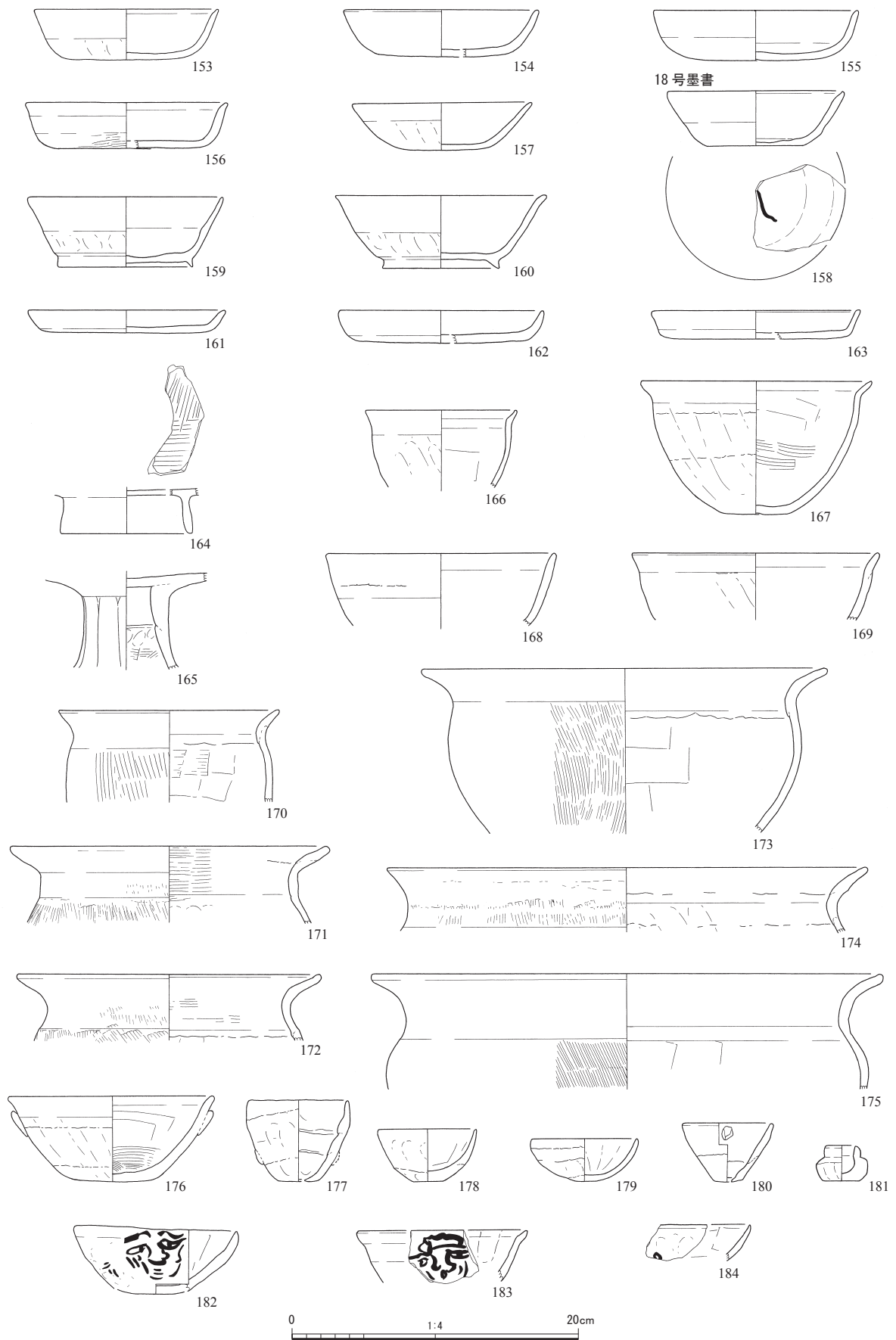


Fig.99 IV b層出土遺物 (3)

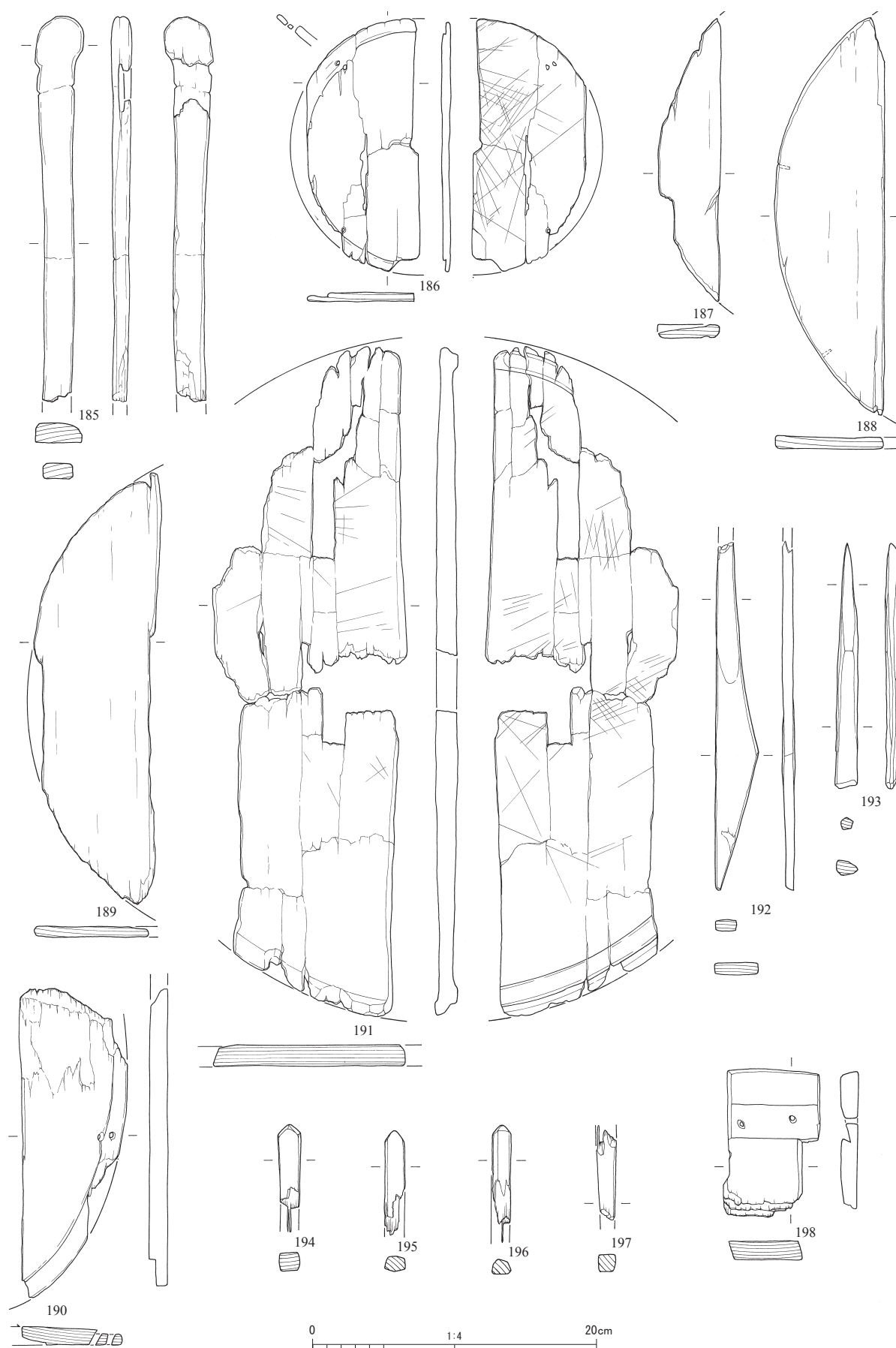


Fig.100 IV b層出土遺物 (4)

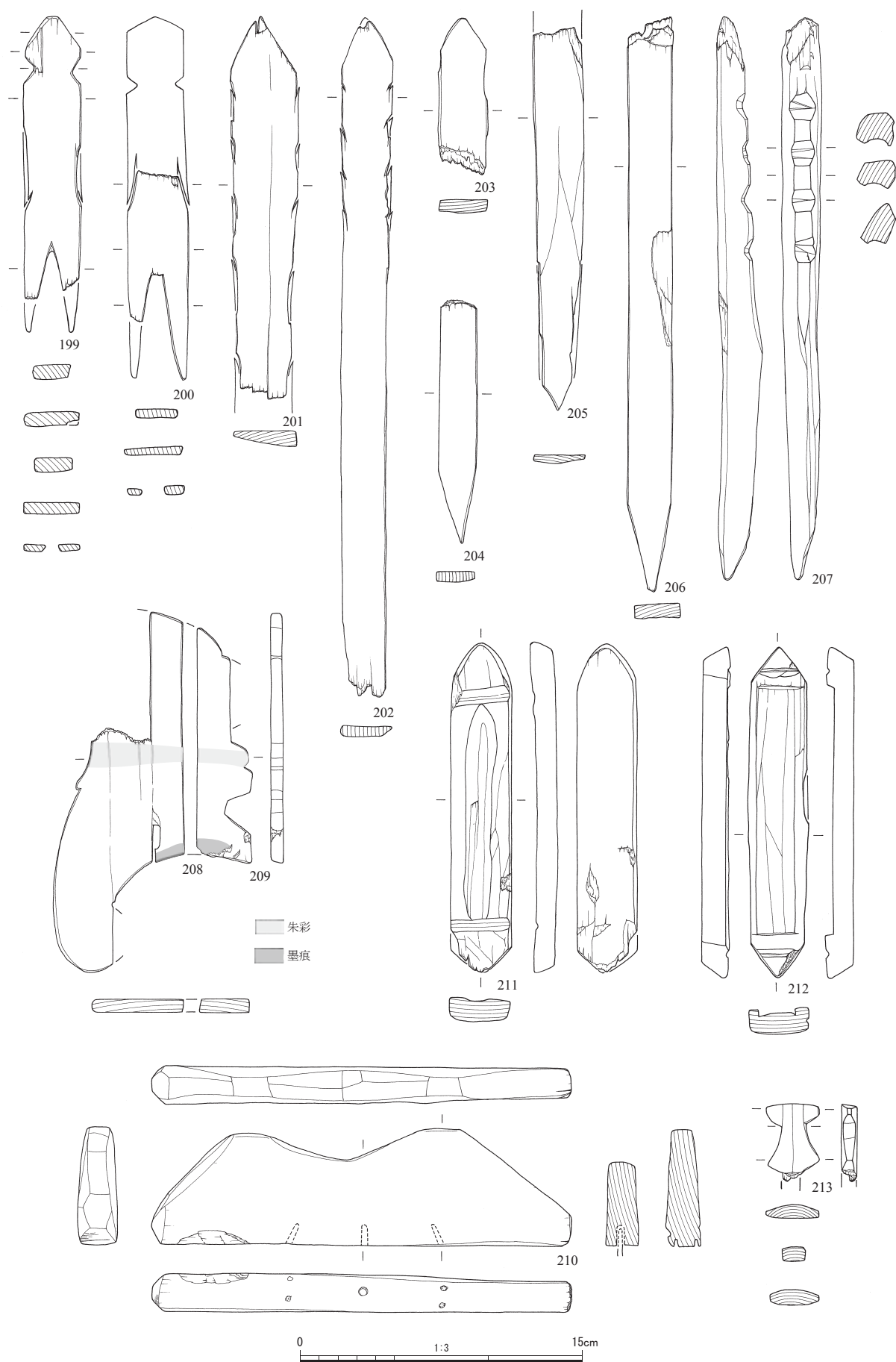


Fig.101 IV b層出土遺物 (5)

6 IV a 層・Ⅲ層の調査

(1) IV a 層・Ⅲ層の概要

IV a 層 IV a 層は、褐色粘土で形成される非常に薄い層である。大溝の北岸にわずかに堆積しているにすぎず、調査区の北東側において部分的に確認できたのみである。IV a 層の中心的な堆積年代は、平安時代中葉（10 世紀）である。伊場大溝全体にわたる基準層位とはいいいくいが、灰釉陶器が出土する地層はこの部分だけであることから、IV b 層から分離して捉えた。なお、同様の堆積層は、B 区で検出した SD102 においても確認できている。SD102 は伊場大溝の南岸であることから、IV a 層は伊場大溝の南北両岸にわたって堆積しているとみられる。

Ⅲ層 Ⅲ層は茶褐色有機物層であり、未分解の植物片を大量に含んでいる。Ⅲ層が堆積した伊場大溝の本流は北側に偏り、著しく幅を減じている。また、本流部分の南岸には堤防上の高まりがあり、その南側にもⅢ層の堆積がみられる。今回の調査ではⅢ層から出土した遺物はないが、伊場遺跡や梶子遺跡の調査成果から、平安時代中葉から鎌倉時代前半（11～13 世紀）頃の堆積層と推定できる。この段階になると伊場大溝は急速に規模を縮小し、水流もほとんどなかったとみられる。

泥炭質の強い堆積土の状態から、湿地性の植物が大量に繁茂していたことが想定できる。Ⅲ層の堆積後、室町時代（14～16 世紀）になると伊場大溝は完全に埋没し、地上にその姿を留めなくなる。

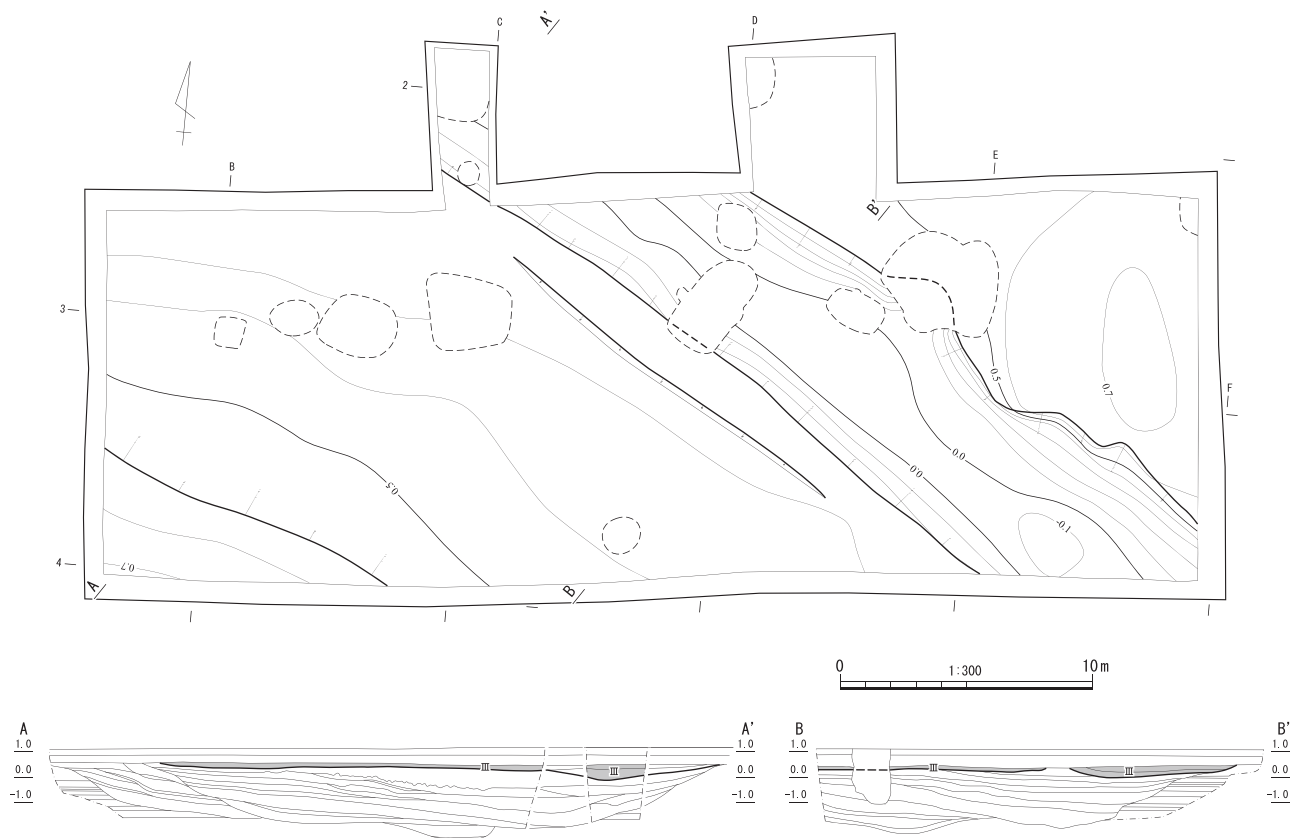
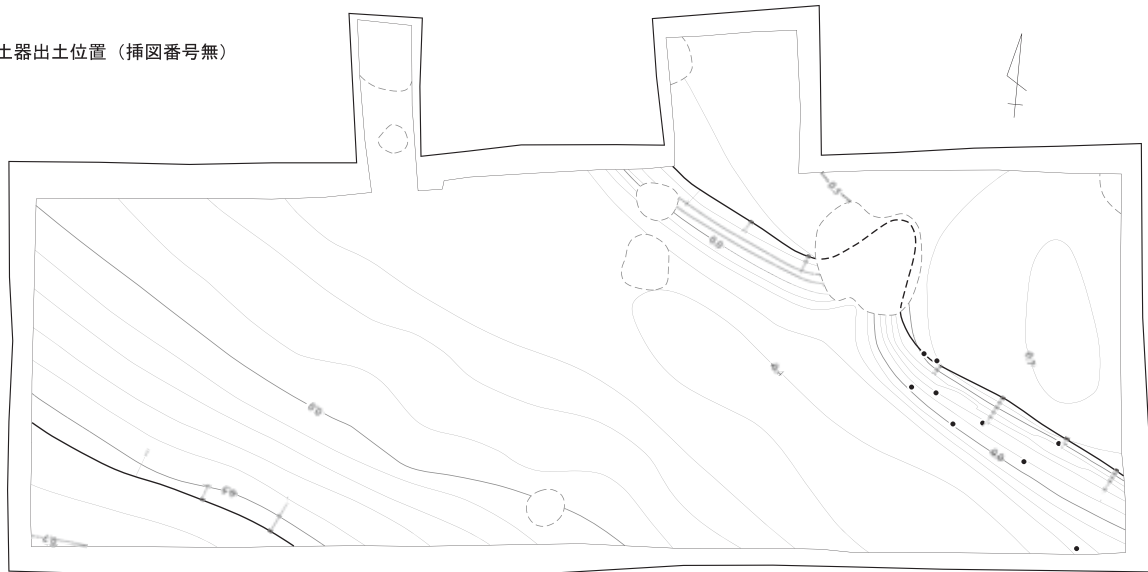
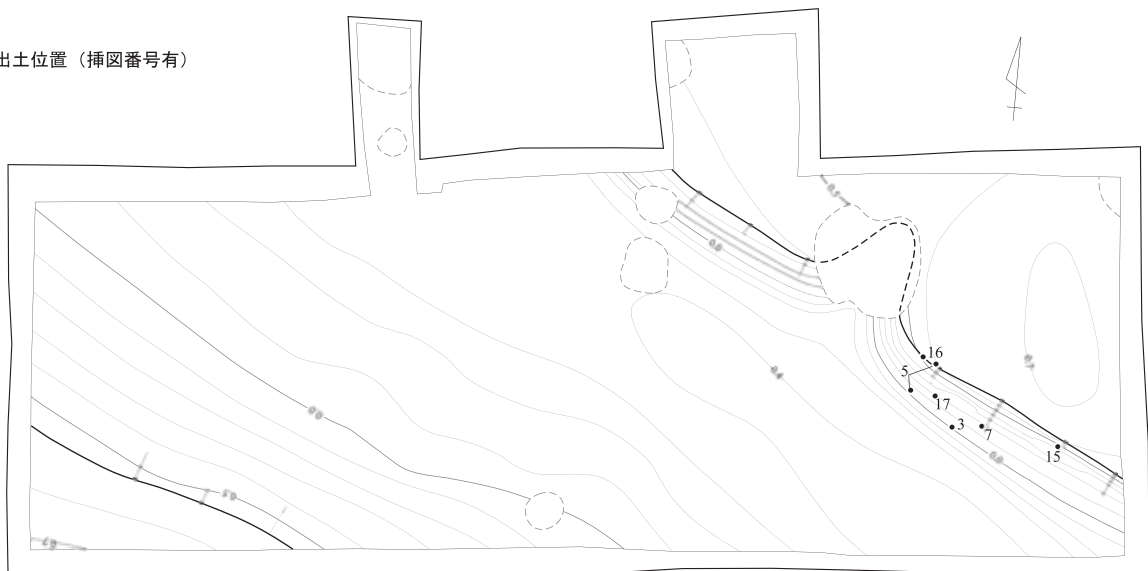


Fig.102 伊場大溝Ⅲ層

遺物土器出土位置（挿図番号無）



土器出土位置（挿図番号有）



石製品・木器等出土位置（挿図番号有）



Fig.103 IV a層における遺物出土位置

（2）伊場大溝の形状

Ⅳ a 層 Ⅳ a 層が堆積した時点の伊場大溝の形状は、Ⅳ b 層のそれと大きな違いはなかったとみられる。Ⅳ a 層の厚みは 10cm に満たず、非常に薄い。B 区で確認した南岸（SD102）の状況も同様である。平安時代前葉から平安時代中葉にかけて（9 世紀前葉～ 10 世紀）、伊場大溝は緩やかに埋没し、その深さと幅を減じていったとみられよう。

Ⅲ 層 Ⅲ 層が堆積した時点の伊場大溝の形状は、北側に偏り著しく幅が狭くなっている。伊場大溝本流の南岸には堤防状に盛り上がっている状況が確認できた。この盛り上がりは自然に形成されたものか、人工的に作り上げたものか、明確でない。この堤防状の盛り上がりによって伊場大溝の流路が狭くなっている。Ⅲ 層が堆積する伊場大溝本流の規模は、幅 7m、地表から底面の深さは 0.8m 程度であったとみられる。なお、Ⅲ 層はこの本流以南の地域の広い範囲にも堆積している。本流以南のⅢ 層が堆積する区域は、広い湿地状の環境であったとみられ、水田などに利用していた可能性が考えられる。

（3）遺物の出土状態

Ⅳ a 層から出土する遺物は比較的少ない。その出土位置も伊場大溝の北岸に限られる。こうした遺物の出土状態は、Ⅳ b 層の堆積が限定的であったことを示している。Ⅳ a 層から出土する遺物の殆どは灰釉陶器である。灰釉陶器は伊場大溝の岸に沿って、比較的まばらに出土した。出土した標高が地表面に近いが、故意に埋置したというより、伊場大溝の岸に向かって投棄したと解釈できる出土状態である。

大型の隅丸方形の曲物底板（22）および盤（23）は、Ⅳ a 層の灰釉陶器が集中する地域より南側に離れて出土した。出土層位は他の木製品の出土位置より高く、発掘調査時にはⅢ 層から出土したものと認識した。Ⅲ 層の堆積年代は 11 ～ 13 世紀と捉えられる。ただし、今回の調査ではⅢ 層から 22・23 以外に遺物が出土していないことを考えると、22・23 の帰属時期は、Ⅳ a 層が堆積した平安時代中葉頃に近い可能性が高いだろう。

（4）Ⅳ a 層・Ⅲ 層出土遺物

概要 Fig.104・105 にⅣ a 層およびⅢ 層から出土した遺物を示す。Ⅳ a 層から出土した遺物のうち、図示したものは 21 点（1 ～ 21）、Ⅲ 層から出土した遺物は 2 点（22・23）である。以下、灰釉陶器（1 ～ 17）、土師器（18）、石製品（19 ～ 21）、木製品（22・23）の項目に分けて紹介する。

灰釉陶器（Fig.104） 1 ～ 17 はⅣ a 層から出土した灰釉陶器である。灰釉陶器には、碗（1 ～ 15）、深碗（16）、平瓶（17）がある。

灰釉陶器の碗（1 ～ 15）は、三日月高台もしくは三角高台をもち、底部はすべて糸切未調整である。1 は須恵器的な焼成であるが、2 ～ 15 は灰白色系統の色調を呈する。また、7 などを典型例に、焼成状況が悪く、風化が進んでいるものもみられる。施釉は 2 ～ 5、9 にみられるが、いずれも漬け掛けをしたもので発色は悪い。

16は深碗である。高い高台に、直線的な口縁が連続する。口縁端部には輪花がみられる。17は平瓶である。把手と口縁端部は欠損するが、全体形は充分にうかがえる。底部はナデ仕上げであるが、僅かに糸切の痕跡を残す。上面に施釉されており、発色は良好である。

以上、IV a層出土の灰釉陶器は概ね O53 窯式から H72 窯式を中心とした資料群といえ、10世紀頃の所産とみてよいだろう。

18は土師器の甕（鍋）である。鉢形に開く体部に外側に直線的に開く口縁部が取り付く。体部外面は板ナデによる調整がみられる。形態的特長から、平安時代の所産とみてよい。

19～21は石製品である。19・20は砥石であり、ともに凝灰岩を用いている。21は円柱状の叩石で、この個体も凝灰岩を用いている。叩き痕は両端部に認められるが、円柱状をなす側辺に打ち欠いて成形された2条の窪みがみられる。この窪みを用いて錘として使用した可能性がある。

22は曲物底板である。Ⅲ層から大きく二つに分かれて出土した。隅丸長方形を呈する大型品である。側面には側板をはめ込む段が作り出され、長辺に3箇所、短辺に1箇所の側板緊縛用の孔があげられている。表裏とも、刃物による切り傷が顕著にみられる。木材は、ヒノキ科アスナロ属が用いられている。伊場遺跡群では、長方形曲物底板の出土例が少ないが、今回の発掘調査では本例と、SE01から出土したもの（IV b層-13）の2点が知られている。23は同じくⅢ層から出土した盤である。側辺の一部が遺存しており、僅かな立ち上がり部分が確認できる。この個体も、表裏ともに刃物による切り傷が顕著にみられる。

年 代 IV b層が堆積した年代は、出土した灰釉陶器が O53 窯式から H72 窯式を中心としていることから、平安時代中葉（10世紀頃）頃とみられる。Ⅲ層から出土した22・23についても、Ⅲ層から出土する遺物がこの他に全く見られないことを考えると、灰釉陶器が示す年代に帰属時期を求めておくほうが妥当であろう。

（5）小 結

IV a層の堆積時期は、平安時代中葉（10世紀）を中心とすることが、出土した灰釉陶器の年代観から明らかになった。IV a層の堆積は極めて薄いため、出土する遺物量が少ないが、伊場大溝内への土器等の投棄が10世紀まで継続していることが明確になった。この段階の遺跡の性格をうかがうだけの資料に恵まれないが、伊場大溝の南岸であるB区SD102からは「本」と書かれた灰釉陶器（Fig.111-30）が出土している。平安時代の中頃になると、鳥居松遺跡に展開していた郡家施設は急速に衰退していったとみられる。

Ⅲ層からは曲物底板（22）や木製の盤（23）が出土したが、先述のとおり下層のIV a層から混入した可能性がある。これ以外にⅢ層から出土する遺物はなく、今回の調査ではⅢ層の堆積年代をうかがう手立ては得られなかった。伊場遺跡や梶子遺跡の調査結果からはⅢ層の中心的な堆積年代は平安時代末から鎌倉時代前葉（11～13世紀）と推定されている。この時期の鳥居松遺跡の様相は不明瞭であるが、南のB区からはこの時代の素掘りの井戸（SE101）が確認されている。

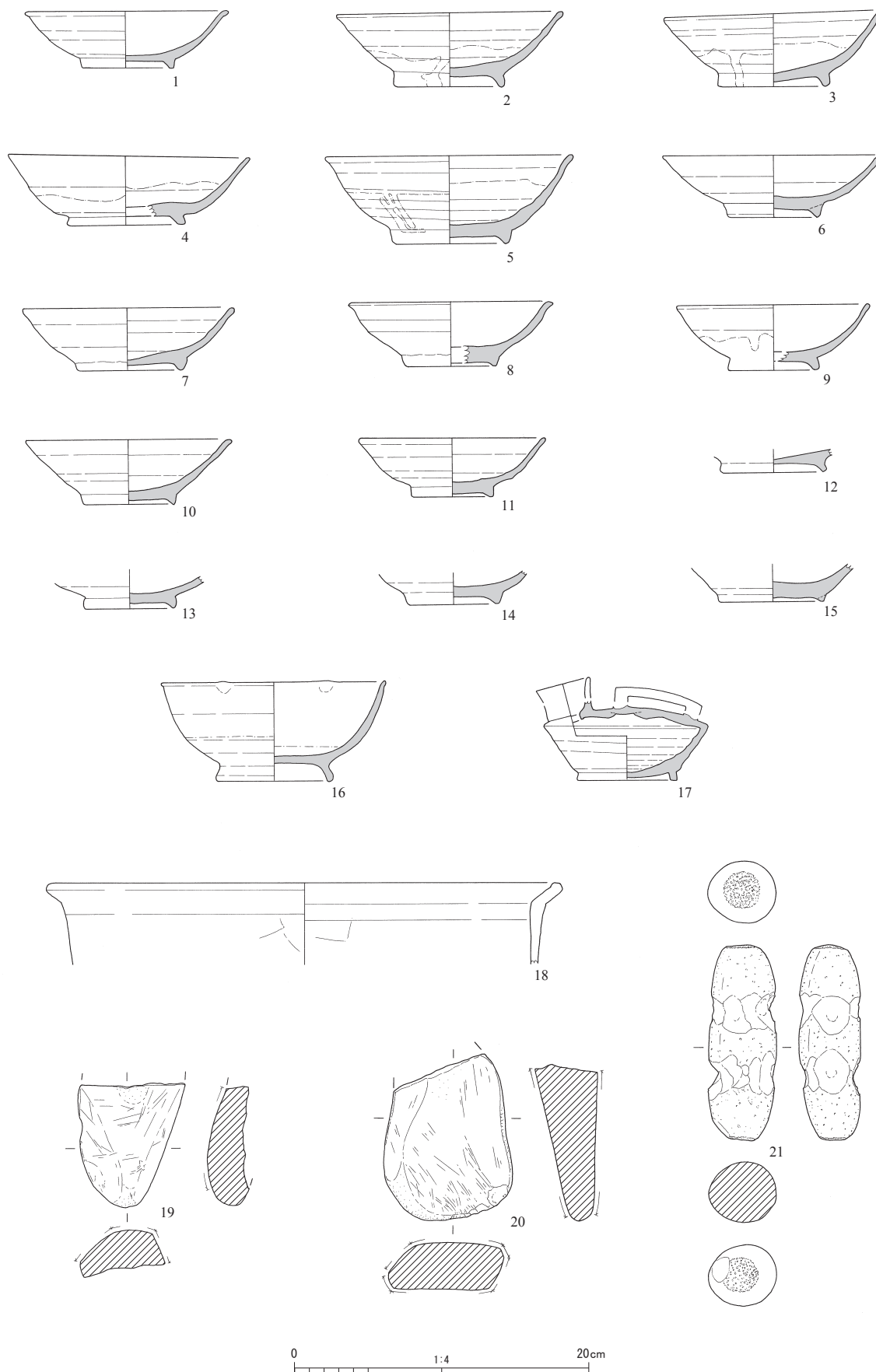


Fig.104 IV a 層出土遺物

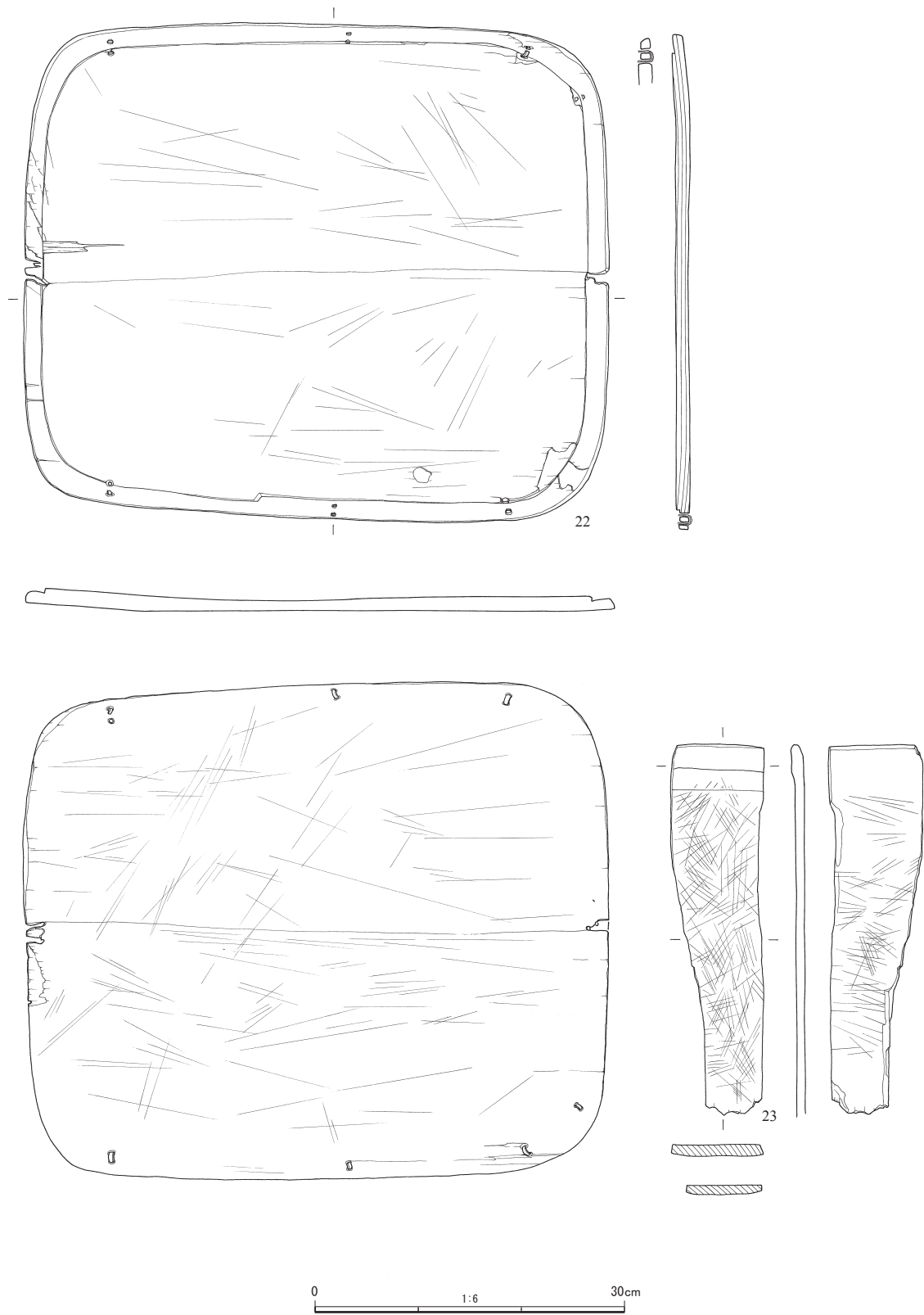


Fig.105 Ⅲ層出土遺物

7 B 区の調査

(1) B 区の概要

B 区は下層において弥生時代の遺構を濃密に検出したが、上層においても古墳時代から鎌倉時代に至る遺構群を確認した。古墳時代中期の土器集積（SX111・112）を2箇所確認したが、この時期の明確な遺構は検出できていない。調査区の北東部では奈良時代から平安時代の伊場大溝の南岸を検出した。伊場大溝南岸では、奈良時代の井戸状遺構（SE102）が築かれている。このほか、調査区の西側では鎌倉時代の井戸（SE101）も確認されている。B 区は伊場大溝のすぐ南側にあたることから、敷智郡家関連の遺構群の検出が期待されたが、当該期の建物などは確認できていない。

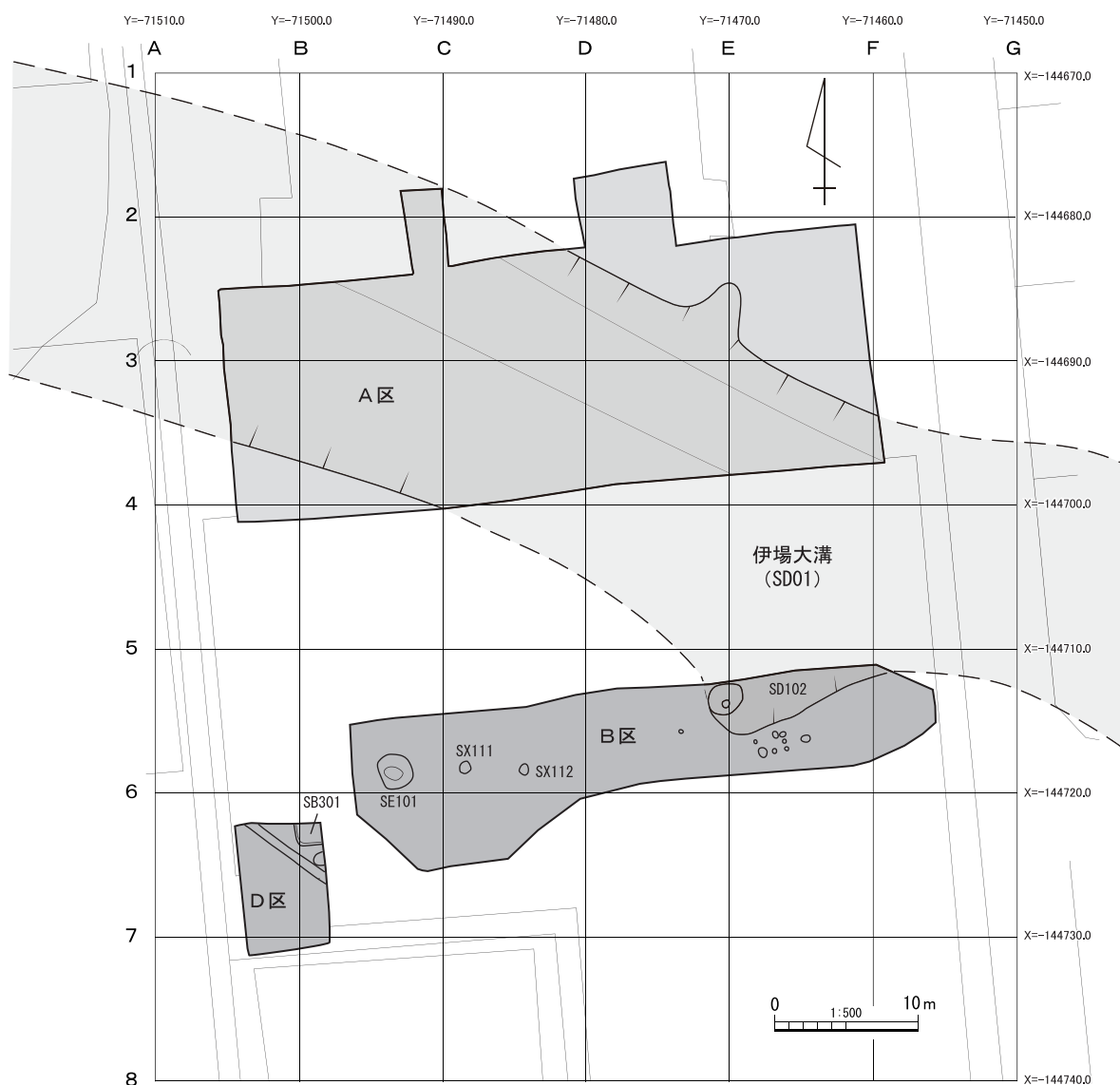


Fig.106 調査区と遺構の位置関係

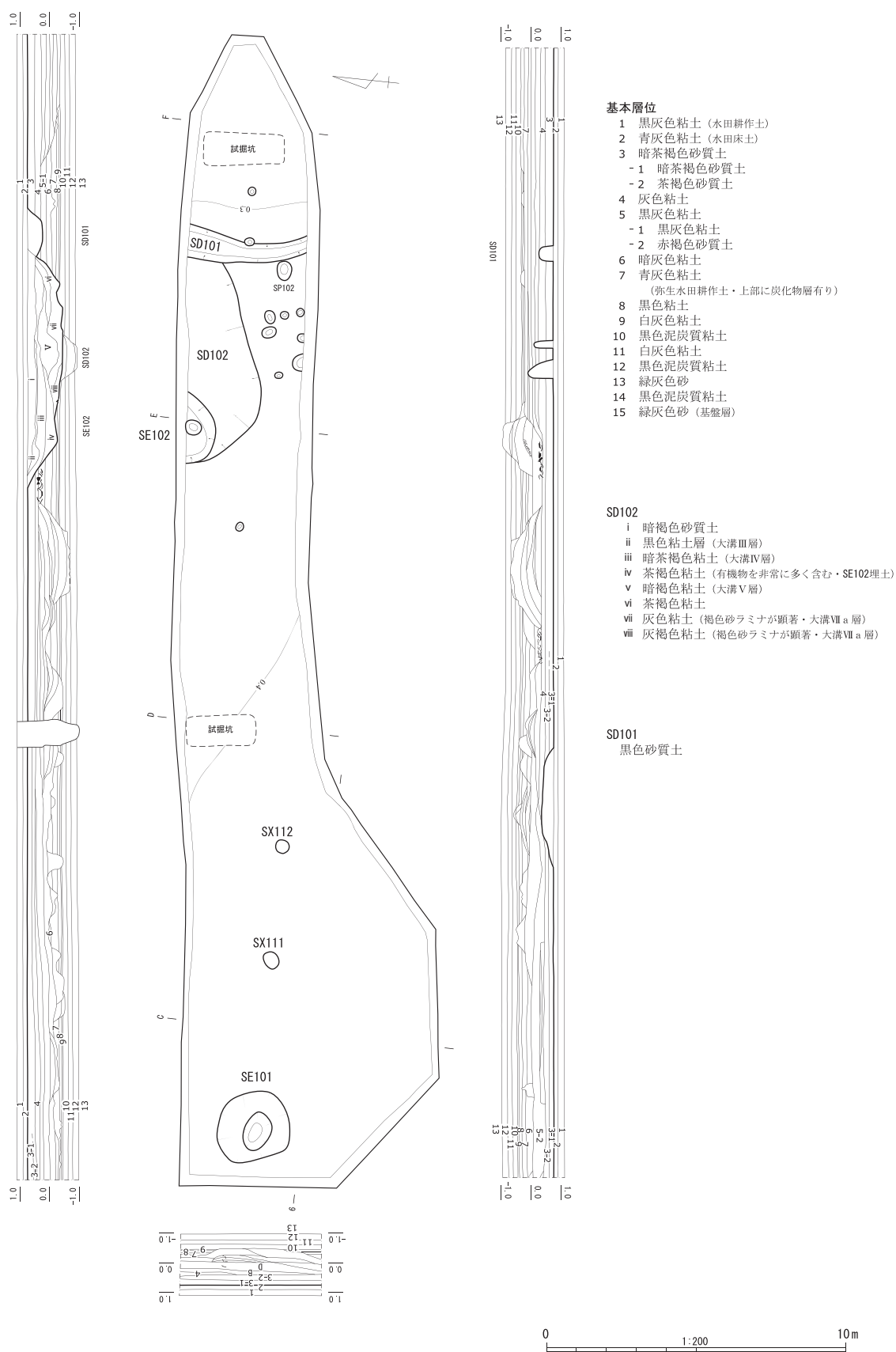


Fig.107 B区検出遺構

(2) 検出遺構と出土遺物

SX111・112 調査区の西側において古墳時代中期の土器集積を2箇所（SX111・112）確認した。いずれも炭化物や焼土に混じり、良好な遺存状態を保つ土師器（Fig.108-1・2・4・6）がまとまって出土した。炭化物や焼土の存在から、住居跡などが埋没している可能性が考えられたが、竪穴建物の掘り方や柱穴など、明確な遺構は確認できなかった。また、これら土器がまとまって出土した周囲の同一層位からも古墳時代中期の遺物が僅かに出土している。ここでは、これらの出土遺物をまとめて紹介する。

SX111・112 出土遺物（Fig.108） 1・2・4 はSX111 から、6 はSX112 から出土した土師器である。このほか3・5もこれら遺物集積の周辺で出土した。1は二重口縁の壺で、二重口縁が形骸化した厚いつくりの口縁をもつ。2・3は内彎口縁の碗であり、ともに似たつくりである。4・5は高坏である。4は屈曲が明確な高坏の坏部で、坏端部は直線的に仕上げられる。5は高坏の脚部で、端部は曲線的に屈折している。6は平底の甕である。やや長胴化した体部に緩やかにく字形に屈曲する口縁が接続する。6は歪みが著しい。以上の遺物群は、古墳時代中期後葉（5世紀後葉）の遺物群として時期的にまとまりがある。SX111・112に伴う明確な柱穴などの遺構は確認できなかったが、建物に付随する炉などに伴う遺物とみてよいだろう。

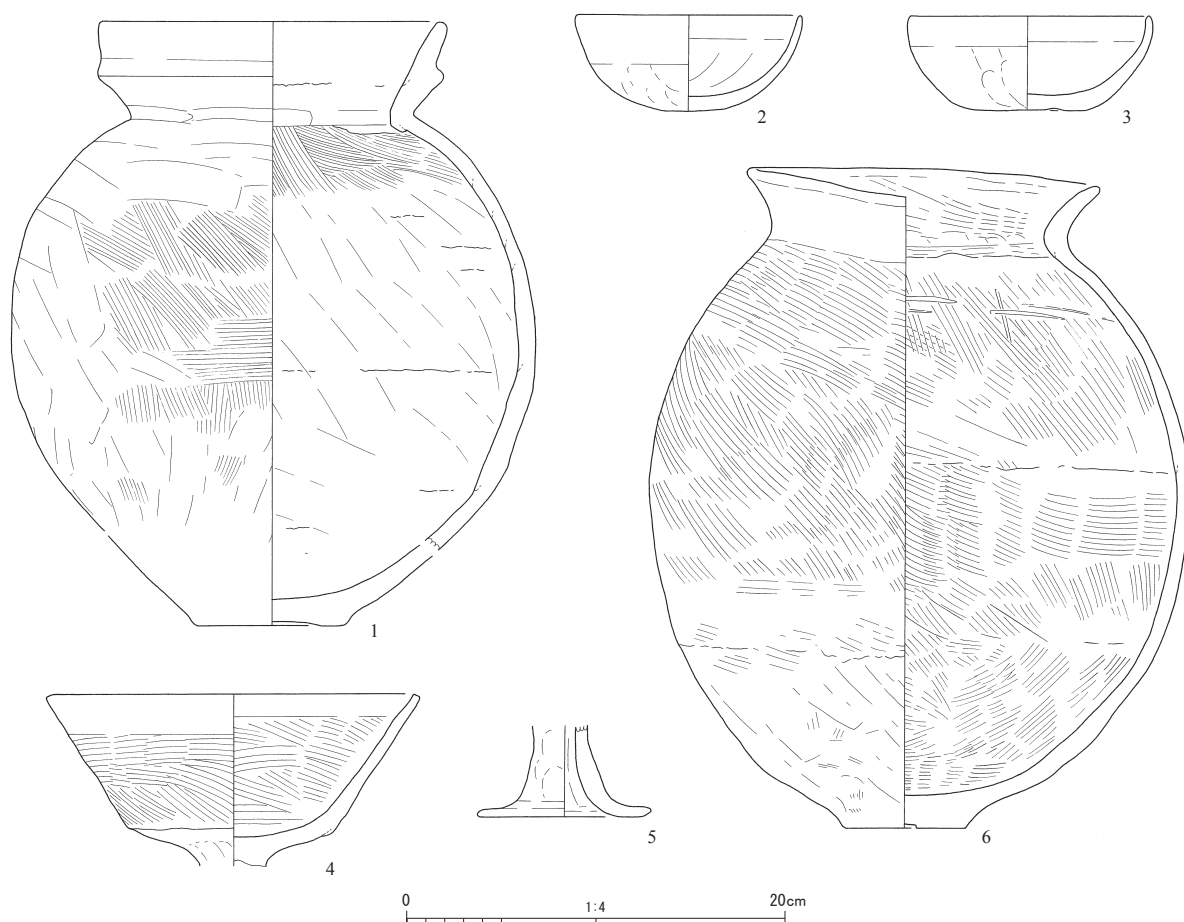


Fig.108 SX111・112 出土遺物

1・2・4：SX111 6：SX112 3・5：包含層

SE102 (Fig.109) 調査区の東側、伊場大溝の南岸に面して検出した井戸状の遺構である。井戸である確証はないが、便宜的に以下の記述では井戸として表現する。

SE102 は弥生時代の遺構 SX101 と重なって検出された。発掘区の制約から、掘り方の全体は確認できていない。直径 2.5m ほどの浅い皿状の土坑内のほぼ中央に、刳り貫き式の臼 (18) を転用した杵材が置かれている。杵材は直径 50 ~ 55cm ほどで、底が抜かれている。また、補強として何本かの杭が打ち込まれている。

杵材の周囲からは Fig.110-1 ~ 17、19・20 の遺物が出土した。土師器小碗がまとまっており、何らかの儀式が執り行われた可能性もある。出土遺物から、遠江Ⅴ期から遠江Ⅵ期の移行期頃 (8 世紀中葉) の遺構と捉えられる。伊場大溝の層位でいえばⅣ b 層に相当する。

SE102 出土遺物 (Fig.110) 1 ~ 20 は SE102 から出土した遺物である。須恵器 (1 ~ 8) には、摘蓋 (1・2)、有台坏身 (3)、箱坏 (4)、無台碗 (5 ~ 8) などがみられる。これらの遺物は遠江Ⅴ期から遠江Ⅵ期に相当するとみられる。9・10 は土師器の鉢、11 ~ 16 は土師器の小碗である。

18 は杵材に用いられた臼である。一つの木材を刳り貫いたもので、端部には面を持つ。側面の一部は破損しているが、出土時の遺存状態は比較的良好であった。19・20 は斎串である。いずれも切り込みがない小型品である。

SD102 B 区で確認した伊場大溝本体を SD102 とする。伊場大溝の南岸にあたるが、岸の境界は直線的でなく、南側にやや張り出した状態であった。SD102 の断面の観察では、伊場大溝のⅤ層からⅢ層に併行する層位が確認でき、21 ~ 39 に示す遺物が出土した。出土遺物の年代観も層位の併行関係の理解とほぼ整合する。

SD102 出土遺物 (Fig.111) 21 ~ 39 は SD102 から出土した遺物である。21 ~ 27 は須恵器、28 ~ 32 は灰釉陶器、33 ~ 39 は土師器である。

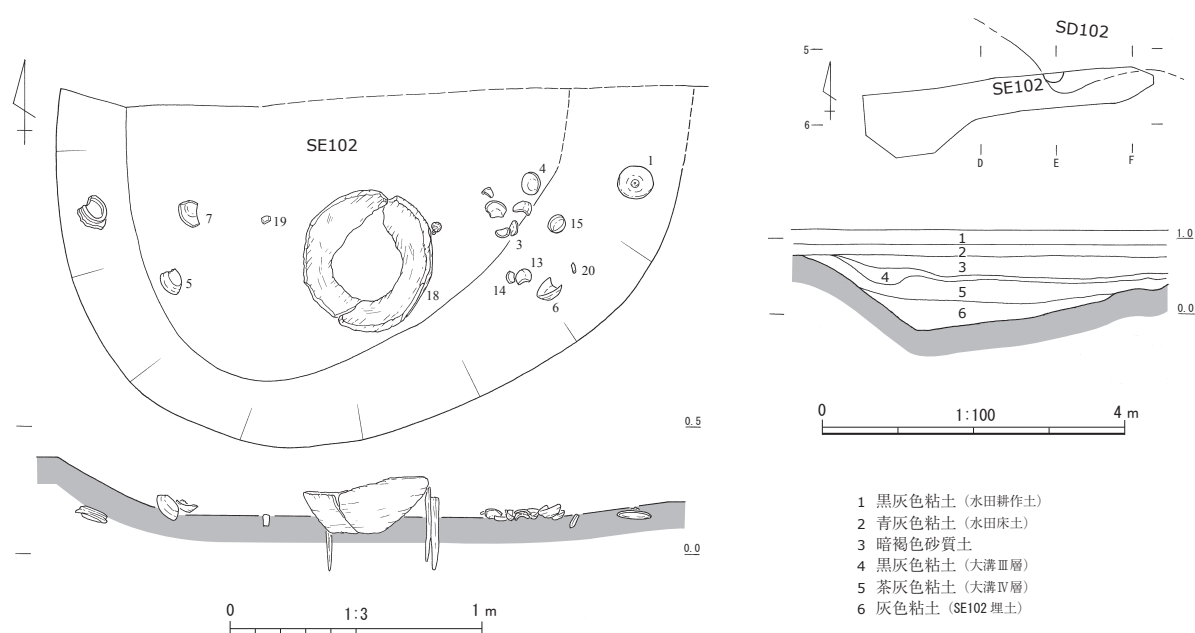


Fig.109 SE102 実測図

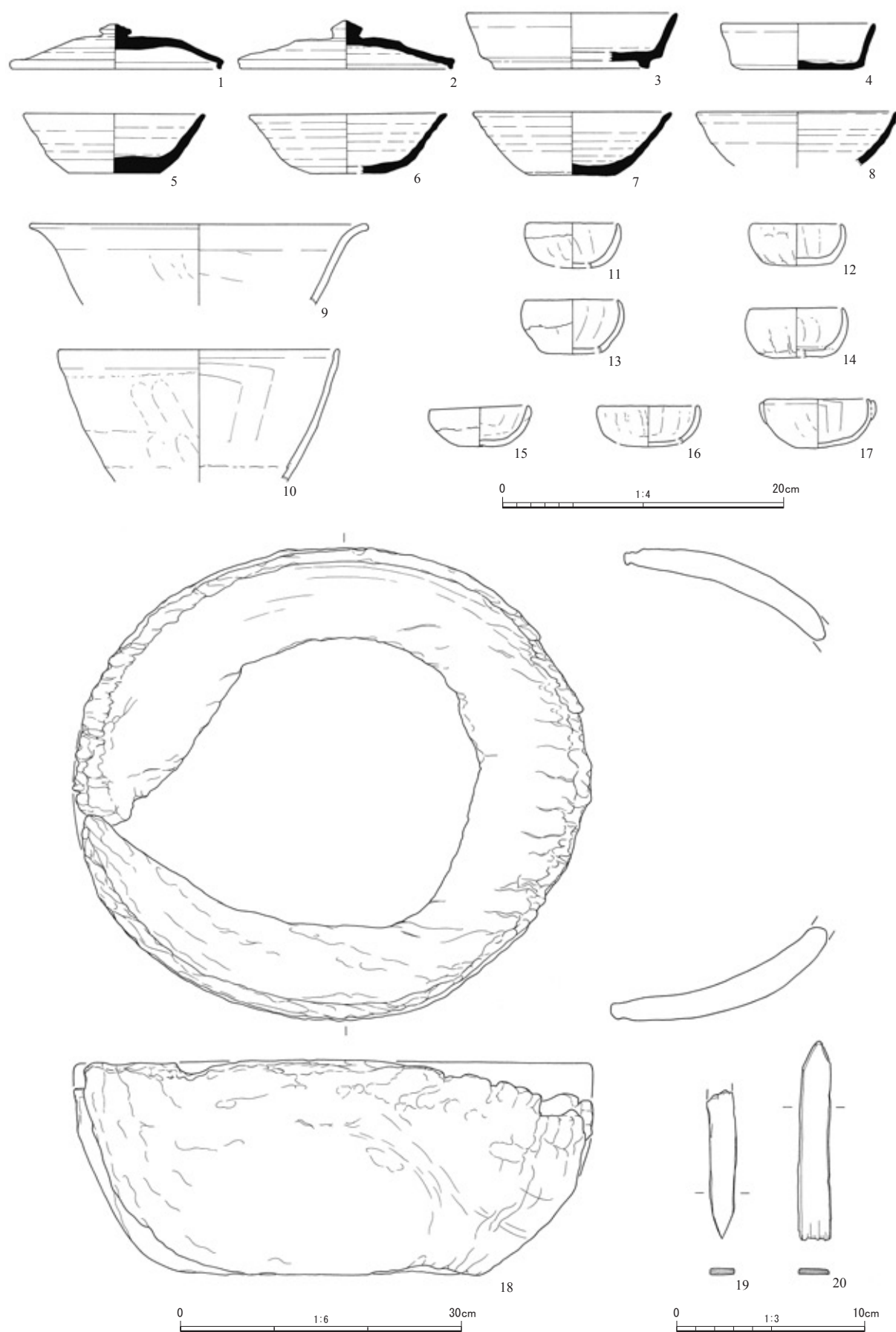


Fig.110 SE102 出土遺物 (1)

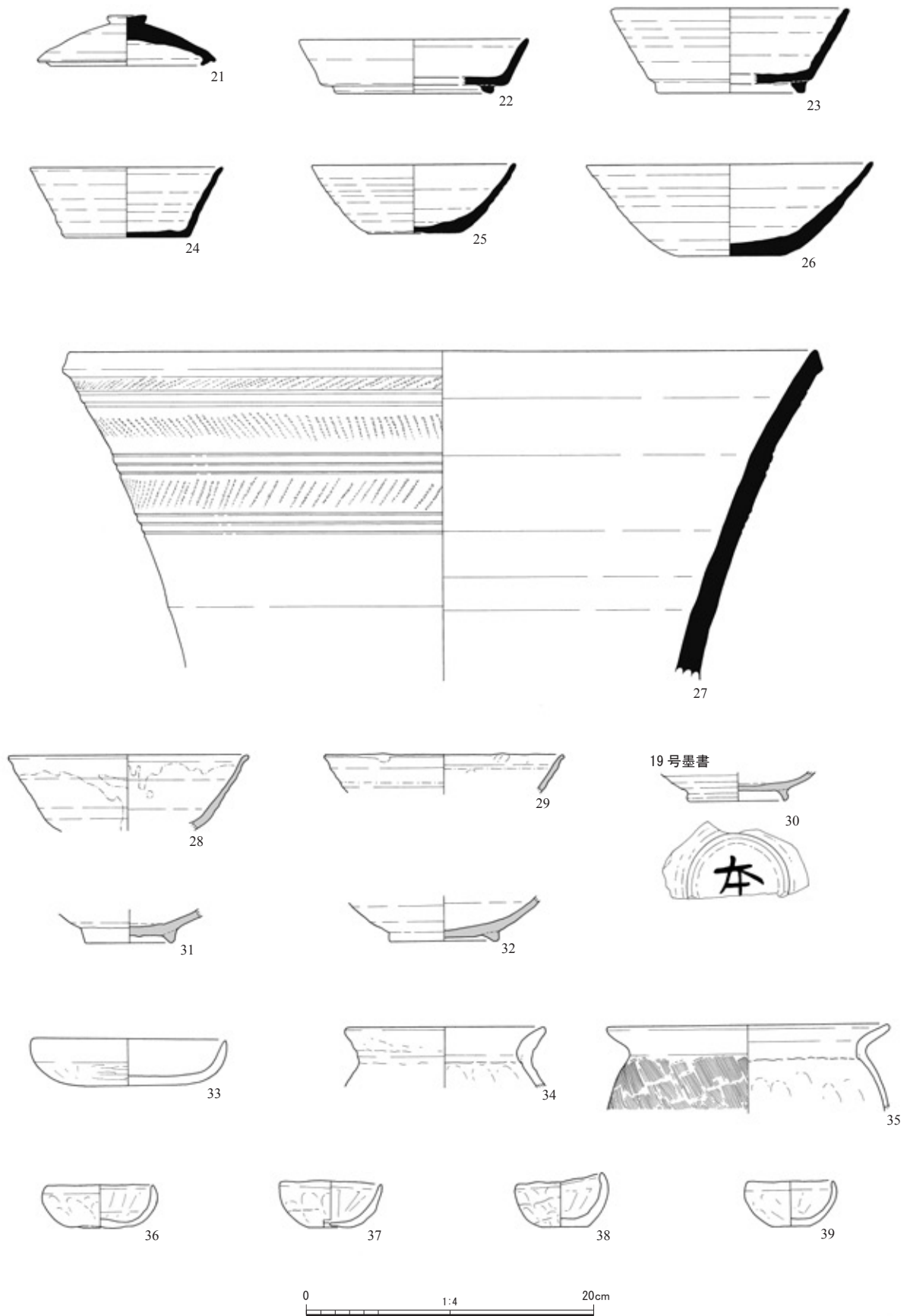


Fig.111 SD102 出土遺物 (2)

21 は返り付の坏蓋、22・23 は有台坏身である。23 は坏部が深いつくりで遠江V-3 期に位置づけられる器形である。24 は箱坏、25・26 は無台碗、27 は甕である。

28 ～ 32 は灰釉陶器である。30 の底部には「本」の墨書がある。これらの資料は、漬け掛けの施釉や底部ヘラケズリ調整がみられるもので、K90 窯式（9 世紀後半）に位置づけられる。

33 は土師器皿で内面に赤彩がみられる。34・35 は土師器甕で、前者は古墳時代中期の、後者は奈良時代前葉を中心とする形態である。36 ～ 39 は土師器小碗である。口縁が丁寧に調整されるもの（36・37・39）と、調整されないもの（38）がある。

SE101 調査区の西端において検出した井戸である。井戸枠などを有しない、いわゆる素掘りの状態で、中央に深い窪みがある。掘り方はやや楕円形を呈しており、長軸 2.8m、短軸 2.5m ほどで、検出面から底面までの深さは 1.1m ほどである。SE101 が掘削されている面は、基本層位 11 層の白灰色粘土層までである。この層は湧水層とはいえないが、その上位の基本層位 10 層である黒色泥炭質粘土層から湧き出た水を集めたものと捉えられよう。出土遺物から、SE101 は鎌倉時代後半（13 世紀後半）頃の遺構と判断できる。

SE101 出土遺物 (Fig.113) 1 ～ 5 は、SE101 から出土した山茶碗である。1 ～ 3 は茶碗、4 は皿、5 は壺である。茶碗 1 ～ 3 はいずれも粗雑なつく

りで、底部には痕跡程度の高台が付けられている。皿（4）には高台がみられず、糸切りの痕跡を明瞭に残す。これらの遺物は鎌倉時代後半（13 世紀後半）に位置づけられるだろう。

（3）小 結

B 区では、奈良時代から平安時代にかけての伊場大溝の南岸を確認したほか、古墳時代中期の土器集積、鎌倉時代の井戸などを検出した。伊場大溝からは 9 世紀後半のまとまった資料がみられ、A 区の調査成果を補完している点が注目できる。

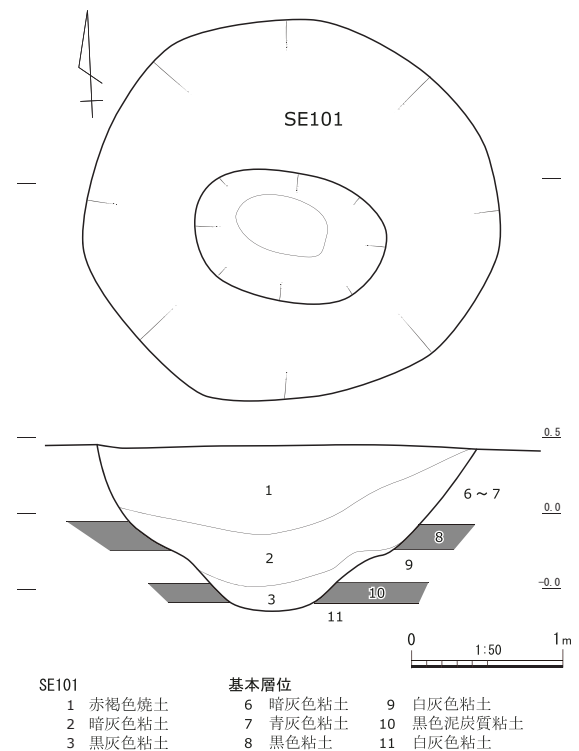


Fig.112 SE101 実測図

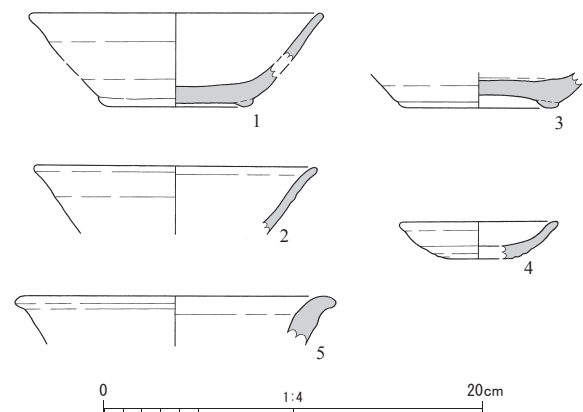


Fig.113 SE101 出土遺物

8 D区の調査

(1) D区の概要

D区はB区の南西において設定した調査区である。汚染土壌入れ替え工事の関係で、遺構の保存が図れない上層部分のみを発掘調査した。調査面積はわずかであったが、古墳時代中期の竪穴建物（SB301）を検出した。

(2) 検出遺構等

SB301（Fig.114）調査区の北東隅において、竪穴建物（SB301）を検出した。方形の竪穴建物で、壁溝を伴う南西隅の掘り方が確認できた。柱穴は検出できていない。SB301からは、Fig.115-1・2の遺物が出土した。出土遺物から、SB301は古墳時代中期後葉頃の遺構と考えられる。

D区出土遺物（Fig.115）D区出土遺物として、古墳時代中期後葉から後期前葉頃の土師器を4点ほど図示する。1・2はSB301から出土した甕、3・4は遺構検出面において確認した甕および高坏である。

(3) 小 結

D区では、古墳時代中期後葉の竪穴建物1軒を確認した。B区においても、同時代の土器集積が確認できていることから、この段階の集落が展開しているとみられる。なお、調査の制約から、D区においては、上面遺構の調査のみを実施している。下層には弥生時代の遺構が展開しているとみられるが、本発掘調査はしていない。

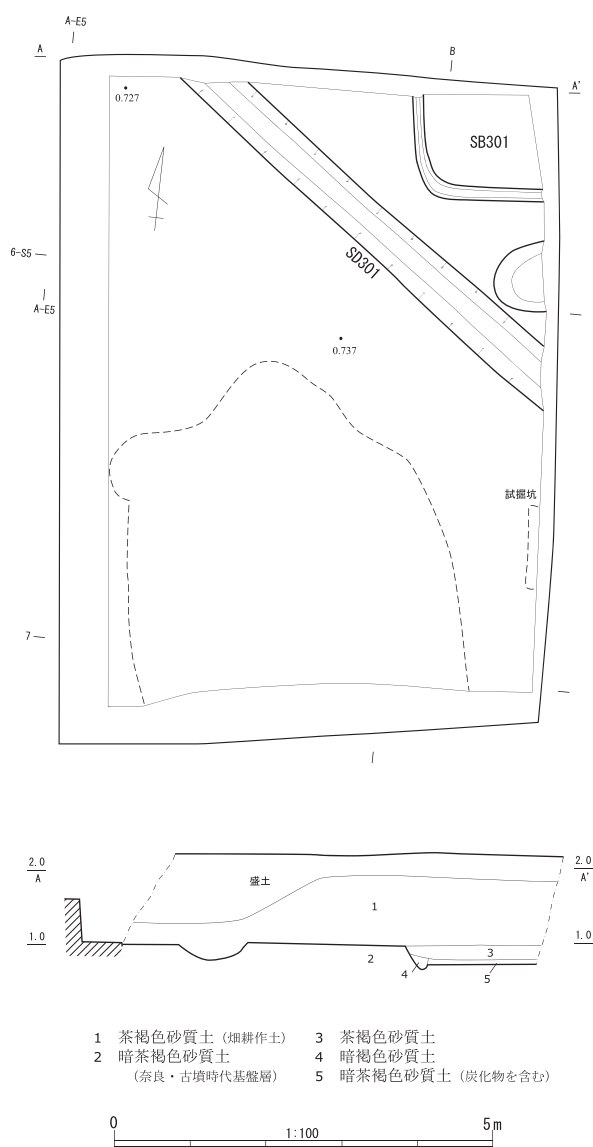


Fig.114 D区検出遺構

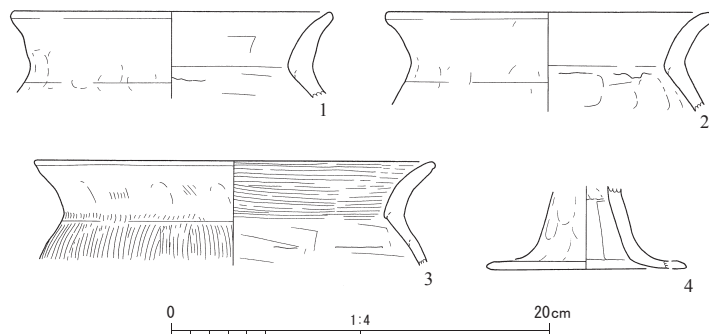


Fig.115 D区出土遺物

第3章 後 論

1 鳥居松遺跡における堆積層の年代

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1) はじめに

浜松市に所在する鳥居松遺跡は、浜名湖東南方で三方原台地東南縁部崖下の低地に立地する。周囲の地形分類図（町田ほか編 2006）によれば、遺跡の立地する低地の北側には台地南縁部崖下に形成された砂丘が東西方向に広がり、西南側には第2列目の海岸砂丘の東端部があり、東南側には馬込川の右岸に形成された自然堤防が分布する。鳥居松遺跡はこれらの微高地に囲まれた低地の中に立地する。

発掘調査では、古墳時代中期から鎌倉時代の自然河川とされる伊場大溝が検出され、幅 25m、深さ 2.5m におよぶ規模が確認されている。大溝からは多量の遺物が出土しており、中でも古墳時代後期の金装円頭大刀、奈良～平安時代とされる木簡や墨書土器、木製形代などが注目されている。これら出土遺物のうち、古代の遺物群は敷智郡衙に関わるものとされ、鳥居松遺跡は隣接する伊場遺跡と一連であると考えられている。

本報告では、伊場大溝内の堆積層および伊場大溝によって削剥されているいわゆる基盤を構成す

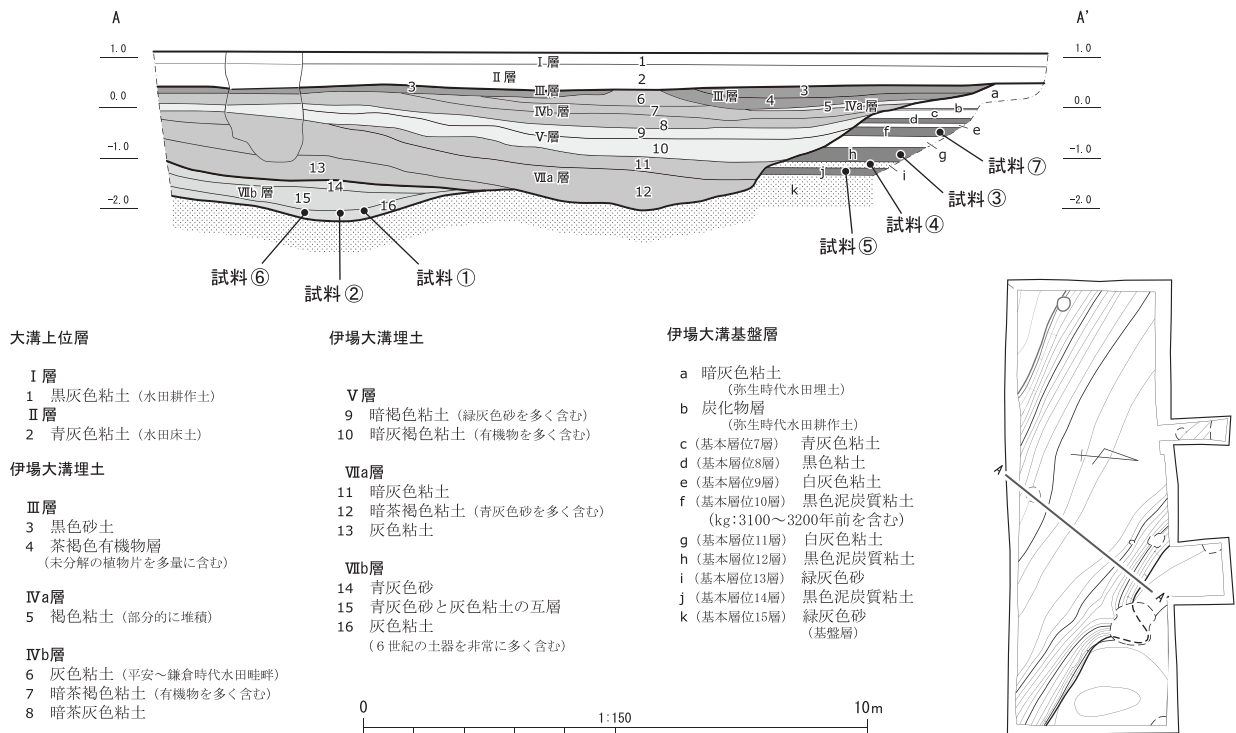


Fig.116 試料採集位置

る堆積層について、その堆積年代に関わる資料を得ることを目的として、堆積層中に包含される材や腐植質土壌等を対象として放射性炭素年代測定を行う。また、基盤を構成する堆積層中には、テフラと考えられる碎屑物が認められていることから、その碎屑物がテフラの本質物質であるか否かを明らかにし、テフラであればその特徴から、指標テフラとの対比を行い、これも堆積層の年代資料とする。

(2) 試料

試料は、伊場大溝の検出された調査区北部で作製された土層断面より採取された試料①～試料⑦までの7点である。これらのうち、試料①～試料⑥までの6点は、放射性炭素年代測定対象試料であり、試料⑦の1点はテフラ分析（屈折率測定含む）の対象試料である。

試料①、②、⑥は、伊場大溝の堆積層最下部のⅦb層より採取された試料である。試料①、②は枝材と思われる材片で、保存状態も不良であったことから組織観察は不能なため樹種は不明である。試料⑥は、包含される炭化材（組織観察より広葉樹材とされる）を測定試料とした。

試料③、④、⑤は、伊場大溝の側壁を構成する堆積層の下部に相当する12層、13層、14層の各層より採取された試料である。12層および14層は黒色を呈する植物遺体を含む腐植質土壌であり、13層はその間層をなす緑灰色砂層である。試料③および⑤は腐植質土壌を測定試料とし、試料④は包含される植物繊維を測定試料とした。

試料⑦は、伊場大溝側壁の中部付近を構成する堆積層である黒褐色を呈する腐植質土壌の10層から採取された。テフラと考えられている碎屑物で、粗砂～中砂径の灰色砂が比較的多く含まれる。

(3) 分析方法

放射性炭素年代測定 試料は、超音波煮沸洗浄と酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 1.2N、水酸化ナトリウム 1N、塩酸 1.2N）により、不純物を取り除いたあと、グラファイトを合成し、測定用試料とする。測定機器は、NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH を用いる。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1,950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（ ^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表するのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表している。暦年較正については、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。暦年代は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

Tab.2 放射線炭素年代測定結果

試料名	層位	試料の質	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
試料①	VIIb層	木材(樹種不明)	1,530 \pm 25	-29.30 \pm 0.22	1,605 \pm 25	10102-1
試料②	VIIb層	木材(樹種不明)	1,570 \pm 20	-31.56 \pm 0.23	1,680 \pm 20	10102-2
試料③	12層(中層ピート)	腐植質土壌	4,290 \pm 30	-27.80 \pm 0.17	4,335 \pm 30	10102-3
試料④	13層	植物繊維	4,120 \pm 30	-31.97 \pm 0.23	4,235 \pm 30	10102-4
試料⑤	14層(下層ピート)	腐植質土壌	4,915 \pm 25	-25.21 \pm 0.22	4,920 \pm 25	10102-5
試料⑥	VIIb層	炭化材(広葉樹)	1,685 \pm 20	-30.47 \pm 0.12	1,775 \pm 20	10102-6

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。

2)BP年代値は、1,950年を基点として何年前であることを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

テフラ分析・屈折率測定 試料約 20g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤明の MAIOT を使用した温度変化法（古澤 1995）を用いた。

(4) 結 果

放射性炭素年代測定 同位体効果による補正を行った測定結果を表1に示す。6点の試料の年代は、大きく試料①、試料②および試料⑥の年代と試料③～⑤の年代とに分けられる。前者のグループは、試料①の年代が 1,530 \pm 25BP、試料②は 1,570 \pm 20BP、試料⑥は 1,685 \pm 20BP であり、後者のグループは、試料③の年代が 4,290 \pm 30BP、試料④は 4,120 \pm 30BP、試料⑤は 4,915 \pm 25 BP を示す。

暦年較正結果を Tab.3 に示す。測定誤差を σ として計算させた結果、上記前者グループの試料①は calAD 442-573、試料②は calAD435-536、試料⑥は calAD342-402 であり、上記後者グループの試料③は calBC 2,913-2、891、試料④は calBC2、857-2、625、試料⑤は calBC3、701-3、695 である。

テフラ分析・屈折率測定 処理後に得られた砂分は、多量のスコリアから構成され、微量の軽石ときわめて微量の火山ガラスも認められた。スコリアは、最大径約 0.5mm、粒径の淘汰は良好である。灰黒色で発泡の不良なスコリアと暗灰色で発泡の不良なスコリアが多く、少量の灰色で発泡の不良なスコリアと微量の赤色で発泡の不良なスコリアも混在する。

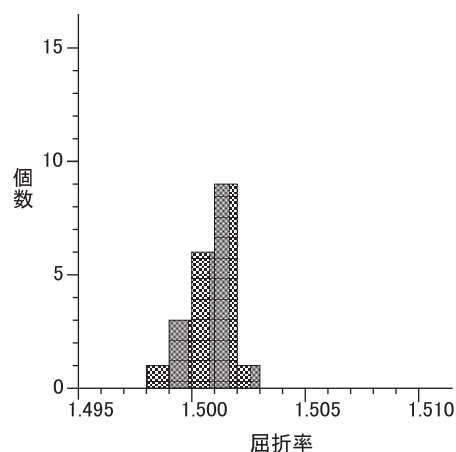


Fig.117 試料⑦中の火山ガラスの屈折率

Tab.3 暦年較正結果

試料名	層 位	補正年代 (BP)	暦年較正年代(cal)												相対比	Code No.						
試料①	VIIb層	1,532± 23	σ	cal	AD	442	-	cal	AD	452	cal	BP	1,508	-	1,498	0.078	10102-1					
				cal	AD	461	-	cal	AD	483	cal	BP	1,489	-	1,467	0.224						
				cal	AD	533	-	cal	AD	573	cal	BP	1,417	-	1,377	0.698						
			2σ	cal	AD	433	-	cal	AD	494	cal	BP	1,517	-	1,456	0.350						
				cal	AD	505	-	cal	AD	522	cal	BP	1,445	-	1,428	0.047						
				cal	AD	526	-	cal	AD	597	cal	BP	1,424	-	1,353	0.603						
試料②	VIIb層	1,572± 22	σ	cal	AD	435	-	cal	AD	492	cal	BP	1,515	-	1,458	0.725	10102-2					
				cal	AD	507	-	cal	AD	519	cal	BP	1,443	-	1,431	0.157						
				cal	AD	527	-	cal	AD	536	cal	BP	1,423	-	1,414	0.118						
			2σ	cal	AD	427	-	cal	AD	542	cal	BP	1,523	-	1,408	1.000						
				試料③	12層 (中層ビート)	4,291± 29	σ	cal	BC	2,913	-	cal	BC	2,891	cal	BP		4,863	-	4,841	1.000	10102-3
								2σ	cal	BC	3,009	-	cal	BC	2,982	cal		BP	4,959	-	4,932	
cal	BC	2,936	-						cal	BC	2,877	cal	BP	4,886	-	4,827	0.954					
試料④	13層	4,122± 28	σ				cal		BC	2,857	-	cal	BC	2,828	cal	BP	4,807	-	4,778	0.207	10102-4	
							cal	BC	2,824	-	cal	BC	2,811	cal	BP	4,774	-	4,761	0.086			
							cal	BC	2,748	-	cal	BC	2,724	cal	BP	4,698	-	4,674	0.160			
			2σ	cal	BC	2,698	-	cal	BC	2,625	cal	BP	4,648	-	4,575	0.546						
				cal	BC	2,866	-	cal	BC	2,804	cal	BP	4,816	-	4,754	0.267						
				cal	BC	2,776	-	cal	BC	2,769	cal	BP	4,726	-	4,719	0.011						
試料⑤	14層 (下層ビート)	4,915± 26	σ	cal	BC	2,763	-	cal	BC	2,580	cal	BP	4,713	-	4,530	0.721	10102-5					
				2σ	cal	BC	3,701	-	cal	BC	3,695	cal	BP	5,651	-	5,645		1.000				
					cal	BC	3,761	-	cal	BC	3,740	cal	BP	5,711	-	5,690		0.054				
			2σ		cal	BC	3,735	-	cal	BC	3,725	cal	BP	5,685	-	5,675		0.021				
				cal	BC	3,715	-	cal	BC	3,645	cal	BP	5,665	-	5,595	0.926						
				試料⑥	VIIb層	1,683± 22	σ	cal	AD	342	-	cal	AD	402	cal	BP		1,608	-	1,548	1.000	10102-6
2σ	cal	AD	260					-	cal	AD	283	cal	BP	1,690	-	1,667	0.096					
	cal	AD	323					-	cal	AD	419	cal	BP	1,627	-	1,531	0.904					

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、2 σ は95%である。

5) 相対比は、 σ 、2 σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

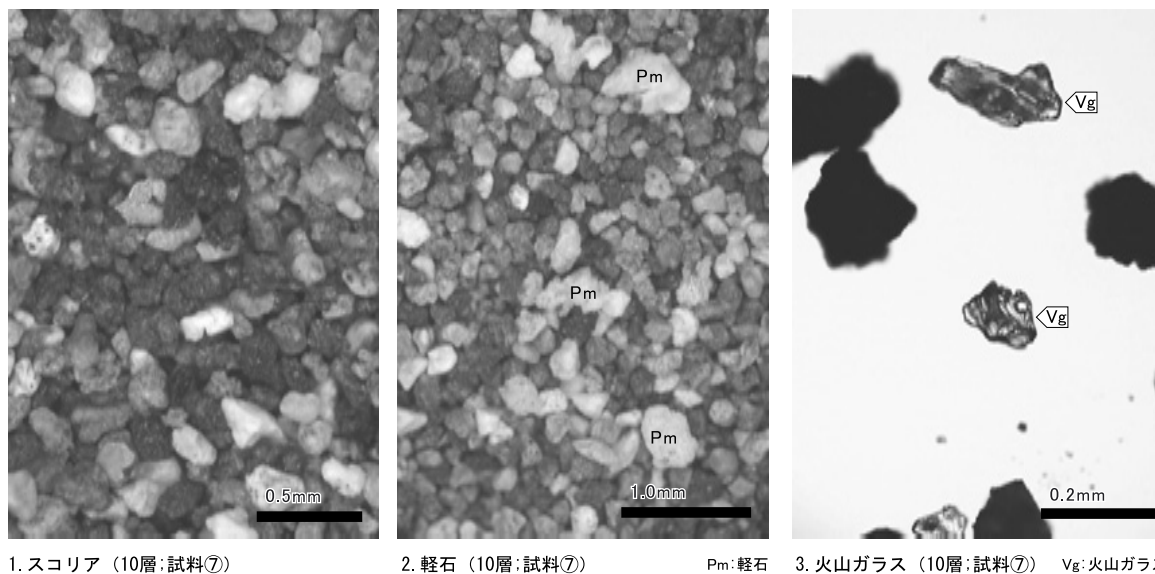


Fig.118 火山灰写真

軽石は、最大径約 0.8mm であり、白色を呈し、発泡は良好である。火山ガラスは、無色透明の軽石型（スポンジ状および繊維束状含む）である。火山ガラスの屈折率は、 $n_{1.498-1.503}$ のレンジを示し、モードは $n_{1.500-1.501}$ であった (Fig.117)。

上述の碎屑物のうち、軽石および火山ガラスは、その色調や形態および屈折率の値、さらに鳥居松遺跡の地理的位置とこれまでのテフラ分布（町田・新井 2003）から、天城カワゴ平テフラ（Kg：町田ほか 1984）に由来すると考えられる。Kg は、伊豆半島天城山カワゴ平火口を給源とし、西方に広く分布が認められており、鳥居松遺跡に隣接する伊場遺跡での確認も報告されている。これまでのところ、琵琶湖岸や福井県三方町まで分布が確認されている（西田ほか 1993）。また、その噴出年代は、暦年で約 3,100BP 頃とされている（町田・新井 2003）。

スコリアについては、富士山の完新世テフラに由来すると考えられるが、Kg が混在するすなわち Kg と噴出年代がほぼ同時であることと富士山より西方に分布するテフラであることが特徴となる。これらの特徴を有する富士山の完新世のテフラは、宮地直道の記載から（宮地 1988）、大沢スコリア（Os）であると判断される。

（5）考 察

試料①、②、⑥より得られた放射性炭素年代は、その採取層位より伊場大溝の埋積開始頃の年代を示唆している可能性がある。したがって、これらの試料の放射性炭素年代の暦年から推定すれば、伊場大溝の埋積は、4 世紀後半～6 世紀頃には始まっていたことが推定される。

基盤の構成層では、側壁中部付近を構成する腐植質土壌層は、Kg および Os のテフラを包含することから、暦年で約 3,000 年前頃の堆積年代が推定される。それよりも下位の、側壁下部を構成する 2 枚の腐植質土壌層とその間層の年代は、暦年で約 5,600 年前から 4,800 年前までの期間に堆積したことが推定される。

以上述べた伊場大溝の埋積開始年代および基盤層の堆積年代は、発掘調査所見による推定堆積年代と大きく異なることはなく、今回の分析結果は、発掘調査所見をほぼ支持する結果であったと言える。

【参考文献】

- 古澤明 1995「火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別」『地質学雑誌』101 pp. 123-133
- 町田洋・新井房夫 2003『新編 火山灰アトラス』東京大学出版会 p.336
- 町田洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦 1984「テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－」渡辺直経（編）『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』同朋舎 pp.865-928
- 町田洋・松田時彦・海津正倫・小泉武栄（編）2006『日本の地形 5 中部』東京大学出版会 p.385
- 宮地直道 1988「新富士火山の活動史」『地質学雑誌』94 pp.433-452
- 西田史郎・高橋 豊・竹村恵二・石田志朗・前田保夫 1993「近畿地方へ東から飛んできた縄文後・晩期火山灰層」『第四紀研究』32 pp.129-138

2 鳥居松遺跡の立地環境

松原彰子（慶應義塾大学）

（1）浜松低地における遺跡分布

1）浜松低地の地形

浜松低地は、浜名湖東側の三方原台地の南に広がり、6列の砂州地形（内陸側から順に砂州Ⅰ～Ⅵ）が分布することで特徴づけられる。砂州地形は、低地の東部では6列が明瞭に区別できるが、西部では砂州Ⅱの連続性が見られなくなり、さらに砂州Ⅲから砂州Ⅴまでの境界が不明瞭になる。また、浜名湖の湖口付近では3列の砂州地形に収斂する（Fig.119）。

低地西部の砂州Ⅰと砂州Ⅲの間には水域が広がり、周辺には養魚場が密集している。また低地全体では、砂州Ⅴと現在の海岸沿いに発達する砂州Ⅵとの間の堤間湿地にも養魚場が分布する。

浜松低地の地質は、全体に砂質堆積物（砂ないし砂礫）が主体であり、これらは砂州地形の構成層と考えられる。ただし、表層付近（標高約－5m以浅）では、堤間湿地を中心にして泥炭質のシルト・粘土層が分布する（松原 2001）。

浜名湖およびその沿岸では、湖口部の湖底を中心に縄文時代の遺跡が発見されている。また、湖口西側の砂州上には、古墳時代と歴史時代の遺跡が多く分布する。一方、浜松低地においては、縄

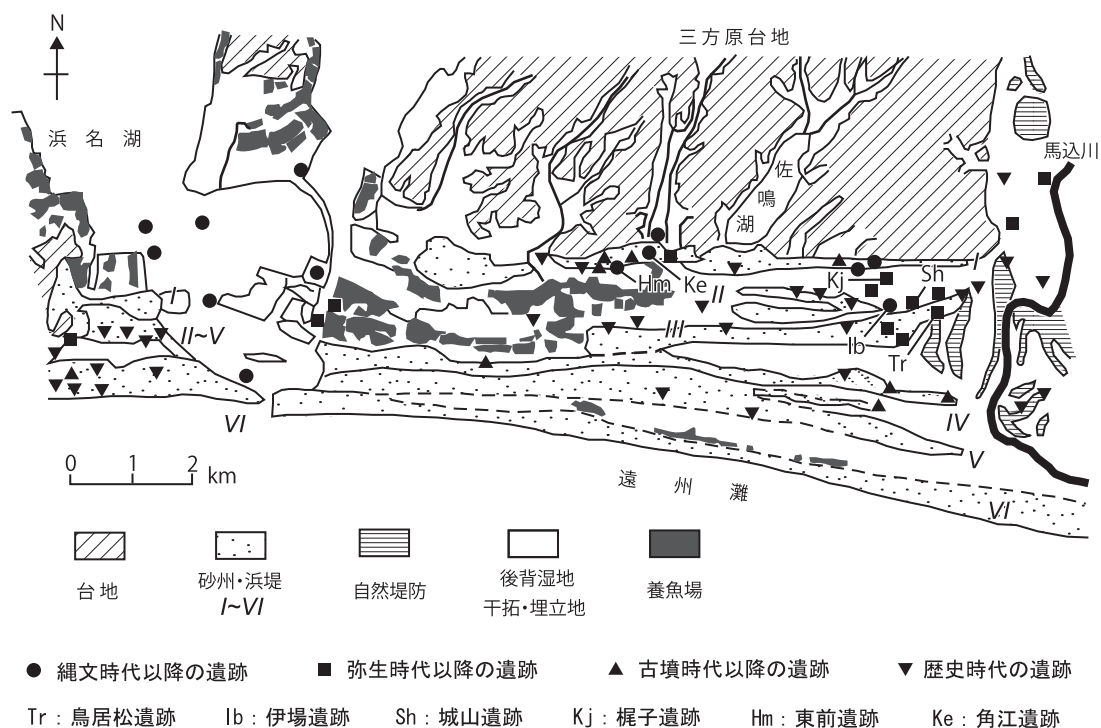


Fig.119 浜松低地の地形と遺跡分布

文時代の遺跡分布は、砂州Ⅰおよび砂州Ⅰ－砂州Ⅱ間の低湿地上に限定される。また弥生時代の遺跡は、砂州Ⅰ、Ⅲおよびこれらの堤間湿地に分布する。さらに古墳時代と歴史時代の遺跡は、砂州ⅠからⅤの上に分布している。

2) 低地の微地形と遺跡立地との関係

浜松低地に発達する砂州列および堤間湿地と遺跡の分布との関係は、次のようにまとめることができる（松原 2008b）。

① 砂州上に立地する遺跡

角江遺跡 角江遺跡は、三方原台地を刻む東神田川の谷の出口付近を塞ぐ形で発達する砂州（砂州Ⅰ）上に立地している（Fig.119）。この遺跡で確認されている遺物・遺構は、縄文時代後期から中世までのものである（静文研 1996 など）。この砂州の形成時期に関する地質学的な証拠は得られていないが、ここでの遺跡の時代と、浜松低地の西方の浜名湖における砂州の発達過程に基づけば（松原 2000、2001）、6,000 yr BP 頃にはすでに砂州の一部が離水して背後の閉塞が始まっていたと推定される。

梶子北遺跡 梶子北遺跡は、三方原台地東部の南縁に発達する砂州（砂州Ⅰ）の海側の縁辺部に立地する遺跡である。この遺跡で確認されている遺物・遺構は、縄文時代前期から平安時代までのものである（浜文協 1997）。

梶子北遺跡において 1999～2000 年度に行われた発掘調査の際に、表層の地質を確認したところ、盛土を除いた表層 1 m ほどは泥炭質堆積物に覆われ、その平均堆積速度はおよそ 0.7 mm / yr と推定され、泥炭層下部の ^{14}C 年代測定値は 3,200 yr BP であった（松原 2004）。その下位には、粘土質の砂が堆積しており、湿地において河川が流入するような環境であったことが推定された。泥炭層下部の年代値 3,200 yr BP は、この付近がより海側に形成された砂州によって完全に閉塞された時期を示すものといえる。また、砂州上に縄文時代前期の遺跡が立地していることから判断して、砂州の形成時期は、6,000 yr BP 以前であったと考えられる。

② 埋没砂州上に立地する遺跡

梶子遺跡 梶子遺跡は、梶子北遺跡の南西に位置し、砂州（砂州Ⅰ）の海側に分布する後背湿地に立地する弥生時代中期から平安時代までの遺跡である（Fig.119）。地質資料を解析した結果、後背湿地の地下に砂州が埋没していること、およびその下位の海拔高度 -10 ～ -15 m に埋没海食台が分布して砂州の基盤になっていることが明らかになった（松原 2004）。なお、この埋没砂州は、現在の微地形として確認される砂州Ⅱの北東への延長部にあたる可能性も考えられる（Fig.119）。

埋没砂州堆積物を覆う後背湿地堆積物の最下部の ^{14}C 年代値として $6,090 \pm 10$ yr BP が得られていることから（古環境研究所 1994）、最も内陸側の砂州およびその海側の埋没砂州の形成年代は、6,000 yr BP 以前にさかのぼると推定できる。

東前遺跡 東前遺跡は、梶子遺跡の西方約 5km に位置し、三方原台地南縁に発達する砂州（砂州Ⅰ）の縁辺部にあたり（Fig.119）、地点 Hm -1 と Hm -2 の 2 箇所での遺跡発掘調査時に、現在の微地形および表層の地質調査を行った。本遺跡からは、縄文時代後期以降の遺物が確認されている。

2001 年 2 月に行った地点 Hm -1 における調査では、表層の地質は下位から順にⅠ～Ⅵの 6 層

に区分される。I層は青灰色の砂層であり、地点 Hm-1 のトレンチ床面において北東-南西方向に帯状に分布し、その上面は南東側に傾斜していることが確認されている。また、地点 Hm-1 の西方約 300 m の地底における試掘では、本層に対比される暗灰色～青灰色砂層が、少なくとも 1 m の厚さで堆積していることが確かめられた（松原 2004、2008a・b）。

一方、地点 Hm-2 は、地点 Hm-1 の南東約 100 m に位置する。2006 年 12 月に行った本地点での調査では、表層の地質は下位から順に I～VI 層の 6 層に区分された。層相の特徴などから判断して、ここでの I～VI 層は、それぞれ地点 Hm-1 の I～VI 層に対比される。

地点 Hm-2 では、I 層の上面高度が北側の砂州（雄踏街道沿いに発達する砂州 I）との間で低くなる場所がある。同様のことは、地点 Hm-1 の北方でも確認されている（浜文協 2002）。これらのことから、東前遺跡で確認された I 層は、砂州（砂州 I）の南側に分布する埋没砂州の堆積物である可能性が考えられる。ただし、地点 Hm-2 において I 層を覆う後背湿地堆積物の最下部の ^{14}C 年代値が $4,035 \pm 25 \text{ yr BP}$ であることから、本層を梶子遺跡における埋没砂州構成層と対比することは現時点ではできない。

(2) 鳥居松遺跡周辺の地形と地質

遺跡周辺の微地形 鳥居松遺跡は、砂州Ⅲの東縁部に位置すると同時に、馬込川沿いに南北方向に分布する自然堤防の北端部にもあたる (Fig.119)。したがって、本遺跡周辺の地形形成においては、海成および河成の両方の作用が及んでいたものと考えられる。

鳥居松遺跡の周辺には、伊場遺跡・城山遺跡などの一連の遺跡群が分布する。現在の微地形では、伊場遺跡、城山遺跡は、共に砂州Ⅲの内陸側の縁辺部に位置している (Fig.119)。

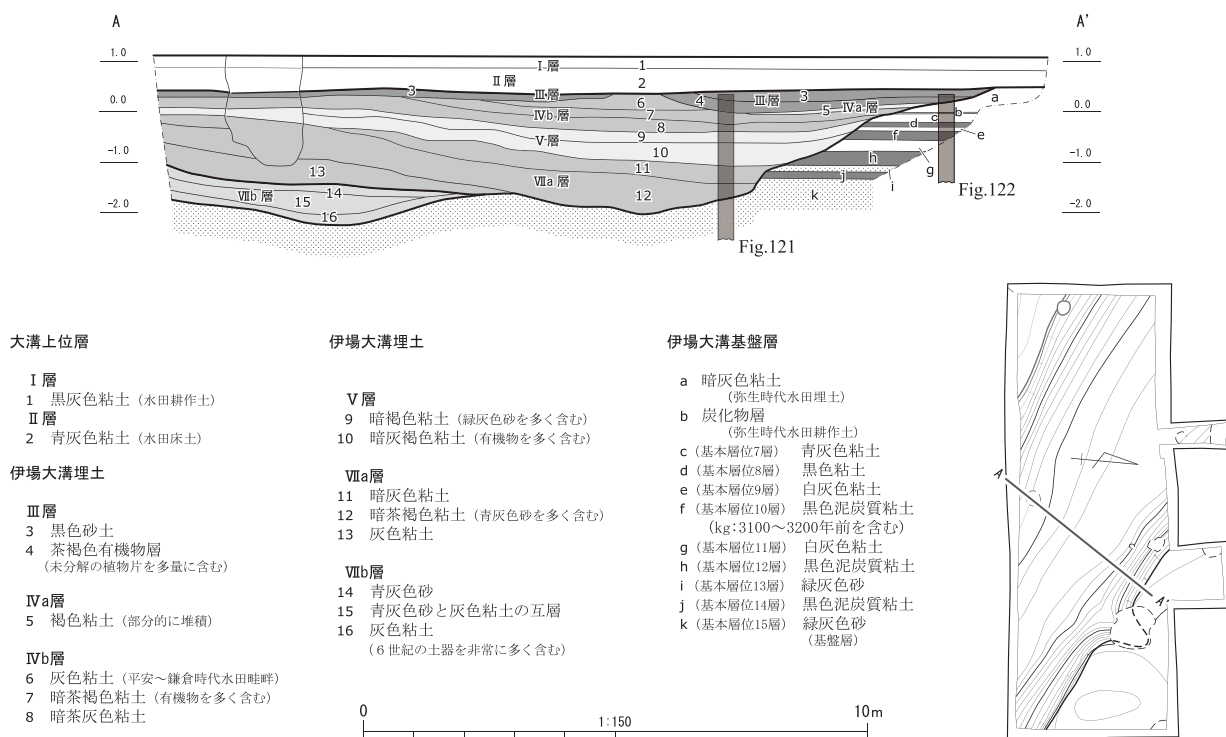


Fig.120 地質層序確認部分位置図

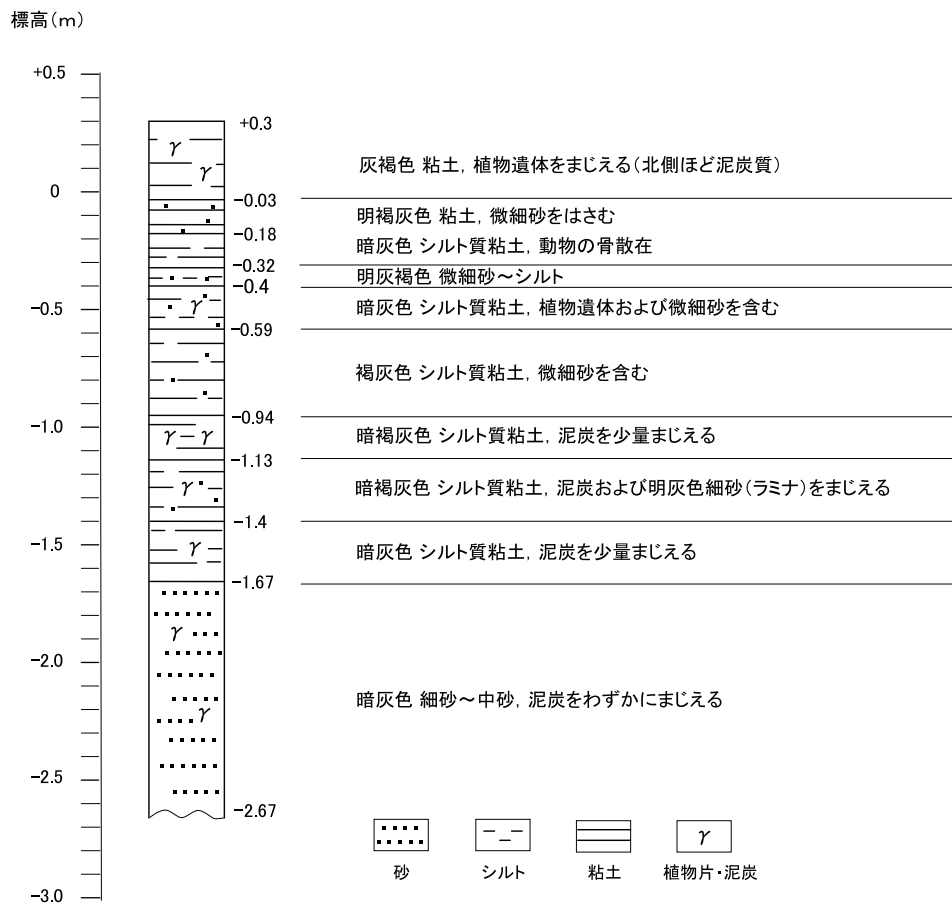


Fig.121 地質層序の観察 (1)

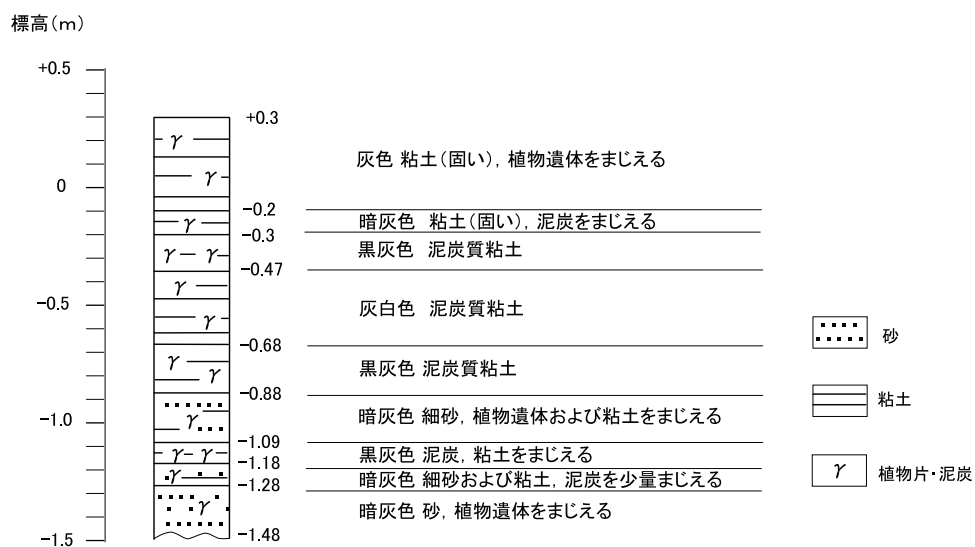


Fig.122 地質層序の観察 (2)

地質層序 2008年3月7日に現地調査を行い、発掘範囲の西側の壁面(34°41′36″N、137°43′10″E、地表面標高+0.3m)の2箇所の詳細な層相を記載した(Fig.120～122)。Fig.121はトレンチの南側で、伊場大溝の中の堆積物、Fig.122はトレンチの北側で、伊場大溝の外側の堆積物に、それぞれ相当する。

伊場大溝の基盤は標高-1.67m以深の暗灰色砂層で(Fig.121)、これはFig.122の-1.28m以深で確認された暗灰色砂層に対比される。これらの砂層は、砂州Ⅲの堆積物の上部にあたるものと推定される。パリノ・サーヴェイ(本書、第3章1)によれば、この砂層の上位に堆積する腐植質土壌(遺跡現場の層位で14層に相当)から $4,915 \pm 25$ yr BPの年代測定値が得られている。したがって、砂州Ⅲの形成時期は、5000年前以前にさかのぼるものと考えられる。このことは、鳥居松遺跡の北西に位置する梶子遺跡で、砂州Ⅰの形成年代が6000年前以前であると推定されたものと調和的である。

[参考文献]

- 古環境研究所 1994「梶子遺跡9次調査基盤層の自然科学分析」『梶子遺跡Ⅸ本文編』(財)浜松市文化協会 pp.117-134
- 静岡県埋蔵文化財研究所 1996『角江遺跡Ⅱ遺構編』p.155
- (財)浜松市文化協会 2002『東前遺跡』p.32
- (財)浜松市文化協会 1997『梶子北遺跡 遺構編』
- 松原彰子 2000「日本における完新世の砂州地形発達」『地理学評論』73A pp.409-434
- 松原彰子 2001「浜名湖および浜松低地の砂州地形」『慶應義塾大学日吉紀要 社会科学』11号 pp.20-32
- 松原彰子 2004「浜松低地に分布する遺跡の立地環境」『慶應義塾大学日吉紀要 社会科学』14号 pp.36-52.
- 松原彰子 2008a「東前遺跡周辺の地形・地質」『東前遺跡Ⅱ』(財)浜松市文化振興財団 pp.55～61
- 松原彰子 2008b「海岸低地における砂州・浜堤の形成と遺跡立地－浜松低地および榛原低地を例にして－」『慶應義塾大学日吉紀要 社会科学』18号 pp.1-13

3 鳥居松遺跡における環境考古学的検討

金原正明（奈良教育大学）、古環境研究所、
菊地大樹（京都大学）、古山真波（奈良教育大学）

（1）はじめに

鳥居松遺跡は、浜松市南区森田町に所在し、2008年に実施した5次調査によって、埋没河川である伊場大溝が検出された。伊場大溝は幅20m、深さ2.5mにおよぶ大規模なもので、5世紀から13世紀にわたる堆積土が確認されている。伊場大溝からは7世紀から10世紀に至る古代の郡役所（敷智郡家）の存在を示す豊富な考古遺物（木簡、墨書土器、木製祭祀具）が出土しており、鳥居松遺跡は、周辺遺跡を含めた「伊場遺跡群」の一角を占めていることが明らかになった。

同定・分析対象は、伊場大溝において出土、採集した貝類、動物骨および堆積土である。本報告は主に、貝類は古山、動物骨を菊池、花粉と珪藻を古環境研究所が同定分析行ったものを金原がまとめた。貝類は奈良時代貝塚SS02とSS04から出土し水洗されたもので、計25試料に区分され、計74708個体を数えた。他に植物遺体が含まれていた。動物骨は同様なものが31試料であった。花粉分析および珪藻分析用の堆積土は、貝塚から採取された7試料、中央断面から採取した55試料の計62試料であり、環境の検討を行った。

SS02とSS04のそれぞれの貝塚の中から、いくつかのトレンチを選び、主要貝類であるヤマトシジミとダンバイキサゴを各50個前後抽出し、計測した。

計測対象とするトレンチを選ぶ際には、同定・計数結果を参考にヤマトシジミとダンバイキサゴの2種を比べ、ヤマトシジミが優占するトレンチ、ダンバイキサゴが優占するトレンチ、差があまりないトレンチの3つにおおまかにわけ、その中から無作為に計10トレンチを抽出した。

（2）貝 類

1) 方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比及び参考文献によって同定を行い、分類計数した。同定が可能で半形以上のものを1個と計数した。計数は二枚貝、巻貝共に基本的に殻頂部が残っているものを一つとして計数した。巻貝の中にはカワニナなどのように、成長の過程で殻頂部が欠損するものもあるので、カワニナ類、ウミニナ類などは内唇部を計数した。また、二枚貝は左右殻に分類してその数を数え、多い方を最小個体数とした。ヤマトシジミとした分類群は、殻頂部が良く発達し、セタシ

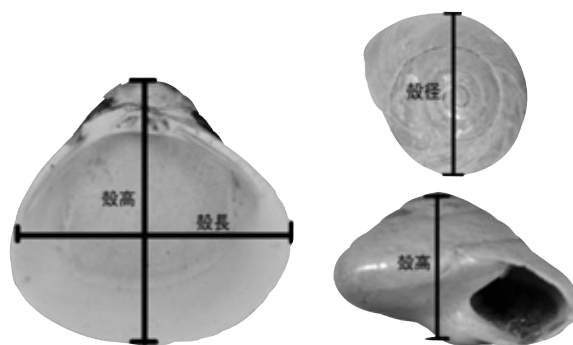


Fig.123 貝類の計測点

ジミの特徴に偏じるがここではヤマトシジミとした。

主要貝類であるヤマトシジミとダンベイキサゴは、それぞれの貝塚の中からいくつかの試料から各 50 個前後抽出し計測した。ヤマトシジミが多い試料、ダンベイキサゴの多い試料、差があまりない試料にわけ、その中から無作為に 10 試料を抽出した。ダンベイキサゴについては、完形または完形に近いものを全て取り出し、四分法により 50 個前後を抽出した。ヤマトシジミについては、同一個体を計測してしまう可能性を排除するために、左の完形貝のみを取り出し同様に四分法により 50 個前後を抽出した。ノギスを用いて、ヤマトシジミは殻長と殻高、ダンベイキサゴは殻径と殻高を計測した (Fig.123)。

2) 同定結果

①分類群同定

された分類群は 24 であった。結果は Tab.4・5 に示し、以下に学名を記す。

以下の分類群が主要に同定された。

・巻貝網

ダンベイキサゴ	<i>Umbonium giganteum</i>	ニシキウズガイ科
イシマキガイ	<i>Clithon retropictus</i>	アマオブネガイ科
ウミニナ	<i>Batillaria multififormis</i>	ウミニナ科
イボウミニナ	<i>Batillaria zonalis</i>	ウミニナ科
フトヘナタリ	<i>Cerithidea rhizoporarum</i>	ウミニナ科
ヘナタリ	<i>Cerithidea cingulata</i>	ウミニナ科
ツメタガイ	<i>Glossaulax didyma</i>	タマガイ科
シゲトウボラ	<i>Cymatium cutaceum</i>	フジツガイ科
レイシガイ	<i>Thais bronni</i>	アッキガイ科
アカニシ	<i>Rapana venosa</i>	アクキガイ科
マルタニシ	<i>Bellamya chinensis malleata</i>	タニシ科
ヒメタニシ	<i>Bellamya quadrata histrica</i>	タニシ科
カワニナ	<i>Semisulcospira libertine</i>	カワニナ科
チリメンカワニナ	<i>Semisulcospira reiniana</i>	カワニナ科

・二枚貝網

ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i>	フネガイ科
ヒメアカガイ	<i>Scapharca trosceli</i>	フメガイ科
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>	イタボガキ科
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i>	シジミ科
アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>	マルスダレガイ科
オキアサリ	<i>Gomphina aequilatera</i>	マルスダレガイ科
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>	マルスダレガイ科
オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>	マルスダレガイ科

イシガイ	<i>Unio douglasiae</i>	イシガイ科
------	------------------------	-------

植物遺体は以下の2分類群である。

スモモ	<i>Prunus salicina</i> Lindley	核	バラ科
モモ	<i>Prunus persica</i> Batsch	核	バラ科

②貝類群集の特徴

個体数ではヤマトシジミとダンベイキサゴが圧倒的に多く、この2種で80%以上を占める。その他の種では、ハマグリ・アサリ・フトヘナタリ科・ウミナナ科などがやや多く、オキシジミ・オキアサリ・タニシなども、全ての試料から出土している。その他にも少数であるが、カキ・ヒメアカガイ・イシガイ・アカニシ・レイシガイなども出土している。沿岸の砂底に生息するものから、淡水に生息するものまで、広範囲に分類され、採貝活動が広範囲に渡っていたことがうかがえる。しかし、どちらの貝塚の組成も、ヤマトシジミとダンベイキサゴが80%以上を占めており、この2種が最も主要な貝類であったことがわかる。また、主要貝類であるヤマトシジミとダンベイキサゴを比べると、SS02ではヤマトシジミが多く、SS04ではダンベイキサゴが多い。ヤマトシジミが多いSS02では、フトヘナタリを主にウミナナなどの海産の巻貝がやや多い。ダンベイキサゴが多いSS04では、ハマグリやアサリなど海産の二枚貝がやや多い。

SS02は各試料ともヤマトシジミが多いが、試料によっては次の特徴がある。SS02北では、ヤマトシジミが特に多い。SS02北西はダンベイキサゴとオキアサリがやや多い。SS02北東 SS02南西はアサリが多く巻貝が極端に少ない。SS02西がややフトヘナタリ多い。SS02南はダンベイキサゴが少なく比較的ハマグリ、ヘナタリが多い。SS02東はダンベイキサゴが極端に少なくフトヘナタリが多く二枚貝が占める割合も多い。

SS04は各試料ともダンベイキサゴ多いが試料によっては次の特徴がある。SS04南東ではカワニナが多い。SS04北はシゲトウボラやイシマキガイなどこの試料でしか出土しなかったものもある。SS04東北はハマグリが比較的多い。SS04東側南ではヤマトシジミがやや多い。SS04東側はハマグリが比較的多くカワニナの多い。SS04北側南、SS04北側東、SS04北側西ではダンベイキサゴが特に多い。

③計測結果

ヤマトシジミは殻長1.5cm～3.2cm、殻高1.5cm～3.5cmの間に収まり、平均は殻長2.4cm前後、殻高2.3cm前後である。ダンベイキサゴは、殻径1.6cm～3.7cm、殻高1.0cm～2.4cmの間に収まり、平均は殻径2.6cm前後、殻高1.6cm前後である。ヤマトシジミでも2つの貝塚であり差がなく、SS04で小さい個体が多少増える。ダンベイキサゴでは、SS02では小さなものがない傾向が認められた。小さな貝を意識的に採集していない可能性がある。SS04では大きい個体が多少増える傾向がみられた (Fig.127)。

3) 考 察

SS02では、ヤマトシジミが圧倒的に多く、約60%を占めている。次に多いのはダンベイキサゴで約20%、次いでフトヘナタリで約10%となっており、この3種でほとんどを占めている。ヤマトシジミやフトヘナタリに加え、ハマグリやアサリ、オキシジミなどは砂泥質の干潟から内湾部に

Tab.4 貝類同定結果 (1)

網	分類群	形状	SS01	SS02 東 (1)	SS02 東 (2)	SS02 東 (3)	SS02 南 (1)	SS02 南 (2)	SS02 南 (3)	SS02 南西 Tr.	SS02 西	SS02 北西 Tr.
巻貝綱	ダンベイキサゴ		622			39			225	585	956	
		小	14								1	
	カワニナ		16			10			61	9	150	8
	チリメンカワニナ		29			7			56	14	117	14
	ウミニナ					4			3	3	10	1
	イボウミニナ								3			
	ヘナタリ					4			7		45	1
	フトヘナタリ		1			58			303	65	540	82
	ヒメタニシ		20			3			16	8	71	7
		破片										
	マルタニシ											
	アカニシ						1				2	
	ツメタガイ											
	レイシガイ											
	シゲトウボラ											
	イシマキガイ											
	未同定巻貝					6			5			
	小計		702	0	0	131	1	0	679	684	1892	113
二枚貝綱	ハマグリ	L	192	1	1	40	1	92	92	22	50	16
		R	247	1	1	51	5	77	77	22	47	17
	アサリ	L	31			14		12	12	4	4	
		R	28			17		11	11	4	6	
	オキシジミ	L	6	3	1	5	3	12	11		4	14
		R	7			10	4	18	7		5	8
	オキアサリ	L	4	2	2			3		1	12	17
		R	5	1	1			1		4	9	22
	ヤマトシジミ	L	498			750		61	2372	947	2621	804
		R	558			754		83	1935	833	2565	780
	イシガイ	L						2			2	
		R										
		破片										
	ヒメアカガイ	L				2				1	1	1
		R				1				4		
	ハイガイ								7			
	カキ						2					
		破片	1			2						
	二枚貝	L				6			7			
		R										
	未同定小計		1577	8	6	1652	15	372	4531	1842	5326	1679
不明												
合計個体数			2279	8	6	1783	16	372	5210	2526	7218	1792
他の遺体	モモ	核	20									
		半形				26			7	4	9	4
		破片				7			11	9	30	5
	スモモ	核							5		2	1
		破片										
	骨片											
その他 (土器片)												

Tab.5 貝類同定結果 (2)

SS02 北	SS02 北東 Tr.	SS04 東側 (1)	SS04 東側 南寄り (1)	SS04 東側 南寄り (2)	SS04 東側 南寄り (3)	SS04 北 側 (1)	SS04 北 側 (2)	SS04 北 側 (3)	SS04 北 側 (4)	SS04 北側 東寄り (1)	SS04 北側 東寄り (2)	SS04 北側 東寄り (3)	SS04 北側 南寄り	SS04 北側 西寄り
91	3	1036	1200	1449	28	1367		1532	1625	1415	1364	720		1454
9	1	41	31	8	15	21	37	67	36	3	6	37		
15	1	38	28	47	7	27	108	64	42	8	8	34	58	14
		70	11			8	41	41	20	2	2	17	9	2
		4	8		2	32	26	19	12			61		2
90	4	63	40	29	16	58	107	112	99	9	2	70	8	5
6	1	146	49	44	4	24	66	40	49	11	12	79		16
		+												
												1		
							2	2						
			1											
									2					
							1							
							1							
					1			1						
211	10	1398	1368	1577	73	1537	389	1878	1885	1448	1394	1019	75	1493
39	12	350	112	87	18	167	231	192	178	29	50	234	51	28
56	2	350	124	84	18	161	270	227	168	30	33	260	21	29
3	14	32	15	10	3	30	37	33	26	9	10	19	12	7
1	13	34	12	9	6	19	27	29	26	7	12	21	11	8
5	7	17	7	7	6	6	16	12	11	4	5	9	7	18
8	4	24	6	7	5	10	23	7	11	9	2	10	7	4
	3	5		1	2			1				3		
1	4	6			5			1			1	2		
1118	192	2708	1582	1091	422	933	1735	1650	1230	164	358	2005	381	155
901	177	2278	1381	983	446	997	1936	1829	1242	164	402	2036	335	138
		4			1	6	14	7		1	2	13		
						7								
2								1						
		2			2		2					2	1	
				6		5		9						
												2		
2134	428	5810	3239	2285	934	2341	4291	3998	2892	417	875	4616	826	387
			1											
2345	438	7208	4608	3862	1007	3878	4680	5876	4777	1865	2269	5635	901	1880
6	28	5		5	21	21	38		44	9		12		18
2	3	1		1	10	8	7		12	1		2		1
1				1				2	1					
						2		4						
						113	167	126	99		16			

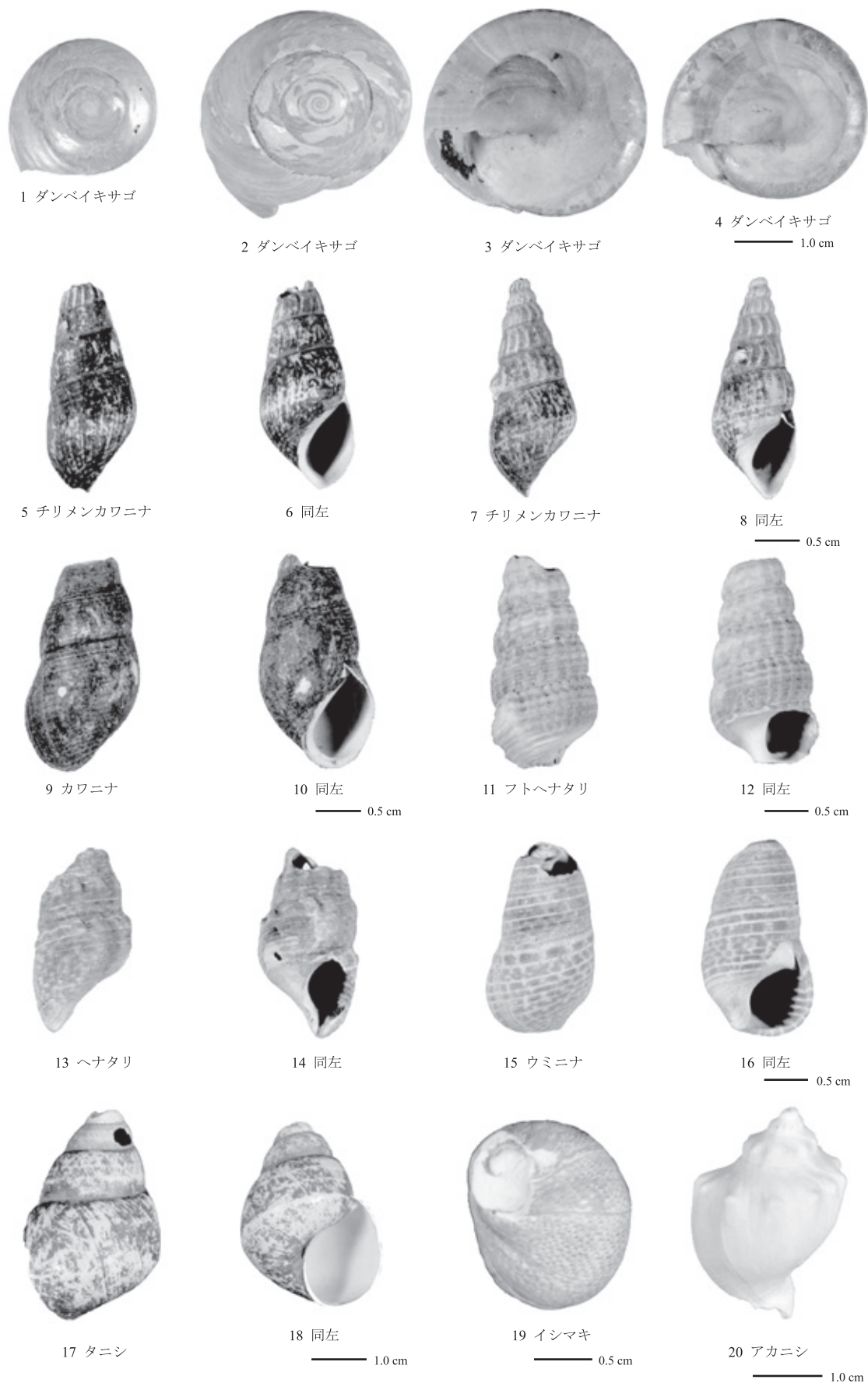


Fig.124 鳥居松遺跡の貝類 (1)

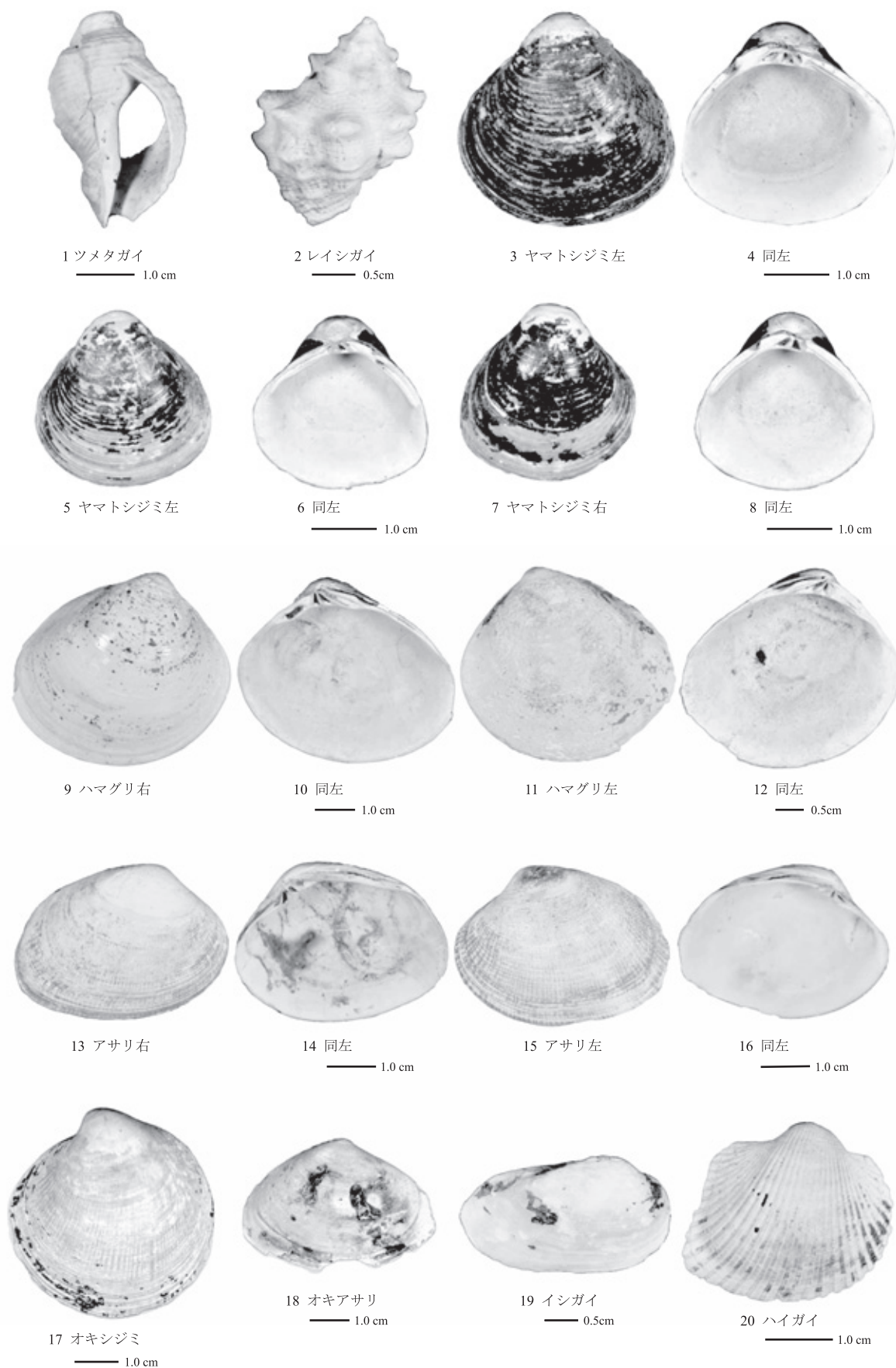


Fig.125 鳥居松遺跡の貝類 (2)

生息するため、現在の潮干狩りなどでも普通に収穫ができる貝である。フトヘナタリの出土量が多いことも特徴であり、あまり冠水しない高潮位にいることが多いため、比較的収穫しやすかった可能性が考えられる (Fig.126)。

SS04 では、ダンベイキサゴが多く、約 50% を占めている。次に多いのはヤマトシジミで約 35%、次いでハマグリで約 5% となっており、この 3 種でほとんどを占めている (Fig.126)。ダンベイキサゴは水深 5 ~ 30 m の砂底に生息し、全身が砂に隠れる程深く潜っていることが多い。ダンベイキサゴは外洋に面した砂底に生息する。そのため、収穫する場所も違ってたとみなされる。出土量が多く、特に好んで食べられていた可能性が高い。ヤマトシジミの占める割合が小さくなり、ハマグリが増えている。ハマグリやアサリなど、他の二枚貝を多く収穫していた可能性がある。ヤマトシジミの旬は春～夏、ダンベイキサゴの旬は冬～春と、旬の季節が少しずれるため、収穫量の変化もそれに伴うものと考えられる。

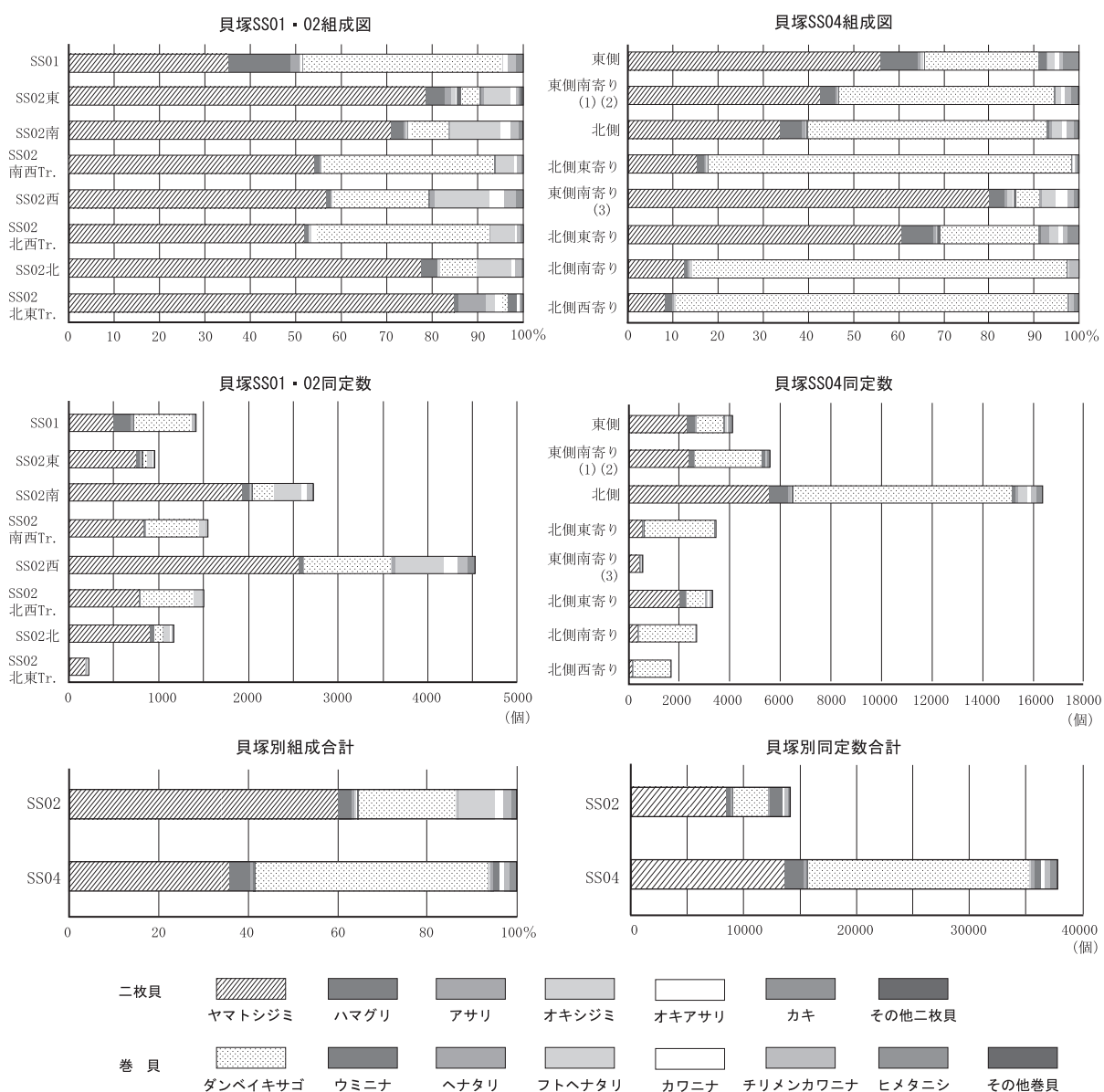


Fig.126 貝塚における貝類の組成

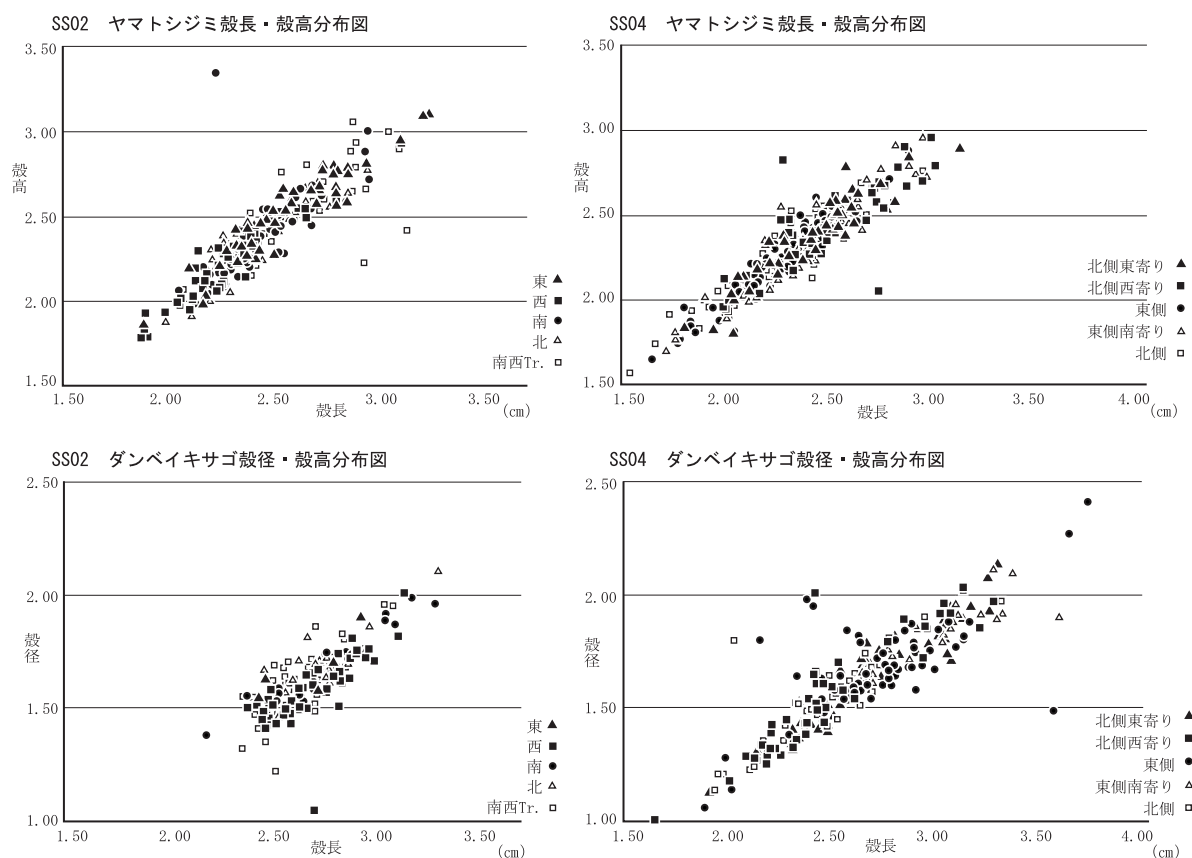


Fig.127 貝塚出土貝類の形態分布

大きさでは、SS02 はヤマトシジミ、ダンベイキサゴ共にばらつきが少なく、特に 2cm 以下の小形の個体の出現率が低く、貝採集に際して 2cm 以上の大きさのものを選択していた可能性が高い。ダンベイキサゴについてはその傾向がさらに強く、2cm ないし 3cm より小さい個体は極端に少なく、明らかな選択性が認められる。SS04 は大きさに多少のばらつきがみられる。ヤマトシジミでは小さい個体が、ダンベイキサゴでは大きい個体が増える傾向にある。SS04 は貝の大きさの選択性が低い。ヤマトシジミでは、大きな個体が減少していることから、採貝活動の場がヤマトシジミの成育に適さなくなった可能性や、乱獲の結果、個体群が小形化した可能性が考えられる。ダンベイキサゴでは、大きな個体も小さな個体も増えているため、成育環境の変化よりは、収穫量の増加に伴い、選択性も弱くなった可能性の方が強いと考えられる。

(3) 動物骨

1) 資料と方法

資料は、伊場大溝のⅣ b 層からⅦ b 層における、およそ 6 世紀後半から 9 世紀の堆積層から出土した動物遺存体計 30 点である。一部の資料については、骨の表面や内部の劣化が著しい。同定は、資料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生骨格標本との対比によって行った。なお、発掘調査時の出土位置が明確な動物骨は B -No. を付している。出土位置については Fig.72 に示している。

Tab.6 鳥居松遺跡出土動物骨分析一覧

個体NO	区	層/遺構	B-No.	分類	部位	部分	左右	歯列	備考
1	D2	IVb SX03	B-3	イノシシ/ブタ	下顎骨		L	P2-M3	
2	D2	IVb SX03	B-3	ウシ	前頭骨	角芯	L		
3	D2	IVb SX03	B-4	ニホンジカ	鹿角	第一枝	L		加工痕あり
4	D3	IV	B-6	不明	不明		-		破片
5	A3	IVb SE01周辺	B-17	ウマ	遊離歯	下顎臼歯	L		
6	A3	IVb SE01周辺	B-17	ウマ	遊離歯	下顎臼歯	R		
7	B3	V	B-8	不明	不明		-		破片
8	D3	V	B-10	不明	不明		-		破片
9	A3	V	B-12	ウシ	上顎骨		L	P2-P3	
10	E3	V	B-19	不明	不明		-		破片複数
11	B2	V SS04	B-23	キジ科	大腿骨		L		
12	B2	V SS04	B-23	カモ科	脛足根骨		L		
13	B2	V SS04	B-23	マグロ属	鰭棘		-		
14	B2	V SS04	B-23	マグロ属	後頭骨		L		
15	B2	V SS04	B-23	マグロ属	方骨		R		
16	B2	V SS04	B-24	不明	肋骨		-		
17	B2	V SS04	B-24	不明	不明		-		
18	C2	VIIa	B-12	ウシ	遊離歯	上顎臼歯	-		破損顕著
19	C2	VIIa	B-13	ウマ	遊離歯	上顎第二前臼歯	L	P2	破損顕著
20	E3	VIIa	B-14	ウマ	遊離歯	下顎第三前臼歯	R	P3	破損顕著
21	E3	VIIa	B-14	ウマ	遊離歯	下顎第四前臼歯	R	P4	破損顕著
22	E3	VIIa	B-14	ウマ	遊離歯	下顎第一前臼歯	R	M1	破損顕著
23	E3	VIIa	B-14	ウマ	遊離歯	下顎第二前臼歯	R	M2	破損顕著
24	E3	VIIa	B-14	ウマ	遊離歯	下顎第三前臼歯	R	M3	破損顕著
25	D2	VIIa	B-25	ウマ	遊離歯	上顎臼歯	-		破損顕著
26	D2	VIIa	B-26	ウシ	遊離歯	下顎第二後臼歯	R	P2	
27	A3	VIIb	B-15	ウマ	遊離歯	下顎切歯	L	I1	
28	B2	VIIb	B-20	不明	遊離歯		-		破片
29	C3	VIIb	B-22	ウマ	遊離歯	不明	-		破片
30	C3	VIIb SX05	B-27	不明	不明		-		
31	A3	V	B-16	ウマ	上顎骨・下顎骨		L		

2) 結 果

①分類群

同定結果は学名、和名および部位を表に示し、以下に分類群を記す。

硬骨魚綱 OSTEICHTHYES

スズキ目 *Perciformes*

マグロ属の一種 *Thunnus* sp.

サバ科 *Scombridae*

鳥綱 AVES

カモ目 *Anseriformes*

カモ科の一種 *Anatidae*, gen. et sp. indet.

カモ科 *Anatidae*

キジ目 *Galliformes*

キジ科の一種 *Phasianus*, gen. et sp. indet.

キジ科 *Phasianidae*

哺乳綱 MAMMALIA

奇蹄目 *Perissodactyl*

ウマ *Equus caballus*

ウマ科 *Equidae*

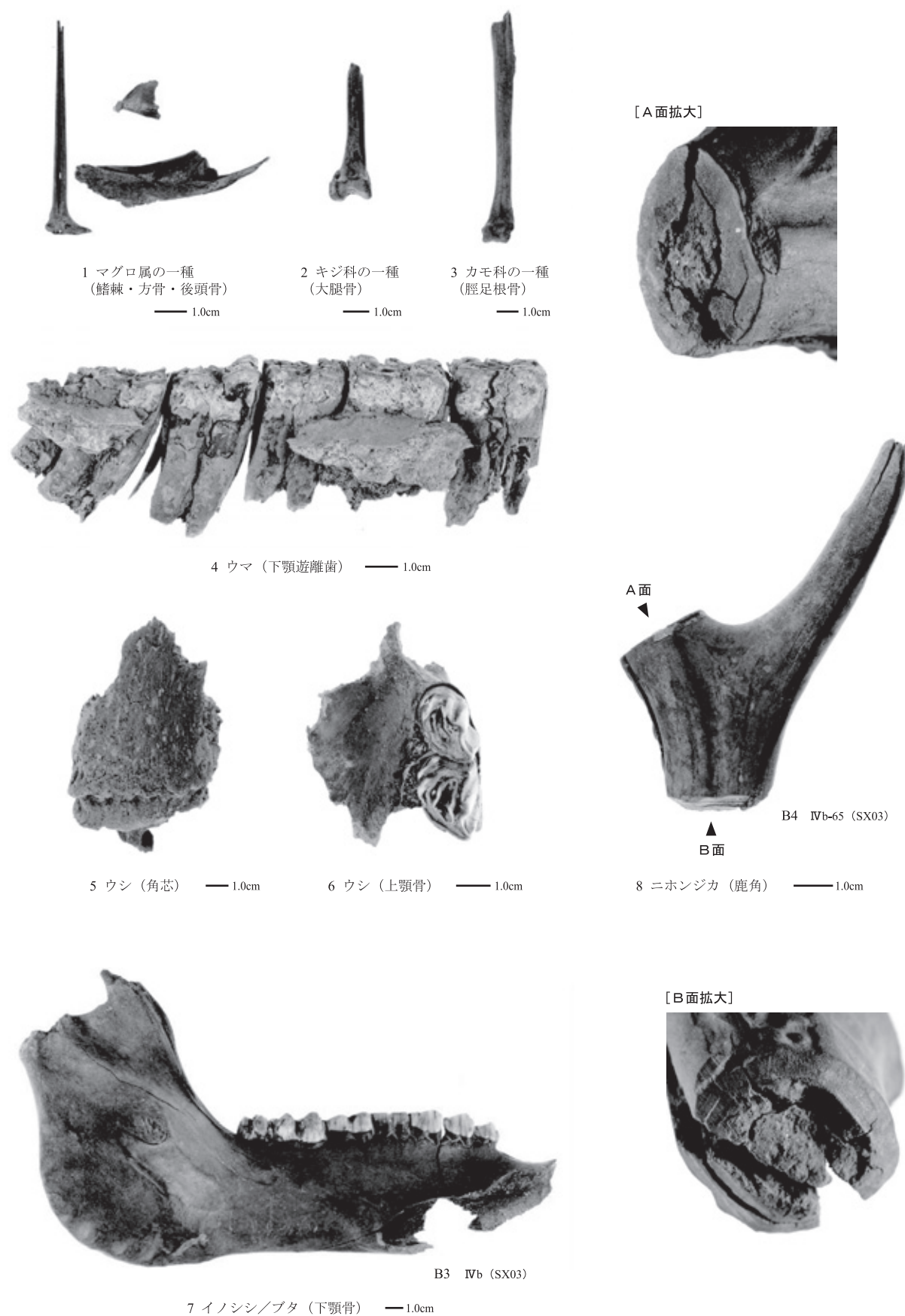


Fig.128 鳥居松遺跡の動物遺存体

偶蹄目 Artiodactyla

ウシ	<i>Bos Taurus</i>	ウシ科 Bovidae
ニホンジカ	<i>Cervus Nippon</i>	シカ科 Cervidae
イノシシ	<i>Sus scrofa</i>	イノシシ科 Suidae

②動物遺存体の特徴

マダロ属の一種：V層 SS04 より後頭骨（左）、方骨（右）、鰭棘が各 1 点出土している。

キジ科の一種：V層 SS04 より大腿骨（左）が 1 点出土している。

カモ科の一種：V層 SS04 より脛足根骨（左）が 1 点出土している。

ウマ：Ⅶ b 層より遊離歯（左 1 不明 1）が 2 点、Ⅶ a 層より遊離歯（左 1 右 5 左右不明 1）が 7 点、Ⅳ～Ⅴ層 SE01 周辺より遊離歯（左 1 右 1）が 2 点出土している。ほとんどが骨の主成分であるリンと地下水の鉄イオンとが結合した藍鉄鋼（ビビアナイト）を析出させて劣化しており、破損が著しくかろうじて原形を保ってはいるが、計測等は困難であった。頭骨 1 があるが保存が悪く、保存処理中である。

ウシ：Ⅶ a 層より遊離歯（右 1 不明 1）が 2 点、Ⅴ層より上顎骨（左）が 1 点、Ⅳ b 層 SX03 より角芯（左）が 1 点出土している。観察により解体痕等は認められなかった。

ニホンジカ：Ⅳ b 層 SX03 より鹿角の第一枝部分（左）が 1 点出土している。切断面を観察すると、金属器をもちいて切断された痕跡が認められる。

イノシシ/ブタ：Ⅳ b 層 SX03 より第二前臼歯から第三後臼歯が残存した下顎骨（左）が 1 点出土している。第三後臼歯が完全に萌出していることから成獣であることがわかる。第三後臼歯の最後縁の咬頭を観察すると咬耗が進んでいることから、年齢が高い個体であることが推察される。観察により解体痕等は認められなかった。

（4）花粉分析・珪藻分析

1) 方法

①花粉分析

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村純の方法（中村 1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。5%水酸化カリウム溶液を加え 15 分間湯煎する。水洗した後、0.5mm の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。25%フッ化水素酸溶液を加えて 30 分放置する。水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸 9：濃硫酸 1 のエルドマン氏液を加え 1 分間湯煎）を施す。再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2 分間）の後、上澄みを捨てるという操作を 3 回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって 300～1000 倍で行った。花粉の同定は、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜

科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。なお、伴って寄生虫卵の観察・同定・計数を行った。以下に、検出された主要な分類群を示す。

②珪藻分析

試料には以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。試料から1 cm³を秤量する。10%過酸化水素水を加え、加温し反応させながら、1晩放置する。上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行う。水を加え、1.5時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を5、6回繰り返す。残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。プレパラートは生物顕微鏡で600～1500倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。計数は、同定・計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。珪藻ダイアグラムと解析は、生態性はLowe (Lowe1974)や渡辺仁治(渡辺2005)等の記載、陸生珪藻および、環境指標种群の海水生種と汽水生種は小杉正人(小杉1986、1988)、淡水生種は安藤一男(安藤1990)の分類を用いた。以下に検出された主要珪藻を示す。

2) 分析結果

①花粉分析

分類群 出現した分類群は、樹木花粉44、樹木花粉と草本花粉を含むもの6、草本花粉41、シダ植物孢子3形態の計94である。これらの学名と和名および粒数を表に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図に示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても同定した結果、3分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

樹木花粉：マキ属、モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、ヤマモモ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、イヌブナ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、シキミ属、アカメガシワ、サンショ

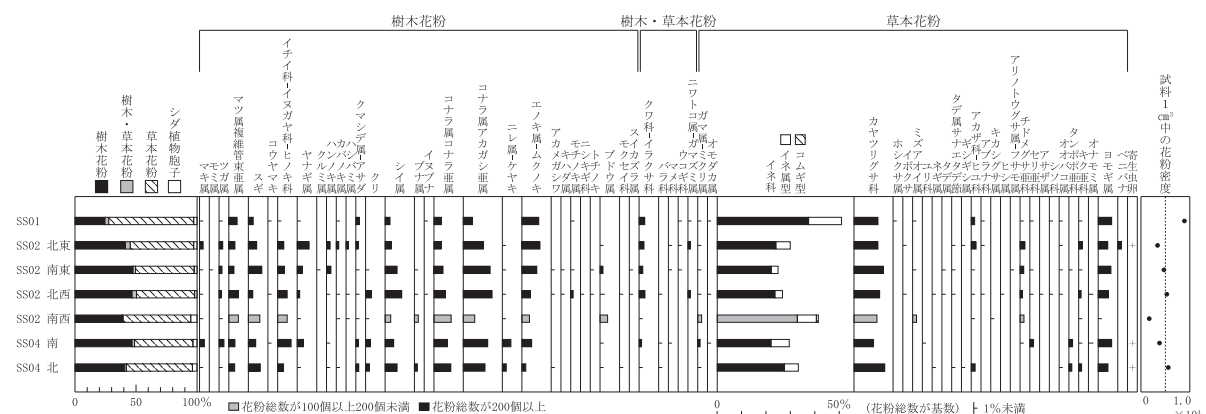
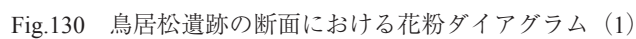


Fig.129 鳥居松遺跡の貝塚における花粉ダイアグラム

154



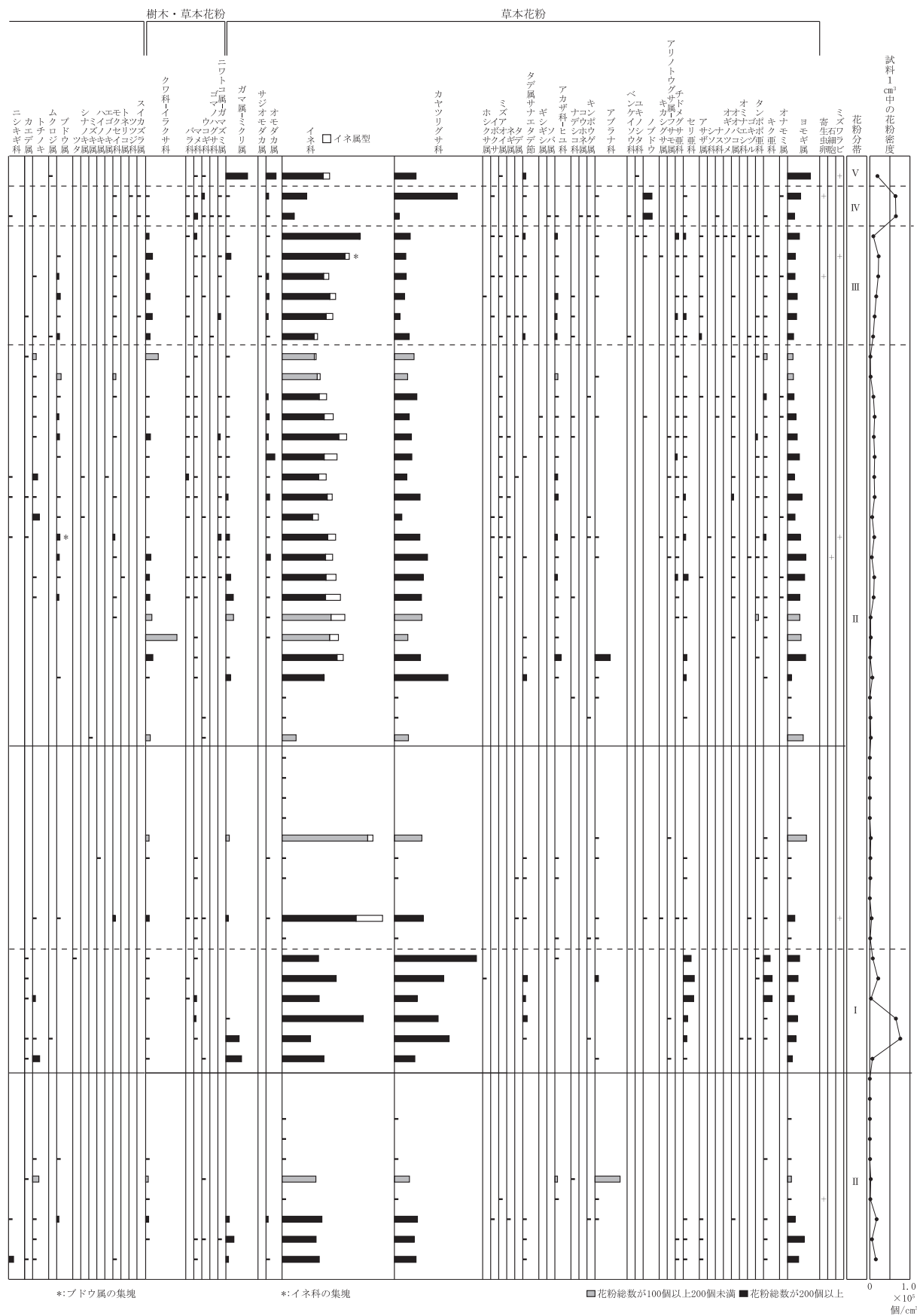


Fig.131 鳥居松遺跡の断面における花粉ダイアグラム (2)

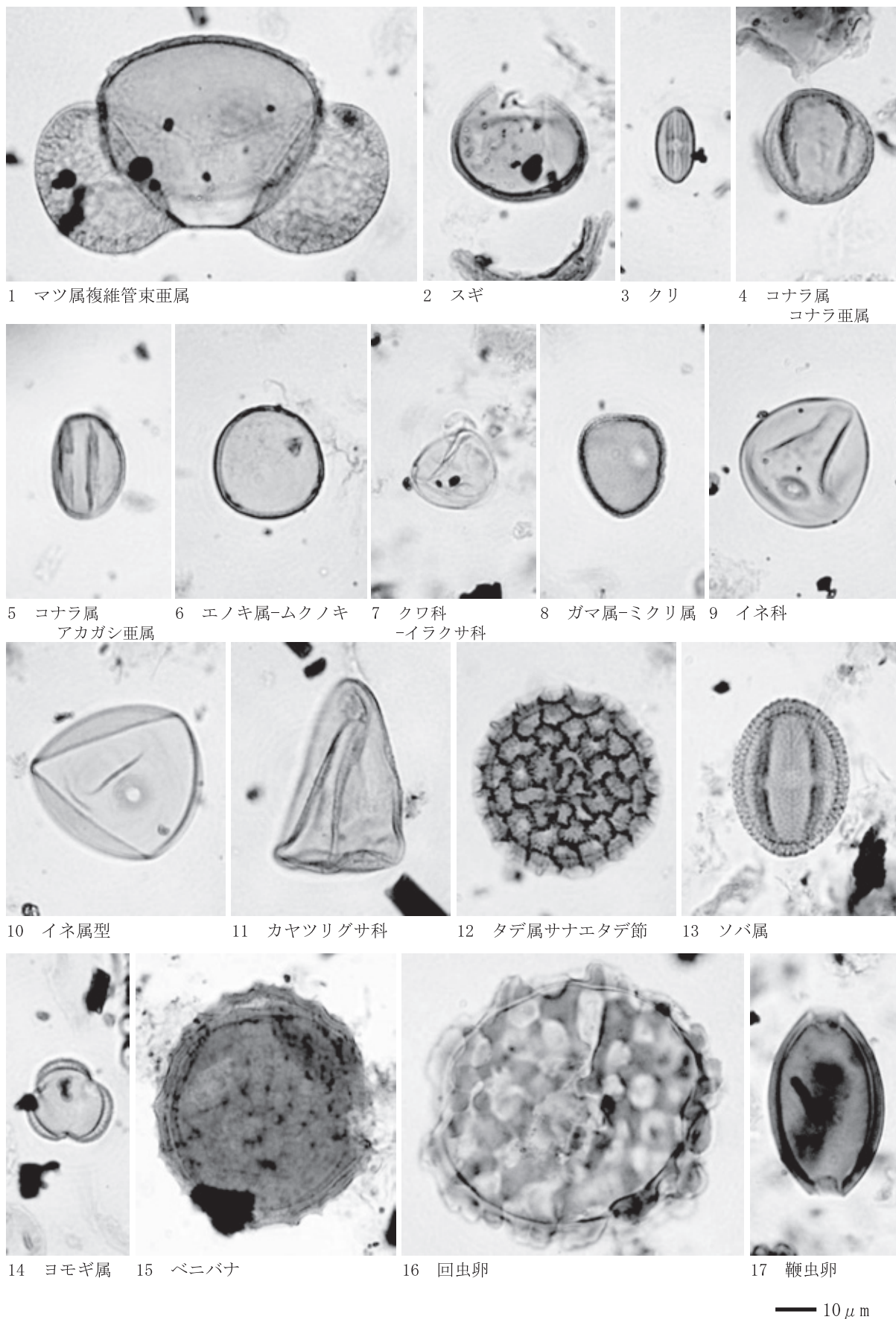


Fig.132 鳥居松遺跡の花粉・孢子・寄生虫卵

ウ属、キハダ属、ウルシ属、モチノキ属、ニシキギ科、カエデ属、トチノキ、ムクロジ属、ブドウ属、ツタ、シナノキ属、ミズキ属、ハイノキ属、エゴノキ属、モクセイ科、トネリコ属、ツツジ科、スイカズラ属

樹木花粉と草本花粉を含むもの：クワ科－イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ゴマノハグサ科、ニワトコ属－ガマズミ属

草本花粉：ガマ属－ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、コムギ型、カヤツリグサ科、ホシクサ属、イボクサ、ミズアオイ属、ユリ科、ネギ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、コウホネ属、キンポウゲ属、アブラナ科、ベンケイソウ科、ユキノシタ科、ノブドウ、キカシグサ属、ヒシ属、アリノトウグサ属－フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、アサザ属、シソ科、ナス科、オギノツメ、オオバコ属、オミナエシ科、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属、ベニバナ

シダ植物胞子：単条溝胞子、ミズワラビ、三条溝胞子

寄生虫卵：回虫卵、鞭虫卵、不明虫卵

花粉群集の特徴 貝塚 SS01・SS02・SS04 の花粉組成は類似する。イネ属型を含むイネ科が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属が比較的多く、草本花粉が樹木花粉より多い。樹木花粉では大きく優占する分類群はないが、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属－ムクノキ、コナラ属コナラ亜属、シイ属、スギなどの針葉樹が出現する。

断面では、下部より P I 帯から P V 帯の 5 区分した。

P I 帯（試料 40～45、7 層下部から Kg 含有層以下まで）では、草本花粉の占める割合がやや高く、イネ科、カヤツリグサ科が優占する。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が多い。下部ではガマ属－ミクリ属がやや多い。

P II 帯（試料 10～39、46～55）では、イネ属型が出現しイネ科が優占しカヤツリグサ科がやや減少する。樹木花粉はコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が多く、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科の針葉樹がやや多くなる。試料 38（7-1 層）と試料 34（7-2 層）では特にイネ属型を含むイネ科が優占する。

P III 帯（試料 4～9）では、エノキ属－ムクノキが増加する。

P IV 帯（試料 2・3）ではイネ属型を含むイネ科が低率になり、エノキ属－ムクノキやカヤツリグサ科が増加する。

P V 帯（試料 1）ではエノキ属－ムクノキがなくなり、草本花粉ではイネ属型を含むイネ科、ガマ属－ミクリ属、樹木花粉ではマツ属複雑管束亜属、スギが増加する。

②珪藻分析

分類群 出現した主要珪藻を以下に示す。貧塩性種（淡水生種）が主要となる。

貧塩性種：*Amphora copulata*、*Aulacoseira ambigua*、*Aulacoseira canadensis*、*Aulacoseira granulata*、*Aulacoseira* spp.、*Caloneis silicula*、*Cocconeis placentula*、*Cyclotella* spp.、*Cymbella silesiaca*、*Cymbella turugidula*、*Cymbella sinuata*、*Eunotia bilunaris*、*Eunotia minor*、*Eunotia soleirolii*、*Fragilaria construens*、*Gomphonema acuminatum*、*Gomphonema gracile*、*Gomphonema*

parvulum、*Gomphonema truncatum*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula confervacea*、*Navicula elginensis*、*Navicula pupula*、*Neidium ampliatus*、*Pinnularia microstauron*、*Tabellaria fenestrata-flocculosa*

貧－中塩性種：*Navicula peregrina*、*Rhopalodia gibberula*

珪藻群集の特徴 貝塚 SS01・SS02 は、*Gomphonema parvulum*、*Cocconeis placentula* の真・好流水性種がやや多いが、真・好止水性種、流水性種、陸生珪藻と多様に出現する。SS04 では *Aulacoseira granulata* の湖沼浮遊性種がやや優占し真・好止水性種が優占する。

断面では、D I 帯から D VI 帯の 6 分帯を設定した。

D I 帯（試料 30～45）は珪藻が少ない。

D II 帯（試料 27～28）は *Cymbella turgidula*、*Cymbella sinuata* の中～下流性河川指標種群、*Cocconeis placentula* の沼沢湿地付着生種が優占するが、珪藻密度が低い。

D III 帯（試料 10～26）では湖沼浮遊性種の *Aulacoseira granulata* を主に湖沼沼沢湿地環境指標種群の *Aulacoseira ambigua* が優占する。

D IV 帯（試料 4～9）では *Aulacoseira granulata*、*Aulacoseira ambigua* が減少するものの多く、沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia minor*、陸生珪藻の *Navicula confervacea* などが出現する。

D V 帯（試料 2・3）では貧－中塩性種：*Navicula peregrina* が優占する。

D VI 帯（試料 1）では湖沼浮遊性種の *Aulacoseira ambigua* が優占する。

3) 推定される植生と環境

①貝塚

貝塚 SS01・SS02・SS04 の周辺はイネ科が多く、カヤツリグサ科、ヨモギ属も多く、周囲は草本が多い。周辺は樹木が少ないが、コナラ属アカガシ亜属、エノキ属－ムクノキ、コナラ属コナラ亜属、シイ属、スギなどの針葉樹が生育する。SS01・SS02 では真・好流水性種が多く、比較的水が

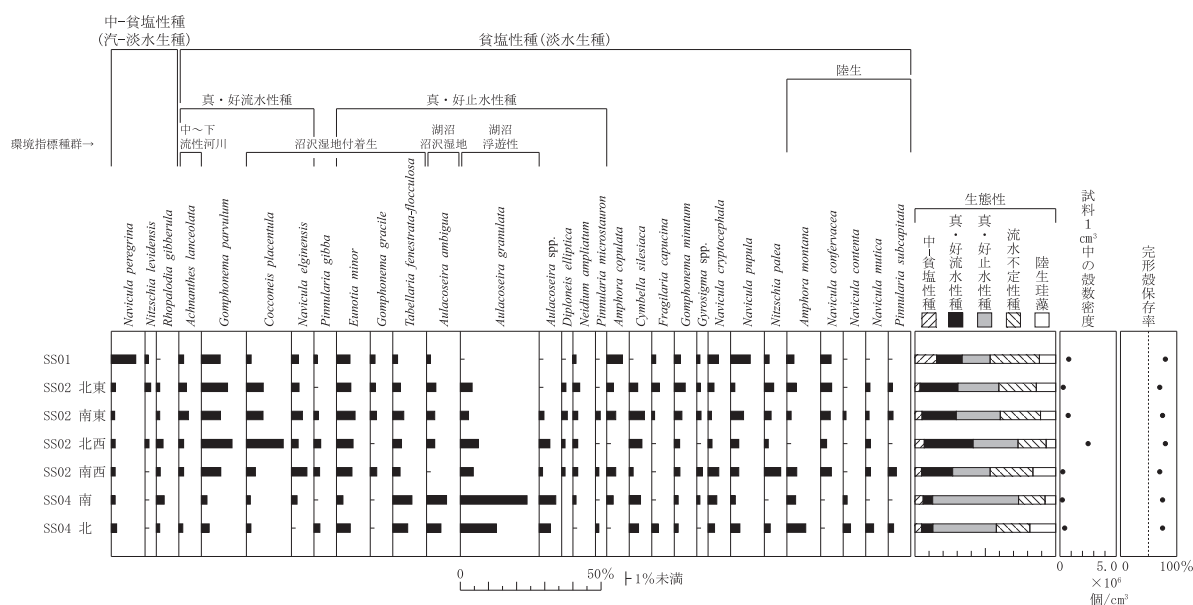


Fig.133 鳥居松遺跡の貝塚における主要珪藻ダイアグラム

流れる環境が示唆される。SS04 では湖沼浮遊生種が多く、滞水する環境が示唆され、環境が異なる。SS01・SS02・SS04 のいずれの貝塚も大溝の水域中に形成された貝塚である。

②周辺および大溝

弥生時代後期前半 7 層下部から Kg 含有層以下まで (P I 帯) では、イネ科、カヤツリグサ科が生育する湿地の環境であり、特に下部ではガマ属－ミクリ属が多い。森林ではコナラ属アカガシ亜属の照葉樹林、コナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹林が主に分布する。コナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹林は周辺の台地上等の乾燥したところに分布していたと考えられる。珪藻では D I 帯にあたり、珪藻が少なく乾燥した環境や不安定な環境が推定される。

2～3 世紀以降から 8 世紀 (P II 帯) は、イネ属型を含むイネ科が増加し、周辺の低地で水田が営まれるようになった。森林植生は大きく変わらず、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が多く、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科が主要素で、本地域における低地と台地との地形が明白な環境に起因すると考えられる。試料 38 (7-1 層) と試料 34 (7-2 層) では特にイネ属型を含むイネ科が優占し、弥生時代後期前半の水田の分布が示唆される。下部は珪藻の D I 帯で乾燥した環境が推定される。上部は大溝内で、D II 帯 と D III 帯では湖沼浮遊生種を主に湖沼沼沢湿地環境指標種群が優占し、滞水し水草の生育する状況が示唆され、下部で中～下流水性河川指標種群が多く流れる環境の時期もある。

9～10 世紀 (P III 帯) は二次林と考えられるエノキ属－ムクノキが増加し、遺跡の縮小が考えられる。大溝 (D IV 帯) 曖昧な水域になる。

12～13 世紀の下部では (P IV 帯) はイネ属型を含むイネ科が低率になり、周囲の低地の水田が衰退する。エノキ属－ムクノキやカヤツリグサ科が増加し、二次林化も進む。珪藻では D V 帯で貧－中塩性種の珪藻であるが多く優占し、このことから一時的な海水準の上昇があり、低地で水田が衰退したと考えられる。

12～13 世紀の上部では (P V 帯) では再び水田化しガマ属－ミクリ属も多く低湿地となる。珪藻からは湖沼浮遊生種が多く (D VI 帯)、水域が示唆される。

(5) まとめ

貝 類 鳥居松遺跡の人々が食料として積極的に採集したと推定される貝類は、ヤマトシジミとダンベイキサゴであり、この 2 種で全体の 80% 程を占めている。ほとんどの貝が河口、干潟、内湾の貝であり、遺跡近隣に貝類採集に適した場が広がっていた。ダンベイキサゴは、外洋に面した砂底に生息しているため、周辺の遠州灘からわざわざ採取され、鳥居松遺跡の人々に特に好んで食べられていたと考えられる。

動物骨 6 世紀後半の VII b 層からはウマ、7 世紀の VII a 層からはウシとウマ、8 世紀の V 層からはウシと SS04 からはマグロ属の一種、キジ科の一種、カモ科の一種、8～9 世紀の IV～V 層 SE01 周辺からはウマ、9 世紀の IV 層 SS03 からはウシ、ニホンジカ、イノシシ / ブタを同定した。

同定できた資料のなかで特に注目すべきは鹿角の未製品であろう。古代における鹿角の未製品は出土例が少なく、当時の加工技術を解明するうえで貴重な資料となる。また、8 世紀の V 層 SS04

3 鳥居松遺跡における環境考古学的検討

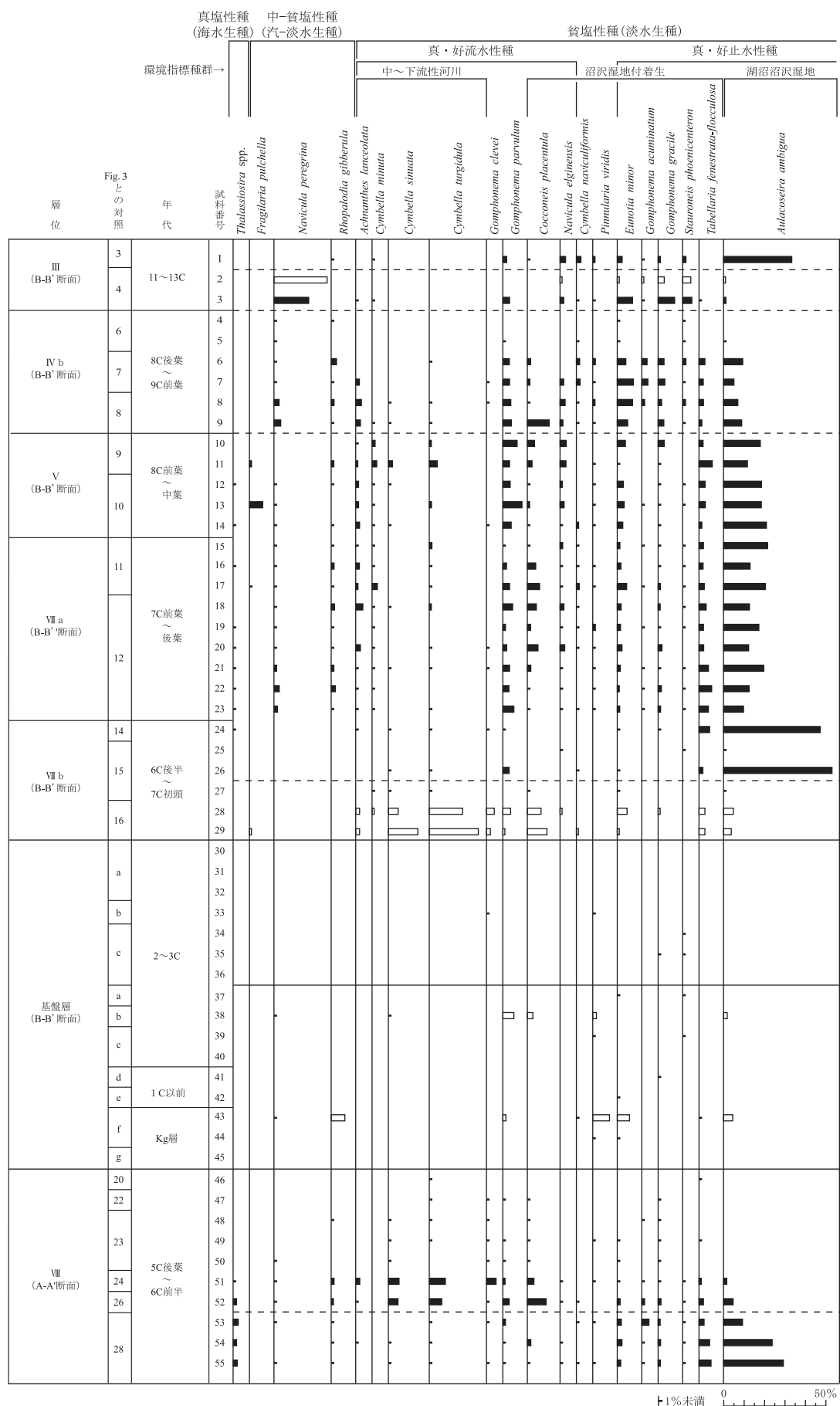


Fig.134 鳥居松遺跡の断面における主要珪藻ダイアグラム (1)

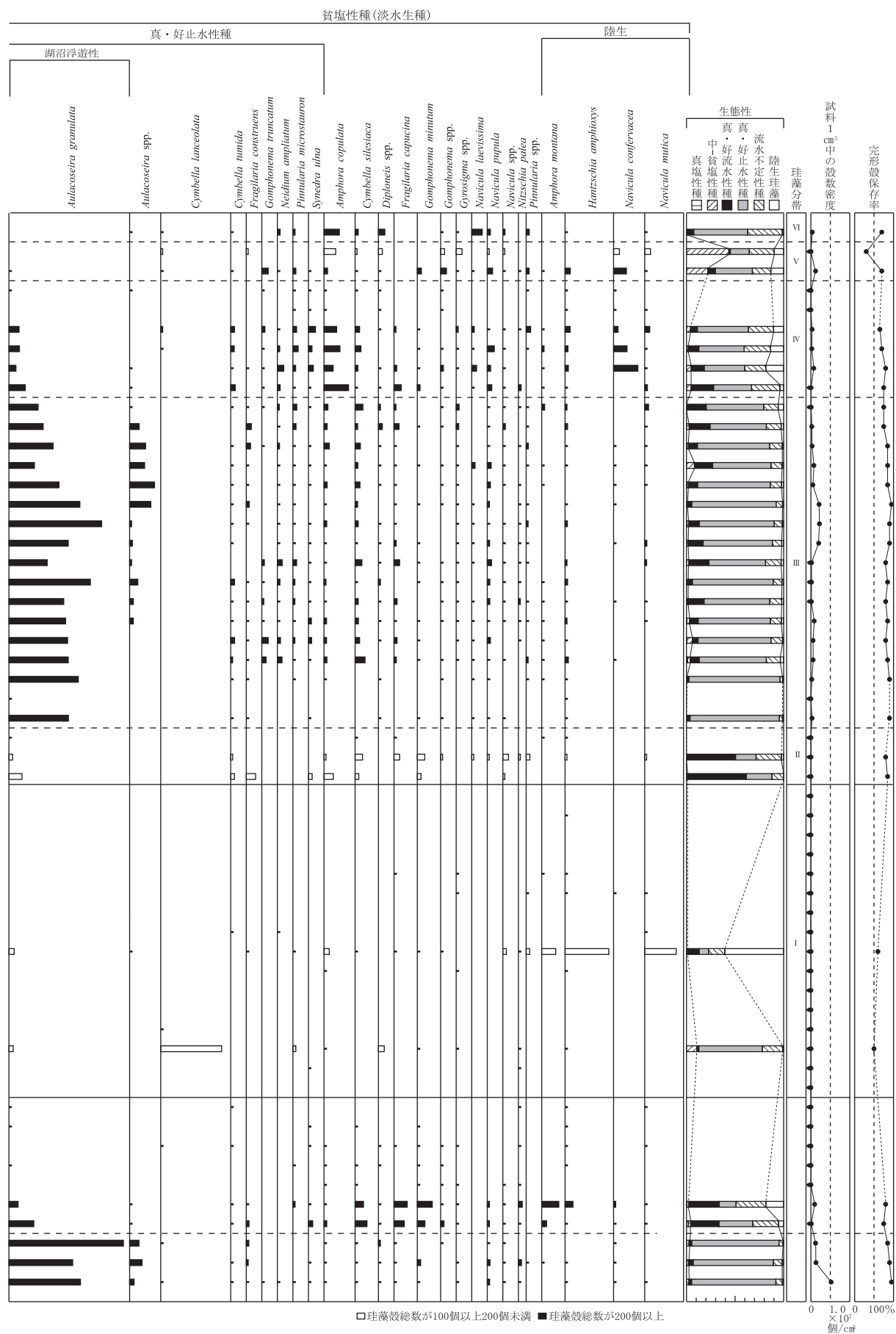


Fig.135 鳥居松遺跡の断面における主要珪藻ダイアグラム (2)

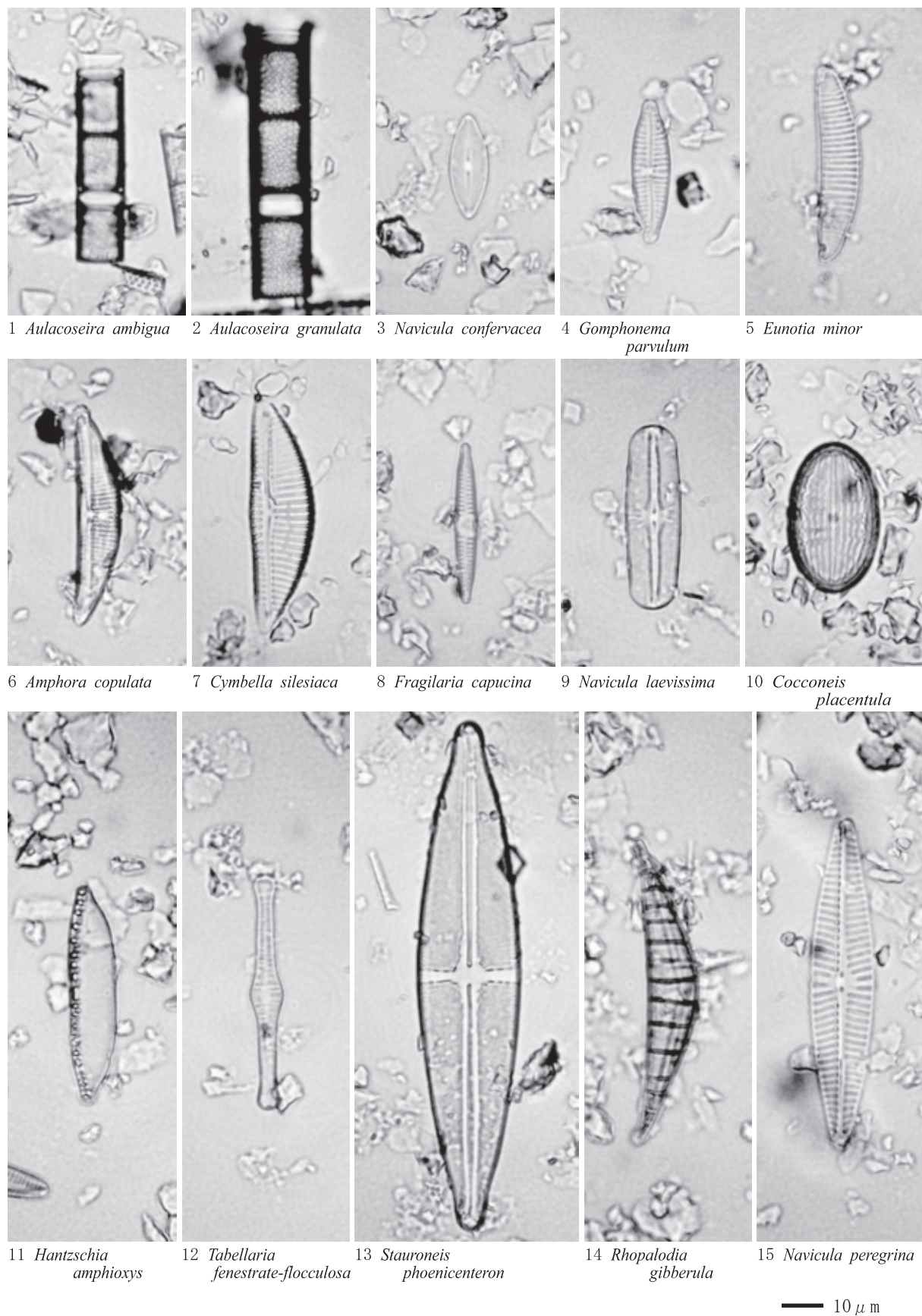


Fig.136 鳥居松遺跡の珪藻

からはマグロ属が出土しており、付近の伊場遺跡においてもマグロ属が確認されている。マグロ属は外洋魚であることから、当時この地域において外洋魚が利用されていたことを窺わせる。古代の動物利用の解明も動物考古学の課題の一つであり、本資料は古代の東海地域における重要な資料となる。

貝塚の環境 貝塚 SS01・SS02 は比較的水が流れる環境に捨てられ形成され、SS04 では湖沼浮遊生種は滞水した環境に捨てられ、形成された環境が異なる。

周辺の植生と環境 本地域では森林植生は下部のKg含有層以下から8世紀まで大きく変化せず、コナラ属アカガシ亜属の照葉樹林、コナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹林が主に分布する。低地にはイネ科、カヤツリグサ科が分布する。2～3世紀以降はイネ属型を含むイネ科が増加し、周辺の低地で水田が営まれるようになる。試料38（基本層位6層相当）と試料34（基本層位7層相当）では特にイネ属型を含むイネ科が優占し、弥生時代後期前半の水田の分布が示唆された。

伊場大溝の植生と環境 5～6世紀の大溝の時期になっても大きく植生は変化しない。大溝は概ね滞水し水草の生育する状況であった。9～10世紀に二次林と考えられるエノキ属－ムクノキが増加し、遺跡の縮小が推定され、12～13世紀の下部では周囲の低地の水田が衰退し、エノキ属－ムクノキやカヤツリグサ科が増加し、二次植生化が進む。一時的な海水準の上昇があり、低地で水田が衰退したと考えられる。12～13世紀の上部では再び水田化しガマ属－ミクリ属も多く低湿地化する。

[参考文献]

- 安藤一男 1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『東北地理』42 pp.73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示 1991「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』6 pp.23-45.
- 窪田彦左衛門 1962『福井市立郷土博物館所蔵貝類標本目録』福井市立郷土博物館.
- 小杉正人 1986「陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—」『植生史研究』第1号 植生史研究会 pp.29-44.
- 小杉正人 1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27 pp.1-20.
- 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1984『粟津貝塚湖底遺跡』pp.141-142.
- 中坊徹次(編) 2000『日本産魚類検索 全種の同定 第二版』東海大学出版会.
- 中村純 1967『花粉分析』古今書院 pp.82-110.
- 中村純 1974「イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として」『第四紀研究』13 pp.187-193.
- 中村純 1977「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号 pp.21-30.
- 波部忠重 1967『標準原色図鑑全集』第3巻 保育社.
- 納屋内高史・松井章 2007「第2節 浜松市伊場遺跡出土の動物遺存体」『伊場遺跡補遺編 (第8～13次調査遺構・自然遺物)』浜松市教育委員会 pp.83-105.
- 浜松市教育委員会 2007『伊場遺跡補遺編 (第8次～13次調査遺構・自然遺物)』
- (財)浜松市文化振興財団 2009『鳥居松遺跡6次』
- 林良博・西田隆雄・望月公子・瀬田季茂 1977「日本産イノシシの歯牙による年令と性の判定」『日本獣医学雑誌』第39巻第2号 pp.165-174.
- 藤井昭二・高山茂樹 1979「軟体動物」『鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1—』福井県教育委員会 pp.167-169.
- 渡辺仁治 2005『淡水珪藻生態図鑑』内田老鶴圃 p.666

3 鳥居松遺跡における環境考古学的検討

Hustedt, F. 1937-1938 Systematische und ologishe Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol, Suppl. 15, pp. 131-506.

Lowe, R.L. 1974 Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p. National Environmental Reserch. Center.

K. Krammer · H. Lange-Bertalot 1986-1991 Bacillariophyceae · 1-4.

Asai, K. & Watanabe, T. 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, pp. 35-47.

4 鳥居松遺跡出土木簡の概要

渡辺晃宏

(1) はじめに

鳥居松遺跡の5次調査では自然流路「伊場大溝」から合計6点の木簡が出土している。以下、各木簡の解説を行い、これら史料群の特徴と意義について触れる。

(2) 木簡の解説

1号木簡 (Fig.137-182) 上下両端折れ。左辺削り。右辺割れ。一文字目と三文字目が細い筆致で書かれているのに対し、三文字目の「三」は太めの画で記されている。上書きされている可能性もある。四文字目は辛うじて残る程度で判読できない。「三日」は日付とみられるが、その直上の文字は「月」にはならず、この部分は二文字以上の可能性もある。また、一文字目と四文字目は「三日」の部分に比べると、文字の中心がやや左にずれるようであり、一連の記載でない可能性も残る。

2号木簡 (Fig.137-183) 二片接続。上端折れ。下端と左辺削り。右辺割れ。裏面の文字は左半を欠き、その状況からみると、原形は現状の二倍以上あった可能性がある。したがって、表面の文字は二行割書の左行にあたとみられる。蛭田郷は『和名類聚抄』にみえる遠江国敷智郡蛭田郷にあたり、「郷」の下に続く墨痕はコザトの可能性もある。但し、上に続く文字は「人」であり「郡」ではない。裏面は比較的大振りな一行書きの文字とみられる。

こうした形状、文字の割付、内容から判断すると、比較的大型の文書木簡の断片の可能性が高いとみられる。「蛭田郷」も文書木簡の文章の一部に登場する地名ということになり、敷智郡内の行政事務の一端を窺わせる郡家に相応しい木簡ということができよう。大型の木簡という点を重視すれば、伊場遺跡群でも類例のある郡符などに多い二尺クラスの規格の大型木簡の断片である可能性が高い。このことは、後述のように、3号木簡と同材とみられることから裏付けられよう。

3号木簡 (Fig.137-184) 五片接続。上端は山形に整形していたとみられるが、右辺上部は割れ。下端は裏面から斜めに刃物を入れて切断しているが、先端部分は折れている。左右両辺は削り。本来は二尺程度の長さをもつ大型の木簡であったとみられる。表面一文字目は縦画が一本残るだけだが、「糸」の上に続く文字としては、字配りや残画の状況からみて、「耳」の可能性が強い。「赤坂郷」は『和名類聚抄』にみえる遠江国敷智郡赤坂郷にあたる。「嶋里」は赤坂郷のコザトで初見。耳糸（織物の耳を織るときにたて糸として用いる太めの糸）を赤坂郷嶋里の忍海マ某に貸したことが記される。二行割書の左行は二人目の人名か（一行目の「石□」までで人名として完結し、末尾の文字が二人目の最初の文字となる可能性もある）。裏面上部に墨痕はなく、内容は表面のみで完結していたとみてよい。

裏面は年月日の記載のみが書かれていたとみられる。神亀元年は七二四年。末尾の文字は「月」に続く数字に相当する残画であろうが、神亀元年は二月に改元が行われており、月の特定は困難。

なお、3号木簡は2号木簡と同材の可能性が高い。直接の接点はないが、2号木簡が数cmの間隔を置いて左下に連続するとみられる。その場合、2号木簡表面の「蛭田郷[]」は割書左行の人名の註記、同裏面の「□□□」は日付の下に続く人名の末尾と考えることができる。但し、左行の人名を「貸受人」の列記とみるべきか、「貸受人」とは別の性格の人名とみるべきかは俄には決定しがたい。

いずれにしても糸の貸与の証文の木簡であり、糸の出挙というよりは、原材料を貸し与えて絹織物を生産させたことが背景にあるとみられ、材料の調達を含めた繊維製品の生産管理に郡家が深く関与したことを示す重要な資料となろう。なお、木簡にみえる八世紀の耳糸の類例としては、平城宮跡出土の事例がある（「供御□〔耳カ〕糸十絢」、奈文研1987）

4号木簡（Fig.137-185）上端は山形に削り尖らせる。下端折れ。左右両辺削り。伊場遺跡群の木簡に多数類例のあるイネの出挙に関わるとみられる「サト名+人名」の木簡の一例。鳥居松遺跡が伊場遺跡群と同一の遺跡空間に存在することを明確に示す木簡である。「赤坂」は『和名類聚抄』にみえる遠江国敷智郡赤坂郷にあたる。「五」の最後の横画と、「百」の最初の横画は共用している。また、「依」とした文字は、旁に最初の点画がなく、「佐」のようにもみえるが、他の筆画は「依」とみて矛盾がなく、名前としても自然であることから、「五百依」と判断した。

なお、「サト名+人名」の赤坂郷の木簡としては、伊場遺跡50号木簡「赤坂郷（以下欠損）」（(100)×31×6）、伊場遺跡54号木簡「赤坂□〔郷カ〕戸主刑部□〔歳カ〕□□〔呂カ〕」（337×12×9）、梶子遺跡6号木簡「赤坂[]マ[]五斗」（198×25×5）、梶子北遺跡5号木簡「赤坂郷忍海部古□（以下欠損）」（(101)×17×5）、中村遺跡5号木簡「□□〔赤坂カ〕若倭マ益万呂」（155×23×2）、中村遺跡7号木簡「赤坂□（以下欠損）」（(159)×23×6）の6点がある。4号木簡は同類の木簡の中ではもっとも幅が狭く小振りの様相を呈するが、下端が折れており、梶子北遺跡2号木簡のように文字のない部分が長大な例もあるので、長さの判断は難しい。上端を尖らせる例は他にもある（梶子北遺跡2号木簡、梶子遺跡6号木簡など）。但し、大きさや形状の違いに有意な意義を認めるのは難しそうである。

5号木簡（Fig.137-186）上端は山形に削り出していたとみられるが、左上部は欠損。下端折れ。左右両辺削り。「己酉年」は、649年の可能性も全くないことはないが、出土層位の年代観や在地支配の拠点としての木簡使用という観点からみて、干支年使用としてはかなり遅い部類に属することにはなるが、709年（和銅2）であろう。

「相知」は、保証人の意で、木簡では平城宮跡出土木簡（770年代初頭の月借錢解の連帯保証人、奈文研2009）や新潟県延命寺遺跡出土木簡（天平7年〈735〉の口分田の売買の証人、〈財〉新潟県埋蔵文化財調査事業団ほか2008）に類例がある。下に続く三文字は「某月記」とあるのが自然であるが、残画からはそのようには読み取りがたく、またそのように考えた場合に「相知」の内容が全く見えなくなることやや不審。「川□〔前カ〕」は姓であろう。なお、釈文を立てた墨痕以外にも、削り残りともみられる墨痕が左上部に残る。

いずれにしても、何らかの貸借関係の発生に際して作成された木簡であることは明らかで、それに郡家に関与していたことを示す木簡といってよいだろう。「相知」の文言が確認できる最古の事



釈
文

一 □三月□

(90) × (19) × 4 081

二 ・ ×人蛭田郷□□
□□□

(144) × (30) × 6 081

三 ・
「□糸一斤貸受人赤坂郷嶋里
[耳カ] □□□ 忍海マ石□□
□□□
・ 「 神亀元□□ [年カ]
□□□

(407) × 63 × 7 019

四 「赤坂丈マ五百依

(102) × 13 × 4 019

五 「己酉年□□□ 相知川□ [前カ]

(203) × 54 × 5 019

六 [赤カ]
□□□ □□□

311 × 22 × 10 051

※釈文の表記方法などは、おおむね木簡学会編『木簡研究』に従った。

Fig.137 鳥居松遺跡 5次調査出土木簡

例とみられることも注目される。

6号木簡 (Fig.137-187) 曲物を転用した木簡であり、上端は長方形、下端は尖らせている。左右両辺削り。墨痕は全く残らず、墨痕があった部分が浮き出て文字が確認できる。形状としては、「サト名+人名」の木簡の典型的な様相を呈しており、4号木簡と同様に「赤坂」と記されている可能性があるが、明確でない。

(3) 鳥居松遺跡出土木簡の特徴と意義

以上、個別に木簡の形状と内容について簡単に整理した。注目すべきは、伊場遺跡群に多数みられる「サト名+人名」の木簡(4号木簡)、及びそう考えて矛盾のない形状の木簡(6号木簡)が含まれていることである。鳥居松遺跡が、伊場大溝を介して伊場遺跡群と同一の空間に立地していることを如実に示す遺物といえよう。

第二に注目すべきは糸の貸借を示す木簡(3号木簡)であろう。調庸布の生産を郡家が管理運営していたことは既に指摘されて久しい。この木簡からは具体的に何を生産するためのものかはわからないが、郡家が繊維製品の生産管理に深く関与していたことを物語る遺物として重要な発見といえよう。伊場遺跡40号木簡に類例のない布の荷札があることも関連するかも知れない。この木簡は神亀元年(724)の紀年銘木簡としても貴重である。伊場遺跡85号木簡の神亀4年について、伊場遺跡群としては2例めの神亀の紀年銘木簡となる(城山遺跡27号木簡は神亀6年の暦だが、直接の年紀は書かれていない)。

第三に郡家の貸借関係への関与を示す5号木簡に注目したい。「相知」の記載のある最古の例であるだけでなく、その文言を記す木簡を作成しているということは、それに郡家が公式に関与してことを示すとみられる。現存部分に具体的な記載がみえないことからすれば、欠損部分にかなり長大な事実関係記載が書かれていた可能性があり、新潟県延命寺遺跡出土木簡に通じるような内容であった可能性もある。干支年の使用としてかなり遅い事例であることにも注意すべきだが、ここでは郡家の貸借関係の成立への関与が和銅2年(709)という八世紀初頭の事実であることに注目したい。和銅の紀年銘木簡としては、伊場遺跡群としては中村遺跡1号木簡の和銅8年について2例めとなり、評制下に引き続き、伊場遺跡群の地が敷智郡中枢の在地支配拠点として活動していることを明確に示す遺物である。

このようにわずか6点ではあるが、今回の鳥居松遺跡出土木簡は、墨書土器とともに、伊場遺跡群の遺跡としての広がりや在地支配拠点としての活動の広がりを明確に示す、重要な発見と位置付けることができよう。

[参考文献]

- 奈良国立文化財研究所 1987『平城宮発掘調査出土木簡概報(19)』
 奈良文化財研究所 2009『平城宮発掘調査出土木簡概報(39)』
 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育委員会 2008『延命寺遺跡』

5 鳥居松遺跡出土墨書土器の概要

山本 崇

(1) はじめに

今回の調査から、墨書土器は19点出土した。鳥居松遺跡全体では、2次調査で2点、4次調査で1点の墨書土器が出土しており、あわせて22点となった。今回報告する19点のうち、過半を占める11点が「稲万呂（記号）」墨書ないしその断片と推定されるものである。以下、まず「稲万呂（記号）」墨書以外の墨書土器について、その概要を述べる。

(2) 墨書土器の概要

1は、「〔逆〕」（須恵器有台坏身底部、V期。SS02出土）。人名の可能性があると不詳。2の「竹田女」（須恵器摘蓋内面、V期。SE01出土）と、12の「福刀自」（須恵器双耳箱坏底部外面、Ⅶ-1期。SX03出土）は、ともに女性名を記したものである。伊場遺跡群では、女性名を記した可能性のある墨書土器は比較的認められ、竹田知刀自女（城山3次17）、千刀自女（梶子北113）、刀自女（伊場405）、浄成女（城山3次18）、□田女（城山3次19）、長女（伊場63、76）、成女（城山3次20）などがある。11は、「上殿／上」（須恵器箱坏底部外面・側面正位、Ⅵ期。SX03出土）。「殿」は敬称であろう。側面の「上」は底部外面の「上殿」を略したものか。土器を正位に置いた状態で記された文字であるが、底部の文字とは方向があわない。15「廣」（須恵器壺蓋内面、Ⅵ～Ⅶ期。SX03出土）、17「廣」（須恵器高盤外面、Ⅵ期。SX04出土）はいずれも断片でこれ以外の文字が記されていた否か不詳。人名の一部となる可能性もあろう。19の「本」（灰釉陶器碗底部外面、Ⅶ-2期（K90）は、灰釉陶器底部外面に比較的大きめの文字を記することなど、伊場遺跡群のⅦ期以降の過半を占める一文字墨書の特徴を示している。ただし、これまでの出土例では、「本」の一文字墨書は類例が少ない。なお、18は、

Tab.7 鳥居松遺跡5次調査出土墨書土器

墨書 番号	層位	挿図 番号	取上 番号	遺構名	種 別	器 種	墨書 部位	積 文	年代観	実年代	産 地	備 考
1	V	6	1535	SS02	須恵器	有台坏身	底	「逆」	V	8世紀前葉～8世紀中葉	湖西産	
2	IVb	1	216	SE01	須恵器	摘蓋	内	「竹田女」	V	8世紀前葉～8世紀中葉	湖西産	
3	IVb	37	155	SX03	須恵器	摘蓋	内	「稲万呂」＋記号	Ⅵ	8世紀後葉～9世紀初頭	湖西産	
4	IVb	38	179	SX03	須恵器	摘蓋	内	「稲万呂」＋記号	Ⅵ	8世紀後葉～9世紀初頭	湖西産	
5	IVb	39	142	SX03	須恵器	摘蓋	内	「稲万呂」＋記号	Ⅵ	8世紀後葉～9世紀初頭	湖西産	
6	IVb	40	133	SX03	須恵器	摘蓋	内	「稲万呂」＋記号	Ⅵ	8世紀後葉～9世紀初頭	湖西産	
7	IVb	41	189	SX03	須恵器	摘蓋	内	「呂」＋記号	Ⅵ	8世紀後葉～9世紀初頭	湖西産	稲万呂と推定される
8	IVb	42	177	SX03	須恵器	平頂蓋	内	「稲万呂」＋記号	Ⅶ-1	9世紀前葉	湖西産	
9	IVb	43	1051	SX03	須恵器	箱坏	底	「稲万呂」＋記号	Ⅶ-1	9世紀前葉	湖西産	稲万呂と推定される
10	IVb	44	1057	SX03	須恵器	箱坏	底	「稲万呂」＋記号	Ⅵ-2	8世紀末～9世紀初頭	湖西産	
11	IVb	45	130	SX03	須恵器	箱坏	底・側	「上殿」、「上」	Ⅵ	8世紀後葉～9世紀初頭	湖西産	
12	IVb	46	160	SX03	須恵器	双耳箱坏	底	「福刀自」	Ⅶ-1	9世紀前葉	湖西産	
13	IVb	47	25	SX03	須恵器	皿	底	「稲万呂」＋記号	Ⅵ～Ⅶ	8世紀後葉～9世紀前葉	湖西産	
14	IVb	48	171	SX03	須恵器	高盤	上	「稲万呂」＋記号	Ⅶ-1	9世紀前葉	湖西産	
15	IVb	49	188	SX03	須恵器	壺蓋	内	「廣」	Ⅵ～Ⅶ	8世紀後葉～9世紀前葉	湖西産	
16	IVb	50	43	SX03	土師器	皿/坏	底	「万呂」＋記号	Ⅵ～Ⅶ	8世紀後葉～9世紀前葉	在来産	稲万呂と推定される
17	IVb	86	315	SX04	須恵器	高盤	外	「廣」	Ⅵ	8世紀後葉～9世紀初頭	湖西産	
18	IVb	158	133	IVb層	土師器	坏	底	「□」	Ⅵ～Ⅶ	8世紀後葉～9世紀前葉	在来産	
19	IVa	30	1987	SD102	灰釉陶器	碗	底	「本」	Ⅶ-2（K90）	9世紀後半	二川産	

判読不能（土師器坏底部、Ⅵ～Ⅶ期）。

3～10、13、14、16の11点は、「稲万呂」墨書ないしその断片と推測されるものであり、いずれもSX03出土。釈文と土器の器種、墨書位置、土器の時期は次の通りである。3「稲万呂（記号）」（須恵器摘蓋内面、Ⅵ期）、4「稲万呂（記号）」（須恵器摘蓋内面、Ⅵ期）、5「稲万呂（記号）」（須恵器摘蓋内面、Ⅵ期）、6「稲万呂（記号）」（須恵器摘蓋内面、Ⅵ期）、7「呂（記号）」（須恵器摘蓋内面、Ⅵ期）、8「稲万呂（記号）」（須恵器平頂蓋内面、Ⅶ-1期）、9「稲万□（記号）」（須恵器箱坏底部外面、Ⅶ-1期）、10「稲万呂（記号）」（須恵器箱坏底部外面、Ⅵ-2期）、13「稲万呂（記号）」（須恵器皿底部外面、Ⅵ～Ⅶ期）、14「稲万呂（記号）」（須恵器高盤上面、Ⅶ-1期）、16「万呂（記号）」（土師器皿もしくは坏底部外面、Ⅵ～Ⅶ期）。

（3）「稲万呂」墨書の検討

今回の調査で新たに11点の「稲万呂（記号）」墨書が出土し、伊場遺跡群全体での出土点数は19点となった。なお、『伊場遺跡総括編』（浜松市教委2008）の段階では、確実に刳記号のある墨書土器は12点出土しており、そこに記された人名は、「稲万呂」8点、「安万呂」3点、「里麻呂」1点であった。この段階で、刳記号墨書土器の特徴は、①すべてⅥ期（Ⅵ期1段階を含む。奈良時代後半～平安時代初頭）に属すること、②すべて湖西産の須恵器であること、③器種および墨書部位には共通性が認められないこと、以上3点を指摘したが、①については、Ⅵ～Ⅶ期、Ⅶ-1期のものも確認され刳記号の墨書土器の時代幅が広がり、②土師器1点が新出したことなど、その特徴は修正せねばならない。また、器種の共通性はなお認めがたいが、摘蓋・平頂蓋がおよそ半数にあたる9点であることからすれば、本来は土器の蓋と身にそれぞれ「稲万呂（記号）」墨書が記された可能性が考えられる。

また前書では、同筆異筆関係の認定は困難であるが、いずれも類似した筆致であるとの指摘に留めたが、類例の増えた19点の「稲万呂」墨書を眺めてみると、いくつかの類型に分類することができる。以下、墨書の分類を試みたい。

A類に分類される墨書は、3～6。「稲」字のうち旁のくずし方の度合いが大きい。「万」字は横画をしっかりと引くが縦画は左払え、縦棒とも短くおさめる。また刳記号の左囲みの書き出しは右囲みの左上からはじまる。なお、「万」の縦画により注目すれば、縦画が横画に接する3と5、横画に接しない4と6に細分することができる。伊場43・城山221もA類に近いと考えられる。土器の年代は、すべてⅥ期に属する。

B類に分類される墨書は、10・13・14。「稲」字の「日」を比較的筆画をくずさず転折も明瞭に記すこと、「万」字の縦画を明瞭に記すことが特徴である。14は「稲」の字体からすればA類の特徴をもつが、「万」字はB類に近い。刳記号は、書き出しの鈎部の認められないもの（14）、はっきりしないもの（10）が認められるほか、左囲みが右囲みから枝分かれするように記され、書き出しの位置がやや下がる傾向が現れはじめる（10・14）。文字の残りは悪いものの、「呂」の字体からすれば16もこの分類に含まれる可能性がある。

C類に分類される墨書は、今回出土したものでは断片の7のみである。「呂」の字体が特徴的で

Tab.8 「稲万呂」墨書土器一覧

通番	類別	遺跡名	墨書番号	挿図番号	種別	器種	備 考
1	A	鳥居松5次	3	37	須恵器	坏蓋	「稲」字のうち旁のくずし方の度合いが大きい
2	A	鳥居松5次	4	38	須恵器	坏蓋	〃
3	A	鳥居松5次	5	39	須恵器	坏蓋	〃
4	A	鳥居松5次	6	40	須恵器	坏蓋	〃
5	B	鳥居松5次	10	44	須恵器	箱坏	「日」をくずさず転折も明瞭、「万」字の縦画を明瞭に記す
6	B	鳥居松5次	13	47	須恵器	盤か	〃
7	B	鳥居松5次	14	48	須恵器	高盤	「稲」の字体からするとA類、「万」字はB類に近い
8	B	鳥居松5次	16	50	土師器	皿/坏	〃
9	C	伊場	41	—	須恵器	有台坏身	「呂」の字体が特徴的、「日」をくずさず転折も明瞭、「ツ」を三画で示す
10	C	伊場	42	—	須恵器	坏蓋	〃
11	C	鳥居松4次	3	—	須恵器	箱坏	〃
12	C	梶子9次	22	—	須恵器	坏蓋	〃
13	C	鳥居松5次	7	41	須恵器	坏蓋	「呂」の字体からすると、C類
14	D	鳥居松5次	8	42	須恵器	平頂蓋	「稲」はくずさず、「万呂」は合わせ字で記す
15	D	鳥居松5次	9	43	須恵器	箱坏	〃
16	その他	城山6次	221	—	須恵器	坏身	A類に近い
17	その他	伊場	43	—	須恵器	箱坏	A類に近い
18	その他	伊場	44	—	須恵器	坏蓋	「呂」の字体からするとC類、「稲」字はA類に近い
19	その他	梶子7次	13	—	須恵器	箱坏	〃

参考 その他 初記号がみられる墨書土器

文 字	遺跡名	挿図番号	種別	器種	備 考
里麻呂	伊場	50	—	須恵器	皿
安万呂	城山3次	22	—	須恵器	皿
安万	城山3次	23	—	須恵器	高盤
[安]	城山3次	25	—	須恵器	箱坏
□[須] □	城山3次	32	—	須恵器	箱坏 一文字目は「侏」の可能性がある

鳥居松5次以外の資料の挿図番号：浜松市教委 2008『伊場遺跡総括編』

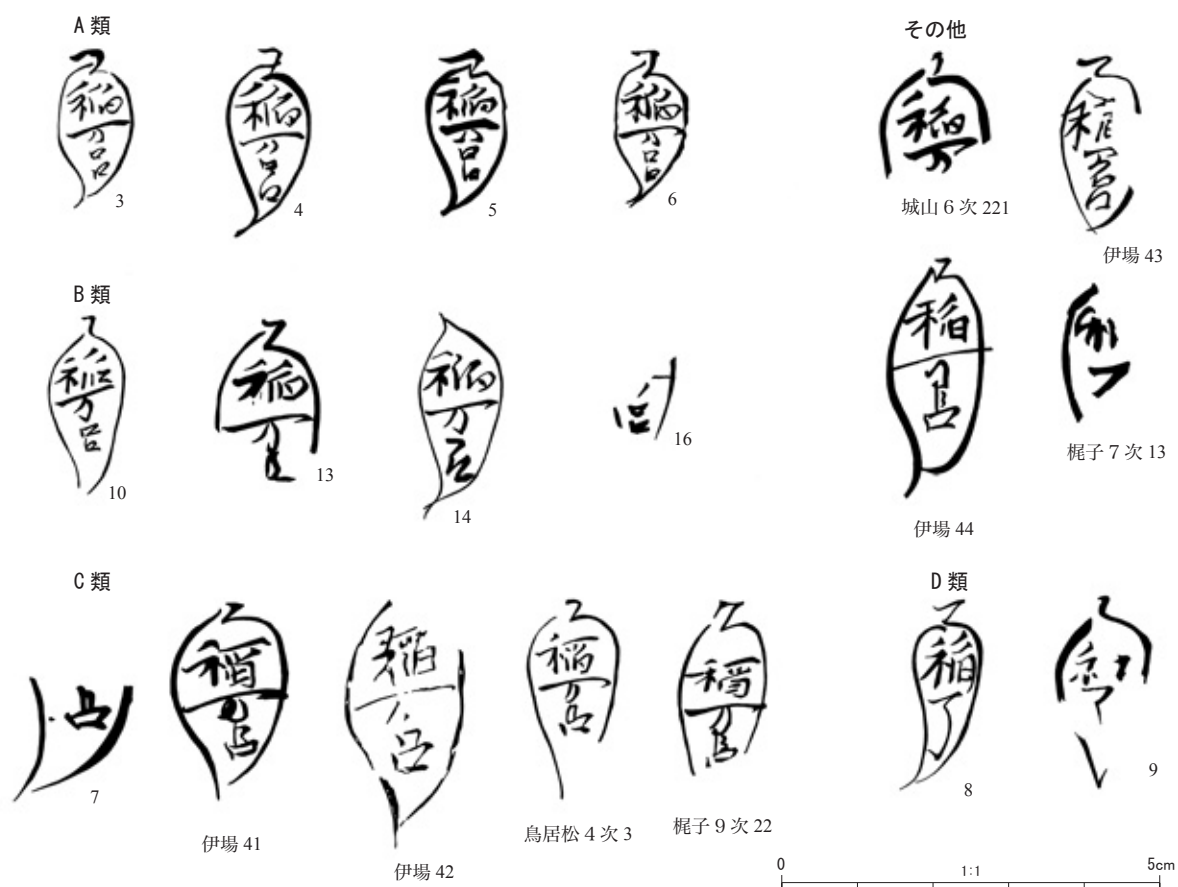


Fig.138 「稲万呂」墨書の分類

ある。「呂」の同様の字体は伊場 42、鳥居松 4 次 3 にみえ、伊場 41、梶子 22 もこれに類似する。類例による限り、「稻」字の「日」の部分の筆画をくずさず転折もかなり明瞭に記す点のほか、「ツ」の部分も三画で記すなど、概して筆画をくずし方の度合いが小さい傾向が認められる。なお、伊場 44 は、「呂」の字体からすれば C 類に含めるべき特徴をもつが、「稻」字の特徴は A 類に近く、A 類とも C 類とも判断しがたい。

D 類に分類される墨書は、8 に典型的である。これに加え、墨痕が薄く判然としないものの、9 も同様の字体を記した可能性がある。「稻」字は筆画をくずし方の度合いが極めて小さいにもかかわらず、「万呂」は合わせ字で記す点が特徴といえる。加えて、刳記号の左囲みの書き出しが、右囲みより下に下がる。土器の年代は VII -1 期で、「稻万呂」墨書のうち最も新しい年代を示す。

「稻」字、「万」字の変化に注目するとき、概して、筆画のくずし方が大きく流暢な書体の文字から、撥ね、払え、転折などが明瞭で筆画のくずし方の小さい文字へという変化が認められる。この傾向を土器の年代の先後関係とあわせ考えるならば、A 類→B 類→D 類の変化が推定できる。この順序は、刳記号の変化、すなわち、左囲みの書き出し位置が鈎部の下へと下がる傾向とも一致している。一方、C 類の位置は判然としないが、伊場 44 の墨書は、A 類と C 類との特徴を持つもので、両者の過渡的な状況を示していると理解される。仮に文字のくずし方の度合いが小さい C 類を先行するものと理解すれば、「稻万呂」墨書の変遷は、C 類→A 類→B 類→D 類とみる理解が成り立つ。この試案は、今後の資料の増加とともにさらなる検証を深めるべきではあるが、現段階での知見として提示しておきたい。

(4) 「稻万呂」墨書の意義

都合 19 点となった「稻万呂」墨書の出土位置は、上流の城山遺跡から下流の鳥居松遺跡までおよそ 1.5km におよび、墨書の年代は、概ね 8 世紀後半ないし 8 世紀末 (VI 期) から 9 世紀前半 (VII -1 期) までにあたる。地理的にも年代的にも、確実に広がりを見せつつあるといえる。ここでは、「稻万呂」墨書を上記のごとき 4 つの類型に分類し、書体の相違が土器の時期と概ね対応することを示した。一方で、今回出土した 11 点の「稻万呂」墨書が、すべて大溝内の同一の遺構 SX03 から出土した一括性の高い資料であることからすれば、ここで提示した墨書の変遷が即時期差として理解できるか否か、この特徴的な墨書を残した人物が一人であるか、あるいは複数の手にかかるものかなど、なお残された問題も多い。今後の資料の増加に俟ちたい。

ともあれ、「稻万呂」墨書は、伊場遺跡群出土の墨書土器のなかでも注目すべき一群といえるが、これらの出土位置、すなわち分布は、古代人の行動範囲が窺われる点で極めて貴重といえる。とともに、まとまった出土をみた鳥居松遺跡付近が、稻万呂の本拠地である可能性は高く、彼自身が、城山遺跡か梶子北遺跡付近に推定される敷智郡の中心施設との間を行き来する郡司ないし郡雑任クラスの有力者とする理解は、さらに確かなものになったといえる。

[参考文献]

浜松市教育委員会 2008『伊場遺跡総括編』

6 鳥居松遺跡における伊場大溝調査の意義

(1) はじめに

今回の調査では、伊場大溝を総延長 25 m にわたり調査し、膨大な量の出土遺物を得た。ここでは、前節までに明らかになった内容をふまえ、検出遺構の検討と出土品の位置づけを行い、伊場遺跡群における鳥居松遺跡の性格について触れておきたい。

(2) 伊場大溝の層位と年代

上流部との関係 伊場大溝の形状や深さについて、鳥居松遺跡の検出状況と、伊場遺跡および梶子遺跡 9 次調査（以下、「梶子遺跡」とする）で確認した状況を比較しておこう。3 地点で確認できた伊場大溝の規模は、幅 20 ～ 25m、深さ 2.5m 程度で、互いに近似している。伊場遺跡では伊場大溝が屈曲し、幅が広い部分がみられるものの、伊場遺跡群内における規模の違いはほとんどないといってよいだろう。

底面の標高も、3 地点における差異は僅かである。Ⅶ層底面の比較では、梶子遺跡が -1.9m 前後、伊場遺跡が -2.0m 前後、鳥居松遺跡が川底溝埋没後の状況で -2.0m 前後である。鳥居松遺跡では 6 世紀後半に形成された川底溝が深く刻まれており、ごく短い期間、水流が激しかったとみられるが、その後は 3 地点において川底の高さの違いがほとんどみられない。伊場大溝における水流は緩やかで、常時は葦などの植物が繁茂する湿地状の景観であったとみられる。

埋没層位の年代観 今回の調査で確認できた埋没層位や各層位の年代観も、伊場遺跡や梶子遺跡で確認されたものとほとんど変わらない。その詳細は Fig.139 に示すとおりである。伊場遺跡におけるⅨ層や、梶子遺跡におけるⅨ層（両者のⅨ層は違う地層である）との対応関係では課題が残ったものの、Ⅷ層、Ⅶ層、Ⅵ層、Ⅴ層、Ⅳ層、Ⅲ層といった層位は伊場大溝にはほぼ普遍的にみられる堆積層と判断できる。

今回の調査で確認した最古の堆積層はⅧ層である。同層中から出土する須恵器は TK208 型式期以降のものがほとんどであり、Ⅷ層の堆積開始期もほぼこの段階と捉えられる。梶子遺跡 9 次調査

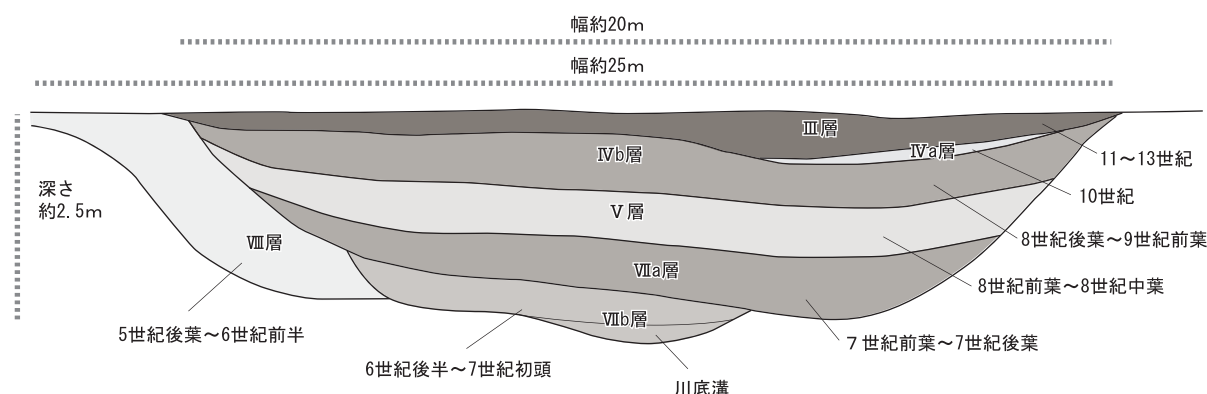


Fig.139 伊場大溝堆積状況模式図

における調査所見では、伊場大溝の形成時期が4世紀代に遡る可能性が示された。しかし、今回の調査結果からは、4世紀代の遺物は他所からの混入品と捉える方が妥当と考えられる。伊場大溝の形成時期は、Ⅷ層の堆積が始まる時期、すなわち古墳時代中期後葉（TK208 型式期、5世紀後葉）と捉えておきたい。

Ⅷ層にかんしては、今回の調査において上下2層に分け、古い時期の堆積をⅦb層、新しい時期の堆積をⅦa層と呼んだ。出土遺物から、Ⅶb層の堆積開始は、遠江Ⅲ期中葉（TK43 型式期、6世紀後半）、Ⅶa層の堆積開始時期は、遠江Ⅲ期末葉（飛鳥Ⅰ期後半、7世紀前葉）と想定できる。

V層の堆積期間は、遠江Ⅴ期にほぼ併行する。8世紀前葉の2点の紀年銘木簡（鳥居松5号木簡：己酉年〈709〉、鳥居松3号木簡：神龜元年〈724〉）が共伴していることも整合的である。

続くⅣ層への移行時期については、遠江Ⅴ期後葉頃と捉えられる。Ⅳ層も今回の調査において、Ⅳb層とⅣa層の上下2層に分けた。ただし、Ⅳa層は伊場大溝の岸沿いに薄く堆積しているのみで、Ⅳ層のほとんどはⅣb層に相当する。Ⅳb層の堆積は遠江Ⅴ期に始まっているとみられるが、その中心的な時期は、遠江Ⅵ期、実年代では800年前後の数十年に相当する。「稲万呂」墨書土器が集中して出土したSX03の出土遺物が堆積年代を決める資料として重要である。「稲万呂」墨書土器は、遠江Ⅵ期とⅦ期にまたがり、墨書の筆跡にも新旧の違いが認められた。ただし、SX03から出土する遺物には高低差がなく、ほぼ同一層位面からの出土と判断できる。「稲万呂」墨書土器の時期差は、長期に見積もることはできないことを明記しておきたい。

伊場大溝の沿岸にわずかにみられるⅣa層の堆積時期は、平安時代中葉（10世紀）頃を中心とする。さらに上層のⅢ層からは年代の決め手となる出土遺物が全く出土せず、今回の調査結果からではその堆積年代を知ることができない。伊場遺跡や梶子遺跡の調査結果から、Ⅲ層の中心的な堆積年代は平安時代後葉から鎌倉時代前葉（11～13世紀）と想定しておく。

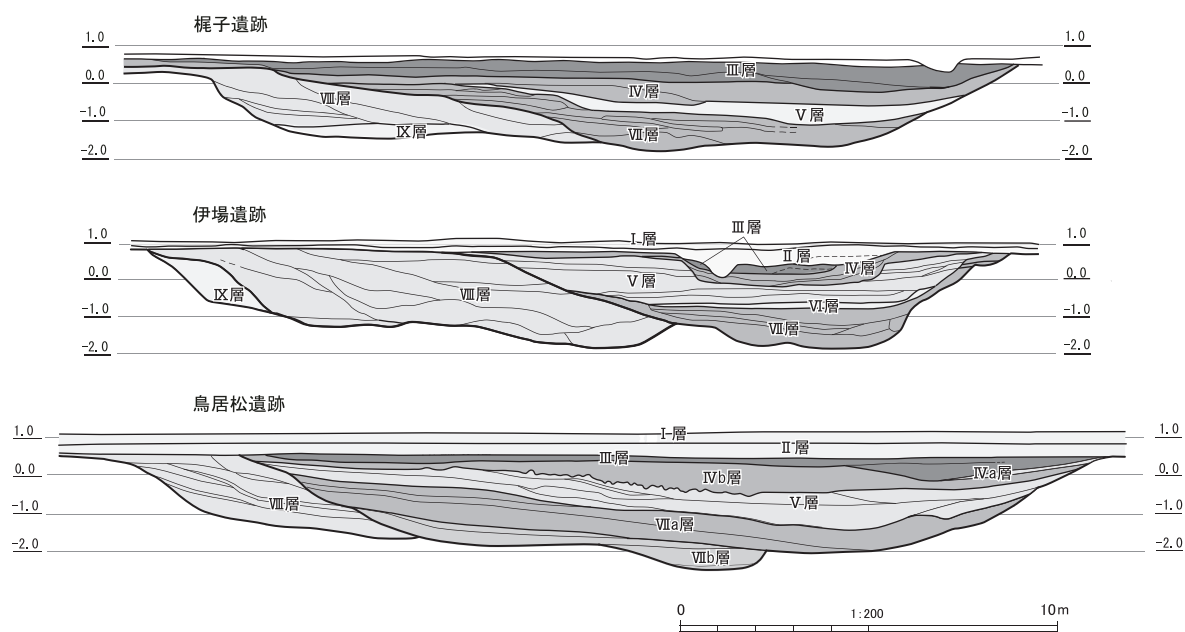


Fig.140 伊場大溝の土層断面比較

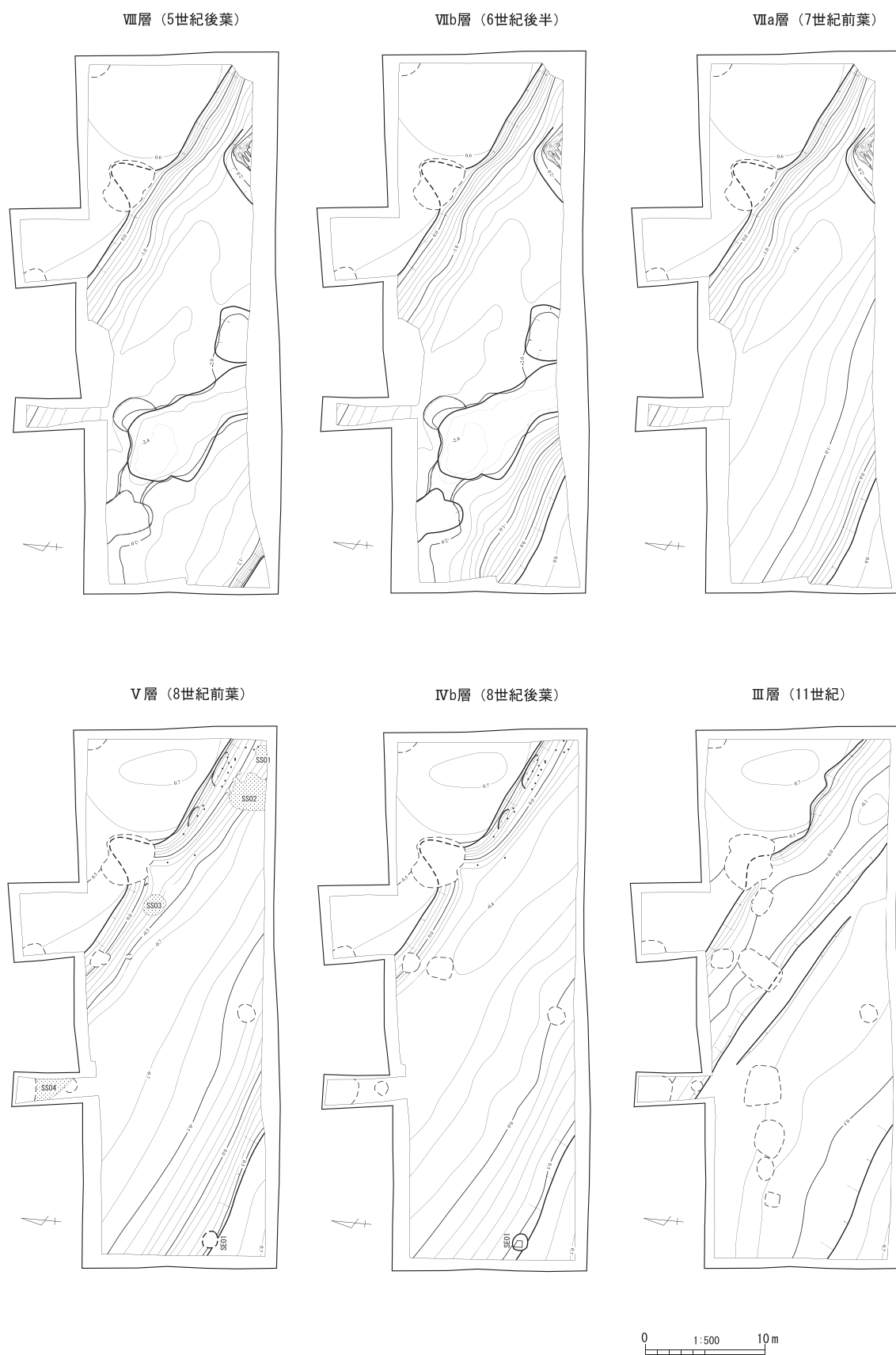


Fig.141 伊場大溝堆積状況の変遷

(3) 6・7世紀の鳥居松遺跡

生産用具 今回の調査ではFig.142に紹介するような手工業生産にかかわる遺物が出土している。これら生産用具は、主にⅦa層もしくはⅦb層から出土しており、6世紀後半から7世紀にわたり、近隣地域に手工業生産を行った工房があった可能性を示唆するものである。轆羽口や鉄滓は鍛冶工房の存在をうかがわせるものとして注目できるだろう。また、漆が付着する土器も、漆を必要とする工房が並存していた可能性を示す遺物である。

ただし、こうした手工業生産工房の存在をうかがわせる遺物の出土量は限定的である。共伴する他の生産用具には、土製紡錘車や木錘といった一般集落で用いられるものも認められ、手工業生産に特化した様相を見出すことは難しい。同一層位からは、木製農具や土錘なども出土していることも留意しなければならない。6世紀後半から7世紀にわたる鳥居松遺跡には、小規模な鍛冶を行いながら、農業や漁業を営んだ集落が展開していたことがうかがえる。

特殊遺物 出土遺物の多くから一般的な集落の存在がうかがえるいっぽうで、6・7世紀の埋没層からは、金銀装円頭大刀をはじめ、玉類や耳環などの装身具、銅製有孔円盤といった特殊な遺物が出土しており、その特異性も指摘できる。装飾大刀をはじめ玉類や耳環といった装身具は、古墳副

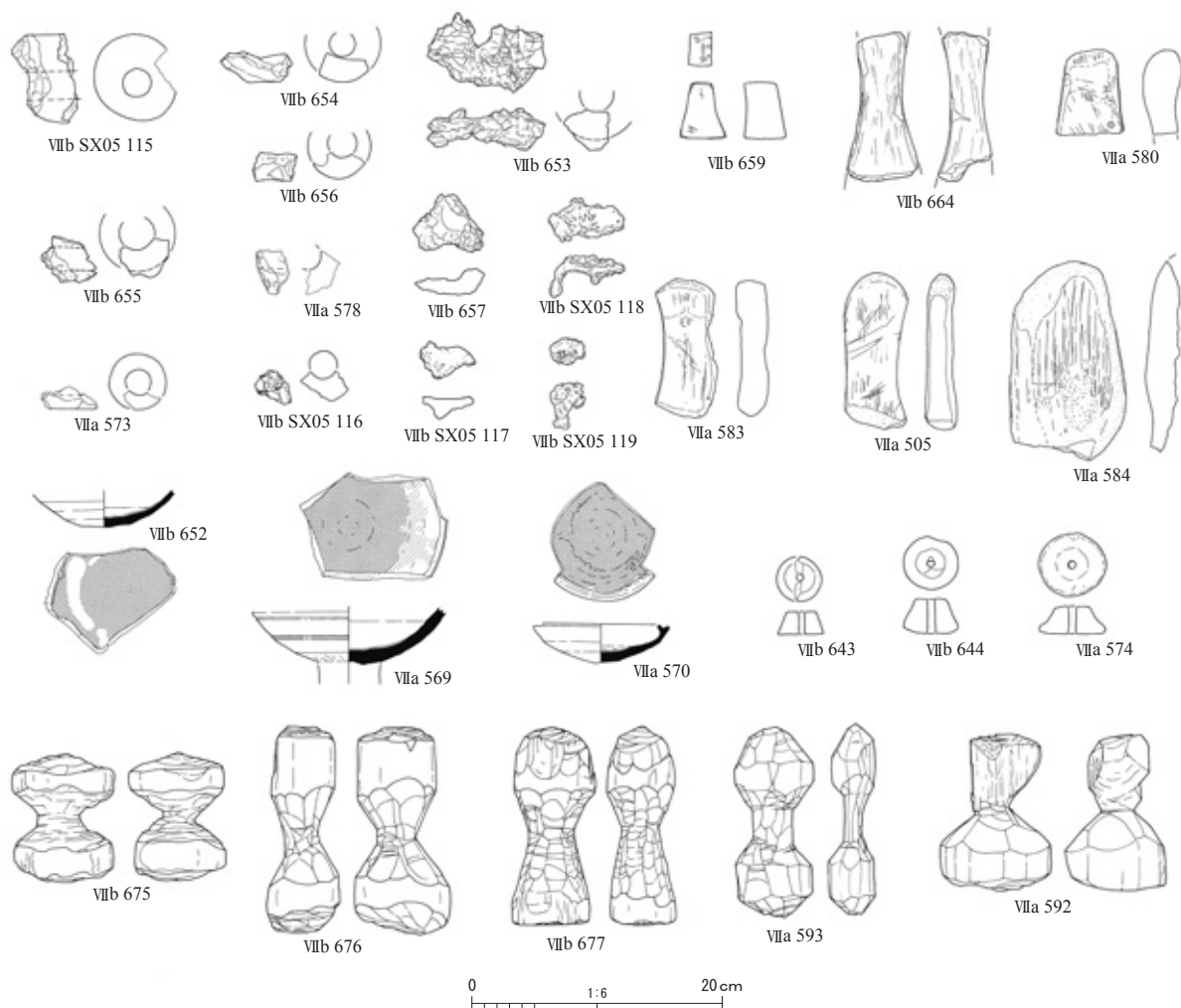


Fig.142 伊場大溝Ⅶ層出土生産用具

葬品と共通する。何らかの儀礼に伴い、古墳副葬品と共通する品目を伊場大溝に沈めたものと評価できる。耳環は梶子遺跡から3点、伊場遺跡からも3点出土しており、今回の調査で出土した2点を合わせて合計8点分を数えることになった（Fig.143）。東西1kmほど離れた地点で出土が確認できることから、伊場大溝に埋没する耳環の総数は相当数にのぼると推定できる。装飾大刀や耳環の出土は、6世紀後半から7世紀にかけて、鳥居松遺跡を含む伊場遺跡群が西遠江における中心地域のひとつになっていたことを雄弁に物語る。

VIIa層から出土した銅製有孔円盤（Fig.144-1）も類例が少ない遺物として注目できる。直径6cmほどの円形をなし、4方向に2個一組の小円孔と中央に方形の孔がある。詳しい用途は不明であるが、法隆寺や東大寺正倉院に伝わる円形飾金具が形態的に類似している。これらの円形飾金具は金銅製で、布幡に糸を取り付けて飾ったものである。本例には金銅の痕跡はみられないが、幡などの装飾的な布に装着した飾金具である可能性が高い。銅製有孔円盤は出土層位から7世紀後半以降のものとみられ、初期官衙の形成に伴い、当地にもたらされた遺物と評価しておきたい。

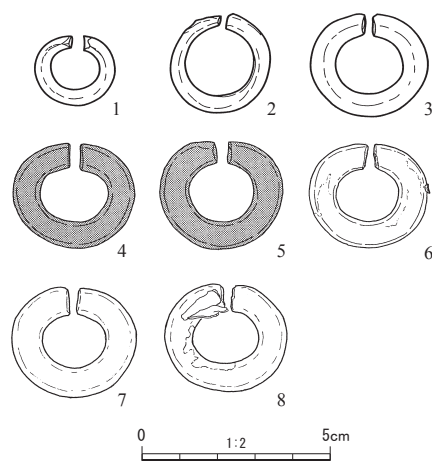


Fig.143 伊場大溝出土耳環

1～3：梶子9次 4～6：伊場 7・8：鳥居松5次

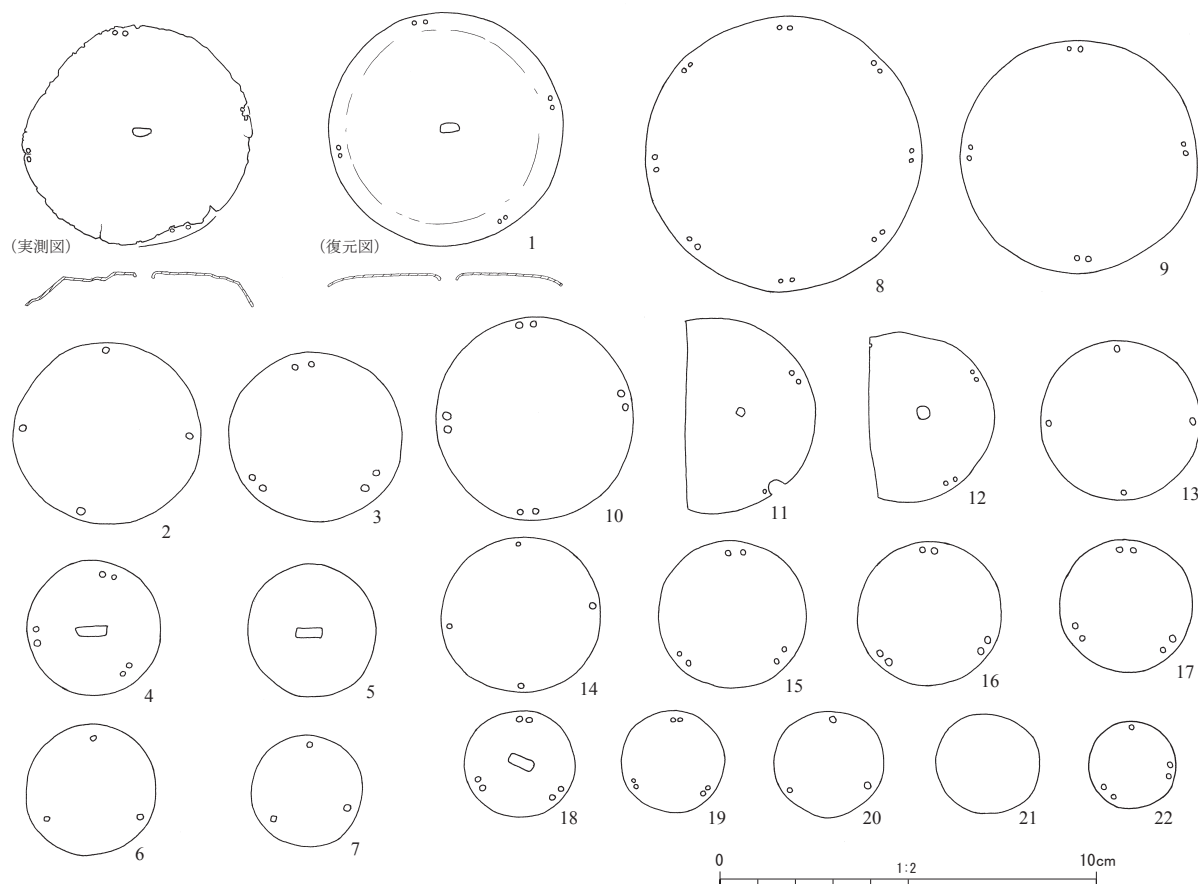


Fig.144 銅製有孔円盤と円形飾金具

1：鳥居松 2～7：正倉院 8～22：法隆寺

(4) 敷智郡家における鳥居松遺跡の性格

伊場遺跡群に敷智郡家が本格的に展開する奈良時代の様相は、鳥居松遺跡の調査によって、より具体的に示せるようになった。ここでは、製塩土器、祭祀具、文字資料を取り上げ、比較検討しておきたい。

製塩土器 V層中で検出できた貝塚には製塩土器が含まれていた。とくに、SS02は製塩土器の集中が顕著で、報告では34点の口縁を図示した(Fig.74)。図示した個体以外にも口縁の破片数は数多く、未図化の破片数(80点)を含めると、口縁破片は114点を数える。製塩土器は、SS02のほかSS04からも出土している。このほか、出土位置が特定できない小破片(V層出土品)を含めると、今回の調査で出土した製塩土器の口縁破片数は145点にのぼる(Tab.9)。

製塩土器は、いずれも直径8cm程度の小型品で、形態や胎土の特徴から渥美半島から搬入されたものとみられる。精製された固形塩が製塩土器に入れられて渥美半島から運ばれたものと解釈できるだろう。今回の調査で出土した製塩土器は、口縁を中心とした坏部の破片のみで、棒状の脚部は全く確認できない。また、棒状脚を伴わないような底部の破片も見当たらなかった。鳥居松遺跡で廃棄された製塩土器は坏部のみで、脚部は別の地域で取り外されていたとみられる。こうした製塩土器の遺存状態から、脚部を外した製塩土器に入ったまま、渥美半島から固形塩が運ばれたとい

Tab.9 製塩土器口縁点数

出土地点	図化点数	未図化点数	総数
SS02	34	80	114
SS04	4	19	23
V層	0	8	8
合計	38	107	145

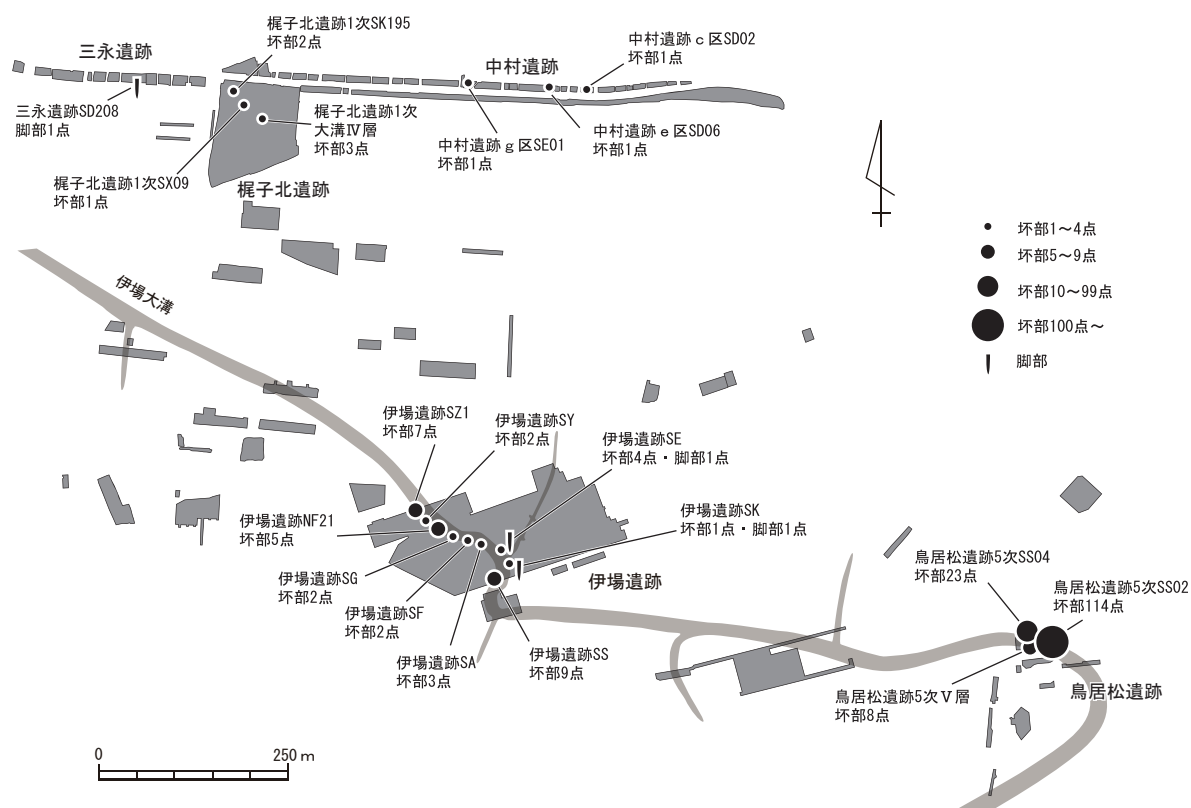


Fig.145 製塩土器出土量の比較

う運搬形態が復原できるだろう（森 1997、鈴木敏 2010）。

従来、伊場遺跡群から出土した製塩土器は、小さな破片を含めて公表され、検討が加えられてきたが（鈴木敏 2007、大林 2008）、図示された資料の総数は 50 点に満たない。同一基準による数量の比較は難しいが、鳥居松遺跡 SS02 における製塩土器の集中度は伊場遺跡群の中でも圧倒的に多い。鳥居松遺跡は推定される古代東海道に近接するだけでなく、後述するように、伊場大溝から潟湖、遠州灘へと繋がる海上交通の利便性もよい立地環境にある。伊場大溝の下流部にあたる鳥居松遺跡で大量の製塩土器が出土したことを考慮すると、渥美半島から固形塩が供給された運搬経路には、遠州灘を介した海上経路を想定することが妥当である。製塩土器の様相から、鳥居松遺跡には、陸上交通と海上交通の結節点として、港湾施設に程近い物資の集散拠点といった性格を読み取ることができるだろう。

祭祀具出土状態 伊場大溝からは、斎串、人形、馬形、舟形といった木製祭祀具に加え、人面墨書土器、土師器の雛形品、土馬、卜骨といった多岐にわたる祭祀具が出土した。また、伊場大溝から出土した馬骨も、祭祀に用いられたものが多かったと想定できる。これらの祭祀具の出土位置はⅦa層、Ⅴ層、Ⅳb層の各層にまたがり、形態的な変遷がうかがえる点で注目できる。

Fig.146 に各層位から出土した祭祀具の出土位置を示した。斎串をはじめとした祭祀具の多くが伊場大溝の岸沿いから出土している。祭祀具は北岸と南岸の双方に分布しており、伊場大溝の両岸が祭祀空間として満遍なく使用されていたことがうかがえる。また、伊場大溝の中央部は祭祀具の分布が希薄であることから、水際において祭祀が執り行われ、使用された祭祀用具はそのまま埋没していった経緯が読み取れるだろう。

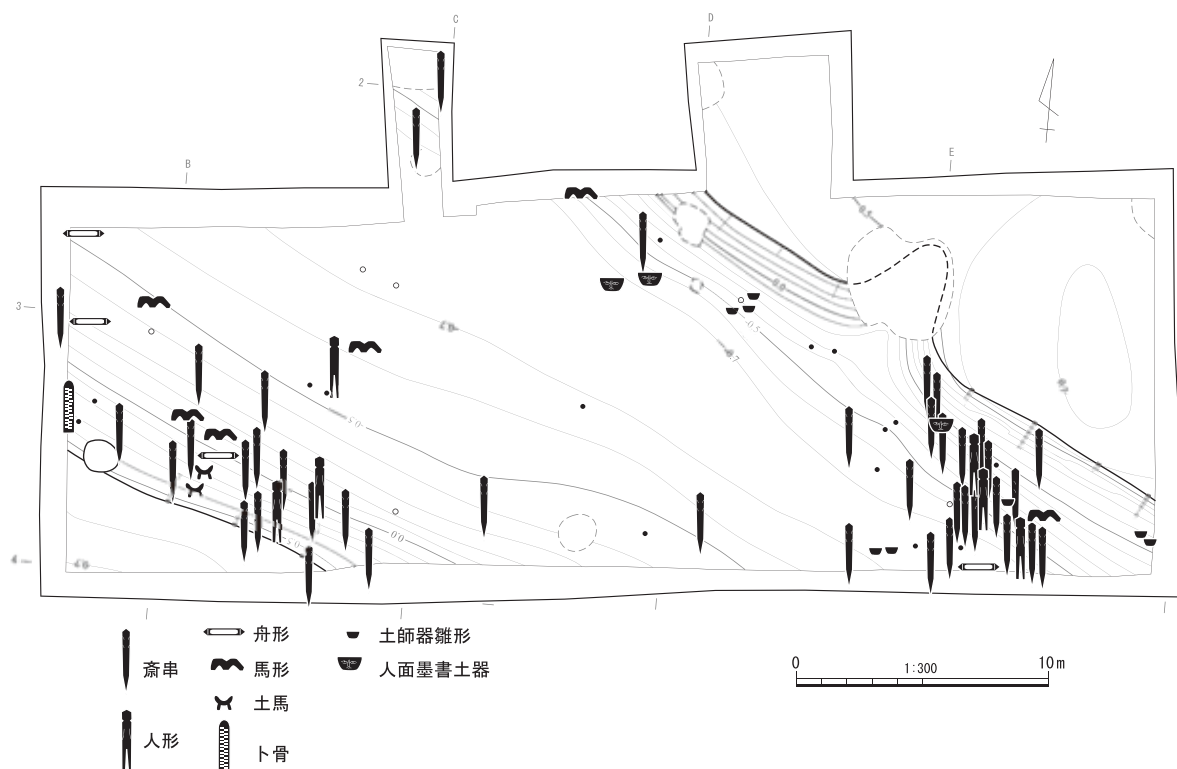


Fig.146 鳥居松遺跡における祭祀具の出土位置

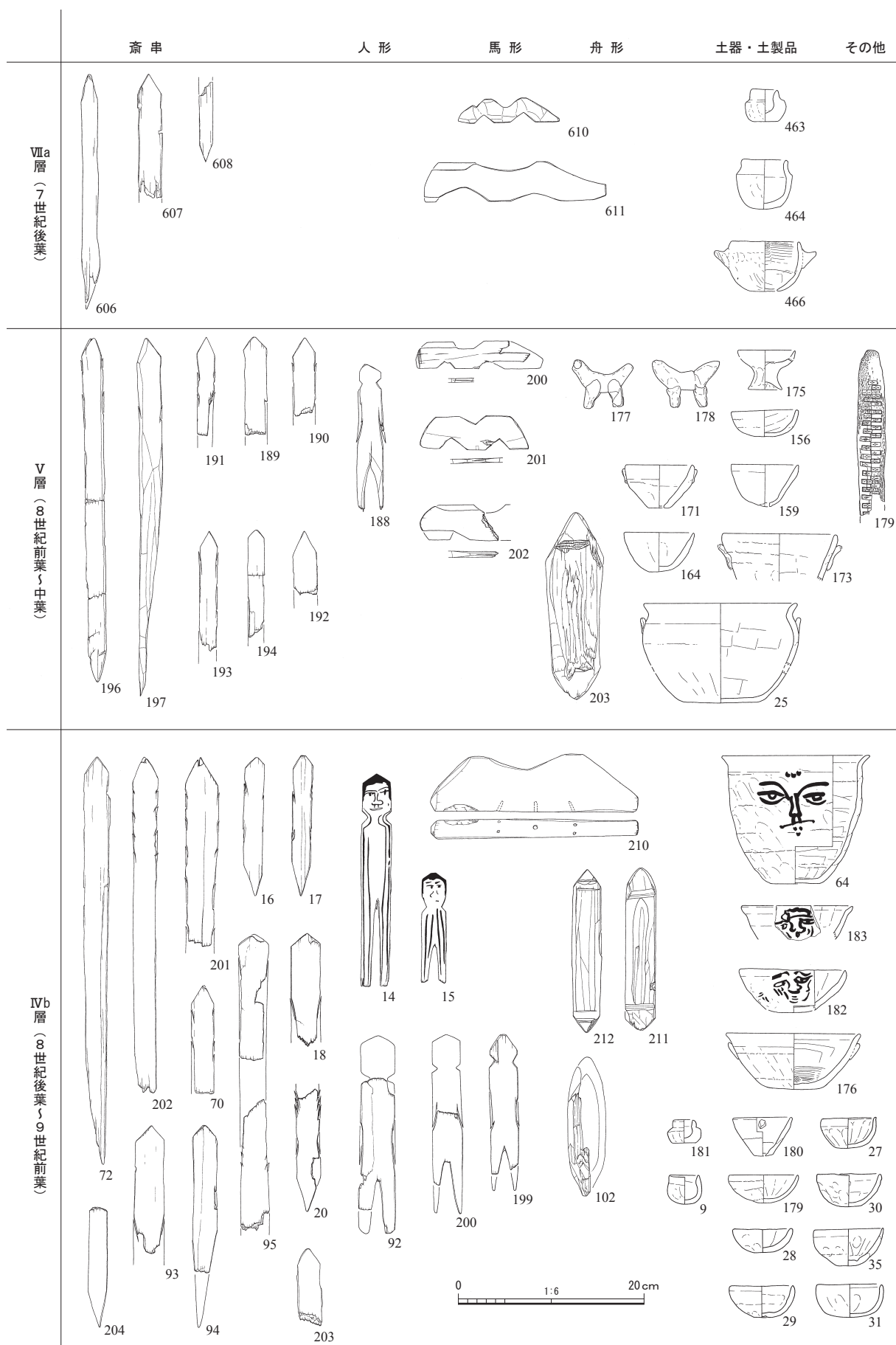


Fig.147 鳥居松遺跡出土祭祀具の変遷

木製祭祀具の変遷 伊場遺跡群における木製祭祀具の基本組成は、斎串、人形、馬形、舟形である。このうち、形態の差異が大きい人形、馬形、舟形といった形代について、今回の調査で出土した資料を含めて形態分類を行い、その変遷について素描しておこう。

人形は頭部の形態と手足の有無による違いが認められる。Fig.148 に伊場遺跡群から出土した主要な人形を示す。伊場遺跡群から出土する人形は、Ⅰ類) 手の切り込みがあるもの、Ⅱ類) 手の切り込みがないもの、Ⅲ類) 足の表現がなく斎串状に尖るもの、といった3形態に分類できる。Ⅲ類は斎串と形態的に共通するので、人頭状の形態的表現もしくは、人面墨書によって人形と認定できるものである。なお、Ⅰ類は頭部の形態差に着目して、Ⅰa類) 頭部上端が山形であるもの、Ⅰb類) 頭部上端が直線的であるものといった細分が可能である（浜松市教委 2002、p28）。

人形は、形態的に丁寧なつくりとみられるⅠa類が基本形態で、手の切り込みがみられないⅡ類には後出の要素を認めてよい。鳥居松遺跡 SX01 で出土した人面墨書がある人形はいずれもⅡ類であり、出土層位（Ⅳb層）から、8世紀後葉から9世紀前葉に位置づけられる。Ⅱ類には大型品も認められるが、いずれも9世紀に降るものでⅡ類が新しい時期に出現したと捉える根拠になりうる。

伊場遺跡群から出土する馬形は、いずれも裸馬を表現したもので、鞍などの表現がみられないと

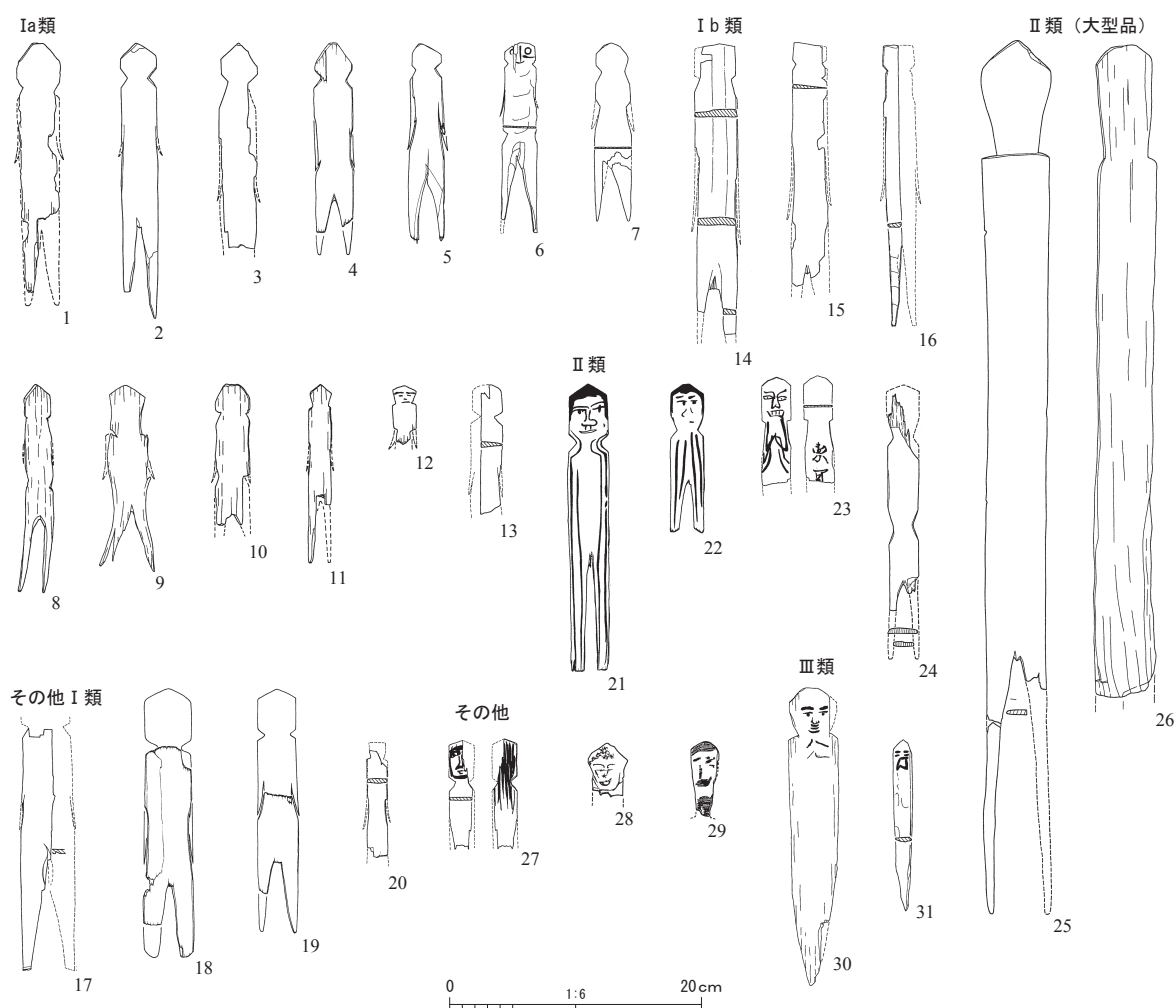


Fig.148 伊場遺跡群出土人形

1・6～17・20・23・26・27・29～31：伊場 2・3・24・25・28：梶子9次 4・5・18・19・21・22：鳥居松5次

いった特徴がある。これら馬形は、Ⅰ類) 背部に一箇所、腹部に二箇所の切り欠きがあり、尾を下げたもの(M字形)、Ⅱ類) 背部に一箇所、腹部に二箇所の切り欠きがあり、尾を上げたもの、Ⅲ類) 背部に一箇所、腹部に一箇所の切り欠きがあり、尾を上げたもの(N字形)に分類ができる。このうち、Ⅰ類は、Ⅰa類) 尾が長く左右非対称のもの、Ⅰb類) 尾が短く左右対称形のもの、といった細分ができる。鳥居松遺跡で出土したⅠa類の2点は、いずれも7世紀後葉のⅦb層から出土したものである。小型の1点は後頭部に切り込欠きをもち蛇のような形態をもつ。馬形は、Ⅰa類が古相を示し、全長が短く対称形のⅠb類が新出の形態と見なしうる。Ⅱ類、Ⅲ類についてはいずれも全長が短いものが主体であることから、Ⅰb類に併行する時期のものと捉えてよいだろう。Ⅰb類、Ⅱ類、Ⅲ類には腹部に孔もしくは切り込みを入れて支柱を挿入したものが多い。

鳥居松遺跡からは腹部に切り込みがなく、背部を二つの山形に表現した大型の馬形が出土した(Fig.149-22)。腹部には棒状の4本足を挿入した痕跡と、支柱を立てた孔がみられる。Ⅰb類の腹部の切り欠きが無くなったものと捉えられるだろう。この個体は出土層位(Ⅳb層)から、8世紀後葉から9世紀前葉に位置づけられ、形態の省略傾向を読み取ることができる。

伊場遺跡群から出土する舟形は、形態差が顕著で従来から分類案が示されてきた(浜松市教委2002)。ここでは、船倉と船首・船尾との間にみられる造作に注目し、Ⅰ類) 船倉と船首・船尾の

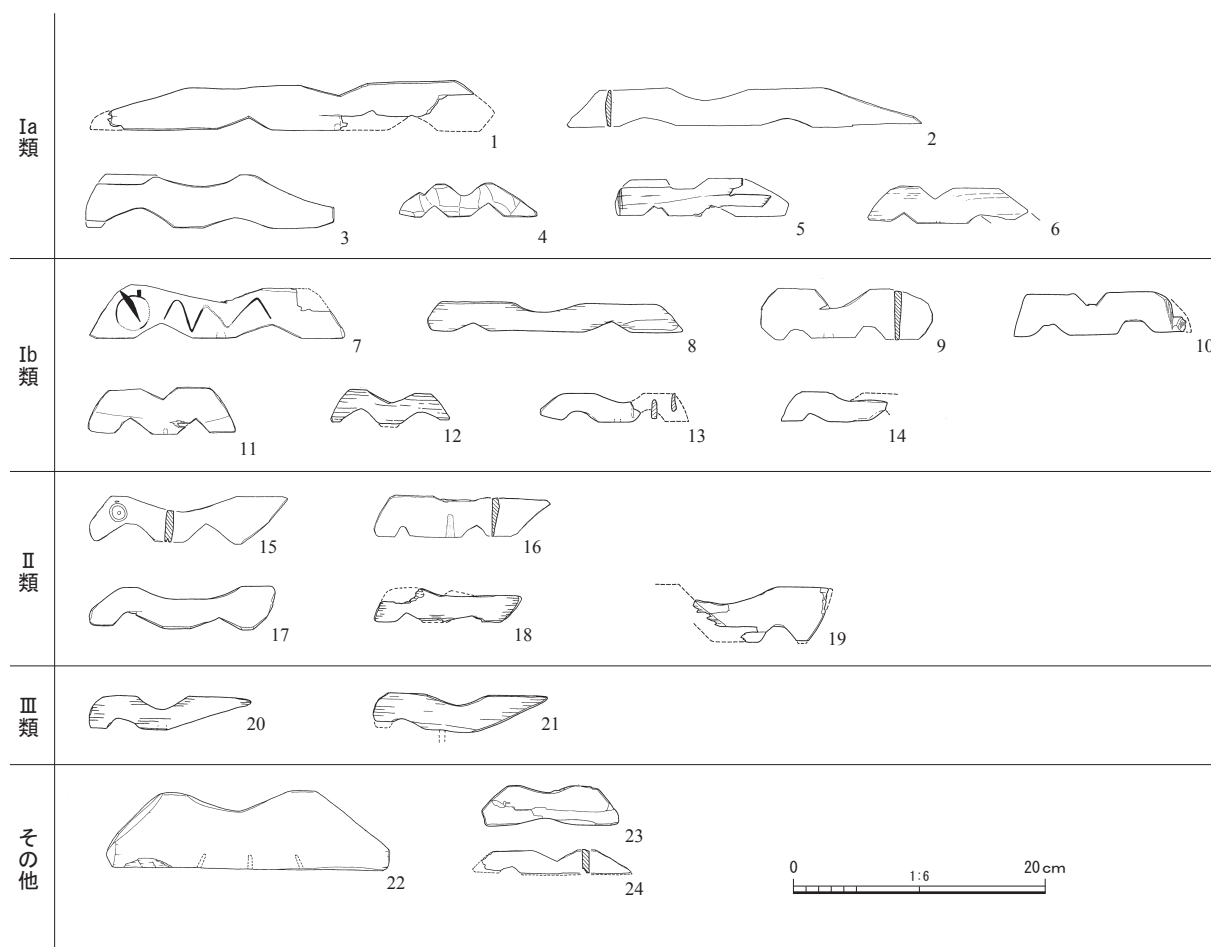


Fig.149 伊場遺跡群出土馬形

1・17・19・23：梶子9次 2・7～9・12・15・16・18・20・21・24：伊場 3～5・11・22：鳥居松5次 6：梶子11次 10・13・14：梶子北1次

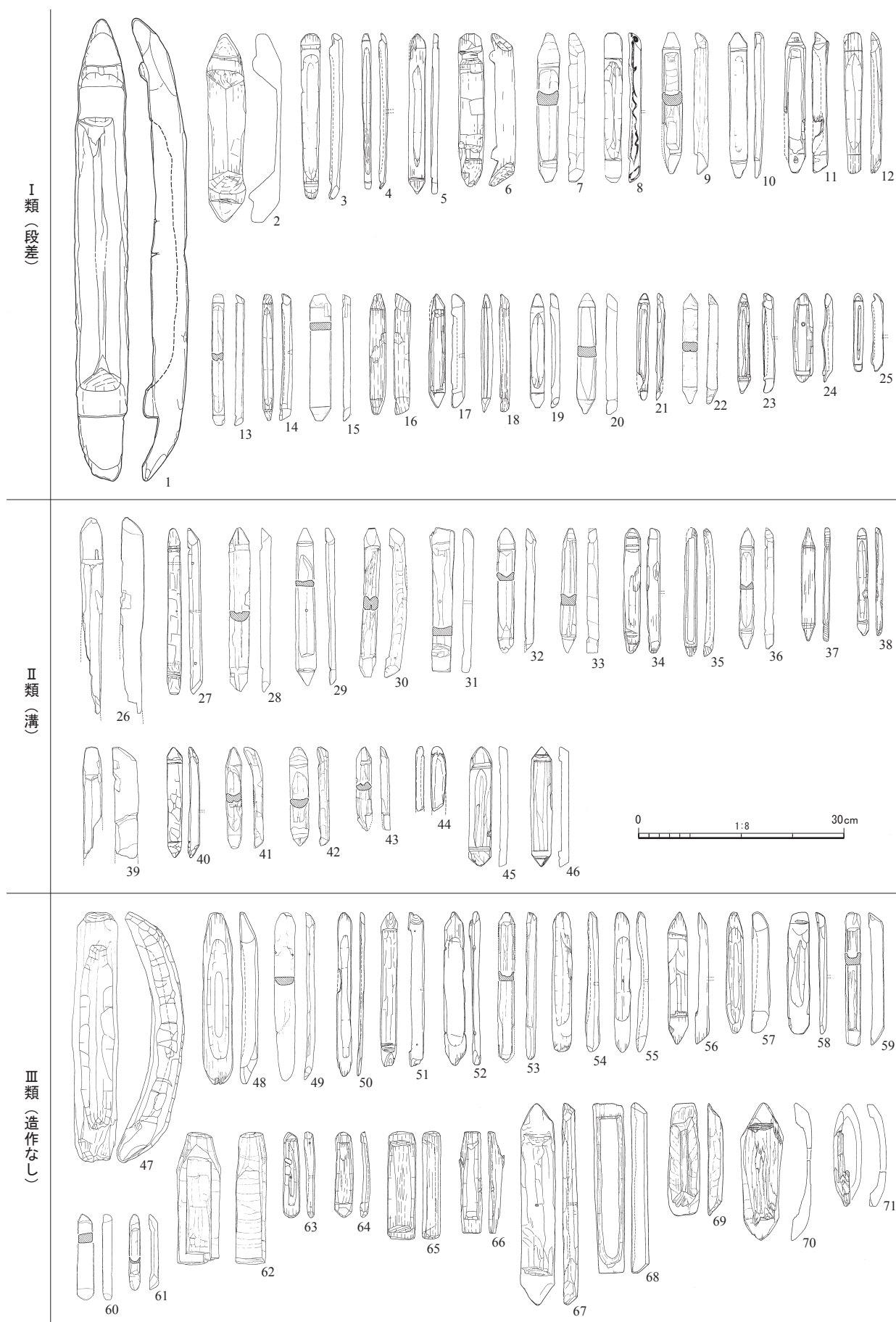


Fig.150 伊場遺跡群出土舟形

1・67：梶子9次 2～44・47～66：伊場 45・46・70・71：鳥居松5次 68・69：梶子北1次

間に段差が認められるもの、Ⅱ類) 船倉と船首・船尾の間を溝で区画するもの、Ⅲ類) 船倉と船首・船尾の間に特別な表現がみられないもの、の3種に分類しておきたい。Ⅰ・Ⅱ類とⅢ類は、象った舟(船)の構造が異なっていた可能性があり、必ずしも同一系譜に捉える必要はない。造形の省略傾向を認めるなら、Ⅰ類を古相、Ⅱ類を新相と評価しうる。鳥居松遺跡の調査では省略傾向が認められるⅡ類が、8世紀後葉から9世紀前葉に位置づけられるⅣb層から出土している。いっぽう、Ⅲ類については、Ⅰ・Ⅱ類から派生する形態を考慮する必要があるが、別系譜と捉えれば、Ⅰ・Ⅱ類と並存するとみて問題はない。今回の調査ではⅢ類の舟形が8世紀に位置づけられるⅤ層から出土している。

以上、木製祭祀具の変遷の傾向として、次の二点をあげることができる。一点目は形態の簡略化である。人形は手の切り込みがないものが8世紀後葉～9世紀前葉に多くみられる。馬形も頭部と尾部の区別がつけられないような左右対称化したものが新相を示し、全体形も新しい時期になるものほど短小化したものが多い。二点目は新しい時期にみられる大型品の存在である。形態上の簡略化は著しいものの、8世紀後葉～9世紀には人形や馬形に大型化したものがみられるようになる。

人面墨書遺物 今回の調査では人面墨書が施された人形が2点、人面墨書土器が3点出土した。いずれもⅣb層(8世紀後葉から9世紀前葉の堆積層)からの出土である。人面墨書の資料が集中して出土したことも、鳥居松遺跡の特長といえる。木製祭祀具の出土量も、調査面積と比較して多いことから、今回調査した位置は、伊場大溝の中でも比較的盛んに祭祀が行われた地点と評価できるだろう。

伊場遺跡群では、人面墨書がみられる人形が従来までに8点知られていた。今回の出土例によって、合計10点を数えることになった。今回出土した人面墨書付の人形は、斎串と組み合わせた使用状態がうかがえ(SX01)、遺存状態も良好な点で注目できる。

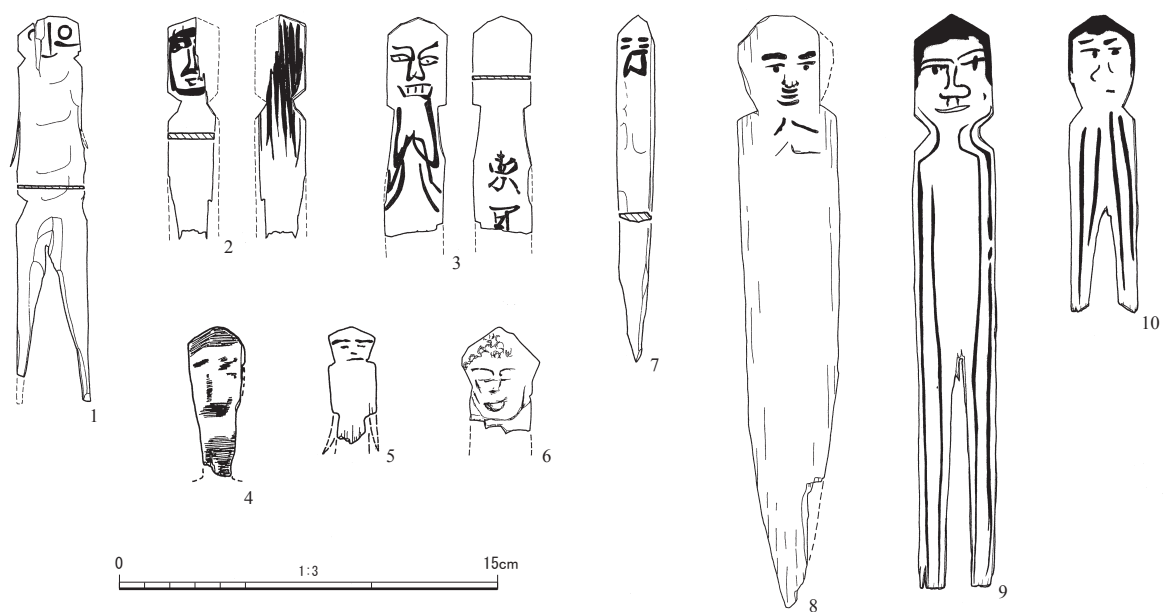


Fig.151 伊場遺跡群出土人面墨書人形

1～5・7・8: 伊場 6: 梶子9次 9・10: 鳥居松5次

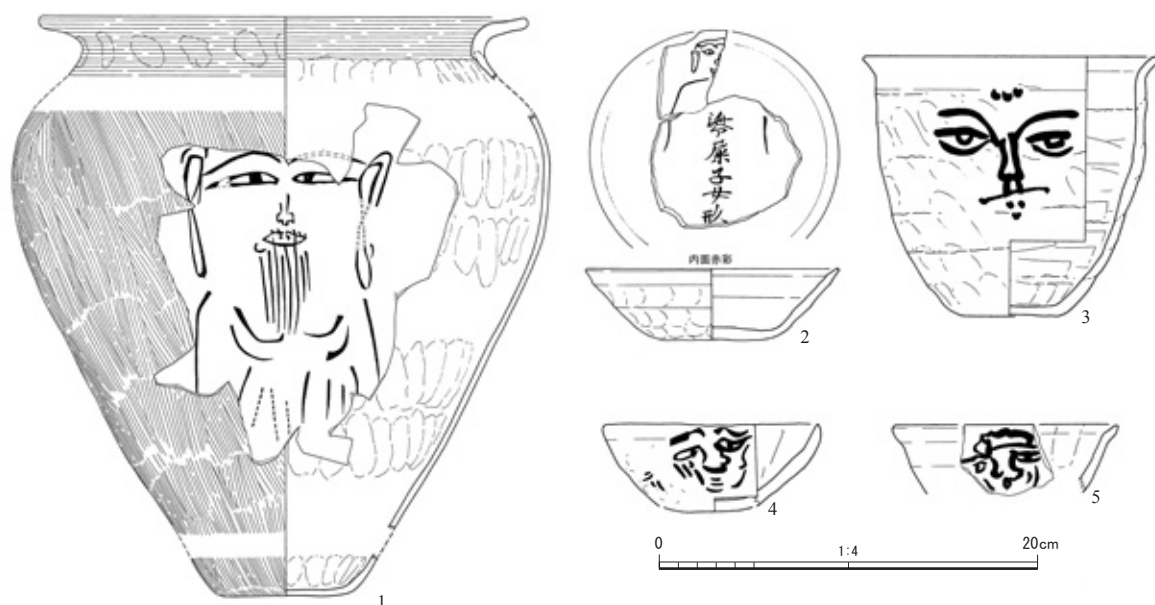


Fig.152 伊場遺跡群出土人面墨書土器

1: 梶子9次 2: 伊場 3~5: 鳥居松5次

いっぽう、伊場遺跡群における人面墨書土器は、従来までに2点知られており、今回の出土例で合計5点になった。土師器の小甕（Fig.152-3）は、「稲万呂」墨書土器が集中的に出土したSX03に含まれ、4点の斎串（Fig.93-68～71）と近接して出土した。これらの斎串と関連して用いられた可能性が考えられる資料である。

文字資料 鳥居松遺跡から出土した古代の文字関係資料は6点の木簡と19点の墨書土器がある。木簡はいずれもV層から出土したもので、8世紀前半代に位置づけられる。

従来、伊場遺跡群における木簡は177点（古代に限定）が知られていた（渡辺 2008）。鳥居松遺跡出土品を合わせて、伊場遺跡群の古代木簡は183点を数えることになった。

鳥居松遺跡から出土した木簡には2点の紀年銘木簡が含まれる点でも注目できる（Tab.10）。伊場遺跡群では今までに18点の紀年銘木簡が確認されていたが、今回の2点を加え、合計20点になった。20点の紀年銘木簡のうち、干支表記がなされたものが9点あるが、己酉年（709）が記された鳥居松5号木簡は干支表記の中で最も遅い事例である。

いっぽう、伊場遺跡群の墨書土器は、従来までに1024点が知られていた（山本 2008）。今回出土した19点を合わせ、伊場遺跡群の墨書土器は1043点になった。

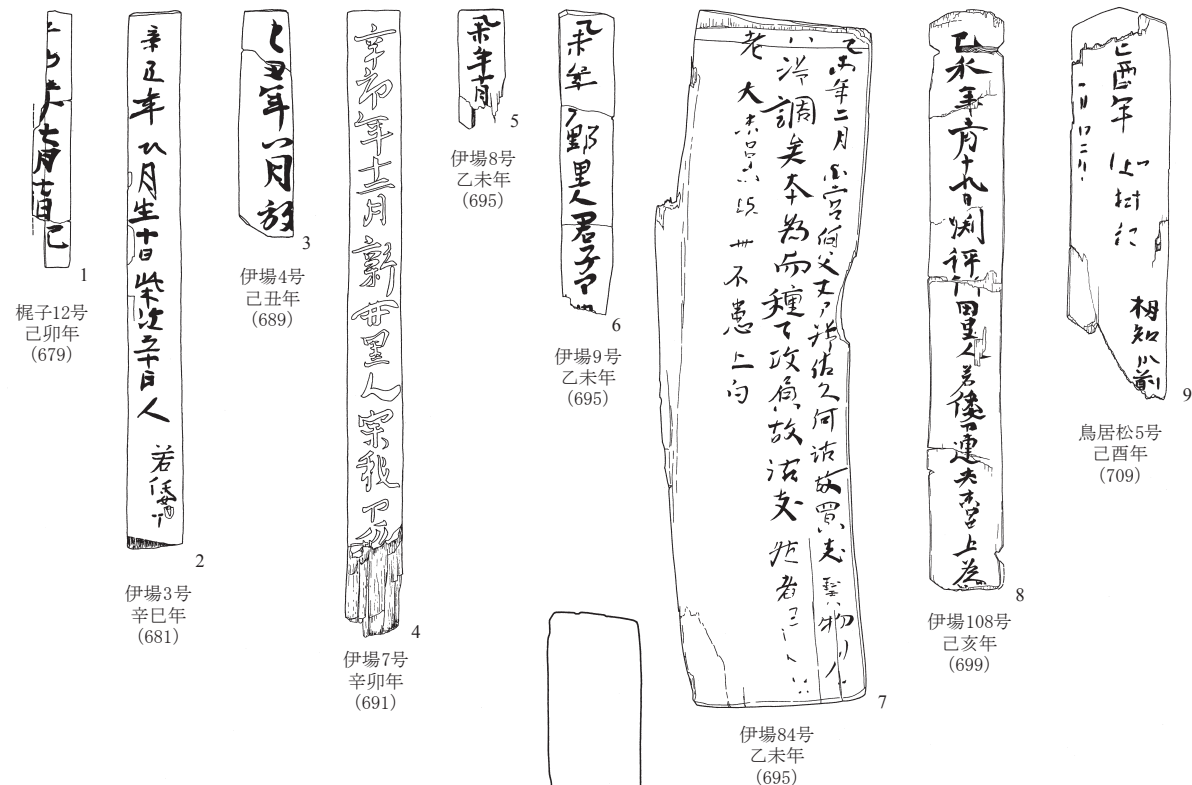
Tab.10 伊場遺跡群出土紀年銘木簡

番号	資料名	年紀	西暦	備考
1	梶子12号	(己卯年)	679	
2	伊場3号	辛巳年	681	顕稻数量
3	伊場4号	己丑年	689	放生関連
4	伊場7号	辛卯年	691	
5	伊場8号	乙未年	695	
6	伊場9号	乙未年	695	
7	伊場84号	乙未年	695	
8	伊場108号	己亥年	699	
9	鳥居松5号	己酉年	709	貸借記事
10	中村1号	和銅八年	715	出挙関連
11	伊場37号	(養老五年)	721	
12	鳥居松3号	神亀元年	724	糸貸与証文
13	伊場85号	神亀四年	727	人夫目録／召文か
14	城山27号	(神亀六年)	729	具注暦※1
15	城山10号	(天平四年)	732	
16	伊場30号	天平五年	733	
17	伊場31号	天平七年	735	
18	伊場32号	天平七年	735	
19	伊場33号	(天平七年)	735	
20	伊場77号	延長二年	925	題箋

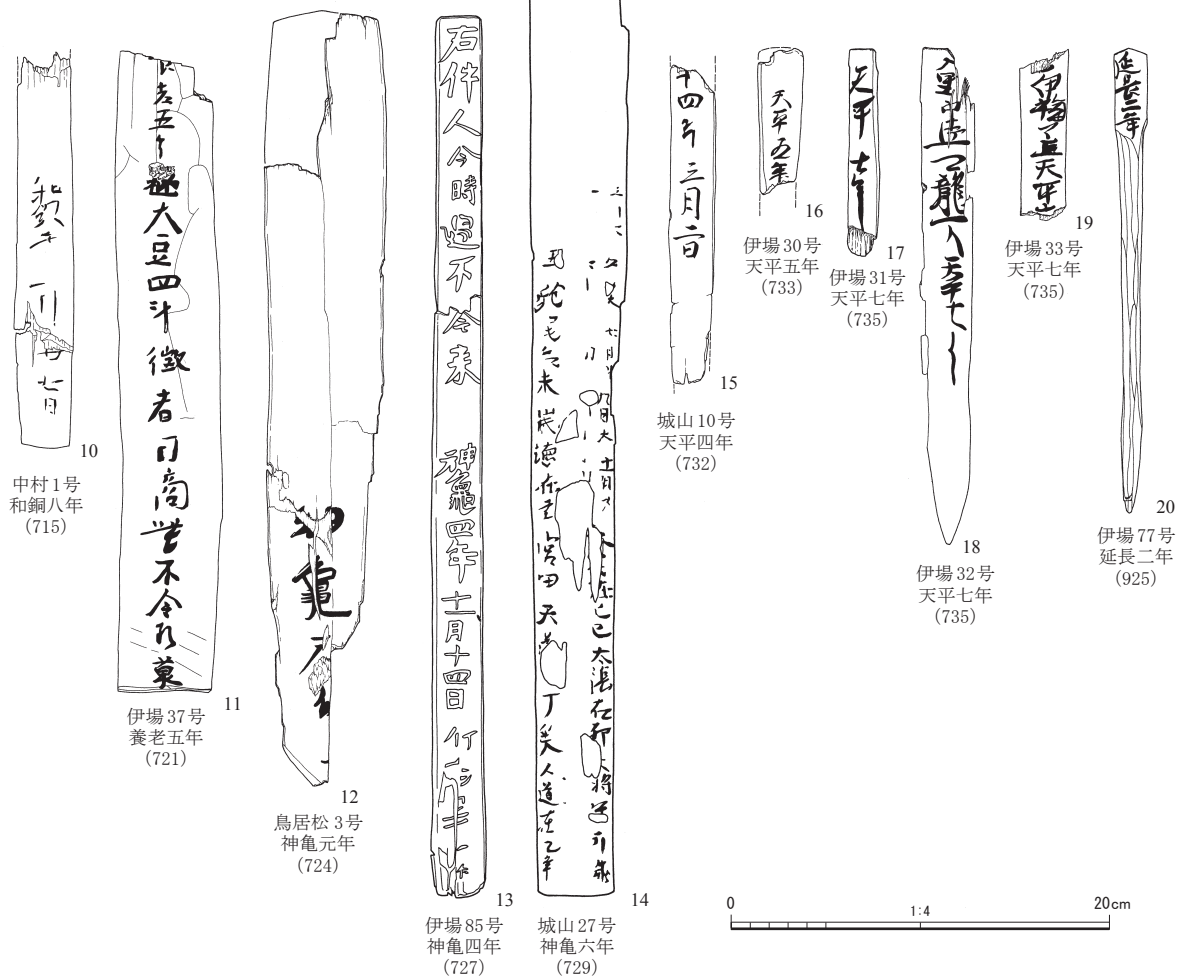
(パーレン内で示した年紀は不確実な要素があることを示す)

※1 神亀六年の暦が記されており、年紀の記載はない。

干支表記



年号表記



0 1:4 20cm

Fig.153 伊場遺跡群出土紀年銘木簡

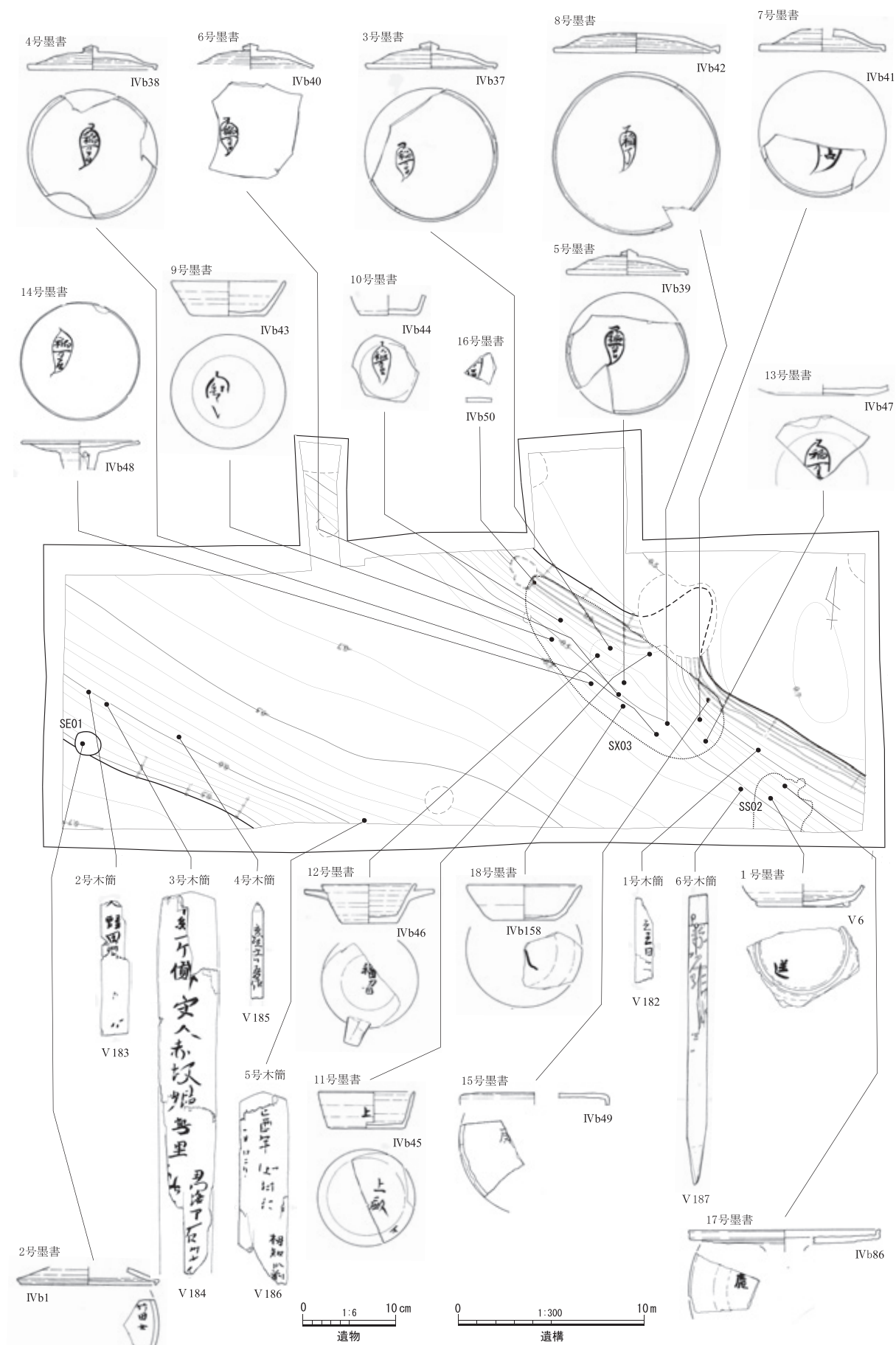


Fig.154 鳥居遺跡における古代文字資料出土位置

今回の調査では「稲万呂」墨書土器（その断片と推定できるものを含む）が11点集中して出土していることが注目できる（第3章5）。「稲万呂」墨書土器は過去の伊場遺跡群の調査で8点が知られていたが、その量を凌駕する出土量である。「稲万呂」墨書土器は、独特の刳記号を伴う点でも、伊場遺跡群出土墨書土器の中では異彩を放っている。なお、刳記号をもつ墨書土器は、19点の「稲万呂」のほか、「安万呂」が3点、「里麻呂」が1点、「□須□」が1点ある。

従来知られていた「稲万呂」墨書土器の出土地は、伊場遺跡群の広域に分散する傾向が認められ、稲万呂は敷智郡家の広範囲にわたり影響力をもった人物と評価されていた。今回の調査で出土した「稲万呂」墨書は、従来認められていた遠江Ⅶ期の須恵器に加え、平頂蓋や双耳箱坏など遠江Ⅶ期に位置づけられる須恵器にもみられた。9世紀前葉とみられる遠江Ⅶ期まで「稲万呂」墨書土器が残存していることが明確である。また、今回出土した11点の「稲万呂」墨書土器は、すべて伊場大溝の同一遺構SX03からの出土であり、従来の分散的な出土傾向とは大きく異なる。まとまった量の墨書土器が出土したことから、8世紀後葉から9世紀前葉にかけて敷智郡家の中で勢力を誇った「稲万呂」の本拠地が鳥居松遺跡にある可能性が高いといえる。

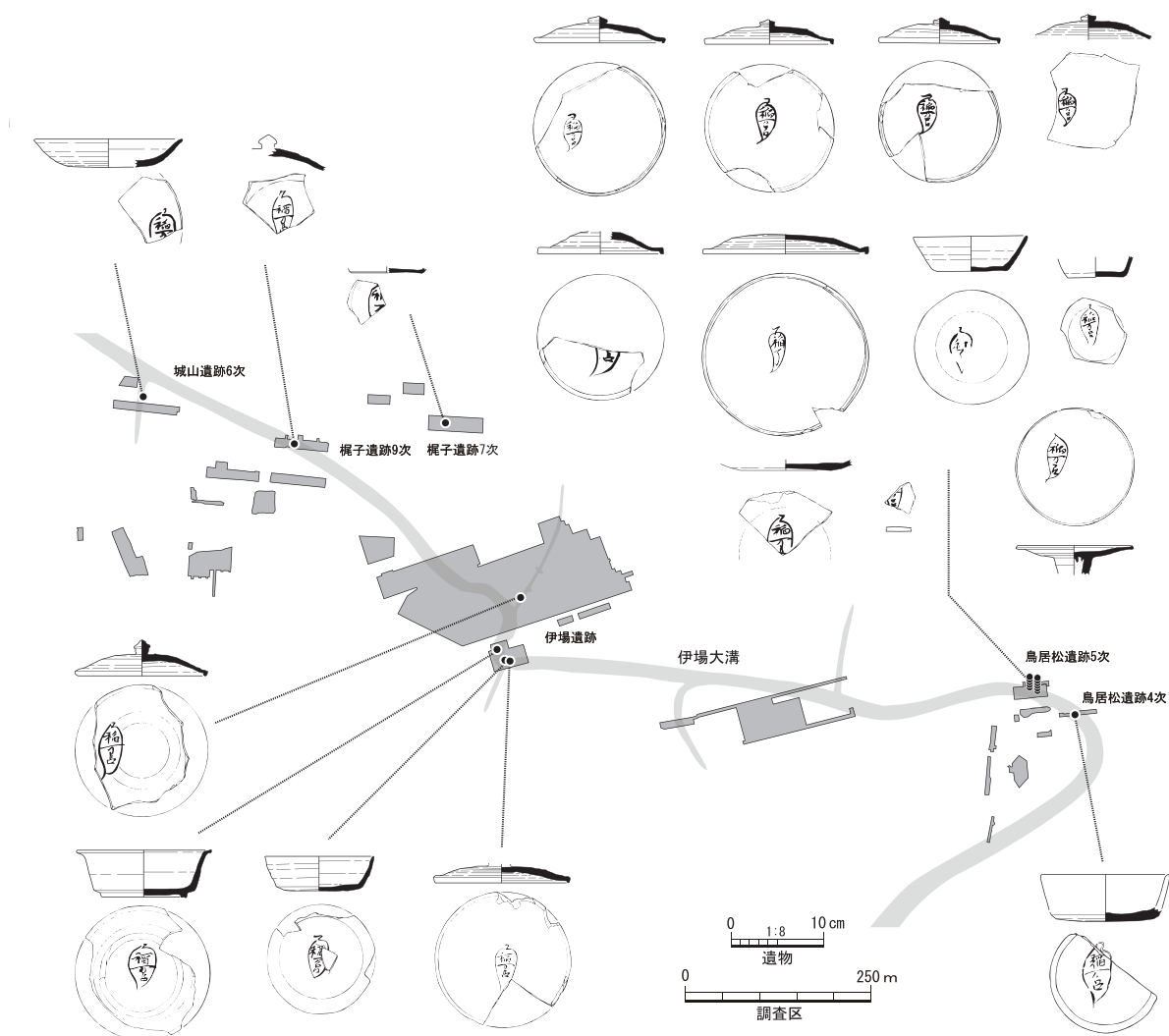


Fig.155 伊場遺跡群における「稲万呂」墨書土器の分布

(5) 結 語

伊場遺跡群の面的な発掘調査が進むにおよび、敷智郡家にかかわる諸施設の位置についても、具体的な復原案が示せるようになってきている（浜松市教委 2008）。奈良時代の政庁は、唐三彩や具注暦木簡などの希少品の集中と地形的な安定度から城山遺跡近辺に想定され、梶子北遺跡で検出された掘立柱建物群も平安時代の政庁もしくは館と捉える見方が有力である。これら郡家の中枢施設は伊場大溝の上流域に展開しており、伊場大溝の流路からはやや離れている傾向がある。いっぽう、伊場大溝を中心に建物群が展開している伊場遺跡は、郡家関連の雑舎群とみられ、豊富な文字資料から厨や栗原駅関連施設が置かれていた可能性が高いと判断できる。また、伊場遺跡の下流域にあたる九反田遺跡では、白鳳様式の軒丸瓦を含む古代瓦が比較的豊富に出土した。礎石を伴う瓦葺建物の存在が想定でき、郡寺が存在した可能性が示唆されている。

伊場大溝は鳥居松遺跡において、流れの方向を東から南西に変えている。下流の延長方向約 1km には、近世以降「沼田池」と呼ばれた沼地があり、伊場大溝が接続していた蓋然性が高い。沼田池は浜松南部に広がっていた潟湖の名残とみられ、この潟湖は馬込川（かつては天竜川の流路の一つ）を伝って遠州灘に繋がっている。

古代における潟湖の広がり是不明確であるが、鳥居松遺跡の近辺まで船が遡行できたとみられる。伊場大溝は水量や規模から考えると、大型船が遡行することは困難である。大型船が停泊する港湾

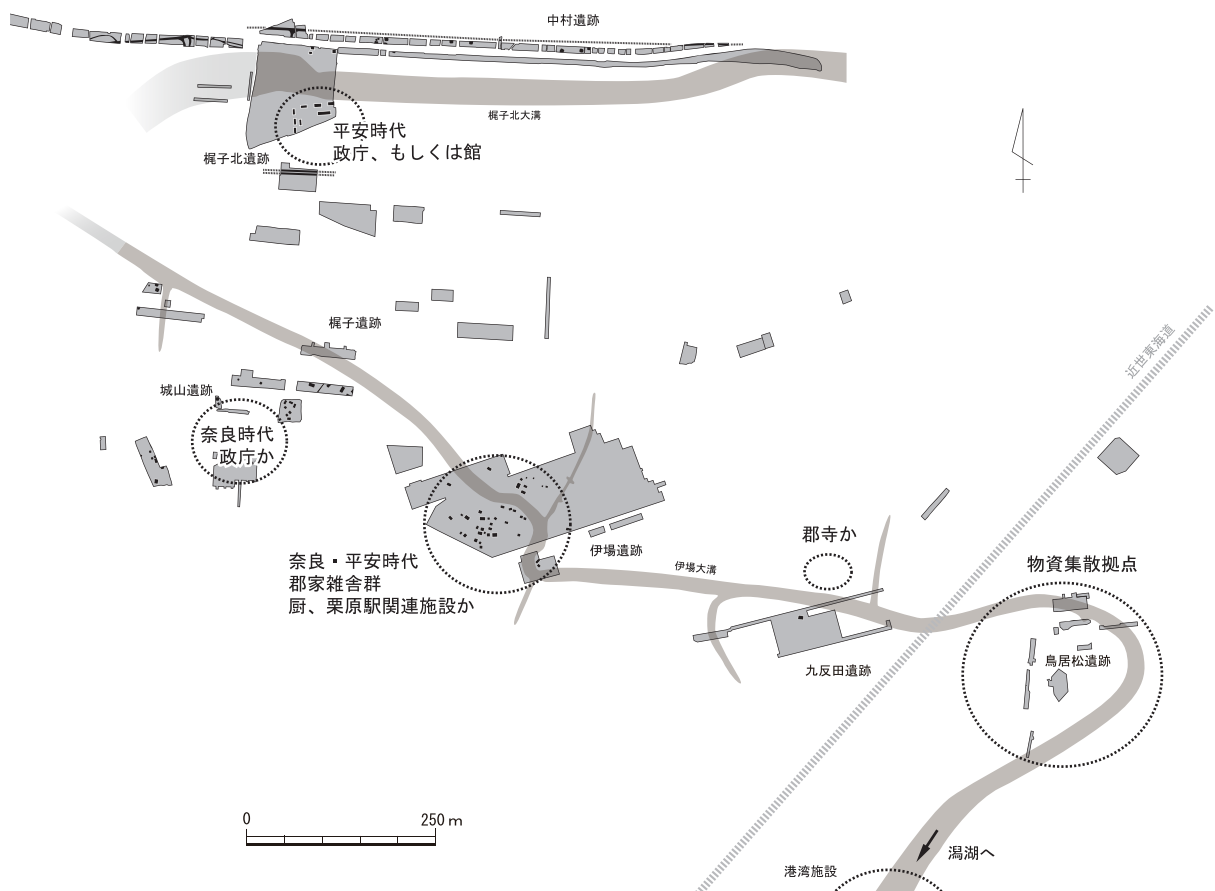


Fig.156 敷智郡家の機能想定図

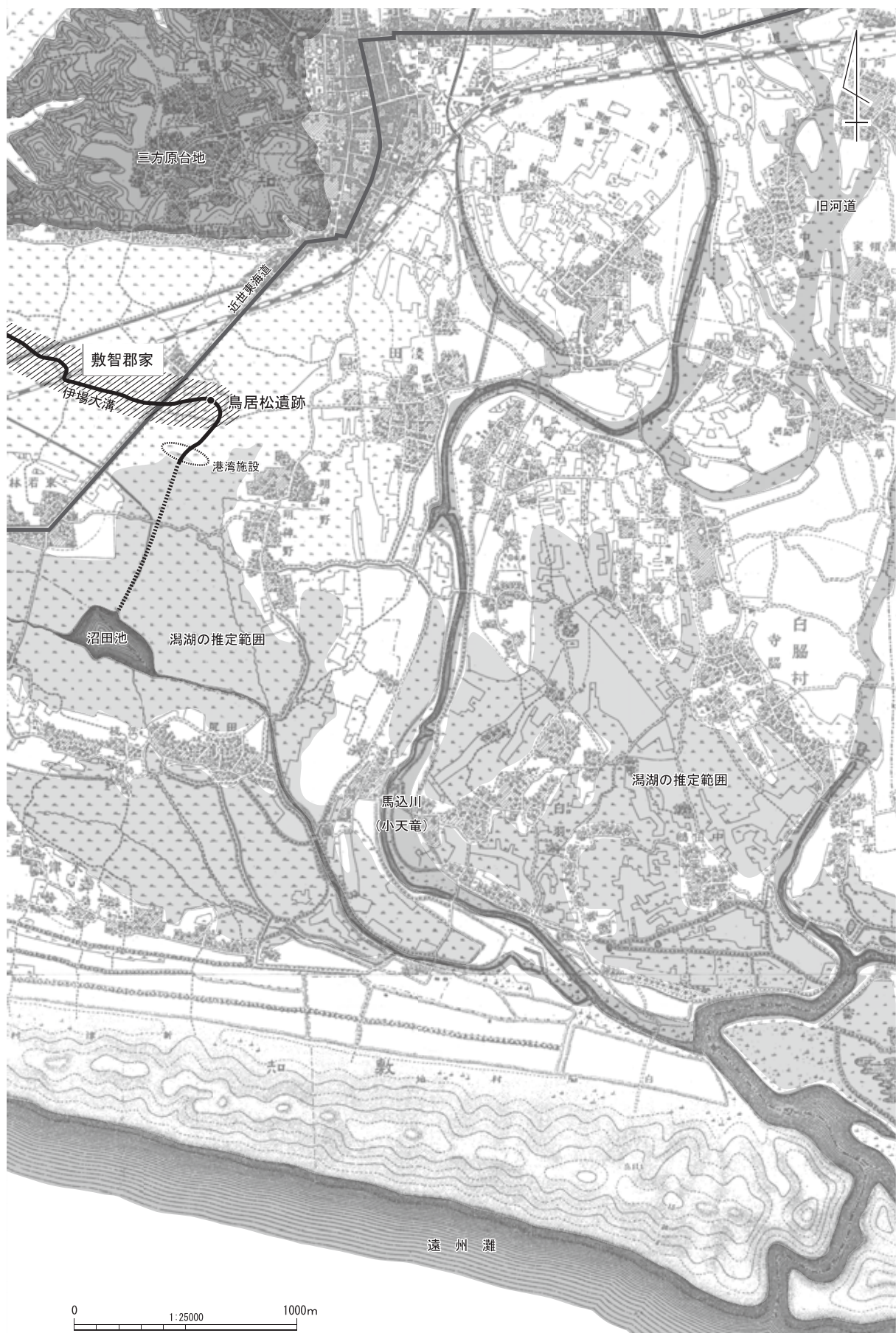


Fig.157 敷智郡家の立地環境

施設は、鳥居松遺跡の南側にある潟湖の湖畔に存在すると考えてよい。外洋を行きかう物資は大型船から小舟に積み替え、伊場大溝を遡って敷智郡家の中枢部に運ばれたと想定できよう。

いっぽう、陸上交通の動脈である古代東海道との位置関係についても、伊場遺跡群の中では鳥居松遺跡が比較的近い位置にあったと推定できる。伊場遺跡群近辺における古代東海道の位置は必ずしも明確になっていないが、近世東海道は鳥居松遺跡の西脇をかすめている。陸上交通と海上交通の結節点という鳥居松遺跡の立地環境は、敷智郡家における物資の集散拠点として捉える視点を補強している。敷智郡家における有力者「稲万呂」がこの地に拠点を構えたのも、郡家にかかわる流通機能の掌握に主眼があったとみられよう。

【参考文献】

- 鈴木敏則 2007「伊場遺跡の貝塚と出土した考古遺物」『浜松市博物館報』第20号 浜松市博物館
 鈴木敏則 2010「静岡県内の製塩土器」『東海土器製塩研究』考古学フォーラム
 浜松市教育委員会 2008『伊場遺跡総括編』
 大林 元 2008「静岡県西部出土の古代製塩土器について」『静岡県考古学研究』No.450 静岡県考古学会
 向坂鋼二 1996「解説 伊場・城山遺跡の古代文字資料」『遠江』19号
 森 泰通 1997「東海地方における消費地出土の製塩土器—特に固形塩の問題をめぐって—」『製塩土器の諸問題—古代における塩の生産と流通—』塩の会シンポジウム実行委員会
 渡辺晃宏 2008「伊場遺跡群出土木簡の再検討」『伊場遺跡総括編』浜松市教育委員会
 山本 崇 2008「伊場遺跡群出土墨書土器の再検討」『伊場遺跡総括編』浜松市教育委員会

【伊場遺跡群主要発掘調査報告書】

- 可美村教育委員会 1978『浜名郡可美村城山遺跡範囲確認調査概報』（城山遺跡2次調査）
 可美村教育委員会 1981『城山遺跡発掘調査報告書』（城山遺跡3・4次調査）
 （財）浜松市文化協会 1991a『梶子遺跡Ⅷ』（梶子遺跡8次調査）
 （財）浜松市文化協会 1991b『梶子遺跡Ⅸ』（梶子遺跡9次調査）
 （財）浜松市文化協会 1993『城山遺跡Ⅴ』（城山遺跡5次調査）
 （財）浜松市文化協会 1997a『鳥居松遺跡』（鳥居松遺跡1次調査）
 （財）浜松市文化協会 1997b『城山遺跡Ⅵ』（城山遺跡6次調査）
 （財）浜松市文化協会 1997c『梶子北遺跡（遺構編）』（梶子北遺跡1次調査）
 （財）浜松市文化協会 1997d『梶子北遺跡（遺物編）』（梶子北遺跡1次調査）
 （財）浜松市文化協会 1997e『九反田遺跡』（九反田遺跡1次調査）
 （財）浜松市文化協会 2000a『鳥居松遺跡2』（鳥居松遺跡2次調査）
 （財）浜松市文化協会 2000b『城山遺跡Ⅶ』（城山遺跡7次調査）
 （財）浜松市文化協会 2002『鳥居松遺跡—3次調査—』
 （財）浜松市文化協会 2003a『鳥居松遺跡—4次調査—』
 （財）浜松市文化協会 2003b『啖東遺跡—2次調査—』
 （財）浜松市文化協会 2004『梶子遺跡Ⅹ』（梶子遺跡10次調査）
 （財）浜松市文化協会 2005『梶子北（三永）・中村遺跡—弥生時代編—』
 （財）浜松市文化振興財団 2006a『梶子北遺跡（三永地区）—古墳・奈良時代編—』（三永遺跡1次調査）
 （財）浜松市文化振興財団 2006b『中村遺跡—古墳・奈良時代編—』（中村遺跡1次調査）
 （財）浜松市文化振興財団 2008『梶子遺跡12次』
 （財）浜松市文化振興財団 2009a『鳥居松遺跡5次』（本書）
 （財）浜松市文化振興財団 2009b『鳥居松遺跡6次』
 浜松市遺跡調査会 1980『国鉄浜松工場内遺跡発掘調査報告書Ⅴ』（梶子遺跡5次調査）

6 鳥居松遺跡における伊場大溝調査の意義

浜松市遺跡調査会	1983a『国鉄浜松工場内（梶子）遺跡第Ⅵ次発掘調査概報』（梶子遺跡 6 次調査）
浜松市遺跡調査会	1983b『国鉄浜松工場内遺跡第Ⅶ次発掘調査概報』（梶子遺跡 7 次調査）
浜松市教育委員会	1976a『伊場木簡』伊場遺跡発掘調査報告書 第 1 冊
浜松市教育委員会	1976b『国鉄浜松工場内発掘調査略報』（梶子遺跡 1 次調査、非公式刊行物）
浜松市教育委員会	1977a『伊場遺跡遺構編』伊場遺跡発掘調査報告書 第 2 冊
浜松市教育委員会	1977b『国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報Ⅱ』（梶子遺跡 2 次調査）
浜松市教育委員会	1978a『国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報Ⅲ』（梶子遺跡 3 次調査）
浜松市教育委員会	1978b『伊場遺跡遺物編 1』伊場遺跡発掘調査報告書 第 3 冊
浜松市教育委員会	1979『国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報Ⅳ』（梶子遺跡 4 次調査）
浜松市教育委員会	1980『伊場遺跡遺物編 2』伊場遺跡発掘調査報告書 第 4 冊
浜松市教育委員会	1982『伊場遺跡遺物編 3』伊場遺跡発掘調査報告書 第 5 冊
浜松市教育委員会	1987『伊場遺跡遺物編 4』伊場遺跡発掘調査報告書 第 6 冊
浜松市教育委員会	1990『伊場遺跡遺物編 5』伊場遺跡発掘調査報告書 第 7 冊
浜松市教育委員会	1994『伊場遺跡遺物編 6』伊場遺跡発掘調査報告書 第 8 冊
浜松市教育委員会	1997『伊場遺跡遺物編 7』伊場遺跡発掘調査報告書 第 9 冊
浜松市教育委員会	2002『伊場遺跡遺物編 8』伊場遺跡発掘調査報告書 第 10 冊
浜松市教育委員会	2007『伊場遺跡補遺編』伊場遺跡発掘調査報告書 第 11 冊
浜松市教育委員会	2008『伊場遺跡総括編』伊場遺跡発掘調査報告書 第 12 冊

〔図出典〕

Fig.144 2～7：正倉院事務所 1997『正倉院寶物』9 南倉Ⅲ 毎日新聞社、8～22：法隆寺昭和資財帳編集委員会 1993『法隆寺の至宝』第 12 巻 小学館 より写真トレース

上記以外は各報告書より引用

第4章 総括

本書で報告した伊場大溝の調査結果は、古代敷智郡家とその前身にかかわる豊富な情報をもたらした。発掘調査と検出遺構や出土遺物の分析を通じて得られた成果は多岐にわたるが、さいごに報告の内容を要約するとともに、後論で明らかにされた内容を総合し、今後の展望を示したい。

1 発掘調査の成果

検出遺構 発掘調査で検出した伊場大溝は、幅 20m、深さ 2.5m 以上におよぶ。総延長 25m を底面まで確認した。伊場大溝は 5 世紀後葉に形成されたとみられる自然河川で、6 世紀から 9 世紀にかけての遺物を大量に含んでいる。伊場大溝の埋没層位を数段階に分けて調査し、各時代の様相を明確にした。なお、伊場大溝は 13 世紀頃には、水流を殆ど失い、土中に埋没したとみられる。

伊場大溝の各層からは、注目できる遺構がみられる。6 世紀後半の堆積層であるⅦb 層の底面では、大量の土器を伴う土器集積 SX05 を検出した。この土器集積の近隣には金銀装円頭大刀が出土している。8 世紀の堆積層であるⅤ層中では、大溝の岸に貝塚を検出した。貝塚は北岸に 4 箇所(SS01～04) 確認できた。とくに SS02 と SS04 は貝層が厚く、出土遺物も豊富である。8 世紀後葉～9 世紀前葉の堆積層であるⅣb 層中からは、「稲万呂」墨書土器が集中する土器集積 SX03 や、人面墨書がある人形が出土した祭祀遺構 SX01 などが検出された。

出土遺物 伊場大溝の各層から大量の遺物が出土した。土師器や須恵器とともに木器がまとまって出土しており、6～9 世紀に至る充実した資料が得られた。

特筆できる出土遺物として、Ⅶb 層（6 世紀後半）から出土した金銀装円頭大刀、Ⅴ層（8 世紀）から出土した 6 点の木簡、Ⅴ層、Ⅳb 層、Ⅳa 層の各層位（8 世紀～10 世紀）から出土した 19 点の墨書土器などがあげられる。

Ⅶb 層およびⅦa 層（6 世紀後半～7 世紀）からは鉄滓や韃羽口、漆が付着する土器片といった手工業生産にかかわる遺物や、玉類や耳環などの装身具、幡などの装飾的な布に装着したとみられる銅製有孔円盤が出土した。

Ⅴ層（8 世紀）中で検出できた貝塚 SS02 からは口縁破片で 114 点を数える大量の製塩土器が出土した。一つの遺構からの出土数としては周辺地域では群を抜いている。

Ⅶa 層（上層）、Ⅴ層、Ⅳb 層（7 世紀後葉～9 世紀初頭）からは祭祀用具が大量に出土した。この中には、人面墨書がある人形 2 点、人面墨書土器 3 点が含まれる。斎串、人形、馬形、舟形といった木製祭祀具は各層から出土し、形態の変遷がうかがえる貴重な事例を提供した。

動植物遺体等 伊場大溝の各層から豊富な動植物遺体が出土した。堆積土中に含まれる花粉や珪藻に加え、Ⅴ層（8 世紀）の貝塚からは大量の貝類が出土したほか、馬骨や鹿角などの獣骨類もみられる。また、伊場大溝埋没時の環境を検討するため、堆積土中に含まれる花粉や珪藻を検出した。

2 特筆すべきことから

年 代 伊場大溝の形成時期については、5世紀後葉と想定した。伊場大溝の堆積層中に含まれる木材の放射性炭素年代とも矛盾はない。ただし、放射性炭素年代を測定した資料はすべてⅦb層からの出土品である。厳密に伊場大溝の形成開始期を捉えんとするなら、最下層の堆積層であるⅧ層中に含まれる試料で測定すべきであろう。また、伊場大溝の基盤層（基本層位10層）からは天城カワゴ平テフラ（Kg）および大沢スコリア（Os）が検出できた。おおよそ3100～3200年前の堆積年代が想定できる。また、土壌の放射性炭素年代測定では、基盤砂層の上部に泥炭質土壌（基本層位14層）が堆積し始める年代は、約5600～4800年前という分析結果を得た〔第3章1〕。この分析結果は、第3砂洲の形成が5000年前以前に遡ることを示すもので、梶子遺跡で確認できた第1砂洲の形成年代（6000年前以前）とも矛盾しない〔第3章2〕。

古環境分析 鳥居松遺跡にかかわる古環境の情報を得るため、貝類、動物骨、堆積土を対象に、同定・分析を行った。堆積土については、花粉および珪藻の分析を実施した。

貝類は奈良時代の貝塚（SS01・02・04）から出土したもので、全体の80%がヤマトシジミとダンベイキサゴで占められていた。ダンベイキサゴが遠州灘から運ばれたとみられるほか、その他多くの貝類は遺跡近隣で採集されたものと判断される。また、堆積土中に含まれる花粉・珪藻の分析からは、貝塚SS01・SS02は比較的水が流れる環境に、SS04は滞水した環境に形成されたことが明らかにされた。

伊場大溝の堆積土からは、比較的に豊富な動物骨が確認できた。動物骨はウマが多く、頭骨のみが出土する場合も認められた。伊場大溝近辺でウマを屠殺する儀礼が頻繁に行われたことが判明する。

伊場大溝の堆積土中に含まれる花粉・珪藻分析によって、Kgが降下した3100～3200年前から13世紀に至る鳥居松遺跡の古環境が復元された。分析結果からは、鳥居松遺跡は湿地性の環境が続いていたと判断できるが、時代の変化による微妙な植生の変化が指摘できる〔第3章3〕。

木 簡 伊場大溝から6点の木簡が出土した。この中には2点の紀年銘木簡（3号木簡：神亀元年〈724年〉、5号木簡：己酉年〈709年〉）が含まれる。伊場遺跡群で多数みられる「サト名+人名」の木簡（4号木簡、6号木簡も可能性あり）が含まれ、鳥居松遺跡が伊場遺跡群と同一空間に立地していることが明確になった。また、糸の賃借を示す3号木簡の内容から、郡家が繊維製品の生産管理に関与していたことが読み取れた。さらに、5号木簡の内容から、8世紀初頭に郡家が賃借関係に関与していた可能性が示された〔第3章4〕。

墨書土器 伊場大溝から19点の墨書土器が出土した。このうち11点が「稲万呂」墨書土器（その断片と推定できるものを含む）であり、従来、伊場遺跡群から出土が知られていた数量（8点）を上回った。合計19点となった「稲万呂」墨書土器の出土範囲は、上流の城山遺跡から、下流の鳥居松遺跡まで1.5kmにわたり、墨書の年代は8世紀後葉から9世紀前葉におよぶ。11点というまとまった出土量から、鳥居松遺跡が、郡司もしくは郡雑任級の有力者とみられる稲万呂の本拠地である可能性が高くなった〔第3章5〕。

円頭大刀 6世紀後半の堆積層から出土した金銀装円頭大刀は国内で類例を求めることが難しい希少品である。自然河川に鞘から抜いた装飾大刀を沈めるという儀礼行為が明らかにされた意義は大きい。また、柄頭と柄間の特徴から、この大刀は朝鮮半島で製作された可能性が高いことが指摘できた。装飾大刀を入手し、自然河川に沈める儀礼を行った人物には、相当の有力者が想定できる。この大刀の出土によって、従来その様相が不明瞭であった6世紀後半段階の当地に、有力者が権勢を誇っていたといえるようになった。6世紀後半における有力者の存在は、後に敷智郡家が置かれることと関連づけることもできる〔第3分冊、円頭大刀編〕。

製塩土器 伊場大溝内の8世紀前葉～中葉の貝塚SS02からは、当地では希少な製塩土器がまとまって出土した。坏部口縁破片数では、114点を数え、伊場遺跡群における出土量としては圧倒的に多い。製塩土器はいずれも渥美半島から搬入されたものと考えられる。出土した製塩土器は坏部ばかりで脚部が全くみられないことから、製塩土器を運搬容器として、固形塩が供給されたと捉えてよい。製塩土器の圧倒的な出土量からは、鳥居松遺跡が物資の集散拠点であったことを読み取ることができる〔第3章6〕。

祭祀具 伊場大溝内のⅦb層（7世紀後葉）、Ⅴ層（8世紀前葉～中葉）、Ⅳb層（8世紀後葉～9世紀前葉）の各層から祭祀具がまとまって出土した。とくに、8世紀後葉～9世紀前葉の資料が充実しており、人面墨書がある人形が2点、人面墨書土器が3点含まれる。伊場遺跡群出土品のうち、人面墨書がみられる資料は、人形が10点、土器が5点を数えることになった。上下3層にわたる祭祀具の資料は、従来曖昧であった木製祭祀具（人形、馬形、舟形）の形態変遷を探る上でも貴重である〔第3章6〕。

鳥居松遺跡の性格 鳥居松遺跡は推定される古代東海道に近接するだけでなく、伊場大溝から潟湖を介して遠州灘へと繋がる海上交通の利便性もよい立地環境にある。製塩土器の大量出土が伝えるように、鳥居松遺跡には、陸上交通と海上交通の結節点として、港湾施設に程近い物資の集散拠点といった性格を読み取ることができる。敷智郡家における有力者「稲万呂」がこの地に拠点を構えたのも、敷智郡家にかかわる流通機能の掌握に主眼があったとみられる〔第3章6〕。

3 今後の展望

鳥居松遺跡の調査では、伊場大溝の下流部分を全面調査し、この地まで敷智郡家の施設が広がっていることが明らかになった。郡家関連施設は上流の城山、梶子、梶子北遺跡から中間の伊場遺跡を挟んで、下流の鳥居松遺跡に至る東西1.5kmの広範囲におよぶことが確実になった。

郡家関連の諸施設の性格についても、伊場大溝の流路を中心に、具体性を帯びるようになっていく。奈良時代の政庁は、唐三彩などの希少品の集中と地形的な安定度から城山遺跡近辺に想定され、梶子北遺跡で検出された掘立柱建物群も平安時代の政庁もしくは館と捉える見方が有力である。これら郡家の中枢施設は伊場大溝の上流域に展開しており、伊場大溝の流路からはやや離れている傾向がある。

いっぽう、伊場大溝を中心に建物群が展開している伊場遺跡は、郡家関連の雑舎群とみられ、豊

3 今後の展望

富な文字資料から厨や栗原駅関連施設が置かれていた可能性が高いと評価されている。さらに、今回調査した鳥居松遺跡は、建物群などの遺構が確認できなかったものの、出土遺物と立地環境から、港湾施設に程近い物資の集散拠点という性格が導き出せた。墨書土器にその存在が確認できる稲万呂は、奈良時代の終り頃から平安時代のはじめ頃にかけて鳥居松遺跡に本拠をおき、敷智郡家内の物資流通にも深くかかわった有力人物とみなせるようになった。

今後は、継続的な調査によって、上述したような郡家諸施設の役割の違いを高い精度で把握していく作業が求められる。また、敷智郡家の近隣にあったと想定されている古代東海道の位置についても検討する必要がある。伊場遺跡に関連が見出せる栗原駅も、正確な所在地が不明確であり、古代交通路にかかわる課題は多い。

伊場大溝は鳥居松遺跡を南北に貫き、さらに下流に至っている。現在までのところ、鳥居松遺跡2次調査によって確認された地点が伊場大溝の最も下流の部分である。この調査地点においても、古代の貝塚や墨書土器が確認されており、敷智郡家関連施設が展開していることが明らかである。

今後の調査によって、伊場大溝の流路を正確に位置づけると共に、伊場大溝の下流域のどの程度の範囲まで古代の遺構群が展開しているか把握する必要がある。同時に、本書でその存在を強調した潟湖畔における港湾施設の検出にも期待したい。

【謝 辞】

本書の作成にあたり、以下の方々のご協力、ご教示を得た。その名を記して謝意を表したい。

井鍋誉之、大谷宏治、川江秀孝、田村隆太郎、鶴間正昭、早野浩二、土生田純之、平野吾郎、広瀬和雄、松井一明、丸杉俊一郎、向坂鋼二、森泰通

出土遺物観察表

凡 例

出土遺物のうち、木製品以外の遺物は種別にかかわらず pp.198 ～ 218 に示す

木製品については、pp.219 ～ 220 に示す

残存率：％表示、10％単位での切り上げ

反転：「反」は反転して図化したもの

大きさの単位はcm

回転体以外の大きさ表示 器径：長さ 器高：幅 口径：厚み

ケズリ方向は、砂粒の移動方向を示す 右：右回転、左：左回転

色調：『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠

「SD01」は伊場大溝内の各堆積層からの出土であることを示す

木製品処理 含浸：高級アルコール含浸 乾燥：自然乾燥

出土遺物観察表

Fig.	層位	番号	取上番号	遺構	グリット	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備 考
9	VII	1	1807	SD01	A3	須恵器	坏蓋	20	反	12.8		13	灰	TK208、ｸﾞﾘ方向右
9	VII	2	1807	SD01	A3	須恵器	坏蓋	30	反	11.2			灰	TK23、外面自然釉
9	VII	3	1807	SD01	A3	土師器	碗	30	反	12.8		12.6	橙	
9	VII	4	1807	SD01	A3	土師器	碗	40	反	15.4	6.0		浅黄橙	
9	VII	5	1807	SD01	A3	土師器	高坏	20	反	17.2			にぶい橙	
9	VII	6	1807	SD01	A3	土師器	高坏	30					橙	脚頭径 3.3、脚径 8.6
9	VII	7	1807	SD01	A3	土師器	直口壺	10	反			10.2	にぶい橙	頭径 5.7
9	VII	8	1070	SD01	B2	土師器	く字甕	5				17.7	橙	駿東甕
9	VII	9	1807	SD01	A3	土師器	甕	5	反				黄褐	
9	VII	10	1807	SD01	A3	土師器	甕	10	反			15.2	にぶい橙	
13	VII b 混	1	1818	SD01	A2	弥生土器	外反口縁壺	10	反			17.6	灰白	頭径 9.2
13	VII b 混	2	1857	SD01	A2	弥生土器	外反口縁壺	10	反			15.0	にぶい黄橙	
13	VII b 混	3	1046	SD01	B3	弥生土器	外反口縁壺	10				13.0	浅黄橙	頭径 8.8
13	VII b 混	4	1415	SX05	C3	弥生土器	外反口縁壺	10	反			19.0	にぶい黄	
13	VII b 混	5	1338	SX05	C3	弥生土器	外反口縁壺	10	反			14.0	にぶい黄橙	
13	VII b 混	6	1039	SD01	C3	弥生土器	折返口縁壺	10	反			15.8	浅黄橙	頭径 8.6
13	VII b 混	7	1643	SD01	B3	弥生土器	折返口縁壺	10	反			17.0	にぶい黄橙	頭径 8.7
13	VII b 混	8	1858	SD01	A2	弥生土器	複合口縁壺	10	反			15.8	灰白	棒状浮文 2 × 方向不明
13	III 混	9	45	SD01	E3	弥生土器	外反口縁壺	20				14.5	にぶい黄橙	頭径 9.5、無節結節、菊川式
13	VII a 混	10	1686	SD01	C2	弥生土器	折返口縁壺	10	反			21.8	にぶい黄橙	結節縄文、菊川式
13	VII b 混	11	1147	SD01	C2	弥生土器	壺	5					浅黄橙	円形浮文・棒状工具による刺突、南関東系
13	VII b 混	12	493	SD01	B2	弥生土器	壺	95		13.4	10.7	5.5	にぶい橙	
13	VII a 混	13	745	SD01	E3	弥生土器	外反口縁壺	70		13.4	16.7	9.7	にぶい黄橙	頭径 7.8、底径 5.1
13	VII b 混	14	1818	SD01	A2	弥生土器	鉢	10	反	25.0		22.0	橙	
13	VII a 混	15	1841	SD01	D3	弥生土器	高坏	10	反			19.4	浅黄橙	
13	VII b 混	16	1855	SD01	A2	弥生土器	高坏	10	反			24.0	橙	
13	VII a 混	17	691	SD01	C2	弥生土器	高坏	50				22.0	橙	
13	VII b 混	18	1564	SD01	C3	弥生土器	高坏	40					淡橙	脚頭径 4.3、脚径 15.1、ｽﾅｼ3 方向
13	VII b 混	19	1254	SD01	C3	弥生土器	高坏	30					淡橙	脚頭径 4.4、脚径 14.8、ｽﾅｼ3 方向
13	VII b 混	20	1048	SD01	B3	弥生土器	高坏	60					にぶい黄橙	脚頭径 4.5、脚径 11.6
13	VII a 混	21	1928	SD01	D3	弥生土器	高坏	20					にぶい赤橙	脚径 10.4、ｽﾅｼ4 方向
13	VII b 混	22	1950	SD01	A2	弥生土器	高坏	10	反				橙	頭径 2.4、脚径 10.4、ｽﾅｼ3 方向
14	VII b 混	23	624	SD01	B2	弥生土器	小型壺	20	反	10.6		8.8	赤橙	頭径 7.6
14	VII a 混	24	683	SD01	B3	弥生土器	小型壺	80		11.4			橙	頭径 6.3、底径 4.2
14	VII a 混	25	1899	SD01	E3	弥生土器	小型直口鉢	80	反	9.2	8.0		浅黄橙	頭径 6.8、底径 4.6
14	VII a 混	26	1904	SD01	D3	弥生土器	壺蓋	60		5.9	6.2		灰白	
14	VII b 混	27	1330	SX05	C3	弥生土器	小型直口鉢	70		8.3			橙	頭径 7.2、底径 8.0
14	VII b 混	28	1342	SX05	C3	弥生土器	く字甕	5					にぶい黄橙	口縁刺突
14	VII b 混	29	1341	SX05	C3	弥生土器	甕	10	反				灰白	脚頭径 4.2
14	VII b 混	30	1362	SX05	C3	弥生土器	甕	20	反				浅黄橙	脚頭径 4.6、底径 7.2
14	VII b 混	31	640	SD01	B3	弥生土器	受口甕	10	反			18.0	浅黄橙	頭径 15.6、口縁刺突・変形顕著
14	VII b 混	32	991	SD01	B3	弥生土器	受口甕	10	反			20.0	浅黄橙	頭径 17.4、口縁無刺突・ｺﾅﾅ'
14	VII b 混	33	1006	SD01	B3	弥生土器	受口甕	10	反			22.0	灰白	口縁無刺突・ｺﾅﾅ'
14	VII b 混	34	1176	SD01	C3	弥生土器	受口甕	10	反			24.0	にぶい橙	口縁刺突・ｺﾅﾅ'
14	VII b 混	35	991	SD01	B3	弥生土器	S 字甕	10	反			16.0	浅黄	S 字甕 A 類、押引き
14	VII b 混	36	584	SD01	B2	土師器	S 字甕	10	反			15.6	淡黄	S 字甕 B 類
14	VII a 混	37	1261	SD01	D2	土師器	S 字甕	10	反			18.0	にぶい黄橙	S 字甕 B 類
14	VII b 混	38	1563	SD01	C3	土師器	S 字甕	10	反			18.7	灰白	S 字甕 B 類
14	VII b 混	39	1946	SD01	C3	土師器	S 字甕	10	反			13.6	淡橙	S 字甕 C 類
14	IV 混	40	114	SD01	C2	土師器	S 字甕	10	反			14.2	にぶい橙	S 字甕 C 類
14	VII b 混	41	1943	SD01	C3	土師器	S 字甕	10	反			15.1	にぶい黄橙	S 字甕 B 類
14	VII b 混	42	979	SD01	B3	土師器	S 字甕	10	反			14.0	明黄褐	S 字甕 C 類
14	VII b 混	43	446	SD01	B3	土師器	S 字甕	10	反			17.0	浅黄橙	S 字甕 C 類
14	VII b 混	44	452	SD01	A2	土師器	S 字甕	10	反			16.2	灰白	S 字甕 C 類
14	VII b 混	45	539	SD01	B3	土師器	S 字甕	10	反			17.2	浅黄橙	S 字甕 C 類
14	VII b 混	46	482	SD01	B3	土師器	S 字甕	10	反			18.0	褐灰	S 字甕 C 類
14	VII b 混	47	585	SD01	B2	土師器	S 字甕	10	反			19.0	浅黄橙	S 字甕 C 類（新）
14	VII b 混	48	980	SD01	B3	土師器	S 字甕	20					灰黄褐	脚頭径 4.4、底径 9.6
14	VII b 混	49	1052	SD01	B3	石製品	扁平片刃斧			6.1	9.4	2.4		238.5g、赤ﾌﾏｯﾄ
14	VII b 混	50	1857	SD01	A2	青銅器	銅鍬			1.0	5.3	0.4		13.6g、茎段打
19	VII b	1	1374	SX05	C3	須恵器	坏蓋	30		14.0	3.9	14.0	灰	MT15、ｸﾞﾘ方向右
19	VII b	2	1339	SX05	C3	須恵器	坏蓋	5	反	15.0			青灰	
19	VII b	3	1359	SX05	C3	須恵器	坏蓋	10	反	14.2	5.4	13.2	灰白	
19	VII b	4	1345	SX05	C3	須恵器	坏蓋	20	反	14.0			灰白	ｸﾞﾘ方向左
19	VII b	5	1322	SX05	C3	須恵器	坏蓋	10	反	14.0			灰	
19	VII b	6	1335	SX05	C3	須恵器	坏蓋	40		14.0	4.7		灰	ｸﾞﾘ方向右
19	VII b	7	1364	SX05	C3	須恵器	坏蓋	80		13.2	4.3	13.0	黄灰	ｸﾞﾘ方向左
19	VII b	8	1498	SX05	C3	須恵器	坏蓋	50		13.0			灰	ｸﾞﾘ方向左
19	VII b	9	1448	SX05	C3	須恵器	坏蓋	100		14.0	4.3		灰	ｸﾞﾘ方向左
19	VII b	10	1334	SX05	C3	須恵器	坏蓋	70		14.4	3.8		灰	ｸﾞﾘ方向右
19	VII b	11	1389	SX05	C3	須恵器	坏蓋	20	反	13.2			灰	ｸﾞﾘ方向右
19	VII b	12	1418	SX05	C3	須恵器	坏蓋	10	反				灰	
19	VII b	13	467・1408	SX05	C3	須恵器	坏蓋	80		14.3	3.8	14.0	灰	ｸﾞﾘ方向左
19	VII b	14	1351	SX05	C3	須恵器	坏蓋	90		14.0	4.6		灰	ｸﾞﾘ方向左、へ記号
19	VII b	15	1321	SX05	C3	須恵器	坏蓋	10		14.0	4.8		灰	
19	VII b	16	1315	SX05	C3	須恵器	坏蓋	30	反	13.8	3.3		青灰	ｸﾞﾘ方向左
19	VII b	17	1406	SX05	C3	須恵器	坏蓋	30	反	14.0	4.2		灰	ｸﾞﾘ方向左
19	VII b	18	1484	SX05	C3	須恵器	坏身	70	反	15.0	4.6	12.6	灰黄	ｸﾞﾘ方向右
19	VII b	19	1316	SX05	C3	須恵器	坏身	70		15.0	4.4	12.8	灰	ｸﾞﾘ方向左、へ記号
19	VII b	20	1472	SX05	C3	須恵器	坏身	40		17.6	4.4	15.2	灰	ｸﾞﾘ方向右
19	VII b	21	1400	SX05	C3	須恵器	坏身	70	反	16.6	4.0	14.0	灰	底部未調整
19	VII b	22	1470	SX05	C3	須恵器	坏身	70	反	16.2		13.8	灰	ｸﾞﾘ方向右、外面自然釉
19	VII b	23	1372	SX05	C3	須恵器	坏身	10	反	16.0		14.0	灰	
19	VII b	24	1358	SX05	C3	須恵器	坏身	20	反	16.0		13.0	灰	

Fig.	層位	番号	取上番号	遺構	グリット	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備 考
19	VII b	25	1363	SX05	C3	須恵器	坏身	60	反	16.0	4.6	14.6	灰白	ㄏ'リ方向左
19	VII b	26	1360	SX05	C3	須恵器	坏身	50		15.6	4.6	13.0	灰白	ㄏ'リ方向左
19	VII b	27	1324	SX05	C3	須恵器	坏身	30	反	15.6	3.9	13.1	灰	
19	VII b	28	1372	SX05	C3	須恵器	坏身	30	反	15.4	4.1	13.0	灰	
19	VII b	29	1384	SX05	C3	須恵器	坏身	70		15.3	3.8	12.7	灰	ㄏ'リ方向左、ㄏ記号
19	VII b	30	1416	SX05	C3	須恵器	坏身	20	反	15.2		13.0	灰	
19	VII b	31	1493	SX05	C3	須恵器	坏身	30	反	15.2		12.6	灰白	ㄏ'リ方向左
19	VII b	32	1416	SX05	C3	須恵器	坏身	40	反	15.0	4.0	13.0	灰白	ㄏ'リ方向左
19	VII b	33	1340	SX05	C3	須恵器	坏身	10	反	15.0	5.4	13.5	灰白	ㄏ'リ方向左
19	VII b	34	1310	SX05	C3	須恵器	坏身	60		15.0	4.9	13.0	灰	
19	VII b	35	1461	SX05	C3	須恵器	坏身	40	反	15.0		13.0	灰	ㄏ'リ方向左
19	VII b	36	1491	SX05	C3	須恵器	坏身	40		14.8	4.1	12.6	灰白	ㄏ'リ方向左
19	VII b	37	1395	SX05	C3	須恵器	坏身	60		14.4	4.1	11.8	灰	ㄏ'リ方向右
19	VII b	38	1333	SX05	C3	須恵器	坏身	95		14.3	4.0	12.2	灰	ㄏ'リ方向左、自然釉
19	VII b	39	1332	SX05	C3	須恵器	坏身	60		14.3	3.4	11.5	灰	未調整
19	VII b	40	1344	SX05	C3	須恵器	坏身	20	反	14.0			灰赤	
19	VII b	41	1397	SX05	C3	須恵器	坏身	100		13.9	4.5	11.6	灰	ㄏ'リ方向左、ㄏの痕跡
19	VII b	42	1313	SX05	C3	須恵器	坏身	5	反	14.0	3.4	12.1	灰	ㄏ'リ方向右
19	VII b	43	1493	SX05	C3	須恵器	坏身	40	反	13.6	4.5	11.5	灰	ㄏ'リ方向左、ㄏ記号、
19	VII b	44	1413	SX05	C3	須恵器	坏身	10	反	13.2		11.4	黒	自然釉
19	VII b	45	1318	SX05	C3	須恵器	高坏蓋	10	反	15.0	3.6		灰	ㄏ'リ方向左、摘み径 3.4
19	VII b	46	1493	SX05	C3	須恵器	無蓋高坏	40	反	12.6			暗灰	スカシ切り込み痕
19	VII b	47	1411	SX05	C3	須恵器	無蓋高坏	40		11.9	12.8		暗灰	脚径 11.8、スカシ 2 段 3 方向、全面自然釉
19	VII b	48	1412	SX05	C3	須恵器	鉢	30	反				灰	陶白
19	VII b	49	1474	SX05	C3	須恵器	壺	5					灰	
20	VII b	50	1311	SX05	C3	土師器	碗	80		13.3	4.8		橙	
20	VII b	51	1496	SX05	C3	土師器	碗	80		16.2	5.1		明赤褐	全面赤彩
20	VII b	52	1317	SX05	C3	土師器	碗	50	反	10.0			にぶい黄橙	未調整
20	VII b	53	1357	SX05	C3	土師器	碗	50	反	14.4	5.3		にぶい黄橙	底径 5.0
20	VII b	54	1471	SX05	C3	土師器	碗	50		13.0	5.5		浅黄橙	
20	VII b	55	1469	SX05	C3	土師器	鉢	70		19.6	11.3		黄褐	底径 6.4
20	VII b	56	1312	SX05	C3	土師器	把手付鉢	40	反	15.3	8.0		橙	木葉痕
20	VII b	57	1502	SX05	C3	土師器	碗形	30		6.4			にぶい橙	
20	VII b	58	1548	SX05	C3	土師器	高坏	50	反	15.6	10.5		橙	脚頭径 2.8、脚径 8.6
20	VII b	59	1503	SX05	B3	土師器	有稜坏部高坏	70		16.6	11.0		橙	脚頭径 3.6、脚径 10.4
20	VII b	60	1481	SX05	C3	土師器	高坏	20	反	15.6			にぶい赤褐	
20	VII b	61	1343	SX05	C3	土師器	高坏	20					浅黄橙	脚径 8.8、外面赤彩
20	VII b	62	1484	SX05	C3	土師器	高坏	50					にぶい黄橙	脚頭径 3.3、脚径 9.2
20	VII b	63	1503	SX05	C3	土師器	高坏	40					にぶい黄橙	脚頭径 3.5
20	VII b	64	1494	SX05	C3	土師器	高坏	40					橙	脚頭径 3.2、脚径 9.6
20	VII b	65	1329	SX05	C3	土師器	高坏	20					にぶい黄橙	脚頭径 2.9、脚径 10.0
20	VII b	66	1501	SX05	C3	土師器	高坏	40					にぶい橙	脚頭径 4.1、脚径 10.6
20	VII b	67	1337	SX05	C3	土師器	高坏	30					浅黄	脚頭径 4.9、脚径 10.8
20	VII b	68	1391	SX05	C3	土師器	長脚高坏	10	反			12.0	にぶい橙	
20	VII b	69	1499	SX05	C3	土師器	長脚高坏	10	反			15.0	黄褐	
20	VII b	70	1494	SX05	C3	土師器	長脚高坏	10				16.0	にぶい黄橙	
20	VII b	71	1371	SX05	C3	土師器	長脚高坏	30	反				灰黄	脚頭径 3.6
20	VII b	72	1356	SX05	C3	土師器	長脚高坏	20					灰白	脚頭径 4.4
20	VII b	73	1349	SX05	C3	土師器	鉢形坏部高坏	50	反	12.0	9.0		淡橙	脚頭径 4.0、脚径 8.2、赤彩
20	VII b	74	1494	SX05	C3	土師器	鉢形坏部高坏	60	反	14.5	8.6		橙	脚頭径 5.1、脚径 9.4
20	VII b	75	1494	SX05	C3	土師器	鉢形坏部高坏	5	反	14.6			明赤褐	全面赤彩
20	VII b	76	1480	SX05	C3	土師器	鉢形坏部高坏	40					浅黄橙	脚頭径 5.6
20	VII b	77	1353	SX05	C3	土師器	鉢形坏部高坏	30					にぶい橙	脚頭径 4.2、脚径 8.8、赤彩
20	VII b	78	1350	SX05	C3	土師器	鉢形坏部高坏	20	反				にぶい橙	脚径 9.2
20	VII b	79	1508	SX05	C3	土師器	鉢形坏部高坏	50					にぶい橙	脚頭径 4.1、脚径 9.8
20	VII b	80	1464	SX05	C3	土師器	外反口縁壺	70		33.4			黄褐	頸径 16.0
21	VII b	81	1378	SX05	C3	土師器	壺	10	反			11.3	明黄褐	頸径 10.0、外面煤付着、宇田壺
21	VII b	82	1373	SX05	C3	土師器	壺	10	反			14.0	灰黄	頸径 10.8、外面煤付着
21	VII b	83	1352	SX05	C3	土師器	壺	40	反	15.6		14.8	黄橙	頸径 13.0、外面煤付着
21	VII b	84	1390	SX05	C3	土師器	壺	10	反			15.0	にぶい橙	頸径 13.1
21	VII b	85	1376	SX05	C3	土師器	壺	10	反			16.2	にぶい黄橙	頸径 13.2、外面煤付着
21	VII b	86	1319	SX05	C3	土師器	壺	5	反			15.0	黄褐	頸径 12.2
21	VII b	87	1379	SX05	C3	土師器	壺	10	反			16.0	にぶい黄橙	頸径 13.0
21	VII b	88	1394	SX05	C3	土師器	壺	20	反			16.4	にぶい橙	頸径 14.0、外面煤付着
21	VII b	89	1417	SX05	C3	土師器	壺	5				16.8	にぶい黄橙	頸径 15.0
21	VII b	90	1396	SX05	C3	土師器	壺	20	反			17.0	にぶい黄橙	頸径 14.8、外面煤付着
21	VII b	91	1354	SX05	C3	土師器	壺	10	反			17.0	浅黄橙	頸径 14.4、外面煤付着
21	VII b	92	1348	SX05	C3	土師器	壺	10	反			18.0	灰黄	頸径 14.4
21	VII b	93	1405	SX05	C3	土師器	壺	10	反			18.0	にぶい橙	頸径 14.6
21	VII b	94	1375	SX05	C3	土師器	壺	50	反	21.0		18.2	浅黄橙	頸径 15.4、外面煤付着
21	VII b	95	1491	SX05	C3	土師器	壺	10	反	18.2		15.2	橙	頸径 13.7
21	VII b	96	1367	SX05	C3	土師器	壺	5	反			18.4	灰黄	頸径 16.4
21	VII b	97	1404	SX05	C3	土師器	壺	10	反			19.0	橙	頸径 15.3
21	VII b	98	1382	SX05	C3	土師器	壺	10	反			19.2	にぶい黄橙	頸径 15.6
21	VII b	99	1355	SX05	C3	土師器	壺	10	反			19.4	灰黄	頸径 15.9
21	VII b	100	1347	SX05	C3	土師器	壺	20	反			19.4	浅黄橙	頸径 14.8
21	VII b	101	1393	SX05	C3	土師器	壺	10	反			20.0	橙	頸径 18.4、外面煤付着
21	VII b	102	1486	SX05	C3	土師器	壺	40	反			20.2	黄褐、橙	頸径 16.3、外面煤付着
21	VII b	103	1516	SX05	C3	土師器	壺	20	反	22.4		21.3	にぶい橙	頸径 17.2
22	VII b	104	1383	SX05	C3	土師器	壺	20	反			28.0	淡黄	頸径 25.0
22	VII b	105	1365	SX05	C3	土師器	壺	10	反			30.0	浅黄橙	頸径 26.3
22	VII b	106	1361	SX05	C3	土師器	壺	10					浅黄橙	煤付着
22	VII b	107	1514	SX05	C3	土師器	壺	20					にぶい褐	
22	VII b	108	1368	SX05	C3	土師器	壺	10	反				にぶい黄橙	底径 13.0

出土遺物観察表

Fig.	層位	番号	取上番号	遺構	グリット	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備 考
22	VII b	109	1461	SX05	C3	土師器	大型鉢	30		47.6			にぶい褐	外面煤付着
22	VII b	110	1346	SX05	C3	土師器	甔	10	反	23.0			黄橙	
22	VII b	111	1336	SX05	C3	土師器	甔	5	反	20.0			にぶい橙	
22	VII b	112	1394	SX05	C3	土師器	甔	5	反				にぶい橙	底径 9.4
22	VII b	113	1402	SX05	C3	土師器	甔	5					橙	
22	VII b	114	1414	SX05	C3	土師器	甔	5					にぶい黄橙	
22	VII b	115	1492・1499	SX05	C3	土製品	轆羽口						黄橙	外径 6.4、内径 2.20
22	VII b	116	1486	SX05	C3	土製品	轆羽口						黄橙	
22	VII b	117	1507	SX05	C3	鉄製品	鉄滓						灰	9.3g
22	VII b	118	1481	SX05	C3	鉄製品	鉄滓						灰	15.5g、流動滓
22	VII b	119	1462	SX05	C3	鉄製品	鉄滓						灰	7.0g
22	VII b	120	1459	SX05	C3	石製品	砥石			7.6	9.3	2.7		228.3g、凝灰岩
22	VII b	121	1489	SX05	C3	石製品	砥石			12.3	6.3	4.2		324.9g、凝灰岩
23	VII b	123	1892	SD01	A3	須恵器	坏蓋	40	反	12.4	5.3	12.0	灰	TK208、ㄻ'リ方向右
23	VII b	124	1853	SD01	A2	須恵器	坏蓋	60	反	12.8	4.6		灰	TK23、外面自然釉、内面赤灰色
23	VII b	125	1950	SD01	A2	須恵器	坏蓋	40	反	12.0	4.6		灰	TK47、外面自然釉
23	VII b	126	1637	SD01	B2	須恵器	坏蓋	30	反	11.4			灰	TK47、ㄻ'リ方向右、自然釉
23	VII b	127	1032	SD01	B3	須恵器	坏蓋	50	反	12.0	5.3		灰	TK47、ㄻ'リ方向左
23	VII b	128	1685	SD01	B3	須恵器	坏蓋	30	反	12.4			黄灰	H11、尾張系、ㄻ'リ方向左
23	VII b	129	541	SD01	A2	須恵器	坏蓋	40	反	13.2	4.9	12.6	灰	MT15、ㄻ'リ方向右
23	VII b	130	1037	SD01	C3	須恵器	坏蓋	40	反	13.6			暗灰	MT15、ㄻ'リ方向左
23	VII b	131	999	SD01	B3	須恵器	坏蓋	40		15.2	5.6		灰	MT15、ㄻ'リ方向右
23	VII b	132	1043	SD01	B3	須恵器	坏蓋	40	反	14.6			灰	MT15、湖西峠場窯、ㄻ'リ方向右
23	VII b	133	444	SD01	A2	須恵器	坏蓋	20	反	15.0			灰	MT15、ㄻ'リ方向左
23	VII b	134	1858	SD01	A2	須恵器	坏蓋	40	反	13.0			灰	MT15、ㄻ'リ方向左
23	VII b	135	717	SD01	B3	須恵器	坏蓋	30	反	16.4			灰	尾張系、ㄻ'リ方向右
23	VII b	136	503・1628	SD01	A2・B2	須恵器	坏蓋	40	反	15.2			灰	ㄻ'リ方向左
23	VII b	137	1197	SD01	C3	須恵器	坏蓋	90		15.5	3.6		灰褐	
23	VII b	138	1545	SD01	B3	須恵器	坏蓋	10	反	15.0			灰白	尾張系
23	VII b	139	1524	SD01	B3	須恵器	坏蓋	40	反	15.0			灰白	ㄻ'リ方向右
23	VII b	140	519	SD01	A2	須恵器	坏蓋	60		14.8	5.2		灰白	
23	VII b	141	610	SD01	B2	須恵器	坏蓋	90		14.2	4.1		灰	ㄻ'リ方向右
23	VII b	142	1204	SD01	C3	須恵器	坏蓋	30	反	14.3			灰	ㄻ'リ方向右
23	VII b	143	1215	SD01	B3	須恵器	坏蓋	40	反	14.2	3.6	14.0	灰白	
23	VII b	144	662	SD01	B3	須恵器	坏蓋	20	反	14.0	4.9		灰	ㄻ'リ方向左
23	VII b	145	950	SD01	B3	須恵器	坏蓋	20	反	14.0	4.4		灰白	
23	VII b	146	568	SD01	B2	須恵器	坏蓋	50	反	14.0	4.3		灰	ㄻ'リ方向右
23	VII b	147	468	SD01	B2	須恵器	坏蓋	80		13.6	3.7		灰	ㄻ'リ方向右
23	VII b	148	1526	SD01	B3	須恵器	坏蓋	80		13.4	4.6		灰白	ㄻ'リ方向右
23	VII b	149	465・1950	SD01	A3・A2	須恵器	坏蓋	60		13.4	4.3		灰褐	ㄻ'リ方向右
23	VII b	150	431	SD01	D3	須恵器	坏蓋	30	反	13.0		12.5	灰	
23	VII b	151	1902	SD01	C2	須恵器	坏蓋	80		12.4	4.7		褐灰	ㄻ'リ方向右
23	VII b	152	566	SD01	B2	須恵器	坏蓋	80		13.0	3.5		灰	ㄻ'リ方向右
23	VII b	153	1212	SD01	C3	須恵器	坏蓋	50	反	13.2	4.2		明灰	ㄻ'リ方向右
23	VII b	154	1532	SD01	C3	須恵器	坏蓋	60		14.7	4.1		暗灰	ㄻ'リ方向左
23	VII b	155	1006	SD01	B3	須恵器	坏蓋	20	反	15.2	4.6		黄灰	ㄻ'リ方向左
23	VII b	156	586	SD01	B2	須恵器	坏蓋	70	反	15.6	6.0		にぶい橙	ㄻ'リ方向左
23	VII b	157	541	SD01	A2	須恵器	坏蓋	60		16.0	4.5		灰	ㄻ'リ方向左
23	VII b	158	562	SD01	A2	須恵器	坏蓋	40	反	14.4			灰	
23	VII b	159	1187	SD01	C3	須恵器	坏蓋	30	反	13.5	4.3		灰	ㄻ'リ方向左
23	VII b	160	1950・619	SD01	A2・B2	須恵器	坏蓋	80		14.2	3.5		灰	ㄻ'リ方向左、ㄻ記号
23	VII b	161	1546	SD01	B3	須恵器	坏蓋	40	反	14.8	3.8		灰白	ㄻ'リ方向右
23	VII b	162	1546	SD01	B3	須恵器	坏蓋	30	反	16.0	4.4		灰白	ㄻ'リ方向左
23	VII b	163	576	SD01	B2	須恵器	坏蓋	60		13.2	3.7		灰	ㄻ'リ方向左
23	VII b	164	1548	SD01	B3	須恵器	坏蓋	80		13.2	4.2		灰	ㄻ'リ方向左
23	VII b	165	431	SD01	D3	須恵器	坏蓋	70	反	13.3	3.6		灰	ㄻ'リ方向左、ゆがみ大
23	VII b	166	549	SD01	B2	須恵器	坏蓋	40	反	13.5	5.1		灰	上部未調整
23	VII b	167	518	SD01	A2	須恵器	坏蓋	90		13.8	3.8		灰	ㄻ'リ方向左
23	VII b	168	1210	SD01	C3	須恵器	坏蓋	40	反	13.9	4.5		灰	ㄻ'リ方向右、上部未調整、焼ぶくれ
23	VII b	169	619	SD01	B2	須恵器	坏蓋	60	反	13.9	3.8		灰	ㄻ'リ方向左
23	VII b	170	1069	SD01	B2	須恵器	坏蓋	25	反	14.0	4.6		灰	ㄻ'リ方向左
23	VII b	171	303	SD01	B3	須恵器	坏蓋	20	反	14.0	4.2		灰	ㄻ'リ方向左
23	VII b	172	542	SD01	B2	須恵器	坏蓋	30	反	14.0	3.7		灰	ㄻ'リ方向左
23	VII b	173	462	SD01	A3	須恵器	坏蓋	40	反	14.4	4.7		灰白	ㄻ'リ方向左
23	VII b	174	1699	SD01	B2	須恵器	坏蓋	60		14.6	4.7		灰	ㄻ'リ方向右
24	VII b	175	602	SD01	B3	須恵器	坏身	50	反	13.8	5.0	12.0	赤灰	TK208、ㄻ'リ方向右
24	VII b	176	1808	SD01	A3	須恵器	坏身	30	反	12.0	4.4	10.4	暗灰	TK208～TK23、ㄻ'リ方向右
24	VII b	177	685	SD01	B3	須恵器	坏身	20	反	12.6		11.2	灰	TK47～MT15、ㄻ'リ方向左
24	VII b	178	718	SD01	C3	須恵器	坏身	40	反	13.6	4.5	11.6	灰白	TK47～MT15、ㄻ'リ方向右
24	VII b	179	735	SD01	C3	須恵器	坏身	10	反	14.0		12.4	灰	TK47～MT15、ㄻ'リ方向左
24	VII b	180	1622	SD01	B2	須恵器	坏身	30	反	13.0	3.7	11.2	黒	MT15、衛門坂窯
24	VII b	181	592	SD01	B2	須恵器	坏身	10	反	14.6		12.0	灰白	MT15、ㄻ'リ方向左
24	VII b	182	526	SD01	B3	須恵器	坏身	20	反	14.0		12.0	灰	ㄻ'リ方向右
24	VII b	183	998	SD01	B3	須恵器	坏身	20	反	13.0	4.4	11.0	灰	ㄻ'リ方向右
24	VII b	184	1096	SD01	C3	須恵器	坏身	40	反	13.6		11.5	暗灰	ㄻ'リ方向右
24	VII b	185	1646	SD01	B3	須恵器	坏身	50	反	14.0		12.2	灰褐	ㄻ'リ方向右
24	VII b	186	1263	SD01	D2	須恵器	坏身	30	反	14.5		11.1	灰色	尾張系、ㄻ'リ方向右
24	VII b	187	1633	SD01	B2	須恵器	坏身	40	反	13.9		11.4	灰	ㄻ'リ方向右
24	VII b	188	630	SD01	B2	須恵器	坏身	30	反	14.0	4.5	11.4	灰	ㄻ'リ方向右
24	VII b	189	1559	SD01	C3	須恵器	坏身	40	反	14.4	4.7	12.5	灰	ㄻ'リ方向右
24	VII b	190	546	SD01	A2	須恵器	坏身	95		13.4	4.5	10.2	灰	ㄻ'リ方向左
24	VII b	191	1064	SD01	B2	須恵器	坏身	30	反	14.0		11.8	灰	ㄻ'リ方向右
24	VII b	192	1895	SD01	A2	須恵器	坏身	95		14.2	5.2	11.2	黄灰	ㄻ'リ方向右、ㄻ記号
24	VII b	193	498	SD01	B2	須恵器	坏身	90		14.6	4.7	11.4	灰	ㄻ'リ方向右

Fig.	層位	番号	取上番号	遺構	グリット	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備 考
24	VII b	194	355	SD01	B2	須恵器	坏身	50	反	14.6	3.9	12.0	灰	ㄻ'リ方向左
24	VII b	195	585・1068	SD01	B2	須恵器	坏身	60	反	13.4	4.3	11.8	灰	ㄻ'リ方向右
24	VII b	196	1023・1029	SD01	B2	須恵器	坏身	40	反	13.6	4.0	11.2	灰	ㄻ'リ方向左
24	VII b	197	542	SD01	B2	須恵器	坏身	80		13.8	4.0	11.8	灰	ㄻ'リ方向左
24	VII b	198	1187	SD01	C3	須恵器	坏身	60		13.6	4.1	11.6	暗灰	ㄻ'リ方向右
24	VII b	199	1644	SD01	B3	須恵器	坏身	20	反	14.0	4.1	11.8	灰	尾張系、ㄻ'リ方向左
24	VII b	200	1675	SD01	B3	須恵器	坏身	40	反	14.2	4.3	12.0	灰褐	ㄻ'リ方向左
24	VII b	201	466	SD01	B2	須恵器	坏身	95		14.7	4.1	11.6	灰	ㄻ'リ方向左
24	VII b	202	1221	SD01	B2	須恵器	坏身	40		14.2	4.3	11.9	灰	ㄻ'リ方向左
24	VII b	203	486	SD01	B3	須恵器	坏身	90		14.6	4.4	12.6	灰	ㄻ'リ方向左
24	VII b	204	586	SD01	B2	須恵器	坏身	40	反	14.4	3.7	12.4	灰	ㄻ'リ方向右
24	VII b	205	1530	SD01	B2	須恵器	坏身	100		14.4	2.7	12.2	灰	ㄻ'リ方向左
24	VII b	206	1093	SD01	C2	須恵器	坏身	50	反	14.4	4.2	11.6	灰	ㄻ'リ方向左
24	VII b	207	1025	SD01	B2	須恵器	坏身	70		14.5	4.6	11.8	灰	ㄻ'リ方向左
24	VII b	208	831	SD01	C3	須恵器	坏身	20	反	14.7	4.0	13.1	灰褐	ㄻ'リ方向左
24	VII b	209	1288	SD01	D3	須恵器	坏身	70		14.8	4.5	12.6	灰白	ㄻ'リ方向左
24	VII b	210	1548	SD01	B3	須恵器	坏身	20	反	14.8	4.2	13.0	灰	ㄻ'リ方向左
24	VII b	211	484	SD01	B3	須恵器	坏身	60		15.0	4.8	12.8	灰白	ㄻ'リ方向左
24	VII b	212	431	SD01	D3	須恵器	坏身	50		15.0	3.9	13.8	灰	ㄻ'リ方向右
24	VII b	213	519	SD01	A2	須恵器	坏身	40	反	15.0		12.5	黄灰	ㄻ'リ方向左
24	VII b	214	499	SD01	B3	須恵器	坏身	90		15.2	4.2	13.0	灰	ㄻ'リ方向右
24	VII b	215	1652	SD01	B3	須恵器	坏身	40	反	15.2	4.3	13.0	灰	ㄻ'リ方向左
24	VII b	216	1047	SD01	B2	須恵器	坏身	100		15.2	5.4	13.0	灰	ㄻ'リ方向左
24	VII b	217	1951	SD01	B2	須恵器	坏身	40	反	15.4	3.7	13.2	灰	ㄻ'リ方向左
24	VII b	218	569	SD01	B2	須恵器	坏身	70	反	15.4	4.1	13.2	灰	ㄻ'リ方向左
24	VII b	219	1555	SD01	C3	須恵器	坏身	30	反	15.6	4.9	13.4	暗灰	ㄻ'リ方向左
24	VII b	220	1585	SD01	C3	須恵器	坏身	50	反	15.6	4.6	13.0	暗灰	
24	VII b	221	1149	SD01	C2	須恵器	坏身	40		16.0	5.2	13.3	灰	ㄻ記号、外面リ-グ 釉、重ね焼痕
24	VII b	222	590	SD01	B2	須恵器	坏身	20	反	16.6	4.0	14.2	灰	ㄻ'リ方向左
25	VII b	223	1693	SD01	B3	須恵器	高坏蓋	90		13.6	5.5		灰	揃み径 4.1
25	VII b	224	1275	SD01	C3	須恵器	有蓋高坏	70		12.9	10.4	10.7	暗灰	TK23、脚径 9.3、ｽｶｼ3 方向、ㄻ'リ方向左
25	VII b	225	1697	SD01	A3	須恵器	無蓋高坏	60					灰	TK208、ｽｶｼ3 方向、全面自然釉
25	VII b	226	1885	SD01	B2	須恵器	無蓋高坏	10	反			15.0	灰	自然釉
25	VII b	227	961	SD01	B3	須恵器	高坏	20	反				灰	脚径 5.6、脚径 13.0、ｽｶｼ4 方向
25	VII b	228	1571	SD01	C3	須恵器	高坏	10	反				灰	脚径 12.2、ｽｶｼ4 方向
25	VII b	229	1565	SD01	C3	須恵器	高坏	20					明灰	ｽｶｼ4 方向、内面自然釉
25	VII b	230	1256	SD01	C3	須恵器	高坏	5	反				灰青	脚径 11.0、ｽｶｼ3 方向
25	VII b	231	999	SD01	B3	須恵器	高坏	10	反				暗灰	脚径 10.3、ｽｶｼ3 方向
25	VII b	232	1498	SD01	A3	須恵器	高坏	30	反				灰	脚径 5.3、脚径 10.2
25	VII b	233	1260	SD01	D3	須恵器	有蓋高坏	50	反	13.6	10.5	11.5	灰	脚径 11.0、外面自然釉
25	VII b	234	1955	SD01	C3	須恵器	高坏	70		13.4	8.9		明灰	脚径 9.1、ｽｶｼ4 方向
25	VII b	235	960	SD01	B3	須恵器	高坏	10	反				灰	脚径 12.0、ｽｶｼ3 方向、全面自然釉
25	VII b	236	587	SD01	B2	須恵器	高坏	10	反				灰	脚径 4.4、自然釉、ㄻ'リ方向左
25	VII b	237	431	SD01	D3	須恵器	無蓋高坏	30				9.8	灰	
25	VII b	238	1065	SD01	B2	須恵器	無蓋高坏	40	反	12.4		12.4	灰	脚径 4.8、自然釉、ㄻ'リ方向右
25	VII b	239	956	SD01	B3	須恵器	高坏	10	反				灰白	脚径 9.6
25	VII b	240	563	SD01	A2	須恵器	高坏	30					灰	脚径 4.5、脚径 10.4、自然釉
25	VII b	241	1540	SD01	B3	須恵器	高坏	40	反				灰青	脚径 4.2、脚径 10.4
25	VII b	242	1540	SD01	B3	須恵器	高坏	40	反				灰青	脚径 4.4、脚径 9.8
25	VII b	243	1677	SD01	B3	須恵器	無蓋高坏	10	反			15.0	明灰	
25	VII b	244	1534	SD01	A3	須恵器	無蓋高坏	20	反			16.6	暗灰	自然釉
25	VII b	245	1267	SD01	C2	須恵器	高坏	20					灰	脚径 3.7、脚径 10.4
25	VII b	246	1281	SD01	D3	須恵器	無蓋高坏	40	反	14.0	6.4		灰	脚径 4.2、脚径 8.6
25	VII b	247	1555	SD01	C3	須恵器	広口壺	10	反			20.6	暗灰	頸径 13.3
25	VII b	248	1552	SD01	B3	須恵器	広口壺	10	反			17.3	明灰	
25	VII b	249	1003	SD01	B3	須恵器	広口壺	10	反			13.4	灰	頸径 9.4、ㄻ'リ
25	VII b	250	547	SD01	A2	須恵器	広口壺	5	反			19.0	暗灰	頸径 13.3
25	VII b	251	1500	SD01	C3	須恵器	広口壺	10	反			15.5	灰	
25	VII b	252	1167	SD01	B3	須恵器	広口壺	10	反			18.0	灰	頸径 12.1、自然釉
25	VII b	253	1644	SD01	B3	須恵器	広口壺	10	反			20.0	暗灰	頸径 10.1
25	VII b	254	795	SD01	D3	須恵器	広口壺	100		18.3	18.1	10.4	灰	瓦質焼成、器壁厚い
26	VII b	255	611	SD01	B2	須恵器	壺蓋	100		11.4	3.4	8.2	灰	
26	VII b	256	1285	SD01	D3	須恵器	長頸壺	5	反			7.4	暗褐	頸径 7.0
26	VII b	257	956	SD01	B3	須恵器	長頸壺	10	反			8.0	灰	頸径 7.1
26	VII b	258	625	SD01	B2	須恵器	長頸壺	10	反			11.0	灰	ㄻ'リ
26	VII b	259	943	SD01	B3	須恵器	長頸壺	10	反			11.0	灰褐	自然釉
26	VII b	260	1445・1302	SD01	C3	須恵器	長頸壺	80		13.0		9.9	暗灰	頸径 8.7、ㄻ'リ、脚付、ㄻ'リ方向左
26	VII b	261	618	SD01	B2	須恵器	長頸壺	70	反	14.0	14.5	10.6	灰白	頸径 7.8、ㄻ'リ方向左
26	VII b	262	1024	SD01	B2	須恵器	長頸壺	10	反	14.0			灰	頸径 7.0
26	VII b	263	1023	SD01	B2	須恵器	長頸壺	20	反	14.0			灰	ㄻ'リ方向右
26	VII b	264	1094	SD01	C3	須恵器	短頸壺	90		9.0	5.0	8.4	暗灰	頸径 8.0、手持ちㄻ'リ
26	VII b	265	1063	SD01	B2	須恵器	短頸壺	10	反	10.8		10.0	灰	頸径 9.6
26	VII b	266	1694	SD01	B3	須恵器	短頸壺	40	反	11.5			暗灰	頸径 8.4、ㄻ'リ方向右
26	VII b	267	1173	SD01	C3	須恵器	短頸壺	10	反	13.1		11.1	暗灰	頸径 10.7
26	VII b	268	457	SD01	A3	須恵器	短頸壺	20	反	14.5		9.9	灰白	頸径 9.6
26	VII b	269	1891	SD01	B2	須恵器	ハツ	60	反				灰	頸径 5.4
26	VII b	270	629	SD01	B2	須恵器	ハツ	40					灰	頸径 5.0、ㄻ'リ方向右
26	VII b	271	1872	SD01	B2	須恵器	ハツ	10	反	15.0			灰	自然釉
26	VII b	272	1176	SD01	C3	須恵器	ハツ	30	反	14.0			暗灰	
26	VII b	273	915	SD01	B2	須恵器	ハツ	10	反	15.0			灰	自然釉
26	VII b	274	954	SD01	B3	須恵器	ハツ	10	反	14.2			灰白	
26	VII b	275	227	SD01	A2	須恵器	提瓶	30		21.6			灰	外面自然釉顯著
26	VII b	276	768	SD01	D2	須恵器	提瓶	20				6.4	灰	
26	VII b	277	1223	SD01	C3	須恵器	横瓶	60				8.9	暗灰	頸径 6.2、ㄻ'リ、ㄻ'リ

Fig.	層位	番号	取上番号	遺構	グリット	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備 考
26	Ⅶb	278	1646	SD01	B3	須恵器	蓋	10	反	8.4			黄灰	小型品須恵器、装飾須恵器？
26	Ⅶb	279	505	SD01	B2	須恵器	把手付碗	10	反				灰	自然釉
26	Ⅶb	280	482	SD01	B3	須恵器	脚台	10	反				灰	器台ないし脚付盥脚
27	Ⅶb	281	1007	SD01	B3	須恵器	壺	30				42.9	灰	頸径 30.6
27	Ⅶb	282	1885	SD01	B2	須恵器	壺	10	反			36.2	灰	TK208、描描き後波状文
27	Ⅶb	283	624	SD01	B2	須恵器	壺	10	反			33.1	灰	描描き後波状文
27	Ⅶb	284	1002	SD01	B3	須恵器	壺	10	反			40.0	灰明	
27	Ⅶb	285	1671	SD01	A3	須恵器	壺	5				38.8	暗灰	
27	Ⅶb	286	508・531	SD01	A2・B2	須恵器	壺	5	反			38.0	暗灰	口縁外面自然釉、内面灰
27	Ⅶb	287	666	SD01	B3	須恵器	壺	5	反			36.0	暗青灰	口縁内面が*
27	Ⅶb	288	1676	SD01	B3	須恵器	壺	10	反			21.4	暗灰	
27	Ⅶb	289	457	SD01	A3	須恵器	壺	5	反			22.6	灰	
27	Ⅶb	290	1024	SD01	B2	須恵器	壺	10	反			24.0	灰	頸径 19.0
27	Ⅶb	291	1041	SD01	B3	須恵器	壺	10	反			22.8	暗灰	頸径 17.5
27	Ⅶb	292	1652	SD01	B3	須恵器	壺	10	反			17.6	暗灰	頸径 15.2、*付後が*
27	Ⅶb	293	1950	SD01	A2	須恵器	壺	5	反			24.2	灰	
28	Ⅶb	294	1673	SD01	A3	土師器	内甕坏	30	反	13.2	3.8	12.8	にぶい橙	底部静止が*リ
28	Ⅶb	295	530	SD01	A2	土師器	内甕坏	40	反	12.0	5.2	11.2	橙	
28	Ⅶb	296	550・544	SD01	B2	土師器	内甕坏	30	反	12.0	4.2	11.0	赤橙	
28	Ⅶb	297	1675	SD01	B3	土師器	内甕坏	20		12.0	5.7		にぶい橙	
28	Ⅶb	298	463	SD01	B2	土師器	内甕坏	30	反	12.4	4.2	11.6	浅黄橙	
28	Ⅶb	299	1890	SD01	B2	土師器	内甕坏	100		12.4	5.1	12.0	明赤褐	
28	Ⅶb	300	1676	SD01	B3	土師器	内甕坏	30	反	12.6			橙	
28	Ⅶb	301	982	SD01	B3	土師器	内甕坏	80		12.7	5.8	12.2	橙	
28	Ⅶb	302	1696	SD01	B3	土師器	内甕坏	40		13.0	5.6	12.2	にぶい橙	
28	Ⅶb	303	1677	SD01	B3	土師器	内甕坏	30	反	13.0		11.7	橙	
28	Ⅶb	304	983	SD01	B3	土師器	内甕坏	20	反	13.4			橙	
28	Ⅶb	305	1045	SD01	B3	土師器	内甕坏	90		13.4	4.8		橙	
28	Ⅶb	306	1257	SD01	C3	土師器	内甕坏	20	反	13.6	4.9	13.0	淡橙	木葉痕、駿河？
28	Ⅶb	307	642	SD01	B3	土師器	内甕坏	20	反	13.6			橙	
28	Ⅶb	308	948	SD01	B3	土師器	内甕坏	20		13.6	5.7		橙	口縁部煤付着
28	Ⅶb	309	546	SD01	A2	土師器	内甕坏	30	反	13.8			橙	
28	Ⅶb	310	1672	SD01	A3	土師器	内甕坏	40	反	14.0	4.6	13.6	橙	全面煤付着
28	Ⅶb	311	1830	SD01	A3	土師器	内甕坏	30	反	14.0		13.6	にぶい橙	
28	Ⅶb	312	1543	SD01	B3	土師器	内甕坏	40		14.0	4.0		橙	

Fig.	層位	番号	取上番号	遺構	グリット	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備考
29	VII b	362	511	SD01	A2	土師器	有稜坏部高坏	5	反			17.8	灰白	
30	VII b	363	1035	SD01	B3	土師器	有稜坏部高坏	70					脚頭径 3.2、脚径 9.0	
30	VII b	364	616	SD01	B2	土師器	有稜坏部高坏	30	反				明赤褐	脚頭径 3.2、脚径 10.4
30	VII b	365	607	SD01	B3	土師器	有稜坏部高坏	50	反				浅黄橙	脚頭径 3.6、脚径 10.6
30	VII b	366	1034	SD01	B3	土師器	有稜坏部高坏	60					にぶい黄橙	脚頭径 3.2
30	VII b	367	1946	SD01	C3	土師器	有稜坏部高坏	40					淡橙	脚頭径 2.7、脚径 7.6
30	VII b	368	1832	SD01	A3	土師器	有稜坏部高坏	40					橙	脚頭径 2.6、脚径 8.4
30	VII b	369	1583	SD01	C3	土師器	有稜坏部高坏	40					橙	脚頭径 3.1、脚径 8.6
30	VII b	370	1834	SD01	A3	土師器	有稜坏部高坏	40					にぶい黄橙	脚頭径 4.0、脚径 8.6
30	VII b	371	1861	SD01	A2	土師器	有稜坏部高坏	20					にぶい橙	脚頭径 2.5、脚径 8.8
30	VII b	372	1819	SD01	A2	土師器	有稜坏部高坏	30					橙	脚頭径 2.8、脚径 9.0
30	VII b	373	1004	SD01	B3	土師器	有稜坏部高坏	30					浅黄橙	脚径 9.0
30	VII b	374	608	SD01	A3	土師器	有稜坏部高坏	50					浅黄橙	脚径 9.1
30	VII b	375	607	SD01	B3	土師器	有稜坏部高坏	30					浅黄橙	脚頭径 3.4、脚径 9.2
30	VII b	376	948	SD01	B3	土師器	有稜坏部高坏	30					浅黄橙	脚頭径 4.0、脚径 9.2
30	VII b	377	555	SD01	B2	土師器	有稜坏部高坏	40					にぶい橙	脚頭径 2.5、脚径 9.4
30	VII b	378	517	SD01	B3	土師器	有稜坏部高坏	30					にぶい橙	脚頭径 3.6、脚径 9.4
30	VII b	379	1677	SD01	B3	土師器	有稜坏部高坏	40					橙	脚頭径 3.2、脚径 9.4
30	VII b	380	637	SD01	B3	土師器	有稜坏部高坏	40					浅黄橙	脚頭径 3.2、脚径 9.5
30	VII b	381	1825	SD01	A2	土師器	有稜坏部高坏	30					橙	脚頭径 3.4、脚径 9.6
30	VII b	382	944	SD01	B3	土師器	有稜坏部高坏	20					橙	脚頭径 3.0、脚径 9.6
30	VII b	383	1807	SD01	A3	土師器	有稜坏部高坏	50					橙	脚頭径 3.2、脚径 9.7
30	VII b	384	1235	SD01	D2	土師器	有稜坏部高坏	0					にぶい黄橙	脚頭径 3.2、脚径 9.9
30	VII b	385	1020	SD01	B3	土師器	有稜坏部高坏	30	反				にぶい橙	脚頭径 4.0、脚径 10.6
30	VII b	386	1833	SD01	A3	土師器	有稜坏部高坏	40					にぶい橙	脚頭径 3.6、脚径 10.0
30	VII b	387	544	SD01	B2	土師器	有稜坏部高坏	30	反				にぶい黄	脚頭径 2.9、脚径 10.0
30	VII b	388	1871	SD01	B2	土師器	有稜坏部高坏	40					橙	脚頭径 2.7、脚径 10.0
30	VII b	389	1070	SD01	B2	土師器	有稜坏部高坏	30					にぶい橙	脚頭径 3.2、脚径 10.0
30	VII b	390	991	SD01	B3	土師器	有稜坏部高坏	10					橙	脚頭径 3.2、脚径 10.0
30	VII b	391	1825	SD01	A2	土師器	有稜坏部高坏	20					にぶい橙	脚径 10.5
30	VII b	392	1855	SD01	A2	土師器	有稜坏部高坏	20					にぶい黄橙	脚径 10.3
30	VII b	393	1545	SD01	B3	土師器	有稜坏部高坏	40					橙	脚頭径 4.8、脚径 10.4
30	VII b	394	1620	SD01	B2	土師器	有稜坏部高坏	30					橙	脚頭径 2.8、脚径 10.4
30	VII b	395	1834	SD01	A3	土師器	有稜坏部高坏	40					橙	脚頭径 3.6、脚径 10.4
30	VII b	396	1671	SD01	A3	土師器	有稜坏部高坏	30					橙	脚頭径 3.9、脚径 10.5
30	VII b	397	520	SD01	A2	土師器	有稜坏部高坏	20					にぶい褐	脚頭径 3.6、脚径 10.6
30	VII b	398	1580	SD01	C3	土師器	有稜坏部高坏	40					橙色	脚頭径 3.1、脚径 10.7
30	VII b	399	1685	SD01	B3	土師器	有稜坏部高坏	30					黄橙	脚頭径 3.2、脚径 11.2
30	VII b	400	1028	SD01	B2	土師器	有稜坏部高坏	20					橙	脚頭径 3.5、脚径 11.3
30	VII b	401	1182	SD01	B3	土師器	有稜坏部高坏	30					橙	脚頭径 3.6、脚径 11.6
30	VII b	402	742	SD01	B3	土師器	有稜坏部高坏	30					橙	脚頭径 3.4、脚径 12.1
31	VII b	403	1543	SD01	B3	土師器	有稜坏部高坏	70	反	15.4	10.2		にぶい橙	脚頭径 3.4、脚径 9.0
31	VII b	404	590	SD01	B2	土師器	有稜坏部高坏	40	反	12.4	9.4		にぶい橙	脚頭径 3.4、脚径 8.8
31	VII b	405	1167	SD01	B3	土師器	有稜坏部高坏	20			12.0		橙	
31	VII b	406	1585	SD01	C3	土師器	長脚高坏	10	反	15.0			淡橙	
31	VII b	407	1281	SD01	D3	土師器	長脚高坏	10	反	18.2			浅黄橙	
31	VII b	408	993	SD01	B3	土師器	長脚高坏	10	反	21.0			橙	
31	VII b	409	1950	SD01	A2	土師器	有稜坏部高坏	40					にぶい橙	脚頭径 3.7、脚径 9.0
31	VII b	410	564	SD01	A2	土師器	有稜坏部高坏	20					淡橙	脚頭径 2.9、脚径 9.0
31	VII b	411	1622	SD01	B2	土師器	有稜坏部高坏	10	反				にぶい橙	脚頭径 2.3、脚径 9.2
31	VII b	412	462	SD01	A3	土師器	有稜坏部高坏	50					にぶい橙	脚頭径 3.7、脚径 9.3
31	VII b	413	471	SD01	B2	土師器	有稜坏部高坏	20	反				にぶい橙	脚頭径 3.4、脚径 9.4
31	VII b	414	629	SD01	B2	土師器	有稜坏部高坏	20	反				橙	脚頭径 3.0、脚径 9.5
31	VII b	415	456	SD01	A2	土師器	有稜坏部高坏	20					にぶい橙	脚頭径 3.9、脚径 10.0
31	VII b	416	1658	SD01	B3	土師器	有稜坏部高坏	20					橙	脚頭径 3.8、脚径 11.0
31	VII b	417	460	SD01	A3	土師器	長脚高坏	50					橙	脚頭径 3.3、脚径 10.9
31	VII b	418	481	SD01	B3	土師器	長脚高坏	10					灰白	脚頭径 5.0、脚径 12.6、外面赤彩
31	VII b	419	1260	SD01	D3	土師器	長脚高坏	30	反				黄橙	脚頭径 3.6、脚径 12.4
31	VII b	420	520	SD01	A2	土師器	長脚高坏	20					にぶい橙	脚頭径 2.6、脚径 8.0
31	VII b	421	1078	SD01	B3	土師器	長脚高坏	20					浅黄	脚頭径 3.8、脚径 10.0、太刀共伴
31	VII b	422	540	SD01	B3	土師器	長脚高坏	20					にぶい橙	脚頭径 4.0、脚径 11.4
31	VII b	423	1546	SD01	B3	土師器	長脚高坏	30	反				浅黄橙	脚頭径 4.0、脚径 12.2
31	VII b	424	1523	SD01	C3	土師器	長脚高坏	50					淡橙	脚頭径 3.7、脚径 12.3
31	VII b	425	1692	SD01	B3	土師器	長脚高坏	40					浅黄橙	脚頭径 3.8、脚径 13.8
31	VII b	426	1277	SD01	C3	土師器	長脚高坏	40					にぶい橙	脚頭径 3.5、脚径 13.4
31	VII b	427	1282	SD01	D3	土師器	長脚高坏	20	反				浅黄橙	脚頭径 5.2、脚径 15.6
31	VII b	428	1274	SD01	C3	土師器	長脚高坏	30					橙	脚径 14.0
31	VII b	429	1954	SD01	B2	土師器	長脚高坏	30	反				にぶい橙	脚頭径 4.8
31	VII b	430	538	SD01	B3	土師器	長脚高坏	20	反				灰白	脚頭径 4.0、脚径 16.0
31	VII b	431	601	SD01	B3	土師器	長脚高坏	20					灰白	脚頭径 4.2
31	VII b	432	624	SD01	B2	土師器	長脚高坏	30					橙	脚頭径 5.0
32	VII b	433	1077	SD01	C3	土師器	鉢形坏部高坏	30		13.5	9.1		淡橙	脚頭径 5.0、脚径 9.4
32	VII b	434	938	SD01	B3	土師器	鉢形坏部高坏	60		14.6	8.1		橙	脚頭径 5.2、脚径 9.8
32	VII b	435	1552	SD01	B3	土師器	鉢形坏部高坏	70		15.0	8.6		浅黄橙	脚頭径 4.4、脚径 9.8
32	VII b	436	1541	SD01	B3	土師器	鉢形坏部高坏	40	反				橙	脚頭径 5.2、脚径 9.8
32	VII b	437	456	SD01	A2	土師器	鉢形坏部高坏	10	反	14.2			橙	
32	VII b	438	1944	SD01	C3	土師器	鉢形坏部高坏	20	反	14.5			橙	
32	VII b	439	1545	SD01	B3	土師器	鉢形坏部高坏	50		14.6			にぶい橙	脚頭径 5.0
32	VII b	440	1633	SD01	B3	土師器	鉢形坏部高坏	40	反	15.2			にぶい橙	脚頭径 5.6
32	VII b	441	1281	SD01	D3	土師器	鉢形坏部高坏	20	反	15.2			黄橙	
32	VII b	442	1217	SD01	C3	土師器	鉢形坏部高坏	50		15.5			淡橙	脚頭径 3.8
32	VII b	443	582・507	SD01	B2	土師器	鉢形坏部高坏	20	反	16.0			にぶい橙	
32	VII b	444	565・585	SD01	B2	土師器	鉢形坏部高坏	40	反	13.4	8.2		褐灰	脚径 8.8、全面赤彩（底部除く）
32	VII b	445	617・627	SD01	B2	土師器	鉢形坏部高坏	40	反	13.8	8.2		淡橙	脚頭径 4.9、脚径 9.6

出土遺物観察表

Fig.	層位	番号	取上番号	遺構	グリット	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備考
32	VII b	446	516・582	SD01	B2	土師器	鉢形坏部高坏	60		14.6	9.0		浅黄橙	脚頸径 5.1、脚径 10.2
32	VII b	447	1963	SD01	E3	土師器	鉢形坏部高坏	20	反	13.0			橙	脚頸径 4.4
32	VII b	448	616・823	SD01	B2	土師器	鉢形坏部高坏	60		13.2	8.0		にぶい橙	脚頸径 5.2、脚径 9.6
32	VII b	449	1567	SD01	C3	土師器	鉢形坏部高坏	10	反	14.5			橙	
32	VII b	450	1669	SD01	B2	土師器	鉢形坏部高坏	40					にぶい橙	脚径 8.2
32	VII b	451	1624	SD01	B2	土師器	鉢形坏部高坏	20	反				にぶい橙	脚径 8.6
32	VII b	452	625	SD01	B2	土師器	鉢形坏部高坏	10	反				にぶい褐	脚頸径 4.8、脚径 9.2
32	VII b	453	1683	SD01	B3	土師器	鉢形坏部高坏	40					橙	脚頸径 5.2、脚径 8.8
32	VII b	454	505	SD01	B2	土師器	鉢形坏部高坏	40					淡橙	脚頸径 6.0、脚径 9.2
32	VII b	455	953	SD01	B3	土師器	鉢形坏部高坏	40					橙	脚頸径 4.8、脚径 9.2
32	VII b	456	546	SD01	A2	土師器	鉢形坏部高坏	30	反				橙	脚頸径 4.2、脚径 9.4
32	VII b	457	944	SD01	B3	土師器	鉢形坏部高坏	60	反				浅黄橙	脚頸径 4.4、脚径 9.4
32	VII b	458	586	SD01	B2	土師器	鉢形坏部高坏	10	反				赤褐	脚頸径 4.8、脚径 10.0
32	VII b	459	585	SD01	A2	土師器	鉢形坏部高坏	20			5.7		橙	脚径 10.0
32	VII b	460	636	SD01	B3	土師器	鉢形坏部高坏	30					浅黄橙	脚径 10.6
32	VII b	461	1025	SD01	B2	土師器	鉢形坏部高坏	20	反				淡橙	脚頸径 6.0、脚径 10.8
32	VII b	462	619	SD01	B2	土師器	鉢形坏部高坏	40	反				浅黄橙	脚頸径 5.0、脚径 10.8
32	VII b	463	619	SD01	B2	土師器	鉢形坏部高坏	20	反				淡赤橙	脚頸径 4.6、脚径 11.2
32	VII b	464	541	SD01	A2	土師器	鉢形坏部高坏	40					にぶい黄橙	脚頸径 4.9、脚径 10.3
32	VII b	465	482	SD01	B3	土師器	鉢形坏部高坏	20					にぶい橙	脚頸径 10.2、脚径 11.2
32	VII b	466	1622	SD01	B2	土師器	鉢形坏部高坏	5	反				橙	脚径 17.2
33	VII b	467	975	SD01	B3	土師器	二重口縁壺	10	反			18.0	にぶい橙	頸径 12.4
33	VII b	468	1225	SD01	C2	土師器	二重口縁壺	10				19.0	橙	頸径 13.0
33	VII b	469	945	SD01	B3	土師器	二重口縁壺	10	反			16.0	にぶい橙	頸径 12.8
33	VII b	470	1812	SD01	B3	土師器	二重口縁壺	5	反			17.0	にぶい橙	頸径 14.6
33	VII b	471	1835	SD01	A3	土師器	二重口縁壺	5	反			16.6	浅黄橙	頸径 14.3
33	VII b	472	1672	SD01	A3	土師器	二重口縁壺	10	反			16.6	にぶい黄橙	頸径 13.9
33	VII b	473	547	SD01	A2	土師器	二重口縁壺	5	反			14.3	にぶい橙	
33	VII b	474	534	SD01	A2	土師器	二重口縁壺	20	反			22.0	橙	頸径 17.4
33	VII b	475	1015	SD01	B3	土師器	折返し口縁壺	10	反			15.0	にぶい黄橙	頸径 11.0、外面煤付着
33	VII b	476	1823	SD01	A2	土師器	折返し口縁壺	5	反			16.5	にぶい橙	
33	VII b	477	1676	SD01	B3	土師器	折返し口縁壺	10	反			17.6	にぶい橙	頸径 11.0
33	VII b	478	470	SD01	B2	土師器	折返し口縁壺	10	反			18.4	にぶい黄橙	頸径 14.4
33	VII b	479	1659	SD01	B3	土師器	折返し口縁壺	10	反			19.0	橙	頸径 14.4
33	VII b	480	1681	SD01	B3	土師器	折返し口縁壺	5	反			21.0	橙	
33	VII b	481	1632	SD01	B2	土師器	折返し口縁壺	10	反			23.2	淡橙	頸径 18.0
33	VII b	482	454	SD01	A2	土師器	折返し口縁壺	5	反			21.6	橙	頸径 18.3
33	VII b	483	550	SD01	B2	土師器	広口壺	10	反			17.2	にぶい黄橙	頸径 15.3
33	VII b	484	1879	SD01	B2	土師器	直口壺	90		19.8	25.2	9.2	にぶい橙	頸径 8.3、底径 7.2
33	VII b	485	491	SD01	A3	土師器	長頸壺	80		15.4	7.4	11.4	橙	頸径 6.7、底部ｶﾞﾂ痕
33	VII b	486	643	SD01	B3	土師器	長頸壺	10	反			9.0	橙	
33	VII b	487	539	SD01	B3	土師器	長頸壺	10	反			9.0	にぶい橙	
33	VII b	488	948	SD01	B3	土師器	長頸壺	10	反			9.4	橙	頸径 6.2
33	VII b	489	1525	SD01	C3	土師器	長頸壺	40	反	13.5			淡橙	頸径 6.4
33	VII b	490	1698	SD01	A3	土師器	長頸壺	80		15.0			橙色	頸径 6.8
33	VII b	491	1216	SD01	B3	土師器	長頸壺	70		13.1			橙	頸径 7.7
33	VII b	492	1801・584	SD01	B2	土師器	小型壺	70		6.0			黒	頸径 4.7、底径 2.5
33	VII b	493	1894	SD01	B2	土師器	小型壺	100		7.2	7.4	5.2	にぶい黄橙	頸径 4.9、底径 4.5
34	VII b	494	1447	SD01	C3	土師器	鉢	60		11.0	8.3	9.7	橙	頸径 9.3
34	VII b	495	1671	SD01	A3	土師器	鉢	40	反	14.4		12.8	にぶい黄橙	頸径 11.0
34	VII b	496	992	SD01	B3	土師器	鉢	50		14.6	10.5	14.4	にぶい橙	頸径 13.1、底部煤付着
34	VII b	497	1625	SD01	B2	土師器	鉢	20	反	19.0		18.6	にぶい黄橙	頸径 16.6、煤付着
34	VII b	498	1818	SD01	A2	土師器	鉢	10	反	17.0		14.8	橙	
34	VII b	499	508	SD01	A2	土師器	鉢	20	反	17.0			浅黄橙	
34	VII b	500	529	SD01	A2	土師器	鉢	60	反	12.2	9.8	9.7	にぶい黄橙	
34	VII b	501	1671	SD01	A3	土師器	鉢	50		14.6		13.8	橙	
34	VII b	502	1528	SD01	B3	土師器	鉢	40	反	15.4	9.0	13.6	橙	
34	VII b	503	695	SD01	C2	土師器	鉢	40	反	16.5		13.6	橙	
34	VII b	504	1822	SD01	A2	土師器	鉢	60		17.6	8.9		橙	底部ｶﾞﾂ痕
34	VII b	505	556	SD01	B2	土師器	鉢	10	反	23.2			灰褐	
34	VII b	506	1805	SD01	A2	土師器	鉢	5	反			34.4	灰黄褐	頸径 29.0
34	VII b	507	1486	SD01	C3	土師器	鉢	60		6.5	3.5		にぶい黄橙	底径 3.9
34	VII b	508	1258	SD01	D3	土師器	鉢	50	反	6.5	4.1	5.7	橙	底径 4.2
34	VII b	509	1521	SD01	B3	土師器	鉢	60		10.6	5.0		にぶい橙	底径 4.4
34	VII b	510	944	SD01	B3	土師器	鉢形	70		5.4	5.7	4.2	橙	底径 2.4
34	VII b	511	454	SD01	A2	土師器	鉢形	60	反	7.2	5.6	6.0	灰黄褐	底径 4.0
34	VII b	512	1527	SD01	B3	土師器	鉢形	100		5.9	6.8		暗灰黄	底径 4.3
34	VII b	513	920	SD01	D3	土師器	甌	50	反	20.8	19.0		浅黄橙	底径 11.2
34	VII b	514	1068	SD01	B2	土師器	甌	50	反	21.0			浅黄橙	
34	VII b	515	1672	SD01	A3	土師器	甌	5	反	19.8			にぶい黄橙	
34	VII b	516	512	SD01	B2	土師器	甌	10	反	10.6			にぶい橙	煤付着
34	VII b	517	355	SD01	B2	土師器	甌	10	反	21.0			にぶい橙	
34	VII b	518	1020	SD01	B3	土師器	甌	10	反	22.0			橙	
35	VII b	519	1464	SD01	C3	土師器	甌	20	反	25.8	24.8		にぶい黄橙	外面煤付着
35	VII b	520	1066	SD01	B2	土師器	甌	60	反	29.6			浅黄	底径 15.2
35	VII b	521	1556	SD01	C3	土師器	甌	10	反	23.6			橙	
35	VII b	522	1674	SD01	A3	土師器	甌	5	反	26.0			にぶい橙	
35	VII b	523	1822	SD01	A2	土師器	甌	30	反				にぶい橙	底径 8.6
35	VII b	524	1680	SD01	B3	土師器	甌	10	反				にぶい黄橙	底径 7.7
35	VII b	525	504	SD01	B3	土師器	甌	20	反				にぶい橙	底径 9.2、下部煤付着
35	VII b	526	527	SD01	A2	土師器	甌	10	反				にぶい橙	底径 10.8
35	VII b	527	506	SD01	B2	土師器	甌	10	反				にぶい橙	底径 11.2
35	VII b	528	616	SD01	B2	土師器	甌	10	反				浅黄橙	底径 10.0
35	VII b	529	458	SD01	A3	土師器	甌	5	反				にぶい橙	底径 15.4、煤付着

Fig.	層位	番号	取上番号	遺構	グリット	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備 考
35	Ⅶ b	530	565	SD01	A2	土師器	甗	5	反				にぶい黄橙	底径 17.6
35	Ⅶ b	531	518	SD01	A2	土師器	甗	5	反				暗灰黄、内面黄灰	底径 17.4
35	Ⅶ b	532	1833	SD01	A3	土師器	甗	5					にぶい橙	底径 22.2
36	Ⅶ b	533	1257	SD01	C3	土師器	甗	10	反			15.5	灰白色	頸径 14.0、宇田甗
36	Ⅶ b	534	1541	SD01	B3	土師器	甗	20	反			16.0	明褐黄	頸径 13.6、宇田甗
36	Ⅶ b	535	683・703	SD01	B3	土師器	甗	70	反	13.7	16.8	13.5	にぶい黄橙	脚頸径 4.5、底径 8.8、南関東系？
36	Ⅶ b	536	1036	SD01	B3	土師器	甗	20	反	30.0		21.6	灰白	5C、頸径 18.8、外面煤付着
36	Ⅶ b	537	1832	SD01	A3	土師器	甗	5	反			18.6	橙	頸径 16.2、外面煤付着
36	Ⅶ b	538	523	SD01	A3	土師器	甗	5	反			22.6	にぶい橙	駿河系、頸径 18.6
36	Ⅶ b	539	1492	SD01	C3	土師器	甗	10	反			16.5	にぶい黄橙	頸径 13.2、摘みあげ口縁
36	Ⅶ b	540	1651	SD01	B3	土師器	甗	10	反			16.6	浅黄	頸径 13.8、摘みあげ口縁
36	Ⅶ b	541	2025	SD01	D5	土師器	甗	50		14.8		12.2	橙	頸径 15.8、煤付着
36	Ⅶ b	542	944	SD01	B3	土師器	甗	40	反	12.8		12.6	浅黄橙	頸径 10.4、外面煤付着
36	Ⅶ b	543	531	SD01	B2	土師器	甗	10	反			13.0	にぶい赤褐	頸径 11.7、
36	Ⅶ b	544	524	SD01	A2	土師器	甗	5	反			13.6	にぶい橙	頸径 11.4
36	Ⅶ b	545	1671	SD01	A3	土師器	甗	5	反			13.6	にぶい褐	頸径 12.7、外面煤付着
36	Ⅶ b	546	1026	SD01	B2	土師器	甗	10				14.6	橙	頸径 13.0、外面煤付着
36	Ⅶ b	547	541	SD01	A2	土師器	甗	5	反			15.0	にぶい橙	頸径 12.7、外面煤付着
36	Ⅶ b	548	481	SD01	B3	土師器	甗	0				15.0	浅黄橙	頸径 13.2
36	Ⅶ b	549	454	SD01	A2	土師器	甗	5	反			15.2	灰黄	頸径 13.1、外面煤付着
36	Ⅶ b	550	534	SD01	A2	土師器	甗	10	反			15.2	にぶい黄橙	頸径 13.4、外面煤付着
36	Ⅶ b	551	614	SD01	B2	土師器	甗	10	反			15.2	にぶい黄橙	頸径 13.3
36	Ⅶ b	552	1038	SD01	B3	土師器	甗	30	反	15.6			明褐灰	頸径 14.1、外面煤付着
36	Ⅶ b	553	1672	SD01	A3	土師器	甗	5	反			15.6	にぶい褐	頸径 12.1、外面煤付着
36	Ⅶ b	554	454	SD01	A2	土師器	甗	10	反			16.2	橙	頸径 13.2、外面煤付着
36	Ⅶ b	555	1584	SD01	C3	土師器	甗	20	反			16.5	にぶい黄橙	頸径 13.7、外面煤付着
37	Ⅶ b	556	1879	SD01	B2	土師器	甗	80		23.7	33.1	18.8	暗褐	頸径 15.3
37	Ⅶ b	557	460	SD01	A3	土師器	甗	10	反			16.6	にぶい橙	頸径 14.0
37	Ⅶ b	558	487	SD01	B3	土師器	甗	20	反			16.6	浅黄橙	頸径 14.0、煤付着
37	Ⅶ b	559	634	SD01	A2	土師器	甗	5	反			16.8	にぶい橙	頸径 13.5
37	Ⅶ b	560	1277	SD01	C3	土師器	甗	10	反			17.0	にぶい黄橙	頸径 14.3
37	Ⅶ b	561	628	SD01	B2	土師器	甗	10	反			17.0	にぶい橙	頸径 14.2
37	Ⅶ b	562	998	SD01	B3	土師器	甗	10	反			17.2	浅黄橙	頸径 14.6
37	Ⅶ b	563	1825	SD01	A2	土師器	甗	5	反			17.2	にぶい橙	頸径 15.9
37	Ⅶ b	564	1893	SD01	A2	土師器	甗	20				17.8	灰白	頸径 13.7
37	Ⅶ b	565	1465	SD01	B3	土師器	甗	20	反			17.8	浅黄橙	頸径 14.4
37	Ⅶ b	566	981	SD01	B3	土師器	甗	10	反			18.0	灰黄	頸径 15.6
37	Ⅶ b	567	1175	SD01	C3	土師器	甗	10	反			18.4	淡橙	頸径 17.2、外面煤付着
37	Ⅶ b	568	1209	SD01	C3	土師器	甗	10	反			18.4	にぶい黄橙	頸径 14.4
37	Ⅶ b	569	1947	SD01	C3	土師器	甗	10	反			18.5	黄土	頸径 16.0、外面煤付着
37	Ⅶ b	570	503	SD01	A3	土師器	甗	10	反			19.4	暗褐	頸径 16.8、煤付着
38	Ⅶ b	571	1534	SD01	A3	土師器	甗	10	反			19.0	暗褐	頸径 15.7、口縁外面煤付着
38	Ⅶ b	572	1025	SD01	B2	土師器	甗	10	反			19.0	橙	頸径 16.6、煤付着
38	Ⅶ b	573	619	SD01	B2	土師器	甗	10	反			19.2	にぶい橙	頸径 16.2
38	Ⅶ b	574	1520	SD01	A3	土師器	甗	20	反			19.2	にぶい褐	頸径 16.4
38	Ⅶ b	575	519	SD01	A2	土師器	甗	10	反			19.3	灰黄褐	頸径 16.8、煤付着
38	Ⅶ b	576	534	SD01	A2	土師器	甗	20	反			19.8	にぶい橙	頸径 17.5、煤付着
38	Ⅶ b	577	1042	SD01	B3	土師器	甗	40	反	21.0		20.0	浅黄橙	頸径 17.6
38	Ⅶ b	578	520	SD01	A2	土師器	甗	10	反			20.0	灰黄	頸径 16.8、煤付着
38	Ⅶ b	579	631	SD01	B2	土師器	甗	10	反			20.4	にぶい橙	頸径 18.1、煤付着
38	Ⅶ b	580	1680	SD01	B3	土師器	甗	10	反	22.2		20.6	にぶい黄橙	頸径 17.4
38	Ⅶ b	581	589	SD01	B2	土師器	甗	10	反			20.6	にぶい黄橙	頸径 17.7、煤付着
38	Ⅶ b	582	1665	SD01	B2	土師器	甗	10	反			21.0	橙	頸径 17.0、煤付着
38	Ⅶ b	583	1270	SD01	D3	土師器	甗	10	反			21.6	にぶい黄橙	頸径 20.3
38	Ⅶ b	584	1016	SD01	C3	土師器	甗	10	反			22.2	淡橙	頸径 17.9、外面煤付着
38	Ⅶ b	585	1024	SD01	B2	土師器	甗	10	反			22.8	にぶい黄褐	頸径 18.6
39	Ⅶ b	586	989	SD01	B3	土師器	甗	10	反	24.7		23.0	浅黄橙	頸径 20.0、外面煤付着
39	Ⅶ b	587	953	SD01	B3	土師器	甗	20	反			24.0	灰白	頸径 20.8、外面煤付着
39	Ⅶ b	588	511	SD01	A2	土師器	甗	5	反			24.0	橙	頸径 21.8
39	Ⅶ b	589	2024	SD01	D5	土師器	甗	20	反			24.2	にぶい橙	頸径 22.1、煤付着
39	Ⅶ b	590	1671	SD01	A3	土師器	甗	10	反	24.9			にぶい橙	頸径 23.3、外面煤付着
39	Ⅶ b	591	487	SD01	B3	土師器	甗	40		28.8			灰白	頸径 25.0、外面煤付着
39	Ⅶ b	592	617	SD01	B2	土師器	甗	5	反			28.4	にぶい橙	頸径 24.2
39	Ⅶ b	593	1672	SD01	A3	土師器	甗	5	反			29.6	にぶい橙	頸径 24.7
39	Ⅶ b	594	1537	SD01	B3	土師器	甗	10	反			30.4	浅黄橙	頸径 26.8
39	Ⅶ b	595	1022	SD01	B2	土師器	甗	10	反			31.0	にぶい橙	頸径 29.0、煤付着
39	Ⅶ b	596	1651	SD01	B3	土師器	甗	20	反	32.0		31.0	灰黄	頸径 29.0、外面煤付着
39	Ⅶ b	597	1550	SD01	B3	土師器	甗	20	反			31.8	浅黄橙	頸径 28.6
39	Ⅶ b	598	1020	SD01	B3	土師器	甗	30	反	33.4			にぶい橙	頸径 30.8、外面煤付着
40	Ⅶ b	599	495	SD01	B3	土師器	大型甗	20	反	33.8			灰白	頸径 29.6、外面煤付着
40	Ⅶ b	600	457	SD01	A3	土師器	大型甗	5	反			33.6	にぶい黄橙	頸径 30.1
40	Ⅶ b	601	1064	SD01	B2	土師器	大型甗	5	反			37.2	にぶい橙	頸径 32.6、煤付着
40	Ⅶ b	602	1073・1176	SD01	C2・C3	土師器	大型甗	30				40.0	にぶい橙	頸径 35.3、外面一部が
40	Ⅶ b	603	1622	SD01	B2	土師器	大型甗	10	反			42.0	にぶい黄橙	頸径 39.0、煤付着
40	Ⅶ b	604	555	SD01	B2	土師器	甗	10					浅黄橙	底径 6.4、木葉痕、駿河系？
40	Ⅶ b	605	1691	SD01	B3	土師器	甗	20					橙	底径 6.0
40	Ⅶ b	606	1540	SD01	B3	土師器	甗	20					にぶい褐	底径 10.0、木葉痕、外面煤付着
40	Ⅶ b	607	1665	SD01	B2	土師器	甗	10	反				にぶい黄橙	底径 4.4
41	Ⅶ b	608	640	SD01	B3	土師器	甗	10					灰黄褐	脚頸径 4.0、底径 6.0、底部焼け痕
41	Ⅶ b	609	977	SD01	B3	土師器	甗	10					にぶい黄橙	脚頸径 5.2、底径 7.0、内面焼け痕
41	Ⅶ b	610	540	SD01	B3	土師器	甗	10					橙	脚頸径 4.6、底径 9.1、焼け痕
41	Ⅶ b	611	1563	SD01	C3	土師器	甗	30					にぶい黄橙	脚頸径 4.7、底径 9.5
41	Ⅶ b	612	445	SD01	A2	土師器	甗	20					黄灰	脚頸径 6.2、底径 12.8
41	Ⅶ b	613	1551	SD01	B3	土師器	甗	10					橙	脚頸径 7.5、底径 15.0

出土遺物観察表

Fig.	層位	番号	取上番号	遺構	グリット	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備考
41	VII b	614	1887	SD01	B2	土師器	甕	30					灰褐	脚頭径 5.8、底径 11.2
41	VII b	615	519	SD01	A2	土師器	甕	30					灰黄	脚頭径 6.2、底径 11.3
41	VII b	616	1675	SD01	B3	土師器	甕	20					にぶい褐	脚頭径 5.4、底径 11.6
41	VII b	617	506	SD01	B2	土師器	甕	30					灰黄褐	脚頭径 6.6、底径 13.2
41	VII b	618	1935	SD01	C3	土師器	甕	30					淡橙	脚頭径 7.8、底径 14.2
41	VII b	619	832	SD01	C3	土師器	甕	30					黄土	脚頭径 7.4、底径 14.3
41	VII b	620	1632	SD01	B2	土師器	甕	30					にぶい橙	脚頭径 4.0、底径 8.8
41	VII b	621	567	SD01	B2	土師器	甕	30					灰黄褐	脚頭径 7.2、底径 13.9
41	VII b	622	521	SD01	A2	土師器	甕	30					灰黄褐	脚頭径 5.7、底径 11.2
41	VII b	623	471	SD01	B2	土師器	甕	30	反				にぶい黄橙	脚頭径 5.3、底径 14.2
41	VII b	624	1251	SD01	C3	土師器	甕	40					にぶい黄橙	脚頭径 7.3、底径 15.0
41	VII b	625	1548	SD01	B3	土師器	甕	20					にぶい黄橙	脚頭径 9.5、底径 14.1
41	VII b	626	1657	SD01	B3	土師器	甕	5					暗灰	高温焼成・発泡
41	VII b	627	542	SD01	B2	土師器	甕	5					にぶい褐色	高温焼成・発泡
41	VII b	628	1695	SD01	B3	土製品	支脚						黄灰	粉痕、使用痕
41	VII b	629	1651	SD01	B3	土製品	支脚						浅黄橙	
41	VII b	630	1562	SD01	C3	土製品	支脚						にぶい橙	
41	VII b	631	1869	SD01	B2	土製品	支脚						にぶい黄橙	
41	VII b	632	540	SD01	B3	土製品	支脚			8.2			淡橙	
42	VII b	633	1229	SD01	C3	ガラス製品	小玉	100		0.3		0.2	紺色	0.1g 未満の為計測不能、鋳型法
42	VII b	634	561	SD01	B2	ガラス製品	小玉	100		0.4		0.2	緑色	0.1g 未満の為計測不能、鋳型法
42	VII b	635	1913	SD01	B2	ガラス製品	小玉	100		0.5		0.3	水色	0.1g 未満の為計測不能、鋳型法、気泡
42	VII b	636	1593	SD01	B2	石製品	臼玉	100		0.6		0.2	緑灰	0.2g、滑石
42	VII b	637	926	SD01	B2	石製品	丸玉	100		0.8		0.5	黒	0.5g、蛇紋岩
42	VII b	638	1591	SD01	B2	石製品	臼玉	100		0.9		0.6	緑灰	0.8g、滑石
42	VII b	639	1590	SD01	B2	ガラス製品	臼玉	100		0.8		0.7	紺色	0.5g、鋳型法、面有り
42	VII b	640	923	SD01	B2	石製品	管玉	100		0.8	2.2	0.7	濃緑	1.9g、蛇紋岩
42	VII b	641	1592	SD01	B2	石製品	管玉	100		0.9	2.2	0.9	濃緑	3.4g、碧玉
42	VII b	642	935	SD01	B3	石製品	管玉	100		0.9	2.8	0.9	深緑	3.5g、碧玉
42	VII b	643	999	SD01	B3	土製品	紡錘車	50		3.5	1.8		にぶい橙	10.9g
42	VII b	644	1236	SD01	C3	土製品	紡錘車	100		4.3	2.7		にぶい黄橙	46.3g
42	VII b	645	553	SD01	B2	土製品	土鍾	100		6.0	6.1	2.1	にぶい黄褐	87.1g、紐ズレ有り
42	VII b	646	1926	SD01	D3	土製品	土鍾	95		1.8	4.9		にぶい黄橙	13.0g
42	VII b	647	1180	SD01	C3	土製品	土鍾	30		4.0	4.9		にぶい橙	54.1g
42	VII b	648	1075	SD01	C3	土製品	土鍾	50		3.6	5.2		灰黄	52.5g
42	VII b	649	1075	SD01	C3	土製品	土鍾	50		3.0	5.6		にぶい橙	41.7g
42	VII b	650	1076	SD01	C3	土製品	土鍾	40		3.8	4.2		褐灰	39.0g
42	VII b	651	1165	SD01	C2	土製品	土鍾	30		3.5			灰	内径 1.4、全面粉痕
42	VII b	652	507	SD01	B3	須恵器	坏身	20					灰	底径 4.0、ㄱ記号、内面・断面に漆痕、ㄱ'リ方向右
42	VII b	653	515	SD01	B3	鉄製品	鉄滓			7.0			黄橙	内径 2.6、20.6g、羽口付着
42	VII b	654	1175	SD01	C3	土製品	輪			5.8			黄橙	内径 2.0
42	VII b	655	644	SD01	B3	土製品	輪			5.8			橙	内径 2.4
42	VII b	656	1874	SD01	B2	土製品	輪	10		5.0			黄橙	内径 2.4
42	VII b	657	1549	SD01	B3	鉄製品	鉄滓			4.5	5.7	1.8		29.3g
42	VII b	658	1682	SD01	B3	石製品	砥石			2.4	5.1	1.7		25.9g、凝灰岩、提砥
42	VII b	659	1030	SD01	B2	石製品	砥石			3.6	4.5	3.3		65.1g、凝灰岩
42	VII b	660	558	SD01	A2	石製品	砥石			3.9	7.6	2.2		70.2g、凝灰岩
42	VII b	661	23	SD01	C3	石製品	砥石			3.7	5.5	3.2	白灰	71.0g、凝灰岩
42	VII b	662	1073	SD01	C2	石製品	砥石			6.9	7.4	4.8		268.3g、凝灰岩
42	VII b	663	1173	SD01	C3	石製品	砥石			5.7	9.5	3.5		151.2g、凝灰岩
42	VII b	664	13	SD01	A3	石製品	砥石			5.6	11.8	3.7		207.8g、凝灰岩
42	VII b	665	1145	SD01	C2	石製品	砥石			6.1	10.3	5.2		312.2g、凝灰岩
42	VII b	666	627	SD01	B2	石製品	砥石			8.0	11.2	5.3		642g、凝灰岩
42	VII b	667	1145	SD01	C2	石製品	砥石			7.0	12.8	5.5		505.9g、凝灰岩
42	VII b	668	1543	SD01	B3	石製品	砥石			6.6	15.8	3.7		356.8g、凝灰岩
42	VII b	669	1285	SD01	D3	石製品	砥石			7.5	16.9	4.5		832g、凝灰岩
42	VII b	670	1867	SD01	B2	石製品	叩石			5.2	13.2	4.6		475.3g、輝緑岩
47	VII a	1	680	SD01	B3	須恵器	坏蓋	30		14.0			暗褐	ㄱ'リ方向左
47	VII a	2	459	SD01	A3	須恵器	坏蓋	80		14.8	5.3		暗灰	ㄱ'リ方向左
47	VII a	3	301	SD01	B3	須恵器	坏蓋	70		14.8	4.7		暗灰	ㄱ'リ方向左
47	VII a	4	666	SD01	B3	須恵器	坏蓋	20	反	15.0			灰	
47	VII a	5	1289	SD01	D3	須恵器	坏蓋	20	反	14.6			灰	
47	VII a	6	1219	SD01	C3	須恵器	坏蓋	50		14.5	3.9		灰	ㄱ'リ方向左
47	VII a	7	756	SD01	C3	須恵器	坏蓋	40	反	14.5			灰	ㄱ'リ方向左、焼きぶくれ、ゆがみ
47	VII a	8	1849	SD01	E3	須恵器	坏蓋	10	反	14.5		14.8	灰白	ㄱ'リ方向右
47	VII a	9	301	SD01	B3	須恵器	坏蓋	20	反	14.4			灰	ㄱ'リ方向左
47	VII a	10	448	SD01	A2	須恵器	坏蓋	40	反	14.2	4.4		灰白	上部未調整
47	VII a	11	649	SD01	B3	須恵器	坏蓋	20	反	14.0			灰	ㄱ'リ方向左
47	VII a	12	1952	SD01	D3	須恵器	坏蓋	60		14.0	4.3		褐灰	ㄱ'リ方向右
47	VII a	13	792	SD01	E3	須恵器	坏蓋	20		14.0			灰	ㄱ'リ方向右
47	VII a	14	1846	SD01	D3	須恵器	坏蓋	10	反	13.8			灰	
47	VII a	15	683	SD01	B3	須恵器	坏蓋	10		13.6			灰白	
47	VII a	16	1849	SD01	E3	須恵器	坏蓋	40	反	13.8			灰	
47	VII a	17	308	SD01	B2	須恵器	坏蓋	70		13.4	4.2		灰白	ㄱ'リ方向右
47	VII a	18	1837	SD01	D3	須恵器	坏蓋	30	反	13.4	4.4		暗灰	ㄱ'リ方向左
47	VII a	19	418	SD01	A3	須恵器	坏蓋	70		13.4	5.0		灰	ㄱ'リ方向左
47	VII a	20	1179	SD01	C3	須恵器	坏蓋	30	反	13.0	5.0		灰	
47	VII a	21	1099	SD01	C3	須恵器	坏蓋	90		12.9	4.6		灰青	
47	VII a	22	634	SD01	B3	須恵器	坏蓋	100		12.8	3.9		灰	上部未調整
47	VII a	23	1263	SD01	D2	須恵器	坏蓋	30	反	12.6			灰	ㄱ'リ方向左
47	VII a	24	717	SD01	B3	須恵器	坏蓋	60		12.8	4.5		にぶい赤褐	ㄱ'リ方向右
47	VII a	25	707	SD01	C3	須恵器	坏蓋	30	反	12.6			灰	ㄱ'リ方向右
47	VII a	26	756	SD01	C3	須恵器	坏蓋	60	反	12.5			灰	ㄱ'リ方向右
47	VII a	27	663	SD01	B3	須恵器	坏蓋	40		12.4			灰	ㄱ'リ方向左

Fig.	層位	番号	取上番号	遺構	グリット	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備 考
47	VII a	28	660	SD01	C3	須恵器	坏蓋	80		12.4	4.7		灰	ㄻ'リ方向右、ㄲ記号
47	VII a	29	736	SD01	C3	須恵器	坏蓋	30	反	12.2			灰白	
47	VII a	30	1813	SD01	E3	須恵器	坏蓋	20	反	12.0			灰	ㄻ'リ方向左
47	VII a	31	1291	SD01	D3	須恵器	坏蓋	20	反	12.0			灰	ㄻ'リ方向左
47	VII a	32	1290	SD01	D3	須恵器	坏蓋	10	反	12.0			灰	ㄻ'リ方向左
47	VII a	33	694	SD01	C2	須恵器	坏蓋	60		11.8	3.4		灰	ㄻ'リ方向右
47	VII a	34	596	SD01	B3	須恵器	坏蓋	50		11.8			灰白	ㄻ'リ方向左
47	VII a	35	1170	SD01	C2	須恵器	坏蓋	40	反	11.8	4.1		灰白	ㄻ'リ方向左、上部未調整
47	VII a	36	1291	SD01	D3	須恵器	坏蓋	20	反	11.8	4.0	11.4	灰	ㄻ'リ方向右、焼ぶくれ
47	VII a	37	430	SD01	D3	須恵器	坏蓋	20		12.0			灰	ㄻ'リ方向右、上部未調整?
47	VII a	38	291	SD01	B3	須恵器	坏蓋	100		11.7	4.1		灰	ㄻ'リ方向右、ㄲ記号
47	VII a	39	1534	SD01	A3	須恵器	坏蓋	30	反	11.8	4.6		灰褐	ㄻ'リ方向右
47	VII a	40	1849	SD01	E3	須恵器	坏蓋	20	反	11.6			灰	ㄻ'リ方向右、内面焼ぶくれ
47	VII a	41	659	SD01	C2	須恵器	坏蓋	90		11.6			灰	ㄲ記号
47	VII a	42	786	SD01	D3	須恵器	坏蓋	30	反	11.6	4.4		暗灰	ㄻ'リ方向右、外側自然釉
47	VII a	43	453	SD01	A2	須恵器	坏蓋	30	反	11.6			灰	
47	VII a	44	429	SD01	D3	須恵器	坏蓋	20	反	11.6			灰	
47	VII a	45	463	SD01	A3	須恵器	坏蓋	40	反	11.4	3.8		灰	ㄻ'リ方向左
47	VII a	46	1295	SD01	D3	須恵器	坏蓋	50	反	11.2	4.3		灰	ㄻ'リ方向左、ㄲ記号
47	VII a	47	1170	SD01	C2	須恵器	坏蓋	40	反	11.2	4.3		灰	ㄻ'リ方向右
47	VII a	48	655	SD01	B2	須恵器	坏蓋	30		11.1	4.6		明褐灰	ㄻ'リ方向右
47	VII a	49	1293	SD01	D3	須恵器	坏蓋	20	反	11.0	3.2		灰	ㄻ'リ方向右
47	VII a	50	1443	SD01	D3	須恵器	坏蓋	30	反	11.0	4.6		灰	ㄻ'リ方向右、焼ぶくれ、自然釉
47	VII a	51	1250	SD01	C2	須恵器	坏蓋	30	反	11.2	4.3	11.0	にぶい橙	
47	VII a	52	1844	SD01	D3	須恵器	坏蓋	30	反	11.0	3.7		灰白	ㄻ'リ方向右
48	VII a	53	1930	SD01	D3	須恵器	坏蓋	20	反	11.0	3.5		暗灰	ㄻ'リ方向左
48	VII a	54	802	SD01	D3	須恵器	坏蓋	90		10.8	3.5		灰白	ㄻ'リ方向右
48	VII a	55	1291	SD01	D3	須恵器	坏蓋	20	反	10.8	3.7		灰	
48	VII a	56	1841	SD01	D3	須恵器	坏蓋	20	反	10.8			灰	ㄲ記号
48	VII a	57	1928	SD01	D3	須恵器	坏蓋	80		10.8	4.4		灰	ㄻ'リ方向左、ㄲ記号
48	VII a	58	645	SD01	B3	須恵器	坏蓋	80		10.8	4.1		灰	ㄻ'リ方向左
48	VII a	59	1840	SD01	D3	須恵器	坏蓋	70		10.8	3.9		黄灰	ㄻ'リ方向左、焼ぶくれ
48	VII a	60	1291	SD01	D3	須恵器	坏蓋	40	反	10.8	4.5		褐灰	ㄻ'リ方向右
48	VII a	61	645	SD01	B3	須恵器	坏蓋	30		10.8			灰	ㄻ'リ方向左、焼ぶくれ
48	VII a	62	1849	SD01	E3	須恵器	坏蓋	30	反	10.8			灰	焼ぶくれ
48	VII a	63	1291	SD01	D3	須恵器	坏蓋	40	反	10.8	4.1		灰	ㄻ'リ方向左
48	VII a	64	1433	SD01	D3	須恵器	坏蓋	60		10.6	3.9		灰	上部未調整
48	VII a	65	418	SD01	A3	須恵器	坏蓋	60	反	10.6	4.1		灰	ㄻ'リ方向左、ㄲ記号
48	VII a	66	1813	SD01	E3	須恵器	坏蓋	40		10.6	4.2		灰	ㄻ'リ方向右、ㄲ記号
48	VII a	67	794	SD01	B3	須恵器	坏蓋	40	反	10.6			灰	
48	VII a	68	817	SD01	D3	須恵器	坏蓋	30	反	10.6			暗灰	
48	VII a	69	786	SD01	D3	須恵器	坏蓋	20	反	10.4	4.7		灰白	上部未調整、焼ぶくれ
48	VII a	70	1420	SD01	D3	須恵器	坏蓋	70		10.4	3.8		暗灰	
48	VII a	71	810	SD01	D3	須恵器	坏蓋	70		10.4	3.9		灰	上部静止ㄲㄻ'リ?
48	VII a	72	1095	SD01	C2	須恵器	坏蓋	70		10.2	4.2	10.0	灰	ㄻ'リ方向左
48	VII a	73	1925	SD01	D3	須恵器	坏蓋	40	反	10.2	3.8		灰白	ㄻ'リ方向左
48	VII a	74	1425	SD01	D3	須恵器	坏蓋	80		10.2	3.9		暗灰	ㄻ'リ方向左、外面自然釉
48	VII a	75	1897	SD01	D3	須恵器	坏蓋	70		10.2	3.8		灰	上部未調整
48	VII a	76	816	SD01	D3	須恵器	坏蓋	50		10.2	3.8		灰	上部未調整、ㄲ記号
48	VII a	77	807	SD01	D2	須恵器	坏蓋	30	反	10.2	3.3		暗灰	手持ちㄲㄻ'リ
48	VII a	78	782	SD01	D3	須恵器	坏蓋	30	反	10.2	3.8		灰	ㄲ記号、ㄻ'リ方向左
48	VII a	79	788	SD01	E3	須恵器	坏蓋	20	反	10.3	3.3	10.1	灰白	
48	VII a	80	732	SD01	C2	須恵器	坏蓋	60		10.3	3.6	10.0	灰	上部未調整
48	VII a	81	1437	SD01	D3	須恵器	坏蓋	80		10.0	3.7		灰	上部未調整、ㄲ記号
48	VII a	82	743	SD01	C2	須恵器	坏蓋	80		10.0	3.4		灰	上部未調整、ㄲ記号
48	VII a	83	1300	SD01	D3	須恵器	坏蓋	10	反	10.0			暗灰	
48	VII a	84	1297	SD01	C2	須恵器	坏蓋	10	反	10.0	4.0		灰白	ㄻ'リ方向右
48	VII a	85	1291	SD01	D3	須恵器	坏蓋	40	反	10.0	3.6		灰褐	外面自然釉
48	VII a	86	1294	SD01	D3	須恵器	坏蓋	30	反	10.0	3.5		灰	ㄻ'リ方向左
48	VII a	87	702	SD01	C2	須恵器	坏蓋	20	反	10.0	3.8		灰	
48	VII a	88	1074	SD01	C2	須恵器	坏蓋	10	反	10.0			灰	
48	VII a	89	1297	SD01	C2	須恵器	坏蓋	40		10.4	3.3	10.0	灰	ㄲ記号、ㄻ'リ方向左
48	VII a	90	749	SD01	E3	須恵器	坏蓋	100		9.8	3.5		灰	上部未調整、ㄲ記号
48	VII a	91	785	SD01	D3	須恵器	坏蓋	50	反	9.8	3.5		灰	ㄻ'リ方向左
48	VII a	92	812	SD01	D3	須恵器	坏蓋	40	反	9.8	3.3		暗赤褐	
48	VII a	93	1298	SD01	D3	須恵器	坏蓋	20	反	9.8	3.8		灰白	ㄻ'リ方向右
48	VII a	94	669	SD01	C2	須恵器	坏蓋	25	反	10.0	4.0	9.7	灰	ㄻ'リ方向右
48	VII a	95	419	SD01	B2	須恵器	坏蓋	80		9.8	3.9	9.7	灰白	
48	VII a	96	813	SD01	D3	須恵器	坏蓋	90		9.6	3.4		灰	ㄻ'リ方向右
48	VII a	97	1442	SD01	D3	須恵器	坏蓋	100		9.6	3.2		灰	上部未調整
48	VII a	98	1088	SD01	C2	須恵器	坏蓋	60		10.0	3.6	9.6	灰	外面弱い沈潜
48	VII a	99	1535・651	SD01	B2・B3	須恵器	坏蓋	50		9.8	3.4	9.6	灰白	ㄻ'リ方向右
48	VII a	100	1428	SD01	D3	須恵器	坏蓋	40	反	9.6	3.4		暗灰	
48	VII a	101	1932	SD01	E3	須恵器	坏蓋	30	反	9.6	4.0		灰	ㄻ'リ方向右
48	VII a	102	1438	SD01	D3	須恵器	坏蓋	30	反	9.6	3.4		灰	
48	VII a	103	1086	SD01	C2	須恵器	坏蓋	50		9.6	3.7	9.2	灰	ㄻ'リ方向右
48	VII a	104	410	SD01	A2	須恵器	坏蓋	95		9.4	3.3		灰	ㄻ'リ方向右、上部未調整
48	VII a	105	1910	SD01	A2	須恵器	坏蓋	80		9.5	3.5		灰	ㄻ'リ方向右
48	VII a	106	815	SD01	D3	須恵器	坏蓋	30	反	9.4	3.5		灰	外面自然釉
48	VII a	107	414	SD01	A2	須恵器	坏蓋	60	反	9.2			灰	ㄻ'リ方向左
48	VII a	108	412	SD01	A2	須恵器	坏蓋	100		8.4	3.7		灰	ㄻ'リ方向左
49	VII a	109	736	SD01	C3	須恵器	坏身	30	反	16.4		13.3	灰白	外面自然釉、重ね焼痕、ㄻ'リ方向右
49	VII a	110	686	SD01	B3	須恵器	坏身	30	反	16.0		13.0	灰	ㄻ'リ方向左
49	VII a	111	1261	SD01	D2	須恵器	坏身	40	反	16.0		13.6	灰	ㄻ'リ方向左

出土遺物観察表

Fig.	層位	番号	取上番号	遺構	グリット	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備 考
49	VII a	112	597	SD01	B3	須恵器	坏身	10	反	15.5		12.8	灰	外面自然釉
49	VII a	113	446	SD01	A2	須恵器	坏身	20	反	15.3		13.4	灰	ｸｽﾞﾘ方向左
49	VII a	114	308	SD01	B2	須恵器	坏身	40	反	15.0		12.6	灰	ｸｽﾞﾘ方向左
49	VII a	115	1842	SD01	D3	須恵器	坏身	20	反	15.0	3.5	12.8	灰	
49	VII a	116	662	SD01	B3	須恵器	坏身	20	反	15.0		13.0	灰	ｸｽﾞﾘ方向左
49	VII a	117	1813	SD01	E3	須恵器	坏身	20		14.4	3.6	12.4	灰白	ｸｽﾞﾘ方向左
49	VII a	118	278	SD01	A2	須恵器	坏身	100		14.4	4.6	12.6	灰	ｸｽﾞﾘ方向左
49	VII a	119	308	SD01	B2	須恵器	坏身	20	反	14.0		12.2	灰白	ｸｽﾞﾘ方向左
49	VII a	120	1852	SD01	E3	須恵器	坏身	20	反	14.0		12.2	灰	立ち上がり内面褐色
49	VII a	121	719	SD01	C3	須恵器	坏身	10	反	14.2		12.0	灰	ｸｽﾞﾘ方向右、外面自然釉
49	VII a	122	784	SD01	D3	須恵器	坏身	30	反	14.0		11.5	灰	
49	VII a	123	1292	SD01	D3	須恵器	坏身	20	反	14.0		11.8	灰	ｸｽﾞﾘ方向左
49	VII a	124	548	SD01	B3	須恵器	坏身	20	反	14.0	3.9	12.0	灰	外面自然釉
49	VII a	125	1287	SD01	D3	須恵器	坏身	60	反	13.6	4.5	11.4	灰	ｸｽﾞﾘ方向左
49	VII a	126	787	SD01	D3	須恵器	坏身	20	反	13.2		11.0	灰	
49	VII a	127	1852	SD01	E3	須恵器	坏身	20	反	13.2		11.0	灰	ｸｽﾞﾘ方向右
49	VII a	128	663	SD01	B3	須恵器	坏身	40	反	13.1		11.4	灰	ｸｽﾞﾘ方向右
49	VII a	129	1917	SD01	D3	須恵器	坏身	20	反	13.0	3.5	10.8	灰	ｸｽﾞﾘ方向右
49	VII a	130	1851	SD01	E3	須恵器	坏身	20		13.0		10.8	灰白	
49	VII a	131	635	SD01	B3	須恵器	坏身	90		13.0	4.8	10.2	灰	ｸｽﾞﾘ方向左
49	VII a	132	704	SD01	C3	須恵器	坏身	70		13.0		10.9	明灰白	
49	VII a	133	699	SD01	C3	須恵器	坏身	30		12.9		10.2	灰白	
49	VII a	134	721	SD01	B2	須恵器	坏身	80		12.9	4.4	11.0	灰	ｸｽﾞﾘ方向右
49	VII a	135	1909	SD01	D3	須恵器	坏身	100		12.8	4.2	10.6	灰	ｸｽﾞﾘ方向左、ㇿ記号
49	VII a	136	1906	SD01	E3	須恵器	坏身	100		12.7	4.2	10.8	灰	外面自然釉、内面焼ぶくれ、受け部重ね
49	VII a	137	774・792	SD01	E3	須恵器	坏身	90		12.7	3.7	10.8	灰白	底部ㇿ調整、黒変
49	VII a	138	698	SD01	C3	須恵器	坏身	40	反	12.6	4.3	10.5	灰白	
49	VII a	139	655	SD01	B2	須恵器	坏身	30	反	12.6		10.2	灰白	ｸｽﾞﾘ方向左
49	VII a	140	1295	SD01	D3	須恵器	坏身	90	反	12.6	3.7	10.6	灰	ｸｽﾞﾘ方向左、ㇿ記号、受け部重ね焼痕
49	VII a	141	736	SD01	C3	須恵器	坏身	20	反	12.5		10.5	灰	外面自然釉、内面焼ぶくれ
49	VII a	142	1019	SD01	C3	須恵器	坏身	40	反	12.4	4.5	10.0	灰	ｸｽﾞﾘ方向左
49	VII a	143	1234	SD01	D2	須恵器	坏身	20	反	12.4		10.0	暗灰	ｸｽﾞﾘ方向左
49	VII a	144	645	SD01	B3	須恵器	坏身	50		12.3	4.4	9.6	灰	ｸｽﾞﾘ方向右、ㇿ記号、自然釉、焼ぶくれ
49	VII a	145	1919	SD01	D3	須恵器	坏身	40	反	12.2		10.2	灰	ｸｽﾞﾘ方向左
49	VII a	146	281	SD01	A2	須恵器	坏身	90		12.1	4.4	9.8	灰	ｸｽﾞﾘ方向左
49	VII a	147	1148	SD01	C2	須恵器	坏身	60	反	12.0		9.8	灰	底部未調整
49	VII a	148	312	SD01	B2	須恵器	坏身	40	反	12.0		10.0	灰白	ｸｽﾞﾘ方向右、ㇿ記号
49	VII a	149	1295	SD01	D3	須恵器	坏身	20	反	12.0	3.3	9.6	灰	底部未調整
49	VII a	150	688	SD01	C2	須恵器	坏身	100		12.0	4.1	9.6	灰	ｸｽﾞﾘ方向右
49	VII a	151	744	SD01	C2	須恵器	坏身	40	反	12.0		9.6	灰	底部未調整
49	VII a	152	1915	SD01	D3	須恵器	坏身	30	反	12.0	3.7	9.8	灰	外面自然釉
49	VII a	153	1852	SD01	E3	須恵器	坏身	30	反	12.0	3.4	10.8	灰	ｸｽﾞﾘ方向左
50	VII a	154	733	SD01	C2	須恵器	坏身	40		12.0	3.7	9.6	灰	ｸｽﾞﾘ方向右
50	VII a	155	645	SD01	B3	須恵器	坏身	20	反	11.9		10.0	灰	ｸｽﾞﾘ方向左
50	VII a	156	1287	SD01	D3	須恵器	坏身	60	反	11.8	4.3	8.4	灰	底部未調整
50	VII a	157	464	SD01	A3	須恵器	坏身	40	反	11.8	4.3	9.8	灰	底部手持ｸｽﾞﾘ
50	VII a	158	1178	SD01	C3	須恵器	坏身	60	反	11.6	4.7	10.5	灰白	
50	VII a	159	1440	SD01	D3	須恵器	坏身	30	反	11.8	3.7	10.0	灰白	ｸｽﾞﾘ方向左
50	VII a	160	597	SD01	B3	須恵器	坏身	50		11.6	3.8	9.4	灰	ｸｽﾞﾘ方向左
50	VII a	161	736	SD01	C3	須恵器	坏身	10	反	11.4		9.4	灰	ｸｽﾞﾘ方向右
50	VII a	162	279	SD01	A2	須恵器	坏身	95		11.4	3.1	9.4	灰	ｸｽﾞﾘ方向左、底部未調整
50	VII a	163	1019	SD01	C2	須恵器	坏身	50		11.4	4.1	9.4	灰	ｸｽﾞﾘ方向左
50	VII a	164	358	SD01	B3	須恵器	坏身	40	反	11.2	4.0	9.0	灰	ｸｽﾞﾘ方向左、焼ぶくれ
50	VII a	165	1423	SD01	D3	須恵器	坏身	90	反	11.2	3.4	9.2	灰	ｸｽﾞﾘ方向右、外面自然釉
50	VII a	166	782	SD01	D3	須恵器	坏身	50		11.2	3.0	9.2	暗灰	
50	VII a	167	1268	SD01	C2	須恵器	坏身	60	反	11.0	3.4	9.2	灰	底部未調整
50	VII a	168	1844	SD01	D3	須恵器	坏身	20	反	11.0	3.5	9.0	灰	底部未調整
50	VII a	169	292	SD01	B3	須恵器	坏身	50		11.0	3.8	9.0	灰	ｸｽﾞﾘ方向左、ㇿ記号、焼ぶくれ
50	VII a	170	1280	SD01	D2	須恵器	坏身	60		11.0	4.2	9.6	灰	ｸｽﾞﾘ方向左
50	VII a	171	600	SD01	B3	須恵器	坏身	40	反	10.8		8.8	灰	ｸｽﾞﾘ方向左
50	VII a	172	302	SD01	B3	須恵器	坏身	70		10.8	3.1	8.8	灰	底部未調整
50	VII a	173	1439	SD01	D3	須恵器	坏身	60	反	10.8	3.3	8.6	灰	ㇿ記号
50	VII a	174	1289	SD01	D3	須恵器	坏身	50	反	10.7	4.6	8.6	灰	ｸｽﾞﾘ方向左
50	VII a	175	1931・1944	SD01	E3・C3	須恵器	坏身	50	反	10.6	3.5	8.5	灰	
50	VII a	176	1430	SD01	D3	須恵器	坏身	70		10.6	3.5	8.8	灰白	ｸｽﾞﾘ方向右
50	VII a	177	409	SD01	A2	須恵器	坏身	100		10.6	3.1	8.8	灰	ｸｽﾞﾘ方向右
50	VII a	178	359	SD01	B3	須恵器	坏身	95		10.5	3.4	8.5	灰	ㇿ記号、左
50	VII a	179	295	SD01	B3	須恵器	坏身	20	反	12.2		10.4	にぶい橙	
50	VII a	180	1441	SD01	D3	須恵器	坏身	30	反	10.4	4.0	8.4	暗灰	ｸｽﾞﾘ方向左
50	VII a	181	1245	SD01	D2	須恵器	坏身	60		10.4	3.9	8.0	灰	ｸｽﾞﾘ方向右、底部未調整
50	VII a	182	1289	SD01	D3	須恵器	坏身	50	反	10.4	3.6	8.4	灰白	ｸｽﾞﾘ方向左、ㇿ記号
50	VII a	183	1908	SD01	D3	須恵器	坏身	100		10.4	3.3	8.4	灰	ｸｽﾞﾘ方向左
50	VII a	184	415	SD01	A2	須恵器	坏身	40	反	10.4	3.5	8.4	灰	ｸｽﾞﾘ方向左、底部未調整
50	VII a	185	1169	SD01	C2	須恵器	坏身	50		10.2	3.3	8.0	灰	ｸｽﾞﾘ方向右
50	VII a	186	1213	SD01	B2	須恵器	坏身	50	反	10.2	3.6	8.0	灰	
50	VII a	187	1245	SD01	D2	須恵器	坏身	50	反	10.2	3.2	8.3	灰色	ｸｽﾞﾘ方向右
50	VII a	188	706	SD01	C3	須恵器	坏身	70		12.4		11.0	灰白	ｸｽﾞﾘ方向右
50	VII a	189	354	SD01	B2	須恵器	坏身	70		12.0	4.3	10.6	灰白	
50	VII a	190	792・793	SD01	E3	須恵器	坏身	90		11.8	3.1	10.0	灰	底部未調整
50	VII a	191	1091	SD01	C2	須恵器	坏身	100		11.2	2.8	9.2	暗灰	底部未調整
50	VII a	192	816	SD01	D3	須恵器	坏身	100		10.6	3.1	9.0	灰	底部未調整
50	VII a	193	1426	SD01	D3	須恵器	坏身	100		10.4	3.2	8.6	灰	底部未調整
50	VII a	194	1424	SD01	D3	須恵器	坏身	100		10.0	2.8	8.2	灰	ｸｽﾞﾘ方向左、ㇿ記号、外面自然釉
50	VII a	195	1419	SD01	B2	須恵器	坏身	90		10.0	3.3	8.2	灰黄	ｸｽﾞﾘ方向右

Fig.	層位	番号	取上番号	遺構	グリット	種別	細別	残存率	反転	口径	器高	口径	色調	備 考
50	VII a	196	411	SD01	A2	須恵器	坏身	95		10.0	3.0	8.8	灰	ｸｽﾞリ方向右
50	VII a	197	36	SD01	B2	須恵器	坏身	50		9.9	3.2	8.0	灰白	
50	VII a	198	1432	SD01	D3	須恵器	坏身	70		11.2	2.7	9.4	暗灰	内面2次焼成?
50	VII a	199	770	SD01	E3	須恵器	坏身	80		10.9	3.6		灰	ｸｽﾞリ方向左、へう記号
50	VII a	200	360・702	SD01	B3・C2	須恵器	坏身	95		10.8	3.2	8.4	灰	ｸｽﾞリ方向左
50	VII a	201	764	SD01	E3	須恵器	坏身	70		10.8	2.8		灰	底部未調整
50	VII a	202	1202	SD01	C3	須恵器	坏身	30	反	10.8		8.6	灰	底部未調整
50	VII a	203	1291	SD01	D3	須恵器	坏身	30	反	11.2	3.0	9.4	灰白	底部未調整
50	VII a	204	1085	SD01	C2	須恵器	坏身	60	反	10.5	3.0	8.6	灰	底部未調整
50	VII a	205	816	SD01	D3	須恵器	坏身	100		10.4	2.5	9.0	灰	底部未調整
50	VII a	206	817	SD01	D3	須恵器	坏身	100		10.4	2.6	8.8	暗灰	底部未調整
50	VII a	207	295	SD01	B3	須恵器	坏身	20	反	9.8		8.2	灰	ｸｽﾞリ方向左
50	VII a	208	1436	SD01	D3	須恵器	坏身	80		9.8	2.6	7.8	暗灰	底部未調整、へう記号
50	VII a	209	420	SD01	A3	須恵器	坏身	20	反	9.8		7.8	灰	底部未調整、へう記号
51	VII a	210	1902	SD01	D3	須恵器	返り蓋	30		10.2			灰	灰リブ 灰釉
51	VII a	211	694	SD01	C2	須恵器	返り蓋	40	反	10.2		7.0	灰	自然釉
51	VII a	212	301・356	SD01	B3	須恵器	返り蓋	30		10.2	2.6		赤灰	ｸｽﾞリ方向右、摘み径 2.4
51	VII a	213	750	SD01	C3	須恵器	返り蓋	95		10.3		8.4	灰	焼ぶくれ
51	VII a	214	1920	SD01	D3	須恵器	返り蓋	20	反	11.0			灰	
51	VII a	215	1295	SD01	D3	須恵器	返り蓋	30	反	11.2			灰	
51	VII a	216	817	SD01	D3	須恵器	無台坏身	60	反	10.2	4.1		灰	
51	VII a	217	1435	SD01	D3	須恵器	無台坏身	90		11.0	4.1		灰	
51	VII a	218	518	SD01	A2	須恵器	無台坏身	50	反	10.2	3.8		灰	底部未調整
51	VII a	219	801	SD01	D2	須恵器	無台坏身	80		11.2	4.0		暗灰	底部静止ｸｽﾞリ
51	VII a	220	773	SD01	E3	須恵器	無台坏身	90		11.3	3.9		灰	底部未調整
51	VII a	221	781	SD01	D2	須恵器	無台坏身	50		11.4	4.3		灰	底部未調整、内面自然釉
51	VII a	222	1269	SD01	D2	須恵器	無台坏身	90		11.4	4.0		灰	底部未調整
51	VII a	223	820	SD01	D3	須恵器	無台坏身	70		11.4	4.2		灰白	底部未調整、内面自然釉
51	VII a	224	706	SD01	C3	須恵器	無台坏身	60	反	11.6	4.0		灰白	底部未調整、へうこし
51	VII a	225	808	SD01	D3	須恵器	無台坏身	80		12.2	4.6		灰	底部未調整
51	VII a	226	725	SD01	C2	須恵器	無台坏身	100		12.3	4.6		暗灰黄	ｸｽﾞリ方向右
51	VII a	227	820	SD01	D3	須恵器	無台坏身	60	反	12.6	4.9		灰	底部未調整
51	VII a	228	790	SD01	E3	須恵器	無台坏身	40	反	13.6	4.6		灰白	黒変
51	VII a	229	723	SD01	C2	須恵器	無台坏身	80		15.6	6.2		灰	ｸｽﾞリ方向右
51	VII a	230	226	SD01	A2	須恵器	無台坏身	30	反	9.4	4.4		暗灰	ｸｽﾞリ方向左
51	VII a	231	295	SD01	B3	須恵器	無台坏身	20	反	9.2	3.7		灰	ｸｽﾞリ方向右、へう記号
51	VII a	232	228	SD01	A2	須恵器	無台坏身	20	反	9.7			灰	ｸｽﾞリ方向左
51	VII a	233	1143	SD01	C2	須恵器	無台坏身	40	反	9.8	3.1	9.4	暗灰	手持へうｸｽﾞリ
51	VII a	234	657	SD01	C2	須恵器	無台坏身	50		9.8	3.3		灰	
51	VII a	235	1930	SD01	D3	須恵器	無台坏身	10	反	10.0			灰	
51	VII a	236	1422	SD01	D2	須恵器	無台坏身	80		10.0	3.8		暗灰	底部未調整
51	VII a	237	817	SD01	D3	須恵器	無台坏身	20	反	10.0	4.0		暗灰	底部未調整
51	VII a	238	798	SD01	D3	須恵器	無台坏身	100		10.2	3.9		灰白	灰リブ 灰釉
51	VII a	239	1903	SD01	D3	須恵器	無台坏身	100		10.2	3.6		灰	ｸｽﾞリ方向左、内面自然釉顯著
51	VII a	240	1295	SD01	D3	須恵器	無台坏身	50	反	10.2			灰	
51	VII a	241	215	SD01	A3	須恵器	無台坏身	20	反	10.0	3.2		暗灰	ｸｽﾞリ方向右
51	VII a	242	1250	SD01	C2	須恵器	無台坏身	20	反	10.8			灰白	
51	VII a	243	810	SD01	D3	須恵器	無台坏身	30	反	10.4	2.5		灰	
51	VII a	244	819	SD01	D3	須恵器	無台坏身	40	反	10.6			灰	
51	VII a	245	1900	SD01	D3	須恵器	無台坏身	40	反	10.8	4.1	10.6	灰	底部未調整
51	VII a	246	1087	SD01	C2	須恵器	無台坏身	70		11.0	4.2	10.7	灰	
51	VII a	247	474	SD01	B3	須恵器	無台坏身	100		11.0	3.7		灰白	へうコシ?
51	VII a	248	1272	SD01	D3	須恵器	無台坏身	30		11.0			灰白	底部未調整
51	VII a	249	1205	SD01	D2	須恵器	無台坏身	20	反	11.2			灰	ｸｽﾞリ方向右、外面自然釉
51	VII a	250	810	SD01	D3	須恵器	無台坏身	20	反	11.6			灰	
51	VII a	251	1845	SD01	D3	須恵器	無台坏身	40	反	11.8	4.4		灰	
51	VII a	252	1250	SD01	C2	須恵器	無台坏身	70		11.8	3.9		灰白	底部未調整、へう記号
51	VII a	253	809	SD01	D3	須恵器	無台坏身	10	反	12.0			灰白	
51	VII a	254	280	SD01	A2	須恵器	無台坏身	70		12.0	5.1	12.0	灰	
51	VII a	255	793	SD01	E3	須恵器	無台坏身	40	反	12.2	3.9		灰	底部未調整
51	VII a	256	808	SD01	D3	須恵器	無台坏身	70		12.2	4.9		灰	底部未調整
51	VII a	257	816	SD01	D3	須恵器	無台坏身	40		12.2	4.1		灰白	底部未調整、内面自然釉
52	VII a	258	817・818	SD01	D3	須恵器	無台坏身	80		12.2	5.0		灰	へうコシ
52	VII a	259	1171	SD01	C2	須恵器	無台坏身	60		12.2	4.5		灰	
52	VII a	260	1208	SD01	B2	須恵器	無台坏身	10	反	12.2			灰白	
52	VII a	261	778・790	SD01	E3	須恵器	無台坏身	80		12.4	4.0		灰	ｸｽﾞリ方向左
52	VII a	262	811	SD01	D3	須恵器	無台坏身	20	反	12.4			灰白	
52	VII a	263	295	SD01	B3	須恵器	無台坏身	20	反	12.4			灰	ｸｽﾞリ方向左、内面自然釉
52	VII a	264	717	SD01	B3	須恵器	無台坏身	50	反	12.5	3.5		灰	底部未調整
52	VII a	265	786	SD01	D3	須恵器	無台坏身	70		12.6	5.0		灰	
52	VII a	266	1896	SD01	D3	須恵器	無台坏身	90		12.6	5.0		灰	
52	VII a	267	803	SD01	D3	須恵器	無台坏身	100		12.6	5.0		灰	底部未調整
52	VII a	268	808	SD01	D3	須恵器	無台坏身	30	反	13.0	4.1		灰	ｸｽﾞリ方向左
52	VII a	269	812	SD01	D3	須恵器	無台坏身	30	反	13.4	4.6		灰白	
52	VII a	270	785	SD01	D3	須恵器	無台碗	20	反	14.0	4.0		灰白	底部未調整
52	VII a	271	706	SD01	C3	須恵器	無台碗	20	反	14.4			灰	ｸｽﾞリ方向右
52	VII a	272	701	SD01	D2	須恵器	無台碗	70		14.0	5.0		灰	外面火だすき
52	VII a	273	701	SD01	D2	須恵器	無台碗	70		14.0	4.4		暗灰	ｸｽﾞリ方向左
52	VII a	274	1207	SD01	B2	須恵器	無台碗	10	反	15.0			灰	
52	VII a	275	711	SD01	C2	須恵器	無台碗	20	反	15.0	4.3		褐灰	底部未調整
52	VII a	276	728	SD01	C2	須恵器	摘蓋	30	反	15.0		14.4	灰	ｸｽﾞリ方向右
52	VII a	277	689	SD01	C2	須恵器	摘蓋	80		15.8	4.1	15.4	灰	ｸｽﾞリ方向左、摘み径 3.0
52	VII a	278	762	SD01	D2	須恵器	摘蓋	90		15.4	3.8		灰	ｸｽﾞリ方向右、外面自然釉、摘み径 3.2
52	VII a	279	792	SD01	E3	須恵器	摘蓋	60		15.6	3.7		灰白	外面自然釉、摘み径 3.1

出土遺物観察表

Fig.	層位	番号	取上番号	遺構	グリット	種別	細別	残存率	反転	口径	器高	口径	色調	備 考
52	VII a	280	748	SD01	E3	須恵器	摘蓋	60		15.8	4.3		灰白	ㄻ'リ方向右、端部黒変、摘み径 3.1
52	VII a	281	1911	SD01	D3	須恵器	摘蓋	70	反	16.8	4.0		灰	ㄻ'リ方向左、摘み径 3.5、摘み径 3.0
52	VII a	282	775	SD01	E3	須恵器	有台坏身	50	反	14.0	4.2		灰	ㄻ'リ方向左
52	VII a	283	1222	SD01	B2	須恵器	有台坏身	30	反	14.2	4.4		灰白	ㄻ'リ方向左
52	VII a	284	767	SD01	D2	須恵器	有台坏身	70	反	14.2	3.7		灰	
52	VII a	285	766	SD01	D3	須恵器	有台坏身	50	反	14.4	4.4		灰	ㄻ'リ方向右
52	VII a	286	702	SD01	C2	須恵器	有台坏身	30	反	15.6	4.8		灰	自然釉
52	VII a	287	667	SD01	C2	須恵器	有台坏身	40	反	16.0	3.8		灰白	ㄻ'リ方向左
52	VII a	288	548	SD01	B3	須恵器	高盤	10	反	28.8			灰	
52	VII a	289	215	SD01	A3	須恵器	高盤	10	反	30.0			明灰	ㄻ'リ方向右
52	VII a	290	805	SD01	D3	須恵器	高盤	30	反				灰	
53	VII a	291	1444	SD01	D3	須恵器	無蓋高坏	50		11.6			暗灰	ｽｶﾝ2段3方向、外面自然釉
53	VII a	292	813	SD01	D3	須恵器	高坏	5	反				灰	脚径 12.4、ｽｶﾝ2方向、外面自然釉
53	VII a	293	464	SD01	A3	須恵器	高坏蓋	20	反	14.2	4.2		灰	ㄻ'リ方向左、焼ぶくれ
53	VII a	294	814	SD01	D3	須恵器	有蓋高坏	10	反	12.4		9.9	灰	摘み径 3.6、上部焼ぶくれ
53	VII a	295	707	SD01	C3	須恵器	高坏	30					灰	脚径 3.9、脚径 12.0、自然釉
53	VII a	296	1289	SD01	D3	須恵器	無蓋高坏	10	反	16.0			褐灰	
53	VII a	297	1171	SD01	C2	須恵器	無蓋高坏	10	反	16.2			黄灰	ㄻ'リ方向右
53	VII a	298	1814	SD01	E3	須恵器	無蓋高坏	5		16.0			灰	
53	VII a	299	707	SD01	C3	須恵器	無蓋高坏	10	反	11.6			灰	全面自然釉
53	VII a	300	1929	SD01	D3	須恵器	高坏	30	反				灰	脚径 3.0、脚径 10.0
53	VII a	301	793	SD01	E3	須恵器	高坏	30					灰	脚径 2.6、脚径 8.6
53	VII a	302	813	SD01	D3	須恵器	高坏	30	反				灰白	脚径 3.3、脚径 9.0
53	VII a	303	817	SD01	D3	須恵器	高坏	40					灰	脚径 3.1、脚径 9.6
53	VII a	304	285	SD01	A3	須恵器	高坏	30					灰	脚径 2.8、脚径 9.6、ㄻ'リ方向右
53	VII a	305	1814	SD01	E3	須恵器	高坏	30					暗灰	脚径 3.2、脚径 9.6
53	VII a	306	1918	SD01	D3	須恵器	高坏	30					灰	脚径 4.0、脚径 10.0
53	VII a	307	1814	SD01	E3	須恵器	高坏	40					白灰	脚径 10.4
53	VII a	308	1927	SD01	D3	須恵器	高坏	30					灰白	脚径 3.5、脚径 10.4
53	VII a	309	295	SD01	B3	須恵器	高坏	40					灰	脚径 10.5、内面一部自然釉
53	VII a	310	709	SD01	C3	須恵器	高坏	20					灰	脚径 3.3、脚径 10.4
53	VII a	311	1535	SD01	B2	須恵器	高坏	30	反				灰白	脚径 3.1、脚径 10.6、内面ㄲ記号
53	VII a	312	1280	SD01	D2	須恵器	高坏	10	反				灰白	底径 10.6
53	VII a	313	1931	SD01	E3	須恵器	高坏	10	反				灰	底径 11.0
53	VII a	314	1952	SD01	D3	須恵器	高坏	30	反				灰	脚径 3.2、脚径 11.0
53	VII a	315	690	SD01	C2	須恵器	高坏	40					灰	脚径 3.5、脚径 11.2、底部窯体付着
53	VII a	316	1927	SD01	D3	須恵器	高坏	30	反				灰	脚径 3.4、脚径 11.4
53	VII a	317	817	SD01	D3	須恵器	高坏	30	反				灰	脚径 3.5、脚径 11.6
53	VII a	318	812	SD01	D3	須恵器	高坏	20	反				灰	脚径 3.8、脚径 12.0
53	VII a	319	1925	SD01	D3	須恵器	高坏	30	反				灰	脚径 3.6、脚径 12.6
54	VII a	320	730	SD01	B2	須恵器	広口壺	10	反			11.0	灰白	頸径 9.8
54	VII a	321	1926	SD01	D3	須恵器	広口壺	5	反			17.6	灰	6C 前? 頸径 13.2、外面自然釉
54	VII a	322	309	SD01	B2	須恵器	広口壺	10	反			13.2	灰白	頸径 11.8
54	VII a	323	425・427	SD01	B3・D3	須恵器	広口壺	50		15.0	13.8	9.6	灰	頸径 8.8、自然釉全面付着、ㄻ'リ方向左
54	VII a	324	1201	SD01	C3	須恵器	広口壺	50		18.4		11.0	灰	頸径 11.3、底径 11.0、外面一部自然釉、ㄻ'リ方向左
54	VII a	325	1901	SD01	D3	須恵器	広口壺	80		17.0	19.1	11.0	灰	頸径 9.0、ㄻ'リ方向左
54	VII a	326	1273	SD01	D3	須恵器	広口壺	80		21.8	22.0	12.6	灰	頸径 10.2、底径 6.4、ㄻ'リ方向左
54	VII a	327	1529	SD01	B2	須恵器	広口壺	40	反	20.6		13.4	灰白	頸径 11.8、外面自然釉
54	VII a	328	1434	SD01	D3	須恵器	壺蓋	50		15.6	5.1	11.2	灰白	摘み径 0.9、ㄻ'リ方向左
54	VII a	329	1923	SD01	D3	須恵器	長頸壺	5	反			6.8	灰白	内面灰利-ﾌﾞ 自然釉
54	VII a	330	727	SD01	C2	須恵器	長頸壺					8.4	灰	頸径 4.2、外面自然釉
54	VII a	331	707	SD01	C3	須恵器	長頸壺	5	反			9.6	灰	
54	VII a	332	920	SD01	D3	須恵器	長頸壺	10	反			10.0	灰	
54	VII a	333	692	SD01	C2	須恵器	長頸壺	5				10.9	灰	頸径 4.8、外面自然釉
54	VII a	334	1293	SD01	D3	須恵器	長頸壺	5	反			14.4	灰白	
54	VII a	335	763	SD01	D2	須恵器	長頸壺	70		14.2			灰色	頸径 5.4、ㄻ'リ方向左、肩部・口縁内部自然釉
54	VII a	336	1199・645	SD01	C3・B3	須恵器	長頸壺	40	反	13.2			灰白	ㄻ'リ方向右
54	VII a	337	1687・1279	SD01	D2	須恵器	長頸壺	50	反	13.8			灰白	肩部刺突、ㄻ'リ方向右
54	VII a	338	711・705	SD01	C2・C3	須恵器	長頸壺	5				16.3	灰	自然釉
55	VII a	339	1907	SD01	D3	須恵器	鉢	90		8.2	4.3	7.0	灰白	内面灰利-ﾌﾞ 灰釉、ㄻ'リ方向右
55	VII a	340	658	SD01	C2	須恵器	鉢	80		9.6	4.4	9.0	灰白	ㄻ'リ方向右、内面自然釉
55	VII a	341	1090	SD01	C2	須恵器	鉢	100		9.4	6.6		暗灰黄	底部未調整
55	VII a	342	38	SD01	B3	須恵器	鉢	40	反	10.0	8.1		灰白	ㄻ'リ方向左
55	VII a	343	1931	SD01	E3	須恵器	鉢	5	反	11.4			灰	
55	VII a	344	418	SD01	A3	須恵器	鉢	30	反	12.2		9.2	白灰	底部ﾁｷ
55	VII a	345	707	SD01	C3	須恵器	鉢	40	反	7.0		5.1	灰白	底部静止ㄻ'リ、全面自然釉
55	VII a	346	407	SD01	A2	須恵器	鉢	70		9.6	4.2	9.0	灰	ㄻ'リ方向左、ㄲ記号、自然釉
55	VII a	347	1535	SD01	B2	須恵器	鉢	40	反	9.2	3.8		灰白	ㄻ'リ方向右
55	VII a	348	1914	SD01	D3	須恵器	鉢	40	反	10.0	4.8	9.4	灰白	ㄻ'リ方向右、内面利-ﾌﾞ 灰色灰釉、
55	VII a	349	705	SD01	C3	須恵器	鉢	40	反	10.4		9.2	灰	ㄻ'リ方向左、全面自然釉
55	VII a	350	645	SD01	B3	須恵器	鉢	50	反	10.2	5.1	10.0	黄灰	ㄲ記号、焼ぶくれ、内面自然釉
55	VII a	351	1533	SD01	B2	須恵器	鉢	70		10.2	4.8	10.0	灰白	底径 4.0、ㄻ'リ方向左
55	VII a	352	1193	SD01	C3	須恵器	鉢	40	反	10.6		10.0	灰白	ㄻ'リ方向右、全面自然釉、内面窯体付着
55	VII a	353	633	SD01	B3	須恵器	鉢	80		11.0	4.7	10.0	灰	ㄻ'リ方向右、自然釉
55	VII a	354	1931	SD01	E3	須恵器	短頸壺	30		11.6			灰	
55	VII a	355	811	SD01	D3	須恵器	短頸壺	30	反	13.7		8.4	黄灰	外面一部自然釉
55	VII a	356	797	SD01	D3	須恵器	短頸壺	60		13.6			灰	全面自然釉、ㄻ'リ方向左
55	VII a	357	744	SD01	C2	須恵器	短頸壺	60		12.4	10.5	8.8	灰	外面自然釉、ㄻ'リ方向左
55	VII a	358	665	SD01	B3	須恵器	短頸壺	60		14.0	12.7	10.0	灰	ㄻ'リ方向左
55	VII a	359	787	SD01	D3	須恵器	短頸壺	15	反			14.0	淡橙	
55	VII a	360	1290	SD01	D3	須恵器	鉢	5	反			16.0	灰白	
55	VII a	361	1199	SD01	C3	須恵器	鉢	40	反	17.3			灰白	ﾁｷ
55	VII a	362	916	SD01	C2	須恵器	鉢	20	反	18.0		17.2	灰	ㄻ'リ方向左、自然釉
55	VII a	363	1294	SD01	D3	須恵器	鉢	5	反	16.8		16.4	灰白	口縁内部灰オリ-ﾌﾞ、自然釉

Fig.	層位	番号	取上番号	遺構	グリット	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備 考
55	VII a	364	1929	SD01	D3	須恵器	鉢	5	反			18.0	灰	
55	VII a	365	1849	SD01	E3	須恵器	鉢	10	反			18.0	灰	外面自然釉
55	VII a	366	1243	SD01	D2	須恵器	鉢	10	反	23.0		23.0	灰黄褐	
55	VII a	367	599	SD01	B3	須恵器	鉢	20	反	24.0			灰	ㄐ'リ方向左、沈線
55	VII a	368	655	SD01	B2	須恵器	鉢	30					灰白	ㄐ'リ方向左、底径9.3、ㄐ記号、内面自然釉
56	VII a	369	609	SD01	B2	須恵器	鉢	60		14.4			灰白	外面板による回転ㄐ'、陶臼
56	VII a	370	293	SD01	B3	須恵器	鉢	40	反	15.4	13.0	14.9	灰	底径10.0、外面自然釉、陶臼
56	VII a	371	1921	SD01	D3	須恵器	鉢	20	反	15.0			暗灰	底径9.6、陶臼
56	VII a	372	724	SD01	C2	須恵器	鉢	80		16.0	15.8		灰	底径10.0、小孔2、陶臼
56	VII a	373	413	SD01	A2	須恵器	鉢	10	反	17.8			灰	陶臼
56	VII a	374	736	SD01	C3	須恵器	鉢	20	反	17.4			灰白	陶臼
56	VII a	375	1206	SD01	C2	須恵器	鉢	5	反	17.3			灰白	陶臼
56	VII a	376	1898	SD01	E3	須恵器	鉢	30					灰	底径9.0、焼ぶくれ、陶臼
56	VII a	377	1929	SD01	D3	須恵器	ハソク	5	反				灰	
56	VII a	378	687・737	SD01	B3・C3	須恵器	ハソク	40	反				灰	ㄐ'リ方向右
56	VII a	379	769	SD01	E3	須恵器	ハソク	90					灰	ㄐ'リ方向左、底部未調整
56	VII a	380	788	SD01	E3	須恵器	フラスコ瓶形	30				9.1	灰	頸径5.0
56	VII a	381	793	SD01	E3	須恵器	フラスコ瓶形	80		15.8			灰	ㄐ'リ方向右、全面自然釉
56	VII a	382	414	SD01	A2	須恵器	横瓶	10					灰	
56	VII a	383	432	SD01	D3	須恵器	甕	5	反			18.6	灰	
56	VII a	384	1851	SD01	E3	須恵器	甕	5	反			26.4	灰	
56	VII a	385	424	SD01	B3	須恵器	不明器	5	反				灰	小型坏身状品
56	VII a	386	461	SD01	A3	須恵器	把手	5					暗灰	提瓶の把手?
57	VII a	387	1842	SD01	D3	須恵器	甕	5	反			46.0	灰	
57	VII a	388	1843	SD01	D3	須恵器	甕	5	反			26.5	灰白	
57	VII a	389	1427	SD01	D3	須恵器	甕	5	反			26.2	灰	
57	VII a	390	727	SD01	C2	須恵器	甕	5	反			25.2	灰白	
57	VII a	391	1427	SD01	D3	須恵器	甕	20	反			25.0	灰	頸径19.6
57	VII a	392	1205	SD01	D2	須恵器	甕	5	反			27.8	灰	全面自然釉
57	VII a	393	1250	SD01	C2	須恵器	甕	10	反			31.0	灰白	全面自然釉
57	VII a	394	1266・1813	SD01	D2	須恵器	甕	20	反			41.3	灰色	
58	VII a	395	431	SD01	D3	土師器	坏	40	反	14.2	5.2		にぶい橙	底径4.7、内外放射状ミガキ顯著
58	VII a	396	431	SD01	D3									
58	VII a	397	786	SD01	D3	土師器	内甕坏	40	反	11.2	3.8		にぶい橙	
58	VII a	398	478	SD01	B3	土師器	内甕坏	30	反	14.0	4.7		橙	
58	VII a	399	684	SD01	B3	土師器	内甕坏	70		14.6	5.4		橙	
58	VII a	400	717・729	SD01	B3・C2	土師器	模倣坏	50		14.0	5.1		橙	
58	VII a	401	1849	SD01	E3	土師器	模倣坏	30	反	12.8	4.6		浅黄橙	
58	VII a	402	1294	SD01	D3	土師器	模倣坏	5	反	13.9		13.2	明灰	
58	VII a	403	441	SD01	A2	土師器	模倣坏	10	反	14.0		12.4	浅黄橙	
58	VII a	404	662	SD01	B3	土師器	模倣坏	10	反	14.0		12.4	橙	
58	VII a	405	441	SD01	A2	土師器	模倣坏	20		14.2		12.4	にぶい橙	
58	VII a	406	294	SD01	B3	土師器	有稜高坏	50		14.0	10.2		橙	脚頸径3.4、脚径9.0
58	VII a	407	771	SD01	E3	土師器	高坏	90		8.8	6.8		灰白	脚径4.6、内面にぶい橙
58	VII a	408	464	SD01	A3	土師器	高坏	40					淡橙	脚頸径3.0、脚径9.4
58	VII a	409	416	SD01	A3	土師器	高坏	30					浅黄橙	脚頸径2.9、脚径10.0
58	VII a	410	478	SD01	B3	土師器	高坏	20					橙	脚頸径3.0、脚径9.6
58	VII a	411	695	SD01	C2	土師器	高坏	30					浅黄橙	脚頸径3.0、脚径9.2
58	VII a	412	756	SD01	C3	土師器	高坏	5	反				黄橙	脚径9.6
58	VII a	413	689	SD01	B3	土師器	高坏	20					橙	脚径10.0
58	VII a	414	461	SD01	A3	土師器	高坏	20	反				淡橙	脚頸径4.2、脚径15.2
58	VII a	415	308	SD01	B2	土師器	高坏	30					浅黄橙	脚頸径3.8、脚径12.0
58	VII a	416	920	SD01	D3	土師器	長脚高坏	20					橙	脚頸径5.1、脚径13.0
58	VII a	417	1218	SD01	C3	土師器	長脚高坏	30					浅黄橙	脚頸径3.7
58	VII a	418	1844	SD01	D3	土師器	鉢形坏部高坏	50		13.8	8.4		赤橙	脚頸径5.0、脚径9.4
58	VII a	419	442	SD01	A2	土師器	鉢形坏部高坏	10	反	14.0			橙	
58	VII a	420	458	SD01	A3	土師器	鉢形坏部高坏	20	反	14.0			にぶい橙	
58	VII a	421	418	SD01	A3	土師器	鉢形坏部高坏	5	反	14.2			浅黄橙	
58	VII a	422	441	SD01	A2	土師器	鉢形坏部高坏	20	反	15.8			にぶい赤褐	
58	VII a	423	478	SD01	B3	土師器	鉢形坏部高坏	20					橙	脚頸径5.2、脚径10.0
58	VII a	424	450	SD01	A2	土師器	鉢形坏部高坏	40					橙	脚頸径5.2、脚径9.0
58	VII a	425	646	SD01	B3	土師器	長頸壺	10				9.4	橙	頸径6.3
58	VII a	426	705	SD01	C3	土師器	長頸壺	30	反	15.8			にぶい橙	
58	VII a	427	680	SD01	B3	土師器	把手	5					灰黄	幅2.6
58	VII a	428	477	SD01	B2	土師器	把手						浅黄橙	
59	VII a	429	698	SD01	C3	土師器	外反口縁壺	5	反			17.9	にぶい橙	頸径14.4
59	VII a	430	656	SD01	B2	土師器	外反口縁壺	10	反			17.2	浅黄橙	頸径14.4
59	VII a	431	788	SD01	E3	土師器	外反口縁壺	5	反			17.2	灰白	頸径12.5
59	VII a	432	548	SD01	B3	土師器	外反口縁壺	5	反			18.0	にぶい橙	頸径14.8
59	VII a	433	707	SD01	C3	土師器	外反口縁壺	5	反			19.1	灰白	頸径14.3、内面黒変
59	VII a	434	1918	SD01	D3	土師器	外反口縁壺	10	反			19.7	浅黄橙	頸径15.7
59	VII a	435	1298	SD01	D3	土師器	外反口縁壺	10	反			18.8	黄橙	頸径16.1、外面黒斑
59	VII a	436	757	SD01	D3	土師器	外反口縁壺	20	反				灰黄褐	底径11.8、黒斑
59	VII a	437	1245	SD01	D2	土師器	鉢	40		7.0	2.8		にぶい黄橙	黒斑
59	VII a	438	792	SD01	E3	土師器	鉢	30	反	7.2	3.3	6.9	にぶい橙	
59	VII a	439	464	SD01	A3	土師器	鉢	20	反	7.0	2.9		淡橙	
59	VII a	440	772	SD01	E3	土師器	鉢	80		7.4	3.5	7.1	にぶい黄橙	底径4.0
59	VII a	441	793	SD01	E3	土師器	鉢	80		7.5	3.5	7.0	灰黄	
59	VII a	442	786	SD01	D3	土師器	鉢	30	反	8.5	3.5		灰白	
59	VII a	443	755	SD01	C3	土師器	鉢	10	反	8.8			浅黄橙	
59	VII a	444	752	SD01	E3	土師器	鉢	20	反	9.1	4.1	8.8	灰白	
59	VII a	445	800	SD01	D2	土師器	鉢	80		9.2	4.9		にぶい黄橙	底径4.0
59	VII a	446	1089	SD01	C2	土師器	鉢	100		9.8	3.7		にぶい橙	底径4.5
59	VII a	447	1245	SD01	D2	土師器	鉢	30		10.2			にぶい黄橙	

出土遺物観察表

Fig.	層位	番号	取上番号	遺構	グリット	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備考
59	VII a	448	1293	SD01	D3	土師器	鉢	30	反	10.6	4.8	10.4	にぶい橙	底径 4.8、全面赤彩、内面底部静止ナリ
59	VII a	449	1233	SD01	C2	土師器	鉢	40	反	10.4	4.5	10.1	黄灰	底径 3.3
59	VII a	450	701	SD01	D2	土師器	鉢	60		11.0			にぶい橙色	
59	VII a	451	709	SD01	C2	土師器	鉢	50	反	11.2		10.0	浅灰白	
59	VII a	452	655	SD01	B2	土師器	鉢	10	反	17.0			浅黄	
59	VII a	453	709	SD01	C3	土師器	鉢	10		17.9			灰	
59	VII a	454	782	SD01	D3	土師器	鉢	70		7.6		7.0	にぶい橙	
59	VII a	455	1262	SD01	D2	土師器	鉢	30	反	9.0	4.9		にぶい橙	底径 7.9
59	VII a	456	475	SD01	B2	土師器	鉢	70		9.0	5.0		灰白	底径 3.8
59	VII a	457	1535	SD01	B2	土師器	鉢	70		9.2			浅黄橙	
59	VII a	458	1261	SD01	D2	土師器	鉢	60		9.6	5.8		にぶい黄橙	底径 4.6
59	VII a	459	809	SD01	D3	土師器	く字鉢	30	反	10.2	5.9		浅黄橙	
59	VII a	460	1927	SD01	D3	土師器	く字鉢	10	反			10.3	灰黄	
59	VII a	461	786	SD01	D3	土師器	く字鉢	10	反	12.8			淡黄橙	
59	VII a	462	789	SD01	E3	土師器	く字鉢	5	反	13.8			灰黄	内面暗灰
59	VII a	463	497	SD01	B2	土師器	壺形	100		4.4	3.5	3.0	にぶい黄橙	頸径 3.2
59	VII a	464	496	SD01	B3	土師器	壺形	50		6.0	5.3	5.0	にぶい黄橙	壺
59	VII a	465	1421	SD01	D3	土師器	甔形	20	反	7.0			灰白	
59	VII a	466	790	SD01	E3	土師器	甔形	50	反	7.9	5.3	7.2	にぶい黄橙	
59	VII a	467	707	SD01	C3	土製品	革袋形	30					灰白	
60	VII a	468	812	SD01	D3	土師器	坏	30	反	12.8			明赤褐色	暗文、畿内産、飛鳥Ⅳ期
60	VII a	469	818	SD01	D3	土師器	坏	40	反	12.4	3.2		にぶい黄橙	暗文、畿内産、飛鳥Ⅳ期
60	VII a	470	818	SD01	D3	土師器	坏	10	反	12.0			明褐	暗文
60	VII a	471	1247	SD01	D3	土師器	坏	20	反	13.2			明褐	暗文
60	VII a	472	809	SD01	D3	土師器	坏	50	反	14.4	3.1		明赤褐	暗文、全面赤彩
60	VII a	473	804	SD01	D2	土師器	坏	10	反	15.0			赤褐	暗文、全面赤彩
60	VII a	474	817	SD01	D3	土師器	坏	30	反	16.0			褐	暗文、全面赤彩、外面煤付着
60	VII a	475	1247	SD01	D3	土師器	坏	10	反	16.0			にぶい赤褐	暗文、内面赤彩
60	VII a	476	711	SD01	C2	土師器	坏	30	反	16.8	3.7		橙	暗文
60	VII a	477	428	SD01	D3	土師器	坏	10	反	15.0			灰黄褐	暗文
60	VII a	478	430	SD01	D3	土師器	坏	10	反	16.0			にぶい橙	暗文
60	VII a	479	667	SD01	C2	土師器	坏	40	反	14.8	2.7		橙	暗文
60	VII a	480	701	SD01	D2	土師器	坏	30	反	14.6	2.3		橙	暗文、全面赤彩
60	VII a	481	818	SD01	D3	土師器	坏	5	反	16.4	2.2		にぶい橙	暗文
60	VII a	482	1279	SD01	D2	土師器	坏	10	反	17.0			明赤褐色	暗文、全面赤彩
60	VII a	483	700	SD01	D2	土師器	高盤	50	反	19.3	5.1		橙色	暗文
60	VII a	484	792	SD01	E3	土師器	高盤	10	反				灰白	暗文
60	VII a	485	294	SD01	B3	土師器	高盤	30	反	23.6			にぶい橙	暗文、赤彩
61	VII a	486	682	SD01	B3	土師器	甕	60		19.6	25.0	19.0	にぶい黄橙	外面煤付着、底部支脚痕
61	VII a	487	646	SD01	B3	土師器	甕	40		26.5		20.0	にぶい黄橙	揃みあげ口縁、外面煤付着、伊勢・尾張系
61	VII a	488	483・476	SD01	B3	土師器	甕	20				16.0	灰黄	揃みあげ口縁、外面煤付着、伊勢・尾張系
61	VII a	489	737	SD01	C3	土師器	甕	5				16.0	灰白(裏面褐灰)	駿河系、口縁部煤付着
61	VII a	490	1535	SD01	B2	土師器	甕	20	反	10.6		12.0	灰	外面煤付着
61	VII a	491	215	SD01	A3	土師器	甕	10	反	12.8		13.0	明褐灰	
61	VII a	492	813	SD01	D3	土師器	甕	20				13.6	灰黄	口縁ゆがみ大、外面煤付着
61	VII a	493	698	SD01	C3	土師器	甕	10	反	13.8		14.4	にぶい黄橙	
61	VII a	494	1266	SD01	D2	土師器	甕	10	反	16.2		14.8	浅黄橙	
61	VII a	495	650	SD01	B3	土師器	甕	10	反			15.0	橙	
61	VII a	496	478	SD01	B3	土師器	甕	5	反			15.0	にぶい黄橙	
61	VII a	497	1293	SD01	D3	土師器	甕	10				15.7	にぶい黄橙	
61	VII a	498	1208	SD01	B2	土師器	甕	20	反	15.2		16.0	灰	
61	VII a	499	478	SD01	B3	土師器	甕	20	反			16.0	にぶい橙	
61	VII a	500	1813	SD01	E3	土師器	甕	5	反			16.4	にぶい黄橙	
61	VII a	501	1204	SD01	C3	土師器	甕	5	反			16.2	にぶい橙	
61	VII a	502	719	SD01	C3	土師器	甕	10	反			16.4	明褐灰	
61	VII a	503	419	SD01	A3	土師器	甕	10	反			16.4	灰黄	
61	VII a	504	22	SD01	D2・D3	土師器	甕	10	反	15.7		16.7	灰白	
62	VII a	505	787	SD01	D3	土師器	甕	10	反			16.8	浅黄橙	頸径 14.3
62	VII a	506	37	SD01	B2	土師器	甕	20	反	15.8		17.0	浅黄橙	頸径 14.0
62	VII a	507	656	SD01	B2	土師器	甕	5	反			17.0	浅黄橙	頸径 14.0、外面煤付着
62	VII a	508	420	SD01	A3	土師器	甕	5	反			17.4	淡橙	頸径 14.0
62	VII a	509	1928	SD01	D3	土師器	甕	5	反			17.4	にぶい黄橙	頸径 14.6、外面煤付着
62	VII a	510	294	SD01	B3	土師器	甕	20	反			18.0	浅黄橙	頸径 14.8、外面煤付着
62	VII a	511	1843	SD01	D3	土師器	甕	10	反			18.0	灰黄	頸径 16.6、煤付着
62	VII a	512	662	SD01	B3	土師器	甕	10	反			18.6	灰黄	頸径 16.0、煤付着
62	VII a	513	719	SD01	C3	土師器	甕	10	反			18.6	浅黄橙	頸径 14.4
62	VII a	514	687	SD01	B3	土師器	甕	10	反			19.0	にぶい黄橙	頸径 15.7
62	VII a	515	702	SD01	C2	土師器	甕	10	反			19.2	うすい黄橙	頸径 18.0
62	VII a	516	418	SD01	A3	土師器	甕	5	反			19.2	淡橙	頸径 15.4
62	VII a	517	697	SD01	C3	土師器	甕	5	反			19.3	灰白	頸径 16.3
62	VII a	518	20	SD01	A3・B3	土師器	甕	20	反	18.4		19.4	灰白	頸径 154.4、外面煤付着
62	VII a	519	666	SD01	B3	土師器	甕	10	反			19.6	にぶい橙	頸径 17.5
62	VII a	520	1264	SD01	D2	土師器	甕	10	反			19.8	にぶい赤褐	頸径 15.7、外面煤付着
62	VII a	521	1813	SD01	E3	土師器	甕	5	反			20.0	にぶい黄橙	頸径 16.4
62	VII a	522	461	SD01	A3	土師器	甕	5	反			20.2	灰黄(煤)	頸径 17.3、煤付着
62	VII a	523	446	SD01	A2	土師器	甕	5				20.2	にぶい黄橙	頸径 17.0
62	VII a	524	784	SD01	D3	土師器	甕	10	反			20.4	灰白	頸径 15.2、口縁部煤付着
62	VII a	525	1179	SD01	C3	土師器	甕	5	反			20.4	浅黄橙	頸径 15.8
63	VII a	526	738	SD01	C3	土師器	甕	5	反			21.4	灰白	頸径 17.5、外面煤付着
63	VII a	527	697	SD01	C3	土師器	甕	5	反			21.5	浅黄橙	頸径 19.6、全面煤付着
63	VII a	528	590	SD01	B2	土師器	甕	10	反			22.0	橙	頸径 20.0
63	VII a	529	794	SD01	B3	土師器	甕	5	反			23.0	にぶい橙	頸径 19.0
63	VII a	530	414	SD01	A2	土師器	甕	50		20.9		20.6	淡橙	頸径 16.0
63	VII a	531	701	SD01	D2	土師器	甕	5	反			24.4	にぶい黄橙	頸径 18.8、煤付着

Fig.	層位	番号	取上番号	遺構	グリット	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備考
63	VII a	532	406	SD01	A2	土師器	甕	5	反			23.6	灰	頸径 20.5
63	VII a	533	308	SD01	B2	土師器	甕	10	反			25.2	浅黄橙	頸径 19.8、外面煤付着
63	VII a	534	719	SD01	C3	土師器	甕	10	反			25.6	明灰褐	頸径 23.0
63	VII a	535	756	SD01	C3	土師器	甕	5	反			26.0	浅黄橙	頸径 22.4、外面一部黒斑
63	VII a	536	698	SD01	C3	土師器	甕	20	反			26.5	灰白	頸径 23.0、全面煤付着
63	VII a	537	792	SD01	E3	土師器	甕	5	反			27.0	にぶい黄橙	頸径 23.2、煤付着
63	VII a	538	645	SD01	B3	土師器	甕	5	反			29.0	にぶい橙	頸径 24.4
63	VII a	539	807	SD01	D2	土師器	甕	10	反			30.6	黄褐	頸径 27.1、外面煤付着
63	VII a	540	719	SD01	C3	土師器	甕	5	反			30.9	灰白	頸径 27.4、外面煤付着
63	VII a	541	813	SD01	D3	土師器	甕	10	反			31.0	にぶい褐	頸径 24.4、全面煤付着
63	VII a	542	702	SD01	C2	土師器	甕	5	反			32.8	灰	頸径 29.5、煤付着
63	VII a	543	463	SD01	A3	土師器	甕	5	反	34.6		33.2	灰黄	頸径 35.5、黒斑
63	VII a	544	424	SD01	B3	土師器	甕	5	反			33.6	橙	頸径 28.3
64	VII a	545	478	SD01	B3	土師器	大型甕	5	反			36.0	灰黄	頸径 33.4
64	VII a	546	736	SD01	C3	土師器	大型甕	10	反			39.4	浅黄橙	頸径 37.8、外面煤付着
64	VII a	547	294	SD01	B3	土師器	大型甕	5	反			40.0	灰黄	頸径 37.0
64	VII a	548	685	SD01	B3	土師器	大型甕	20	反	40.0			にぶい黄橙	頸径 37.8、全面煤付着
64	VII a	549	478	SD01	B3	土師器	大型甕	50	反	34.0			にぶい黄橙	頸径 31.8、外面煤付着
64	VII a	550	649	SD01	B3	土師器	大型甕	10	反	38.0			にぶい橙	頸径 31.6、外面煤付着
64	VII a	551	777	SD01	E3	土師器	甕	50	反	16.2			灰黄	頸径 13.9、口縁無刺突・ヨコナ
64	VII a	552	450	SD01	A2	土師器	甕	40					にぶい橙	脚頸径 6.8、底径 12.4
64	VII a	553	1905	SD01	E3	土師器	甕	10					にぶい黄橙	脚頸径 7.2、底径 14.4
64	VII a	554	1208	SD01	B2	土師器	甕	20	反				浅黄橙	脚頸径 8.6、底径 8.6、外面煤付着
64	VII a	555	1918	SD01	D3	土師器	甕	10	反				灰黄	脚頸径 6.2
64	VII a	556	786	SD01	D3	土師器	甕	10	反				灰黄	底径 12.2
64	VII a	557	799	SD01	D3	土師器	甕	20					灰白	脚頸径 8.0、底径 14.4、外面煤付着
65	VII a	558	818	SD01	D3	土師器	甕	10	反	20.4			明褐灰	
65	VII a	559	447	SD01	A2	土師器	甕	5	反	24.6			にぶい橙	
65	VII a	560	737	SD01	C3	土師器	甕	5	反	29.5			灰白	
65	VII a	561	447	SD01	A2	土師器	甕	5	反	34.0			にぶい橙	
65	VII a	562	1918	SD01	D3	土師器	甕	10	反				橙	底径 10.0
65	VII a	563	1921	SD01	D3	土師器	甕	10	反				淡黄橙	底径 11.0
65	VII a	564	793	SD01	E3	土師器	甕	10	反				浅黄橙	底径 12.8
65	VII a	565	817	SD01	D3	土師器	甕	10	反				浅黄橙	底径 17.4、外面煤付着
65	VII a	566	1914	SD01	D3	土師器	甕	10					黄橙	
65	VII a	567	752	SD01	E3	土師器	甕	5					浅黄橙	穿孔
65	VII a	568	1262	SD01	D2	土師器	甕	5					にぶい黄橙	
65	VII a	569	1293	SD01	D3	須恵器	高坏	20	反				灰白	内面漆溜まり、断面漆付着
65	VII a	570	702	SD01	C2	須恵器	坏身	60		10.8	3.1		灰	内面漆溜まり
65	VII a	571	1152	SD01	C3	金属製品	耳環	100		3.3	2.9	0.8		30.2g、銅芯のみ遺存
65	VII a	572	1201	SD01	C3	金属製品	耳環	100		3.2	2.8	0.8		24.3g、金銅板残存
65	VII a	573	1292	SD01	D3	銅製品	有孔円盤			6.1	5.8	0.9		3.7g、2×4、中央方形孔 1
65	VII a	574	776	SD01	E3	土製品	紡錘車	100		5.3	2.2		明褐灰	48.2g
65	VII a	575	796	SD01	B3	土製品	土鉢	100		4.4	9.6	4.6	にぶい黄橙	166.1g
65	VII a	576	713	SD01	B3	土製品	土鉢	40		3.5	4.8		明褐灰	50.5g
65	VII a	577	440	SD01	A2	土製品	轆轤口						にぶい橙	
65	VII a	578	1295	SD01	D2	土製品	轆轤口						橙、灰	内径 2.3
66	VII a	579	1179	SD01	C3	石製品	砥石			3.8	6.8	2.2	灰白	68.3g、凝灰岩
66	VII a	580	696	SD01	C3	石製品	砥石			5.4	6.8	3.1		137.9g、矢柄研磨痕
66	VII a	581	1912	SD01	D3	石製品	砥石			7.9	6.2	2.7		112.6g、凝灰岩、両面穿孔
66	VII a	582	1298	SD01	D3	石製品	砥石			8.5	8.3	3.1		177.0g、凝灰岩
66	VII a	583	921	SD01	D3	石製品	砥石			4.6	10.9	2.5		165.6g、砂岩、矢柄研磨痕
66	VII a	584	1203	SD01	C3	石製品	砥石			5.1	11.4	4.5		300.8g、凝灰岩
66	VII a	585	311	SD01	B2	石製品	砥石			4.7	12.5	2.5		180.3g、凝灰岩
66	VII a	586	654	SD01	B3	石製品	砥石			10.6	9.0	7.0		642g、砂岩？、幅 1.5 cm 程度の溝
66	VII a	587	707	SD01	C3	石製品	砥石			7.8	9.0	5.9		485.2g、凝灰岩
66	VII a	588	780	SD01	D2	石製品	砥石			8.5	13.2	3.2		512.0g、凝灰岩
66	VII a	589	1927	SD01	D3	石製品	砥石			9.2	15.9	2.8		386.5g、凝灰岩
66	VII a	590	501	SD01	B2	石製品	砥石			9.9	26.5	8.3		2518g、凝灰岩
66	VII a	591	500	SD01	B2	石製品	砥石			12.8	16.3	8.4		1850g、凝灰岩
74	V	1	25	SS01	E3	須恵器	摘蓋	60		15.6	3.3		灰	摘み 2.5、ｸｽﾞﾘ方向左
74	V	2	373	SS01	E3	須恵器	無台碗	10	反	13.2			灰	
74	V	3	371	SS01	E3	須恵器	無台碗	30	反	13.4	4.1		暗灰	
74	V	4	373	SS01	E3	須恵器	無台碗	10	反	15.0			暗灰	
74	V	5	317	SS02	E3	須恵器	摘蓋	50		15.1	3.1		暗灰	摘み 2.8、ｸｽﾞﾘ方向左
74	V	6	1535	SS02	E3	須恵器	有台坏身	30	反				灰	1号墨書「逆」、ｸｽﾞﾘ方向右
74	V	7	315	SS02	E3	須恵器	有台坏身	20	反		4.4	14.0	灰褐	底径 10.0、へり記号
74	V	8	315	SS02	E3	須恵器	有台坏身	10	反	14.6	3.9		暗灰	底径 10.4
74	V	9	317	SS02	E3	須恵器	有台坏身	20	反	14.5	4.0		灰白	底径 9.4、内面煤？、ｸｽﾞﾘ方向左
74	V	10	315	SS02	E3	須恵器	有台坏身	50	反	15.4	4.1		灰白	
74	V	11	315	SS02	E3	須恵器	有台坏身	50		12.4	4.2		灰	転用硯、底径 11.8
74	V	12	317	SS02	E3	須恵器	無台碗	10	反	14.4			暗灰	
74	V	13	213	SS02	E3	須恵器	無台碗	20	反	14.8			灰	
74	V	14	317	SS02	E3	須恵器	無台碗	70		14.0	4.4		灰白	底径 6.8、底部未調整
74	V	15	315	SS02	E3	須恵器	無台碗	40	反	14.0	4.0		暗灰	底径 6.7、底部未調整
74	V	16	372	SS02	E3	須恵器	無台碗	20	反	16.2			明灰白	
74	V	17	315	SS02	E3	須恵器	無台碗	10	反	15.8			灰白	口縁部黒変
74	V	18	374	SS02	E3	須恵器	鉢	20	反	20.4			オリーブ黒	頸径 19.7、ｸｽﾞﾘ方向左
74	V	19	374	SS02	E3	土師器	坏	20	反	17.6			薄茶	暗文、全面赤彩（内面褐色に発色）
74	V	20	374	SS02	E3	土師器	坏	10	反	17.8			にぶい黄橙	全面赤彩
74	V	21	213	SS02	E3	土師器	碗	5					にぶい黄褐	墨痕、木葉痕
74	V	22	374	SS02	E3	土師器	甕	20	反	17.7		15.4	にぶい黄橙	頸径 13.2
74	V	23	317	SS02	E3	土師器	甕	10	反			20.0	薄茶	頸径 18.6
74	V	24	374	SS02	E3	土師器	甕	10	反	31.0			薄茶	頸径 27.2

出土遺物観察表

Fig.	層位	番号	取上番号	遺構	グリット	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備 考
74	V	25	213	SS02	E3	土師器	鉢形	20	反	17.1			灰	頸径 15.4、底径 8.0、把手付き
74	V	26	213	SS02	E3	土師器	鉢形	10		14.8			にぶい橙	頸径 14.0
74	V	27	317	SS02	E3	土師器	鉢形	10	反	17.1			にぶい橙	頸径 16.2、把手付き
74	V	28	317	SS02	E3	土師器	壺形	50	反	3.1	2.8	2.4	にぶい黄橙	底径 2.0
74	V	29	399	SS02	E3	土師器	製塩土器	10	反	7.2			にぶい褐	
74	V	30	317	SS02	E3	土師器	製塩土器	30		7.8			赤灰	精良胎土・須恵質焼成
74	V	31	181	SS02	E3	土師器	製塩土器	10	反	7.4			灰褐	精良胎土
74	V	32	317	SS02	E3	土師器	製塩土器	30		7.9			にぶい褐	精良胎土
74	V	33	317	SS02	E3	土師器	製塩土器	20	反	8.0			灰褐	精良胎土、口縁部工具の跡あり
74	V	34	317	SS02	E3	土師器	製塩土器	20		8.0			にぶい黄褐	精良胎土
74	V	35	317	SS02	E3	土師器	製塩土器	20		8.0			灰褐	精良胎土
74	V	36	317	SS02	E3	土師器	製塩土器	20		8.3			灰黄褐	精良胎土
74	V	37	374	SS02	E3	土師器	製塩土器	10	反	8.2			灰黄褐	精良胎土
74	V	38	317	SS02	E3	土師器	製塩土器	20		8.2			灰褐	精良胎土
74	V	39	317	SS02	E3	土師器	製塩土器	20	反	8.2			灰褐	精良胎土
74	V	40	317	SS02	E3	土師器	製塩土器	20		8.2			灰褐	精良胎土
74	V	41	317	SS02	E3	土師器	製塩土器	20	反	8.2			灰褐	精良胎土
74	V	42	792	SS02	E3	土師器	製塩土器	30	反	8.4			灰黄褐	精良胎土
74	V	43	792	SS02	E3	土師器	製塩土器	20		8.4			灰黄褐	精良胎土
74	V	44	213	SS02	E3	土師器	製塩土器	20	反	8.4			灰黄褐	精良胎土
74	V	45	317	SS02	E3	土師器	製塩土器	10		8.4			褐灰	精良胎土
74	V	46	315	SS02	E3	土師器	製塩土器	20		8.4			灰黄褐	精良胎土
74	V	47	317	SS02	E3	土師器	製塩土器	20		8.6			灰褐	精良胎土
74	V	48	317	SS02	E3	土師器	製塩土器	40		8.6			灰黄褐	精良胎土
74	V	49	752	SS02	E3	土師器	製塩土器	20	反	8.8			灰褐色	精良胎土
74	V	50	792	SS02	E3	土師器	製塩土器	10		9.0			灰黄褐色	精良胎土
74	V	51	374	SS02	E3	土師器	製塩土器	30		9.0			灰褐色	精良胎土
74	V	52	374	SS02	E3	土師器	製塩土器	20	反	9.4			灰褐色	精良胎土
74	V	53	792	SS02	E3	土師器	製塩土器	30		9.6			灰褐色	精良胎土
74	V	54	317	SS02	E3	土師器	製塩土器	20		9.6			灰黄褐色	精良胎土
74	V	55	315	SS02	E3	土師器	製塩土器	30		9.8			灰黄褐色	精良胎土
74	V	56	317	SS02	E3	土師器	製塩土器	20		8.8			灰黄褐色	精良胎土
74	V	57	374	SS02	E3	土師器	製塩土器	20	反	8.0			褐灰色	粗い胎土
74	V	58	187	SS02	E3	土師器	製塩土器	10	反	8.2			黒褐色	粗い胎土
74	V	59	317	SS02	E3	土師器	製塩土器	20		8.4			橙色	粗い胎土
74	V	60	187	SS02	E3	土師器	製塩土器	20		8.6			黒褐色	粗い胎土
74	V	61	317	SS02	E3	土師器	製塩土器	10	反	8.6			橙色	粗い胎土
74	V	62	317	SS02	E3	土師器	製塩土器	20		9.2			黒褐色	粗い胎土
75	V	63	830	SS04	B2	須恵器	無蓋高坏	70	反	14.0	11.7		灰白	脚頸径 3.6、底径 10.0
75	V	64	1208	SS04	B2	須恵器	有台坏身	30	反	13.4	3.8		灰白	底径 10.3
75	V	65	1588	SS04	B1・B2	須恵器	有台坏身	40		13.8	3.6		灰白	底径 10.6、外面自然釉
75	V	66	1535	SS04	B2	須恵器	有台坏身	30		14.0	3.8		灰	底径 10.6、ㄐ方向左
75	V	67	828	SS04	B2	須恵器	有台坏身	40	反	14.8	4.0		灰白	底径 10.2、ㄐ方向左
75	V	68	1207	SS04	B2	須恵器	有台坏身	30	反	15.2	3.9		灰	底径 10.0、ㄐ方向左
75	V	69	1207・1588	SS04	B1・B2	須恵器	有台坏身	50		15.2	6.5		灰白	底径 9.4、天平、湖西、ㄐ方向右
75	V	70	1207	SS04	B2	須恵器	無台坏身	20	反	13.8	3.8		灰白	ㄐ方向左
75	V	71	1207	SS04	B2	須恵器	無台碗	40	反	15.0	5.0		灰白	底部未調整
75	V	72	1207	SS04	B2	須恵器	無台碗	10	反	15.0			灰白	
75	V	73	1207	SS04	B2	須恵器	無台碗	30	反	15.4	4.8		灰	ㄐ方向右
75	V	74	1207	SS04	B2	須恵器	無台碗	40		17.0	4.7		灰白	
75	V	75	1207	SS04	B2	須恵器	無台碗	10	反	14.0			灰白	
75	V	76	1207	SS04	B2	須恵器	無台碗	10	反	15.0			灰白	
75	V	77	1588	SS04	B1・B2	須恵器	短頸壺	10	反			16.0	灰	
75	V	78	836	SS04	B1	須恵器	短頸壺	10	反			16.0	灰白	
75	V	79	1588	SS04	B1・B2	土師器	坏	10	反	16.0	2.6		明褐灰	
75	V	80	1588	SS04	B1・B2	土師器	坏	10	反	17.8			灰	暗文、内面赤彩
75	V	81	835・1297	SS04	B1・B2	土師器	坏	30	反	16.4	2.0		褐灰	暗文、全面うすい赤彩
75	V	82	1588	SS04	B1・B2	土師器	甕	10	反			20.4	浅黄橙	外面煤付着
75	V	83	1208	SS04	B2	土師器	甕	10	反			28.0	橙	外面煤付着
75	V	84	121	SS04	B1	土師器	製塩土器	10		8.2			にぶい赤褐	精良胎土
75	V	85	1588	SS04	B1・B2	土師器	製塩土器	20		9.0			灰褐	精良胎土
75	V	86	1588	SS04	B1・B2	土師器	製塩土器	20	反	9.0			灰褐	精良胎土
75	V	87	1588	SS04	B1・B2	土師器	製塩土器	20		9.8			灰黄褐	精良胎土
75	V	88	1208	SS04	B2	石製品	砥石			6.7	8.7	3.5	灰白	264.6g、凝灰岩
75	V	89	836	SS04 上層	B1	須恵器	摘蓋	50		16.5	2.7		灰白	摘み 2.7、ㄐ方向左
75	V	90	835	SS04 上層	B1	須恵器	摘蓋	10	反	15.0			灰白	
75	V	91	835	SS04 上層	B1	土師器	坏	10	反	12.0			灰白	暗文、外面赤彩
75	V	92	835	SS04 上層	B1	土師器	坏	10	反	14.2	2.1		灰白	暗文、全面赤彩
75	V	93	835	SS04 上層	B1	土師器	坏	10	反	16.0	2.6		明褐灰	暗文、内面赤彩
75	V	94	835	SS04 上層	B1	土師器	坏	20	反	16.0			褐灰	暗文、内面赤彩
75	V	95	836	SS04 上層	B1	土師器	甕	10	反			18.2	浅黄橙	頸径 13.3、外面煤付着
77	V	99	395	SD01	C3	須恵器	坏身	50	反	11.1		9.4	灰	ㄐ方向右
77	V	100	365	SD01	C2	須恵器	坏身	50	反	10.3	3.2	8.6	灰	底部未調整
77	V	101	282	SD01	A2	須恵器	無台坏身	40	反	10.2	3.6		灰色	底部未調整
77	V	102	394	SD01	C3	須恵器	無台坏身	50	反	11.0	4.2		灰色	底部未調整
77	V	103	1098	SD01	C3	須恵器	無台坏身	80		11.6	5.0		灰	ㄐ方向右、外面鉢状に近い沈線
77	V	104	287	SD01	A3	須恵器	無台坏身	70		13.0	4.1		灰	ㄐ方向右
77	V	105	365	SD01	C2	須恵器	無台坏身	80		13.0	4.8		灰	ㄐ方向右
77	V	106	615	SD01	B2	須恵器	無台坏身	40	反	18.8	4.4		灰	底部調整不明
77	V	107	2023	SD01	D5	須恵器	摘蓋	80		15.0	3.1		灰	摘み 2.6、ㄐ方向左
77	V	108	215	SD01	A3	須恵器	摘蓋	30	反	15.6		15.2	灰	ㄐ方向左
77	V	109	213	SD01	E3	須恵器	摘蓋	20		17.1	3.1		にぶい橙	摘み 2.7
77	V	110	1081	SD01	D2	須恵器	摘蓋	70		15.8	3.4		灰	摘み 2.7、ㄐ方向左
77	V	111	116	SD01	C2	須恵器	摘蓋	90		15.6	2.9		灰	摘み 3.0、ㄐ方向左、自然釉

Fig.	層位	番号	取上番号	遺構	グリット	種別	細別	残存率	反転	口径	器高	口径	色調	備 考
77	V	112	790	SD01	E3	須恵器	摘蓋	40	反	15.8	3.8		灰白	摘み 2.7、ㄏ'リ方向左、外面自然釉
77	V	113	212	SD01	D3	須恵器	有台坏身	20	反	13.5	4.0		暗灰	底径 10.8
77	V	114	364	SD01	C2	須恵器	有台坏身	50	反	14.8	4.3		灰	底径 8.0、ㄏ'リ方向左
77	V	115	392	SD01	C2	須恵器	有台坏身	80		14.2	4.4		灰	底径 10.8、ㄏ'リ方向左
77	V	116	399	SD01	E3	須恵器	有台坏身	20	反	15.6	4.0		灰褐	底径 10.8
77	V	117	20	SD01	A3・B3	須恵器	有台坏身	20		13.4	4.1		灰白	底径 8.0
77	V	118	363	SD01	C2	須恵器	有台坏身	30	反	15.2	3.4		灰褐	底径 10.8、ㄏ'リ方向左
77	V	119	391	SD01	C2	須恵器	有台坏身	10	反	17.0	3.9		灰褐	底径 12.6
77	V	120	399	SD01	E3	須恵器	有台坏身	10	反	14.6	3.4		暗灰	底径 10.8
77	V	121	829	SD01	B2	須恵器	有台坏身	60	反	14.2	3.7		灰	底径 9.8、ㄏ'リ方向左
77	V	122	399	SD01	E3	須恵器	無台碗	40	反	14.6	5.1		灰褐	底部未調整
77	V	123	397	SD01	E2	須恵器	無台碗	50	反	14.6			灰	底部未調整
77	V	124	391	SD01	C2	須恵器	無台碗	30	反	14.6	4.2		暗灰	底部未調整、内面煤付着
77	V	125	10	SD01	C2	須恵器	無台碗	60		14.9	4.2		灰	底部未調整
77	V	126	284	SD01	A3	須恵器	無台碗	20	反	14.8	3.5		灰褐	底部手持ㄏ'リ
77	V	127	352	SD01	B3	須恵器	無台碗	30	反	14.3	4.5		暗灰	ㄏ'リ方向左、焼ぶくれ
77	V	128	140	SD01	E3	須恵器	無台碗	20	反	14.4			灰	ㄏ'リ方向左、黒変?
77	V	129	615	SD01	B2	須恵器	無台碗	20	反	14.4			灰	ㄏ'リ方向左
77	V	130	1059	SD01	D2	須恵器	無台碗	90		15.0	5.0		灰	ㄏ'リ方向左
77	V	131	87	SD01	B1	須恵器	無台碗	10	反	15.0			灰白	ㄏ'リ方向左
77	V	132	283	SD01	A2	須恵器	鉢	30					青灰	陶臼、穿孔 3 × 方向不明 + 1 × 未貫通
77	V	133	307	SD01	B3	須恵器	ハワ	80					明灰	ㄏ'リ方向左
77	V	134	356	SD01	B3	須恵器	壺蓋	30	反	10.7	3.7	8.4	灰	
77	V	135	117	SD01	C2	須恵器	長頸壺	40				12.4	灰	頸径 4.6
77	V	136	362	SD01	C2	須恵器	壺	10				22.2	灰	頸径 17.2
77	V	137	368	SD01	E3	須恵器	摘蓋	40					灰	摘み 2.7、転用硯、外面施釉
77	V	138	10	SD01	C2	須恵器	摘蓋	40	反	15.4	3.4		灰	摘み 2.7、転用硯、ㄏ'リ方向左
77	V	139	399	SD01	E3	須恵器	有台坏身	20	反				暗褐	底径 10.6、転用硯
77	V	140	357	SD01	B2	須恵器	円面硯	5					灰白	中空把手付円面硯、円形跡
78	V	141	187	SD01	E3	土師器	坏	30	反	14.3	2.8		褐灰	
78	V	142	1962	SD01	E3	土師器	坏	20	反	15.6			にぶい橙	全面赤彩、暗文
78	V	143	399	SD01	E3	土師器	坏	20	反	15.7	5.4		灰白	全面赤彩
78	V	144	186	SD01	E3	土師器	坏	10		12.6			にぶい黄橙	底部指調整
78	V	145	230	SD01	B3	土師器	坏	10	反	14.4			にぶい橙	全面赤彩
78	V	146	229	SD01	A3	土師器	坏	40	反	16.6			赤橙	全面赤彩
78	V	147	427	SD01	D3	土師器	坏	50		14.6	2.9		にぶい赤褐	口縁内部沈線
78	V	148	230	SD01	B3	土師器	坏	20	反	17.4			淡橙	全面赤彩、暗文
78	V	149	69	SD01	A3	土師器	壺	5	反			19.4	淡橙	頸径 15.4
78	V	150	361	SD01	C2	土師器	壺	20	反			15.0	浅黄橙	頸径 11.4
78	V	151	224	SD01	A2	土師器	壺	10	反	18.6			にぶい橙	頸径 13.9
78	V	152	365	SD01	C2	土師器	壺	5	反			29.4	浅黄橙	頸径 24.8、外面煤付着
78	V	153	139	SD01	C2	土師器	壺	5	反			27.6	灰褐	頸径 24.7
78	V	154	1959	SD01	A3	土師器	壺	5	反			16.0	灰黄	頸径 14.4
78	V	155	314	SD01	D3	土師器	壺	10	反	16.6		14.8	浅黄橙	頸径 14.5
78	V	156	390	SD01	C2	土師器	小碗	40		7.2	2.9		灰白	
78	V	157	399	SD01	E3	土師器	小碗	20	反	7.2	2.6		にぶい橙	
78	V	158	390	SD01	C2	土師器	小碗	30	反	7.2			にぶい黄橙	
78	V	159	1053	SD01	E3	土師器	小碗	90		7.2	4.5		灰黄	
78	V	160	1207	SD01	B2	土師器	小碗	90		7.2	3.7		灰黄	
78	V	161	361	SD01	C2	土師器	小碗	50		7.3	2.8		にぶい橙	
78	V	162	138	SD01	C2	土師器	小碗	70		7.4	2.6		にぶい黄橙	
78	V	163	1031	SD01	E3	土師器	小碗	100		7.5	3.0		にぶい橙	
78	V	164	615	SD01	B2	土師器	小碗	50	反	7.6	4.2		にぶい橙	
78	V	165	215	SD01	A3	土師器	小碗	30	反	7.6	4.2		にぶい橙	外面未調整
78	V	166	1083	SD01	D2	土師器	小碗	20	反	8.0			淡黄	
78	V	167	615	SD01	B2	土師器	小碗	20	反	8.6			にぶい橙	
78	V	168	1150	SD01	C2・C3	土師器	小碗	40	反	9.0	3.7		浅黄橙	
78	V	169	226	SD01	A2	土師器	小碗	70	反	10.6			灰白	
78	V	170	224	SD01	A2	土師器	小碗	20	反	13.4			浅黄橙	
78	V	171	142	SD01	D2	土師器	甗形	30		7.5	4.6		灰黄褐	
78	V	172	1959	SD01	A3	土師器	甗形	40	反	9.2		8.6	にぶい橙	
78	V	173	212	SD01	D3	土師器	甗形	20	反	12.4			にぶい橙	
78	V	174	464	SD01	A3	土師器	鉢形	20	反	17.2			浅黄橙	内面一部赤彩、煤付着
78	V	175	1058	SD01	D2	土師器	高盤形	60					にぶい橙	脚頸径 2.4、底径 3.6
78	V	176	1082	SD01	D2	土師器	高盤形	40					にぶい橙	脚頸径 2.6、底径 3.2
78	V	177	290	SD01	B3	土製品	土馬			3.0	6.5	5.2	にぶい橙	
78	V	178	289	SD01	B3	土製品	土馬			3.3	7.2	5.1	にぶい橙	耳取り付け痕
78	V	179	1942	SD01	A3	骨角製品	ト骨			3.1	17.7	0.2		十字形焼火箸痕
78	V	180	141	SD01	C2	石製品	砥石			3.3	4.7	1.5		30.7g、凝灰岩、提砥
78	V	181	365	SD01	C2	石製品	砥石			6.0	4.8	4.7	灰	56.3g、軽石
88	IV b	1	216	SE01	E3	須恵器	摘蓋	5	反	15.4		14.6	灰白色	2号墨書「竹田女」
88	IV b	2	216	SE01	A3	須恵器	摘蓋	10	反	15.6		15.0	灰白	
88	IV b	3	216	SE01	A3	須恵器	箱付	10	反				灰白	底径 11.8、ㄏ'リ方向右、黒斑
88	IV b	4	313	SE01	A3	須恵器	壺蓋	40	反	7.4		4.8	灰	自然釉顕著
88	IV b	5	57・216	SE01	A3	須恵器	長頸壺	50	反	16.0	20.0	7.6	灰白	頸径 6.4、底径 8.0、ㄏ'リ方向左、外面自然釉
88	IV b	6	388	SE01	A3	土師器	鉢	10	反			15.6	淡黄	頸径 14.0
88	IV b	7	216	SE01	A3	土師器	鉢形	20	反			19.0	浅黄橙	頸径 15.8
88	IV b	8	313	SE01	A3	土師器	小碗	10	反	7.0		5.6	浅黄橙	
88	IV b	9	313	SE01	A3	土師器	鉢形	90		3.7		3.2	浅黄	
88	IV b	10	313	SE01	A3	石製品	砥石			5.6	7.8	1.8	黒灰	89.4g、粘板岩
90	IV b	21	191	SX02	E3	須恵器	摘蓋	50		15.6	3.6		灰	摘み径 2.4、ㄏ'リ方向左、焼き
90	IV b	22	265	SX02	E3	須恵器	無台碗	90		14.6	4.7		灰白	底部未調整
90	IV b	23	188・262	SX02	E3	須恵器	長頸壺	90		20.4	26.7	9.0	灰白	ㄏ'リ方向右、外面自然釉、底部塞体付着、猿投産?
90	IV b	24	186・203	SX02	E3	須恵器	長頸壺	80		14.8			灰	ㄏ'リ方向左、自然釉

出土遺物観察表

Fig.	層位	番号	取上番号	遺構	グリット	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備考
90	IV b	25	262	SX02	E3	土師器	身	20	反	14.6			灰	
90	IV b	26	188	SX02	E3	土師器	身	30		16.0			灰白	全面赤彩、暗文
90	IV b	27	269	SX02	E3	土師器	小碗	70		5.8	3.4		橙	
90	IV b	28	259	SX02	E3	土師器	小碗	50	反	6.4	2.5		灰白	
90	IV b	29	260	SX02	E3	土師器	小碗	70		7.0	3.4		灰白	
90	IV b	30	261	SX02	E3	土師器	小碗	100		7.0	3.6		灰白	底部黒斑
90	IV b	31	269	SX02	E3	土師器	小碗	10	反	7.0	3.5		浅黄橙	
90	IV b	32	259	SX02	E3	土師器	小碗	30	反	7.4			浅黄橙	
90	IV b	33	264	SX02	E3	土師器	小碗	60		8.0		7.7	浅黄橙	
90	IV b	34	271	SX02	E3	土師器	小碗	10	反	8.1			淡橙色	
90	IV b	35	257	SX02	E3	土師器	小碗	90		7.5	4.0		にぶい黄橙	外面粘土紐巻上げの痕跡明確
92	IV b	37	155	SX03	D2	須恵器	摘蓋	80		14.2	2.9		灰白	3号墨書「稻万呂」、摘み2.1、ㄏ'リ方向左、ㄏ'記号
92	IV b	38	179	SX03	D3	須恵器	摘蓋	80		14.0	2.6		灰白	4号墨書「稻万呂」、摘み1.6、ㄏ'リ方向左
92	IV b	39	142	SX03	D2	須恵器	摘蓋	70		13.2	2.7		灰	5号墨書「稻万呂」、摘み1.8、ㄏ'リ方向左、ㄏ'記号
92	IV b	40	133	SX03	D3	須恵器	摘蓋	60					灰白	6号墨書「稻万呂」、摘み1.7、ㄏ'リ方向左、ㄏ'記号
92	IV b	41	189	SX03	A3	須恵器		40	反	13.6			灰	7号墨書「稻万呂」、ㄏ'リ方向左
92	IV b	42	177	SX03	D3	須恵器	平頂蓋	95		17.9	2.2		灰白	8号墨書「稻万呂」、ㄏ'リ方向左、焼ゆがみ
92	IV b	43	1051	SX03	C2	須恵器	箱坏	90		12.4	3.8		灰白	9号墨書「稻万呂」、底径8.0、ㄏ'リ方向左
92	IV b	44	1057	SX03	D2	須恵器	箱坏	40					灰	10号墨書「稻万呂」、底径6.0、ㄏ'リ方向左
92	IV b	45	130	SX03	D2	須恵器	箱坏	40	反	10.4	4.0		灰	11号墨書「上殿」、底径8.5、ㄏ'リ方向左
92	IV b	46	160	SX03	D2	須恵器	双耳箱坏	60	反	13.8	5.2	10.3	反	12号墨書「福刀自」(女性名)、底径6.0
92	IV b	47	25	SX03	E3	須恵器	皿	10	反				灰	13号墨書「稻万呂」、底径10.0、ㄏ'リ方向左
92	IV b	48	171	SX03	D3	須恵器	高盤	60		12.8			灰	14号墨書「稻万呂」、脚頭径4.0
92	IV b	49	188	SX03	E3	須恵器	壺蓋	5					灰白	15号墨書「廣」、外面灰釉灰利-ブ色
92	IV b	50	43	SX03	D2	土師器	皿/坏	5					にぶい黄橙	16号墨書「稻万呂」
92	IV b	51	129	SX03	D2	須恵器	摘蓋	20	反	16.6			灰	ㄏ'リ方向左
92	IV b	52	133	SX03	D3	須恵器	有台坏身	60		15.8	4.0		灰	底径10.9、ㄏ'リ方向左
92	IV b	53	188・134	SX03	E3	須恵器	碗形無台坏身	40	反	14.2	4.4		灰白	底径6.6、ㄏ'リ方向右
92	IV b	54	130	SX03	D2	須恵器	箱坏	60		14.7	3.7		灰白	底径9.8、ㄏ'リ方向左
92	IV b	55	174	SX03	D3	須恵器	箱坏	10	反	17.4			暗灰	ㄏ'リ方向左
92	IV b	56	200	SX03	E3	須恵器	箱坏	50		10.7			灰白	転用硯(朱墨痕)、ㄏ'リ方向左
92	IV b	57	172	SX03	D3	須恵器	広口壺	90		16.4		12.2	灰	緑灰色自然釉
93	IV b	58	10・89	SX03	B3・C2	須恵器	広口壺	50		25.0		15.1	灰	外面下部ㄏ'リ-サテ、外面焼ぶくれ
93	IV b	59	183	SX03	D3	須恵器	広口壺	30	反	23.2			灰白	ㄏ'リ方向左、外面肩部自然釉
93	IV b	60	1056	SX03	D2	須恵器	甕	80		31.7		20.7	灰	頸径16.4
93	IV b	61	158	SX03	D2	土師器	甕			12.8	3.6		灰白	模倣坏、内面赤彩、外面底部繊維痕
93	IV b	62	169	SX03	D2	土師器	甕	50		12.8	3.8		淡黄	模倣坏、底径7.1、内面赤彩
93	IV b	63	133	SX03	D3	土師器	甕	5	反			25.6	淡黄橙	頸径20.9
93	IV b	64	130	SX03	D3	土師器	小型甕	70		15.8	13.8		灰白	頸径14.4、人面墨書
93	IV b	65	159	SX03	D2		骨							鹿角、加工痕
95	IV b	79	187	SX04	E3	須恵器	無台碗	30		13.5	4.0		灰白	底径6.2、底部未調整
95	IV b	80	187	SX04	E3	須恵器	無台碗	30		14.0	4.0		暗灰	底部ㄏ'調整、内面底部ㄏ'状の条線
95	IV b	81	187	SX04	E3	須恵器	無台碗	50	反	14.6			灰色	底径7.5、底部未調整
95	IV b	82	212	SX04	D3	須恵器	無台碗	40	反	15.0	4.2		灰白	底部未調整
95	IV b	83	134	SX04	E3	須恵器	無台碗	90		14.3	4.7		灰白	底径6.0、底部未調整
95	IV b	84	187	SX04	E3	須恵器	無台碗	90		14.2	4.1		灰白	ㄏ'リ方向左
95	IV b	85	187	SX04	E3	須恵器	盤	40	反	20.0	2.0	19.8	褐灰	ㄏ'リ方向左
95	IV b	86	315	SX04	E3	須恵器	高盤	10	反	20.6			灰	17号墨書「廣」、ㄏ'リ方向左
95	IV b	87	187	SX04	E3	土師器	坏	20		14.6	3.7		灰白	外面赤彩
95	IV b	88	187	SX04	E3	土師器	坏	30		14.0	3.0		灰白	底径12.2、外面赤彩
95	IV b	89	187	SX04	E3	土師器	坏	30	反	15.0			灰白	全面赤彩
95	IV b	90	188	SX04	E3	土師器	小碗	30		8.0			浅黄橙	
95	IV b	91	198	SX04	E3	土師器	小碗	80		9.5	3.5		灰白	底径2.0
97	IV b	109	8	SD01	A2・A3	須恵器	摘蓋	40		15.2	3.6	14.8	灰白	摘み径3.3、ㄏ'リ方向左
97	IV b	110	119	SD01	C2	須恵器	摘蓋	40		16.3	3.0	16.2	灰白	摘み径3.2、ㄏ'リ方向左
97	IV b	111	58	SD01	A2	須恵器	摘蓋	40		16.0	3.5		灰白	摘み径2.8、ㄏ'リ方向左
97	IV b	112	107	SD01	C2	須恵器	摘蓋	40		15.8	3.7		明灰	摘み径3.7、ㄏ'リ方向右、焼歪み、黒変
97	IV b	113	132	SD01	D3	須恵器	摘蓋	20	反	14.8	2.8	14.5	灰白	ㄏ'リ方向左、口縁部外面黒変
97	IV b	114	125	SD01	C3	須恵器	摘蓋	30	反	14.0		13.2	暗灰	ㄏ'リ方向左
97	IV b	115	35	SD01	C2	須恵器	有台坏身	40	反	13.4	4.5		灰白	底径9.2、ㄏ'リ方向左
97	IV b	116	119	SD01	C2	須恵器	有台坏身	70		13.6	3.8		暗灰	底径10.7
97	IV b	117	193	SD01	E3	須恵器	有台坏身	30	反	14.2	4.1		暗灰	底径10.2
97	IV b	118	204	SD01	E3	須恵器	有台坏身	10	反	14.6	4.8		暗灰	底径11.2
97	IV b	119	115	SD01	C2	須恵器	有台坏身	40	反	15.2	3.8		明灰	転用硯、底径10.6、ㄏ'リ方向左
97	IV b	120	105	SD01	C2	須恵器	有台坏身	10	反	15.2	3.8		灰白	底径12.4、ㄏ'リ方向左
97	IV b	121	112	SD01	C2	須恵器	有台坏身	50	反	15.4	4.4		灰	底径11.4、ㄏ'リ方向左
97	IV b	122	114	SD01	C2	須恵器	有台坏身	40	反				灰	底径10.4、ㄏ'リ方向左
97	IV b	123	109	SD01	C2	須恵器	有台坏身	10	反	19.3	5.8		暗灰	底径14.3
97	IV b	124	286	SD01	A3	須恵器	箱坏	20	反	13.0	3.2		暗灰	底径7.3、ㄏ'リ方向左
97	IV b	125	71	SD01	A3	須恵器	箱坏	40		13.0	3.3		灰白	底径8.0、ㄏ'リ方向左、口縁全面緑灰色釉、輪花
97	IV b	126	1959	SD01	A3	須恵器	箱坏	40	反	13.2	3.6		灰	底径10.5、ㄏ'リ方向右
97	IV b	127	8	SD01	A2・A3	須恵器	箱坏	40	反	14.0	3.4		灰白	底径11.0、ㄏ'リ方向右、全面赤彩
97	IV b	128	15	SD01	D2	須恵器	箱坏	20	反	13.5			明褐灰	底径11.6
97	IV b	129	70	SD01	A3	須恵器	箱坏	10	反				暗灰	底径12.5、ㄏ'リ方向右
97	IV b	130	196	SD01	E3	須恵器	無台碗	10	反	12.8			暗灰	
97	IV b	131	196	SD01	E3	須恵器	無台碗	60		12.8	3.9		青灰	底部未調整
97	IV b	132	57	SD01	A3	須恵器	無台碗	10	反	13.5			灰白	
97	IV b	133	184	SD01	D3	須恵器	無台碗	80		14.1	4.3		灰	ㄏ'リ方向左
97	IV b	134	68	SD01	A3	須恵器	無台碗	30	反	14.8	4.2		灰	底部未調整
97	IV b	135	205	SD01	E3	須恵器	無台碗	70		15.0	4.8		灰	ㄏ'リ方向左
97	IV b	136	188	SD01	E3	須恵器	摘蓋	60		15.6	3.6		灰	転用硯、摘み径2.8、ㄏ'リ方向左
97	IV b	137	187	SD01	E3	須恵器	摘蓋	95		15.8	3.8	15.5	灰	転用硯、摘み径2.7、ㄏ'リ方向左、外面自然釉
97	IV b	138	93	SD01	C3	須恵器	摘蓋	20					暗灰	転用硯、摘み径2.8
97	IV b	139	57	SD01	A3	須恵器	摘蓋	20		27.0	5.9	26.8	灰白	転用硯、摘み径3.2、ㄏ'リ方向左、外面自然釉

Fig.	層位	番号	取上番号	遺構	グリット	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備 考
97	IV b	140	68	SD01	A3	須恵器	盤	10	反	28.7			灰白	ㄏ'リ方向左
98	IV b	141	90	SD01	B3	須恵器	広口壺	100		15.0	12.3	11.4	灰	ㄏ'リ方向右、自然釉、底部持ちヘラㄏ'リ
98	IV b	142	27	SD01	E3	須恵器	広口壺	90		14.8	16.3	12.0	灰白	頸径 9.8 底径 8.6、ㄏ'リ方向右
98	IV b	143	92	SD01	C2	須恵器	広口壺	10				12.4	明灰	頸径 10.7
98	IV b	144	77	SD01	B3	須恵器	広口壺	100		16.8	16.1	13.1	灰	頸径 10.5、底径 4.5、ㄏ'リ方向左、自然釉
98	IV b	145	188	SD01	E3	須恵器	広口壺	10	反			12.4	灰白	頸径 11.7
98	IV b	146	49	SD01	C2	須恵器	鉢	10	反	15.6			灰青	陶白
98	IV b	147	369	SD01	E3	須恵器	壺蓋	95		9.2	3.5	7.0	灰	自然釉、ㄏ'リ方向右
98	IV b	148	57・58	SD01	A2・A3	須恵器	長頸壺	70		13.2			灰白	底径 6.2、ㄏ'リ方向右、外面口縁から肩部自然釉
98	IV b	149	175	SD01	D3	須恵器	長頸壺	50		17.2			灰白	底径 7.9、ㄏ'リ方向左、外面自然釉
98	IV b	150	91	SD01	A2	須恵器	横瓶	95		16.2	14.3	6.5	灰	外面ㄏ'リ、自然釉
98	IV b	151	188	SD01	E3	須恵器	甕	10	反			21.6	灰白	頸径 14.8 自然釉
98	IV b	152	78	SD01	A3	須恵器	甕	20	反			35.0	明灰	頸径 22.0
99	IV b	153	130	SD01	D2	土師器	坏	70		12.9	3.6		浅黄橙	全面赤彩
99	IV b	154	93	SD01	C3	土師器	坏	20	反	13.6			薄茶	全面赤彩、暗文?
99	IV b	155	119	SD01	C2	土師器	坏	20	反	14.4	3.5		明褐灰	全面赤彩
99	IV b	156	184・187	SD01	D3・E3	土師器	坏	30	反	14.0	3.2		灰白	底径 11.0、全面赤彩
99	IV b	157	44	SD01	D3	土師器	坏	90		12.6	3.3		浅黄橙	
99	IV b	158	133	SD01	D3	土師器	坏	30	反	10.4	3.9		灰白	18号墨書「口」、底径 6.5、全面赤彩
99	IV b	159	108	SD01	C2	土師器	有台坏			13.8	4.9		にぶい黄橙	底径 9.5、赤彩
99	IV b	160	106	SD01	C3	土師器	有台坏	80		14.8	5.1		灰白	底径 8.2、全面赤彩
99	IV b	161	53	SD01	D2	土師器	皿	60	反	13.9	1.7		淡橙	全面赤彩（外面底部除く）
99	IV b	162	120	SD01	C2	土師器	皿	20	反	14.5	2.3		明褐灰	全面赤彩（外面底部除く）
99	IV b	163	208	SD01	C3	土師器	皿	20	反	14.6	2.0		明褐灰	内面赤彩
99	IV b	164	93	SD01	C3	土師器	高盤	10	反				薄茶	脚頸径 8.8、底径 9.2、暗文
99	IV b	165	191	SD01	E3	土師器	高盤	30					薄茶	脚頸径 6.1、全面赤彩
99	IV b	166	121	SD01	B1	土師器	鉢	10	反	10.7			橙	頸径 9.8
99	IV b	167	185	SD01	D3	土師器	鉢	80	反	16.0	9.4		灰白	頸径 9.5、底径 3.0、内面赤彩
99	IV b	168	89	SD01	B3	土師器	鉢	20	反	16.2			明褐灰色	全面赤彩
99	IV b	169	188	SD01	E3	土師器	鉢	10	反	17.4			淡橙色	
99	IV b	170	133	SD01	D3	土師器	甕	10	反	15.4			薄茶色	頸径 13.4
99	IV b	171	1061	SD01	D2・D3	土師器	甕	5	反	14.5		22.3	灰白	頸径 17.0
99	IV b	172	157	SD01	D2	土師器	甕	5	反			21.3	にぶい黄橙	頸径 17.0
99	IV b	173	126	SD01	C2	土師器	鉢	20	反	28.4			明褐灰	頸径 24.0、外面煤付着
99	IV b	174	190	SD01	E3	土師器	甕	5				33.6	灰白	頸径 30.0
99	IV b	175	75	SD01	A3	土師器	甕	10	反	35.9			灰白	頸径 31.0、煤付着
99	IV b	176	185	SD01	D3	土師器	鉢形	80		14.2	6.0		灰白	底径 7.4、内面赤彩、外面煤付着
99	IV b	177	188	SD01	E3	土師器	甕形	50		7.0	5.7		橙	底部有孔
99	IV b	178	192	SD01	E3	土師器	小碗	80	反	6.9	3.7		薄茶	
99	IV b	179	185	SD01	D3	土師器	小碗	50		7.4	3.0		灰白	
99	IV b	180	188	SD01	E3	土師器	甕形	10	反	6.4	4.1		薄茶	底径 2.1、底部有孔
99	IV b	181	201	SD01	E3	土師器	壺形	80		3.6	2.5	2.5	薄茶	底径 2.5、外面煤付着、肩部強いナゲ
99	IV b	182	49	SD01	C2	土師器	碗	40		11.6			明褐灰	人面墨書、外面コゲ痕
99	IV b	183	113	SD01	C2	土師器	碗	10	反	12.0			明褐灰	人面墨書、口縁部赤彩
99	IV b	184	110	SD01	C2	土師器	碗	10					にぶい黄橙	墨痕
104	IV a	1	32	SD01	E3	灰釉陶器	碗	60		14.0	3.8		灰白	無釉、須恵器のような焼成
104	IV a	2	856	SD01	E2	灰釉陶器	碗	60	反	15.5	5.1		灰白	底径 7.6
104	IV a	3	46	SD01	E3	灰釉陶器	碗	60	反	15.0	5.1		灰白	底部煤付着
104	IV a	4	21	SD01	D3	灰釉陶器	碗	20		17.0	4.4		暗灰	底径 8.1
104	IV a	5	30	SD01	A	灰釉陶器	碗	80		16.9	6.0		灰	
104	IV a	6	187	SD01	E3	灰釉陶器	碗	45	反	15.0	4.2		灰黄	内面底部重ね焼痕
104	IV a	7	48	SD01	E3	灰釉陶器	碗	60		14.4	4.2		灰白	底径 7.6
104	IV a	8	187	SD01	E3	灰釉陶器	碗	30	反	14.0	4.3		灰白	底径 6.3、無釉
104	IV a	9	28・29	SD01	E2	灰釉陶器	碗	20	反	13.1	4.5		灰白	底径 6.2
104	IV a	10	21	SD01	D3	灰釉陶器	碗	20	反	14.0	4.4		灰白色	底径 6.4、無釉、土師質
104	IV a	11	45	SD01	E3	灰釉陶器	碗	10	反	12.8	4.0		浅黄橙色	底径 5.6、土師質
104	IV a	12	21	SD01	D3	灰釉陶器	碗	10	反				明灰色	底径 7.2
104	IV a	13	45	SD01	E3	灰釉陶器	碗	20	反				灰白色	底径 6.3
104	IV a	14	9	SD01	C2・C3	灰釉陶器	碗	20	反				灰白色	底径 6.2
104	IV a	15	34	SD01	E3	灰釉陶器	碗	20	反				灰白	底径 7.0
104	IV a	16	29	SD01	E2	灰釉陶器	深碗	70	反	15.2	6.7		灰白	底径 8.0、輪花
104	IV a	17	21	SD01	D3	灰釉陶器	平瓶	80		11.2			明灰	K90、底径 6.8、上部施釉
104	IV a	18	12	SD01	E3	土師器	甕	10	反			35.0	灰褐	清郷甕、底径 33.6、平安時代
104	IV a	19	2026	SD01	D5	石製品	砥石			5.7	7.3	2.6		165.8g、凝灰岩
104	IV a	20	2026	SD01	D5	石製品	砥石			8.9	11.4	4.0		456.8g、凝灰岩
104	IV a	21	26	SD01	E3	石製品	叩石			4.7	13.3	4.2		313.5g、凝灰岩、石錘?
108	B 区	1	2029	SX111	C5	土師器	二重口縁壺	50		27.8		18.4	にぶい橙	頸径 15.0、外面煤付着、全体雑な調整
108	B 区	2	2029	SX111	C5	土師器	碗	60	反	12.5	5.1		浅黄橙	底径 3.6
108	B 区	3	1971	包含層	C6	土師器	碗	20		12.8	5.0		にぶい橙	底径 5.8
108	B 区	4	2029	SX111	C5	土師器	有稜高坏	20	反			19.8	浅黄橙	
108	B 区	5	1993	包含層	C6	土師器	有稜高坏	40					にぶい橙	脚径 9.0
108	B 区	6	2030	SX112	C5	土師器	甕	90		28.8	35.0	18.8	にぶい黄橙	頸径 15.7、外面煤付着
110	B 区大溝	1	2178	SE102	E5	須恵器	摘蓋	80		15.4	3.2	14.8	灰	摘み 2.2、ㄏ'リ方向左
110	B 区大溝	2	2368	SE102	D5・E5	須恵器	摘蓋	30		15.4	3.4	15.0	灰白	摘み 2.3、ㄏ'リ方向左
110	B 区大溝	3	2349	SE102	E5	須恵器	有台坏身	30	反	15.0	4.0		灰白	底径 11.0、ㄏ'リ方向右
110	B 区大溝	4	2351	SE102	E5	須恵器	箱坏	60	反	11.0	3.3		灰	底径 9.4、ㄏ'リ方向左
110	B 区大溝	5	2180	SE102	D5	須恵器	無台碗	70	反	13.0	4.2		灰白	底径 6.4、ㄏ'リ方向左
110	B 区大溝	6	2345	SE102	E5	須恵器	無台碗	60	反	14.0	4.2		灰黄	底径 5.4、ㄏ'リ方向左、火だすき顕著
110	B 区大溝	7	2179	SE102	D5	須恵器	無台碗	40	反	14.2	4.5		灰白	底径 6.8、未調整
110	B 区大溝	8	2368	SE102	D5・E5	須恵器	無台碗	20	反	14.6			灰白	
110	B 区大溝	9	2368	SE102	D5・E5	土師器	鉢	10	反	24.2			にぶい橙	
110	B 区大溝	10	2368	SE102	D5・E5	土師器	鉢	20	反	20.0			浅黄橙	
110	B 区大溝	11	2368	SE102	D5・E5	土師器	小碗	60		6.8		6.4	浅黄橙	底径 3.0
110	B 区大溝	12	2368	SE102	D5・E5	土師器	小碗	50		7.0	3.0	6.4	浅黄橙	底径 5.0

出土遺物観察表

Fig.	層位	番号	取上番号	遺構	グリット	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備考
110	B 区大溝	13	2347	SE102	E5	土師器	小碗	20	反	7.4		6.6	浅黄橙	
110	B 区大溝	14	2346	SE102	E5	土師器	小碗	20	反	7.3	3.5	6.6	黄橙	底径 4.0
110	B 区大溝	15	2348	SE102	E5	土師器	小碗	100		7.3	3.0		にぶい橙	底径 3.1
110	B 区大溝	16	2368	SE102	D5・E5	土師器	小碗	20		7.4		6.8	浅黄橙	
110	B 区大溝	17	2559	SE102	D5・E5	土師器	鉢形	80		8.3	3.5	7.8	灰黄	底径 4.2
111	B 区大溝	21	2018	SD102	E5	須恵器	返り蓋	40	反	12.4	3.5		灰白	摘み 2.9
111	B 区大溝	22	2157	SD102	E5	須恵器	有台坏身	30	反	16.0	3.8		灰	底径 10.8
111	B 区大溝	23	2145	SD102	D5	須恵器	有台坏身	30	反	16.6	4.9		灰白	底径 10.4
111	B 区大溝	24	2145	SD102	D5	須恵器	箱坏	40	反	13.4	4.9		灰	底径 8.6
111	B 区大溝	25	2145	SD102	D5	須恵器	無台碗	40	反	14.2	4.8		灰白	底径 6.4、底部未調整
111	B 区大溝	26	2157	SD102	E5	須恵器	無台碗	40	反	20.0	6.4		灰	底径 7.0
111	B 区大溝	27	1987	SD102	D5	須恵器	甕	10	反			53.0	灰白	
111	B 区大溝	28	1984	SD102	E5	灰釉陶器	碗	20	反	16.8			にぶい黄橙	内外釉痕、内面重ね焼痕?
111	B 区大溝	29	2018	SD102	E5	灰釉陶器	碗	5	反			8.7	にぶい黄橙	全面釉
111	B 区大溝	30	1987	SD102	B5・D5	灰釉陶器	碗	20					灰白	19号墨書「本」、底径 6.5、ｽﾘ方向左
111	B 区大溝	31	2018	SD102	E5	灰釉陶器	碗	20					灰白	底径 5.8、一部墨痕?
111	B 区大溝	32	1987	SD102	D5	灰釉陶器	碗	30					灰	底径 7.6
111	B 区大溝	33	1984	SD102	E5	土師器	皿	90		13.4	3.5		橙	底径 6.5、内面赤彩
111	B 区大溝	34	2016	SD102	E5	土師器	甕	20	反			14.0	にぶい黄橙	頸径 12.2、外面煤付着
111	B 区大溝	35	2018	SD102	E5	土師器	甕	10	反			19.6	黄橙	頸径 16.4、外面煤付着
111	B 区大溝	36	2175	SD102	E5	土師器	小碗	50	反	7.3	3.0		灰白	底径 4.4
111	B 区大溝	37	1987	SD102	D5	土師器	小碗	100		7.2	3.3		浅黄橙	底径 3.0、底部穿孔
111	B 区大溝	38	2157	SD102	E5	土師器	小碗	95		6.6	3.8	6.1	浅黄橙	底径 3.3
111	B 区大溝	39	2372	SD102	E5	土師器	小碗	40	反	6.5	3.2	6.0	にぶい黄橙	底径 2.6、外面煤付着
113	B 区	1	2142	SE101	B5	中世陶器	山茶碗	40		15.6	8.2		灰	底部糸切り
113	B 区	2	2049	SE101	B5	中世陶器	山茶碗	10	反	15.0			灰黄	
113	B 区	3	2049	SE101	B5	中世陶器	山茶碗	10	反				灰	底径 10.9、底部糸切り
113	B 区	4	2049	SE101	B5	中世陶器	山皿	20	反	8.2			灰	底部糸切り
113	B 区	5	2049	SE101	B5	中世陶器	広口壺	5	反			15.0	赤灰	全面自然釉
115	D 区	1	3385	SB301	B6	土師器	甕	5	反			17.0	にぶい黄橙	頸径 15.0
115	D 区	2	3386	SB301	B6	土師器	甕	5	反			17.3	にぶい黄橙	頸径 14.5
115	D 区	3	3382	包含層	B6	土師器	甕	10	反			21.2	明赤褐	頸径 18.0
115	D 区	4	3384	包含層	B6	土師器	高坏	20					橙	脚頸径 3.6、黒斑

出土遺物（木製品）観察表

Fig	層位	番号	種別番号	遺構	種別	詳細	樹 種	処理	残存率	長さ	幅	厚み	備 考
22	VII b	122	W184	SK05	不明品	先端加工棒		乾燥		17.9	1.7	1.0	
43	VII b	671	W193	SD01	農具	曲柄平鋸	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	含浸		29.3	18.4	1.5	
43	VII b	672	W188	SD01	農具	曲柄平鋸	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	含浸		34.0	15.5	2.2	
43	VII b	673	W173	SD01	農具	曲柄又鋸	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	含浸		36.7	11.5	1.2	
43	VII b	674	W179	SD01	農具	曲柄平鋸		乾燥		6.5	6.2	1.4	
43	VII b	675	W187	SD01	農具	木銼	ヒノキ科アスナロ属	含浸	100	10.2	8.2	7.5	
43	VII b	676	W191	SD01	農具	木銼	マツ科モミ属	含浸	90	16.5	7.5	6.0	
43	VII b	677	W185	SD01	農具	木銼	ヒノキ科アスナロ属	含浸	100	15.6	6.5	5.5	
44	VII b	678	W192	SD01	漁撈具	櫂	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	含浸		54.3	9.7	1.7	
44	VII b	679	W183	SD01	漁撈具	アカ取り（推定）		乾燥	50	30.1	6.5	3.0	
44	VII b	680	W177	SD01	不明品	先端加工板		乾燥		15.6	2.0	0.7	
44	VII b	681	W178	SD01	不明品	挟り入り板		乾燥		29.3	3.7	0.9	
44	VII b	682	W186	SD01	容器	刳物桶底板		乾燥	100	17.7	17.5	1.0	側面木釘痕 7ヶ所
44	VII b	683	W194	SD01	不明品	有頭棒		乾燥		12.9	7.4	4.2	
44	VII b	684	W181	SD01	容器	把手付槽	ヒノキ科アスナロ属	含浸		30.7	9.5	4.3	
44	VII b	685	W205	SD01	装身具	横櫛	ツゲ科ツゲ属ツゲ	含浸		3.9	3.2	0.8	刻歯式横櫛
67	VII a	592	W149	SD01	農具	木銼	ヒノキ科ヒノキ属	含浸	80	12.4	8.8	7.9	端部欠損
67	VII a	593	W157	SD01	農具	木銼	マツ科トウヒ属	含浸	100	15.1	6.3	3.6	
67	VII a	594	W122	SD01	農具	杵	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	含浸		22.8	3.7	3.4	両端欠損
67	VII a	595	W135	SD01	不明品	有孔棒	ヒノキ科アスナロ属	含浸	80	19.3	2.9	2.7	鋤柄？
67	VII a	596	W155	SD01	不明品	有孔棒		乾燥		18.7	2.4	1.9	
67	VII a	597	W150	SD01	不明品	有孔棒		乾燥	100	22.8	3.0	2.1	方形穴 2ヶ
67	VII a	598	W140	SD01	不明品	有孔棒		乾燥		19.3	3.3	2.2	両端欠損
67	VII a	599	W195	SD01	不明品	加工板	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	含浸		41.3	9.8	1.5	
67	VII a	600	W164	SD01	漁撈具	加工板		乾燥	80	21.8	2.9	1.2	アカ取り？
67	VII a	601	W168	SD01	不明品	加工板		乾燥		13.9	2.6	1.3	
67	VII a	602	W138	SD01	不明品	加工板		乾燥		18.9	5.5	1.2	
67	VII a	603	W182	SD01	不明品	加工板		乾燥	90	15.4	4.7	1.3	組み物？
67	VII a	604	W142	SD01	不明品	先端加工棒		乾燥		19.6	1.8	0.9	
67	VII a	605	W158	SD01	不明品	先端加工棒	ヒノキ科アスナロ属	含浸	95	10.6	1.2	0.8	
68	VII a	606	W147	SD01	祭祀具	斎串	ヒノキ科ヒノキ属	含浸	95	24.4	1.8	0.4	
68	VII a	607	W180	SD01	祭祀具	斎串	ヒノキ科アスナロ属	含浸		13.3	2.6	0.4	
68	VII a	608	W189	SD01	祭祀具	斎串		乾燥		8.7	1.5	0.2	
68	VII a	609	W145	SD01	祭祀具	斎串（推定）		乾燥		7.1	2.2	0.5	
68	VII a	610	W137	SD01	祭祀具	馬形	ヒノキ科アスナロ属	含浸	100	10.8	2.5	0.5	
68	VII a	611	W167	SD01	祭祀具	馬形	ヒノキ科アスナロ属	含浸	95	19.5	4.0	0.6	
68	VII a	612	W72	SD01	装身具	横櫛	広葉樹	含浸		4.3	2.3	0.8	刻歯式横櫛
68	VII a	613	W160	SD01	楽器	琴柱	ヒノキ科アスナロ属	含浸	100	3.8	1.9	0.9	
68	VII a	614	W161	SD01	不明品	N字形加工板	マツ科マツ属〔二葉松類〕	含浸		10.6	4.4	1.2	
68	VII a	615	W162	SD01	容器	曲物底板		乾燥	70	16.3	11.0	0.9	有段
68	VII a	616	W165	SD01	容器	曲物底板	ヒノキ科ヒノキ属	含浸	95	17.1	17.1	0.7	有段
68	VII a	617	W153	SD01	容器	曲物底板	ヒノキ科ヒノキ属	含浸	95	17.4	16.7	0.8	有段
69	VII a	618	W148	SD01	容器	曲物底板		乾燥		45.4	3.4	1.2	有段
69	VII a	619	W139-1	SD01	容器	曲物側板		乾燥		35.1	25.5	0.2	
69	VII a	620	W139-2	SD01	容器	曲物側板		乾燥		25.0	17.8	0.2	
69	VII a	621	W139-4	SD01	容器	曲物側板		乾燥		17.9	16.9	0.2	
69	VII a	622	W139-3	SD01	容器	曲物側板		乾燥		26.0	8.4	0.2	
76	V	96	W171	SS04	不明品	先端加工棒		乾燥		64.9	3.7	3.3	
76	V	97	W190	SS04	建築部材	有孔板		乾燥		95.7	16.8	5.3	階段状施設に使用
76	V	98	W197	SS04	不明品	加工板		乾燥		20.5	7.5	3.3	穿孔
79	V	182	W68	SD01	文書木器	1号木簡	ヒノキ科ヒノキ属	含浸		9.0	1.9	0.4	
79	V	183	W82	SD01	文書木器	2号木簡	ヒノキ科ヒノキ属	含浸		14.4	3.0	0.6	曲物転用
79	V	184	W81	SD01	文書木器	3号木簡	ヒノキ科ヒノキ属	含浸	70	40.7	6.5	0.7	724 紀年銘
79	V	185	W98	SD01	文書木器	4号木簡	ヒノキ科アスナロ属	含浸		10.2	1.3	0.4	
79	V	186	W125	SD01	文書木器	5号木簡	ヒノキ科アスナロ属	含浸		20.3	5.4	0.5	709 紀年銘
79	V	187	W57	SD01	文書木器	6号木簡		乾燥	100	31.1	2.2	0.8	
80	V	188	W108	SD01	祭祀具	人形	ヒノキ科アスナロ属	含浸	90	15.7	2.8	0.7	
80	V	189	W99	SD01	祭祀具	斎串	ヒノキ科ヒノキ属	含浸		10.6	2.4	0.4	
80	V	190	W105	SD01	祭祀具	斎串	ヒノキ科アスナロ属	含浸		8.4	2.4	0.5	
80	V	191	W118	SD01	祭祀具	斎串	ヒノキ科アスナロ属	含浸		10.6	1.9	0.3	
80	V	192	W117	SD01	祭祀具	斎串		乾燥		6.8	2.6	0.4	
80	V	193	W107	SD01	祭祀具	斎串	ヒノキ科アスナロ属	含浸		12.9	1.9	0.6	
80	V	194	W109	SD01	祭祀具	斎串	ヒノキ科ヒノキ属	含浸		11.5	1.8	0.3	
80	V	195	W114	SD01	祭祀具	斎串		乾燥		12.2	2.1	0.6	
80	V	196	W116	SD01	祭祀具	斎串	ヒノキ科アスナロ属	含浸	95	36.8	2.2	0.7	
80	V	197	W13	SD01	祭祀具	斎串	ヒノキ科アスナロ属	含浸	100	38.3	2.6	0.6	
80	V	198	W115	SD01	祭祀具	斎串？		乾燥		42.6	2.1	0.5	
80	V	199	W133	SD01	祭祀具	斎串	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ	含浸		62.5	2.0	0.9	
80	V	200	W124	SD01	祭祀具	馬形	ヒノキ科ヒノキ属	含浸	70	12.2	2.1	0.4	腹部切り込み
80	V	201	W134	SD01	祭祀具	馬形	ヒノキ科アスナロ属	含浸	95	11.6	3.5	0.4	腹部切り込み
80	V	202	W101	SD01	祭祀具	馬形	ヒノキ科ヒノキ属	含浸		8.4	3.2	0.5	腹部切り込み
80	V	203	W11	SD01	祭祀具	舟形	ヒノキ科アスナロ属	含浸	90	20.1	6.2	2.5	
81	V	204	W112	SD01	容器	曲物底板		乾燥	95	18.0	18.0	0.9	有段
81	V	205	W112	SD01	容器	曲物側板		乾燥	40	18.0	18.0	0.9	
81	V	206	W120	SD01	容器	曲物底板		乾燥	20	27.6	5.7	1.0	有段、再加工痕
81	V	207	W163	SD01	容器	曲物底板	ヒノキ科アスナロ属	含浸	30	69.0	19.0	1.3	有段、突起付楕円形曲物
81	V	208	W110	SD01	容器	曲物底板		乾燥	20	41.0	9.9	1.0	有段、楕円形曲物
82	V	209	W119	SD01	運搬具	背負子	マツ科マツ属〔二葉松類〕	含浸	100	39.2	21.9	5.1	Y字形木製品
82	V	210	W136	SD01	運搬具	背負子	マツ科マツ属〔二葉松類〕	含浸	90	42.4	8.8	4.6	Y字形木製品
82	V	211	W166	SD01	運搬具	背負子	マツ科マツ属〔二葉松類〕	含浸	50	27.0	4.8	4.8	Y字形木製品
83	V	212	W35	SD01	農具	曲柄平鋸	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	含浸		31.5	14.3	1.4	
83	V	213	W24	SD01	農具	曲柄平鋸	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	含浸		22.4	6.2	1.8	鉄製鋸先痕
83	V	214	W97	SD01	農具	堅杵	ブナ科コナラ属コナラ亜属クスギ節	含浸		46.3	8.4	8.4	搦き部使用痕顕著
83	V	215	W176	SD01	農具	田下駄	ヒノキ科アスナロ属	含浸	100	91.8	5.1	2.9	杵型田下駄の縦杵（大足）
84	V	216	W130	SD01	農具	木銼	ヒノキ科アスナロ属	含浸	90	12.3	7.1	3.9	
84	V	217	W85	SD01	不明品	加工棒		乾燥		23.2	9.3	5.6	
84	V	218	W94	SD01	不明品	加工板		乾燥		10.9	5.5	3.5	

出土遺物（木製品）観察表

Fig	層位	番号	種別番号	遺構	種別	詳細	樹 種	処理	残存率	長さ	幅	厚み	備 考
84	V	219	W95	SD01	不明品	加工板		乾燥		10.6	2.4	0.6	
84	V	220	W88	SD01	不明品	加工板		乾燥		7.6	3.5	1.4	
84	V	221	W86	SD01	不明品	先端加工棒		乾燥		39.4	2.4	1.7	
84	V	222	W93	SD01	不明品	先端加工棒		乾燥		34.2	2.1	1.4	
84	V	223	W131	SD01	不明品	挟り入り板		乾燥		31.1	4.4	1.3	
84	V	224	W111	SD01	不明品	加工棒	ヒノキ科ヒノキ属	含浸		31.9	4.1	1.8	板状端部穿孔3
84	V	225	W102	SD01	不明品	先端加工棒	ヒノキ科アスナロ属	含浸	100	24.8	1.8	1.2	
84	V	226	W103	SD01	不明品	先端加工棒		乾燥		13.2	1.2	0.8	
84	V	227	W90	SD01	不明品	先端加工棒		乾燥		9.6	1.3	1.0	
88	IV b	11	W129	SE01	容器	曲物底板		乾燥	40	44.8	16.7	1.2	有段
88	IV b	12	W126	SE01	容器	曲物底板		乾燥	20	61.2	10.6	1.1	有段、墨丸方形
88	IV b	13	W127	SE01	容器	曲物底板	ヒノキ科アスナロ属	含浸	100	53.5	44.8	1.9	有段、墨丸方形
90	IV b	14	W45	SX01	祭祀具	人形	ヒノキ科アスナロ属	含浸	95	22.7	3.3	0.3	人面墨書
90	IV b	15	W40	SX01	祭祀具	人形	ヒノキ科ヒノキ属	含浸	100	11.8	2.7	0.2	人面墨書
90	IV b	16	W42	SX01	祭祀具	斎串	ヒノキ科アスナロ属	含浸	95	14.7	2.1	0.3	
90	IV b	17	W41	SX01	祭祀具	斎串	ヒノキ科アスナロ属	含浸	95	14.9	2.1	0.3	
90	IV b	18	W39	SX01	祭祀具	斎串	ヒノキ科アスナロ属	含浸		12.0	3.1	0.3	
90	IV b	19	W38	SX01	祭祀具	斎串		乾燥		23.0	1.7	0.8	
90	IV b	20	W44	SX01	祭祀具	斎串	ヒノキ科アスナロ属	含浸		13.2	2.6	0.3	
90	IV b	36	W113	SX02	祭祀具	斎串	ヒノキ科アスナロ属	含浸		6.6	1.5	0.4	
93	IV b	66	W175	SX03	祭祀具	鐵形	ヒノキ科アスナロ属	含浸		6.3	1.8	0.3	
93	IV b	67	W47	SX03	祭祀具	斎串	ヒノキ科アスナロ属	含浸	95	17.1	1.6	0.4	
93	IV b	68	W71	SX03	祭祀具	斎串	ヒノキ科アスナロ属	含浸		12.6	1.8	0.4	
93	IV b	69	W50	SX03	祭祀具	斎串	ヒノキ科ヒノキ属	含浸		12.8	2.0	0.4	
93	IV b	70	W70	SX03	祭祀具	斎串	ヒノキ科アスナロ属	含浸		11.6	2.3	0.4	
93	IV b	71	W48	SX03	祭祀具	斎串	ヒノキ科ヒノキ属	含浸		20.3	2.2	0.5	
93	IV b	72	W53	SX03	祭祀具	斎串	ヒノキ科ヒノキ属	含浸	95	43.8	2.8	0.8	
94	IV b	73	W8	SX03	容器	曲物底板		乾燥	70	16.4	15.1	1.0	有段
94	IV b	74	W51	SX03	容器	曲物底板		乾燥	30	17.5	6.9	0.7	有段
94	IV b	75	W49	SX03	容器	曲物底板		乾燥	25	26.6	7.4	0.6	有段
94	IV b	76	W37	SX03	容器	曲物底板		乾燥	25	62.7	13.4	1.4	有段、楕円形
94	IV b	77	W74	SX03	容器	曲物側板		乾燥		10.8	2.4	0.5	
94	IV b	78	W74	SX03	容器	曲物側板		乾燥		10.8	2.0	0.4	
96	IV b	92	W66	SX04	祭祀具	人形	ヒノキ科アスナロ属	含浸	70	16.7	3.8	0.4	
96	IV b	93	W61	SX04	祭祀具	斎串	ヒノキ科アスナロ属	含浸		13.8	3.2	0.4	
96	IV b	94	W3	SX04	祭祀具	斎串	ヒノキ科ヒノキ属	含浸	80	15.9	2.6	0.4	
96	IV b	95	W55	SX04	祭祀具	斎串		乾燥			3.2	0.4	
96	IV b	96	W78	SX04	祭祀具	斎串	ヒノキ科アスナロ属	含浸		8.0	1.9	0.3	
96	IV b	97	W83	SX04	祭祀具	斎串		乾燥		10.3	1.8	0.6	
96	IV b	98	W64	SX04	祭祀具	斎串		乾燥		12.6	1.7	0.6	
96	IV b	99	W77	SX04	祭祀具	斎串		乾燥		14.7	1.2	0.5	
96	IV b	100	W75	SX04	祭祀具	斎串		乾燥		16.7	2.1	0.6	
96	IV b	101	W58	SX04	祭祀具	斎串		乾燥		36.1	3.2	0.5	
96	IV b	102	W76	SX04	祭祀具	舟形	ヒノキ科ヒノキ属	含浸	40	14.0	2.1	2.9	
96	IV b	103	W62	SX04	不明品	横棧状木製品		乾燥	100	42.1	1.8	1.4	
96	IV b	104	W59	SX04	祭祀具	摺り彫状木製品	ヒノキ科ヒノキ属	含浸		23.3	2.7	0.9	
96	IV b	105	W63	SX04	容器	曲物底板		乾燥	20	25.6	5.1	0.9	有段
96	IV b	106	W67	SX04	容器	曲物底板		乾燥	50	14.2	7.8	0.7	無段
96	IV b	107	W56	SX04	不明品	くさび状木器		乾燥		23.0	2.3	1.8	
96	IV b	108	W54	SX04	不明品	両端加工棒		乾燥		15.4	1.1	0.7	
100	IV b	185	W18	SD01	農具	鎌柄	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	含浸		27.2	3.4	1.4	
100	IV b	186	W28	SD01	容器	曲物底板		乾燥	40	17.8	7.9	0.6	有段
100	IV b	187	W15	SD01	容器	曲物底板		乾燥	20	20.0	4.5	0.9	無段
100	IV b	188	W20	SD01	容器	曲物底板		乾燥	25	28.1	7.7	0.9	無段
100	IV b	189	W21	SD01	容器	曲物底板		乾燥	20	30.5	8.2	0.8	無段
100	IV b	190	W89	SD01	容器	曲物底板		乾燥	30	21.8	7.5	1.3	有段
100	IV b	191	W22	SD01	容器	高台付盤		乾燥		47.2	13.5	1.5	
100	IV b	192	W30	SD01	不明品	へら状加工板		乾燥		24.5	3.2	0.9	
100	IV b	193	W52	SD01	不明品	先端加工棒		乾燥		17.3	1.6	1.0	
100	IV b	194	W16-1	SD01	不明品	先端加工棒		乾燥		7.5	1.5	1.3	
100	IV b	195	W17-1	SD01	不明品	先端加工棒		乾燥		7.3	1.4	1.1	
100	IV b	196	W17-2	SD01	不明品	先端加工棒		乾燥		8.3	1.3	1.0	
100	IV b	197	W16-2	SD01	不明品	先端加工棒		乾燥		6.7	1.4	1.2	
100	IV b	198	W34	SD01	不明品	加工板		乾燥		10.5	6.6	1.3	曲物転用
101	IV b	199	W26	SD01	祭祀具	人形	ヒノキ科アスナロ属	含浸	90	15.0	3.0	0.8	
101	IV b	200	W27	SD01	祭祀具	人形	ヒノキ科アスナロ属	含浸	40	11.0	3.2	0.5	
101	IV b	201	W33	SD01	祭祀具	斎串	ヒノキ科アスナロ属	含浸		20.2	3.5	0.8	
101	IV b	202	W10	SD01	祭祀具	斎串	ヒノキ科ヒノキ属	含浸		35.9	2.7	0.5	
101	IV b	203	W23	SD01	祭祀具	斎串	ヒノキ科アスナロ属	含浸		8.4	2.6	0.7	
101	IV b	204	W73	SD01	祭祀具	斎串		乾燥		13.0	2.0	0.6	
101	IV b	205	W36	SD01	祭祀具	斎串		乾燥		20.7	2.7	0.5	
101	IV b	206	W2	SD01	祭祀具	斎串		乾燥		30.5	2.4	0.8	
101	IV b	207	W19	SD01	祭祀具	摺り彫状木製品	ヒノキ科ヒノキ属	含浸		29.8	2.2	2.1	
101	IV b	208	W31	SD01	祭祀具	加工板	ヒノキ科ヒノキ属	含浸		19.0	5.0	0.6	墨痕・朱彩
101	IV b	209	W32	SD01	祭祀具	加工板	ヒノキ科ヒノキ属	含浸		12.4	2.8	0.7	墨痕・朱彩
101	IV b	210	W29	SD01	祭祀具	馬形	ヒノキ科ヒノキ属	含浸	95	22.2	6.1	2.0	腹部細棒挿入痕
101	IV b	211	W12	SD01	祭祀具	舟形	ヒノキ科ヒノキ属	含浸	90	17.4	3.2	1.3	
101	IV b	212	W25	SD01	祭祀具	舟形	ヒノキ科アスナロ属	含浸	95	17.5	3.1	1.5	
101	IV b	213	W14	SD01	不明品	加工棒	ヒノキ科アスナロ属	含浸		4.1	2.8	0.8	翼状突起
105	Ⅲ	22	W1	SD01	容器	曲物底板	ヒノキ科アスナロ属	含浸	100	57.2	48.5	1.6	有段、墨丸方形
105	Ⅲ	23	W196	SD01	容器	楕		乾燥		36.2	9.1	1.2	
110	B 区古代	18	W202	SE102	農具	臼	スギ科スギ属スギ	含浸	底部欠損	55.8	51.3	23.3	井戸枠転用
110	B 区古代	19	W199	SE102	祭祀具	斎串		乾燥		8.0	1.4	0.4	
110	B 区古代	20	W198	SE102	祭祀具	斎串		乾燥		10.7	1.3	0.3	

図 版

PLATE



SX05 調査風景



Ⅷ層 完掘状況（西から）



Ⅶb 層 SX05 遺物出土状態（北東から）



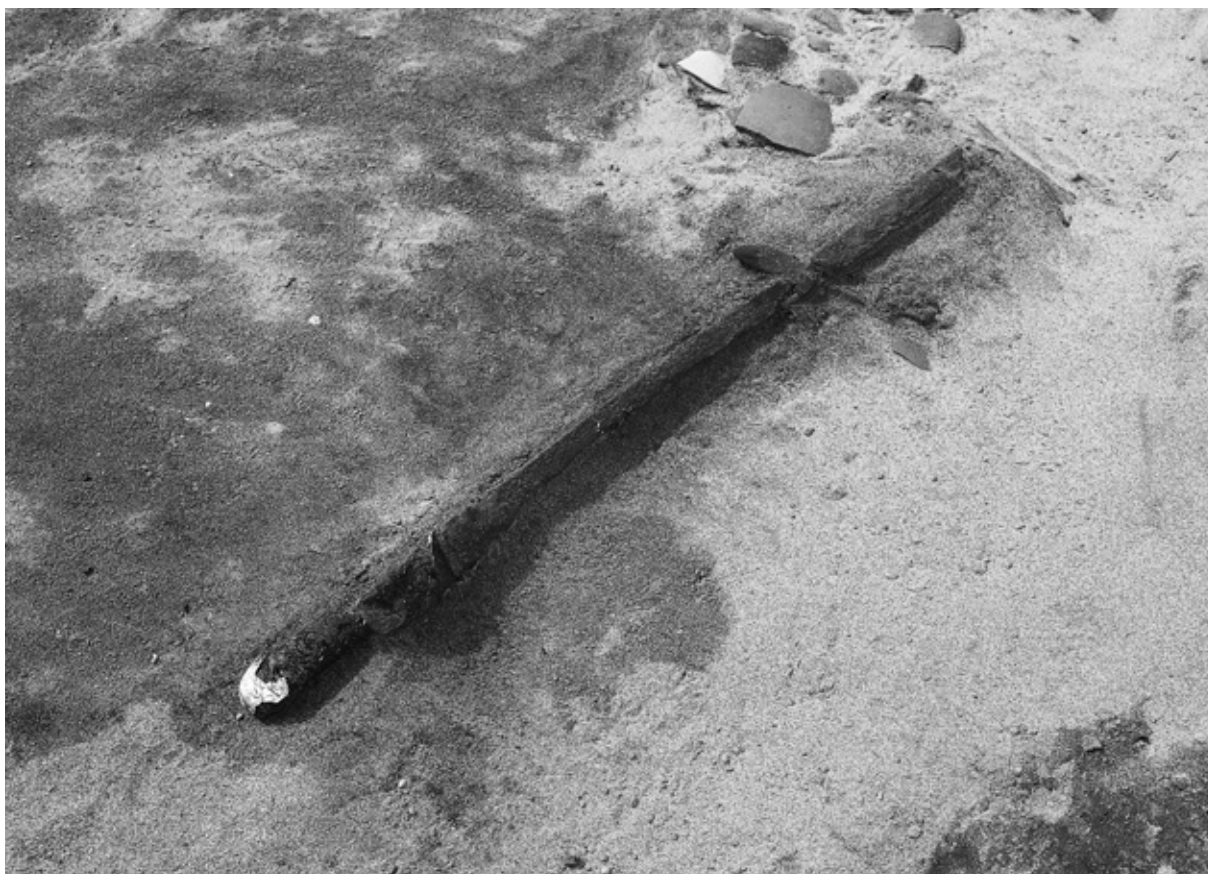
VIIb 層 SX05 遺物出土状態（北西から）



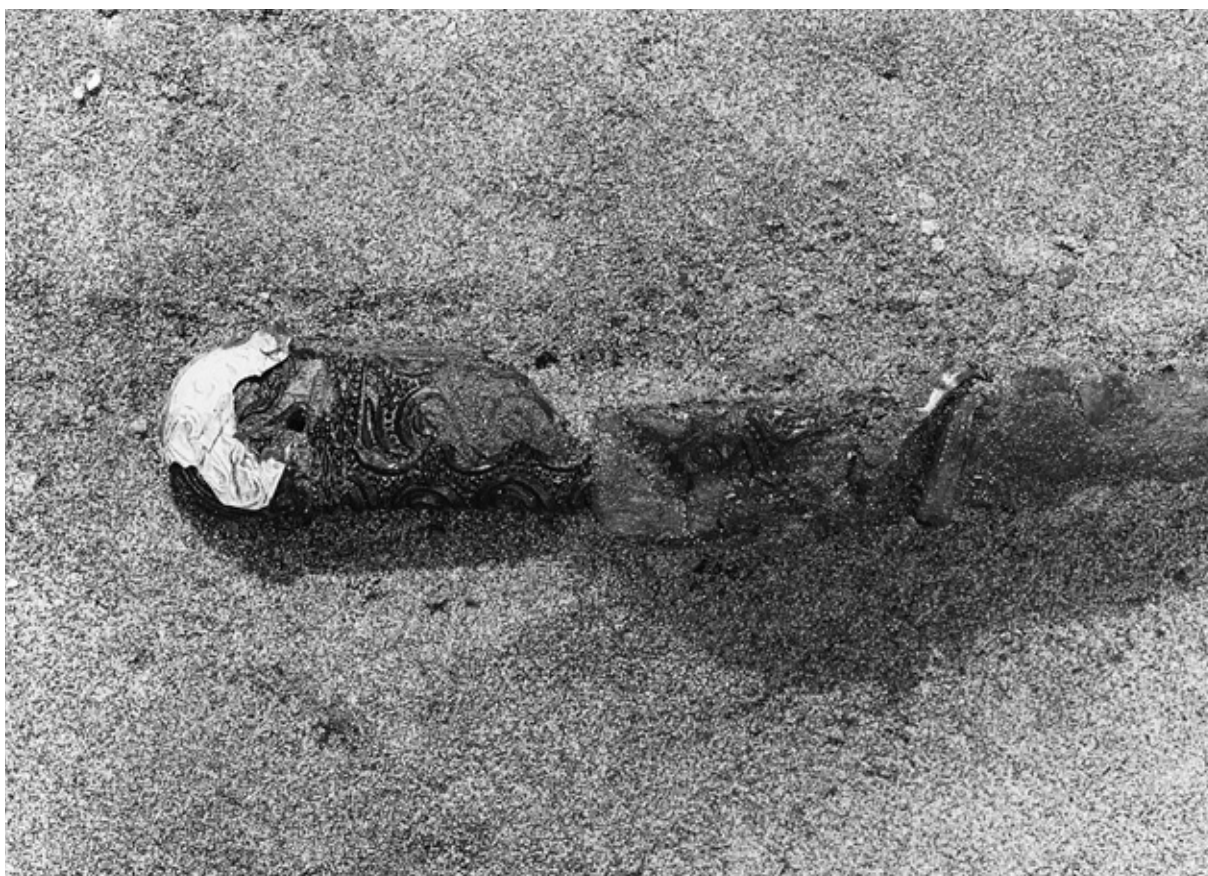
1 VIIb 層 SX05 遺物出土状態（東から）



2 VIIb 層 遺物出土状態（C2 区、南西から）



1 VIIb層 円頭大刀出土状態（南東から）



2 VIIb層 円頭大刀出土状態（東から）



VIIa 層 完掘状況（東から）



V層 貝塚 SS01・02（北東から）



1 V層 馬頭骨 (B11) 出土状態 (南西から)



2 V層 馬骨 (B8・B9) 出土状態 (北から)



3 V層 3号木簡出土状態 (北東から)



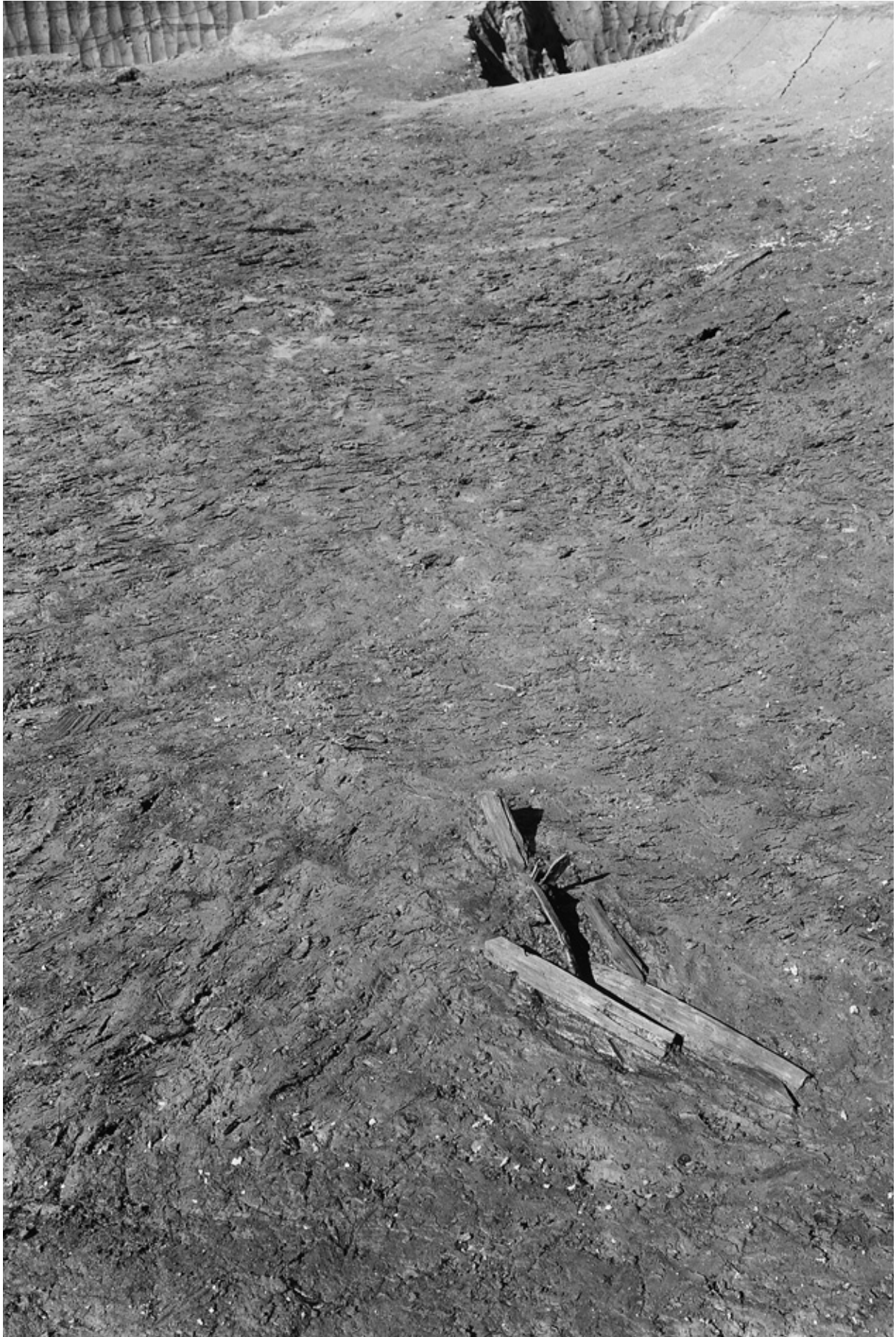
1 V層 貝塚 SS04 (南から)



2 V層 貝塚 SS02 (東から)



3 V層 貝塚 SS02 断面 (西から)



IVb層 SX01 遺物出土状態（南東から）



1 IVb層 SE01 (南から)



2 IVb層 B区 SE102 (西から)



1 IVb 層 SX03 遺物出土状態（北西から）



2 IVb 層 SX03 遺物出土状態（南東から）



3 IVb 層 SX03 遺物出土状態（南東から）



4 IVb 層 斎串（201）出土状態（南西から）



Ⅲ層 完掘状況（西から）

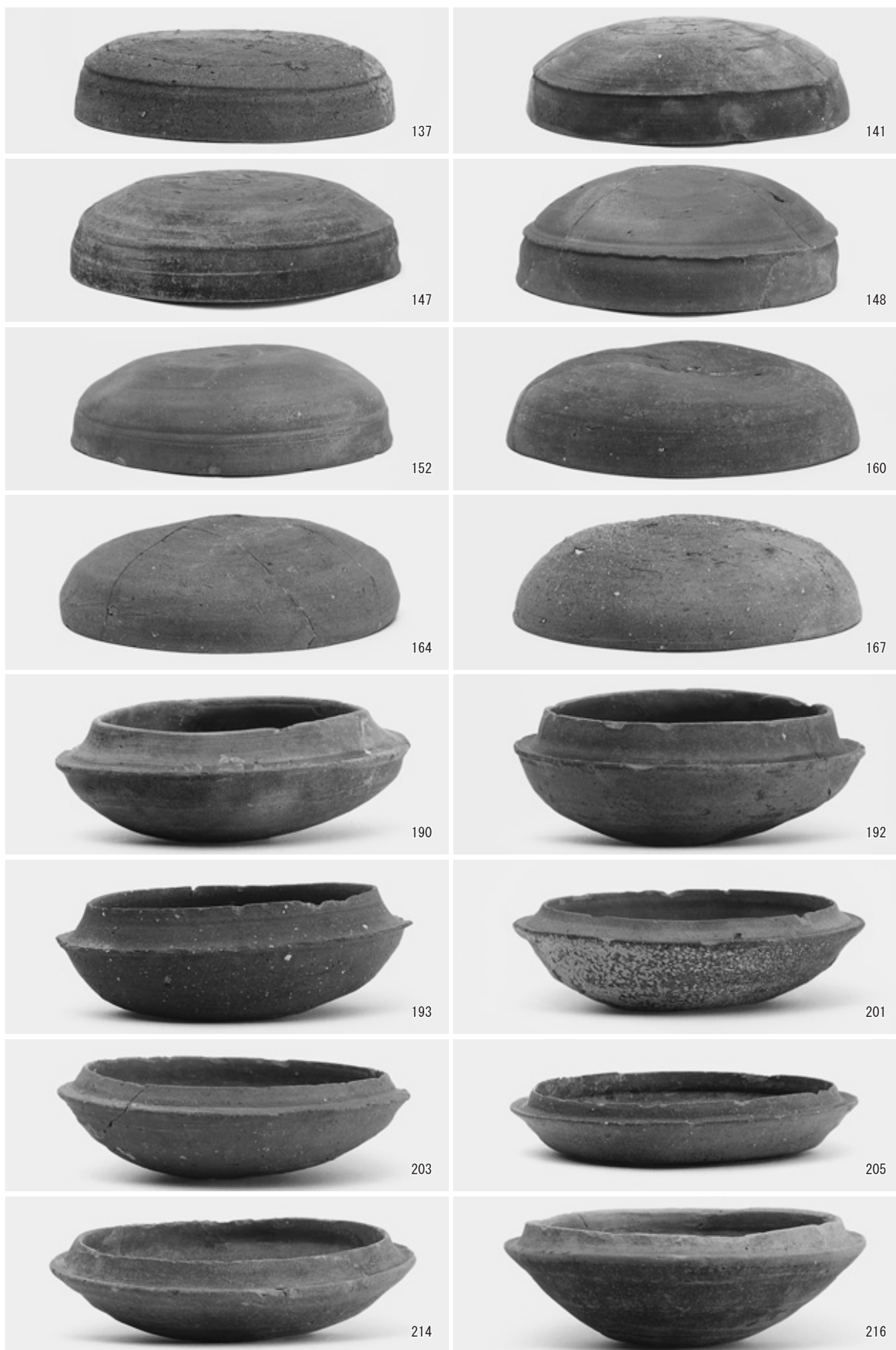


B区 最上層遺構（東から）



Ⅶb 層 出土主要遺物





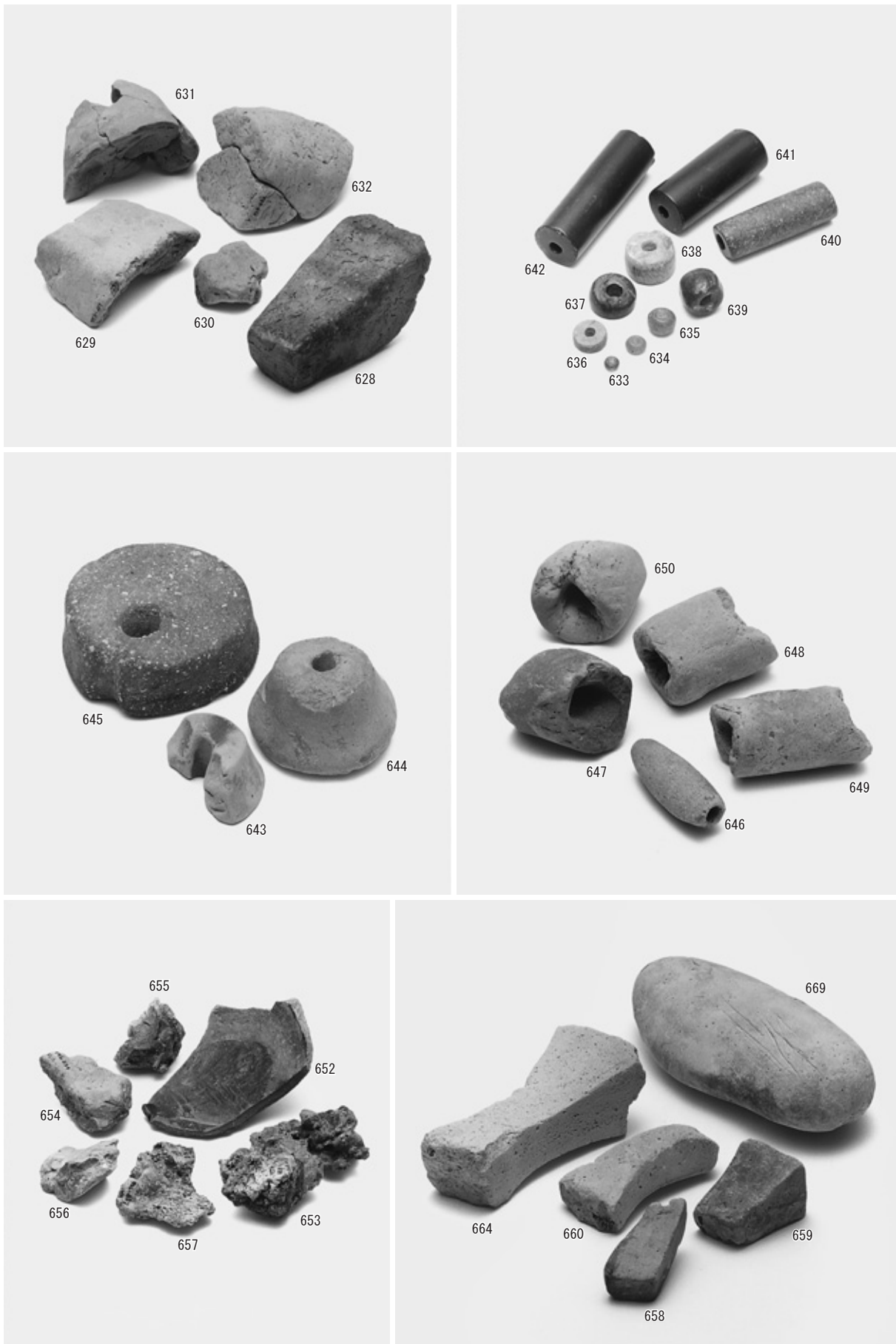
Ⅶb 層 出土遺物 (1)



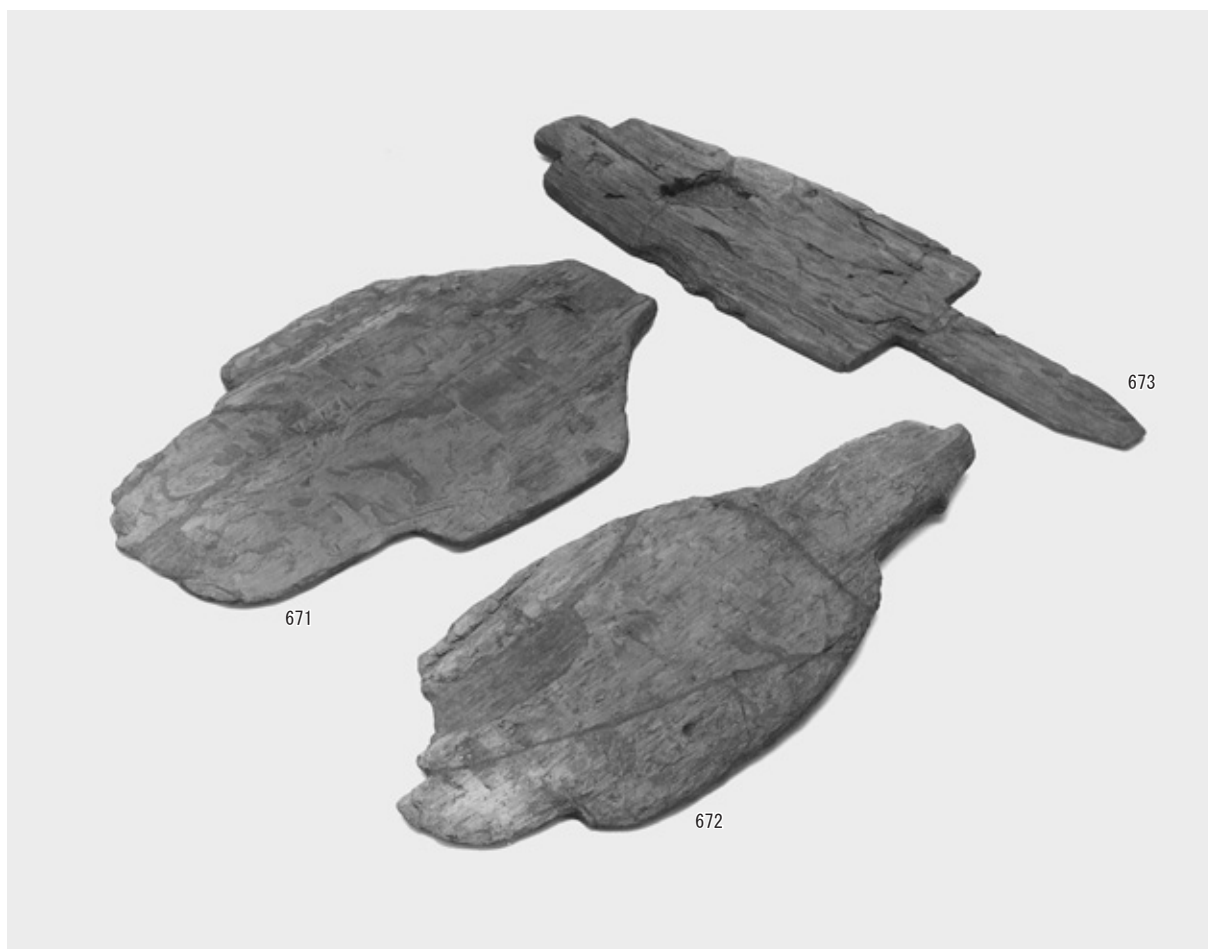








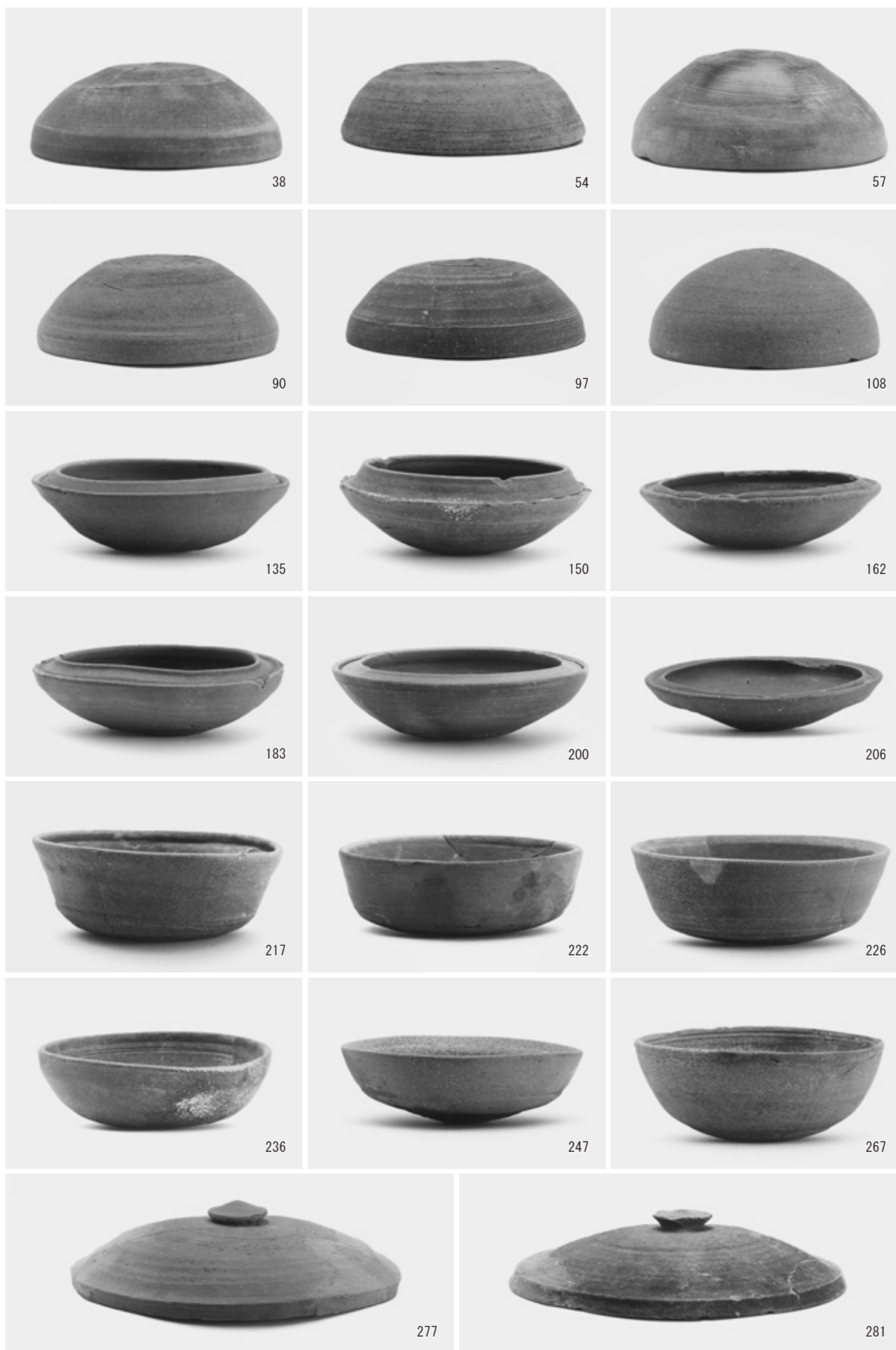
Ⅶb層出土遺物 (6)



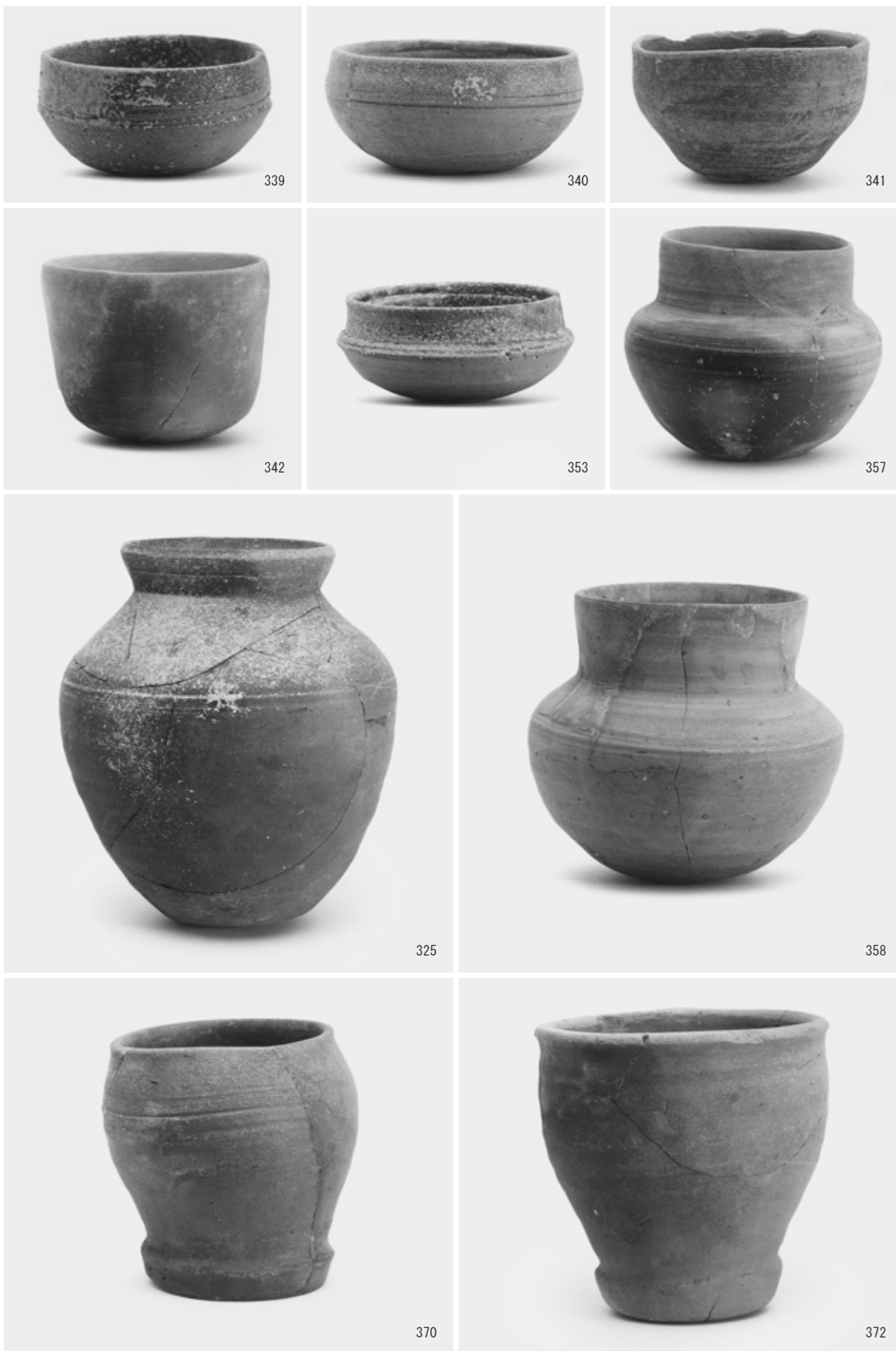
VIIb 層 出土遺物 (7)



VIIa 層 出土主要遺物

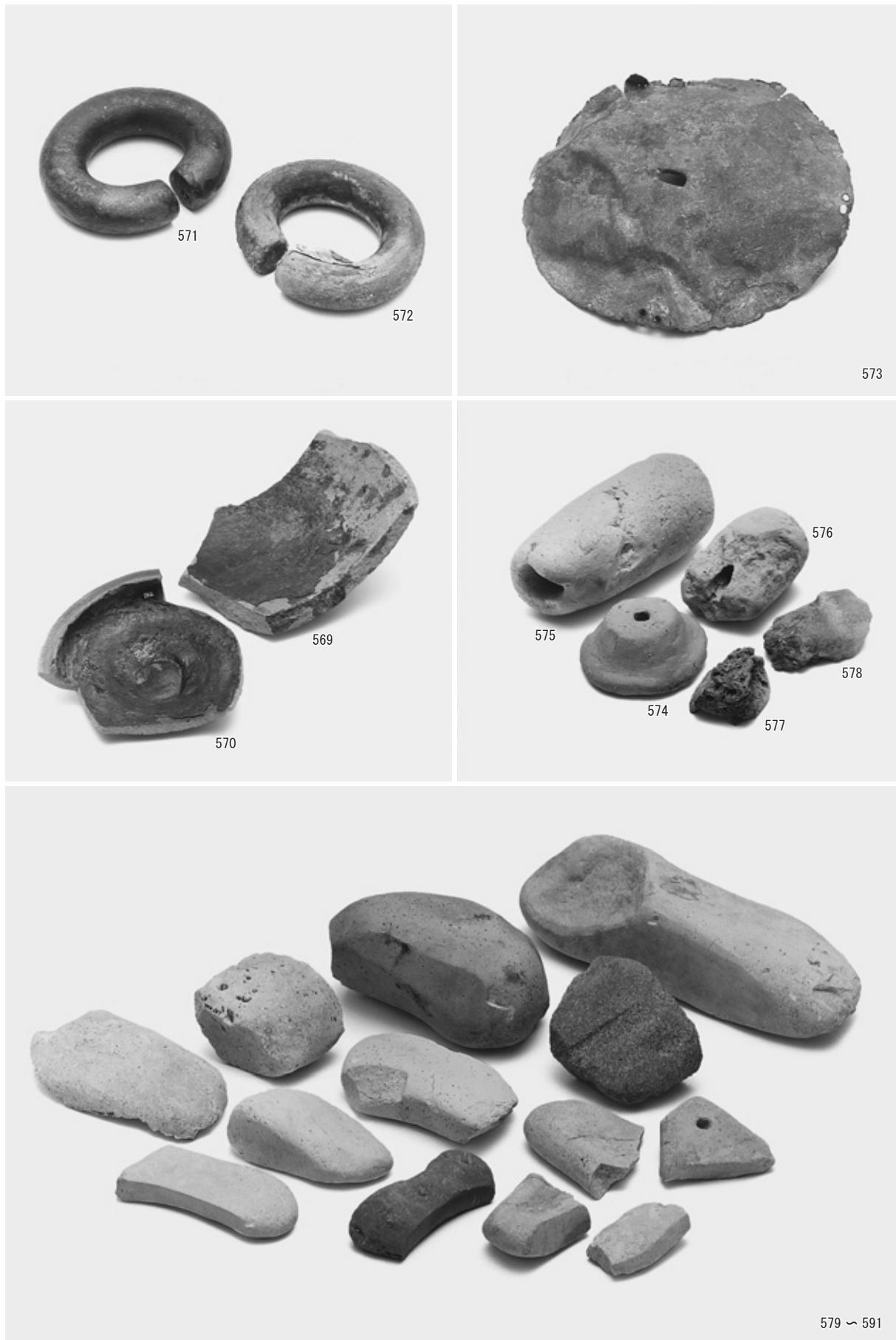


VIIa 層 出土遺物 (1)





VIIa 層 出土遺物 (3)



VIIa層出土遺物(4)



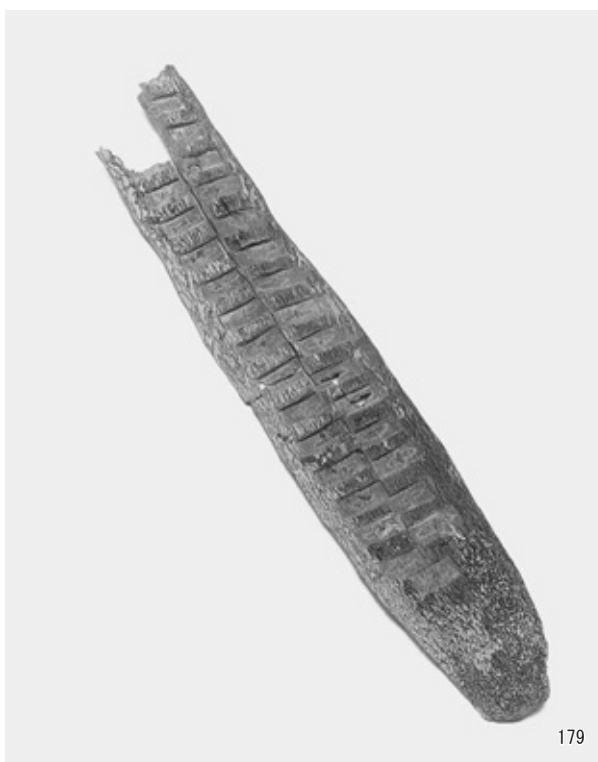
VIIa 層 出土遺物 (5)



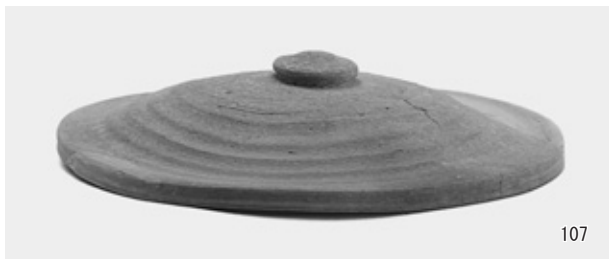
V層 出土主要遺物

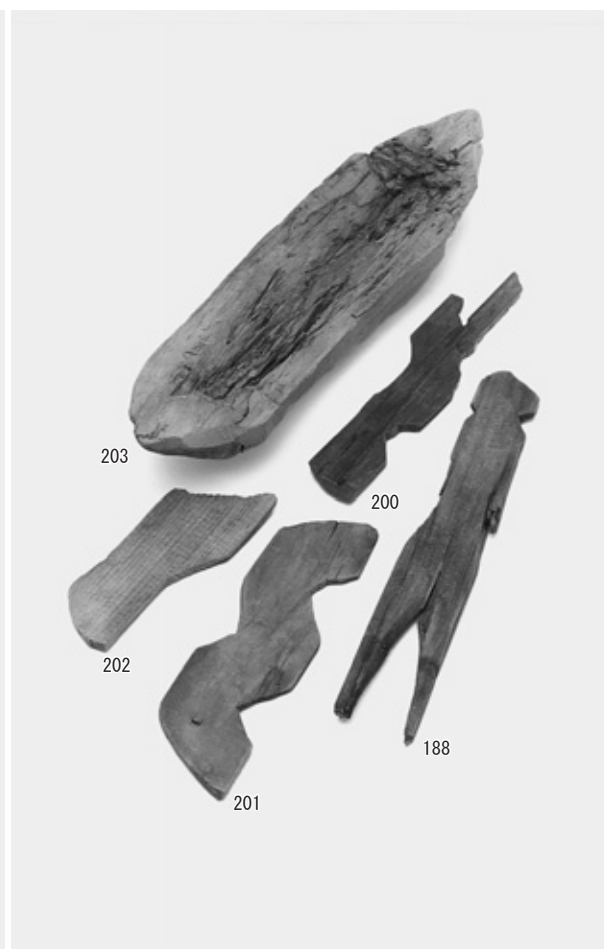
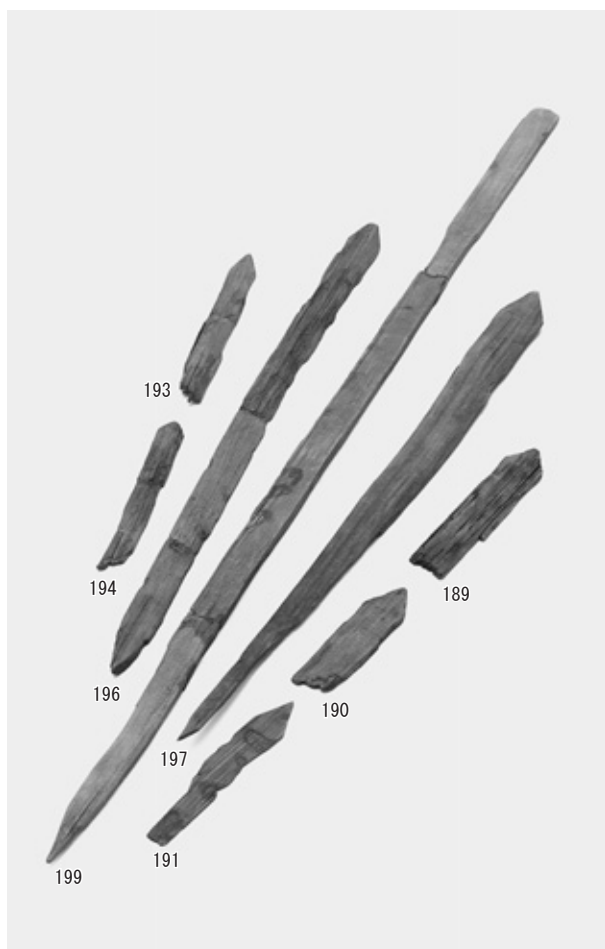


1 V層 SS02 出土製塩土器

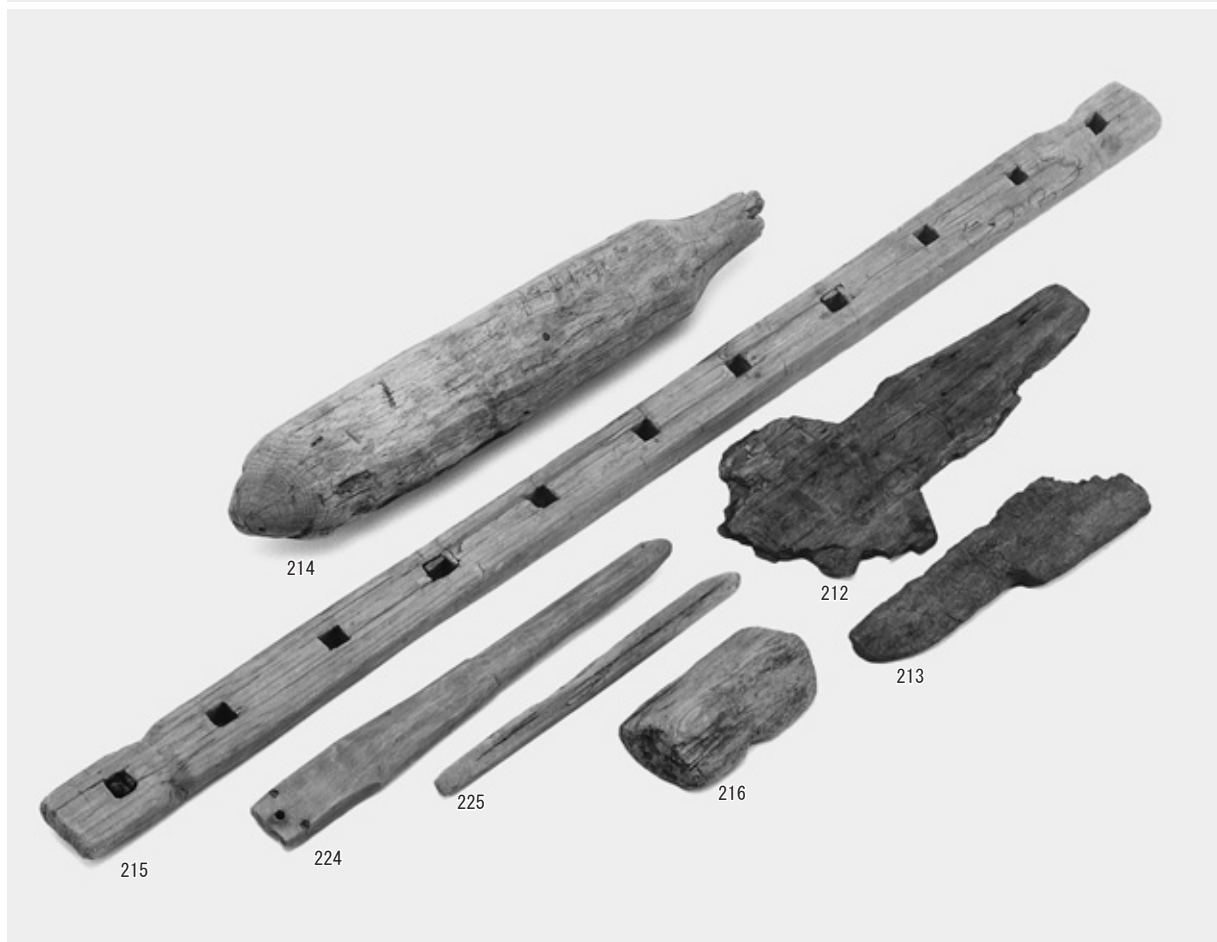


2 V層 出土祭祀遺物





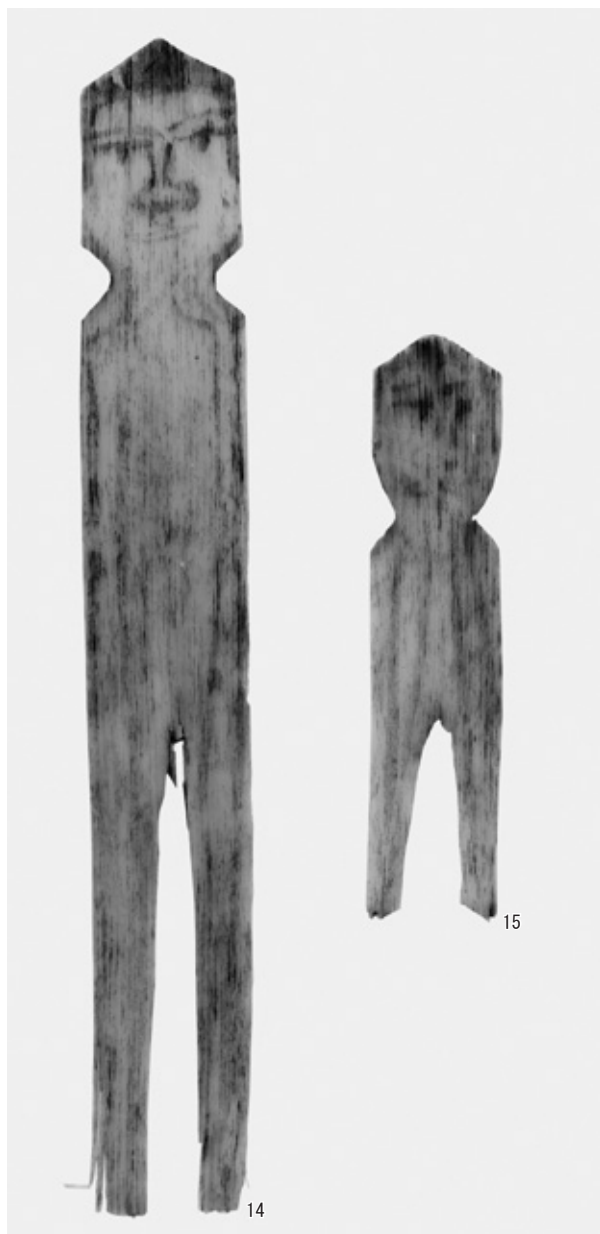
V層 出土遺物 (2)



V層 出土遺物 (3)



IVb 層 出土主要遺物

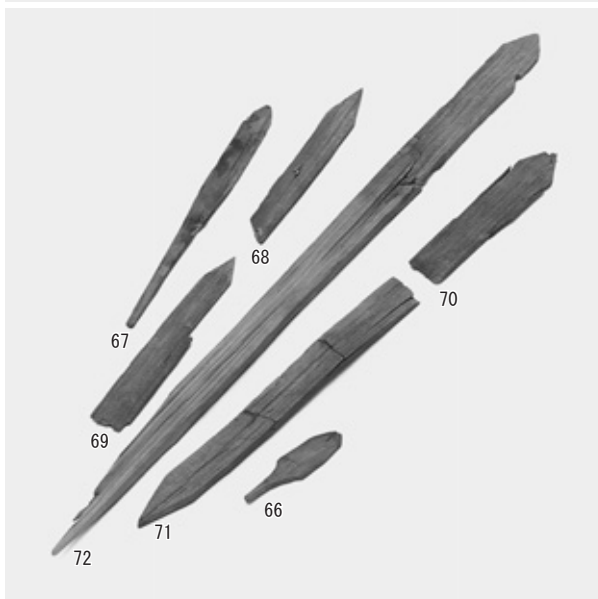


1 IVb 層 SX01 出土遺物

2 IVb 層 SX02 出土遺物

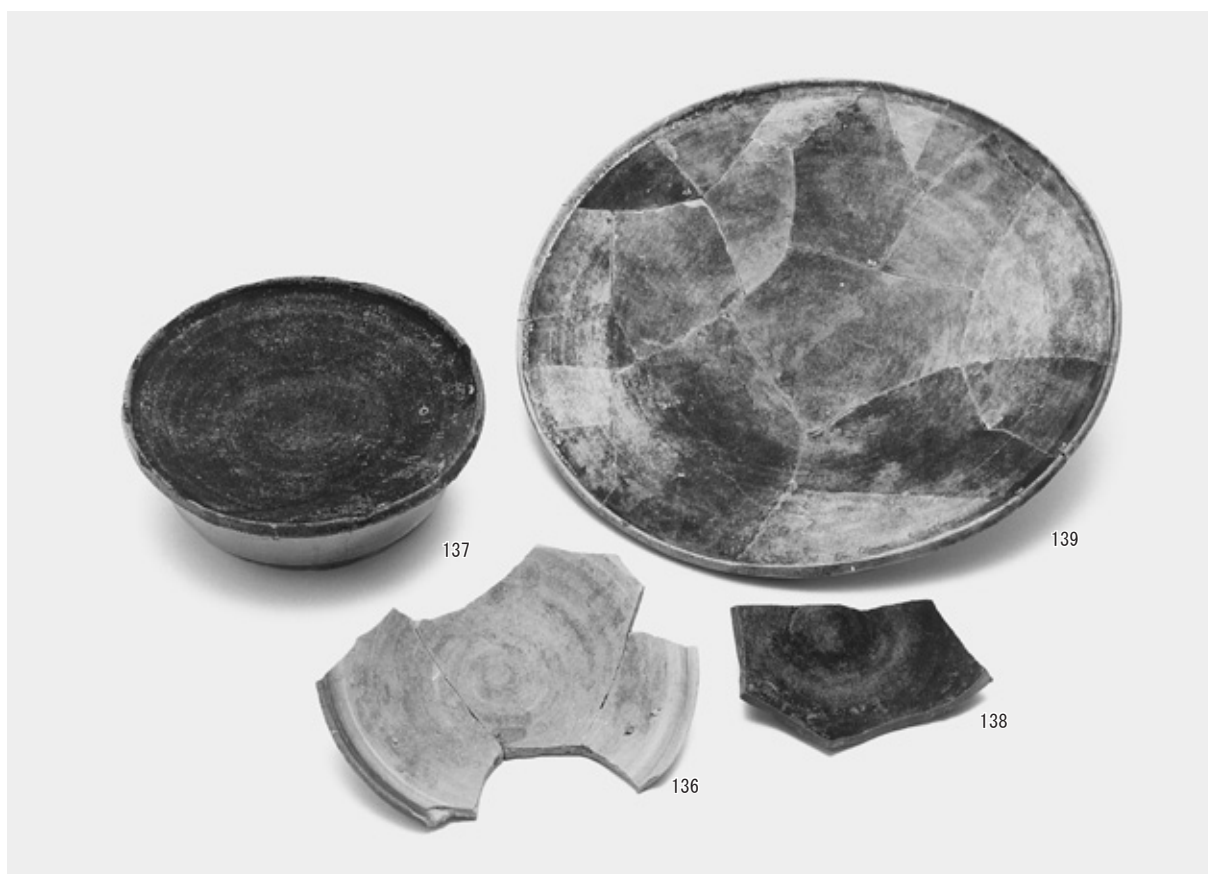


IVb 層出土「稻萬呂」墨書土器





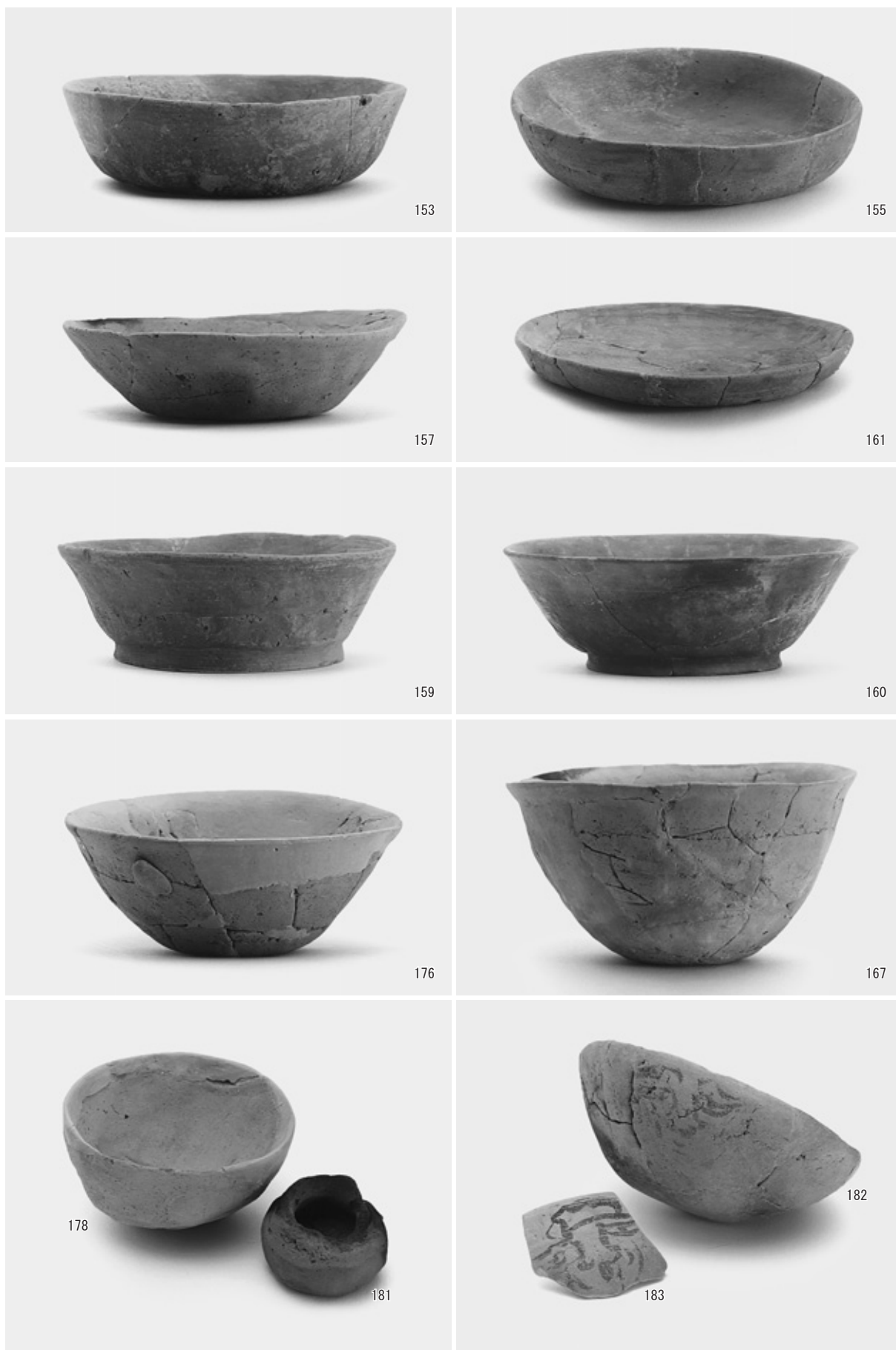
1 IVb 層 SX04 出土遺物



2 IVb 層 出土転用硯



IVb 層 出土遺物 (1)



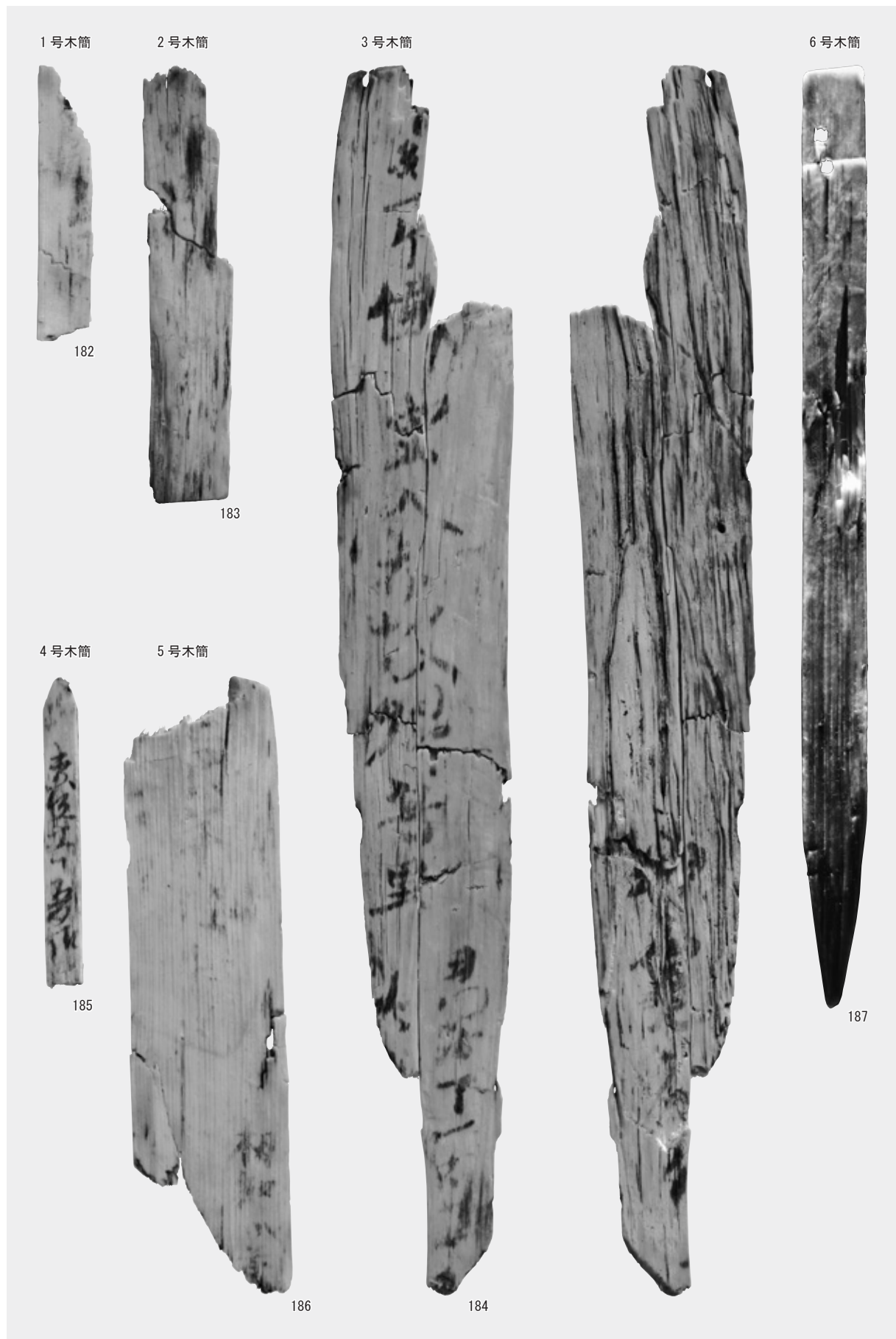
IVb 層 出土遺物 (2)



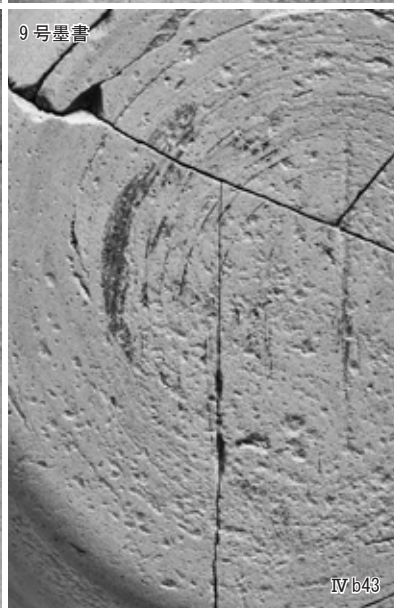
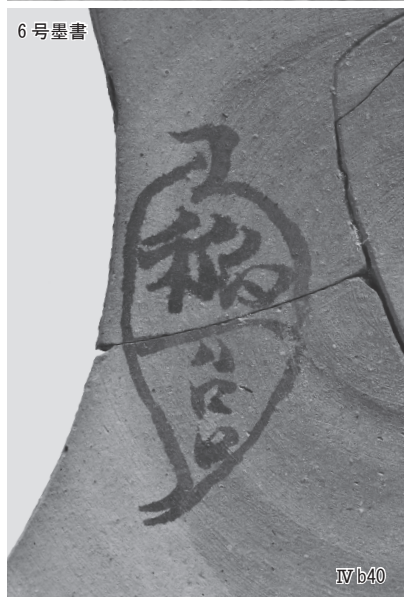
IVb 層 出土遺物 (3)



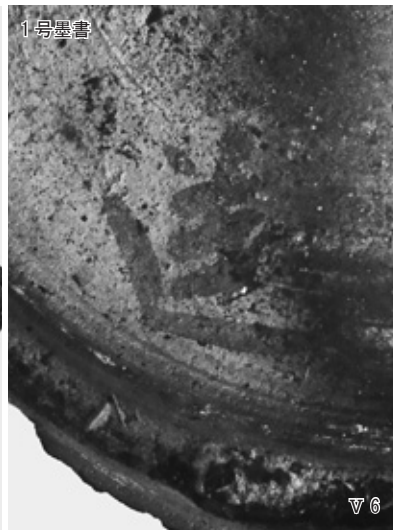
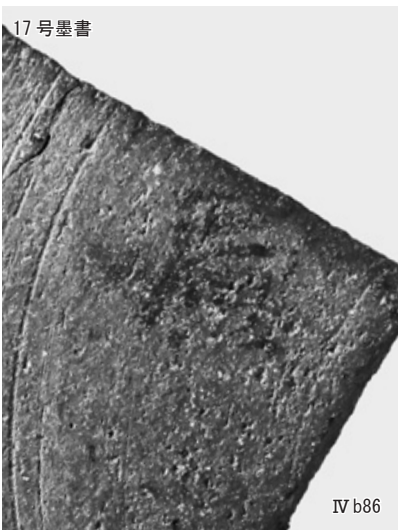
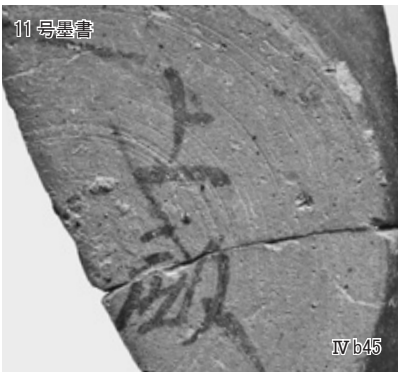
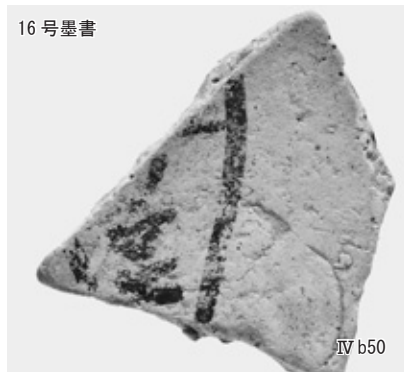
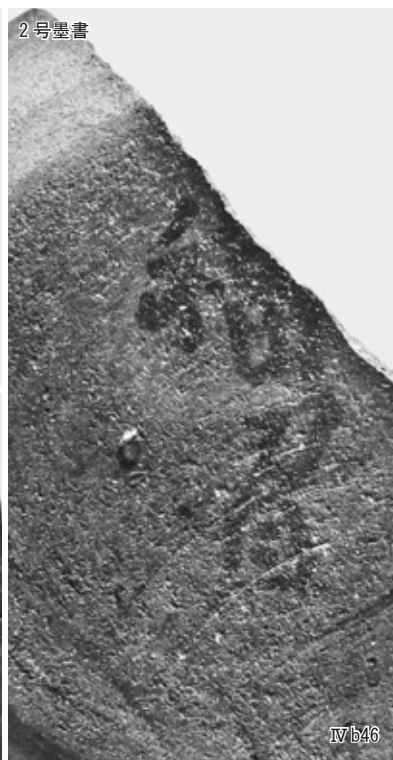
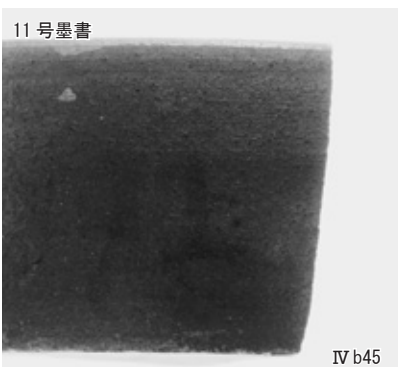
IVa 層・Ⅲ層出土遺物



木簡 1～5号木簡：赤外線照射写真 6号木簡：斜光写真



墨書土器 (1) (赤外線照射写真)



報告書抄録

書名（ふりがな）	鳥居松遺跡 5 次 伊場大溝編 （とりいまついせき 5 じ いばおおみぞへん）
編著者名	鈴木一有（編）、金原正明、菊地大樹、古山真波、松原彰子、山本 崇、渡辺晃宏、パリノサーヴェイ株式会社、古環境研究所
編集機関	浜松市教育委員会 〒 430-0929 浜松市中区中央 1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟 浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒 430-0946 浜松市中区元城町 103-2 TEL（053）457-2466 FAX（053）457-2563
発行機関	（財）浜松市文化振興財団
発行年月日	2009 年 12 月 25 日

ふりがな 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とりいまついせき 鳥居松遺跡	静岡県 浜松市中区 森田町	22202	01 04 28	34 度 41 分 35 秒	137 度 43 分 11 秒	2008 年 1 月 4 日 ～ 2008 年 6 月 16 日	1200 m ²	宅地造成に先 立つ事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鳥居松遺跡	河川跡	古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 平安時代	自然河川 （伊場大溝） 土器・遺物集積 貝塚・祭祀遺構 井戸	土師器・須恵器 円頭大刀 木簡（6 点） 墨書土器（19 点） 木製祭祀具 製塩土器		幅 20m、深さ 2.5m 以 上の自然河川（伊場大 溝）を総延長 25m にわ たって全面調査した。 豊富な文字資料の出 土から、古代敷智郡家 の一部とみられる。		

北緯、東経は世界測地系の数値である

鳥居松遺跡 5 次

伊場大溝編

2009 年 12 月 25 日

編集機関 浜松市教育委員会

浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当

(教育委員会の補助執行機関)

〒 430-0946 浜松市中区元城町 103-2

発行機関 財団法人 浜松市文化振興財団

印刷 松本印刷株式会社
